家長と
預言者

New Covenant Publications International Ltd. Japanese

版権©2020. 国際新しい契約の出版物。

無断で複写転載することを禁じます。本書のいかなる部分も弊社の許諾なく検索システムへ保存したり、 電子データ、 紙媒体、または録音などの方法で複写・ 転送することを禁じます。

この文書は、国際著作権法によって保護されています。この文書のいかなる部分も、いかなる形式でも複製、配布、翻訳、または送信することはできません。 または、電子的または機械的、コピー、記録、または保存を含む任意の手段 あらゆる情報の保存および検索システム。

式や手段によって。ISBN：359-2-85933-609-1

データカタログ

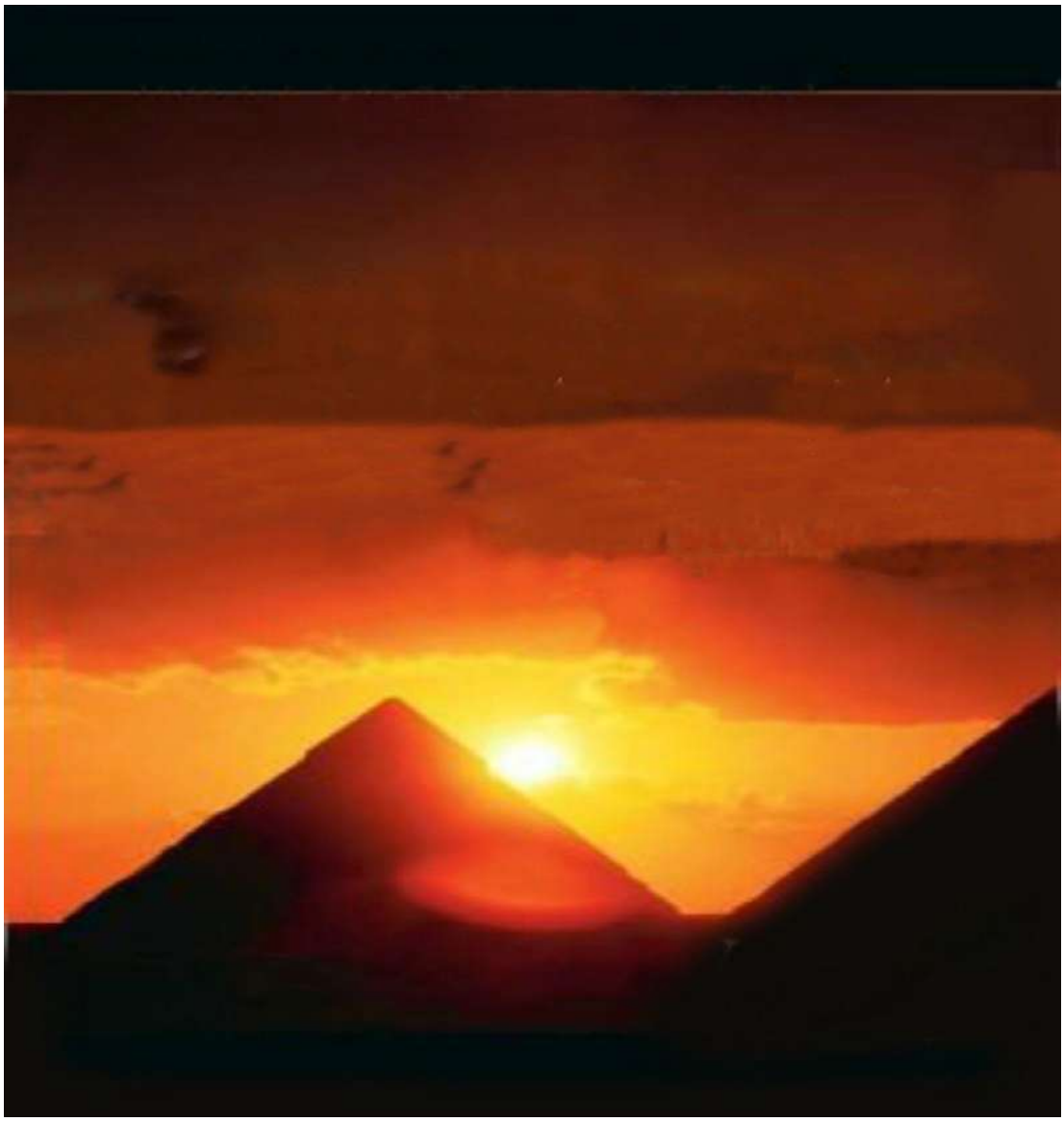
編集とデザイン：国際新しい契約の出版物。

イギリスで印刷。
初版 2020 年 5 月 26 日

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

ウェブサイトをご覧ください：www.newcovenant.co.uk

家長と預言者



エレン・G・ホワイト

要約 – 知恵の樹

モーセは更にこのように述べる。神は東にあらゆる種類の樹が繁茂する楽園を作り、そのなかには、生命の樹と善悪を判断できる知恵の樹を植えた。この園のなかに、アダムとその妻を連れていき、これらの樹の世話をするように命じた。そうして、一つの川が園を潤し、その川は全地を一周し、4 つに分岐した。そのうちの多数を意味するピソンはインドを流れ、海へと流れ注いでおり、ギリシャ人はそれをガンジスと呼ぶ。ユーフラテスとティグリスは、紅海へと流れている。ユーフラテス、またの名でペラツは、ティリスやディグラスでは、分散または花を意味し、俊敏と狭隘を意味する。エジプトを流れるギホンは、東から湧き出たものであることを意味し、ギリシャ人はそれをナイルと呼んでいる。神はアダムとその妻に、他すべての植物の実は食べて良いが、知恵の樹の実だけは手を出さぬように、もしそれに触れると、破滅へとつながると警告した。そのころは、すべての生き物が同じ言葉を話していた。しかし、アダムと彼の妻と一緒に過ごしていた蛇は、神の命令に従う限り、二人の幸福は続くのだと考え妬ましく感じた。そして、神の命令に背けば、禍いを招くだろうと考え、邪悪な意図を持って、女に知恵の樹の実を口にしてみるようにたぶらかした。知恵の樹は、善と悪を識別する知を宿しており、その知を得れば、神に劣らぬほどの幸福な人生を歩むだろうとそそのかした。こうして、彼女は知恵の樹の実を食べ、それを気に入った彼女は、アダムにも勧めて食べさせた。すると、彼らはお互いに裸であることに気づき、陽のもとにさらけ出した自分たちを恥じるようになり、自身を覆うものを探し始めた。これはつまり、知恵の樹が彼らに知を与えたのだ。こうしてイチジクの葉で自分の身体を隠しながら、これまで知らなかったことを知るようになり、以前よりも幸福であると感じるようになった。しかし、神が園を訪れた時、それまでは神を喜び迎え入れていたアダムが、自らの悪行の呵責から身を退いた。この態度を訝しんだ神は、これまで嬉々として私と話をしていたのに、なぜ今は顔をそむけ、避けるのかと尋ねた。しかし、神の命令に背いた意識から、アダムは何も応えられなかった。そうすると神は「私はお前たち二人を一切の不幸に煩わされず、お前たちの魂を悩ますような心遣いを全く必要としない、幸福な生活を運命づけていた。これらすべては、私の配慮のもとに、お前たちの楽しみや喜びを高めるものであり、お前たちがそのために骨折りや苦労することもなく、自ずとそうなるものであ

った。そのような骨折りや苦労の無いおかげで、お前たちは直ぐに歳を取ることもなく、寿命の長い生活を送れるはずであった。しかし、今やお前たちは私のこの意志を弄び、命令に背いた。お前が黙り込んでいるのは、お前の徳からではなく、罪の意識からである。」

第 1 巻第 1 章- 天地創造と諸要素の性質

ユダヤ古代史

フラウィウス・ヨセフス

このページは意図的に空白になっています。

New Covenant Publications

International Ltd.

改革ブック、変換された心は

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

Email: newcovenantpublicationsintl@gmail.com

謝辞

この本を天の神にささげる

序文

新しい契約出版物国際は、天と地を結合し、愛の律法の永続性を強化する神の計画を読者に再接続します. ロゴ、契約の箱は、キリスト イエスと彼の人々と神の律法の中心性との間の親密さを表しています. 新しい契約とはこうだ - の書にあるとおりです "わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。" (エレミヤ書 31:31-33) 確かに、新しい契約は償還を証明し、衰えのない闘争によって生まれ、血によって封印されます.

数え切れないほどの世紀のために、多くは真実を消し去るために計算され、かじり苦悩と不可解な弾圧を耐えてきました. 特に暗黒時代に,この光は非常に四面楚歌と人間の伝統と人気の無知によって隠されていました,世界の住民は知恵を軽蔑し、契約を犯していたの 増殖する悪との妥協の疫病は、多くの人生が不当に犠牲にされ、良心の自由を放棄することを拒否した、放逸な退化と悪魔的な非人道的な惨状を引 それにもかかわらず、失われた知識は、特に改革の時に復活した.

16世紀の改革の時代は、反改革に反映されるように、真実、根本的な変化とその結果としての乱流の瞬間を巻き起こしました. しかし、この巻を通じて、改革者や他の勇敢な開拓者の視点から、この特異な革命の否定できない意義を再発見する. 彼らの説明から、荒廃した戦い、そのような驚異的な抵抗と超自然的な介入の根底にある理由を理解することができます.

私たちのモットー："改革ブック、変換された心は、"重要な時代とその影響で構成される文学の明確なジャンルを、強調する. それはまた個人的な改革、再生および変形の緊急を共鳴させる. 翻訳の代理店によって結合されたグーテンベルク印刷機として、改革信仰の原則を広め、約500年前に、デジタル化されたプレスとオンラインメディア.

人類のあけぼの

人類のあけぼの

目次

第 1 章　罪悪はなぜ発生したか……8
第 2 章　天地創造のいわれ……20
第 3 章　天地創造の 1 週間……28
第 4 章　エデンの園の悲劇……34
第 5 章　人類救済の計画……46
第 6 章　明暗を分けたカインとアベル……55
第 7 章　セツとエノクの時代……62
第 8 章　ノアの洪水……72
第 9 章　約束のにじ……85
第 10 章　バベルの塔……91
第 11 章　神の召しに応じたアブラハム……97
第 12 章　カナンにおけるアブラハム……104
第 13 章　信仰をためされたアブラハム……118
第 14 章　ソドムの滅亡……128
第 15 章　イサクの結婚……142
第 16 章　ヤコブとエサウ……148
第 17 章　ヤコブの逃亡と放浪……154
第 18 章　苦闘の一夜……165
第 19 章　カナンに帰る……172
第 20 章　エジプトにおけるヨセフ……182
第 21 章　ヨセフと兄弟たち……192

第 22 章　モーセ 212
第 23 章　エジプトの災害 227
第 24 章　過越の祭り 243
第 25 章　エジプト脱出 250
第 26 章　紅海からシナイへ 260
第 27 章　十戒 273
第 28 章　シナイでの偶像礼拝 286
第 29 章　律法に対するサタンの敵意 302
第 30 章　幕屋の制度と儀式 314
第 31 章　ナダブとアビウの罪 328
第 32 章　律法と契約 333
第 33 章　シナイからカデシへ 345
第 34 章　12 人の斥候 359
第 35 章　コラの反逆 368
第 36 章　イスラエルの流浪 380
第 37 章　打たれた岩 385
第 38 章　エドムを回避して 395
第 39 章　バシャンの征服 407
第 40 章　欲に目がくらんだバラム 412
第 41 章　ヨルダンにおける背教 427
第 42 章　律法の反復 436
第 43 章　モーセの死 444
第 44 章　ヨルダン川を渡って 454

第 45 章　エリコの陥落 460
第 46 章　祝福とのろい 471
第 47 章　ギベオン人との同盟 475
第 48 章　カナンの分配 481
第 49 章　ヨシュアの決別の言葉 493
第 50 章　10 分の 1 献金と捧げ物 498
第 51 章　貧しい者への神の配慮 504
第 52 章　年ごとの祭り 511
第 53 章　初期の士師たち 518
第 54 章　サムソン 534
第 55 章　幼児サムエル 544
第 56 章　エリとむすごたち 551
第 57 章　契約の箱ペリシテ人に奪われる 558
第 58 章　預言者の学校 570
第 59 章　イスラエル最初の王サウル 579
第 60 章　サウルの不遜な態度 593
第 61 章　サウル退けられる 602
第 62 章　ダビデ油を注がれる 613
第 63 章　ダビデとゴリアテ 618
第 64 章　サウル、ダビデを追う 624
第 65 章　ダビデの寛容 636
第 66 章　サウルの死 650
第 67 章　古代と現代の魔術 657

第 68 章　チクラグにおけるダビデ……664
第 69 章　ダビデの即位……672
第 70 章　ダビデの治世……678
第 71 章　ダビデの罪と回心……691
第 72 章　アブサロムの反逆……703
第 73 章　ダビデの晩年……722

人類のあけぼの

第 1 章　罪悪はなぜ発生したか

「神は愛である」（Ｉヨハネ 4：16）、神の性質、神の律法は愛である。それは今までもそうであったし、これからも同じである。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」、その「道が永久」である方は、お変わりにならない。彼には、「変化とか回転の影とかいうものはない」（イザヤ 57：15、ハバクク 3：6・文語訳、ヤコブ 1：17）。 PP 13.1

創造の力が現されているものは、すべて、神の無限の愛の表現である。神の統治は、すべての造られたものへ、豊かな祝福を与えることを意味する。詩篇記者は言っている。 PP 13.2

「あなたの手は強く、あなたの右の手は高く、 PP 13.3
義と公平はあなたのみくらの基、 PP 13.4
いつくしみと、まことはあなたの前に行きます。 PP 13.5
祭の日の喜びの声を知る民はさいわいです。 PP 13.6
主よ、彼らはみ顔の光のなかを歩み、 PP 13.7
ひねもす、み名によって喜び、 PP 13.8
あなたの義をほめたたえます。 PP 13.9
あなたは彼らの力の栄光だからです。…… PP 13.10
われらの盾は主に属し、 PP 13.11
われらの王はイスラエルの聖者に属します」 PP 13.12
（詩篇 89：13～18） PP 13.13

まず、反逆が天で始まったそのときから、ついに、それがくつがえされて、罪が完全に根絶されるまでの善悪の大争闘の歴史もまた、神の不変の愛の実証である。 PP 13.14

宇宙の統治者は、その恵み深いお働きをひとりではなさらなかった。彼には助け手があった。すなわち、彼の目的を理解し、幸福を与えることを、共に喜び合える共労者

であった。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった」（ヨハネ 1：1、2）。言であり、神のひとり子であったキリストは、永遠の父と 1 つ、すなわち、その性質、品性、目的が 1 つであって、神のあらゆる計画と目的に参加できる唯一のお方であった。 PP 13.15

「その名は、『霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」（イザヤ 9：6）。「その出るのは昔から、いにしえの日からである」（ミカ 5：2）。また、神のみ子は、ご自身について、こう言明された。「主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。……また地の基を定められたときわたしは、そのかたわらにあって、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽し」んだ（箴言 8：22～30）。 PP 13.16

父はみ子によって天のすべての住民をお造りになった。「万物は、……位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである」（コロサイ 1：16）。天使たちは、神に仕える者で、神のみ前から流れ出る光で輝き、みこころを果たすためにすみやかに飛ぶことのできる翼が与えられているのである。しかし、神の受膏者、「神の本質の真の姿」、「神の栄光の輝き」であられるみ子は、「その力ある言葉をもって万物を保っておられ」て、それらをすべて支配しておられる（ヘブル 1：3）。「初めから高くあげられた栄えあるみ座」は、彼の聖所のあるところであり、「公平のつえ」が彼の王国のつえであった（エレミヤ 17：12、ヘブル 1：8）。「誉と、威厳とはそのみ前にあり、力と、うるわしさとはその聖所にある」「いつくしみと、まことはあなたの前に行きます」（詩篇 96：6、89：14）。 PP 13.17

愛の律法が神の統治の基礎であるから、すべての知的存在者の幸福は、その偉大な義の原則に彼らが完全に一致することにかかっている。神は、造られたすべてのものから愛の奉仕、すなわち、神の品性を理解することによってわきおこってくる崇敬を受けることを望まれる。神は、強制された服従をお喜びにならない。そして、神はすべての

者に自由意志を与えて、彼らが、自発的に神に奉仕できるようになさっ た。 PP 13.18

造られた者がすべて、神に対する愛の忠誠を了承しているうちは、神の造られた全宇宙に完全な調和があった。創造主のみこころをなすことが、天の軍勢の喜びであった。神の栄光を反映することと神への賛美が、彼らの楽しみであった。そして、彼らが神を最高に愛していた間は、互いの間の愛も信頼と無我の精神に満ちていた。そこには、天の調和を破るものは何 1 つなかった。しかし、この幸福な状態に変化が起こった。神が被造物にお与えになった自由を悪用した者があった。罪は、キリストの次に位し、最大の栄誉を神から受け、天の住民の中で最高の力と栄光を与えられていた者から始まった。「黎明の子」ルシファーは、きよく汚れのない守護のケルブの第一の者であった。彼は、大いなる創造主のみ前に立っていた。そして、永遠の神をめぐり照らすつきない栄光の輝きが、彼の上に宿っていた。「主なる神はこう言われる、あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあって、もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。……わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった」（エゼキエル 28：12～15）。 PP 14.1

ルシファーは、少しずつ自己を高めようという野望にふけるようになった。「あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚した」（エゼキエル 28：17）、「あなたはさきに心のうちに言った。……『わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう』」（イザヤ 14：13、14）。この偉大な天使の栄光のすべては神から与えられたものであったにもかかわらず、彼はそれを自分のものであるかのように思うようになった。彼は、天の軍勢にまさる大いなるほまれを受けていたが、自分の地位に満足しないで、創造主だけに向けられなければならない尊敬を受けたいと望むようになった。彼は、神をすべての被造物の愛と忠誠を受ける最高の方とするかわりに、自分で彼らの崇敬と忠誠を受けようと努めた。そして、この天

使のかしらは、無限の父である神かみ子にお与えになった栄光をほしがり、ただキリストだけが持っておられた力を自分のものにしようと熱望した。 PP 14.2

さて、天の完全な平和は破られた。創造主に仕えるかわりに、自分のために働こうとするルシファーの気質を見て、神の栄光を第一義的に考えた者たちは、不安の念に捕われた。天使たちは、天の会議の席上で、ルシファーに嘆願した。神のみ子は、創造主の偉大さと恵み深さと、公平なことと、そして、神の律法が神聖で不変なものであることを彼にお示しになった。天の秩序をお定めになったのは、神ご自身であった。そして、その秩序から離れるならば、ルシファーは彼の創造主をはずかしめ、自分を破滅させることになるのであった。しかし、無限の愛とあわれみによって与えられた警告も、ただ彼に反抗の精神を起こさせるだけであった。ルシファーはキリストへのしっとに燃えて、ますますかたくなになっていった。 PP 14.3

神のみ子の至上権に異議を唱え、そのことによって、創造主の知恵と愛とを非難することが、この天使のかしらの目的となっていた。キリストの次に位を占め、神の軍勢の中で第 1 位であった彼は、その偉人な頭脳の能力を、その目的のために傾けようとしていた。しかし、すべての被造物が自由な意志で行動するように望まれた神は、反逆を正当化しようとする詭弁にだれ 1 人欺かれないように警告を与えておられた、大きな戦いが始まるに先だって、すべての者は、神のみこころをはっきり知り、神の知恵と恵みが彼らのすべての喜びの源泉であることを悟らなければならなかった。 PP 14.4

宇宙の王は、天の軍勢をそのみ前に召集されたそれは、彼らの前で、み子の真の地位を説明し、み子がすべての被造物に対してどんな関係にあるかを示すためであった。神のみ子は、父のみ座に共に座をしめられた。そして、永遠、自在の神の栄光が両者を包んでいた。み座のまわりには、数えきれない大軍、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの聖天使が集まった （黙示録 5：11）。彼らは、使者、従者として、最高の栄誉を与えられた天使で神のみ前から来る光を受けて喜びに満ちていた。王なる神は、集まった天の住民の前で、神のひとり子であるキリストだけが完全に神の計画に参与し、神のみこころの大いなる計画を実行することがゆだねられていることを言明なさった。神のみ子は、大勢の天使を創造なさったときに、神のみこころを行われたのであった。そして、

彼らは、神に対すると同じく、み子に対しても、尊敬と忠誠を尽くさなければならなかった。キリストは、この地球とその住民の創造のときにも、神の力を働かされることになっていた。しかし、それにもかかわらず、キリストは、神の計画にそむいて、権力を求めたり、自分を高めたりすることをせず、父の栄光を高め、神の恵みと愛の御目的を実行しようとなさったのである。 PP 14.5

天使たちは、快くキリストの主権を認めて、キリストの前にひれ伏して、彼らの愛と崇敬の念をあらわした。ルシファーは、彼らとともに頭をたれた。しかし、彼の心の中には、奇妙な激しい葛藤があった。真理、公平、忠誠などがしっとねたみと戦っていた。聖天使たちの感化は、しばらく、彼を納得させたように思われた。美しい調べにのせて、賛美の歌が聞こえ、歓喜に満ちた幾千もの声がそれに和したとき、悪の精神は消えてしまったように思われた。彼の全身は、言い表しようのない愛で震えた。彼の心は、罪のない礼拝者たちと 1 つになって、父とみ子とを深く愛した。しかし、また彼は、自分の栄光を誇る気持ちに満たされた。最上位を求める欲望が舞いもどってきた。そして、彼は、ふたたびキリストをねたむ気持ちにふけった。ルシファーは、彼に授けられた大いなる栄誉を、神の特別の賜物として認めなかったので、創造主に対する何の感謝の念も表さなかった。彼は自分の輝きと高い地位を誇り、神と等しくなろうと欲した。彼は、天軍に愛され、尊敬されていた。天使たちは喜んで彼の命令を行った。そして、彼は、すべての天使にまさって、知恵と栄光が与えられていた。しかし、神のみ子は、父と同じ能力と権威を持った方として、彼以上に高められていた。み子は天父の相談にあずかっていたが、ルシファーは、そのように神の計画に参与していなかった、大天使は、「なぜ、キリストが最高でなければならないのだろうか。なぜ、彼が自分以上に栄誉を受けるのだろうか」との疑問をいだいた。 PP 15.1

ルシファーは、神の御前の自分の場所を離れて、天使の間に不満の精神を流布するために出ていった。彼は極秘のうちに働いた、そして、彼はしばらくの間、神を崇敬しているふうを装って、彼の真意を隠していた。彼は、天使たちを支配していた律法に対する疑惑をほのめかし始めた。そして彼は、諸世界の住民にとって、律法は必要であろうが、天使たちは、彼らよりもすぐれたものであり、自分自身の知恵が十分な道しるべ

となるから、こうした制限は不必要であると言った。彼らは、神のみ名を汚し得るものではない、その思想もすべて清いのである、神ご自身があやまちを犯すことがありえないと同様に、彼らもあやまちを犯すことはありえないと言うのであった。神のみ子が父と同等に高められたことは、自分も同様に崇敬と栄誉を受けるべきだと主張していたルシファーにとって不正行為を意味した。もしも、この天使のかしらが、彼の当然到達すべき高い地位につくことができれば、それは天の全軍に、大きな利益をもたらす。なぜならば、彼のねらいはすべての者に自由を確保することだからである、ところが、今まで彼らに与えられてきた自由さえ、もう失われた。なぜなら、独裁的支配者が、彼らの上に任命され、その権威にすべての者が従わなければならないからである。これは、巧妙な欺きてあり、ルシファーのたくらみによって、人の宮廷に急速に広がっていった。 PP 15.2

キリストの地位、または権威には何の変化もなかった。ルシファーのしっとと虚偽のことば、そして、彼かキリストと同等の地位を主張したことから、神のみ子の真の地位についての宣言が必要になった。しかし、み子の地位は、初めから同じであった。ところが、多くの天使たちは、ルシファーの欺きに惑わされていた。 PP 15.3

ルシファーは、自分の配下の天使たちが、彼を愛し、真心から信頼しているのを利用して、巧みに彼らの心に彼自身の不信と不満の精神とを吹き込み、そ れが彼のしわざであることが、だれにも気づかれないようにしていた。ルシファーは、神のみこころを曲げて伝え、誤解と曲解によって、紛争と不満をかきたてた。彼は、巧妙に彼の話を聞いた者たちにその感情を口にするように導き、自分に好都合のときには、天使たちのそのようなことばを利用して、彼らが神の統治と完全に調和していない証拠としてあげた。自分は、神に完全な忠誠を尽くしていると言いながら、神の政府の安定のために、天の秩序と律法の変更が必要であると、彼は力説した。こうして彼は、神の律法に対する反対を引き起こそうと努力し、彼の支配下の天使たちの心に自分の不満を吹き込みながら、表面的には、不満をとり除き、離反した天使たちを天の秩序に従わせようとしているように見せかけた。彼は、最高の狡猾さをもってひそかに不和と反逆を培養しなが

ら、自分の唯一の目的は、忠誠心を促し、調和と平和を維持することであるかのように装っていた。 PP 15.4

こうして、たきつけられた不満の精神は、有害な作用をしていた。公然とした反乱は何もなかったが、知らず知らずのうちに、天使たちの間に考え方のくい違いが生じてきた。神の統治に敵対するルシファーの扇動に賛成する者が現れた。彼らは、これまでは神の定められた秩序に完全に一致してきたが、測り知れない神のみこころをきわめ得なかったために、不満と不幸を感じるようになった。彼らは、神がキリストを高められることを不満に思った。これらの天使は、神の子と同等の権威を要求するルシファーを支持した。しかし、真実で忠誠な天使たちは、神の命令が、知恵と公平に満ちていることを認め、彼らを神のみ旨と和解させようと努力した。キリストは、神のみ子であった。彼は、天使が造られる以前から、神と 1 つであり、常に天父の右側に立っておられた。すべてのものはキリストの慈悲深い支配下で豊かな恵みを受けていたので、その至上権はこれまで 1 度も問題にされたことはなかった。天の調和は今まで乱されたことはなかったが、なぜ、今、不和が起こされなければならないのか。忠誠な天使たちは、この不和が恐ろしい結果しかもたらさないことをさとった。そして、彼らは、不満を持った者たちに、心を入れ替えて神の統治に従い、神への忠誠をあらわすように熱心に勧めた。 PP 16.1

恵み深い神は、大いなるあわれみをもって、長い間ルシファーを忍ばれた。不平と不満の精神は、これまで天において起こったことがなかった。それは、初めての不可解な、説明することのできない新しい要素であった。はじめのうちはルシファー自身も、自分の感情の真の性質を理解することができず、しばらくは、自分の心の動きや思いを口にするのを恐れたが、その気持ちを一掃しようとはしなかった。彼は、自分がどこまで迷って行くのか見当がつかなかった。しかし、無限の愛と知恵の神の力が、彼の非を認めさせるために用いられた。彼の反逆には、正当な理由がないことが明らかにされ、また、彼が、反逆を続けるならば、どんな結果になるかが彼に示された。ルシファーは、自分の非を認めた。彼は、「主はそのすべての道に正しく、そのすべてのみわざに恵みふかく」、神の律法は、正しいものであること、そして、それを全天の前で認めなけれ

ばならないことを知った（詩篇 145：17）。もし彼がそうしたならば、彼は自分と多くの天使たちを救うことができたことであろう。そのときまで、彼は、神への忠誠を全く放棄してはいなかった。彼は、守護のケルブの地位を去ったけれども、創造主の知恵を認めて神に立ちかえり、神の偉大な計画のなかで与えられている地位に満足するならば、彼の職務に復帰することができたのであった。 PP 16.2

やがて最後の決定をくださなければならないときがきた。彼は、神の主権に全く服するか、それとも公然と反逆するかのどちらかにきめなければならなかった。彼は、もう少しで立ちかえる決心をするところであったが、彼のプライドがゆるさなかった。これまで、不正なものであることを証明しようとして戦ってきたその権威に、自分のまちがいと自分の考えの誤りを告白して服従することは、彼のように高い栄誉を与えられてきた者にとっては、あまりにも大きな犠牲であった。 PP 16.3

慈悲深い創造主は、ルシファーと彼に従った天使たちをあわれみ、彼らを、いままさに陥ろうとしている滅亡の深淵から、なんとかして引きもどそうと努力された。しかし、神のあわれみは、彼らに誤解された。ルシファーは神がなされる忍耐を、むしろ自分が優勢である証拠であると考え、みんなのものに、宇宙の王は、自分の条件に譲歩しようとしていると言いふらした。彼は、もし天使たちが断固として自分の側につくならば、望むものは何でも得られると宣言した。 PP 17.1

彼は、あくまでも、自分の行為の正当を主張し、創造主に対して大争闘をいどんだ。こうして、「光をになう者」であり、神の栄光にあずかる者、神のみ座に仕えていた者であったルシファーは、その反逆によりサタンとなって、神の聖者たちの「敵対者」となり、天が彼に指導と保護をゆだねられた者たちを滅ぼす者となった。 PP 17.2

彼は、忠実な天使たちの意見と嘆願を軽蔑して退け、彼らを、だまされた奴隷であると宣言した。彼は、キリストが優先的に扱われることは、自分と天の全軍とに対する不正行為であり、自分と天の全軍の権利がこのように侵されることは、もはや許すことができないと宣言した。彼は、キリストの至上権を二度と認めようとしなかった。彼は、当然自分に与えられるべきであった栄誉を要求し、彼に従うすべての者を指揮する決心をした。そして、彼の側に加わる者に、すべての者が自由を楽しむことのできる、新し

くてよりよい政治を約束した。そのために、彼を指導者として受け入れることを表示した天使が数多く現れた。彼は、自分の主張に賛成する者があったのに気をよくし、天使全体を自分の側に引き入れ、自分が神ご自身と同等になって、天の全軍を従わせようと望んだ。 PP 17.3

けれども、忠実な天使たちは、なお、ルシファーと彼に同調した者たちに、神に従うことを熱心に勧めた。そして、もしも、彼らがそれを拒否するならば、ついには、どんな結果に陥らなければならないかを示した。彼らを創造されたかたは、彼らの権力をくつがえし、彼らの反逆活動に対し厳罰を下すこともおできになる。また、神ご自身と同様に、神聖な神の律法に反対して成功をおさめる天使はひとりもいないことを説明した。忠実な天使たちは、ルシファーの欺瞞的議論には耳をふさぐようにすべての者に警告した。そして、ルシファーと彼に従った者たちには、一刻も早く神のみ前に出て、神の知恵と権威を疑ったあやまちを告白するように勧めた。 PP 17.4

この勧告に耳を傾け、彼らの不満を悔い改めて、父とみ子に喜ばれる者になりたいと思う者が多くあった。ところが、ルシファーは、すでにもう 1 つの欺瞞を用意していた。この大反逆者は、自分と結束した天使たちはすでに深入りしすぎているから、立ちかえることはできないと断言した。自分は神の律法に精通している、だから神は、お赦しにならないのを知っていると彼は断言した。天の権威に屈服する者は、すべてその栄誉を奪われ、その地位を下げられるであろうと彼は断言した。そして、彼自身は、二度とキリストの権威を承認しない決意をした。彼と彼に従う者たちの唯一の道は、自由を主張し、自分たちに、気持ちよく与えられなかったところの権利を、力づくで手に入れることであると、彼は言った。 PP 17.5

サタン自身に関するかぎり、深入りしすぎて立ちかえれなくなっていたことは事実であった。しかし、彼に欺かれた者たちはそうではなかった。忠実な天使たちの勧告と嘆願は、サタンに従った天使らに希望の扉を開いた。彼らが警告に耳を傾けたならば、サタンのわなからのがれることができたはずであった。しかし、誇りと指導者に対する愛着、無制限の自由を得ようとする欲望などが勝ちを得て、神の愛とあわれみの嘆願は退けられてしまった。 PP 17.6

神は、不満の精神が熟して行動的な反逆になるまで、サタンが働きを進めることをお許しになった。サタンの計画の性質と傾向がどんなものであるかが、すべての者に理解されるように、その計画が十分に実行される必要があった。油を注がれたケルブとして、ルシファーには高い地位が与えられていた。彼は、天使たちから大いに愛されていて、彼らに強い感化を与えていた。神の統治は、天の住民ばかりでなくて、神が創造されたすべての諸世界をも包含してい た。そして、ルシファーは、もし天使たちを自分の反逆に引き入れることができれば、すべての世界をも自分の側に引き入れることができると考えた。彼は、自分の目的を達成するために、詭弁と欺瞞を用いて、巧妙な論陣を張った。彼の欺瞞の力は非常に大きかった。彼は、欺瞞の外套に身を隠して、自分の側を有利に導いていった。彼の行動は、すべて、神秘で包まれていたので、天使たちは、彼の働きの真の性質を見破ることはむずかしかった。それが十分に発展するまでは、それが悪いものであることがわからなかった。彼の不満が、反逆とは思われなかった。忠実な天使たちでさえ、彼の性格を十分に見わけ、彼の働きがどんなことになるのかを識別することができなかった。 PP 17.7

最初ルシファーは、自分自身は全く関係していないような態度で、誘惑の手をのばした、彼は、自分の側に十分に引き入れることができなかった天使たちには、天の住民の利益に対して無関心であるという汚名を着せた。彼は、彼自身が行っているその働きを、忠実な天使たちの責任に帰した。神のみこころに関して巧妙な議論をして当惑させることが、彼の方針であった。彼は、単純なことをみな不可解にし、巧妙な曲解悪用によって、主の明白な言葉に疑惑を投げかけた。神の統治と非常に緊密な関係にあった彼の高い地位は、彼の言い分に大きな力を貸した。 PP 18.1

神は、真理と公平にかなった方法しかお用いにならなかった。サタンは、神がお用いになれないもの、すなわち、へつらいと欺瞞を用いることができた。彼は、神の言葉を偽りであると言い、神の統治計画を曲解して示した。そして、神が天使たちに律法を課するのは正しくないと言った。また、被造物に従順と服従を求めて、神はただ自己を亮めようとしておられるのだと言った。したがって、天の住民とすべての世界の前に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった。サタン自身は、宇

宙の福利を増進しているかのように装っていた。横領者の真の性質、彼のほんとうの目的がすべてのものに理解されなければならなかった。彼の正体が彼自身の悪い行為によって露見するために時間が必要であった。 PP 18.2

サタンは、自分自身が天で引き起こした不和を、神の統治のせいにした。すべての悪は、神の統治の結果であると断言した。彼は、主の律法を改良することが自分の目的であると主張した。そこで神は、彼の主張するところを実際にやって見て、彼の主張するように律法を変更したらどんな結果になるかを示すことをお許しになった。彼自身のわざが、彼を断罪すべきである。サタンは、初めから、自分は反逆していないと主張してきた。全宇宙は、欺瞞者の仮面かはがれるのを見なければならなかった。 PP 18.3

彼が天から追放されたときでさえ、無限の知恵を持つ神は、サタンを滅ぼされなかった。神は、ただ愛の奉仕だけをお受けになるのであるから、被造物の神に対する忠誠は、神の公平と慈愛を堅く信じた上でなされるものでなければならない。天と諸世界の住民は、まだ、罪の性質、あるいはその結果を理解することができなかったので、サタンが神に滅ぼされることの正当性をそのとき理解できていなかった。もしもサタンが、直ちに滅ぼされてしまったならば、愛からではなく、恐れから神に仕える者も起こったことであろう。欺瞞者の影響は完全にぬぐい去られず、反逆の精神も根絶されなかったことであろう。全宇宙の永遠の福祉のために、サタンに、彼の主義主張をもっと展開させなければならなかった。それは、すべての造られた者が、神の統治に対するルシファーの非難の正体をほんとうに悟るためである。そして、神の公平とあわれみ、神の律法の不変性に対する疑惑が永久に除かれるためである。 PP 18.4

サタンの反逆は、来たるべきすべての時代にわたって、宇宙に対する 1 つの教訓、すなわち、罪の性質とその恐るべき結果についての永遠の証明となるべきであった。サタンの支配の結末とそれが人と天使におよぼした影響は、神の権威を取り除いた結果がどうなるかを示すことであろう。それは、神に造られたすべてのものの幸福が、神の統治の存在と結びついていることを証言することであろう。こうして、この恐 るべき反逆の歴史は、すべての清い者たちを永久に守るものとなり、彼らが罪の性質に関して欺

かれることがないようにし、罪を犯し、その罰を受けることがないように、彼らを救うものとなるのであった。 PP 18.5

天において支配なさるかたは、初めから終わりまでごらんになる方である。その方の前には、過去と未来の神秘が同じように展開されている。彼は、罪がもたらした不幸と暗黒と破滅のかなたに、神ご自身の愛と祝福のみこころが達成されるのをごらんになる。「雲と暗やみとはそのまわりに」あるけれども、「義と正とはそのみくらの基である」（詩篇 97：2）。そして宇宙の住民は、忠実なものも、不忠実なものも共に、やがて、このことを理解するときが来る。「そのみわざは全く、その道はみな正しい。主は真実なる神であって、偽りなく、義であって、正である」（申命記 32：4）。 PP 19.1

第 2 章　天地創造のいわれ

本章は、創世記 1、2 章に基づく PP 19.2

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」「あなたは地をその基の上にすえて、とこしえに動くことのないようにされた」（詩篇 33：6、9、104：5）。 PP 19.3

地球が創造主のみ手によって造られたとき、それは非常に美しかった。その表面には、山や丘や野原があって変化に富み、きれいな川や美しい湖水が、ここかしこにあった。しかし、山や丘は、現在のように、けわしく、あら削りでなく、恐ろしい絶壁や裂け目などはなかった。地球の骨組みをなす岩かどは、肥沃な土地におおわれて、いたるところで、緑の草木が繁茂していた。気味の悪い沼や不忌のさばくはどこにもなかった。どちらを向いても、優雅な灌木や優美な花が視線をとらえた、丘は、今はえているどんな木よりも堂々とした樹木で飾られていた。空気は、臭気で汚染されておらず、清らかで健康的であった。周りのけしきは、どんなりっぱな宮殿の飾り立てられた庭園よりも、はるかに美しかった。天使の群れは、その光景をながめて感激し、神のすばらしいみわざに歓喜の声をあげた。 PP 19.4

地球が、数多くの動物と植物で満たされてから、創造主のみわざの冠であり、この美しい地球に住むのにふさわしい人間が、活動の舞台にのぼってきた。人間は、見渡すかぎりのものを統治する支配権が与えられた。「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに……すべての……ものを治めさせよう』。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち……男と女とに創造された」（創世記 1：26、27）。ここに人類の起源が明瞭に述べられている。聖書の記録は、誤った結論を出す余地がないほど明白である。神はご自分のかたちに人間を創造された。そこにはあいまいさが全然ない。動物や植物などの下等な生命形態から、次第に発達の段階をたどって、人間は進化したのだと想像する余地は全くない。こうした考え方は、創造主

の偉大なわざを、人間的な狭い、地上的な考え方のレベルに引き下げる。人間は、宇宙の王座から神を追い出そうと努めた結果、人間自身の品位を低め、人間の崇高な起源を見失っている。星空を高くすえ、野の花を巧みに飾り、み力の奇跡によって、驚くべきものを天地の間に満たされたお方は、その輝かしいみわざの最後を飾るにあたって、人間をこの美しい世界の統治者としておたてになったが、それは生命の賦与者のわざに恥じないものであった。霊感によって与えられた人類の系図は、その起源を、細菌、軟体動物、四足獣などの進化の跡をたどるのでなくて、偉大な創造主に帰着させる。アダムは、土のちりで造られたが、「神の子」であった（ルカ 3：38）。 PP 19.5

アダムは、神の代表として、彼より低い動物の上におかれた。動物は、神の主権を理解することも認 めることもできないが、人を愛し、人に仕える能力を授けられた。詩篇記者は、「これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。……野の獣、空の鳥、……海路を通うものまでも」と言っている（詩篇 8：6～8）。 PP 19.6

人間は、外観においても、品性においても、神のかたちを保っているはずであった。キリストだけが、天の父の「本質の真の姿」ではあるが、人間は、神に似せて造られたのである（ヘブル 1：3）。彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった。 PP 20.1

人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歓喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムよりは少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。罪のない彼ら 2 人は、手で造った衣服を身にまとっていなかった。彼らは、天使が着るような光と栄光の衣をまとっていた。彼らが神に従って生活するかぎり、この光の衣は、彼らをおおっていたのである。 PP 20.2

アダムが創造されたあとで、彼に名をつけてもらうために、すべての生物が、彼の前につれてこられた。彼はどの動物も対になっているのを見た。しかし、それらの中に

は、彼に「ふさわしい助け手が見つからなかった」。神が、地上で創造なさったすべての生き物の中には、人間にふさわしいものはいなかった。また神は言われた、「人がひとりでいるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」（創世記 2：20、18）。人間は孤独な生活をするように造られたのではない。彼は、社交的な存在でなければならなかった。もし伴侶がなければ、エデンの美しい光景も、愉快な労働も、完全な幸福を与えることはできなかったことであろう。天使たちとの交わりでさえ、同情と伴侶を求める彼の願望を満足させることはできなかった。愛し愛される同じ性質のものがいなかったのである。 PP 20.3

神ご自身が、アダムに伴侶をお与えになった、神は、「彼にふさわしい助け手」すなわち、彼にちょうど合った助け手、彼の伴侶となるにふさわしく、彼と 1 つになって、愛し、同情することができる者をお与えになった。エバは、アダムのわきから取られたあばら骨によって創造された。このことは、彼女がかしらになって彼を支配するのでもなければ、彼よりは劣った者として彼の足の下に踏みつけられるものでもなく、同等のものとして、彼のかたわらに立ち、彼に愛され、守られるものであることを示している。男の一部分、彼の骨の骨、彼の肉の肉として、彼女はアダムの第二の自分であった。そしてこの関係には、密接な結合と深い愛情がなければならないことを示された。「自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもいないかえって、……おのれを育て養うのが常である」「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」（エペソ 5：29、創世記 2：24）。 PP 20.4

神は、最初の結婚をとり結ばれた。だから、結婚式の制定者は、宇宙の創造主である。「結婚を重んずべきである」（ヘブル 13：4）。それは、神が人間にお与えになった最初の賜物の 1 つであった。また、それは、堕落後、アダムが楽園の門から持って出た 2 つの制度の中の 1 つである。婚姻関係に関する神の原則をわきまえ、それに従うときに、結婚は祝福である。それは、人類の純潔と幸福を守り、人間の社会的必要を満たし、肉体的、知的、道徳的性質を高める。 PP 20.5

「主なる神は東のかた、エデンに 1 つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた」（創世記 2：8）。神が造られたすべてのものは美を窮め、清い夫婦の幸福の増進

のために、欠けているものは、何 1 つなかった。しかし創造主は、特に彼らの家庭のために、1 つの園をそなえて、その愛のもう 1 つのしるしをお与えになった。この園には、種々さまざまな樹木があって、その多くはかおり高く、おいしい実をつけていた。まっすぐにのびた美しいぶどうの木は、最も優雅な姿をみせていた。その枝には、最も豊かで変化のある 色合いのおいしそうな実がたわわについていた。ぶどうの木の枝を巧みにたわめて木陰をつくり、果実と葉でおおわれた樹木を用いて住居をつくることは、アダムとエバの仕事であった。そこにはあらゆる色彩のかおり高い花が咲きみだれていた。園の中央には、いのちの木があって、その美観は、他のすべての木にまさっていた。木の実は、金や銀のりんごのように見え、生命を永続させる能力があった。 PP 20.6

創造は、ついに完成した。「こうして天と地と、その万象とが完成した」「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」（創世記 2：1、1：31）。エデンは、地の上で栄えた。アダムとエバは自由にいのちの木のところに行くことができた。この美しい世界のどこを見ても、罪の汚れや死の陰はなかった。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」（ヨブ 38：7）。 PP 21.1

偉大な神は、地の基を置かれた。彼は、美しい衣で全世界を飾り、人間のために役立つものを地に満たされた。彼は、地と海に満ちるあらゆる驚異すべきものを創造なさった。創造の偉大なみわざは、6 日で完成した。神は「そのすべての作業を終って第 7 日に休まれた。神はその第 7 日を祝福して、これを聖別された。神がこの日にそのすべての創造のわざを終って休まれたからである」（創世記 2：2、3）。神は、そのみ手のわざを見て満足された。あらゆるものは、完全で、創造主である神にふさわしかった。神は、疲労のためではなく、その知恵と恵みのわざとその栄光のあらわれを心から喜んで休まれたのである。 PP 21.2

神は、7 日目に休まれたあとで、その日を聖別し、人間の休みの日とされた。人間は、創造主の模範にならって、この聖なる日に休むことになった。それは、人間が天と地をながめて、神の偉大な創造のみわざを瞑想し、神の知恵と恵みの証拠を見て、創造主に対する愛と畏敬の念に満たされるためである。 PP 21.3

神は、エデンにおいて、第 7 日を祝福して、創造のみわざの記念となさった。安息日は、全人類の父であり、代表であるアダムにゆだねられた。その遵守は、地に住むすべてのものが、神を創造主とし、自分たちの正当な統治者として認めたことをあらわし、自分たちが神のみ手のわざであり、その権威に従うことを快く認める行為ともならなければならなかった。こうして、この制度は全く記念のために、全人類に与えられたのである。そこには、あいまいな点はなく、ある特定の民だけにかぎられることもなかった。 PP 21.4

神は、安息日が、楽園においてさえ人類に欠くことのできないものであることをお認めになった。人間は、第 7 日に自分の興味や楽しみを捨て、神のみわざについて熟考し、神の力と恵みを瞑想する必要があった。人間はさらに明瞭に神のことを思い起こし、自分のものとして所有するすべてのものが、創造主の恵み深いみ手から来たことを思って感謝するために、安息日が必要であった。 PP 21.5

神は、人々が安息日に、神の創造のみわざについて瞑想することを望まれた。自然は、彼らの知覚に訴え、生きた神、創造主、万物の最高の支配者の存在を宣言している。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる」（詩篇 19：1、2）。地上をおおっている美は、神の愛のしるしである。われわれは、それを万古不易の山、壮大な樹木、開くつぼみ、優美な花に見ることができる。万物は、神について語っている。万物の創造主を指示している安息日は、自然という偉大な書物を開き、そして、そのなかに創造主の知恵と力と愛を探究するように命じる。 PP 21.6

われわれの祖先は、罪なく清いものに造られたが、罪を犯す可能性がなかったのではない。神は、彼らを自由意志をもった道徳的行為者として創造された。彼らは、神の品性の知恵と慈悲、また、神の要求の正当性を理解し、完全な自由のもとに、服従か不服従かを決定することができた。彼らは、神と聖天使たちとの交わりを楽しむことになっていた。しかし、彼らが永久的に確実なものとされる前に、彼らの忠誠が試みられなければならなかった。人間の存在の当初から、サタンを堕落させた致命的欲望、すなわち、放縦に対する欲望に 1 つの制限がおかれた。園の 中央にあるいのちの木の近くに

善悪を知る木があって、われわれの祖先の服従と信仰と愛を試験するものとなっていた。彼らは、ほかのどの木の実も自由に食べることを許されていたが、これは食べることを禁じられていて、その罰は死であった。彼らは、また、サタンの誘惑にあわなければならなかった。しかし、もしその試練に耐えるならば、彼らは、ついに、サタンの力の圏外に置かれ、神の永遠の恵みにあずかることができるのであった。 PP 21.7

神は、人間を律法のもとにおかれたが、これは、人間が存在するためには、不可避の条件であった。人間は、神の統治に従う者であり、律法のない統治はあり得ない。神は、神の律法を犯す力のないものとして人間を造ることもおできになった。また、アダムの手が禁果にふれないように、彼の手をおさえることもおできになった。しかし、それでは、人間は道徳的自由意志の持ち主ではなくて、単なる機械人形になってしまう。選択の自由がないと、彼の服従は自発的なものではなくて、強制されたものとなる。品性が啓発されることもあり得なかったであろう。こういう方法は、神が他の諸世界の住民を取り扱われた計画と相反したものであったことだろう。人間は知的存在者としての価値を失い、神の支配は専制的だというサタンの非難が正当化されたことであろう。 PP 22.1

神は、人間を正しいものに造られた。神は、人間に悪の傾向のない気高い品性をお与えになった。神は、彼に高い知的能力を与え、神に対して忠誠を尽くさせるために、最も強力な示唆をお与えになった。完全で永続的な服従が、永遠の幸福の条件であった。人間は、こうした条件のもとにあって、いのちの木に近づくことができた。 PP 22.2

われわれの祖先の家庭は、その子供たちが地に住むためにひろがっていくときの、彼らの家庭の模範とならなければならなかった。神ご自身の手で飾られたその家庭は、豪華な宮殿ではなかった。高慢な人間は、広壮で高価な建物を好み、自分たちの手のわざを誇る。しかし、神は、アダムを園の中におかれた。これが、彼の住居であった。青空が屋根であり、美しい花と緑の草のじゅうたんを敷いた地が床であった。葉の繁った大木の枝が、天蓋であった。壁は、偉大な芸術家であられる神の作品によって、最も豪華に飾られていた。清い家族の環境は、すべての時代に教訓を教えている。つまり、真の幸福は、誇りとぜいたくにふけることにあるのではなくて創造のみわざによって神と

交わることにあるということである。もし人間が、人工的なものに目を向けず、もっと単純さをつちかうならば、彼らは、神の創造の目的に接近することであろう。誇りや野心は、あくことを知らない。しかし、真に賢明なものは、神がすべての人の手のとどくところにおかれた喜びの源泉から、実質的で高尚な楽しみを見いだすのである。 PP 22.3

エデンに住むアダムとエバには、「それを手入れし、守るために」園の管理が任せられた。彼らの仕事は、たいくつなものでなく、楽しく爽快なものであった神は、頭脳を活動させ、身体を強壮にし、能力を発達させるために、労働を祝福として人間にお与えになった。知的、また身体的に活動することが、アダムの清い存在の最高の楽しみの 1 つであった。堕落の結果、彼は、美しい家庭を追われ、日毎の食物を得るために、かたい土とたたかわなければならなくなったとき、その同じ労働は、楽園での楽しい仕事とはずいぶん異なっていたとはいえ、誘惑の防壁であり、幸福の泉であった。労働には、労苦や苦痛が伴うからといって、労働をのろいとみなすものは誤っている。金持ちは、しばしば、労働階級を軽蔑して見下すが、それは、神が人間を創造された目的から全くはずれている。どんなに多くの富を所有している人であっても、祖先のアダムに与えられた嗣業と比較すれば、いったいどれほどのものであろうか。しかし、アダムは怠惰でなかった。人間の幸福をもたらすものが何であるかを知っておられた創造主は、アダムに仕事をあてがわれた。働く男女だけが、生活の真の喜びを発見する。天使たちは熱心に働いている。彼らは、人の子らのために働く神の使者である。創造主は、怠惰なのろのろした習慣をお許しにならない。 PP 22.4

アダムとエバは、神に忠実であるかぎり、全地を支 配することになっていた。彼らは何の制約も受けずに、すべての生き物を支配することができた、獅子と小羊は彼らのまわりで平和にたわむれ、いっしょに彼らの足もとに横たわった。楽しそうな小鳥たちが、恐れもせず彼らのまわりを飛びまわり、その喜ばしい歌が創造主を賛美すると、アダムとエバは、その声に合わせて共に父とみ子に感謝した。 PP 22.5

清い家族は、天の父の保護を受ける子供たちであるばかりでなくて、知恵に満ちた創造主から教えを受ける生徒でもあった。彼らは、天使たちの来訪を受け、何の隔ても

なく、創造主と交わることを許された。彼らは、いのちの木によって与えられた生気に満ち、彼らの知力は、天使よりわずかに劣るだけであった。目に見る宇宙の神秘――「知識の全き者のくすしきみわざ」――は、彼らにとって、尽きない教えと喜びの泉であった（ヨブ 37：16）。過去 6000 年の間、人間が研究を続けてきた自然の法則と作用は、万物の創造者であり、維持者である無限のおかたによって、彼らに知らされた。彼らは、木の葉、草花、樹木などと語り、それぞれの命の神秘を学んだ。アダムは、あらゆる牛物、水中に遊ぶい大な海魚から、日光の中にいる小さな昆虫にいたるまで熟知していた。彼は、おのおのに名を与え、すべてのものの習癖や性質によく通じていた、もろもろの天の神の栄光、整然と運行する無数の世界、雲のつり合い、光と音、昼夜の神秘などのすべては、われわれの祖先の研究の課題であった。森林のあらゆる葉に、山々の岩石に、すべての輝く星に、大地に、大気に、大空に、神のみ名がしるされていた。造られた世界の秩序と調和は、無限の知恵と力とを彼らに語った。彼らは、自分たちを強く引きつけ、彼らの心を深い愛で満たし、新たな感謝の声をあげさせるものを常に発見するのであった。 PP 23.1

彼らが神の律法に忠誠をつくしているかぎり、彼らの知り、理解を深め、愛する能力は、絶えず啓発されるのであった。彼らは、常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます明瞭な観念をいだくようになるのであった。 PP 23.2

第 3 章　天地創造の 1 週間

安息日と同様に、週は創造の時に創設されて、聖書の歴史を通じて維持され、われわれに伝えられた。神は世の終末に至るまで継続する週の見本として、最初の 1 週を設けられた。それは、他のすべての週と同様に、文字通りの 7 日間であった。神は、6 日を創造の働きに用い、7 日目に休み、この日を祝福して、人間のための休息の日として聖別された。 PP 23.3

神は、シナイでお与えになった律法のなかで、週を認め、週の根拠になっている事実をお認めになった。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という命令を与え、6 日のうちにすべきことと、7 日目にすべきでないことを詳しく説明したあとで、こうして、1 週間を過ごすことの理南として、神はご自身の模範をおあげになった。「主は 6 日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、7 日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」（出エジプト 20：8～11）。創造の日々が、文字通りの 1 日であったことを理解するならば、この理由は、美しく力強いものに思われる。1 週のうちの 6 日間が人間の労働のために与えられているのは、神が第 1 週のこの同じ時に、創造のわざをなさったからである。人間は、7 日目に創造主が体まれたことを記念して、労働をやめるべきである。 PP 23.4

しかし、第 1 週の出来事が何千万年も要したとの仮説は、第 4 条の戒めの根底をくつがえすものである。もしそうだとすれば、創造主は、漠然とした不明確な期間の記念として、文字通りの日々の週を守るように命じておられることになる。神が、被造物に対して、このような態度をとられるとは考えられない。それは、神がすでに明らかにされたものを、不明瞭であ いまいなものにしてしまう。それは、最も陰険で、最も危険な形の無神論である。この真相が巧みに隠されているために、聖書を信じると公言する多くの人々がそう信じて教えているのである。「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた」「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」（詩篇 33：6、9）。聖書は、地球が長い

時代を経てこんとん状態から徐々に進化したということを認めていない。聖書の記録は、創造週の 1 日 1 日が、その後のすべての 1 日と同様に、夕があり朝があったことを明らかにしている。1 日の終わりに、創造主のその日の働きの結果がしるされている。第 1 週の記録が終わったところで、「これが天地創造の由来（ジェネレーション）である」としるされている（創世記 2：4）。しかし、この言葉は、創造の日々が文字通りの 1 日でなかったというのではない。その 1 日 1 日がジェネレーションと呼ばれたのは、神がその日、その日に何か新しいものを発生させ（ジェネレート）、また、造られた（プロデュース）からである。 PP 23.5

地質学者は、地球がモーセの記録するところよりははるかに古代のものである証拠を地球自体から発見したと主張する。今日、現存するものや、数千年経過したものよりは、はるかに巨大な人間や動物の骨、武器、樹木などの化石が発見されたことによって、創造の記録のなかにあらわれているときよりは、ずっと以前に現代の人間よりかなり大きな人種が生存していたと推論する。このような論理の結果、聖書を信じると称する多くの人々が、創造の 1 日は漠然とした不定の期間であるという見解をもつようになった。 PP 24.1

しかし、聖書の歴史を度外視して、地質学は、何も証明することはできない。発見したものについて、確信をもって論じている人々は、洪水前の人間、動物、樹木などの大きさや、洪水のときの大変化について、十分な認識を持ち合わせていない。地中から発掘される遺物類は、多くの点で現在とは非常に異なった状態にあったことを証明しているが、そうした状態がいったいいつ存在したかということは、聖書から学ぶほかないのである。洪水に関する物語のなかで、霊感は、地質学だけではさぐり得ないことがらを説明している。現在のものよりは数倍もある人間、動物、樹木などがノアの時代に埋没した。こうして、洪水前の人々が洪水によって滅びたことを後世の人々に証明するために保存された。神は、こうしたものが発見されたために、霊感による聖書歴史に対する信仰が強固になることを望まれた。しかし、人々は、いたずらに議論して洪水前の人々と同じ誤りに陥った。彼らは、神が人々を益するために与えられたものを悪用して、それをのろいに変えてしまった。 PP 24.2

神を無視した作り話を人々に信じさせることが、サタンの計略の 1 つである。というのは、そうすれば、きわめて明確に示されている神の律法をあいまいにし、人々を大胆に神の政府に反逆させることができるからである。彼は特に第 4 条を攻撃する。それは、この戒めが、生ける天地の創造主を明示しているからである。 PP 24.3

創造のわざを、自然現象の結果であるというように説明しようとする試みが絶えず行われていて、クリスチャンと称する人々でさえ、聖書の明らかな事実に反して、人間の論理を受け入れている。多くの者が、預言、特にダニエル書と黙示録の預言の研究に反対し、これらの書は、不明瞭で理解しにくいと言う。ところが、この同じ人々は、モーセの記録とは反対の地質学的推論を熱心に信じる。しかし、もし、神が啓示されたものがそれほど難解であるとするならば、神が啓示されなかったことに関する単なる仮説を信じるとは、なんと大きな矛盾であろう。 PP 24.4

「隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属」する（申命記 29：29）。神が、どんな方法で創造の働きをなさったかは、人間にあらわされていない。人間の科学は、至高者の秘密をさぐり出すことはできない。神の創造の力は、神の存在と同様に理解することはできない。 PP 24.5

神は、科学と芸術の両方面において、世界にあふれる光をお注ぎになった。しかし、科学者と自称す る人々がこうした問題を、単に人間的観点だけによって処理しようとするならば、必ず誤った結論を下すにきまっている。もし、われわれの説が、聖書の事実と矛盾しないならば、神の言葉の啓示を越えて推論しても害はないであろう。しかし、神の言葉をさしおいて、科学的原則によって神の創造のわざを説明しようとする者は、未知の大海を海図も羅針盤もなくただようようなものである。もし、神の言葉の指導なしに研究するならば、どんな偉大な頭脳の持ち主でも、科学と啓示の関係を追求するのにとまどうことであろう。創造主と神のわざは、彼らの理解力をはるかに超えていて、彼らは、それを自然の法則によって説明することはできない。それで、彼らは、聖書の歴史は信頼できないと考える。旧新約聖書の記事の信頼性を疑う者は、さらに 1 歩進

んで、神の存在を疑うようになる。こうして、彼らは、いかりを失った船のように、不信の暗礁にのり上げる。 PP 24.6

こうした人々は、単純な信仰を失っている。神の清い言葉に対する堅い信仰が必要である。聖書は、人間の科学的観念によって、試験されるべきではない。人間の知識は、頼りがいのない案内者である。あらをさがそうとして聖書を読む懐疑論者は、彼らの科学および啓示に関する理解が不十分なために、この二者間に矛盾を発見したということがあろう。しかし、正しく理解しさえすれば、この二者は完全に一致しているのである。モーセは聖霊の指導に従って書いたのであるから、地質学の学説が正しいものであれば、モーセの言葉と一致しない発見を主張することはあり得ない。すべての真理は、それが自然であれ、啓示であれ、そのすべてのあらわれ方において常に矛盾はない。 PP 25.1

神の言葉の中には、偉大な学者でも答えられない質問が多く提出されている。こうした問題にわれわれの注目がひかれているのは、人間がどんなに知恵を誇ってみても、限られた頭脳では、日常生活のささいなことがらのなかにさえ、十分に理解できないことがいかに多くあるかを示すためである。 PP 25.2

それにもかかわらず、科学者たちは、神の知恵、すなわち、神のなさったこととおできになることなどを理解できると考える。神は、神ご自身の法則に制限されておられるという思想が一般に広まっている。人々は、神の存在を否定するか、あるいは無視するかして、すべてのもの、人の心に働く神の霊の作用さえも説明できると考えている。そして、彼らは、神のみ名を敬わず、神の力を恐れもしない。彼らは、超自然ということを信じず、神の律法、また、彼らを通じて神のみこころを行われる無限の能力を理解しない。一般に、「自然の法則」という言葉は、物質界を支配する法則について、人間が発見し得たことを言うのである。しかし、人間の知識は、なんとかぎられていることであろう。そして、創造主はご自身の法則にかないながらも、なお、有限な人間の思考を超えて働かれる範囲はなんと広いことであろう。 PP 25.3

物体には、生命力があると多くの者が教えている。すなわち、ある特質が物体に与えられて、それはその固有の能力によって活動するようになっている。そして、自然の

営みは、一定の法則に従って行われていて、神ご自身でさえそれに干渉することはできないと彼らは言う。これは、偽りの科学であって、神の言葉の支持を受けていない。自然は創造のしもべである。神は、神の法則を破棄したり、それに反して働かれることはないのであって、かえって、神の器として常に用いておられる。自然は、その法則のなかに一貫して、知性と実在と活動的勢力とが働いていることを証明している。父とみ子とは、自然のなかで、絶えず働いておられる。キリストは言われた。「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」（ヨハネ 5：17）。 PP 25.4

レビ人たちは、ネヘミヤ記のなかで、こう賛美している。「あなたは、ただあなたのみ、主でいらせられます。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、……これをことごとく保たれます」（ネヘミヤ 9：6）。この世界に関するかぎり、神の創造のわざは終わった。「みわざは世の初めに、でき上がっていた」からである（ヘブル 4：3）。しかし、神の力は、神が創造されたものを保つために働いている。 心臓が脈打ち、呼吸が続くのは、1 度、始動させられた機構が、それ自体の力によって動き続けるのではない。すべての呼吸、すべての心臓の鼓動は、われわれが神のうちに「生き、動き、存在」していて、神の全体にみなぎる保護のもとにある証拠である（使徒行伝 17：28）。地球が、年々豊富な収穫をもたらし、太陽の周りを運行し続けるのも地球自体の力によるものではない。神のみ手が惑星を導き、それぞれを定められた位置において、秩序正しく天を運行させておられる。神は、「数をしらべて万軍をひきいだし、おのおのをその名で呼ばれる。その勢いの大いなるにより、またその力の強きがゆえに、1 つも欠けることはない」（イザヤ 40：26）。草木が茂り、葉がもえ出て、花が開くのは、神の力によるのである。神は、「もろもろの山に草をはえさせ」、谷を肥沃なところになさる（詩篇 147：8）。「林の獣は」「神に食物を求める」。小さい虫から人間に至るまで、すべての生命あるものは日毎に神のみ摂理の守りに依存している。詩篇記者は、美しくこう歌っている。「彼らは……期待している。あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる」（同 104：20、21、27、28）。神のみ言葉が風雨を支配する。神は、天を雲でおおい、地に雨を降らせられる。「主は雪を羊の毛のように降らせ、霜を灰のように

まかれる」（同 147：16）。「彼が声を出されると、天に多くの水のざわめきがあり、また地の果から霧を立ちあがらせられる。彼は雨のために、いなびかりをおこし、その倉から風を取り出される」（エレミヤ 10：13）。 PP 25.5

神は、万物の根源であられる。すべての正しい科学は、神のみわざと調和している。真の教育は、すべて神の統治に従うように導く。科学は、新しい驚異を展開する。科学は、天空高く舞い上がり、未知の深海を探る。しかし、その研究から、神の啓示に反するものは、何 1 つ示すことはできない。人々は、無知であるために、科学の助けをかりて、神についての偽りの考えを支持しようとする。しかし、自然という書と神のみことばとは、互いに光を照らし合っている。こうして、われわれは、創造主をあがめ、そのみ言葉をよく理解して信頼するように導かれる。 PP 26.1

限りある頭脳によっては、無限の神の存在、能力、知恵、そのみわざなどを知り尽くすことは不可能である。聖書の筆者は言っている。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか。その量は地よりも長く、海よりも広い」（ヨブ 11：7～9）。地上の最大の知者であっても、神を理解することはできない。人間は絶えず探究し、学び続けても、なお、前方には無限が広がっている。 PP 26.2

しかし、創造のみわざは、神の力と偉大さを証拠立てている。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす」（詩篇 19：1）。神のみ言葉の勧告に従うものは、科学のなかにも神を理解する助けがあることを見いだす。「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである」（ローマ 1：20）。 PP 26.3

第 4 章　エデンの園の悲劇

本章は、創世記 3 章に基づく PP 26.4

サタンは、もはや天において反逆を扇動することができなくなったので、神への敵意を、人類の滅亡をはかるという新しい方面にむけてきた。エデンの清い家庭の幸福と平和は、彼が永遠に失ってしまった天上の喜びを思い起こさせるのであった。サタンは、彼らをねたみ、彼らを不服従に誘って、罪のとがと罰とをこうむらせようとした。彼は、彼らの愛を不信に、賛美の歌を創造主に対する非難に変えようとした。こうして、自分が陥ったのと同じ不幸に、これらの罪のない者らを投げこむだけでなくて、神に汚名 を着せ、天を悲しませようとした。 PP 26.5

われわれの祖先は、彼らを脅かす危険について、何の警告も与えられずにいたのではなかった。天からの使者は、サタンの堕落や、彼が人類を滅ぼそうと計画していることを彼らに示し、悪の王がくつがえそうと試みている神の政府の性質をさらに十分に説明した。サタンとその軍勢が堕落したのは、神の正しい律法に、彼らが従わなかったからである。秩序と公平は、律法だけによって保たれるのであるから、アダムとエバが律法を尊ぶことは、どんなにたいせつであったことだろう。 PP 27.1

神の律法は、神ご自身と同様に、神聖なものである。それは、神の意志の啓示であり、神の品性の写し、神の愛と知恵の表現である。造られたものの調和は、生物であれ、無生物であれ、すべてのものが創造主の律法に完全に一致することにかかっている。神は、生物のためだけでなく、自然のすべての営みを支配するために、法則をお定めになった。万物は、破ることのできない一定の法則の下にある。しかし、自然のすべてのものが、自然の法則に支配されているにもかかわらず、地上にすむ万物のなかで、人間だけは道徳律に従わなければならない。創造の最高のわざである人間に、神は、神の要求を認めて、その律法の義と慈愛と、そして、人間に対する律法の神聖な要求を理解する能力をお与えになった。人間には、ゆるがない服従が要求されているのである。 PP 27.2

天使と同様に、エデンの住人には、試験期間が与えられていた。彼らの幸福な地位は、創造主の律法に忠実に従うという条件だけによって保つことができた。彼らは、服従して生きるか、それとも服従しないで滅びるかのどちらかであった。神は、彼らを豊かな祝福を享受する者とされた。しかし、もし彼らが神の意志に逆らうならば、罪を犯した天使たちを赦されなかった方は、彼らをも赦すことはおできにならなかった。罪は神の賜物を取り去り、彼らに悲惨と破滅をもたらすのであった。 PP 27.3

天使たちは、サタンの策略に注意するように、彼らに警告した。それは、サタンが彼らをわなに陥れようとしてたゆまず努力するからであった。彼らが神に服従しているかぎり、サタンは、彼らを傷つけることはできなかった。なぜなら、もし必要とあれば、天のすべての天使が、彼らを助けるためにつかわされるからであった。もし彼らがサタンの最初の誘惑を断固として退けたならば、彼らは、天使たちと同様に安全であったことであろう。しかし、1 度誘惑に負けるならば、彼らの性質は堕落してしまい、とうてい自分だけではサタンに抵抗する力も抵抗する気持ちも持てなくなってしまうのであった。 PP 27.4

知識の木は、彼らの神に対する服従と愛を試みるためにおかれた。主は、園の中にあるすべてのものを彼らが用いるにあたって、1 つの禁令を設けるのがよいとお考えになった。しかし、彼らがこの点で神のみ旨を無視するならば、彼らは、罪を犯すことになるのであった。サタンは、彼らのあとを追って絶えず誘惑することは許されなかった。サタンは、ただ禁じられた木のところだけで、彼らに近づくことができた。もし、彼らがその木がどんなものであるかを知ろうとすれば、サタンの策略にさらされることになるのであった。彼らは、神から与えられた警告に注意深く耳を傾け、神がみこころのうちにお与えになった教えに満足するように忠告された。 PP 27.5

サタンは、人に気づかれないように働きを進めるために、媒介としてへびを用いることにした。これは、欺瞞の目的には、ちょうどよい変装であった、そのころ、へびは、地上の動物のうちで、最も賢く、最も美しいものの 1 つであった。へびには羽があって、空を飛ぶときは、みがき上げた黄金の色と輝きを放っていた。へびが禁断の木の実り豊かな枝にとまって、おいしそうな果実を食べているありさまは、人の注目をひき、

目を楽しませるのであった。こうして、平和な楽園に獲物を待ち受ける破壊者がひそんでいた。 PP 27.6

園の中で毎日の仕事をするときに、夫のところから離れないようにと、天使はエバに注意した。彼女が夫といっしょにいるときは、1 人でいるときより誘惑に陥る危険が少なかった。しかし、エバは、楽しい仕事に夢中になって、知らず知らずのうちに、夫のそば から離れていった。彼女は、自分が 1 人なのに気づいたときに、身の危険を感じたが、自分には悪を見わけてそれを退ける知恵と力が十分にあると考えて恐怖をしずめた。彼女は、天使の注意に気をとめないで、まもなく、好奇心と賛嘆のまじった思いで禁じられた木をながめていた。その実は、非常に美しかった。彼女は、なぜ神がこれを禁じられたのかと疑問を抱いた。それが、誘惑者の待っていた機会であった。彼は、彼女の心の動きを読みとることができるかのように、彼女に言った。「園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記 3：1）。エバは、自分の心の思いが声となったのを聞いたような気がしてはっと驚いた。しかし、へびは音楽のような声で、彼女のすばらしい美しさを巧みにほめ続けた。その声は不快ではなかった。彼女は、その場所から逃げ去ろうとしないで、へびが語るのを聞いて、不思議に思いながら、ためらっていた。もし、エバが天使に語りかけられたのであれば、彼女は、恐怖心を抱いたことであろう。しかし、エバは、目を奪うばかりのへびが、堕落した敵に用いられるとは夢想だにしなかった。 PP 27.7

彼女は、サタンの誘惑の言葉に答えた。「『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです』」（同 3：2、3）。 PP 28.1

彼らが、この木の実を食べるならば、もっと高い存在者となり、さらに広い知識をもつことができると、彼は言った。へび自身も、禁じられた実を食べたために、話す能力を得たのだと言った。そして、主は、彼らの地位が高められて、主ご自身と等しくな

らないように、何とかして、この実を彼らに与えまいとしておられるのだとほのめかした。神が、それを味わうこと、また、それに触れることさえ禁じられたのは、それに知恵と力を授ける驚くべき性質があるからである。神の警告は、実際にその通りに成就するものではなくて、ただの威嚇にすぎないのだ。また、彼らは、どうして死ぬことができようか。彼らは、いのちの木の実を食べたのではなかったか。神は、彼らが気高く成長し、より大きな幸福を見いだすことを妨害しておられると彼は言った。 PP 28.2

こうした方法で、アダムの時代から現在にいたるまでサタンは働き続け、大成功を収めている。彼は、人を誘惑して、神の愛に頼らず、神の知恵を疑わせるのである。彼は、不信心な好奇心を刺激し、神の知恵や力の秘密を探ろうとする際限のないせんさく心をかきたてようと常に努力している。多くの者は、神がみこころのうちに隠されたものを捜し出そうと努めて、神が、啓示された真理で、救いに欠くことのできないものを見落としている。サタンは、人間を、驚くべき知識の分野に入るかのように信じさせて、不服従に誘惑する。しかし、これは、全く偽りである。進歩的思想に得意になりながら、彼らは、神の要求をふみにじり、堕落と死の道に踏み込んでいるのである。 PP 28.3

サタンは、きよい夫婦に向かって、神の律法を犯すことによって、彼らは、勝利者になれると主張した。今日われわれは、それと同様の議論を聞かないであろうか。自分たちは、広い思想をもち、より大きな自由を享受していると主張する一方、神の律法に従う者は、考え方が狭いと言う者が多くいる。これは、「それを食べると」、すなわち、神の要求に逆らうと、「あなたがたは……神のように」なるでしょうというエデンで聞こえた声の反響にすぎないのである。サタンは、禁じられた実を食べたために大きな利益を得たと主張したが、自分が罪を犯したために、天から追放されたことは、表に出さなかった。彼は、罪が永遠の損失をもたらしたことを知ってはいたが、他のものを自分と同じ立場に引き入れるために、自分の不幸を隠した。そのように、今日、違反者は、自分の正体を隠そうとする。彼は、自分が清いことを主張するであろう。しかし、そのりっぱな公言は、彼を欺瞞者として、さらに危険なものとするだけである。彼は、サタンの 側に立って、神の律法をふみにじり、他の人々にも同じようにさせ、彼らを永遠の破滅に陥れようとしている。 PP 28.4

エバは、サタンの言葉をほんとうに信じた。しかし、エバがそう信じたからと言って、罪の刑罰をまぬかれることはできなかった。エバは、神のみことばを信じなかった。そして、それが、彼女を堕落させたのである。人間は、審判のときに、偽りを本気で信じたからではなくて、真理を信じないで、真理を学ぶ機会をのがしたために罪に定められる。サタンは、正反対の詭弁を弄しているが、神に従わないことは、常に悲惨なことである。われわれは、真理が何であるかを知るように心がけなければならない。神が、み言葉のなかにお書かせになったすべての教訓は、われわれを警告し教えるためである。それらは、われわれを欺瞞から救うために与えられた。それを学ばないならば、身の破滅をもたらす。神のみ言葉に反するものは、みな、サタンから出たものであると思ってまちがいない。 PP 29.1

へびは、禁じられた木の実をとって、なかば気の進まないエバの手にのせた。そうしておいて、彼は、神がそれにさわるな、死んではいけないからと言われたというエバ自身の言葉を彼女に思い起こさせた。彼は、それにさわっても害はなかったのだから、その実を食べてもだいじょうぶだと言った。エバは、さわっても何も悪いことが起こらないので、だんだん大胆になった。「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ」た（創世記3：6）。その味はよかった。彼女か食べたとき、彼女は、生き生きした力を感じたように思った。そして、さらに高い存在状態にはいったように感じた。彼女は、何の恐れもなく、実を取って食べた。こうして、罪を犯したエバは、サタンにかわって夫を破滅させるために働く者になった。エバは、なんとも言えない異常な興奮状態に陥り、禁じられた木の実を両手に持って、夫をさがし、起こったことのすべてを話した。 PP 29.2

悲しい表情がアダムの顔にあらわれた。彼は、驚きおびえたように見えた。エバの話を聞いて、これはわれわれが警告を受けていた敵にちがいないと彼は答えた。また彼は、エバは神の宣告によって死ななければならないと言った。彼女はそれに答えて、死ぬことはないと言ったへびの言葉をくりかえして、彼に食べるようすすめた。エバはそれをほんとうだと思った。というのは、自分は神の怒りのしるしを何も感じないし、む

しろ、気分を爽快にして、引き立たせ、からだ中が新しい命におどるように思われ、天使も、このように力づけられているのかとエバは想像したからである。 PP 29.3

アダムは、エバが神の命令にそむき、彼らの忠誠と愛の試練として課せられたただ 1 つの禁令を犯したことを知った。彼の心に恐ろしい苦闘が起こった彼は、エバを、自分のそばからさまよい出るままにしておいたことを悲しんだ。しかし、それはもう取りかえしがつかなかった。彼は、交わりを楽しんでいた彼女から別れなければならなかった。どうして、それに耐えることができよう。アダムは、神と天使たちとの交わりを楽しんでいた。彼は、創造主の栄光を見たのであった。もし、人類が神に忠実であったならば、彼らにはどのような輝かしい運命が開かれるかを彼は知っていた。しかし、彼は、他のあらゆるもの以上に尊いものと思っていた賜物を失うことを恐れて、こうしたすべての祝福について考える余裕がなかった。創造主への愛、感謝、忠誠心などのすべては、エバに対する愛の大きさには比べることができなかった。彼女は、彼自身の一部で、別れるなどとは考えてみることもできなかった。土のちりから生きた美しい人間を創造し、彼を愛して、彼に伴侶を与えられた同じ無限の能力を持たれた神は、彼女に代わるものを備えることがおできになることを彼は理解しなかった。彼は、彼女と運命を共にする決心をした。彼女が死ななければならないならば、彼もいっしょに死のうと思った。結局、賢いへびの言葉がほんとうではなかろうかと彼は考えた。エバは、不従順の行為の以前と同様に、美しく、見たところなんの罪もないかのように、彼の前に立っていた。彼女は、前よりは大きな愛を 彼にあらわした。死の徴候は、彼女にあらわれていなかった。そこで、彼は、成り行きにまかせる決心をした。彼は、実を取ってすばやく食べた。 PP 29.4

アダムは、罪を犯した後で、まず第一に、自分がこれまでより高い存在状態にはいったような気がした。しかし、間もなく、罪の意識は彼の心を恐怖で満たした。これまでなごやかで一様だった気温が、罪を犯した 2 人にはだ寒く感じられた。これまで彼らの心に宿っていた愛と平和はなくなり、その代わりに罪の意識と未来への恐怖と魂の空虚さとを感じた。彼らを取りまいていた光の衣は消えてしまった。それで、彼らは、

その代わりに衣服をつくろうとした。彼らは、何も着ないで、神と天使たちに会うことはできなかった。 PP 30.1

彼らは、今、自分たちの罪の正体を知り始めた。アダムは、自分のそばを離れて、へびに欺かれたエバの愚かさを非難した。しかし、彼らは 2 人とも安易な考えを抱いて、これまでこれほど多くのご自分の愛の証拠をお与えになった神は、この 1 つの罪を赦し、彼らが当然受けるものと思った恐ろしい刑罰にあわなくてもすむようにしてくださるだろうと思った。 PP 30.2

サタンは、自分の成功を喜んだ。彼は女を誘惑して、神の愛に不信を抱かせ、神の知恵を疑わせ、神の律法を犯させ、そして、彼女によって、アダムをも打ち負かしたのである。 PP 30.3

しかし、偉大な律法賦与者は、アダムとエバに彼らの罪の結果を知らせようとしておられた。神が園に来られた。彼らが罪なく清いときであれば、喜んで創造主の近づいて来られるのを歓迎するのであったが、いまは、恐れて逃げ、園の奥深いところに隠れようとした。しかし、「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。神は言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなと、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか』」（同 3：9～11）。 PP 30.4

アダムは、自分の罪を否定し、言いわけをすることもできなかった。彼は、悔い改めの精神をあらわす代わりに、彼の妻を非難し、ひいては、神ご自身の責任にした。「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」（同 3：12）。エバを愛するがために、神に喜ばれることも、楽園の彼の家も歓喜に満ちた永遠の命をも捨てた彼が、罪を犯した今は、罪の責任を妻ばかりでなく、創造主ご自身にまで負わせようとした。罪の力は、これほどに恐ろしいのである。 PP 30.5

女が「あなたは、なんということをしたのです」と問われたとき、彼女は、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と答えた（同 3：13）。

「どうしてあなたは、へびをお造りになったのですか。へびがエデンに入るのをどうしてお許しになったのですか」という質問が彼女の言いわけの真意であった。このようにして、彼女もアダムと同じく、彼らの堕落の責任を神のせいにした。自己を義とする精神は、偽りの父から始まった。この精神は、われわれの祖先がサタンの力に屈服すると直ちにあらわれた。そして、それ以来、アダムのすべてのむすこ、娘はこの精神をあらわしてきた。謙遜に自分の罪を告白するかわりに、彼らは他の人や、環境、あるいは神を非難して、自分を弁護しようとする。彼らは、神の祝福さえ、神に対するつぶやきの理由にするのである。 PP 30.6

そこで、主はへびにこう宣告を下された。「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最ものろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう」（同 3：14）。へびはサタンの手先として使われたために、神の刑罰を共に受けなければならなかった。へびは、野の生きもののうちで、最も美しく、ほめそやされていたが、最も卑しめられて、いみきらわれるものとなり、人からも動物からも恐れられ、憎まれるようになるのであった。へびにむかって語られた次の言葉は、サタン自身に直接言われたもので、彼が、最後には敗北して滅びることをさしていた。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に、彼 はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（同 3：15）。 PP 30.7

エバは、これからあわなければならない悲しみと苦痛を知らされた。主は言われた。「あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」（同 3：16）。神は創造のときに、彼女をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、彼らは、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。神の律法が命じているこの原則を、堕落した人類が守っていたならば、この宣告は、罪の結果によるものであったとは言え、彼らにとって、

祝福となったことであろう。ところが、こうして与えられた優位を男が乱用したために、女の運命は非常に苦しく、彼女の人生は重荷となった。 PP 31.1

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定めになったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそそのかされた。彼女は、初めに置かれた地位より高く昇ろうとして、それよりはるか下に落ちた。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福となることのできる場所をあける者が多い。高い身分を望んで、女性の尊厳と品性の気高さを犠牲にし、人が特に彼らに与えた働きを怠る者が多いのである。 PP 31.2

主は、アダムに宣言された。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」（同 3：17～19）。 PP 31.3

罪のない夫婦が、悪を知ることは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪は、さしひかえておられた。それだのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べてしまった。こうして彼らは、それを一生の間食べ続け、悪の知識をもつことになるのであった。このとき以来、人類はサタンの誘惑に悩まされることになった。それまで彼らに与えられていた楽しい労働にかわって、不安と労苦を経験しなければならなくなった。彼らは、失望、悲嘆、苦痛をなめ、そして最後には死ななければならなかった。 PP 31.4

自然全体は、罪ののろいのもとにあって、神に対する反逆の性質と結果を人間にあかしすることになった。神は人間を創造なさったときに、彼を地とすべての生き物の統治者にされた。アダムが、天の神に忠誠をつくしていたかぎり、自然全体は彼に従っていた。ところが、彼が神の律法にそむいたとき、下等の動物は、彼の統治にそむいた。

こうして、主は、その大きな慈悲をもって、神の律法の神聖さを人間に示し、彼ら自身の体験によって、ささいなことにおいても、律法の無視がどんなに危険であるかを悟るようにされた。 PP 31.5

このとき以来、艱難辛苦の生活が人間の運命になったが、これは、愛のゆえに定められたものであった。これは罪の結果、人間に必要となった訓練であって、食欲と情欲の放縦を防ぎ、克己の習慣を発達させるためであった。これは、罪の滅びと堕落から人間を回復する神の大計画の一部であった。 PP 31.6

「それを取って食へると、きっと死ぬであろう」（同 2：17）という祖先に与えられた警告は、彼らが禁じられた木の実を食べたその日に死ぬという意味ではなかった。しかし、その日に、取り消すことのできない宣告が発せられるということであった。不死は服従の条件のもとに約束された。罪を犯せば、永遠の命を失うのであった。その日に、彼らは死ぬ運命に定められるのであった。 PP 31.7

永遠に生きるためには、人間は、いのちの木の実 を食べなければならなかった。これが取り去られると、彼の生命力は次第に衰えていって、ついには絶えてしまう。サタンは、アダムとエバが、不従順のために、神の怒りを招くことを意図していた。そして、彼らが赦しを得ることができなければ、彼らは、いのちの木の実を食べて罪と悲惨に満ちた生活を永続することを、サタンは望んでいた。だが、人間の堕落後、直ちに聖天使がいのちの木を守る任命を受けた。この天使たちの周りには、輝く剣のような光がひらめいていた。アダムの家族の者は、だれもこのさくを越えて、いのちの木の実を食べることはできなかった。だから、不死の罪人はいないのである。 PP 31.8

われわれの祖先の罪から生じたわざわいのうしおは、ごく小さな罪の結果としては、あまりにも恐ろしすぎると考えて、人間を扱われる神の知恵と義とを疑う者が多い。しかし、彼らがこの問題の深いところにあるものを見るならば、自分たちのまちがいに気づくであろう。神は、ご自分のかたちに従って、罪のないものとして人間を造られた。地上には、天使より少し低く造られた人々が住むことになっていた。しかし、彼らの従順がためされなければならなかった。神は、この世界が、神の律法を無視する者たちによって満たされるのを許されなかった。ところが、神は大きなあわれみによって、アダ

ムにきびしい試練をお与えにならなかった。そして、禁令が軽かったこと自体が、罪を非常に大きいものにした。もし、アダムが最も小さい試練に耐えることができなければ、もっと大きな責任を負わせられたときに、さらに大きな試練に耐えることはできなかったであろう。 PP 32.1

もし、アダムに何か大きな試練が課せられたならば、悪に傾いている者は、「これは、ちょっとしたことだ。神は、小さいことは厳密に言われない」と言って、言いわけをしたことであろう。そして、ささいなことと思われることの違反がつづき、人々の間で非難されることもないであろう。しかし、主は、どんなに小さい罪でも憎まれることを明らかにされた。 PP 32.2

神の言葉にそむいて、禁じられた木の実を食べ、夫をも誘って律法を犯させることは、エバにとって、ささいなことのように思われた。ところが、彼らの罪は、不幸が潮流のようにこの世界に流れ込む門を開いたのである。誘惑のときの、誤った 1 歩がどんな恐ろしい結果をもたらすかをだれが知ることができよう。 PP 32.3

神の律法は人間を束縛するものではないと教える多くの人々が、その戒めに従うことは、不可能であると主張している。しかし、それが真実であるならはなぜアダムは、罪の刑罰を受けたのであろうか。われわれの祖先の罪は、この世に罪と悲しみをもたらした。もし、神の恵みと憐れみがなかったならば、人類は全くの絶望状態に投げこまれたことであろう。だれも自分をあざむいてはならない。「罪の支払う報酬は死である」（ローマ 6：23）。人類の祖先に宣告がくだったときと同じく、今も、神の律法を犯してその刑罰をまぬかれる者は 1 人もいないのである。 PP 32.4

アダムとエバは、罪を犯してからエデンに住むことができなくなった。彼らは、罪のなかったときの喜びに満ちた住居にとどまっていたいと熱心に願った。彼らは、その幸福な住居に住む権利をすべて失ったことを認めたが、今後は、必ず神に服従することを誓った。しかし、彼らの性質は、罪のために堕落し、悪に抵抗する力が弱まり、サタンが容易に彼らに近づく道を開いたことを彼らは知らされた。彼らは、罪のないときに誘惑に負けた。であるから、今、罪を知った状態においては、忠実に従う力が弱まったのである。 PP 32.5

彼らは頭をうなだれ、言い表せない悲しみをいだきつつ、美しい住居に別れを告げ、罪にのろわれた地に住むために出ていった。かつては、おだやかで一様だった気温も、今は、急激に変化するようになった。恵み深い主は、激しい暑さと寒さから彼らを保護するために、皮衣をお与えになった。 PP 32.6

アダムとエバは、花がしぼみ、葉が落ちるという死の最初の徴候を見て、今日、人々が死者のために嘆く以上の悲しさを味わった。か弱い優美な草花が枯れるのは確かに悲しいことであった。しかし、立派な樹木が葉を散らすときに、生きているものは、みな、死ぬ運命にあるという厳粛な事実を、はっきりと人の心に思わせるのであった。 PP 32.7

エデンの園は、人間がその楽しい道から追われた後も長く地上に残っていた。その入り口は警護の天使が守っているだけで、堕落した人類は、罪の入らなかったときの住居を長い間かいま見ることを許されていた。ケルビムが守っていた楽園の門には、神の栄光があらわれていた。アダムとその子らは、ここに来て神を礼拝した。かつて、神の律法を犯したためにエデンから追放された彼らは、ここで神の律法に従う誓いを新たにした。悪のうしおが全地にみなぎり、人々の悪行の結果、世界が洪水によって滅ぼされることになったときに、エデンの園を造られたみ手は、それを地上から取り去られた。しかし万物が回復されて、「新しい天と新しい地」が出現するとき（黙示録 21：1）、それは、はじめのときよりももっと輝かしく飾られて回復されるのである。 PP 33.1

そのとき、神の戒めを守ってきたものは、いのちの木の下で、不死の生気を呼吸する。そして、罪のない世界の住民は、永遠にわたって、この喜ばしい楽園に、罪にのろわれなかった完全な神の創造のみわざの見本を見るとともに、人間が創造主の栄光に満ちた計画を成就していたならば、全世界がどのようになったかという見本を見るのである。 PP 33.2

第 5 章　人類救済の計画

人間の堕落は、全天を悲しみで満たした。神に造られた世界は、罪ののろいでそこなわれ、不幸と死に運命づけられたものの住むところとなった。律法を犯した者には、のがれの道がないように思われた。天使は、賛美の歌をやめた。天の宮廷には、罪がひき起こした破滅を嘆く声が満ちた。 PP 33.3

天の栄光に満ちた司令官であられる神のみ子は、堕落した人類を憐れまれた。彼の心は、失われた世界のわざわいをごらんになって、限りない憐れみの情を感じられた。しかし、神の愛は、すでに、人間を贖う計画をたてていた。破られた神の律法は、罪人の生命を要求した。人間に代わって、その要求に応じられるのは、全宇宙にただ 1 人しかいなかった。神の律法は、神ご自身と同様に神聖であるから、罪の贖いをすることができるのは、神と等しい方だけであった。罪を犯した人間を律法ののろいから贖い、再び、天と調和させることができるものは、キリストのほかになかった。キリストは、罪のとがと恥とをその身に負われるのであった。罪は天父とみ子とを離れさせるほど、聖い神にとっていまわしいものであった。キリストは、堕落した人類を救うために悲惨のどん底におりてこられるのであった。 PP 33.4

キリストは、罪人のために父の前に嘆願された。その間、天の万軍は、言葉で表現することのできない深い関心をもって、その結果を待ちうけた。神秘的な交わりは長く続いた。それは、堕落した人間の子らのための「平和の一致」であった（ゼカリヤ 6：13）。救いの計画は、地球が創造される前にたてられていた。キリストは「世のはじめからほふられた小羊」（黙示録 13：8／詳訳聖書）であった。しかし、宇宙の王であられる神にとっても、み子を、罪を犯した人類のために死にわたすことは苦闘であった。ところが「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3：16）。ああ、贖罪はなんと神秘なものであろうか。神を愛さなかった世界を、神はどんなに愛されたことであろう。「人知をはるかに越えた」その愛の深さをだれが知るこ

とができるだろうか。永遠の命を与えられた人々は、このはかり知れない愛の奥義を、永遠にわたってさぐり求めて、驚き賛美するのである。 PP 33.5

神は、キリストによってご自分をあらわし、「世をご自分に和解させ」ようとなさった（Ⅱコリント 5：19）。人間は罪を犯して堕落したために、自分の力では、清く恵み深いご性質の神と調和することができなくなった。しかし、キリストは、律法の罪の宣告から人間を贖ったあとで、上からの力を人間に与えて、人間の努力とそれを結合させることがおできになるのであっ た。こうして神に対する悔い改めとキリストを信じる信仰によって、アダムの堕落した子らは、もう一度「神の子」（Ⅰヨハネ 3：2）となることができるのであった。 PP 33.6

人類の救いが達成される唯一の計画は、その無限の犠牲に全天を包んだものであった。キリストが贖罪の計画を示されたとき、天使たちは喜ぶことができなかった。というのは、人間の救いのために、彼らの愛する司令官が言葉に表せない苦悩をなめなければならないことを知ったからである。キリストが、天の純潔と平和、歓喜と栄光、そして、永遠の命を去って地に下り、堕落した人々と接し、悲しみと恥と死を経験しなければならないことを語られたとき、天使たちは、悲しみと驚きをもって彼の言葉に耳を傾けた。キリストは、罪人の仲保者として、罪の罰をお受けになるのであった。それにもかかわらず、彼を神の子として受け入れるものはわずかであった。彼は、天の王としての高い地位を捨て、人間として地上にあらわれて、自分を低くし、人間が耐えなければならない悲しみと誘惑を、経験によってお知りになるのであった。これは、みな、彼が試みられている者を助けるために必要であった（ヘブル 2：18 参照）。キリストは、教師としての任務を終えたあとで、悪者どもの手に渡されて、彼らがサタンにそそのかされて行うあらゆる侮辱と苦痛を受けなければならなかった。彼はとがある罪人として天と地の間にあげられ、最も残酷な死をとげなければならなかった。彼は、天使たちが、見るにたえかねて、顔をかくすほどの恐ろしい苦痛を長時間味わわなければならなかった。彼は律法を犯した罪、すなわち全世界の罪の重荷を背負うとともに、魂の苦悩と父のみ顔が隠されることにも耐えなければならなかった。 PP 34.1

天使たちは、彼らの司令官の足下にひれ伏して、自分たちが人間のために犠牲になりたいと申し出た。しかし天使の命では、負債を支払うことはできなかった。ただ人間を創造された方だけが、人間を贖う力をもっておられた。しかし、天使たちにも、贖罪の計画のなかで果たすべき役割があった。キリストは、「御使たちよりも低い者とされ……死の苦しみ」にあわれるのであった（ヘブル 2：9）。彼が人性をおとりになれば、彼の力は天使の力とは同じでなくなる。それで、彼らはキリストに仕え、苦しみにあわれる彼を力づけ慰めるのであった。彼らは、また、救いを受け継ぐべき人々に奉仕するためにつかわされる仕える霊となるのである（ヘブル 1：14 参照）。彼らは、恵みにあずかる者たちを、悪天使の力とサタンが常に投げかける暗黒から守るものとなるのである。 PP 34.2

天使たちは、主の苦悩と屈辱を見るとき、悲しみと憤りに満たされて、殺人者たちから、主を救い出したいと願うのであったが、彼らの目撃することに介入して妨げてはならなかった。キリストが悪人の侮辱と虐待を受けられることは、贖罪の計画の一部であった。彼は、人間の贖い主となられたとき、こうしたすべてのことに同意されたのである。 PP 34.3

キリストは、ご自分の死によって、多くの者を贖い、死の力を持つ者を滅ぼすことを、天使たちに保証なさった。彼は、人間が罪のために失った王国を回復し、そして、贖われた人々は、彼とともにその王国を継ぎ、永遠にそのなかに住む。罪と罪人は消し去られて、二度と天と地の平和を乱すことはない。キリストは、父が承認なさった計画に天使軍が同意することを命じ、彼の死によって、堕落した人間が神と和解することができることを喜ぶようにお命じになった。 PP 34.4

そのとき、喜び――口では表現することのできない喜びが天に満ちた。贖われた世界の栄光と幸福は、いのちの君の苦痛と犠牲をはるかに越えたものであった。「いと高きところでは、神に栄光かあるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」（ルカ 2：14）と、ベツレヘムの丘で鳴り響いたあの歌の最初の調べが、天の宮廷に反響した。新しい創造に歓喜したよりも、さらに深い喜びをもって、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」（ヨブ 38：7）。 PP 34.5

贖罪に関する最初の予告が人間に与えられたのは、園でサタンに宣告が下されたときであった。主は言われる。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおま えのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」（創世記 3：15）。アダムとエバが聞いているところで語られたこの宣告は、彼らにとっては、約束であった。そこには、人間とサタンとの戦いが予告されていたが、この大敵の力がついに砕かれることが宣告されていた。アダムとエバは、正しい審判者の前に罪人として立ち、犯した罪の宣告を待っていた。しかし、彼らは、自分たちの分である労苦と悲しみの一生、また、ちりに帰らなければならないという宣告を聞く前に、希望を与えずにはおかない言葉を聞いた。彼らは、大いなる敵の力に苦しまなければならなかったが、最後の勝利を待望することができたのである。 PP 34.6

サタンが、彼と女との間と、彼のすえと女のすえとの間に恨みがおかれることを聞いたとき、彼の人間の性質を堕落させる働きが妨げられ、人間は、何かの方法によって彼の力に抵抗することができるようになることを知った。しかし、救いの計画がさらに十分に示されたとき、サタンは、人間を堕落させたために、神のみ子をその高い地位からひきおろすことができることを彼の天使たちと共に喜んだ。彼はこれまでの彼の地上での計画は成功であったと言った。そして、キリストが、人性をおとりになる場合には、彼をも打ち負かして、堕落した人類の贖いを妨げることができると宣言した。 PP 35.1

天使たちは、われわれの祖先に、人間の救いのために考え出された計画をさらにくわしく教えた。アダムとエバは、大きな罪を犯したにもかかわらず、サタンのなすがままに放任されてはいないという保証が与えられた。神のみ子が、彼らの罪を贖うために、ご自身のいのちを提供されたのである。彼らに恵みの期間が与えられ、悔い改めとキリストを信じる信仰とによって、彼らはふたたび神の子となることができるのであった。 PP 35.2

アダムとエバの罪が要求した犠牲は、神の律法の神聖な性質を、彼らに明らかに示した。そして、彼らは、これまで感じたこともないほどに、罪のとがと罪の悲惨な結果とを知った。彼らは、後悔と苦悶のうちに、その刑罰が彼の上に負わせられないように

嘆願した。彼の愛こそ彼らのすべての喜びの源であった。むしろ、その罰か彼らと彼らの子孫の上にくだることを願った。 PP 35.3

彼らは、主の律法が地上と同じく天上においても神の政府の基礎であるから、律法を犯したことに対しては、天使のいのちでさえ、犠牲として受け入れることはできないことを聞かされた。人間の堕落した状態に適合させるために、その戒めの 1 つでも、除いたり変更したりすることはできなかった。しかし、人間を創造なさった神のみ子は、人間を贖うことがおできになるのであった。アダムの罪が不幸と死をもたらしたように、キリストの犠牲は、命と不死をもたらすのであった。 PP 35.4

罪のために、人間だけでなく、地も悪者の支配下に陥った。そして、地も贖罪の計画によって、同復されなければならなかった。アダムは、創造されたときに、地の統治者としておかれた。ところが、誘惑に負けたためにサタンの支配下におかれた。「おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである」（Ⅱペテロ 2：19）。人間がサタンの捕虜になったとき、彼の統治権は、征服者の手に移った。こうして、サタンは「この世の神」（Ⅱコリント 4：4）となった。彼は、初めアダムに与えられた地の統治権を彼から奪った。しかし、キリストはご自分の犠牲によって、罪の罰を払い、人間を贖うばかりでなくて、人間が失った統治権をも回復してくださるのであった。第一のアダムによって失われたものはぜんぶ、第二のアダムによって回復されるのである。預言者はこう言っている。「羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる」（ミカ 4：8）。使徒パウロも、「やがて神につける者が全くあがなわれ」る時を示している（エペソ 1：14）。神は、きよい幸福な人々の住居として、地を創造された。主は、「地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた」（イザヤ 45：18）。地が神の力によって新しくされ、罪と悲しみから解放されて、贖われた者の永遠の住居となるときに、この目的は達成されるのである。「正しい者は国を継ぎ、とこしえ にその中に住むことができる」（詩篇 37：29）。「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝」する（黙示録 22：3）。 PP 35.5

罪を犯す前のアダムは、創造主との隔てのない交わりを楽しんでいた。しかし、罪が神と人間との間を隔ててしまった。そして、キリストの贖いだけが、この深淵に橋をかけ、天から地に祝福と救いがもたらされることを可能にした。人間は、創造主に直接近づくことはできなかったが、神は、キリストと天使たちによって人間と交わられるのであった。 PP 36.1

こうして、エデンで神の宣告が与えられたときから、洪水のときまでと、そして、神のみ子の初臨までの歴史上の重大な出来事がアダムに示された。キリストの犠牲は全世界を救う価値が十分あるにもかかわらず、多くの者は罪の生活を選んで、悔い改めず、従わないことを彼は示された。犯罪は、時代が進むにつれて増加し、罪ののろいは、人類と獣類の上に、ますます重くのしかかる。人間の寿命は、人間自身の罪の生活のために短縮する。人間の背丈は低くなり、その耐久力は減少し、道徳的、知的能力は衰えて、ついに世界はあらゆる不幸で満たされる。人間は、食欲と情欲をほしいままにすることによって、贖罪の計画の大真理を理解することができなくなる。しかし、キリストは、天を去られた目的に忠実に従って、人間をみこころにとめ、彼らの弱点と欠点を彼のうちに隠すように、いまなお招いておられる。彼は信仰をもって、彼に来るすべての者の必要を満たされる。こうして、悪がはびこるなかにあって、神の知識を保ち、悪に汚されない者が、わずかながら常に存在するのであった。 PP 36.2

犠牲の供え物は、神が人間のためにお定めになったもので、罪の悔い改めと約束の贖い主への信仰の告白を、いつまでも思い起こさせるものであった。それは、死をもたらすものは罪であるという厳粛な事実を、堕落した人類に印象づけるためであった。アダムにとって、最初の犠牲を捧げることは、非常に心の痛む儀式であった。彼は、神だけが与えることのできる生命を奪うために、手を振り上げなければならなかった。彼が死を見たのはこれが最初であった。もし彼か神に服従していたならば、人間も獣も死ぬことはなかったことを悟った。彼が罪のない犠牲を殺したとき、自分の罪のために、傷のない神の小羊の血を流さなければならないことを考えて、ふるえおののいた。神の愛するみ子の死によらなければ、償うことのできない自分の罪の大きさを、この光景は、さらに深くなまなましく彼に示した。罪を犯した者を救うために、そのような犠牲をお

与えになる無限の恵みに彼は驚いた。暗く恐ろしい未来に希望の星が輝いて、それが、全く絶望的になるのを防いだ。 PP 36.3

しかし、贖罪の計画は、人類の救済より、もっと広く深い目的をもっていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなかった。この小さな世界の住民が、神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなかった。それは、宇宙の前で、神の性質を擁護するためであった。救い主は、十字架におつきになる直前に、その大犠牲が、人間だけでなくて、他の諸世界に住む者たちに与える影響を予見して、こう言われた。「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」（ヨハネ 12：31、32）。人間の救いのためにキリストが死なれた行為は、人間が天にはいる道を開いたばかりでなく、神とみ子が、サタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは、神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった。 PP 36.4

大争闘は、最初から神の律法に関して戦われたのである。サタンは、神は不正で、神の律法は不完全であるから、宇宙の幸福のためにそれを変更することが必要であることを証明しようとしてきた。彼は、律法を攻撃してその創始者の権威をくつがえそうとしていた。この争闘において、神の律法が不完全なもので、変更が必要であるか、それとも、完全で不変の ものであるかが示されるのであった。 PP 36.5

サタンは、天を追放されたときに、地球を彼の王国にしようと決意した。彼は、アダムとエバを誘惑して勝利したときに、この世界を手中に収めたと思った。「なぜなら、彼らは、わたしを支配者に選んだからだ」と彼は言った。彼は、罪人に赦しが与えられることは不可能であるから、堕落した人類は、当然自分の支配下におかれ、この世界は自分のものだと公言した。しかし、神は、最愛のみ子、すなわち、ご自分と 1 つである方を与えて、罪の刑罰を負わせられたのである。こうして、彼らが回復されて、神の恵みに浴し、エデンの家庭に帰ることができる道が備えられた。キリストは、人間を贖い、この世界をサタンの手から救い出そうとされた。天で起こった大争闘は、サタンが

自分のものと主張したこの世界そのものを戦場として、勝敗を決することになった。 PP 37.1

キリストが堕落した人類を救うために、ご自分を低くされたことは、全宇宙の驚嘆の的であった。星々や諸世界をめぐってすべてを指揮された方、その摂理によって、広大な造られたもののなかのあらゆる種類のものの必要を満たされた方が、彼の栄光を捨てて、人間の性質をおとりになることは、他世界の罪のない住民が知ることを望んだ神秘であった。キリストが人間の形をとってわれわれの世界に来られたとき、すべてのものは、非常な熱心さをもって、彼が 1 歩 1 歩と、かいばおけの中からカルバリーへと、血に染まった道をたどっていかれるのをながめた。天は、キリストが受けられた侮辱とあざけりに注目した。そして、それが、サタンの扇動によるものであることを知った。彼らは、反対勢力の活動が盛んになるのを見た。サタンが、暗黒と悲しみと苦しみを、常に人類に投げかけようとするのを、キリストはとめようとされる。彼らは、光とやみの戦いが、ますます激しくなるのを見た。そして、キリストが十字架上で、苦悶のうちに、「すべてが終った」と叫んで息をひきとられたとき、勝利の叫びは、すべての世界と天そのものになり響いた（ヨハネ 19：30）。この世界で長い間継続された大きな戦いは、ここに勝敗が決し、キリストが勝利者であられた。彼の死は、父とみ子とが人間に対して十分な愛をもち、自己否定と犠牲の精神をあらわされるかどうかという疑問に答えた。サタンは、偽り者、殺人者の本性を暴露した。もし彼に天の住民を支配させるならば、彼の権力下にあった人々を支配したのと同じ精神で、天の住民たちをも支配するにちがいないことが明らかになった。神に忠実な宇宙は、声をそろえて神の統治をたたえた。 PP 37.2

もし律法を変えることができたならば、キリストの犠牲はなくても、人間は救われたことであろう。しかし、堕落した人類のために、キリストがいのちをささげる必要があったという事実は、罪人が神の律法の要求から免除されることはないということを証明している。それは、罪の報酬が死であることを実証した。キリストが死なれたときに、サタンの滅びることが決定した。しかし、多くの者が主張するように、もし律法が十字架によって廃されたのであれば、神の愛するみ子の苦悩と死とは、サタンが要求するも

のを彼に与えるためだけのものとなってしまう。そうであれば、悪の君は勝利をおさめて、神の政府に対する彼の攻撃は是認されたことであろう。キリストが人間の罪の刑罰を負われた事実そのものが、すべての造られた者に対して、律法が不変であること、神は正しく、憐れみ深く、自己を否定する方であること、そして、神の政府の統治には、無限の公平と憐れみが結合していることを大いに証明してあまりあるのである。 PP 37.3

第 6 章　明暗を分けたカインとアベル

本章は、創世記 4：1～15 に基づく PP 37.4

アダムのむすこたちのカインとアベルは、性格が著しく異なっていた。アベルは、神に忠誠を尽くしていた。彼は、堕落した人類を扱われる神の処置に義と恵みを認め、感謝して贖罪の希望を受け入れた。し かし、カインは反逆の精神をいだき、アダムの罪のために、神が地と人類をのろわれたことに対してつぶやいた。彼は、サタンが堕落したのと同じ方向に自分の心がむかうままにして自己称揚にふけり、神の義と権威とを疑った。 PP 37.5

この兄弟たちは、以前にアダムが試みられたように、神の言葉を信じて、従うかどうかが試みられた。彼らは人間の救いのために講じられた方法を知り、神が定められた供え物の制度を理解した。彼らは、これらの供え物を捧げることによって、これらが象徴していた救い主への信仰を表明しなければならず、また、それとともに赦しを受けるためには、救い主だけに依存していることを認めなければならないことを知っていた。また、彼らは、こうして贖罪の計画に調和すれば、神のみこころに服従する証拠を示していることになることも知っていた。血を流すことがなければ、罪の赦しはあり得なかった。そして、彼らは、群れの中のういごを犠牲に捧げて、約束の贖罪としてのキリストの血への信仰をあらわさなければならなかった。そのほか、地の初穂が、感謝の捧げ物として主の前に供えられなければならなかった。 PP 38.1

2 人の兄弟は、同じように祭壇を築き、それぞれの供え物を持ってきた。アベルは、主の命令に従って群れの中から犠牲を捧げた。「主はアベルとその供え物とを顧みられた」（創世記 4：4）。天から火が下って、犠牲を焼き尽くした。しかし、カインは、主の直接で明白な命令を無視して、地の産物だけを捧げた。それを受け入れたことを示すしるしは、天からなかった。アベルは、神がお命じになった方法で神に近づくように兄に嘆願したが、彼の願いは、ただカインをさらにかたくなにするばかりであった。彼

は長子であったから、弟の忠告を受ける必要を認めず、弟の勧告を軽蔑した。 PP 38.2

カインは約束の犠牲について、また犠牲の供え物の必要について、心中に不平と不信をいだきながら神の前に来た。彼の供え物は、罪の悔い改めの表明ではなかった。彼は、今日の多くの人々と同様に、神に指示された通りの計画に従い、約束の救い主の贖罪に全く自分の救いをゆだねることは弱さを承認することであると思った。彼は、自己信頼の道を選んだ。彼は自分の功績に頼った。彼は小羊を持ってきて、その血を供え物にまぜることをしないで、彼の実、彼の労働の産物を捧げた。彼は自分から神に捧げる物として供え物を捧げ、それによって、神に喜ばれたいと思った。カインは、神に従って祭壇を築き、犠牲をたずさえてはきたが、彼は部分的に従っただけであった。彼は最も重大な部分、すなわち、救い主の必要を認めることを省略していた。 PP 38.3

この兄弟たちは、その出生と宗教教育の点では平等であった。2 人とも罪人で、神を敬い礼拝しなければならないことを認めていた。外部から見れば、彼らの宗教は、ある点までは同じであったが、そのさきの両者の相違は大きかった。 PP 38.4

「信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ」た（ヘブル 11：4）。アベルは、贖罪の大原則を理解した。彼は自分が罪人で、彼の魂と神との間の交わりを、罪とその刑罰である死とが妨げているのを知った。彼は、ほふられた犠牲、すなわち、犠牲にされた生命をたずさえてきて、彼が犯した律法の要求を認めた。彼は、流された血によって、来たるべき犠牲、カルバリーの十字架上のキリストの死を見た。そして、彼は、そこでなされる贖罪を信じて、自分が義とされ、供え物が受け入れられた証拠が与えられた。 PP 38.5

カインはアベルと同様に、こうした真理を学んで受け入れる機会があった。彼は、独断的決定の犠牲者ではなかった。兄弟のうちの 1 人が受け入れられて、他の 1 人が退けられるように神は定められたのではなかった。アベルは、信仰と従順を選び、カインは、不信と反逆を選んだ。万事はこの点にかかっていた。 PP 38.6

カインとアベルは、終末に至るまで世界に存在する 2 種類の人々を代表している。一方は罪のために定められた犠牲を受け入れるが、他方は、あえて自分の功績にたよろ

うとする。彼らの犠牲は、神の仲保のいさおしによらないものであって、神の恵みにあずかることはできない。われわれの罪は、ただイエスの 功績だけによって赦される。キリストの血の必要を感じない者、神の恵みがほしくても、自分の行いによって神に受け入れられると思っている者は、カインと同じあやまちを犯している。彼らは、清めの血を受けなければ、罪の宣告下にある。罪の奴隷から解放される道はほかに備えられていない。 PP 38.7

カインの模範に従う礼拝者は、世界の大半をはるかに越している。というのは、ほとんどすべての偽りの宗教は、人間自身の努力によって救いを得ることができるという同じ原則に基づいているからである。人類は贖罪ではなく、文明の発達、すなわち、洗練と向上と更生とが必要であるという人もある。カインが、犠牲の血をぬきにした供え物によって、神の恵みを得ようとしたように、これらの人々も贖罪を度外視して、神の標準にまで人類を高めようとするのである。カインの生涯は、どのような結末に至るかを示している。また、キリストを離れた人がどうなるかを示している。人類は、自分を再生させる力を持ち合わせない。それは、神に向かって向上するのでなくて、サタンのほうへ堕落する傾向がある。キリストだけがわれわれの希望である。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝４：12）。 PP 39.1

キリストに全的によりたのむ真の信仰は、神のすべての要求に従うこととなってあらわれる。アダムの時代から現代まで、大争闘は神の律法に従うことに関してであった。神の戒めのどれかを無視していながら、神の恵みにあずかる権利を主張した人々が各時代にあった。しかし、聖書は、行いによって「信仰が全う」されることと、服従の行為がなければ、信仰は「死んだ」ものであることを明らかにしている（ヤコブ ２：22、17）。神を知っていると言いながら、「その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない」（Ｉヨハネ２：4）。 PP 39.2

カインは、自分の供え物が受け入れられなかったのを見て、主とアベルに怒りを抱いた。カインは、神がお定めになった犠牲のかわりに、人間が捧げた物をお受けにならなかったことを怒った。また、弟が、兄とともに神に反抗せず、神に服従するほうを選

んだことをカインは怒った。カインが神の命令を無視したにもかかわらず、神は、彼をお見捨てにならなかった。神は、この無分別な男を説得するためにおりてこられた。そして、主はカインに言われた。「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか」。天使によって神の警告は伝えられたのである。「正しい事をしているのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています」（創世記 4：6、7）。それは、カイン自身の選択にかかっていた。もし彼が約束の救い主の功績にたより、神の要求に従ったならば、彼は神の恵みを受けたことであろう。しかし、もし彼が不信と罪を改めようとしないならば、主が彼を受け入れられなくても不平を言う理由はないのであった。 PP 39.3

しかしカインは自分の罪を認めず、かえって神の不正をつぶやき、アベルをねたみ、憎んだのである。彼は、怒って弟を非難し、自分たちに対する神の処置について弟と論争を始めようとした。アベルは、柔和に、しかも恐れることなく、断固として神の公平と恵みを弁護した。彼は、カインの誤りを示し、彼がまちがっていることを納得させようとした。 PP 39.4

アベルは、両親が直ちに死の刑罰を受けるはずであったのに、彼らをお助けになった神のあわれみを指摘して、神が彼らを愛されたのでなければ、汚れのないきよいみ子を、彼らが当然受けるべき刑罰を受けるためにお与えになることはないと力説した。こうしたことは、みな、カインを激怒させた。理性と良心は、アベルが正しいことを認めるのであるが、これまで従順に彼の勧告に従った弟が、今度は彼にさからい、彼の反逆に同調しないのを怒ったのである。彼は、激しい怒りにもえて弟を殺してしまった。 PP 39.5

カインは弟を憎んで殺した。アベルが悪事を行ったからではなくて、「彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである」（Ⅰヨハネ 3：12）。そのように、どの時代にあっても、悪人は自分より善良な者を憎んできた。アベルの従順とゆるがない信仰 の生活は、カインにとって絶え間ない譴責であった。「悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない」（ヨハネ 3：20）。神の忠実なしもべたちの品性に反映する天の光が明るけれ

ば明るいほど、不信心な者の罪が明らかに示される。そして、悪人たちは何とかして自分たちの平和を乱す者を滅ぼそうとするのである。 PP 39.6

アベルの殺害は、神が、へびと女のすえとの間、サタンおよびサタンの配下と、キリストおよびキリストの従者たちとの間に存在するといわれた敵意の最初の例であった。サタンは人間を罪に陥れて人類を支配することができたが、キリストは、彼らにサタンの束縛からのがれる力をお与えになる。神の小羊を信じて、人が罪に仕えることを拒否するときに、いつでもサタンの怒りが燃え立つ。アベルの清い生涯は、人間が神の律法を守ることが不可能だというサタンの主張に対する反ばくであった。悪魔の霊に動かされたカインは、アベルを自分の思いのままにできないことがわかると、激怒して彼の生命を奪った。神の律法の正しさを擁護して立つ者があると、どこでも彼らに対して同じ精神があらわされる。これがすべての時代に火刑柱をたてた精神であり、キリストの弟子たちを焼くために、まきに火を点じた精神である。イエスに従う者に加えられた残酷な仕打ちは、サタンとその軍勢の扇動によるものであった。なぜなら、彼らをしいて従わせることができなかったからである。それは敗北した敵の激怒である。イエスの殉教者は、すべて勝利者として死んだ。預言者は言っている。「兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼（「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ」る）にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった」（黙示録 12：11、9）。 PP 40.1

殺人者カインは、間もなく彼の犯罪の責任を問われた。「主はカインに言われた、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』」（創世記 4：9）。カインは、神が常に臨在なさることと、神の偉大さと全知であられることとを忘れるほど深く罪に沈んだ。それで彼は、自分の罪を隠すためにうそをついた。 PP 40.2

主は再びカインに言われた。「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます」（創世記 4：10）。神は、カインに罪を告白する機会をお与えになった。カインは深く考える時が与えられた。彼は、自分の行為とそれを隠すために言ったうそが罪深いものであることを知った。しかし彼は、なおも反逆心を

捨てなかった。それで宣告はこれ以上延ばすことはできなかった。今まで嘆願と警告を発していた神のみ声は、恐ろしい宣告をするのである。「今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」（同４：11、12）。 PP 40.3

カインの犯罪は、死の宣告に値したが、あわれみ深い創造主は彼の生命を助け、悔い改める機会をお与えになった。しかし、カインは心をかたくなにし、神の権威に対する反逆を扇動することに専念した生活を送り、大胆不敵で放縦な罪人たちの先祖になったサタンに誘惑された背信者カインは、他の人々を誘惑するものとなった。彼の生活とその感化は人々を堕落させ、ついに地上は破滅にひんするまでに腐敗して悪に満ちた。 PP 40.4

神は、最初の殺人者の生命を助けることによって、大争闘に関する教訓を全宇宙にお示しになった。カインとその子孫の暗い歴史は、罪人が永遠に生きて神に反逆しつづけたならば、どういうことになるかを示した。神の寛容は、ただ悪者をますます大胆不敵にして、罪を犯させるだけであった。カインに宣告が下されてから 1500 年の後の世界中に満ちた罪と腐敗は、彼の感化と実例の結実であった。神の律法に違反したために堕落した人類に与えられた死の宣告は、正当で恵み深いものであることが明らかにされた。人間は、罪の生活を長く続ければ続けるほど、放縦になっていく。悪をほしいままにする生涯を短縮し、 反逆のために心をかたくした者らが、世界に悪影響を及ぼさないようにする神の宣告は、のろいではなくて、むしろ祝福であった。 PP 40.5

サタンは、神の性質と統治とを偽って伝えるために、激しい勢いと数多くの欺瞞によってたえず働いている。彼は、広範囲に及ぶ組織的計画と驚くべき力をもって、世界の住民をだましておこうとしている。永遠で全知であられる神は、初めから終わりを見通される。悪を処理なさる神の計画は、遠大で包括的である。神の目的は、反逆をしずめることだけでなくて、全宇宙に反逆の性質を実証することであった。神の公平とあわれみの両方を示す神の計画があらわされ、悪の処置に関する神の知恵と義は完全に擁護された。 PP 41.1

他世界の清い住民たちは、地上におこる出来事を、深い関心をもって見守った。洪水前の世界の状態は、ルシファーがキリストの権威に逆らい、神の律法を放棄して、天で樹立しようとした統治がどんなものであるかを彼らに実証した。洪水前の世界の横暴な罪人は、サタンの支配する従者であることを彼らは見た。人の心に思いはかることはいつも悪いことばかりであった（創世記 6：5 参照）。あらゆる感情、衝動、思いはかることが、純潔、平和、愛という神の原則とは相入れないものであった。それは、神の被造物から、神の清い律法の抑制を除去しようとするサタンの策略のもたらした恐ろしい堕落の実例であった。 PP 41.2

神は大争闘の進行に従って明らかにされる事実によって、これまでサタンとサタンに欺かれたすべての者が偽り伝えてきた、神の統治の原則を実証なさるのである。全世界は、ついに神の公義を認めるのである。しかし、それは反逆者たちを救うにはすでに時はおそすぎる。 PP 41.3

神の大きな計画が 1 歩 1 歩完成に近づくに従って、全宇宙は神に賛同し、是認するのである。神が反逆を最終的に根絶なさるときにも、全宇宙はそれを納得する。神の戒めを捨てたすべての者は、キリストに敵対するサタンの側についたことを知る。この世の君が裁かれるとき、彼と結合したすべての者は、彼と運命を共にする。そのとき、全宇宙は、その宣告の証人として「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と言うのである（黙示録 15：3）。 PP 41.4

第 7 章　セツとエノクの時代

本章は、創世記 4：25～6：2 に基づく PP 41.5

神の約束の相続者、霊的長子権の継承者として、アダムにもうひとりのむすこが与えられた。このむすこにつけられたセツという名は、「定められた者」とか「償い」とかいう意味をもっていた。母親は、「カインがアベルを殺したので、神はアベルの代りに、ひとりの子をわたしに授けられました」と言った（創世記 4：25）。セツは、カインやアベルよりは、はるかに背が高くて気品を備え、他のむすこたちよりアダムによく似ていた。彼はりっぱな人物で、アベルの足跡に従った。しかし、彼は、生来の美点をカインよりも多く受け継いだのではなかった。アダムの創造について、「神は自分のかたちに人を創造された」と言われている（同 1：27）。しかし、人間は堕落後、「自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生んだ」のである。アダムは、神のかたちにかたどり、罪のないものに創造されたが、カインと同様に、セツも両親の堕落した性質を受け継いだ。しかし彼は、贖い主に関する知識と、義の教訓をも受けた。彼は、神の恵みによって、神に仕え、神を尊んだ。彼は罪深い人々が悔い改めて創造主をあがめ、服従するようになるために努力した。これは、アベルも生きていたなら、したと思われることであった。 PP 41.6

「セツにもまた男の子が生れた。彼はその名をエノスと名づけた。この時、人々は主の名を呼び始めた」（同 4：26）。それまでも忠実な人々は神を礼拝していた。しかし、人間が増加するに従って、2 種類 の人々の差はますます明らかになった。一方は神への忠誠を公に告白していたが、他力は軽蔑と不服従をあらわした。 PP 41.7

われわれの祖先は、堕落する以前からエデンで制定された安息日を守っていた。そして、楽園からの追放後も安息日を守り続けていた。彼らは、不従順の苦い結果を味わっていたので、神の律法をふみにじる者が、早晩、学ばねばならないこと、すなわち、神の戒めは、清くて不変のものであることと、違反に対しては必ず罰が加えられることを学んでいた。安息日は、神に忠誠を保っていたすべてのアダムの子孫によってあがめ

られていた。しかし、カインとその子孫は、主の明白な命令にもかかわらず、自分かってなときに働いたり休んだりして、神が休まれた日を重んじなかった。 PP 42.1

カインは、神ののろいを受けて父の家から離れた。彼はまず、土を耕す仕事を選んだ。そして、その次に、町を築き、彼の長男の名にちなんで町に名をつけた。彼は、エデンの回復の約束をなげうち、罪ののろいのもとにある地上で、財産や快楽を求めるために主の前を去っていった。こうして、彼は、この世の神を礼拝する多くの人々の先頭に立ったのである。彼の子孫は、世俗的、物質的発展の面だけでは、すぐれた力量をあらわした。しかし、彼らは神のことには無関心で、人類に対する神の計画にはそむいていた。カインが、まず殺人の罪を犯したのに続いて、彼から 5 代目のレメクは、一夫多妻の罪を加えた。彼は高慢で反抗的であった。彼が神を認めたのは、カインについて言われた復讐の言葉から、自分の身の安全の保証を得ようとしたときだけであった。アベルは羊飼いの生活を送って、天幕や仮り住まいに住んでいた。そして、セツの子孫も、自分たちを、「地上では旅人であり寄留者」であるとみなして、「もっと良い、天にあるふるさと」を求めながら、同じ道を歩んだ（ヘブル 11：13、16）。 PP 42.2

しばらくの間、この 2 種類の人々は離れていた。カインの子孫は最初住みついた所から広がっていって、セツの子孫が住んでいた平原や谷間にまでちらばってきた。そして、後者は、彼らの悪影響を避けて山にのがれ、そこに住んだ。こうして離れているかぎり、彼らは神の礼拝の純粋性を保っていた。しかし、時の経過と共に彼らは徐々に谷間の住民と交わるようになった。この交際は最悪の結果をもたらした。「神の子たちは人の娘たちの美しいのを見」た（創世記 6：2）。カインの子孫の娘たちの美に魅せられたセツの子孫は、彼らと雑婚して主のみ心を痛めた。神の礼拝者の多くは、常にさらされている誘惑に負けて罪に陥り、彼ら独特の清い性質を失ってしまった。彼らは堕落した者と交わって、精神においても行為においても似てきた。彼らは、戒めの第 7 条の拘束を無視し、「自分の好む者を妻にめとった」（同 6：2）。セツの子孫は、「カインの道」に歩み、世俗の繁栄と快楽に没頭し、主の戒めをないがしろにした（ユダ 11）。人々は「神を認めることを正しい」とせず「その思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった」。それゆえに、「神は彼らを正しからぬ思いにわた」されたので

ある（ローマ 1：21、28）。罪は、恐ろしい皮膚病のように地にはびこった。 PP 42.3

アダムは 1000 年近くも人々の間に生きて、罪の結果を目撃した。彼は、悪の潮流をせきとめようと忠実に努力した。彼は、主の道に従って、彼の子孫を教えるように命じられていた。それで彼は、神から受けた啓示を注意深く心にたくわえて、それを世代から世代へくり返し伝えた。彼は、楽園の清く幸福な状態を描写し、彼の堕落した経過をくり返し、苦難によって神の律法に厳格に服従する必要を神から教えられたことを告げ、そして、彼らの救いのために設けられたあわれみ深い用意について、9 代におよぶ子々孫々に説明した。しかし、彼の言葉に耳をかしたものはわずかであった。彼はしばしば、このようなわざわいを後世にもたらした罪を問われて、子孫から激しく責められるのであった。 PP 42.4

アダムの生涯は、悲しみと屈辱と悔い改めの一生であった。彼はエデンを去ったときに、自分が死ななければならないことを考えて恐怖感におそわれた。長男のカインが弟を殺したとき、人類も死ぬべき運 命にあることを彼は初めて知った。自分の罪に対する痛烈な後悔の念に満たされ、アベルが死に、カインが捨てられて、2 人を一時に失ったアダムは苦悩にうちのめされた。彼は、世がますます堕落するのを見た。そして、それが原因で世界は洪水によって滅ぼされるようになるのであった。そして、アダムは、創造主から受けた死の宣告を、最初はひどいもののように感じたが、1000 年近くも罪の結果を見てきた後では、苦悩と悲嘆の生涯を終わらせてくださるのは、神のあわれみであることを感じた。 PP 42.5

洪水前の世界は、邪悪なものではあったが、一般に考えられているような無知と野蛮な時代ではなかった。人々は、道徳的にも知的にも高い標準に達する機会が与えられていた。彼らは、偉大な体力と知力とを持ち、宗教と科学の知識を得るにはこの上なく好都合であった。彼らは長命であったから、その頭脳は晩成であったと考えるのは誤りである。彼らの知的能力は早くから発達し、神をおそれ、神のみこころに一致した生活を送った者は、その生涯を通じて知識と知恵が増加した。もし現代の著名な学者たちと洪水前の同じ年齢の人々とを比較してみれば、現代の学者たちは、知力においても体力

においてもはるかに劣ってみえることであろう。人間の年齢が縮まり、体力が衰えるに従ってその知力も減少した。今日、人々は、20 年から 50 年の間研究に没頭し、世界はその人々の業績に感嘆する。しかし、これらの業績は、幾世紀にわたって、知力と体力が発達した洪水前の人々の場合と比較するならば、なんと限られたものであることであろう。 PP 43.1

確かに現代人は、先人の業績の恩恵に浴している。工夫、研究、著述などに従事したすぐれた頭脳の持ち主は彼らの作品を後世に残した。しかし、この点と単なる人間的知識だけのことにおいても、古代の人々はなんと有利な立場にあったことであろう。 PP 43.2

神のかたちにかたどって創造され、創造主ご自身が「良し」と宣言された人間、すなわち、物質界のあらゆる知識を神から教えられた人が、数百年もの間、彼らとともに生存していたのである。 PP 43.3

アダムは創造主から創造の歴史を学んだ。彼は、900 年間の出来事を目撃した。そして、彼は、その知識を子孫に伝えた。洪水前の人々は、書物や記録などはもっていなかった。しかし、彼らは驚くべき体力と知力とを持っていたので記憶力は強かった。そして、教えられたことをよく理解して、それを自分の子孫にまちがいなく伝えることができた。そして、数百年にわたって、7 代の人々が同時に生存していたので、共に意見を交換して、それぞれがすべての者の知識や経験によって、益を受ける機会に恵まれていた。 PP 43.4

神のみわざを通して神を知ることが、この時代の人々ほどに恵まれた立場におかれたものはなかった。その時代は、宗教的暗黒の時代どころか、大いなる光明の時代であった。全世界は、アダムから教えを受ける機会に恵まれていて、キリストと天使が主をおそれるものの教師であった。また、数百年の間、人間のなかにとどまっていた神の園は、真理に関する無言の証人であった。ケルビムに守護された楽園の入り口では、神の栄光があらわされ、ここに最初の礼拝者たちが集まった。彼らは、ここで祭壇を築き、捧げ物を供えた。捧げ物をたずさえて来たカインとアベルに、神が親しく交わられたのもここであった。 PP 43.5

エデンが眼前に存在し、見張りの天使がその入り口を守っているうちは、懐疑論者もその存在を否定することはできなかった。創造の順序、楽園の目的、そして、園のなかにあって、人間の運命に深い関係のあった 2 本の樹木にまつわる出来事などは、疑う余地のない事実であった。アダムが彼らのうちにいた間は、神の存在とその至上権、神の律法の義務などは、容易に疑い得ない真理であった。 PP 43.6

罪悪がはびこってはいたが、神との交わりによって、高められ、気高くされ、天の交わりのような生活を送った聖徒の群れが常にあった。彼らは著しい知能と、すぐれた学識の持ち主であった。彼らには、正しい品性を築き、信心について、その時代の人々だけでなくて、後世の人々にも教えるという偉大で清い使命があった。聖書には、最も著名な人々のなかのごくわずかな人しか記録されていない。しかし、神は、各 時代を通じて、忠実な証人、誠実な礼拝者をもっておられた。 PP 43.7

エノクは、彼か 65 歳になってむすこを生んだとしるされている。彼は、その後 300 年の間神と共に歩んだ。エノクは、そうした初期の時代に、神を愛し、畏れ、神の戒めを守った。彼は、聖徒たちのひとりで、真の信仰の擁護者であり、約束のすえの先祖であった。彼は、アダムの口から堕落の暗い物語や、約束に示された神の恵みの喜ばしい物語を教えられて、来たるべき贖い主によりたのんだ。しかし、エノクは、彼の長男の誕生後、さらに高い経験に達し、神とさらに密接な関係に入っていった。彼は神の子として、自分に与えられた義務と責任を、もっと深く自覚した。子供が父を愛し、父の保護に単純に信頼するのを見たとき、そして、長男に対して深い愛情を自分の心に感じたときに、彼は、そのみ子を人間に賜わった驚くべき神の愛と、神の子らが天の父に対して持たなければならない信頼に関して、尊い教訓を学んだのである。キリストによって示された測り知れない無限の神の愛は、彼の昼夜の瞑想の課題になった。彼は、自分の力の限りを尽くして、いっしょに住んでいる人々にその愛を示そうとした。 PP 44.1

エノクが神と共に歩んだのは、慌惚状態や幻を見るようなものではなくて、日常のすべての務めを果たすことにおいてであった。彼は、自分を世から全く遮断して、隠者にならなかった。というのは、彼は、この世で神のためにしなければならない仕事があ

ったからである。彼は、家庭においても、人々との交際においても、夫、父、友人、市民として、常に堅く立ってゆるがない主のしもべであった。 PP 44.2

彼の心は、神のみ旨に一致していた。「ふたりの者がもし約束しなかったら、一緒に歩くだろうか」（アモス 3：3）。この清い歩みは 300 年続いた。もしクリスチャンが生命のはかなさを知り、または、キリストの再臨がまさに起ころうとしていることを知ったならば、ますます熱心になって献身しようとしない者はあるまい。しかし、エノクの信仰は、幾世紀の年月を経るにつれて強くなり、その愛はいっそう熱烈になっていった。 PP 44.3

エノクは、よく洗練され、すぐれた頭脳と広い知識の持ち主であった。彼は、神からの特別の啓示を受ける栄誉にあずかった。しかし、彼は、絶えず天との交わりを保って、神の偉大さと完全さとを常に実感していたので誰よりも謙遜であった。彼は、神とのつながりが親密になればなるほど、自分の弱さと不完全さとを深く感じた。 PP 44.4

エノクは、不信心な者の悪事が増加するのを嘆き、神へのエノクの崇敬の念が、彼らの不信心によって弱められるのを恐れて、常に彼らと交わることを避け、人々から離れて瞑想と祈りにふけった。こうして彼は主に仕え、神のみこころを明らかに知って、それを実行しようと努めた。彼にとって、祈りは魂の呼吸であった。彼は天の雰囲気の中で生きていた。 PP 44.5

神は、み使いによって、この世界を洪水で滅ぼそうとしておられることをエノクに知らせ、贖罪の計画をさらにくわしく彼に示された。神は、預言の霊によって、洪水後に生存する代々の人々と、キリストの再臨および世界の終末に関する大事件を彼にお示しになった。 PP 44.6

エノクは、死者に関して思い悩んでいた。彼は、義人も悪人も共に土に帰り、それですべてが終わるものと思った。墓のかなたに義人の生命があることが、彼にはわからなかった。彼は、預言の幻の中で、キリストの死について教えられ、キリストが、彼の民を贖い出すために清いみ使いたちを率いて、栄光のうちにおいでになることを示された。また、彼は、キリストが再び来られるときの世界の堕落の状態を見た。人々は、誇

りと高ぶりに満ち、気ままにふるまい、唯一の神と主イエス・キリストをいなみ、律法をふみにじって贖罪を軽んじる姿を見た。彼は、義人が栄光と誉れを受け、悪人が主のみ前から追われて、火によって滅ぼされるのを見た。 PP 44.7

エノクは義の説教者になって、神がお示しになったことを人々に伝えた。主をおそれた人々は、エノクから教えを聞き、共に祈るために集まって来た。彼は、また、人々の間で公の伝道に従事し、警告の言葉に 耳を傾ける者には、誰にでも神の使命を伝えた。彼は、セツの子孫のためだけに働いたのではなかった。カインが主の前からのがれてきた土地でも、神の預言者は幻に見た驚くべき光景を人々に伝えた。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり、また、不信心な者が、信仰を無視して犯したすべての不信心なしわざ……を責めるためである」（ユダ 14、15）。 PP 44.8

彼は、恐れることなく罪を譴責した。彼は、その時代の人々に、キリストのうちに現される神の愛を説き、悪の道から離れることを熱心に訴えるとともに、広く行われていた罪悪を責め、律法にそむく者には、必ず刑罰が臨むことを警告した。エノクを通して語ったのは、キリストのみ霊であった。このみ霊は、愛と同情と勧告の言葉だけを語るのではない。聖者たちが語るのは、耳に快くひびくことだけではない。神は、その使命者の心とくちびるに真理を与えて両刃の剣のように、するどく痛烈な言葉を語らせられるのである。 PP 45.1

神のしもべを動かした神の力は、それを聞いた人々に感じとられた。警告に従って罪を離れた者もあったが、大多数は厳粛な使命を嘲笑し、ますます大胆に悪の道に走った。終末時代の神のしもべたちは、同様の使命を世に伝えなければならない。そして、それは、また、不信と嘲笑をもって迎えられるであろう。洪水前の世界は、神と共に歩んだ者の警告の言葉を拒否した。そのように、終末時代の人々も主の使命者たちの警告を軽んじるであろう。 PP 45.2

エノクは、活動的生活を送りながらも、変わることなく神との交わりを保った。仕事かふえ、忙しさが増すにつれて、彼の祈りは、ますます絶え間なく、熱心になっていった。彼は一定の期間、すべての交際を絶つという生活を続けた。 PP 45.3

彼は、しばらく人々の間にいて、教えと模範によって彼らのために働いたあと、ただ神だけが与えることのできる天来の知識を飢えかわくように求めて、人を避けて孤独の時を過ごすのであった。エノクは、こうして、神と交わることによって、ますます神のみかたちを反映するようになった。彼の顔には、イエスのみ顔に輝く清い光が輝いていた。彼か、こうした神との交わりからもどってきたときには、神を信じない者さえ畏敬の念に打たれて、彼の顔に押された天のしるしをながめた。 PP 45.4

人々の罪悪は極に達し、ついに滅びの宣告が彼らの上にくだされた。年月の経過とともに、人類の罪悪のうしおは深く、神の刑罰の雲はいよいよ暗くたれこめた。しかし、信仰の証人であるエノクは、たゆまず努めて、警告と訴えと勧告とによって、悪の潮流を押しかえし、報復の下るのを止めようとした。彼の警告は、罪深い快楽愛好者によって無視されたが、神の承認のあかしが与えられていた。彼は根強くはびこる悪と忠実に戦い続けた。そして、神は、ついに彼を罪の世界から、天の清い喜びに移されたのである。 PP 45.5

その時代の人々は、エノクが金銀をたくわえず、ここの世で財産を築こうとしないのを、愚かなことだと嘲笑した。しかし、エノクの心は永遠の宝に注がれていた。彼は天の都を見つめていた。彼は、シオンのなかで栄光に輝く王、キリストを見たのであった。彼の思想も感情も会話もすべて天に関することであった。彼の周囲の罪悪が大きければ大きいほど、神の家を慕う気持ちは熱烈であった。彼は地上におりながら、信仰によって、すでに光の王国に住んでいた。 PP 45.6

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう」（マタイ 5：8）。エノクは 300 年の間、天と調和するために心が清くなることを求めていた。彼は 3 世紀の間神と歩いた。彼は、日々密接な結合を熱望した。交わりはいよいよ深まっていき、ついに神は、彼をみもとにお受けになった。彼は、永遠の世界の門口に立っていた。彼と祝福にみちた国との距離はわずか 1 歩であった。そして、門はあけられ、地上で長く続いた彼の神との歩みは続けられた。彼は、聖都の門を通って行った。彼は、人間の中から、そこにはいる最初の人となった。 PP 45.7

彼がいなくなって、人々はさびしく感じた。日々叫ばれた警告と教えの声は、もう聞かれなかった。義人のうちにも、悪人のうちにも、幾人かの者は彼が去 るのを目撃した。彼らは、彼が退いた場所のどこかかへ連れ去られたものと思い、彼を愛する人々は、後に預言者の子らがエリヤをさがしたように熱心にさがしたが、むだであった。神が彼をとられたので、いなくなったと彼らは報告した。 PP 45.8

主は、エノクの昇天を通して、重大な教訓を与えようとなさった。人々は、アダムの罪の恐ろしい結果によって、失望に陥る恐れがあった。「苛酷なのろいが、人類にくだされ、われわれすべての者は死ぬべき運命を負わされているのだから、主を恐れ、その戒めを守っても何の役に立つだろう」と多くの人は叫ぶばかりであった。しかし、神がアダムに与え、セツがくり返し、エノクが実践した教えは悲しみと暗黒を吹き払った。そして、アダムが死をもたらしたように、約束の贖い主は、生命と不死をもたらすという希望を人々に与えた。サタンは、義人が報いを受け、悪人が罰を受けることはなく、また、人間が神の戒めを守ることは不可能であると、人々に信じこませようとしていた。しかし、神はエノクの例をあげて、「ご自身を求める者に報いて下さる」かたであることを明言される（ヘブル 11：6）。神は、戒めを守る者に何をなさるかをお示しになる。人間は、神の律法に従うことができることと、罪人や堕落した人間の間に混じって生活していても、神の恵みによって、誘惑に耐え、純潔で清くなれることを神はお教えになった。彼らは、エノクの模範をみて、こうした生活が幸福であることを知った。彼の昇天は従順な者には、喜び、栄光、永遠の命などの報いが与えられ、罪人には、断罪、災い、死などの罰が与えられるという、将来に関する彼の預言の真実性の証拠であった。 PP 46.1

信仰によって、エノクは、「死を見ないように天に移された。……彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである」（ヘブル 11：5）。罪悪のために破滅にひんした世界の真っ只中で、エノクは神と密接に交わる生活を送っていたので、死の力は、彼を屈服することができなかった。 PP 46.2

この預言者の清い品性は、キリスト再臨の時に、「地からあがなわれ」る人々が到達しなければならない清い状態をあらわしている（黙示録 14：3）。そのときには、

洪水前の世界のように、罪悪が世にはびこる。人々は汚れた心の衝動と偽りの哲学の教えに従って、天の権威に逆らうのである。しかし、神の民は、エノクのように心の純潔と神のみこころとの一致を求めて、ついにキリストのみかたちを反映するに至るのである。彼らは、エノクのように、主の再臨と罪に対して下される刑罰について世界に警告を発し、その清い行状と模範とによって、不信心な者の罪を譴責する。世界が水によって滅ぼされる前にエノクが天に移されたように、生きている義人は、地が火によって滅ぼされる前に天にあげられる。 PP 46.3

使徒はこう言っている。「わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる」（Ｉコリント 15：51）。「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに……天から下ってこられる」（Ｉテサロニケ 4：16）。「ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、わたしたちは変えられるのである」（Ｉコリント 15：52）。「キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」（Ｉテサロニケ４：16～18）。 PP 46.4

第 8 章　ノアの洪水

本章は、創世記 6、7 章に基づく PP 46.5

ノアの時代、地は、アダムの罪とカインの殺人の結果 2 重ののろいを受けていた。しかし、これは、自然の表面に大きな変化を与えなかった。衰退の兆候は明らかに認められはしたが、地は、なお神の摂理 の賜物に恵まれて、豊かで美しかった。山々にはりっぱな樹木が繁茂し、枝もたわわなぶどうのつるをからませていた。広々とした庭園のような平原は、一面の緑で、数多くの草花が甘くにおっていた。地のくだものの種類は無類といっていいほど多かった。樹木は、その大きさ、美しさ、完全に整っている点などで、今日のどれよりもはるかにまさっていた。木目は、細かく、石のように堅く、石同様の永続性をもっていた。金、銀、宝石なども豊富にあった。 PP 46.6

人類は、まだ初期の活力を多く保っていた。アダムが、生命を長らえさせる木に近づくことができたときからわずか数代しか経ていなかったので、人間の一生はなお、世紀を単位として数えられていた。非凡の能力をもって計画し、実行することができた長命のこうした人々が、もし、神の奉仕のために自分を捧げていたならば、彼らは地上で創造主のみ名に誉れを帰し、彼らに生命をお与えになった神の目的にそい得たことであろう。しかし、彼らは、そうしなかった。偉大な体格と体力を持ち、その知恵深いことで有名な巨人がたくさんいた。彼らは、実に巧妙に驚くべきものを作り出すことにたけていた。しかし、彼らは、その技量と能力に応じて、ほしいままに悪を行う罪も大きかった。 PP 47.1

神は、これらの洪水前の人々に、多くの豊かな賜物をお与えになった。ところが彼らは、自分自身をあがめるためにそれを用い、それをお与えになった方よりも、賜物そのものに愛着を持って、それらをのろいに変えた。彼らは、金、銀、宝石、最上の木材などを用いて自分たちの家を建築し、技術の限りを尽くして住居を飾りたて、互いにしのぎを削った。彼らは、自分たちの高慢な心の欲望を満たすことだけを求め、快楽と罪悪に夢中になっていた。彼らは、神のことを考えようともしなかったので、いつのまに

か神の存在を否定するようになった。彼らは、自然の神のかわりに、自然を拝んだ。彼らは、人間の才能をたたえ、自分自身の手のわざを拝み、子供たちに刻んだ像を拝むことを教えた。 PP 47.2

彼らは、緑の野や形のよい樹木の陰に自分たちの偶像の祭壇を築いた。広大なときわ木の林は、偽りの神を礼拝するために捧げられた。これらの林には、美しい園が続いていて、その長くくねった小道にはあらゆる種類の木が枝もたわわに果実を実らせていた。また、そこには、人々の感覚をたのしませ、肉欲をほしいままにさせるものがすべて備わっていて、彼らを偶像礼拝に誘っていた。 PP 47.3

人々は神を全く忘れ、自分たちがかってにつくり上げたものを拝んでいた。その結果、彼らはますます堕落した。偶像を拝むものが偶像からどんな影響を受けるかについて、詩篇記者はこう言っている。「これを造る者と、これに信頼する者とはみな、これに等しい者になる」（詩篇 115：8）。ながめることによって変化するのは、人間の精神の法則である。人間は、真理、純潔、聖潔に関して、自分が持っている観念以上に到達するものではない。もし、精神が、人間的水準以上に高められず、無限の知恵と愛を瞑想するために信仰によって高尚にされないならば、人間は常に低い方へ低い方へと沈んでいくのである。偽りの神の礼拝者は、その神々に人間の性質と情欲とを付与した。こうして、彼らの品性の標準は罪深い人間の形に下落した。その結果、彼らは堕落したのである。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた」「時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」（創世記 6：5、11）。神は、生活の規準として、律法を人々にお与えになったが、人々は、律法を犯し、そのためにありとあらゆる罪が生じた。人々は公然と、しかも大胆に悪を行った。正義は地にふみにじられ、圧迫される者の叫び声は天に達した。 PP 47.4

最初に、神が定められたことに反して多くの妻を持つことが早くから行われていた。主は、アダムに 1 人の妻を与えて、この事に関する神の定めを示された。しかし、堕落後、人々は自分たちの罪深い欲望を満たそうとした。そのために、犯罪と不幸が急激に増加した。結婚関係や所有権は尊重されなかった。他人の妻でも財産でも、ほしいと思えば力づくで奪って、その暴力行為を彼らは勝ち誇った。彼らは、動物の 生命を奪

うことを喜び、肉を食物に用いることによって、彼らは、ますます残虐、凶悪になり、ついには、人間の生命に対して驚くべき無関心を示した。 PP 47.5

世界は、まだ黎明期であった。それにもかかわらず、はなはだしく罪悪がはびこり、神は、もはや耐え忍ぶことができなくなった。神は仰せになった。「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう」（同 6：7）。神は、神の霊がながく人の中にとどまらないと宣言された。もし彼らが、罪によって、世界と地の豊かな宝を汚すのをやめないならば、神は、彼らを神の世界から消し去り、神が彼らを祝福するためにお与えになったものを滅ぼそうとされた。神は、野の獣、豊かな食物を供給した植物を一掃して、美しい地球を破滅と荒廃の広漠としたところに変えようとされた。 PP 48.1

堕落がはびこるさなかにあって、メトセラ、ノアなどその他多くの者は真の神の知識を保ち、道徳的罪悪の潮流を止めようと努めた。洪水の起こる 120 年前に、主は天使によってみこころをノアに伝え、箱舟を造ることを指示された。ノアは、箱舟を造りながら、神が洪水によって悪人を滅ぼされることを説かなければならなかった。その言葉を聞いて、悔い改めと改革によってその事件に備える者は赦され、救われるのであった。エノクは、洪水について神から示されたことを子孫に語ってきかせた。そして、生きながらえてノアの説教を聞いたメトセラとむすこたちは、箱舟の建造を手伝った。 PP 48.2

神は、箱舟の正確な大きさと、その建造上の指示を明確にノアにお与えになった。人知では、こうしたがんじょうで耐久性のある建造物を考案することは不可能であった。神が設計家て、ノアが建築家であった。それは水に浮くように、船の形に造られてはいたが、ある面では家屋によく似ていた。それは 3 階建てで、ただ 1 つの入り口が横についていた。あかりは上からとってあって、各部屋が明るくなるように工夫されていた。箱舟を建造するために用いられた材木はいとすぎの木で、それは、数百年たっても腐らないものであった。この巨大な建造物の工事は遅々として進まず、骨のおれる仕事であった。樹木の大きさとその質の関係上、当時の人々は、そのはるかにすぐれた力をもってしても現在の製材よりも非常に労力が多くかかった。工事の完璧を期するために、人力のかぎりか尽くされた。しかし、箱舟は、やがて地をおそう暴風雨に、それだけでは

耐える力はなかった。荒れ狂う水の上で、神のしもべたちを守ることかできるのは神だけであった。「信仰によって、ノアはまだ見ていない事がらについて御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった」（ヘブル 11：7）。ノアは、世に警告の使命を伝えるとともに、その行為によって、自分が真剣であることをあかしした。こうして彼の信仰は完成され、明白に示された。彼は、神が仰せになったことを、そのまま信じる模範を世に示した。彼は、全財産を箱舟につぎこんだ。彼が、この巨大な舟を陸上で建造しはじめると、群衆がこの奇妙な光景を見、風変わりな預言者の語る熱烈な言葉を聞こうと、四方から集まってきた。箱舟の槌音の 1 つ 1 つは、人々に対するあかしであった。 PP 48.3

最初、多くの者は、警告を受け入れたように思われた。しかし、彼らは、真に悔い改めて神に立ち帰ったのではなかった。彼らは、罪を捨てようとはしなかったのである。洪水が来るまで、しばらくの間、彼らの信仰は試みられたが、彼らはその試練に耐えられなかった。彼らは、一般の不信仰に負け、ついに、以前の仲間といっしょになって、厳粛な使命を退けた。ある者は、深く感動して、警告の言葉に聞き従おうとした。しかし、あざけり笑う者が多いために、ついに彼らと同調して、恵みの招待を拒み、やがてだれよりも大胆不敵に嘲笑する者になった。というのは、一度光を与えられながら、罪を示す神の霊に逆らった者ほど無謀で、罪の深みに沈む者はないからである。 PP 48.4

厳密な意味において、当時の人々は、全部偶像礼拝者であったのではない。神を礼拝すると公言する者が多くいた。彼らの偶像は、神を代表するものであって、人間はそれによって、神に関する明確な観念をいだくことができると彼らは主張した。この種 の人々が、率先してノアの説教を拒否した。神を物物質的対象によって表そうとすることによって、彼らの思いは暗くなり、神の威光と力とを見ることができなくなった。彼らは、神の品性の神聖さ、また、神の要求の神聖さも不変性も悟らなくなった。罪が一般に広く行われ、罪が罪と思われなくなって、ついに彼らは、神の律法は廃され、罪を罰することは神の品性に反するというようになった。そして、地に神のさばきが行わ

れることを否定した。もし、あの時代の人々が、神の律法を守っていたならば、神のしもべの警告が、神の声であったことを認めたことであろう。しかし、彼らの心は光を拒んだために暗黒に閉ざされ、ノアの使命は妄想だとほんとうに思い込んだ。 PP 48.5

正しい側についたのは、大多数の群衆ではなかった。世をあげて神の義と神の律法に反対し、ノアは狂信者だと思われた。サタンは、エバを誘惑して神にそむかせようとしたときに、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」と言った（創世記 3：4）。世的に栄誉を受けた偉人や賢者は、同じことをくり返して言った。「神の警告はおどしのためであって、実際には起こらない。驚く必要はない。神が造られた世界を滅ぼし、神が創造された人々を罰するようなことは決してない。安心せよ、恐れるな。ノアは熱狂的狂信家だ」。世の人々は欺かれた老人の愚かさを冷笑した。彼らは、神の前に心を低くするどころか、神が、神のしもべを通してお語りにならなかったのも同然で、彼らは不服従と罪悪にふけっていた。 PP 49.1

しかし、ノアは、暴風の中の岩のように立っていた。人々の侮りとあざけりに囲まれながら、彼は清廉潔白で不動の忠実さを示した。ノアの言葉には力があった。それは、神がそのしもべによって人間に語られる神の声であった。神との結合が、彼を無限の力によって強くした。彼は 120 年の間、人間の知恵で判断すればとうてい不可能だと思われる出来事に関して、当時の人々に厳粛な声で語った。 PP 49.2

洪水前の人々は、数世紀間に自然の法則は固定したと論じた。季節の移り変わりは周期的にやってきた。雨はそのときまで降ったことがなかった。地は、霧や露でうるおされていた。川は、まだあふれたことかなく、安全に海に注いでいた。定められた法則によって、水は堤を越えてあふれなかった。しかし、これを論じ合った人々は、「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」と宣言して、水をとどめられたおかたのみ手を認めなかった（ヨブ 38：11）。 PP 49.3

時が経過しても、自然界にこれといった変化が起こらないのを見て、初めは恐れおののいた人々も安心しだした。今日の多くの人が考えるように、自然のほうが、自然の神よりも上で、自然の法則は堅く定められたものであり、神ご自身もそれを変更することはできないものであると考えた。もし、ノアの使命が正しければ、自然はその軌道か

らはずれるであろうと彼らは論じ、その言葉が惑わしであり、最大の欺瞞であると世の人々に思いこませた。彼らは、警告が発せられる前に行っていた通りのことをなしつづけて、神の警告をあなどっていることを示した。彼らは、歓楽と饗宴をつづけた。彼らは、食べ、飲み、植え、建てなどして、将来得ようと望んでいる有利な立場について思いを練っていた。そして、彼らは、ますます罪悪の深みに沈み、神の要求を大胆に無視して、無限の神をおそれていないことを示した。もし、ノアの言葉に少しでも真理があるとすれば、知者、識者、偉大な人々がそれを理解するはずであると彼らは言った。 PP 49.4

もし、洪水前の人々が、警告を受け入れ、その悪行を悔い改めたならば、主は後にニネベになさったと同様に彼の怒りをとどめられたことであろう。しかし、その時代の人々は、良心のとがめと神の預言者の警告に頑強に逆らって、彼らの罪の升目を満たし、滅亡の期は熟した。 PP 49.5

彼らの猶予の期間は、まもなく終わろうとしていた。ノアは、神からの指示に忠実に従っていた。箱舟は、主のさしず通りにすべてのところが完成し、人間と動物の食糧が貯蔵された。そして、今、神のしもべは彼の最後の厳粛な訴えを人々にした。彼は、言葉では表現できない心の苦しさをもって、避難所があるうちに救いを求めるように訴えた。彼らは、またもや彼の言葉を退け、ののしりとあざけりの声をあげた。突 然、あざける群衆は沈黙した。最もおとなしい動物も、最もどうもうな動物も、あらゆる種類の動物が一様に山や森から箱舟に向かって静かに進んでくるのが見えた。突風のような音が聞こえたので、見ると天を暗くするほどの多くの鳥類が四方から群がってきて、秩序正しく箱舟の中にはいった。人間は従わないのに、動物は神の命令に従った。彼らは天使に導かれて、「2 つずつノアのもとに来て、……箱舟にはい」り、きよい動物は、7 つずつ入った（創世記 7：9）。世の人々は、驚いてながめた。恐れた人もあった。哲学者が、この異常な出来事を説明するために召集されたが、彼らは、どうすることもできなかった。それは、彼らにとってさぐり得ない神秘であった。人々は、頑強に光を拒んでかたくなになっていたので、この光景もつかの間の印象を与えただけであった。滅亡の運命にあった人類は、太陽がさん然と輝き、大地がエデンのように美しく飾られ

ているのを見たとき、そうぞうしい歓楽の声をあげて、つのってくる恐怖を払いのけた。そして、彼らは、暴虐な行いによって、すでに下ろうとしている神の怒りを招いているように思われた。 PP 49.6

神は、ノアに命じて言われた。「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」（同 7：1）。世の人々はノアの警告を拒否したが、彼の感化と模範は、彼の家庭に祝福をもたらした。彼は忠実で誠実であったので、神はその報いとして彼とともに彼の家族を残らずお救いになった。親の任務に忠実な者に対して、これはなんと励ましを与えることであろう。 PP 50.1

罪深い人類に対するあわれみの訴えはやんだ。野の獣と空の鳥は避難所に入った。ノアと彼の家族は、箱舟に入った。そして「主は彼のうしろの戸を閉ざされた」（同 7：16）。目がくらむ光がひらめき、いなずまより明るい栄光の雲が天から下って、箱舟の入り口の前にただよった。内側にいる者では閉じることのできない巨大な扉が、目に見えない手で静かに閉ざされた。ノアは、内側に入れられ、神のあわれみを退けた者は閉め出された。その扉の上には、神の印が押された。神がそれをおしめになった。だから、ただ神だけがそれをあけることがおできになるのである。そのように、キリストが天の雲に乗ってこられる前に、罪深い人間のためのキリストのとりなしは終わり、恵みの扉は閉ざされる。そうすると、神の恵みは、これ以上悪者を抑制しなくなるので、サタンは、恵みを退けた人々を完全に支配する。彼らは、神の民を滅ぼそうとする。しかし、ノアが箱舟のなかに閉じこめられたように、義人は、神の力に保護される。 PP 50.2

ノアとノアの家族が箱舟に入ってから 7 日の間、暴風雨がやってくるしるしはあらわれなかった。この間、彼らの信仰は試みられた。それは、外部の世界にとっては、勝ち誇った時であった。 PP 50.3

いかにも遅れているので、人々は、ノアの使命が惑わしであって、洪水は起こらないという考えを強くした。獣や鳥が箱舟にはいり、神の天使が扉を閉じるという厳粛な光景を目撃したにもかかわらず、彼らはなお、遊戯や宴会を続け、こうした著しい神の

力の現れさえも物笑いの種にした。彼らは、箱舟のまわりに群がって、内部にいる人々をあざけり、これまでになかったほどの乱暴を働いた。 PP 50.4

しかし、8 日目に暗雲が空をおおった。雷鳴がとどろき、いなびかりがひらめいた。間もなく大粒の雨が降り出した。世界には、今までこのようなことは起こったことがなかった。そして、人々の心は恐怖におそわれた。「ノアは正しかったのだろうか。世界は、滅びるのだろうか」と、皆はひそかにたずねた。空は、ますます暗くなって雨足は早くなってきた。獣たちは、激しい恐怖にかられてさまよい歩き、そのさわがしい叫び声は、彼らと人間の運命を嘆いているようであった。それから、「大いなる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開け」た（同 7：11）。水は、雲のなかから大きな滝のように流れ出た。川は堤を越えて谷間にあふれた。地からはものすごい勢いで水がふき出して、巨大な岩石を何百フィートも空高く飛ばした。それらは落下して地中深くうずまった。 PP 50.5

人々はまず、自分たちの手のわざが破壊されるのを見た。豪華な建物や、彼らが偶像を安置した美しい庭園や林は、天からのいなずまによって破壊され、その残骸はここかしこに散らばっていた。人間を犠牲として捧げた祭壇はくずされた。偶像礼拝者たちは、生きた神の力におののき、破滅を招いたのは自分たちの堕落と偶像礼拝であることを悟った。 PP 51.1

暴風雨が激しくなるにつれて、樹木、建物、岩石、土などが四方八方に飛び散った。人間と動物の恐怖のさまは、表現することができなかった。暴風雨のとどろきを越えて、神の権威を軽視した人々の嘆きの声が聞こえた。荒れくるう暴風雨のなかにとどまっていなければならなかったサタンでさえ、身の危険を感じたほどであった。彼は、力強い人類を思うままにしたことを喜んでいた。そして、彼らに憎むべき罪を行わせて、天の支配者への反逆を続けさせようとしていた。ところが彼は今、神は不正で残酷だと言って神をのろった。サタンと同様に神を冒瀆する者が多かった。彼らは、できることであれば、権威の座から神を引きおろそうとしたことであろう。他の者は恐怖のため、狂気のようになって箱舟に手をのばしながら、入れてくれと頼んだ。しかし、彼らの願いは入れられなかった。ついに良心がめざめ、天を支配しておられる神の存在を彼らは知っ

たのである。彼らは、必死になって神をよび求めたが、彼らの叫びに神の耳は開かれなかった。この恐怖のときに、彼らは神の律法に違反したことか自分たちの滅亡の原因であることを悟った。しかし、彼らは刑罰を恐れて罪を認めたとはいえ、真に悔い改め、悪をきらったのではなかった。もし、刑罰が取り除かれたならば、彼らは、またもや神に反逆したことであろう。同様に、この世界が火で滅ぼされる前に地に下る刑罰のときに、悔い改めない者は自分たちの罪の正体を知り、それが、神の清い律法を軽視した罪であることを知るのである。しかしながら、古代の罪人と同様に、彼らは真に悔い改めるのではないのである。 PP 51.2

中には、死にものぐるいになって箱舟に乗り込もうとする者もあったが、堅固に造られていたのでびくともしなかった。箱舟にしがみつく者もあったが、うす巻く波にさらわれたり、岩石や木にぶつかったりして手を離してしまった。風が容赦なく吹きつけ、大波にほんろうされるたびに、巨大な箱舟はすみずみまで震動した。内部の動物たちは、恐怖と苦痛の叫びをあげた。しかし、暴風雨の最中でも、箱舟は安全に浮かんでいた。すぐれた力をもった天使たちが、箱舟の保護を命じられていた。 PP 51.3

暴風雨にあった獣たちは、人間の援助を期待するかのように寄ってきた。ある者は、たくましい力を持った強い動物の背に、子供たちや自分たちのからだを結びつけて、一番高いところにのがれ、増してくる水を避けようとした。高い山の頂上にある大きな木にからだを結びつけたものもあったが、木は根こぎにされて、人間もろともあわ立つ波のなかに沈んでいった。安全だと思われた場所が次々とだめになった。水かさが増すにつれて、人々は、最高の山に避難した。人間と動物が足場の奪い合いをして争うこともあったが、ついには両方とも流されてしまうのであった。 PP 51.4

人々は最高の峰から、果てしのない大海原をながめた。神のしもべの厳粛な使命は、もはやあざけりや軽蔑の的ではなかった。命運つきた罪人たちは、なおざりにしてしまった機会が、もう一度与えられることをどんなに望んだことであろう。あと 1 時間の猶予、もう一度だけのあわれみの機会、ノアの唇からもれるもう一度だけの招声を、彼らはどんなに切望したことであろう。しかし、彼らは、あわれみに満ちたやさしい声を再び聞くことはできなかった。正義とともに愛もまた、神の刑罰が下って、罪にとどめ

をさすことを要求したのである。報復の水は、最後ののがれ場を流し去って、神を侮った者は暗黒の淵に滅び去った。 PP 51.5

「その時の世界は、御言により水でおおわれて滅んでしまった。しかし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである」（Ⅱペテロ 3：6、7）。別のあらしが近づいている。地は、再び神の怒りによって荒廃に帰して一掃され、罪と罪人は滅ぼされる。 PP 51.6

洪水前の人々に、報復をもたらす原因になった同じ罪が今日行われている。神をおそれることは、人々の心から消えうせ、神の律法は冷淡と軽蔑をもってあしらわれている。あの時代の極度の世俗化が、現在の世代にも同様に行われている。キリストは言われた。「洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子が現われるのもそのようであろう」（マタイ 24：38、39）。神は、洪水前の人々が、飲み食いすることを非難されたのではなかった。神は、彼らの体の必要を満たすために、地の産物を豊富にお与えになったのである。彼らの罪は、与え主であられる神に感謝せずに、これらの賜物を受け、なんの抑制もなく食欲を満たして、堕落したことであった。彼らが結婚することは正当なことであった。結婚は、神が制定されたものである。これは、神が定められた最初の制度の 1 つであった。神は、この儀式に特別の指示を与え、それを神聖で美しいものとされた。しかし、人々は、こうした指示を忘れ、結婚を悪用して情欲を満たすものにした。 PP 52.1

今日も同じ状態である。それ自身、正当なことが、過度に行われている。なんの制限もなく、食べたいだけ食べている。今日、キリストに従うと公言し、その名がりっぱな教会員名簿にしるされている者が、飲酒家と飲み食いしている。不節制が道徳的、また霊的能力をにぶらせて、いやしい情欲にふけらせるに至る。情欲を制することが、自分たちの道徳的責任であることを感じない者が非常に多い。彼らは、情欲の奴隷になる。人々は感覚の快楽を求めて生き、この世界と現世のためだけに生きる。社会のいたるところに浪費が行われている。ぜいたくと虚飾のために、誠実は犠牲にされる。急いで富

を得ようとする者は、正義を曲げ、貧者をしいたげ、今なお、「奴隷と人々の魂」は売買されている。社会の上層部にも下層部にも、詐欺、贈収賄、盗みなどが、堂々とまかり通っている。新聞の報道は、殺人の記事で満ちている。冷酷で理由のない犯罪が行われ、人道は全く地に落ちたかのように思われる。こうした残酷なことかありふれたことになり、人々は、それを話題にもせず、驚きもしなくなった。無秩序の精神は、あらゆる国家に浸透し、時々暴動が起こって世界を恐怖に陥れるが、これは閉じこめられた激情と無法の火のあらわれで、一度抑制が除かれると、全地に災禍と荒廃をきたらせることであろう。霊感が示す洪水前の世界の状態は、現代の社会が急速に近づきつつある状態をあまりにもよく描写している。現在、キリスト教国といわれる国においてさえ、邪悪で恐ろしい犯罪が毎日行われている。そうした罪のために、古代の罪人は滅ぼされたのであった。 PP 52.2

神は、洪水が来る前に、ノアをつかわして世界に警告を発し、人々を悔い改めさせて、切迫している破滅から彼らをのがれさせようとされた。キリスト再臨の時が近づくにつれて、主は、主のしもべたちを世界につかわして警告を発し、その大事件の準備をするように促される。群衆は、神の律法に逆らった生活をしてきた。そこで神は、彼らをあわれんで、清い戒めに従うように呼びかけられる。神に対して悔い改め、キリストを信じて、罪を捨てる者はみな赦しが与えられる。しかし、罪を捨てることは、大きすぎる犠牲だと感じる者が多い。彼らは自分たちの生活が、神の道徳的統治のきよい原則と調和していないために、神の警告を退け、神の律法の権威をいなむのである。 PP 52.3

洪水前の地上のおびただしい人口の中から、わずか 8 人だけが、ノアによって与えられた神の言葉に従った。義の説教者は、120 年の間、来たるべき破滅について世界に警告を発したが、彼の使命は拒否され、軽蔑された。今日も同様である。律法を賦与された方が、不従順な者を罰するために来られるに先だち、罪人らに、悔い改めて再び忠誠をつくすように警告されるが、大多数の者にとって、こうした警告は無益なものであろう。使徒ペテロは言った。「終わりの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の再臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠

りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変 っていない』と言うであろう」（Ⅱペテロ 3：3、4）。これと全く同じ言葉が公然と不信心者ばかりでなくて、この国の説教壇に立つ多くの牧師たちの口から聞かれないであろうか。「何も驚くことはない。キリスト再臨に先だって、全世界は悔い改める。そして、義は、1000 年の間支配する。平和だ。平和だ。万物は、世の初めから同じように続く。誰も、こうした警世家の扇動的な言葉に動かされてはならない」と彼らは叫ぶ。しかし、この福千年期の教理は、キリストや使徒たちの教えと一致していない。キリストは、重大な問いを発しておられる。「人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」（ルカ 18：8）。すでに述べた通り、世界の状態は、ノアの時代のようであると主は言われた。終末が近づくにつれて、罪悪が増すことを予期すべきであるとパウロは警告している。「しかし御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう」（Ⅰテモテ 4：1）。使徒は、「終りの時には、苦難の時代が来る」と言っている（Ⅱテモテ 3：1）。そして、彼は、信仰を持っているふりをする人々の間にある驚くべき罪の数々をあげている。 PP 52.4

洪水前の人々は、猶予の期間が終わろうとしていたとき、刺激的娯楽や祭りに熱中していた。勢力と権力をもった者は、人々の心を歓楽と快楽に夢中にさせておいて、最後の厳粛な警告に誰も心を動かすことがないようにしむけていた。われわれの時代にも、同様のことがくり返されているのを見ないであろうか。神のしもべたちが、万物の終末の接近の使命を伝えても、世は、娯楽と快楽の追求に心を奪われている。次々と心を刺激するものがあって、神に対する関心を失わせ、来たるべき破滅から人々を救う唯一の真理に、深い感銘を受けることを妨げている。 PP 53.1

ノアの時代に、哲学者たちは、この世界が水によって滅ぼされることはあり得ないと言ったように、今日でもこの世界が火で滅ぼされることはあり得ない、また、それは自然の法則に反することであるということを示そうとする科学者たちがいる。しかし、自然の法則を定め、それを支配しておられる自然界の神は、ご自分のみ手のわざを用いて、ご自分の目的を達成することがおできになるのである。 PP 53.2

偉人や知者たちが、水による世界滅亡の不可能性について証明し、人々の恐怖がしずまり、万人がノアの預言を妄想だといい、彼を狂信家とみなした、そのときこそまさに神の時の到来であった。「大いなる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開け」て、あざける人々は、洪水にのまれた。人々は、彼らの誇った哲学も知恵もみな愚かなものであって、法則を制定されたお方こそ、自然の法則より偉大であり、また、全能の神は、その目的を果たすための手段にこと欠かれないことを悟ったのであったが、そのときではもうおそすぎたのである。「ノアの時にあったように、……人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」（ルカ 17：26、30）。「しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」（Ⅱペテロ 3：10）。哲学の論理が、神の審判の恐怖を去り、宗教家が長い平和と繁栄の時代の到来を指摘し、世が事業と快楽、植樹や建築、飲食や歓楽に心を奪われて神の警告を退け、神の使者たちをあざけっているその時、突如として滅びが彼らをおそってくる。そして、それからのがれることは決してできない（Ⅰテサロニケ 5：3 参照）。 PP 53.3

第 9 章　約束のにじ

本章は、創世記 7：20～9：17 に基づく PP 53.4

水は最高の山より 15 キュビット（約 7 メートル）も高く増した。箱舟は 5 か月もの間風波にもまれてただよったので、箱舟のなかの家族は死んでしまうのかと思ったことがたびたびあった。それは、苦しい試練 であった。しかし、ノアは、神のみ手がかじをとっていることを確信していたので、彼の信仰はゆるがなかった。水が引き始めると、主は、一群の山々に保護された場所に箱舟を漂着させられた。ここは神の力によって保存されていたのである。山々は、距離がわずかしか離れていなかったから、箱舟は、この静かな港のなかをただようだけで、果てしない大海に漂流しなくなった。これで暴風雨にほんろうされて疲労した船のなかの人々に大きな安らぎが与えられた。 PP 53.5

ノアと家族の者は、再び地上に出るのを待ちこがれていたので、水が引くのを今か今かと待った。山々の頂上が見え始めてから 40 日たったとき、彼らは、地がかわいたかどうかを知るために、においに敏感なからすを放った。からすは、水のほかには何もなかったので、箱舟の周りを飛ぶだけであった。7 日後にはとが放たれたが、とまる場所がないので、箱舟にもどってきた。ノアは、さらに 7 日待って、再びはとを放った。夕方、はとは、オリーブの葉をくわえてもどってきたので、一同は非常に喜んだ。後で、「ノアが箱舟のおおいを取り除いて見ると、土のおもては、かわいていた」（創世記 8：13）。彼は、なお、忍耐強く箱舟の中で待った。ノアは、神の命令に従って入ったように、出るときにも特別の指示を待った。 PP 54.1

ついに天使が天から下って巨大な扉を開き、ノアと家族に、すべての動物を伴って出てくるように命じた。ノアは、外に出る喜びのあまり、彼らを保護された恵み深い神を忘れたりしなかった。彼は、箱用を出て最初に、祭壇を築いて、すべての清い獣や清い鳥のなかから犠牲をささげて、救済に対する感謝と大いなる犠牲であられるキリストに対する信仰をあらわした。主はこの犠牲をお喜びになり、ノアとその家族だけではな

く、後でこの地上に生きるすべてのものにまで及ぶ祝福をお与えになった。「主はその香ばしいかおりをかいで、心に言われた、『わたしはもはや二度と人のゆえに地をのろわない。……地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、暑さ寒さも、夏冬も、昼も夜もやむことはないであろう』」（創世記 8：21、22）。ここに後世のすべての人々が学ばなければならない教訓があった。ノアは、荒廃した地上に出てきたが、自分の家の建築にとりかかる前に、神の祭壇を築いた。彼の家畜の群れはわずかで、非常な犠牲を払って育ててきたものであった。しかし、彼は、万物が神のものであることを認めたしるしに、喜んでその一部を主に捧げた。同様に、われわれも、神に心からの捧げ物をすることを第一の務めとしなければならない。われわれは、神が示されるすべての憐れみと愛とに対して、献身的行為と神のみわざのための捧げ物を捧げて、感謝の気持ちを表明しなければならないのである。 PP 54.2

雲がわき、雨が降るごとに、また、洪水が起こるのではないかと、人々が恐怖をいだくことのないように、主は、ノアの家族に 1 つの約束を与えて勇気づけられた。「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、……地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう。……わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。……にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」（創世記 9：11～16）。 PP 54.3

神は、このようにして、雲のなかに美しい虹をかけけて、人間との契約のしるしにされたということは、あやまりやすい人々に対する神の何と大きな恵みと慈悲の表現であろう。主は、虹を見るときに、彼の契約を思い起こすと言われた。これは、神がお忘れになるという意味ではなくて、われわれが神をさらに深く理解するために、人間の言葉でお語りになったのである。後の時代の子供たちが、天にかけられた美しい虹をながめて、その意味を聞くときに、親たちは、洪水の物語をして聞かせ、いと高き神が、水が再び地をおおうことがないしるしとして、虹を雲のなかにかけられたことを告げるのが神の目的であった。こうして、各時代を通じて、虹は人間に対する神の愛をあかしし、人間の神に対する確信を強めるものとなるのであった。 PP 54.4

天では、虹のようなものがみ座を囲み、キリストの頭上にかかっている。預言者は言った。「その（み座） まわりにある輝きのさまは、雨の日に雲に起るにじのようであった。主の栄光の形のさまは、このようであった」（エゼキエル 1：28）。黙示録の筆者は言った。「見よ、御座が天に設けられており、その御座にいますかたがあった。……また、御座のまわりには、緑玉のように見えるにじが現れていた」（黙示録 4：2、3）。人間がその大きな罪のために、神の裁きを受けるとき、救い主は罪人のために、父の前でとりなしをしてくださり、雲のなかの虹と、み座の周りとご自身の頭上の虹をさして、それが罪を悔いた人々に対する神のあわれみのしるしであることを示される。 PP 54.5

洪水に関してノアにお与えになった保証に、神ご自身は、神の恵みの最も尊い約束の 1 つを結びつけられた。「『わたしはノアの洪水を、再び地にあふれさせないと誓ったが、そのように、わたしは再びあなたを怒らない、再びあなたを責めない』と誓った。山は移り、丘は動いても、わがいつしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがないとあなたをあわれまれる主は言われる」（イザヤ 54：9、10）。 PP 55.1

ノアは、どうもうな猛獣が彼とともに箱舟から出てくるのを見て、8 人しかいない彼の家族が、動物に滅ぼされるのではないかと恐れた。しかし、主は、そのしもべに天使をつかわして、確証をお与えになった。「地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える」（創世記 9：2、3）。神は、このとき以前には、人間が動物の肉を食べることを許しておられなかった。神は、人類が地の産物だけで生命を保つように計画されたのであったが、すべての物がなくなってしまったので、箱舟のなかに保存された清い動物の肉を食べることをお許しになった。 PP 55.2

洪水のときに、地球の全面が変化した。罪の結果、第三の恐ろしいのろいが地上に下った。水が減り始めるにつれて、山や丘は濁水の海にかこまれた。至るところに、人

間や動物の死がいが散乱していた。主は、こうしたものが残って腐敗し、空気を汚すのをお許しにならなかった。そこで神は、地球を一大埋葬場とされた。水をかわかすために吹かせられた強風は、非常な勢いでそれらを動かした。ある場合には、山々の頂上さえ洗い去って、死がいの上に、木、岩、土などを積み上げた。同様の方法によって、洪水前の世界を豊富にして、飾り、また、人々が偶像視していた金、銀、高級木材、宝石などは、人々が見つけたり、捜し出したりできないように隠されてしまった。激しい水の勢いで、土や岩がこれらの宝物の上に積み重なって、ある場合にはその上で大きな山になったりした。神は、罪人たちが豊かになり、繁栄すればするほど堕落するのをごらんになった。豊かにお与えになる神の礼拝に導くはずの宝が礼拝され、その反面、神はあがめられず、軽蔑された。 PP 55.3

地上は、描写できないほどの混乱と荒廃状態を呈していた。かつては、完全に均整がとれて美しかった山々は破壊されて形がそこなわれた。地上には、岩石、岩壁の岩だな、ごつごつした岩角が散乱するようになった。山や丘が消え去って、その跡形すらとどめないところが多かった。平原は山脈に変わっていた。こうした変化は、ある所では、他の所よりいっそう激しかった。かつては、地上の最も貴重な宝であった金、銀、宝石かあった所に、最も激しいのろいの跡が見られた。人間が住んでいなかった地方や、犯罪が少なかったところにはのろいも軽かった。 PP 55.4

このとき、広大な森林が地下に埋没した。これは石炭になり、現在の鉱脈になり、また、多量の石油を産出している。石炭と石油はときおり地下で引火して燃える。こうして、岩石は熱し、石灰石は焼け、鉄鉱が溶ける。石灰右に水がかかると、灼熱度が高まり、地震、爆発、噴火などの原因になる。火と水が、岩と鉱脈に触れると、大きな地下爆発が起こり、鈍い雷鳴のような音がする。空気は熱く、息苦しくなる。こうして噴火が起こる。熱せられたものが十分に発散されないでいると、地は、海の波のように震動して隆起し、大きなきれつを生じて、ときには都市、村落、 火をふく山々までのみこんでしまう。こうした驚くべき現象は、キリストの再臨と世界の終末の直前には、もっとひんぱんに激しくなり、滅亡がすみやかに近づいているしるしとなる。 PP 55.5

地底は主の武器庫であって、神は、ここから古い世界を滅ぼす武器をとり出された。地からふき出た水は、天からの水と合流して、破壊のわざをなしとげた。洪水後、火もまた水と同様に、極悪の都市を滅ぼすために、神に用いられている。こうした刑罰は、神の律法を軽んじ、神の権威をふみにじる者が、神のみ力の前におののき、神の当然の主権を認めるようになるためにくだされた。山々が燃えて、火と炎をあげ、溶岩をふき出して、川を干上がらせ、雑踏する都市を滅ぼし、至るところに破壊と荒廃を及ぼすのを見るときに、どんなに大胆な者も恐怖に満たされ、不信仰の者も、神を冒瀆する者も神の無限の能力を認めないわけにはいかないのである。 PP 56.1

こうした光景について、古代の預言者は言っている。「どうか、あなたが天を裂いて下り、あなたの前に山々が震い動くように。火が柴木を燃やし、火が水を沸かすときのごとく下られるように。そして、み名をあなたのあだにあらわし、もろもろの国をあなたの前に震えおののかせられるように。あなたは、われわれが期待しなかった恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた」（イザヤ 64：1～3）。「主の道はつむじ風と大風の中にあり、雲はその足のちりである。彼は海を戒めて、これをかわかし、すべての川をかれさせる」（ナホム 1：3、4）。 PP 56.2

キリストの再臨のときには、世界にこれまで起こったこともないようなもっと恐ろしい光景が見られるであろう。「もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、地は彼の前にむなしくなり、世界とその中に住む者も皆、むなしくなる。だれが彼の憤りの前に立つことができよう。だれが彼の燃える怒りに耐えることができよう」（ナホム 1：5、6）。「主よ、あなたの天を垂れてくだり、山に触れて煙を出させてください。いなずまを放って彼らを散らし、矢を放って彼らを打ち敗ってください」（詩篇 144：5、6）。「また、上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを、すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、見せるであろう」（使徒行伝 2：19）。「すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった」（黙示録 16：18）。「島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また 1 タラント

の重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた」（黙示録 16：20、21）。 PP 56.3

天からのいなびかりが地上の火と 1 つになるとき、山々は炉のように燃え、溶岩はすさまじい勢いで流れ出して、庭園や野や畑、都市や村落をおおってしまう。まっかに燃えたぎった溶岩は川に流れ込んで水を沸騰させ、巨大な岩石を驚くべき力でふきとばし、その破片を地の上にまき散らす。川は干上がってしまうであろう。地はゆれ動き、いたるところに恐ろしい地震と爆発が起こるであろう。 PP 56.4

このようにして、神は、この地から悪者を滅ぼされる。しかし、義人は、ノアが箱舟の中に守られたように、こうした異変の中にあっても保護される。神が彼らの避け所となり、彼らはそのみ翼の下にいこうのである。詩篇記者は言っている。「あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災はあなたに臨まず」（詩篇 91：9、10）。「主が悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ、その幕屋の奥にわたしを隠し」（詩篇 27：5）、「彼はわたしを愛して離れないゆえに、わたしは彼を助けよう。彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る」（詩篇 91：14）。これが神のお約束である。 PP 56.5

第 10 章　バベルの塔

本章は、創世記 9：25～27、11：1～9 に基づく PP 57.1

道徳の退廃のため、洪水によって一掃されたばかりの荒廃した地上に、再び人間を住ませるために、神は、ノアの家族ただ 1 家族だけを保存なさった。神はノアについて、「わたしの前に正しい人であるとわたしは認めた」と言われた（創世記 7：1）。しかし、ノアの 3 人のむすこたちの間には、洪水前の世界と同様の明確な区別が急速に現れていた。人類の先祖、セム、ハム、ヤペテのうちに、すでにその子孫の性格が予表されていた。 PP 57.2

ノアは、神の霊感を受けて、こうした人類の先祖から起こる三大人種の歴史を預言した。ノアは、ハムの子孫について、父ハムではなくて、その子の名をかりて次のように宣言した。「カナンはのろわれよ。彼はしもべのしもべとなって、その兄弟たちに仕える」（創世記 9：25）。人道に反したハムの罪は、彼の心に親を敬う気持ちがすでになくなっていたことを表し、彼の品性が不まじめで、汚れたものであることを示していた。こうした悪い性質が、カナンとその子孫に永く伝わり、その重なる罪は神の刑罰を招いた。 PP 57.3

他方、セムとヤペテが示した父に対する尊敬の念は、同時に、神の戒めに対する尊敬の念でもあって、その子孫の輝かしい未来の約束でもあった。これらのむすこについて、こう言われている。「セムの神、主はほむべきかな、カナンはそのしもべとなれ。神はヤペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように。カナンはそのしもべとなれ」（創世記 9：26、27）。セムの家系は、選民、神の契約の民、約束された贖い主の与えられる民となるのであった。主は、セムの神であった。セムからアブラハムが出て、イスラエルの民となり、そのなかから、キリストが来られるのであった。「主をおのが神とする民はさいわいです」（詩篇 144：15）。「ヤペテを……セムの天幕に……住まわせられるように」（創世記 9：27）。ヤペテの子孫は、福音の祝福に特にあずかるようにされたのである。 PP 57.4

カナンの子孫は、異教徒中の最も堕落した異教徒になった。預言によれば、彼らは奴隷になるのであったが、その運命は数百年間保留されていた。彼らが神の寛容の限度を越すまで、彼らの不信と堕落を忍ばれた。しかし、ついに彼らは所有物を奪われ、セムとヤペテの子孫の奴隷になった。 PP 57.5

ノアの預言は、決して独断的に憤りを宣告したり、特別の寵愛を表したものではなかった。それが、ノアのむすこたちの性格や運命を定めたのではない。それは、むしろ、彼らが各自で選んだ道と彼らが築いた品性の結果が何であるかを示したものであった。それは、彼らとその子孫の品性と行為とから見て、神の彼らに対するみこころが何であるかを表現したものであった。一般に、子供は、親の性質と傾向を受け継ぎ、親の行為を模倣する。だから、親の罪は、代々その子孫がくりかえして行うのである。こうして、ハムの罪と不敬の精神は、その子孫にも見られ、何代にもわたって彼らにのろいをもたらした。「ひとりの罪びとは多くの良きわざを滅ぼす」（伝道の書 9：18）。 PP 57.6

これに反し、セムが父を敬ったことはなんと豊かに報いを受け、その子孫には、なんとすぐれた聖徒が現れたことであろう。「主は全き者のもろもろの日を知られる」「その子孫は祝福を得る」（詩篇 37：18、26）。「それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及」ぶ（申命記 7：9）。 PP 57.7

ノアの子孫は、しばらくの間、箱舟が止まった山地に住んでいた。彼らの数が増加するにつれて、間もなく背信と分裂が生じた。創造主を忘れて、神の律法の制限から脱出しようと望んだ者らは、神を恐れる仲間の教えや模範を絶えずきらっていた。やがて、彼らは、神の礼拝者から分離することに決めた。そこで彼らは、ユフラテ河畔のシナルの平原に下った。 彼らはこの場所が、美しく、地が肥沃なのにひきつけられた。彼らは、この平原に自分たちの家を建てることにした。 PP 57.8

彼らは、ここに都市を建設し、世界の驚異となるような巨大な高塔を建てることにした。この企ては、人々が広く離散して住むことを防ぐために考案された。神は、人間が、広く地球上にわかれて住み、地に満ち、地を従わせるように指示されていた。しか

し、バベルの建設者たちは、彼らの社会を 1 つの組織にし、やがて、金世界を含むに至る帝国を築こうとした。こうして、彼らの都市は、世界帝国の首都となるのであった。その栄光は、世界の人々の賞賛と尊敬をかちえて、建設者の名を有名にするのであった。空高くそびえる壮麗な塔は、建設者の能力と知恵の記念碑として建てられ、彼らの名声を永久に後世の人々に伝えるためであった。 PP 58.1

シナルの平原の住民は、この地上に再び洪水を起こさないという神の契約を信じなかった。彼らのなかには、神の存在を否定し、洪水は自然的原因によって起こったとする者が多かった。他の者は至高者を信じ、神が洪水前の世界を滅ぼしたことを信じていた。しかし、彼らの心は、カインと同様に神に反抗的であった。彼らが塔を建てた目的の 1 つは、もし再び洪水が起こったならば、彼らの身の安全を確保するためであった。彼らは、その建造物を、水が達したところよりもはるかに高く築き上げて、どんな危険にも耐えられるようにしようと思った。そして、雲のある層にまで登れるから、洪水の原因をつきとめることもできるだろうと彼らは考えた。この企てのすべては、計画者たちの誇りをさらに高め、後世の人々の心を神から引き離し、偶像礼拝に陥れようとするものであった。 PP 58.2

塔の一部が完成したとき、そのある部分が塔の建設者の住居に当てられた。他に、りっぱな調度品を置いて飾られた部屋は、彼らの偶像に捧げられた。人々は彼らの成功を喜び、金、銀の神々をたたえ、天と地の支配者に逆らった。突然、これまで順調に進んでいた工事が止められた。建設者たちの意図をくじくために、天使か送られた。塔はすでに高くそびえて、上で働いている者が下にいる者と直接話をすることはできなかった。それで、あちらこちらに人員が配置されて、必要な資材の注文や工事の指示などを下の者に取り次いだ。こうして、伝令が次々に伝わるうちに、言葉が乱れ、必要でない材料を注文したり、初めの指示とは全く反対の指示を伝えたりするようになった。混乱とろうばいが起こった。工事は全面的に停止した。もはや調和と協力は望むことができなかった。建設者たちは、なぜ彼らの間にこの奇妙な誤解が起こったかを全く説明することができず、怒りと失望のうちに、互いに非難し合った。彼らの連合は、争闘と流血に終わったのである。いなずまが、神の怒りのしるしとして天からくだり、塔の上部を

破壊して地に落とした。人々は、神が天を支配しておられることを知らされた。 PP 58.3

この時まで、すべての人々が同じ言葉を話していた。しかし、こうなっては、お互いに言葉を理解し合う者だけがまとまって、それぞれ別れていった。「主が彼らをそこから全地のおもてに散らされた」（創世記 11：8）。この離散は、広く地に人間を住ませるための手段であって、主はこのようにして、人々がその成就を妨げようとして取った方法そのものを用いて、ご自身の目的を果たされたのである。 PP 58.4

しかし、神に逆らった人々の損失はなんと大きかったことであろう。神の目的は、人々が国家を興すために各地へ離散して行くとき、彼らが神のみこころに関する知識をたずさえていって、真理の光が衰えることなく後世に輝きわたることであった。忠実な義の説教者ノアは、洪水後 350 年生きながらえ、セムは 500 年生きながらえたから、その子孫は、神の要求が何で、神が彼らの父祖たちをどう扱われたかを知る機会があった。しかし、彼らは、このような耳ざわりな真理を聞こうとはせず、神を知ろうと望まなかった。そして、主として言葉が乱れたために、光を与え得る人々との交わりが絶たれてしまった。 PP 58.5

バベルの建設者は、神に不満の精神を抱いた。彼らは、神のアダムに対するあわれみやノアと結ばれた 恵み深い契約を感謝して記憶しようとはせず、かえって、アダムとエバをエデンから追放し、洪水によって世界を滅ぼした神の苛酷さに不平をならした。しかし、彼らは、神に向かって、専制的で苛酷であるとつぶやく一方、最も残酷な暴君の支配を受け入れていた。サタンは、キリストの死を予表した犠牲の捧げ物を軽視させようと努めていた。そして、人々の心が偶像礼拝によって暗くなると、これらの捧げ物のにせ物を捧げさせ、彼らの神々の祭壇に、自分の子供たちを捧げさせた。人々が神から離れると、正義、純潔、愛などの神の性質は圧制、暴虐、残忍などに変わっていった。 PP 58.6

バベルの人々は、神から独立した政府を設立しようと考えていた。そのなかには、神を恐れる人もいくらかあったが、不信の人々の主張に欺かれて、その企てに引き入れられていた。主は、こうした忠実な人々のために、刑罰をのばし、人々の正体が明らか

になるように時間をお与えになった。これが行われている間、神の子らは彼らに思いとどまらせるように働きかけた。しかし、人々は、一致団結して天に反逆を企てた。もし彼らが止められずに進んでいったならば、彼らは、黎明期の世界を堕落させてしまったことであろう。彼らの連合は、反逆に基づいていた。それは、自己賞揚の王国であって、神には主権も栄誉も与えられないところである。もし、この連合が許されていたならば、巨大な勢力が動き出して、この地上から義を迫放し、それとともに平和と幸福と安全を奪い去ったことであろう。「聖であって、正しく、かつ善なる」神の律法の代わりに、人々は自分たちの利己的で残忍な心のはかるところにかなった律法を定めようとしていた（ローマ７：12）。 PP 59.1

神を恐れた者は、神が干渉されるように叫び求めた。「時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見」た（創世記 11：5）。神は、世界を憐れみ、塔を建設している者の意図を挫折させ、彼らの大胆な行為の記念碑をくつがえされた。神は彼らを憐れみ、彼らの言葉を混乱させて、彼らの反逆の計画を阻止された。神は人々に悔い改めの機会を十分に与えて、長く人間の邪悪を忍ばれる。しかし、神の正しく清い律法の権威に逆らう彼らのあらゆる企てを心にとめておられる。ときおり、支配権を握った目に見えない手が、悪をおさえるためにのばされるのである。宇宙を創造し、無限の知恵と愛と真理に富んでおられるかたが天地の最高の主権者で、その力に反抗する者は、必ず罰せられるという明確な証拠が与えられた。 PP 59.2

バベルの建設者の企ては、恥と失敗に終わった。彼らの誇りの記念碑は、その愚かさの記念碑となった。それでも人々は、同じ道をたどり続けて、自己に頼り、神の律法を拒否している。これは、サタンが天で実行しようとした原則であった。カインが捧げ物を捧げたときの精神もこれと同じであった。 PP 59.3

現代にも塔の建設者がいる。無神論者はいわゆる科学的推論によって、彼らの学説を打ちたて、啓示された神の言葉を拒否する。彼らは、神の道徳的統治に批判を加え、神の律法を軽視し、人間の理性の十分なことを誇る。そして「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われないために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている」（伝道の書 8：11）。 PP 59.4

いわゆるキリスト教会の世界でも、多くの人々は聖書の明らかな教えから離れて、人間の推論や耳ざわりのよい作り話をもとにして教義をつくりあげている。そして、彼らは自分たちの塔が、天への道であると指さしている。罪人は死なない、神の律法には従わなくても救いは得られると教える雄弁家の言葉に、人々は賛嘆して耳を傾けている。もしキリストに従うと称する人々が神の標準を信じるならば、それは、彼らを一致させることであろう。しかし、人間の知恵が神の聖い言葉以上に高められているかぎり、分裂と不和は起こる。今日の互いに相入れない信条や教派による混乱は、「バビロン」という言葉で実によく表されている。この預言は、終末時代の世俗的諸教会にあてはまる（黙示録 18：2 参照）。 PP 59.5

多くの者は、富と力を手に入れて、自分たちの天国を造ろうとしている。彼らは「悪意をもって語り、高 ぶって、しえたけを語」り、人権をふみにじり、神の権威を無視する（詩篇 73：8）。高ぶる者は、しばらくの間は大きな勢力をもち、その企ては、すべて成功するかも知れない。しかし、最後には、失望と不幸を見いだすだけである。 PP 59.6

神の審判の時か近づいている。いと高き神は、人の子らが何を建てているのかを見るために来られる。彼の統治権は明らかにされ、人間の高ぶりのわざは打ちくだかれる。「主は天から見おろされ、すべての人の子らを見、そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる」「主はもろもろの国のはかりごとをむなしくし、もろもろの民の企てをくじかれる。主のはかりごとはとこしえに立ち、そのみこころの思いは世々に立つ」（詩篇 33：13、14、10、11）。 PP 60.1

第 11 章　神の召しに応じたアブラハム

本章は、創世記 12 章に基づく PP 60.2

バベルからの離散後、偶像礼拝は、また、全世界に広くゆきわたり、主は、ついにかたくなな罪人たちが悪を行うのを放任しておかれる一方、セムの系統のアブラハムを召して、後の時代の人々のために、神の律法を継承する者とされた。アブラハムは、迷信と異教のなかで成長したのであった。神の知識を保っていた彼の父の家族でさえ、周りの魅力的感化に負けて、主より「ほかの神々に仕えて」いた。しかし、真の信仰が絶えてしまったわけではなかった。アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノア、セムなどが次々に立ち上がり、神のみこころの尊い啓示を代々保ったのであった。テラの子が、この神聖な信任にあずかる者になったのである。偶像礼拝は、あらゆる面から彼を誘惑したが、彼は負けなかった。アブラハムは、信仰のない人々のなかで、信仰あつく、神にそむいた人々のなかで汚されず、ただ 1 人、真の神の礼拝を堅く守り続けた。「すべて主を呼ぶ者、誠をもって主を呼ぶ者に主は近いのです」（詩篇 145：18）。神は、ご自身のみこころをアブラハムに伝え、律法の要求や、キリストを通してなしとげられる救いについての明確な知識を彼にお与えになった。 PP 60.3

神は、当時の人々が特に重んじていた子孫の繁栄と国家の強大さとをアブラハムに約束して言われた。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」（創世記 12：2）。そして、彼の子孫から世の贖い主がお生まれになるという他のすべての約束にまさって尊い保証が、信仰の継承者にそえて与えられた。「地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」（同 3 節）。しかし、それが成就される最初の条件として、信仰の試練を受けなければならなかった。犠牲が要求されたのである。 PP 60.4

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と、神はアブラハムに言われた（同 1 節）。神が、アブラハムを清いみことばの擁護者としての偉大な任務にふさわしい者とするためには、まず、アブラハムを、彼の青年

時代の仲間から引き離さなければならなかった。親族や友人たちの感化は、主がそのしもべに与えようとされた訓練を妨げるおそれがあった。アブラハムは、特別の意味で神につながったのであるから、他国人の間に住まなければならなかった。彼の品性は、世とは全く異なり、特殊なものでなければならなかった。彼は、自分の行動を友人たちに理解してもらうように説明することもできなかった。霊のことは、霊によって理解される。そして、彼の動機と行動とは、偶像教徒の親族には理解されなかった。 PP 60.5

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」（ヘブル 11：8）。アブラハムの絶対服従は、全聖書を通じて見られる最も驚くべき信仰の例証の 1 つである。彼にとって、信仰とは、「望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認すること」であった（同 1 節）。彼は、神の 約束の成就に対する外見上の何の保証もないまま、神の約束にたよって、どこへ行くのかも知らずに、家や親族、故郷を捨てて神がお導きになる所に従おうとして出て行った。「信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ」（同 9 節）。 PP 60.6

アブラハムに臨んだ試練は、決して軽いものではなく、彼に要求された犠牲は、小さくはなかった。アブラハムは、故郷、親族、家庭と、堅いきずなで結ばれていた。しかし、彼は、ためらうことなく召しに従った。彼は約束の地が肥沃であるか、健康的気候なのか、また、そこは快適な環境で、富を蓄積する機会があるかなどは聞かなかった。神がお語りになったのであるから、神のしもべは従わなければならなかった。彼にとって、この地上で最も幸福な場所は、神が彼にいるようにお望みになるところであった。 PP 61.1

アブラハムのように、今日も、なお、多くの人々が試みを受ける。彼らは、天から直接語られる神の声を聞かないが、神は、神のみことばの教訓と摂理の出来事によって彼らを召される。富と栄誉を約束する職業を捨てて、気の合った有益な仲間を離れ、親族と別れ、克己と困難と犠牲だけを要求するように思われる道に進むように要求されるであろう。神は、彼らに仕事をさせようとしておられる。しかし、安易な生活、友人や

親族の感化は、その働きを完成するのに必要な品性の発達を妨げるのである。神は、彼らを人間的感化や援助から遠ざけて彼らに神の助けの必要を感じさせ、ただ神にだけ頼るように導いて、彼らにご自身を啓示しようとなさるのである。 PP 61.2

心に秘めた計画や親しい友との交わりを捨てて、神の摂理の召しに応じる者は誰であろうか。キリストのための損は利益であると考えで、新しい任務を引き受け、働きが始められていない地に行き、堅い決心のもとに喜んで神のみわざに従事するのは誰であろうか。このようにする人は、アブラハムと同じ信仰を持っている。そして、彼は、「永遠の重い栄光を、あふれるばかりに」彼とともに受ける。「今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」（Ⅱコリント4：17、ローマ8：18）。 PP 61.3

天からの召しは、アブラハムが「カルデヤのウル」に住んでいたときに初めて彼に与えられた。そして、彼は命じられるままにハランに移った。彼の父の家族は、ここまでいっしょであった。彼らは、偶像礼拝と真の神の礼拝もともに行っていたからである。アブラハムは、テラが死ぬまでここにとどまっていた。しかし、神の声は、父の墓を離れて前進することを命じた。彼の兄弟ナホルとその家族は家にとどまり、偶像礼拝を行った。アブラハムの妻サラのほかに、早くなくなったハランのむすこロトだけがいっしょに旅をすることになった。それでもメソポタミヤを出発した人々の数は多かった。アブラハムは、東の国の富である家畜や羊の群れをすでに多く持っていた。そして、数多くのしもべたちや部下たちに囲まれていた。アブラハムは、「集めたすべての財産と、ハランで獲た人々とを携えて」祖先の地と永久の別れを告げようとしていた（創世記12：5）。これらの人々のなかには、働くことや自己の利益を求めることよりも高尚な考え方に動かされた者が多くいた。ハランに滞在していた間に、アブラハムとサラは、ともに、他の人々を真の神の礼拝と奉仕に導いた。この人々は、アブラハムの家族につながり、彼とともに約束の国へ従ってきた。彼らは、「カナンに行こうとしていで立ち、カナンの地にきた」（同下句）。 PP 61.4

彼らが最初にとどまった所はシケムであった。アブラハムは、こちらのエバル山と向こう側のゲリジム山との間にあるモレのテレピンの木陰に天幕を張った。そこはオリ

ーブの林があって、泉がわき出ている広い草原であった。アブラハムが着いたところは、美しくよい地であった。「そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、および淵のある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びざくろのある地」であった（申命記 8：7）。しかし、主の礼拝者の目から見ると、木の茂る丘やくだものの豊かな平原には、暗い陰がかかっていた。「そのころカナンびとがその地にいた」（創世記 12：6）。アブラハムは、待望していた目的地に到着 してみると、国は、異邦人が占領していて偶像礼拝が広く行われていた。森のなかには、偽りの神々の祭壇が築かれていて、近くの山頂では人間の犠牲が捧げられていた。 PP 61.5

アブラハムは、神の約束にしっかりとすがってはいたものの、天幕を張ったときに、不幸な出来事の予感がないわけではなかった。「時に主はアブラムに現れて言われた、『わたしはあなたの子孫にこの地を与えます』」（同 7 節）。彼の信仰は、神が彼とともにおられて、悪人の思いのままになることはないという保証の言葉によって力づけられた。「アブラムは彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた」（同下句）。彼はまだ旅人であったので、間もなくベテルの近くに移り、またそこに祭壇を築いて、主の名を呼んだ。 PP 62.1

「神の友」アブラハムは、尊い模範を残した。彼の一生は、祈りの生涯であった。彼は、天幕を張ると必ずそのそばに祭壇を築いて、朝夕の犠牲を捧げるときに天幕内のすべての者を集めた。彼の天幕が移動していくと、祭壇はそこに残った。後年、アブラハムから教えを受けたカナン人が、そのあたりで放浪生活を営んだ。そうした人々のなかの誰かが祭壇を見つけると、そこに誰が住んでいたかがすぐにわかった。そして、そこに自分の天幕を張り、祭壇を修理して、生きた神を礼拝するのであった。 PP 62.2

アブラハムは、南に旅を続けていった。そして、ふたたび、彼の信仰は試みられた。天から雨は降らず、谷間の小川の水は枯れ、平原の草はしぼんだ。家畜や羊の群れの牧草がなくなり、天幕全体の者が餓死しそうになった。 PP 62.3

さて、アブラハムは、神の摂理の導きを疑わなかっただろうか。豊かなカルデヤの平原に帰りたいと思わなかったであろうか。一同は、次々と苦難におそわれるアブラハムが、いったいどうするであろうかと、しきりに彼を見つめていた。人々は、アブラハ

ムの確信がゆるぎさえしなければ、希望がもてると思った。彼らは、神がアブラハムの友であり、彼を導いておられることを確信した。 PP 62.4

アブラハムは、神の摂理の導きを説明することはできなかった。彼は自分が期待していることを現実のものとしてはいなかった。しかし、「あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」という約束を堅く信じた（同 2 節）。彼は、周囲の環境によって神のみ言葉に対する信仰が動かされるのを許さず、熱心に祈って、自分の家族と家畜の生命をつなぐ方法を考えていた。アブラハムは、ききんを避けるためにエジプトに下った。彼は、カナンを見すてたのではなかった。また困苦の末、食物にはことかかない故郷のカルデヤの地にもどろうとしなかった。彼は、約束の地にできるだけ近い所にしばらくのがれて、神が定められた場所に、間もなく帰るつもりであった。 PP 62.5

主は、摂理のうちに、この試練を与えて、服従、忍耐、信仰などの教訓を教えようとなさった。この教えは、後で苦難に耐えるように召されるすべての人のために記録されることになった。神は、神の子らを彼らの知らない道に導かれるが、神は、神に頼る者を忘れたり、見捨てたりなさらない。神はヨブに苦難がのぞむのをお許しになった。しかし、神は、彼をお見捨てにならなかった。神は、愛するヨハネが、パトモスの孤島に流されることを許された。しかし、そこで神のみ子がヨハネに会われた。そして、彼の幻は、不滅の栄光に輝く光景で満たされたのである。神は、神の民が試練にあうのを許される。それは、彼らが神に誠実を尽くし、服従することによって、彼ら自身が霊的に豊かになるためである。 PP 62.6

さらに、彼らの模範によって、他の人々に奨励を与えるためである。「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするもの」である（エレミヤ 29：11）。われわれの信仰を最もきびしく鍛え、神は、あたかもわれわれを見捨てられたのかと思わせるような試練そのものが、実は、われわれがすべての重荷を主のみもとにおろして、それに代えて彼がお与えになる平和を味わうことができるように、われわれをキリストのそば近くに 導くべきである。 PP 62.7

神は、常に神の民を悩みの炉の中で試みてこられた。クリスチャン品性という純金から不純物が取り除かれるのは、炉の火の中においてである。イエスは、この試練を見守っておられる。彼は、尊い金属をきよめて、彼の愛の輝きを反映させるのには、何が必要であるかを知っておられる。神は、綿密なきびしい試練によって、そのしもべたちを訓練なさる。神は、ある人が神のみわざの進展のために役立つ能力を持っているのを見られて、そのような人々をためされる。神は、摂理のうちに、彼らの品性をためす地位に彼らをおいて、彼ら自身でも気づかなかった欠点や弱点をあらわされる。神は、彼らがこれらの欠点を直して、奉仕にふさわしいものになる機会をお与えになる。神は彼ら自身の弱さを示して、神に頼ることをお教えになる。なぜならば、神が彼らの唯一の援助者であり、保護者だからである。こうして、神の目的は達成される。彼らには、大目的達成のための教育、訓練、鍛練、準備などが与えられる。彼らの力は、そのために与えられたのである。神が彼らを活動に召されるとき、彼らは準備が整っている。そして、天使たちは、地上の働きを完結するために力を合わせるのである。 PP 63.1

アブラハムは、エジプトに滞在していた間に、彼がまだ人間的に弱く、不完全であるという証拠をあらわした。彼は、サラが妻であることを隠して、神の守護に対する不信を示し、これまで彼の生涯において何度となくりっぱに示されたあの大いなる信仰と勇気を欠いたのである。サラは美しい女であった。アブラハムは、浅黒いエジプト人はきっと美しい外国人をほしがり、彼女を得るためには、平気でその夫を殺すことだろうと考えた。彼は、サラが父の娘ではあったが、自分の母の娘ではなかったので、自分の妹だと言っても、うその罪にはならないと考えた。しかし、ふたりの間の真の関係をこうして隠したことは欺瞞であった。全く正直であることから少しでもそれることを神は許されない。アブラハムの信仰が欠けていたために、サラは大きな危険にさらされた。エジプトの王は、彼女の美しさを聞いて、宮廷に召し入れ、彼女を妻に迎えようとした。しかし、主は、王家に刑罰を下し、大きなあわれみをもってサラを守られた。ハロは、こうして真実を知り、自分が欺かれたことを怒って、アブラハムを責めた。「あなたはわたしになんという事をしたのですか。……あなたはなぜ、彼女はわたしの妹ですと言ったのですか。わたしは彼女を妻にしようとしていました。さあ、あなたの妻はここに

います。連れて行ってください」と言って妻をかえした（創世記 12：18、19）。 PP 63.2

アブラハムは、王から非常な好意を受けていた。こうなったからといって、パロは、アブラハムとその仲間に危害を加えることを許さず、彼らを安全に国外に送り出すように護衛の者に命じた。このころ、エジプト人が外国の羊飼いと飲み食いして交際することは、法律で禁じられていた。パロがアブラハムを去らせたことは、親切で寛大な行為であった。しかし、彼は、アブラハムにエジプトを去ることを命じた。王は、彼がとどまることを許さなかった。パロは、知らずに、アブラハムに大きな危害を加えそうになった。しかし、神が手を下されて、王が大きな罪を犯さないようにしてくださった。パロは、この旅人が天の神の恵みを受けていることを知り、このように神の恵みにあずかっている者を国内にとどめておくことを恐れた。もしもアブラハムがエジプトにとどまっていたら、彼の富と名誉の増大は、エジプト人のねたみとむさぼりをひき起こして、彼に危害が加えられ、その責任がパロ王に帰せられて、ふたたび、王家に災いが下るかも知れなかった。 PP 63.3

パロに与えられた警告は、その後のアブラハムの異邦人との交際を保護するものとなった。というのは、このことは、秘密にしておけなかった。そして、アブラハムが礼拝する神は、そのしもべを守り、彼に危害が加えられるならば、報復なさることが明らかにされた。天の王の子らの 1 人に悪を行うことは危険である。詩篇記者は、アブラハムのこの経験を引用して、選民について語り、次のように言っている。神は、「彼らのために王たちを懲らしめて、言われた、『わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言 者たちに害を加えてはならない』と」（詩篇 105：14、15）。 PP 63.4

エジプトでのアブラハムの経験と幾世紀もたった後の彼の子孫の経験には、興味深い類似点がある。両方ともききんのために、エジプトに下って滞在した。彼らを保護するために下った神の刑罰によって、エジプト人は、イスラエルの人々を恐れた。そして、彼らは、異邦人から贈り物を受けて豊かになり、大きな資産を持って立ち去った。 PP 64.1

第 12 章　カナンにおけるアブラハム

本章は、創世記 13～15 章、17：1～16、18 章に基づく PP 64.2

アブラハムは、「家畜と金銀に非常に富んで」カナンに帰った。ロトも彼といっしょにいた。彼らは、ふたたびベテルに来て、以前に築いた祭壇のそばに天幕を張った。やがて彼らは、財産が増すにつれて悩みも増すことに気づいた。彼らは、困難と試練のただなかにあっては仲よくいっしょに住んだのであるが、繁栄すると彼らの間に争闘の危険があった。牧草は、両方の家畜と群れを養うには十分ではなかった。そのため、牧者どうしの間にたびたび衝突が起こり、アブラハムとロトにその解決を求めるのであった。彼らが別れなければならないことは明らかであった。アブラハムは、ロトよりも年長で、財産や地位においてもすぐれていた。それでも、アブラハムが最初に平和維持の案を提出した。全地は、神がアブラハムに与えられたものであった。しかし、彼は、穏やかにその権利を譲るのであった。 PP 64.3

アブラハムは言った。「わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがないようにしましょう。全地はあなたの前にあるではありませんか。どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう」（創世記 13：8、9）。 PP 64.4

ここに、アブラハムの高潔、無我の精神があらわされた。これと同様の立場におかれたとき、なんと多くの人々が、自分の権利や優先権を主張してやまないことであろう。こうして、どれほど多くの家庭が破壊されたことであろう。どれほど多くの教会が分裂して、真理の働きが悪人たちの侮蔑と物笑いの種になったことであろう。「わたしとあなたの間にも……争いがないようにしましょう」。親族関係だけでなくて、真の神の礼拝者でもあるから、「わたしたちは身内の者です」とアブラハムは言った。全世界の神の子らは、1 つの家族である。そして同じ愛と融和の精神が彼らを支配しなければならない。「兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい」とわれわれ

の救い主はお教えになった（ローマ 12：10）。誰にでも礼儀正しくすることを身につけ、人々からしてほしいと思うことを、喜んで人々にするならば、人生の不幸の半分はなくなってしまうことであろう。自己誇張は、サタンの精神である。しかし、キリストの愛を心に持つ者は、自分の利益を求めない愛をもつようになる。そうした人は、「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」という勧告を心にとめるべきであろう（ピリピ 2：4）。 PP 64.5

ロトは、財産をもつことができたのはアブラハムといっしょにいたためであったが、彼は恩人に感謝の気持ちをあらわさなかった。まず、アブラハムに選択権を譲るのが礼儀であったが、彼は、そうはせずに自分のほしいものを全部手に入れようと欲張った。「ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、……ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた」（創世記 13：10）。パレスチナ全土のなかで、ヨルダンの谷は、最も地味が豊かな地域で、見る者にかつての楽園を思わせた。そして、それは、彼らが少し前に出てきたばかりの、豊かなナイル川沿岸の平野の美しさと肥沃さに匹敵していた。そこには、また、豊かで美しい 都会があって、そのにぎやかな市場では、商売が繁盛しそうに思われた。ロトは、世的利益の幻に目がくらみ、そこで当面する道徳的、霊的害悪を見落としていた。低地の住民は、「主に対して、はなはだしい罪びとであった」（同 13：13）。しかし、彼はそのことを知らなかった。たとえ、それを知ってもあまり重きをおかなかった。「ロトはヨルダンの低地をことごとく選びとって」「天幕をソドムに移した」（同 13：11、12）。ロトは、この利己的選択の恐ろしい結果については、なんの予測もしなかった。 PP 64.6

アブラハムは、ロトと別れたあとで、ふたたび、全地を与えるという約束を主から受けた。この後、間もなく、彼はヘブロンに移り、マムレのテレビンの木の下に天幕を張り、そのかたわらに主の祭壇を築いた。彼は、オリーブ園やぶどう園、穀物の穂が波うつ畑、周囲の山々の広々とした牧場にかこまれた高原の大気を吸って、そぼくな家長生活に満足し、ソドムの谷の危険な快楽は、ロトにゆだねた。 PP 65.1

アブラハムは、周囲の国々から、偉大な族長、賢明で力ある首長として尊敬された。彼は、隣人に自分の感化を及ぼさないようにはしなかった。彼の生活と品性は、偶像礼拝者たちと著しく異なっていて、真の信仰の非常によい感化を及ぼした。彼の神への忠誠は不動のものであるとともに、彼の親しみやすさと情深さは、人々の信頼と友情をかち得、彼の飾らない偉大さは、尊敬と栄誉を受けた。 PP 65.2

アブラハムは、宗教をひそかにしまっておいて、所有主がひとりで楽しむ秘宝のようなものだとは思わなかった。真の宗教は、そのようにしまっておけるものではない。そのような精神は福音の原則に反する。キリストが心のなかに住んでおられるなら、彼の臨在の光をかくすことも、あるいは、その光が暗くなることもあり得ない。かえって、魂にかかる自我と罪の霧が、義の太陽の明るい光に照らされて、日ごとに消されていくにつれて、ますます輝きを増すことであろう。 PP 65.3

神の民は、地上の神の代表者である。神は、この世界の道徳的暗黒のなかで、彼らが光になることを望まれる。彼らは、全国の都市や村々に散在した神の証人であって、神は、彼らを通して、神のみこころと神の驚くべき恵みの知識を不信の世界にお伝えになる。大いなる救いにあずかった者がすべて、主のための伝道者になるように神は計画された。クリスチャンの敬神深さを標準にして、世の人々は福音を評価する。忍耐強く試練に耐え、感謝して祝福を受け、柔和、親切、あわれみ、愛を習慣的にあらわすことなどが、世の人々の前で品性から輝き出る光であって、生まれつきのままの心の利己心から出る暗黒との相違を示す。 PP 65.4

アブラハムは、信仰深く寛大で、よく服従し、質素な旅人の生活にあまんじていたが、彼は、また、外交的手腕にたけ、戦いにおいても勇敢で、すぐれた技量をもっていた。アブラハムは、新しい宗教の教師として知られていたにもかかわらず、彼が住んでいたアモリの平原の支配者であった 3 兄弟は、アブラハムに、彼らと同盟を結んで安全を確保することを申し入れて、その友情を示した。というのは、国内には暴力と圧迫が満ちていたからである。やがて、彼がこの同盟を活用する事件が起こった。 PP 65.5

エラムの王、ケダラオメルは、14 年前にカナンに侵入して、これを属国にした。ところが、数人の王が反乱を起こしたので、エラムの王は、他の 4 か国の連合軍を率いて、ふたたび彼らを屈服させようと侵入してきた。カナンの 5 人の王は、力を合わせて、シデムの谷で侵略軍と対戦したが完全に打ち破られた。軍隊の大部分は殺され、のがれた者は山に身をかくした。勝利者は、低地の町々をかすめ、たくさんの戦利品と多くの捕虜をつれて引き上げた。そのなかに、ロトとその家族がいた。 PP 65.6

アブラハムは、マムレのテレビンの林の中で平和に暮らしていたが、戦場からにげてきた者から、戦況と、彼のおいにふりかかった災難を聞いた。彼は、ロトの忘恩を不快に思っていなかった。彼のロトに対する愛情がすべて呼びさまされ、彼を救い出そうと決心した。アブラハムは、まず、神の助言を求めて、戦いの準備にとりかかった。アブラハムは、自分の天幕から、神を恐れ、よく主人に仕え、戦いの訓練を受け たしもべたち 318 人を召集した。彼と同盟を結んだマムレ、エシコル、アネルも部下を率いてアブラハムに加わり、ともに侵略者の追撃に出発した。エラムとその連合軍は、カナンの北境のダンに陣営を張っていた。彼らは勝ち誇って、敗北した敵が攻めてくる心配もなく、陽気に騒いでいた。アブラハムは、異なった方角から接近するために、軍隊を区分けし、夜、陣営を襲った。この激しい不意のアブラハムの攻撃は、またたく間に勝利をおさめた。エラムの王は殺され、あわてふためいた軍勢は完全に敗北した。 PP 65.7

ロトとその家族は、他の捕虜や家財とともに取りかえされ、たくさんの戦利品が勝利者の手に入った。神のもとにあったアブラハムが勝利をおさめるのは当然のことであった。主の礼拝者は、国家のために大きな貢献をしたばかりでなく、彼自身が勇者であることをも証明した。義は決しておくびょうではない。そして、アブラハムの宗教は、権利を守り、圧迫された者を擁護するために、彼に勇気を与えたものであることが明らかに示された。彼の英雄的行為は周囲の民族の間に広く知れわたった。アブラハムが凱旋すると、ソドムの王は、勝利者をたたえるために部下をつれて出迎えた。彼は、アブラハムに、戦利品は自分のものとし、捕虜だけを返してほしいと頼んだ。戦いの習慣によれば、戦利品は勝利者に属することになっていた。しかし、アブラハムは、利益を目

的に戦ったのではなかったので、彼は人々の不幸に乗じることを拒み、ただ彼の同盟国の人々が受ける分を求めただけであった。 PP 66.1

こうした試練のときに、アブラハムのような高潔さをあらわすことができる人は少ない。このような莫大な戦利品を手に入れることができる誘惑に勝利する者は少ないことであろう。彼の模範は、利己主義と金銭目当ての精神に対する譴責である。アブラハムは、正義と人道の要求するところを尊重した。彼の行動は、「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」との霊感の言葉の実例であった（レビ 19：18）。「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。わたしは糸 1 本でも、くつひも 1 本でも、あなたのものは何も受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、あなたが言わないように」と彼は言った（創世記 14：22、23）。彼は、こうして、利益のために戦いに参加したとか、彼の繁栄は、人々の贈り物や好意によるものだとか言う口実を人々に与えなかった。神が、アブラハムを祝福すると約束されたのであった。であるから、神に栄光を帰すべきであった。 PP 66.2

勝利したアブラハムを出迎えたもう 1 人は、サレムの王メルキゼデクであった。彼は、アブラハムの軍隊の労をねぎらうために、パンとぶどう酒とを持ってきた。彼は、「いと高き神の祭司」として、アブラハムを祝福し、アブラハムによって、こうした大きな救いが与えられたことを神に感謝した。そして、アブラハムは、「彼にすべての物の 10 分の 1 を贈った」（同 14：20）。 PP 66.3

アブラハムは喜びに満ちて、自分の天幕と群れのところにもどった。しかし、彼は気にかかることがあった。彼は、平和を愛好し、できるだけ敵意と争闘をさけてきた。彼は、実際に自分の目でみた殺人の光景を思い出して戦慄した。しかし、敗北した国々は、ふたたびカナン侵略を再開することはまちがいなく、特に、彼のところに復讐にやってくるであろう。こうした諸国の争闘に巻きこまれては、彼の平和な生活の静けさは破られてしまうであろう。それに、彼は、まだカナンの地を手に入れておらず、約束の成就が与えられている世継ぎを、今望むこともできなかった。 PP 66.4

夜の幻のうちに、ふたたび天の声が聞こえた。「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」と諸王の

王が言われた（同 15：1）。しかし、彼の心は不安に閉ざされ、これまでのように疑わずに確信をもって約束をつかむことができなかった。彼は、それが成就するという具体的証拠を祈り求めた。むすこが与えられないのに、どのようにして契約は実現するのであろうか。彼は言った。「わたしには子がなく、……あなたはわたしに何をくださろうとするのですか」「わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでし よう」（同 15：2、3）。アブラハムは、彼の信頼するしもべのエリエゼルを養子にして、財産を相続させようと思った。しかし、彼自身のむすこが彼の世継ぎになるという保証が与えられた。そして、彼は、天幕の外に連れ出され、天に輝く無数の星を見るように言われた。彼がその通りにすると、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」という言葉が語られた（同 15：5）。「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」（ローマ４：3）。 PP 66.5

それでもアブラハムは、彼の信仰の確証と神の彼らに対する恵み深いみこころは成就されるということの後世に対する証拠として、何か目に見えるしるしを求めた。主は、当時の人々が厳粛な契約の批准をするのと同じ方法によって、アブラハムと契約を結ぶことに応じられた。アブラハムは、神の指示に従って、3 歳の雌牛、雌やぎ、雄羊などを犠牲にし、そのからだを裂いて、少し間を置いて並べた。それに、彼は、山ばとと家ばとのひなを加えたが、これは裂かなかった。こうしておいて、アブラハムは、うやうやしく、犠牲の裂かれたものの間を通り、永遠の服従を厳粛に誓った。彼は、夕暮れ近くまで犠牲のそばにいて、荒い鳥に汚されたり、食い散らされたりしないように、じっと見守っていた。日暮れに彼は深い眠りにおちた。すると「大きな恐ろしい暗やみが彼に臨んだ」（創世記 15：12）。そして、神の声が聞こえ、約束の国をすぐ所有することを期待しないように命じ、また、カナンに定住する前に、彼の子孫は苦難にあうことを予告した。ここで、キリストの死という大きな犠牲と栄光の来臨による贖罪の計画が彼に示された。アブラハムは、また、地上がふたたびエデンの美しさに回復されて、永遠の所有として彼に与えられ、約束がついに完全に成就することを示された。 PP 67.1

この神と人との契約のしるしとして、神の臨在の象徴である煙の立つかまどと炎の出るたいまつが、裂かれた犠牲の間を通りすぎ、それらを完全に焼き尽くした。アブラハムは、「エジプトの川から、かの大川ユフラテ」に至るカナンの地が、彼の子孫に与えられるという保証の言葉を重ねて聞いた（同 15：18）。 PP 67.2

アブラハムがカナンに住んで 25 年ほどたったときに、主は彼に現れて、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われた（同 17：1）。アブラハムが地に伏していると、「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう」という言葉が続いた（同 17：4）。この契約の成就のしるしとして、これまで、アブラムと呼ばれていた名が「多くの国民の父」を意味するアブラハムに変えられた。サライの名もサラ（王妃）となった。「彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」と神は言われた（同 17：16）。 PP 67.3

このとき、アブラハムは、「無割礼のままで信仰によって受けた義の証印」として割礼を受けた（ローマ 4：11）。割礼は、アブラハムとその子孫が、自分たちを神の奉仕にささげて偶像礼拝者から離れ、そして、神が彼らを神の特別の宝としてお受けになったことのしるしとして、守るべきものであった。彼らは、この儀式を行うことにより、アブラハムに与えられた契約の条件を彼らの側で成就することを誓うのであった。彼らは、異邦人と結婚してはならなかった。なぜなら、そうすることによって、彼らは、神とその清い律法に対する尊敬を失い、他の国々の罪の習慣に誘惑され、偶像礼拝に陥るからである。 PP 67.4

神は、アブラハムに大きな名誉をお与えになった。天使が友だち同士のように彼と歩き、語った。ソドムに神の刑罰が下されようとしたときも、その事実が彼にはかくされなかった。そして、彼は、罪人のために、神にとりなす者となった。彼と天使たちとの出会いは、美しいもてなしの模範である。 PP 67.5

暑い夏の真昼間、アブラハムが天幕の入口にすわって静かなけしきをながめていると、はるかむこうから 3 人の旅人が近づいてくるのが見えた。旅人たちは、彼の天幕に近づく前に、立ちどまって行き先の相談をしているように見えた。アブラハムは、彼

らが他の方向へ行こうとするような様子を見て、彼らの依頼を受ける前に立ち上がって、急いで彼らのそばに寄り、礼をつくして、自分の家に止まってしばらく休息 をとるように願った。アブラハムは、彼らがちりによごれた足を洗うために自分で水をくんできた。そして、旅人が涼しい木陰で休んでいる間に、アブラハムは食事の用意をした。その準備が終わると、客が食事をしている間、彼は、そのそばにかしこまって立っていた。神は、このていねいな行為を聖書に記録する重要性が十分にあるものとお認めになった。そして、1000 年ほどたって、使徒は、霊感によってそのことに言及してこう言った。「旅人をもてなすことを忘れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちをもてなした」（ヘブル 13：2）。 PP 67.6

アブラハムは、こうした客を、普通の旅に疲れた 3 人の旅人であると思い、そのなかの 1 人は、罪のないお方として、彼が礼拝をする方であることを少しも知らなかった。ところが、天からの使者の真の性格があらわされた。彼らは、怒りの使者として、刑罰を下すために行く途中であったが、信仰の人アブラハムには、まず祝福の言葉を語った。神は、厳格に罪を示し、悪を罰するのであるが、報復を喜ばれない。滅びのわざは、無限の愛の神には、「そのわざは異なったもの」である（イザヤ 28：21）。 PP 68.1

「主の親しみは主をおそれる者のためにあり」（詩篇 25：14）。アブラハムは、神を尊んだ。それで、主も彼を尊び、神の会議に彼を加えて、みこころを彼にあらわされた。「わたしのしようとする事をアブラハムに隠してよいであろうか」と主は言われた（創世記 18：17）。「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、わたしはいま下って、わたしに届いた叫びのとおりに、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」（同 18：20）。神は、ソドムの罪の量を知っておられた。しかし、彼は、彼の処置の正当性を、人間が理解できるように、人間的表現をなさった。主は、罪人に刑罰を下すに先だって、主ご自身が行って、彼らの行動を調査される。もし彼らが、まだ神の恵みの限度を越えていなければ、彼は、なお、彼らに悔い改めの機会をお与えになる。 PP 68.2

2 人の天使は、アブラハムとあとの 1 人を残して出かけたが、彼はいま、この方が神のみ子であることを知った。信仰のあつい彼は、ソドムの住民のためにとりなした。彼は、剣によって彼らを救ったことがあるが今度は祈りによって彼らを救おうとした。ロトと彼の家族はまだそこに住んでいた。かつて、エラム人から彼らを救ったアブラハムの無我の愛は、もし、神のみこころならば、神の激しい刑罰から彼らをふたたび救い出したいと願った。 PP 68.3

彼は、深い尊敬と謙虚な心で訴えた。「わたしはちり灰に過ぎませんが、あえてわが主に申します」（同 18：27）。自信や自己の義を誇る心はなかった。彼は、自分の服従とか神のみこころを行うための犠牲とかを理由にして、恵みを求めたのではない。彼は、自分自身罪人であるが、罪人のために哀訴した。神に近づく人々は、すべてこのような精神を持たなければならない。アブラハムは、愛する父親に訴える子供のような確信をあらわした。彼は、天の使者のそばに近づいて熱心に訴えた。ロトは、ソドムの住民にはなったけれども、彼は、住民の罪に参加していなかった。アブラハムは、人口の多いこの町に、真の神の礼拝者がほかにもあるにちがいないと思った。そう考えて、「正しい者と悪い者とを一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさらないでしょう。……全地をさばく者は公義を行うべきではありませんか」と彼は訴えた（同 18：25）。アブラハムは 1 度だけでなく何度も願った。願いが聞かれるにつれて大胆になり、もし、10 人の義人がソドムにいたならば、町は救われるという確証をついに得た。 PP 68.4

アブラハムは、滅亡に瀕した魂への愛に動かされて祈った。彼は、腐敗したソドムの町の罪はきらったが、罪人が救われることを願った。アブラハムがソドムのために抱いた深い関心は、われわれが悔い改めていない人々に対して感じなければならない切実な思いを示している。われわれは、罪を憎まなければならないが、罪人には、憐れみと愛を持たなければならない。われわれの周りには、ソドムにのぞんだのと同じように、希望なく恐ろしい破滅に陥っている魂かある。毎日、だれかの恵みの期間が閉じている。毎 時間、だれかが恵みのとどかないところへ移っていく。それなのに、恐ろしい運命をさけるように罪人に訴え、警告する声はどこにあるのだろうか。罪人を死から引き返

すためにどこに救いの手がさしのべられているだろうか。謙遜に、しかも忍耐強い信仰をもって、罪人のためにとりなす人はどこにいるであろうか。 PP 68.5

アブラハムの精神は、キリストの精神であった。神のみ子ご自身が罪人のために偉大な仲保者になられた。罪人の贖罪のためにその代価を払われたかたが、人間の魂の価値を知っておられる。キリストは、なんの汚れもない清い性質をもった者だけがいだくことのできる悪への敵意を示すとともに、無限の慈悲をもった者だけがいだくことのできる愛を罪人にお示しになった。キリストは、ご自分が十字架の苦しみのなかで、全世界の恐ろしい罪の重荷を背負われたとき、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、嘲笑者や殺人者のために祈られた（ルカ 23：34）。 PP 69.1

アブラハムについては、「彼は『神の友』と唱えられ」「信じて義とされるにいたるすべての人の父」としるされている（ヤコブ 2：23、ローマ 4：11）。この忠実な父祖アブラハムについて、神ご自身このようにあかしされた。「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」（創世記 26：5）。また、「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」（同 18：19）。アブラハムは、非常に名誉ある召しを受けた。彼は、世界に対して、数世紀間にわたって神の真理の擁護名、また、保持者となる民族の父となり、その民族のなかから、地のすべての国々を祝福する約束のメシヤが来臨なさるのであった。しかし、アブラハムを召された神は、彼の価値を認められた。語られるのは神である。人の思いを遠くから知り、人を正しく評価される神は、「わたしは彼を知ったのである」と言われる。アブラハムの側においては、利己的目的のために、真理を裏切ることはなかった。彼は律法を守り、公明正大にふるまうであろう。彼は、自分自身が主を恐れるだけでなくて、家庭のなかで宗教をはぐくむであろう。彼は、義をもって、家族を教える。神の律法が彼の家の規則になるのであった。 PP 69.2

アブラハムの家には、1000 人以上の人々がいた。彼の教えを受けて、1 人の神を礼拝するようになった者は彼の天幕に住むようになった。そして、彼らは、ちょうど学校のように、ここで真の信仰の代表者となるための教育を受けた。こうして、彼の上に、大きな責任が負わせられた。彼は、家族のかしらたちを教育していた。そして、彼の管理の方法は、彼らが治める各家庭で実行されるのであった。 PP 69.3

初期のころ、父親は家族の統治者であり、祭司であって、子供たちが自分の家族をもった後までも、彼らの上に権威をふるった。彼の子孫は、彼を宗教上ならびに、政治上の首長として尊ぶように教えられた。この制度は神の知識を保存させるものであったから、アブラハムは、この家長制度の組織を永続させようと努力した。各地に広く行きわたって、深く根をおろした偶像礼拝に対する防壁を築くために、家族の全員をまとめることが必要であった。罪悪に親しむならば、知らず知らずのうちに原則を犯すようになることをアブラハムは知っていたので、彼の天幕の住人たちが、異教徒と交わり、偶像礼拝の習慣を見ることがないように、あらゆる方法によって彼らを守ろうとした。彼は、偽りの宗教のどんな形のものも閉め出し、真の礼拝の対象である生きた神の栄光と威厳を人々の心に深く印象づけようと最大の注意を払ったのである。 PP 69.4

神の民が異教徒との接触をできるだけ断ち、周囲の国民と交わらず、自分たちだけで生活するようにしたのは神ご自身の賢明な処置であった。神が、父祖アブラハムを偶像礼拝者であった親族から離れさせたのは、当時、メソポタミヤにはびこっていた腐敗的感化から、彼とその家族を引き離して、教育と訓練を施し、各時代にわたって、彼の子孫に真の信仰を清く保たせるためであった。 PP 69.5

アブラハムは、彼の子供たちと家族を愛していたので、彼らの信仰を保護し、彼が彼らに与えることのできる最も尊い遺産として、神の律法の知識を彼らに教えた。これは、彼らが世界に伝えるべきものであった。すべての者が、天の神の統治下にあることを教えられた。親が子供を圧迫したり、子供が不従順であったりしてはならなかった。神の律法が各自の義務を示していたから、それに服従する者だけが、幸福と繁栄を得ることができた。 PP 70.1

彼自身の模範、彼の日常生活の無言の感化は、不断の教訓であった。王たちの賞賛をかちえたゆるがない高潔な精神、慈愛と無我の精神による親切は、家庭でも発揮された。生活に芳香がただよい、品性の気高さと美しさとは、彼が天と結ばれていることをすべての者にあらわした。彼は、どんなに卑しい身分の奴隷の魂も軽視しなかった。彼の家では、主人としもべを別々に扱い、金持ちと貧者を区別して扱う規則はなかった。だれもが、彼とともに生命の恩恵を受け継ぐ者として、公平と同情をもって扱われた。 PP 70.2

アブラハムは、「家族に命じ」た。彼は、子供たちの悪の傾向を放任するような恐ろしいことをせず、大目に見て、えこひいきをするような愚かさや弱さもなく、また、誤った愛情におぼれて、自分の義務を曲げることもなかった。彼は、正しい教育を施したばかりでなく、公正と義の律法の権威を保ったのである。 PP 70.3

今日、彼の模範にならう者がいかに少ないことであろう。多くの親たちは、盲目的で、利己的な感傷とまちがった愛情に陥り、子供たちが彼らのまだ十分に成長していない判断力と訓練されていない欲望とをほしいままにするのを放任している。これは、青年たちにとって全く残酷なことであり、世界にとって大きな罪である。家庭と社会の無秩序の原因は、親の怠慢にある。それは神の要求に従うかわりに、青年たちの好むままを行う欲求をますます強固にする。こうして、彼らは神のみこころを行うことをきらって成長し、その非宗教的で不従順な性質を彼らの子孫に伝える。親は、アブラハムのように、家族に服従を命じる必要がある。神の権威に服従する第 1 歩として、親の権威に服従することを教えて実行させよう。 PP 70.4

神の律法が、宗教的指導者にさえ軽視されることは、大きな害悪を生んでいる。神の律法は、もはや人間を拘束しないという教えが一般に広まっているが、これは、人々の道徳に偶像礼拝と同じ結果を与えている。神の清い律法の要求を低下させようとする人々は、家族と国家の組織の根底に直接攻撃を加える。信仰は持っていても神の律法に従っていない親は、主の道を守るように家族に命じない。神の律法が、生活の規準にされていない。子供たちがそれぞれの家庭を築くときに、彼ら自身が教えられなかったこ

とを子供たちに教える義務は感じない。今日、不信仰な家庭がこんなに多いのはそのためである。堕落がこんなに深く、広く及んでいるのもこのためである。 PP 70.5

親自身が、全心をこめて主の律法に従って歩かないかぎり、子供たちに服従を命じることはできない。この点に改革が必要で、深く、広い改革が行われなければならない。親に改革が必要であり、牧師に改革が必要である。彼らの家庭に、神が必要である。もし彼らが変化を希望するならば、彼らの家庭に神の言葉を入れ、その勧告に従わなければならない。それは、彼らに語る神の声であり、それに絶対に服従すべきであることを、彼らは子供たちに教えなければならない。親は忍耐深く子供たちを教え、神を喜ばせるためには、どのように生きるべきかを、やさしく、たゆまず教えなければならない。こうした家庭の子供たちは、無神論の詭弁に立ちむかう準備がある。彼らは、聖書を彼らの信仰の基礎として受け入れた。彼らは、懐疑論の潮流に流されない土台を持っている。 PP 70.6

あまりにも多くの家庭で、祈りがなおざりにされている。親たちは、朝夕の礼拝をする時間がないと考えている。彼らは、植物を繁茂させる輝く日光や雨、聖天使の保護などの豊かな恵みに対して、神に感謝する時間を少しもさくことをしない。彼らは、神の助けと導きを求め、家庭にイエスがおとどまりになるように、祈りを捧げる時間を持たない。彼らは、神に ついても天のことについても考えず、牛馬のように働く。彼らが何の望みもなく、失われることのないように、その贖いとして、神のみ子は生命をお与えになった。人間は、それほど尊い魂を持っている。それだのに、彼らは滅びてしまう獣と同様に、神の大きな恵みに感謝することをしない。 PP 70.7

昔の父祖たちのように、神を愛すると告白する者は、どこに天幕を張っても、そこに主の祭壇を築かなければならない。すべての家が祈りの家でなければならない時があるとすれば、それは今である。父親も、母親も、自分たちと子供たちのために、謙遜に願いをなし、心を神にむけなければならない。父親は、家庭の祭司として、朝夕の犠牲を神の祭壇に捧げ、妻と子供たちは、祈りと賛美に加わろう。イエスは、そうした家庭に喜んでとどまられる。 PP 71.1

すべてのクリスチャンの家庭から、清い光が輝き出なければならない。愛は、行動に現されるべきである。愛は、家庭のすべての交わりにあふれ出て、思いやりとおだやかさと、自分を忘れたやさしさとなって現れるべきである。この原則が実行されている家庭がある。それは、神が礼拝され、真の愛が支配している家庭である。これらの家庭から、朝夕の祈りはこうばしいかおりのように、神のみもとにのぼり、神の恵みと祝福は朝露のように祈る者の上に降るのである。 PP 71.2

よく治められたクリスチャンの家庭は、キリスト教の真実性を支持する力強い論証で、無神論者もこれに反論できない。こうして、家庭が子供に感化を及ぼし、アブラハムの神が彼らとともにおられることが、すべての人にわかる。もし、クリスチャンと言っている者の家庭が、宗教的に正しい型のものであれば、それは、非常によい感化を与える。彼らは、真に「世の光」となる。天の神は、すべての忠実な親たちに、アブラハムに語られた言葉を語られる。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」（同 18：19）。 PP 71.3

第 13 章　信仰をためされたアブラハム

本章は、創世記 16 章、17：18～20、21：1～14、22：1～19 に基づく PP 71.4

アブラハムは、むすこが与えられるという約束を疑わずに信じたが、神がご自身の時と方法によって、みことばを成就なさるのを待たなかった。神の力にたよる彼の信仰をためすために、神は、約束の成就が遅れるのを許された。しかし、アブラハムはこの試練に耐えられなかった、サラは年をとっていたので、子供が与えられることは不不可能だと考え、神のみこころが成就する計画として、彼女の侍女のひとりをアブラハムが第 2 の妻としてめとるように提案した。当時、一夫多妻は広く行われていたので罪だとは思われなくなっていた。しかしそれが、神の律法に違反することはまちがいなく、家族関係の神聖さと平和にとって致命的であった。アブラハムとハガルとの結婚は、彼ら自身の家庭だけにとどまらず将来の世代にまでも悪い結果をもたらした。 PP 71.5

ハガルは、アブラハムの妻という新しい地位を名誉に感じ、アブラハムから出る大国民の母になろうと望み、高慢不遜になって、女主人を軽蔑するようになった。互いに嫉妬しあって、平和な家庭の幸福が破られてしまった。アブラハムは両方の言い分を聞かされ、もう 1 度、彼らを和合させようと努力したがむだであった。アブラハムがハガルをめとったのは、サラの熱心な勧めによったのであるが、サラは、それをいま、彼のせいにして責めるのであった。サラは、彼女の敵を追い出そうと望んだ。しかし、アブラハムはそうすることを許さなかった。なぜなら、ハガルは、彼が約束の子として、いとしんで望んでいる彼の子の母親となるからであった。それでも彼女はサラの侍女であり、サラの支配下にあった。ハガルの高慢な精神は、自分の横柄さに対して取られたきびしさに耐えられな かった。「サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライの顔を避けて逃げた」（創世記 16：6）。 PP 71.6

彼女は荒野にのがれた。そして、泉のかたわらに、さびしくただ 1 人で休んでいると、主の使いが人間の姿をとって彼女に現れた。主の使いは、「サライのつかえめハガルよ」と呼びかけ、彼女の立場と義務を思い起こさせて、「あなたは女主人のもとに帰

って、その手に身を任せなさい」と命じた（同 16：8、9）。しかし譴責に慰めの言葉が混じっていた。「主があなたの苦しみを聞かれたのです」「わたしは大いにあなたの子孫を増して、数えきれないほどに多くしましょう」（同 16：11、10）。そして、神の恵みの永遠の記念として彼女は、その子をイシマエル（神は聞かれる）と呼ぶように命じられた。 PP 72.1

アブラハムは、100 歳近くなった時に、むすこが与えられる約束がくり返し与えられ、将来の世継ぎはサラの子でなければならないという確証が与えられた。しかし、アブラハムは、まだ約束を理解しなかった。彼は直ちにイシマエルのことを考え、彼によって神の恵み深いみこころが成就するという考えを捨てなかった。彼は自分のむすこを深く愛して、「どうかイシマエルがあなたの前に生きながらえますように」と叫んだ（同 17：18）。ふたたび、まちがう余地のない言葉で約束がくり返された。「あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう」（同 17：19）。しかし、神は、父の祈りをお忘れにならなかった。「またイシマエルについてはあなたの願いを聞いた。わたしは彼を祝福して……彼を大いなる国民としよう」（同 17：20）。 PP 72.2

一生待ったかいがあって、イサクが生まれ、心からの願いがかなったアブラハムとサラの天幕は、喜びに満たされた。しかし、ハガルにとって、このことは楽しみにしていた野心が打ち砕かれることであった。もう青年になっていたイシマエルは、天幕のなかのすべての人から、アブラハムの富の相続者、また、彼の子孫に約束された祝福の継承者とみなされていた。ところが、突然彼は退けられた。母子は失望してサラの子を憎んだ。誰もが喜んでいるのがねたましく思われ、ついにイシマエルは、公然と神の約束の継承者をあざわらった。サラは、イシマエルの狂暴な性質が、いつまでも争いの種になるのを察して、ハガルとイシマエルを天幕から追い出すようにアブラハムに訴えた。アブラハムは非常な苦悩に陥った。なお、深く愛しているむすこのイシマエルを、どうして追放することができたであろう。彼は苦しんで、神の導きを求めた。主は、天使によって、サラの願いを聞き入れるように指示された。家族の一致と幸福を回復するにはこれしかなかったから、イシマエルやハガルに対する愛が妨げとなってはならなかった。

そして、イシマエルは父の家庭から離れても、神に見捨てられたのではないという慰めの約束が彼に与えられた。彼の生命は保護され、大国民の先祖となるのであった。 PP 72.3

アブラハムは天使の言葉に従った。しかし、それは、はなはだ苦しいことであった。ハガルとそのむすこを追い出した父親の心は、言葉で表現できない悲嘆にくれた。 PP 72.4

結婚関係の神聖さについてアブラハムに与えられた教訓は、各時代の教訓となるものであった。それは、どんな犠牲を払っても、結婚関係の権利と幸福とは慎重に守るべきことを言明している。サラが、アブラハムのただ 1 人の真の妻であった。妻また母としての彼女の権利は、他の何人も共有する資格がなかった。彼女は夫を敬ったので、それが新約聖書の中でりっぱな模範としてあげられている。彼女は、アブラハムの愛情が他の女に与えられることを喜ばなかった。主は、彼女が相手の女を追放することを求めたときに、彼女を責められなかった。アブラハムもサラも、神の力を信じなかった。この誤りが、ハガルとの結婚の原因であった。 PP 72.5

神は、アブラハムを信仰の父として召されたのであるから、彼の生涯は後世の人々の信仰の模範となるべきであった。しかし、彼の信仰は完全ではなかった。彼はさきに、サラが妻であることを隠し、こんどはハガルと結婚して神への不信を示した。神は、彼が 最高の標準に達するために、これまでまだだれも召されたことのないきびしい試練に彼をあわせられた。彼は、夜の幻の中でモリヤの地に行き、そこで示される山の上で、むすこを燔祭としてささげるように命じられた。 PP 72.6

アブラハムはこの命令を受けたとき 120 歳であった。当時においても、彼は老人とみなされていた。若いころは、彼も強くて、困難に耐え、危険を冒すこともできたが、もう青年の情熱は消えてしまった。年をとり、足が墓によろめいている時には、心をくじかせるような困難や苦難も、壮年の活気に満ちている者ならば勇気を出して当面することであろう。しかし、神は、アブラハムに年月の重荷がのしかかり、心労と労苦からの休息を願うころになって、最後の最もきびしい試練を彼のためにとっておかれた。 PP 73.1

ベエルシバに住んでいたアブラハムは、繁栄と栄誉に囲まれていた。彼は富裕で国の王たちから、力ある王としてあがめられていた。彼の天幕のむこうに広がった平原には、幾千という羊や家畜の群れがいた。至るところに、彼の家来たちの天幕や、幾百の忠実なしもべたちの家庭が見えた。約束のむすこが、彼のかたわらで成人したのであった。天は、長く延ばされた希望の実現を忍耐して待った犠牲の生涯を祝福するかのように思われた。 PP 73.2

アブラハムは信仰によって服従し、故郷を離れ、父の墓や親族の家庭を離れたのであった。彼は、自分に与えられた土地を、旅人のように放浪した。彼は約束の相続人が生まれるまで長く待った。彼は、神の命令に従ってむすこのイシマエルを送り出した。そして今、長く待望したむすこが成人しようとしていた。そして、アブラハムは、彼の希望が実現するのを見ることができると思ったその時に、これまでのどれよりも大きな試練が彼に臨んだ。 PP 73.3

命令は、父親の胸をしめつけるような言葉で表現された。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……彼を燔祭としてささげなさい」（同 22：2）。イサクは、彼の家庭の光であり、彼の老年の慰めであった。そして、他の何よりも大切なことは、彼が、約束された祝福の田継ぎであることであった。こうしたむすこを、事故または病気で失うことは、慈愛深い父親にとって胸のはりさける思いであろう。それは、彼の白髪を悲嘆に暮れさせたことであろう。しかし、自分自身の手で、自分の子の血を流すように彼は命じられた。それは恐ろしい不可能なことのように思われた。 PP 73.4

神の律法は、「あなたは殺してはならない」と言っている。そして、神は 1 度禁じられたことを変えられないから、アブラハムは欺かれているのだと、そばでサタンは言った。アブラハムは天幕の外に出て、雲 1 つない静かで明るい天を見上げて、彼の子孫が天の星のように数えることができないほどになるという、50 年近く前の約束を思い出した。もし、この約束が、イサクによって成就するとすれば、どうして彼を殺すことができようか。アブラハムは、自分が欺かれているのだと思い込もうと試みられた。彼は、疑惑と苦悶のうちに、地に伏してこれまでになかったほどに祈り、この恐ろしい

義務を果たさなければならないかどうかの確証を求めた。アブラハムは、ソドムを滅ぼすという神のみこころを、彼に告げるためにつかわされた天使を思い出した。そして、この同じむすこのイサクの約束を与えたのも天使であった。そこで彼は天使たちに会って指示を迎ぎたいと思って、天使たちと何度か会った場所へ行ってみたが、だれも彼を助けに来てはくれなかった。彼は、暗黒に閉ざされたように思われた。そして、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて」行けという神の命令が、彼の耳に響いた。その命令には服従しなければならなかった。彼は、延ばそうとはしなかった。夜が明けようとしていた。彼は、旅に出なければならなかった。 PP 73.5

彼は天幕にもどって、イサクが若者らしく無心に熟睡しているところへ行った。父親は、むすこのいとしい顔をしばらくながめていたが、身震いして離れ去った。彼はサラのところへ行ったが、サラもよく眠っていた。もう 1 度むすこを抱かせるために、彼女を起こすべきであろうか。神の要求を彼女に知らせるべきであろうか。彼は、自分の心中を彼女に打ち明けて、 この恐ろしい責任を彼女にも共に負ってもらいたいと思った。しかし、彼女は、自分を妨害するかも知れないと恐れて思いとどまった。イサクは、彼女の喜びであり誇りであった。彼女の生命は彼にしっかり結ばれていて、母の愛情から、彼を犠牲にすることを拒むかも知れなかった。 PP 73.6

ついに、アブラハムはイサクを起こし、遠くの山で犠牲をささげる命令のことを話した。イサクは、今までにも、父親の旅したところの道しるべになっていた数多くの祭壇の 1 つに、礼拝のために父親と出かけたことがしばしばあった。それで、今呼ばれても別に驚かなかった。旅の準備はすぐ終わった。たきぎが用意されて、ろばにのせられた。彼らは、2 人のしもべをつれて出発した。 PP 74.1

父とむすこは、肩を並べて黙って旅を続けた。アブラハムは心に重い秘密を抱いて、言葉を出す勇気がなかった。彼は、誇りと慈愛に満ちた母のことを考え、ただ 1 人で彼女のところへ帰らねばならぬ日のことを思っていた。剣が、彼女のむすこの生命を奪うその時、彼女の心をさしつらぬくことを彼はよく知っていた。 PP 74.2

アブラハムの生涯中の最長の日が、やっと暮れかけていた。むすこも若者たちも眠っている間、彼は祈り通した。そして、彼は、天使があらわれ、試練はもうすんだ、イ

サクを傷つけずに母親のもとに帰してもよいというのを期待していた。しかし、彼の心の苦悩は取り去られなかった。長い日がもう 1 日続き、その夜も彼は心を低くして祈った。しかし、耳に聞こえるのは、彼のむすこを奪い去る命令であった。サタンは、疑いと不信を耳もとでささやいたが、アブラハムはその声にさからった。彼らが、3 日目の旅を始めようとしたとき、アブラハムは、北のほうを見ると、モリヤの山には約束のしるしである栄光の雲がかかっていた。そして、彼は、語りかけた声が天からのものであることを悟った。 PP 74.3

それでも、アブラハムは神につぶやかず主の恵みとまことの証拠を考えて心を強くした。このむすこは、予期しないのに与えられた。尊い賜物を与えたかたは、ご自分の与えたものを取りもどす権を持たれないであろうか。すると信仰は、約束をくりかえす。「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」。彼らは海辺の砂のように無数になる。イサクは奇跡の子であった。であるから、彼に生命を与えた方は、復活させる力があるのではないか。アブラハムは、目に見えるもののかなたをながめて、「神が死人の中から人をよみがえらせる力がある」と神の言葉を理解した（ヘブル 11：19）。 PP 74.4

しかし、むすこを死にわたすという父の犠牲の大きさを理解できるのはただ神だけである。アブラハムは、別れの光景を神以外のだれにも見られたくなかった。彼は、若者たちに残っているように命じ、「わたしとわらべは向こうへ行って礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」と言った（創世記 22：5）。たきぎは、犠牲となるイサクが背負い、父は、刃物と火を持って一緒に山頂さして登った。このように、おりと群れから遠く離れたところで犠牲の羊はどこから来るのかと、イサクは心の中で不思議に思った。彼は、ついに、「父よ、……火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」とたずねた。ああ、これはなんという試練であったことだろう。「父よ」という愛のこもった言葉が、どんなにアブラハムの心を刺したことであろう。まだ知らせることはできなかった。「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」（同 22：7、8）。 PP 74.5

彼らは、定められた場所で祭壇を築き、その上にたきぎを置いた。そして、アブラハムは震える声で天からの言葉をむすこに知らせた。イサクは、自分の運命を知って恐れ驚いたけれども、さからわなかった彼は逃げようと思えば、彼の運命から逃げることができた。悲しみに打ちひしがれた老人は、恐ろしい 3 日間の苦悩に力がつきていて、元気な若者の意志に逆らうことはできなかったことであろう。しかし、イサクは幼いときから、すぐに信頼して服従することを学んでいたから、神のみこころが知らされたとき、彼は喜んで従った。彼はアブラハムと同じ信仰を持っていたから、自分の生命を神の供え物としてささげる召し を受けたことを名誉に感じた。イサクは、父をいたわり、悲しみを軽くしようと努めた。そして、父の弱々しい手を助けて、綱で自分を祭壇に結びつけるのであった。 PP 74.6

いよいよ最後の愛の言葉が語られ、最後の涙が流され、最後の抱擁が終わった。父は、むすこを殺そうと、刃物をふり上げた。すると突然、彼の手はとどめられた。神のみ使いが天から彼を、「アブラハムよ、アブラハムよ」と呼んだ。彼は直ちに「はい、ここにおります」と答えた。すると声がふたたび聞こえた。「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」（同 22：11、12）。 PP 75.1

そのとき、アブラハムは、「角をやぶに掛けている 1 頭の雄羊」を発見し、急いで新しい犠牲を捕え、「その子のかわりに」捧げた。アブラハムは、喜びと感謝にあふれて、その清い場所をアドナイ・エレ（主は備えられる）と新しく名づけた（同 22：13、14）。 PP 75.2

神はモリヤの山で、神の契約を繰り返し、厳粛な誓いのもとに、アブラハムと彼の各時代の子孫に祝福を与えることを確証された。「主は言われた。『わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民は

あなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである』」（同 22：16～18）。 PP 75.3

アブラハムの大きな信仰の行いは、光の柱のように、その後のすべての時代の神のしもべたちの道を照らしている。アブラハムは、神のみこころを行うことを免除されるようには求めなかった。彼は、3 日の旅の間いろいろと考え、疑おうと思えば神を疑うこともできた。むすこを殺すことは、彼が殺人者、第 2 のカインと見なされることになるという理由を考えることもできた。 PP 75.4

それはまた、人々が彼の教えを拒否し、軽蔑する原因になり、そうすることによって、同胞に対して善を行う力をそこなうとも考えられた。彼は、老齢を理由に服従を免れることを求めることができた。しかし、アブラハムは、どのいいわけもしなかった。アブラハムは人間であった。彼は、われわれと同じ情と愛情の人であった。しかし、彼は、イサクが殺されたならどのようにして約束が成就されるのかをたずねようとしなかった。彼は、自分の心の痛みを考えなかった。彼は、神のすべての要求が公正で義であることを知っていて文字通りにその命令に服従した。 PP 75.5

「『アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた』……そして、彼は『神の友』と唱えられたのである」（ヤコブ 2：23）。「信仰による者こそアブラハムの子である」とパウロは言っている（ガラテヤ 3：7）。しかし、アブラハムの信仰は行為にあらわされた。「わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたのではなかったか。あなたが知っているとおり、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ」る（ヤコブ 2：21、22）。信仰と行いの関係を理解しない人が多い。「ただキリストを信じなさい。そうすれば、あなたは安全です。あなたは、律法を守る必要はありません」と彼らは言う。しかし、真の信仰は服従にあらわされる。キリストは、不信のユダヤ人に、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい」と言われた（ヨハネ 8：39）。主は、信仰の父について言われた。「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守ったからである」（創世記 26：5）。使徒ヤコブは、「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それ

だけでは死んだものである」と言った（ヤコブ 2：17）。そして、愛を深く瞑想したヨハネは、「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」と言っているのである（Ⅰヨハネ 5：3）。 PP 75.6

神は、型と約束によって、「アブラハムに……良い知らせを、予告したのである」（ガラテヤ 3：8）。そ してアブラハムの信仰は、来臨される贖い主に集中された。キリストは、ユダヤ人に言われた。「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」（ヨハネ 8：56）。イサクのかわりにささげられた雄羊は、われわれの身代わりとして犠牲となられる神のみ子を代表していた。人間が神の律法を破って死ぬべき運命に陥ったとき、父なる神は、み子をながめて、罪人に「生きなさい。わたしは、身代わりを見つけた」と言われた。 PP 75.7

神が、アブラハムにその子を殺すように命じられたのは、アブラハムの信仰をためすとともに、彼の心に福音を現実的に強く印象づけるためでもあった。あの恐ろしい試練の暗黒の数日間の苦悩は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲を、アブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたのである。自分のむすこを捧げることほど、アブラハムの心を苦しめた試練はなかった。神は、苦悩と屈辱の死に、み子を渡された。神のみ子の屈辱と魂の苦悩を見た天使たちは、イサクの場合のように、介入することが許されなかった。「もうそれでよい」という声は聞かれなかった。堕落した人類を救うために、栄光の王はご自分の生命をお捧げになった。神の無限のあわれみと愛の証拠として、これ以上の強力なものがあるだろうか。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」（ローマ 8：32）。 PP 76.1

アブラハムに要求された犠牲は、彼自身のためとその後の子孫のためばかりではなく、天と他の諸世界の罪のない者たちの教訓のためでもあった。キリストとサタンとの争闘の場、すなわち、贖罪の計画が行われるところは、宇宙の教科書である。アブラハムが神の約束に対する信仰の欠如をあらわしたために、サタンは、天使たちと神の前で彼を非難し、契約の条件を破ったので、祝福に値しないと言った。神は全天の前で、神

のしもべの忠誠を試み、完全に服従すること以外は何物も受け入れられないことを実証して、彼らの前に救いの計画をさらに明らかに示そうとされた。 PP 76.2

天の住民たちは、アブラハムの信仰とイサクの服従が試みられた光景の目撃者であった。試練は、アダムに臨んだものよりははるかにきびしいものであった。アダムに課せられた禁令に従うことには苦痛はなかった。しかし、アブラハムに与えられた命令は、最も苦しい犠牲を要求した。全天は驚嘆と賞賛をもって、アブラハムの断固とした服従を見守った。全天は彼の忠誠に賛嘆の声をあげた。サタンの非難は、偽りであることが示された。神はアブラハムに呼{われた、「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることを、〔サタンの非難にもかかわらず〕わたしは今知った」。他の諸世界の住民の前で、誓いをもってアブラハムに約束された神の契約は、服従が報われることを証明した。 PP 76.3

天の指揮者、神のみ子が、罪人のために死ぬ必要があるという贖罪の神秘は、天使でさえも理解に苦しんだ。アブラハムに、その子を捧げよという命令が与えられたときに、全天の関心がそれに注がれた。彼らは、緊張して、この命令が実行される段階を見守った。「燔祭の小羊はどこにありますか」とイサクがたずねたとき、アブラハムは、「神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えた。父が今にもむすこを殺そうとした時、彼の手がとめられて、神が備えられた雄羊がイサクに代わって捧げられた時に、贖罪の神秘が明らかに照らし出されて、人類のための神の驚くべき準備が、天使たちにさえ明瞭に理解されたのである（Ⅰペテロ 1：12 参照）。 PP 76.4

第 14 章　ソドムの滅亡

本章は、創世記 19 章に基づく PP 77.1

肥沃で美しい「主の園」のような平原にあって、ソドムは、ヨルダンの谷間の町々のなかで、最も美しい町であった。ここには、熱帯植物が繁茂していた。ここは、やし、オリーブ、ぶどうなどの原産地で、花は一年中よい香りを放っていた。畑には豊かな収穫が実り、周りを囲んでいる山や丘には、牛や羊の群れが満ちていた。芸術と商業が、この高慢な平原の町を豊かにしていた。ソドムの宮殿には、東の国の宝物が飾られ、砂漠の隊商は、高価な品々を運びこんで市場をにぎわした。ほとんど考えることも働くこともせずに、生活のあらゆる必要が満たされ、一年中祭りの連続のようであった。 PP 77.2

至るところに物があり余ることは、ぜいたくと高慢の原因になる。必要に迫られたことも、悲しみに打ちひしがれたこともない心は、怠惰と富によってかたくなになる。人々は、富と暇にまかせて、快楽を追求し、肉欲をほしいままにするのであった。「見よ、あなたの妹ソドムの罪はこれである。すなわち彼女と、その娘たちは高ぶり、食物に飽き、安泰に暮していたが、彼らは、乏しい者と貧しい者を助けなかった。彼らは高ぶり、わたしの前に憎むべき事をおこなったので、わたしはそれを見た時、彼らを除いた」と預言者は言う（エゼキエル 16：49、50）。富と暇ほど人々のほしがるものはない。ところが、これらが平原の町々を滅亡させた罪のもとであった。彼らの無益で怠惰な生活が、サタンのつけねらうところとなり、彼らは、神の形を傷つけ、神よりはサタンに似ていった。怠惰は、人間の陥る最大ののろいであって、非行と犯罪がそれに続くからである。それは頭脳を弱め、知力をゆがめ、魂を堕落させる。サタンは、油断している者を滅ぼそうと待ちかまえている。人間が暇なときは、サタンが、何か魅惑的変装をして巧みに取り入るよい機会である。彼は、人間が何もしないでいるときに近づけば、いちばん成功するのである。 PP 77.3

ソドムでは、歓楽と酒宴、饗宴と飲酒が行われた。最も卑劣で残酷な情欲がほしいままに行われていた。人々は、公然と神と神の律法にそむき、暴力行為を楽しんでいた。彼らの前には、洪水前の世界の実例もあり、神の怒りによって、彼らが滅ぼされたことを知っていたにもかかわらず、人々は、同じ悪の道をふみ従った。 PP 77.4

ロトがソドムに移ったころには、腐敗が全体にひろがってはいなかった。神は、彼らをあわれんで、道徳的暗黒の中に、光が照り輝くことをお許しになった。アブラハムが、捕虜になった人々をエラム人から救い出したときに、人々は真の信仰に目を向けるようになった。アブラハムは、ソドムの住民にとって見知らぬ人ではなかった。彼が見えない神を礼拝することは、人々の嘲笑の的になっていた。しかし、彼が、非常に優勢であった敵軍に勝利をおさめ、捕虜や戦利品に対して寛大な精神をあらわしたことに、人々は驚嘆と賞賛の声を放った。人々は、彼の技量と勇気をほめちぎったが、彼が勝利者となったのは、神の力によるものであったことを強く感じない者はいなかった。そして、利己的なソドムの住民とは遠くかけはなれた彼の高潔、無我の精神は、彼が勇気と忠誠をもって尊んだ宗教の優越性を示す、もう 1 つの証拠であった。 PP 77.5

アブラハムのために祝福を祈ったメルキゼデクも、主こそ彼の力の源であり、勝利をお与えになった方であることを認めた。「願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラムを祝福されるように。願わくはあなたの敵をあなたの手に渡されたいと高き神があがめられるように」（創世記 14：19、20）。神は摂理によって人々に語っておられたが、これまでのすべての光と同じように最後の光も拒否されてしまった。 PP 77.6

今や、ソドムの最後の夜が近づいていた。神の怒りの雲は、すでに、この運命の町に影を投げていた。しかし人々はそれに気づかなかった。天使たちが、破壊の任務を帯びて近づいたときも、人々は繁栄と快楽を夢みていた。最後の日は、これまで明けて暮 れたどの日とも同じであった。美しい平和な情景に夕やみが迫った。たとえようもなく美しい風景は、沈む太陽の光を浴びていた。町の人々は、夜の冷気にさそわれて出てきた。快楽追求者たちの群れは、その夜の楽しみを求めてあちこちに行きかった。 PP 77.7

夕方、2 人の旅人が町の門に近づいた。見たところ、彼らは一晩の宿を借りようとしてやってきた旅人のようであった。この質素な旅人が、神の刑罰をもたらす力ある使者であるとはだれも気づかなかった。そして、その晩、この大使たちをどのように扱うかによって、彼らの罪が頂点に達し、その高慢な町を滅亡させようとは、軽薄で不注意な群衆は考えもしなかった。しかし、ここに旅人を親切にもてなし、自分の家に招いた人がいた。ロトは、彼らがどのような人々であるかは知らなかったが、ていねいに人をもてなすことは彼の習慣であった。それは、彼がアブラハムの模範から学んだ教訓であって、彼の宗教の一部であった。 PP 78.1

もしも彼が、礼儀正しい精神を養っていなかったならば、彼はソドムの他の者たちとともに滅びてしまったことであろう。多くの家庭は、旅人に戸を閉ざして、祝福と希望と平和をもたらす神の使者をしめ出している。 PP 78.2

人生の行為は、それがどんなに小さいものであっても、みなよいことか、悪いことにかかわりがある。一見、最小と思われる義務を忠実に果たすか、怠るかによって、人生の最大の祝福か、最大の不幸かへの門を開くことになる。品性をためすのは、小事である。神が画ばれるのは、快く進んで行う日常のごく自然な自己否定の行為である。われわれは自己のためでなく、他の人々のために牛きなければならない。自分を忘れ、人を助けるやさしい精神を心にいだいてこそはじめて、自分たちの人生を祝福とすることができる。ちょっとした心づかいや小さい飾りけのない思いやりの行為が、人生の幸福を構成する大きな部分を占めている。そして、これらをおろそかにすることが、人生を少なからず悲惨なものにしている。 PP 78.3

ロトは、旅人がソドムで乱暴されそうなのを見て、彼らが入ってきた時に、彼らを自宅に招いて保護することが自分の義務だと思った。彼は、旅人が近づいた時、門にすわっていたが、彼らを見て、立ち上がって出迎え、ていねいに礼をして言った。「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください」。彼らは、彼のもてなしを辞退するかのように言った。「いや、われわれは広場で夜を過ごします」（同19：2）。この答えには二重の目的があった。すなわち、ロトの誠実をためすためと、ソドムの人々の性質を知らず、夜、広場で過ごしても安全だと思ったようにみせかける

ためであった。ロトは、この答えを聞いて、なおさら、旅人を暴徒のなすがままにほっておけぬと決心した。彼は、しきりに彼らを招いて納得させ、自分の家に連れてきた。 PP 78.4

彼は、旅人を遠回りの道を通って自宅に案内し、門前の無精者たちに、彼の気持ちをさとられないようにしようとした。しかし、彼らのためらいと遅延とロトの熱心な勧誘は人目につき、夜彼らが床につく前に、暴徒が家の周りに集まった。それは、おびただしい数で、若者も老人も激しい怒りに燃えていた。旅人は、町の特徴について質問していた。そして、ロトが夜、戸外に出ることは危険であることを警告していた。すると、暴徒たちが、彼らを外に出すように要求して、ののしり、叫ぶ声が聞こえた。 PP 78.5

ロトは、もし彼らが乱暴をはたらくと、家にはたやすく侵入することができるので、彼らを説得するために外へ出た。「兄弟たちよ、どうか悪い事はしないてください」と言った（同 19：7）。彼は、この「兄弟たち」という言葉を隣人の意味に用い、彼らをなだめてその悪い計画を恥じ入らせようとした。しかし、彼の言葉は、火に油を注ぐようなものであった。彼らの怒りはあらしのほえる音のようであった。彼らは、ロトが裁判官気どりでいると嘲笑し、旅人にしようとしていたことよりはもっとひどい扱いを彼に加えると脅迫した。彼らは、ロトに飛びかかってきた。もしも神の使いが救わなかったならば、ロトは八つ裂きにされていたことであろう。天使が「手を伸べてロトを家の内に引き入れ、戸を閉じた」。次の出来事が、ロト のもてなした客の性質を明らかに示した。「そして家の入口におる人々を、老若の別なく打って目をくらましたので、彼らは入口を捜すのに疲れた」（同 19：11）。もしも、彼らが心をかたくなにして、肉の目も心の目もともに盲目にされていなかったならは、神にこうして打たれたときに、恐れをいだき、悪行を思いとどまったことであろう。あの最後の晩は、その前の多くの夜よりも大きな罪が行われたのではなかった。しかし、このように長く軽んじられた恵みは、ついに訴えることをやめてしまった。ソドムの住民は、神の忍耐の限界――「神の忍耐と神の怒りの隠れた境界」を越えてしまった。神の報復の火が、シデムの谷に点じられようとしていた。 PP 78.6

天使は、自分たちの任務の目的をロトに伝えた。「われわれがこの所を滅ぼそうとしているからです。人々の叫びが主の前に大きくなり、主はこの所を滅ぼすために、われわれをつかわされたのです」（同 19：13）。ロトが保護しようとした旅人たちが、今度は彼を守ると約束した。そして、彼と共に悪い町からのがれたいと思う彼の家族をもすべて救うと約束した。群衆は、騒ぎつかれて去った。ロトは、子供たちを警告するために出かけた。彼は、「立ってこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」（同 19：14）と言う天使たちの言葉をくりかえした。しかし、ロトの言っていることは彼らに冗談のように思われた。彼らは、それを、迷信的恐怖だといってあざ笑った。彼の娘たちは、その夫たちに感化された。彼らは、そこで、結構よい暮らしをしていた。彼らは、危険が迫っている証拠を見ることができなかった。すべてのものは、それまで通りであった。彼らは資産を多く持っていた。そして、美しいソドムが滅ぼされるとはとうてい信じられなかった。 PP 79.1

ロトは悲しんで家に帰り、説き伏せに失敗したことを語った。すると天使は、ロトに、立ち上がって、妻と家に残っていた 2 人の娘を連れて町を出るように命じた。しかし、ロトはぐずぐずしていた。彼は人々の乱暴な行為を見て、日ごとに心を痛めていた。しかし、あの堕落した都会で行われていた腐敗した憎むべき罪悪の真相をつかんでいなかった。罪悪を止めるために、おそるべき神の刑罰か必要であることを彼は悟らなかった。ソドムには、彼の子供たちがまだ離れきれずに残っていた。彼の妻は、その子供たちを連れずに去ることを承知しなかった。地上で最も愛する者たちを置いていくことは耐えがたい苦痛であった。ぜいたくな家と、一生働いて得たすべての財産を捨てて、無一文の放浪者になることはつらいことであった。ロトは悲しさのあまりぼうぜんとしてしまい、行くに行かれずぐずぐずしていた。神の天使がいなかったならば、彼らはみな、ソドムの滅亡とともに死んでしまったことであろう。天からの使者たちは、ロトと彼の妻と娘たちの手を取って、彼らを町の外に連れ出した。 PP 79.2

ここで、天使たちは彼らを離れ、破壊の任務を果たすべくソドムにもどった。前にアブラハムが嘆願したことのあるもうひとりのかたがロトに近づかれた。平原のすべての町々のなかに、10 人の義人さえ見つからなかった。しかし、アブラハムの祈りにこ

たえて、神を敬うひとりの人が滅亡から救い出された。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」と、驚くべき激しさで命令が与えられた（同 19：17）。このとき、ためらったりおくれたりすれば命があぶなかった。運命の町を未練がましく見たり、美しい家を離れがたくて一瞬でもたたずんでいたりすることは、生命を危険にさらすことであった。神の刑罰のあらしは、これらの哀れな脱川者たちか避難しおわるのを待つだけであった。 PP 79.3

ところが、うろたえ恐れたロトは、何か不幸な出来事が起こって死んでしまうといけないから、命令に従うことができないと嘆願した。罪悪の町に住み、不信のただ中にいたために、彼の信仰は消えかけていた。天の君がそばにおられたのである。それなのに、彼のためにこれほどまでの保護と愛をあらわされた神が、もうお守りにならないかのように、彼は自分の命が助かることを願った。彼は、自分自身を全く天 の使者にゆだね、疑うことも、問い返すこともせず、主のみ手に意志と生命とを捧げるべきであった。しかし、多くの他の人と同様に、彼は、自分で計画をたてようとした。「あの町をごらんなさい。逃げていくのに近く、また小さい町です。どうかわたしをそこにのがれさせてください。それは小さいではありませんか。そうすればわたしの命は助かるでしょう」（同 19：20）。ここで言われている町はベラで、後にゾアルと呼ばれた。それは、ソドムから数マイルの所にあって、ソドム同様に堕落して滅亡の運命にあった。しかし、ロトは自分の小さい願いを聞いて、町を助けてほしいと願った。彼の希望はいれられた。「わたしはこの事でもあなたの願いをいれて、あなたの言うその町は滅ぼしません」と主は約束された（同 19：21）。罪深い人間に対して、神の恵みは、なんと大きいことであろう。 PP 79.4

火の嵐は、あとわずかしか延ばせないから急ぐようにという厳粛な命令がふたたび与えられた。しかし、避難者の 1 人が、ふり向いて滅びの町を見たために、神の刑罰の記念碑になった。もし、ロトが、ためらうことなく天使の警告に従い、嘆願や抗議をしないでけんめいに山地をさして逃げていたならば、彼の妻ものがれたことであろう。ロトは、彼自身の模範によって、彼女を罪と滅びから救うことができたのであった。し

かし、彼のためらいと遅延が、彼女に神の警告を軽視させた。彼女のからだは平原に来ていたが、彼女の心はソドムに執着していて、それとともに滅びた。彼女は、持ち物や子供たちまでが神の刑罰にのまれてしまうので、神に反逆の精神をいだいた。彼女は罪悪の町から救い出されて人きな恵みをこうむったが、長年かかって蓄積した富を、そのまま残して灰にしなければならないことを、きびしい取り扱いだと感じた。彼女は、救いを感謝して受けるかわりに、神の警告を拒んだ人々の生活をしたって、あえて後ろを振り向いた。彼女の罪は、彼女が生きる価値を持っていないことを示した。彼女は、助けられていることになんの感謝もあらわさなかった。 PP 80.1

われわれは、神がわれわれを救うために、恵み深くもとられる方法を軽々しく扱わないように注意すべきである。「わたしの配偶者や子供がいっしょでなければ、わたしは救われたくない」というクリスチャンがある。彼らは、愛する者たちがいなければ、天国は、天国でないと感じる。しかし、神の大いなる恵みと憐れみを考えると、こういう感情の人は自分自身と神との関係について、正しい観念を持っていると言えようか。彼らは、愛と誉れと忠誠という最も強い絆によって、創造主とあがない主の奉仕に結ばれていることを忘れたのであろうか。憐れみの招きは、すべてに与えられた。そして、友人が救い主の愛の訴えを拒むからといって、われわれも顔をそむけるのであろうか。魂の贖罪は尊いことである。キリストは、われわれの救いのために無限の代価を払われた。そして、この大犠牲の価値、また魂の価値を認める者は、他の人々があなどるからといって、神の恵みの申し出を軽んじないのである。他の人々が神の正当な要求を無視すればこそ、われわれはさらに努力して、神に栄光を帰し、感化し得るすべての人が神の愛を受け入れるようにすべきである。 PP 80.2

「ロトがゾアルに着いた時、日は地の上にのぼった」（同 19：23）。朝の輝かしい光は、平原の町々に繁栄と平和だけを告げているように思われた。町の通りでは、活発な生活のざわめきが始まった。人々はその日の仕事に、また、快楽にあちこちと動き始めていた。ロトの義理のむすこたちは、気の弱い老人の恐怖と警告をあざ笑っていた。すると、突然、青天のへきれきのように不意にあらしが起こった。主は、天から硫黄と火とを、町々や豊かな平野に降らされた。王宮と神殿、ぜいたくな邸宅、庭園、果樹園、

そしてつい前夜、天の使いを侮辱し、快楽を求めて陽気にさわいでいた群衆のすべてが焼き尽くされた。大火の煙は、大きな炉の煙のように上った。こうして美しいシデムの谷は、建てる者も住む者もない廃虚と化し、神は、必ず罪を罰せられることをすべての時代にあかししている。 PP 80.3

平原の町々を焼き尽くした炎は、われわれの時代にまで警告の光を投げている。神は、罪人を憐れみ、 長く忍ばれる。しかし、人間はあろ定められたところ以上に罪を犯し続けることはできないという恐ろしく厳粛な教訓が教えられた。その限界に達する時に、憐れみの招きは取り去られて、刑罰のわざが始まる。 PP 80.4

世の贖い主は、ソドム、ゴモラを滅ぼした罪よりもっと大きな罪があると言われた。罪人に悔い改めを促す福音の招待を聞きながら、それを心にとめない者は、シデムの谷間の住民以上に神の前に罪深いのである。そして、神を知り、その律法を守っていると公言しながら、その品性や日常生活において、キリストを拒む者の罪はさらに大きい。ソドムの運命は、公然と罪を犯す人だけでなく、天からの光と特権を軽んじるすべての人々に対する厳粛な訓戒であると救い主は警告された。 PP 81.1

真の証人は、エペソにある教会に言われた。「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう」（黙示録 2：4、5）。救い主は、世の親が、気ままな生活をして苦しむむすこを赦そうとする情け以上のやさしい憐れみをもって、愛と赦しを提供して、その応答を待たれる。彼はさまよう者らに、「わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろう」と叫ばれる（マラキ 3：7）。しかし、罪人が、憐れみ深く、やさしく呼びかける愛の声にいつまでも従わないならば、ついに暗黒のなかに取り残される。神の恵みを長く軽んじた心は、罪になれて、もはや神の恵みの力に感じなくなる。とりなされる救い主が、ついに、彼は「偶像に結びつらなった。そのなすにまかせよ」と宣言される魂の運命は、まことに恐ろしい（ホセア 4：17）。審判の日には、キリストの愛を知りながら、罪の世の快楽

を選んで離れていった者よりは、平原の町々のほうが耐えやすいことであろう。 PP 81.2

恵みの申し出を軽んじる人は、天の帳簿に負債として記入された大きな数字を考えてみるがよい。そこには、国家、家族、個人の不信の記録がある。神は、それらの記録が続くかぎり、忍耐して、悔い改めをうながし、赦しをお与えになる。しかし、記録が満ちるときがくる。そのとき、魂の決定は下され、人間は、自分の選択によって自分の運命を決定する。こうして、刑罰執行の合図がくだされる。 PP 81.3

今日、宗教界は憂うべき状態にある。神の恵みは軽んじられた。多くの者は、神の律法を廃し、「人間のいましめを教として教え」ている（マタイ 15：9）。わが国の多くの教会に、無神論が流行してい。それは、聖書を公然と否認する広義の無神論ではなくて、キリスト教の衣をまとった無神論で、聖書が神の啓示であるという信仰をくつがえしている。熱烈な献身と生気にあふれた敬神の念は、空虚な形式主義に所を譲った。その結果、背信と快楽主義がはびこった。「ロトの時にも同じようなことが起った。……人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」とキリストは言われた（ルカ 17：28、30）。日ごとの記事は、このみ言葉の成就を証拠立てている。世界は、急速に滅亡にひんしていた。間もなく神の刑罰が下り、罪と罪人とは焼き尽くされなければならない。 PP 81.4

「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから」（この世に心を奪われているすべての者に）「すべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」（ルカ 21：34～36）。 PP 81.5

ソドムの滅亡に先だって、神はロトに言われた。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」（創世記 19：17）。エルサレムが滅亡する前にも、キリストの弟子たちは、この同じ警告の声を耳にした。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、……そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃

げよ」（ルカ 21：20、21）。彼らは、財産 を少しでも持っていくために止まってはならなかった。彼らはそれを脱出の絶好機としなければならなかった。 PP 81.6

それは、罪人から断固として離れて、命がけで出て来ることであった。ノアのときも、ロトのときも同じであった。エルサレムの滅亡前の弟子たちも同じであった。そして、最後の時代にも同様である。人々の間にはびこっている罪悪から離れることを神の民に命じる神の警告の声が、ふたたび聞こえるのである。 PP 82.1

最終時代に、宗教界に見られる腐敗と背信とは、「地の王たちを支配する大いなる都」バビロンという幻によって、預言者ヨハネに示された（黙示録 17：18）。滅亡に先だって、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」という招声が天から発せられる（同 18：4）。ノアやロトの時代と同様に、罪と罪人とから、はっきり分離しなければならない。神と世との妥協はあり得ない。地上の宝を得るために引き返すことはできない。「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイ 6：24）。 PP 82.2

シデムの谷の住民のように、人々は、繁栄と平和を夢みている。神のみ使いは、「のがれて、自分の命を救いなさい」と警告する。しかし、別の声は「あわてることはない。心配することはない」と言う。天は、すみやかな滅亡が犯罪者に臨むと宣言しているのに、人々は「平和だ、無事だ」と叫ぶ。平原の町々は、滅亡の前夜、快楽にふけり、神の使者の恐怖と警告を嘲笑した。しかし、こうしてあざけった者らは炎の中で死んだ。恵みの戸は、あの晩、ソドムの邪悪で軽率な住民に対して永遠に閉ざされた。神を常に侮ることはできない。また神をいつまでも軽んじることはできない。「見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りとをもってこの地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る」（イザヤ 13：9）。世の大多数の人々は、神の恵みを拒んで、急速に迫って避けることのできない滅亡にのまれてしまうであろう。しかし、警告に聞き従った者は、「いと高き者のもとにある隠れ場」に住み、「全能者の陰にやどる」［そのまことは大盾、また小盾である」「わたしは長寿をもって彼を満ち足らせ、わが救を彼に示すであろう」との約束が彼らに与えられている（詩篇 91：1、4、16）。 PP 82.3

ロトは、ゾアルに短期間しか住まなかった。ゾアルもソドムと同じように、罪悪が満ちたので、ロトば町が滅ぼされるといけないと思って留まることを恐れた。しばらくしてゾアルも、神のご計画のもとに滅ぼされた。ロトは山にはいり、洞穴に住んだ。彼は、家族を罪悪の町の感化にさらして、手に入れたすべての物を失ってしまった。しかし、ソドムののろいはここまで追ってきた。彼の娘たちの罪深い行為は、罪悪の町の有害な交わりの結果であった。ソドムの道徳的腐敗は、彼女たちの品性に織り込まれていて、善悪を区別することができなくなっていた。ロトの唯一の子孫であるモアブ人とアンモン人は、不道徳な偶像礼拝者の種族であって、神に対する反抗者であり、神の民の恨み重なる敵だった。 PP 82.4

ロトの生涯は、アブラハムの生涯と比較して、なんと著しく異なっていたことであろうか。彼らは、昔は仲間どうしで、1 つの祭壇で礼拝をし、旅人の天幕に隣合わせに住んでいた。しかし、今はなんと遠く離れたことであろう。 PP 82.5

ロトは、快楽と利益を求めてソドムを選んだ。ロトは、アブラハムの祭壇と生きた神への日ごとの犠牲とを捨てて、彼の子供たちが腐敗した偶像教徒と交わることを許した。しかし、彼は、心のなかで神を敬っていた。聖書には、ロトが「正しい人」であったとしろされている。彼の正しい魂は、毎口耳にする汚れた会話や、彼の力ではどうにもならない暴力と犯罪に心を痛めていた。彼はついに、「火の中から取り出した燃えさし」のように救われた（ゼカリヤ 3：2）。しかし、彼は、持ち物を失い、妻子をなくし、野獣のようにほら穴に住み、不名誉な晩年を送った。そして彼は、義人の民族でなくて、神に反逆し、神の民と戦う 2 つの偶像教国を世に送った。彼らは、罪の杯を満たして滅ぼされてしまった。愚かな道を歩む者の結果は、 なんと恐ろしいことであろう。 PP 82.6

「富を得ようと苦労してはならない、かしこく思いとどまるがよい」「不正な利をむさぼる者はその家を煩わせる」と賢者は言っている（箴言 23：4、15：27）。「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである」と使徒パウロは言っている（Ｉテモテ 6：9）。 PP 83.1

ロトはソドムに移ったとき、自分を罪悪から守り、家族を自分に従わせる堅い決心であった。しかし、彼は、明らかに失敗した。周囲の腐敗的勢力は、彼自身の信仰に影響を及ぼした。そして彼の子供たちがソドムの住民と結ばれたために、彼もいくぶんか彼らと利害をともにするようになった。その結果は、われわれの知るとおりである。 PP 83.2

今日も同様のまちがいをくりかえす者が多い。彼らは住宅を選ぶ場合に、彼らと家族をとりまく道徳的、社会的影響よりは、物質的利益のほうを重くみる。彼らは、美しく肥沃な土地を選ぶ。または、もっと繁栄を確保することを望んで、繁華な都市に移転する。しかし、子供たちは誘惑にかこまれる。そして、彼らは敬虔の念を養い、正しい品性を形成するには不利な友人を持つ場合が多い。低い道徳観念、不信仰、宗教に関する無関心などの雰囲気は、親の感化を中和させる傾向がある。親や神の権威に対する反抗の実例は、常に青年たちの前にある。多くの者は、無神論者や未信者と親しくなり、神の敵と運命をともにする。 PP 83.3

神はわれわれが住宅を選ぶとき、自分たちと家族をとりまく、道徳的、宗教的感化を、まず考慮することを望まれる。希望する環境を持つことができない者が多いから、われわれは苦しい立場に立たされる。もし、われわれが、キリストの恵みにたより、目をさまして祈っているならば、どのような所に召されても、神は、われわれを汚れに染むことなく立たせて下さるのである。しかし、クリスチャン品性の形成に不利な環境に、わざわざ身をさらしてはならない。われわれが進んで世俗と不信仰の雰囲気のなかに入れば、神の不興を招き、家庭から聖天使を追い出す。 PP 83.4

子供たちの永遠の幸福を犠牲にして、世の富と名誉を彼らに与えようとする者は、ついに、これらの利益が恐ろしい損失であることに気づくのである。多くの者は、ロトのように、子供たちを失い、自分の魂を救うことがせいいっぱいであったことを知るであろう。彼らの生涯の事業は失われ、彼らの一生は悲しい失敗である。もしも彼らが真の知恵を働かせていたならば、世的財産は少なくても、永遠の嗣業の獲得権を確保したことであろう。 PP 83.5

神がその民に約束された嗣業は、この世のものではない。アブラハムは、地上で何も持たず、「遺産となるものは何 1 つ、1 歩の幅の土地すらも、与えられなかった」（使徒行伝 7：5）。彼は大きな財産を持っていたが、彼はそれを、神の栄光と同胞の幸福のために用いた。しかし、彼は、この世を自分の故郷と思わなかった。主は永遠の所有として、カナンの国を与えることを約束して、偶像礼拝者の親族から離れることを彼に命じられた。しかし、彼も、彼の子も、孫も、約束の地を受けなかった。アブラハムは、死者を埋葬する地がほしかったとき、カナン人から買わなければならなかった。約束の地の彼の唯一の所有は、マクペラのほら穴の岩にほられた墓だけであった。 PP 83.6

しかし、神の言葉にまちがいはなかった。ユダヤ人のカナン占領も、この約束の最後的成就ではなかった。「約束は、アブラハムと彼の子孫とに対してなされたのである」（ガラテヤ 3：16）。アブラハム自身、嗣業相続にあずかるはずであった。神の約束の成就は、長く延びるように思われることであろう。「主にあっては、1 日は 1000 年のようであり、1000 年は 1 日のようである」（Ⅱペテロ 3：8）。おくれているように見えても、定まった時が来れば、「それは必ず臨む。滞りはしない」（ハバクク 2：3）。アブラハムと彼の子孫への賜物は、カナンの地だけでなく、地球全体を含むものであった。「なぜなら、世界を相続させるとの約束が、アブラハムとその子孫とに対してなされたのは、律法によるのではなく、信仰の義によるからである」と使徒は言っている（ローマ 4：13）。 アブラハムに対してなされた約束は、キリストによって成就されることを、聖書は明らかにしている。キリストにある者はみな、「アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである」。すなわち、罪ののろいの取り去られた地の「朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ」相続人である（ガラテヤ 3：29、Ⅰペテロ 1：4）。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる」「柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる」（ダニエル 7：27、詩篇 37：11）。 PP 83.7

神は、この永遠の嗣業の光景をアブラハムに見せられた。彼は、この希望をいだいて満足した。「信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐ

イサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である」（ヘブルⅡ：9、10）。 PP 84.1

アブラハムの子孫について、次のように書かれている。「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」（同11：13）。われわれも「もっと良い、天にあるふるさと」を獲得しようと思うならば、この地上で旅人、また寄留者の生活をしなければならない（同 11：16）。アブラハムの子孫は、彼が待ち望んだ、神が「もくろみ、また建てた」都を求めるのである。 PP 84.2

第 15 章　イサクの結婚

本章は、創世記 24 章に基づく PP 84.3

アブラハムは老人になった。そして、自分の死ぬときが近づいたのを知った。しかし彼は、子孫に与えられた約束を確保するために、しなければならない行為が、まだ 1 つ残っていた。イサクは、神の律法の保管者、選民の父として、アブラハムの後継者に任じられてはいたが、まだ、結婚していなかった。カナンの住民は偶像礼拝を行っていたので、神は、神の民と偶像礼拝者との雑婚を禁じておられた。神は、こうした結婚が背教の原因になるのを知っておられた。アブラハムは、彼のむすこの周囲にある腐敗的感化の影響を恐れた。アブラハムの、いつもながらの神への信仰と神のみこころへの服従は、イサクの品性に反映されていた。しかし、イサクは愛情が強く、柔和で、人に譲歩する性質もあった。もし彼が神をおそれない人と結ばれるとすれば、一致を保つために原則を犠牲にするという危険があった。アブラハムにとって、むすこに妻をめとることは重大なことであった。アブラハムは、彼を神から引き離すことをしない人と結婚させたいと心から願っていた。 PP 84.4

昔、結婚の約束は、たいてい親たちが取りきめた。そして、これは神を礼拝する民の間の習慣でもあった。だれも愛することができない人との結婚をしいられたのではなかった。しかし、青年が自分たちの愛情を注ぐにあたって、経験があって、神を恐れる親たちの判断に従った。これに反した道をとることは、親に対する不敬、いや犯罪とすらみなされた。 PP 84.5

イサクは、父の知恵と愛情に信頼して、この問題を父にまかせて満足し、神ご自身がその選択を導かれることをも信じていた。父は、メソポタミヤの地にいる彼の親戚のことを考えていた。彼らは偶像礼拝から全く離れたとは言えないが、真の神を知り、礼拝していた。イサクがカナンを去って、彼らのところへ行ってはならなかった。しかし、彼らのなかから、自分の家を離れて彼と 1 つになり、生きた神の清い礼拝を維持する者が見つかるだろうと思われたのであろ。アブラハムは、この重大なことを彼の「年長

のしもべ」に託した。彼は、神を敬い、経験豊かで正しい判断の持ち主で、長く忠実にアブラハムに仕えた人であった。彼はそのしもべに、カナン人のなかからイサクのために妻を迎えず、メソポタミヤのナホルの家族の娘 を選び、主の前で厳粛に誓うことを要求した。彼はイサクを連れて行ってはならないと命じた。もし自分の親族を離れてくる娘を見いだすことができないならば、使者はその誓約から解かれるのであった。この困難でやりにくい仕事をするにあたって、アブラハムは彼を励まし、神がその任務を成功させてくださることを保証した。「天の神、主はわたしを父の家、親族の地から導き出して……主は、み使をあなたの前につかわされるであろう」と彼は言った（創世記24：7）。 PP 84.6

しもべは、直ちに出発した。彼は、自分の一行と、連れて帰ってくる花嫁の一行のために 10 頭のらくだを引いて行った。しもべはまた、迎える妻とその友人たちのための贈り物をたずさえて、ダマスコの向こうまでの長旅に立ち、東の国の大河に接する肥沃な平原へと進んだ。彼は、「ナホルの町」ハランに到着して、城壁の外の井戸のそばに止まった。ここは、そこの女たちが夕方、水をくみに来るところであった。これは、彼にとってどうすればよいか深く考えなければならない時であった。彼の主人の家族だけでなく、将来の幾代にもおよぶ重大な結果が、彼の選択にかかっていた。彼は、全く知らない人々ばかりの間で、どのような賢明な選択をすることができようか。神は必ず天使を送られるというアブラハムの言葉を思い起こして、彼は、熱心に明確な指導が与えられることを祈った。彼は、主人の家庭でいつも親切と手厚いもてなしが行われているのをよく知っていたので、ここで、親切な行為が神のお選びになった娘のしるしでありますようにと祈った。 PP 85.1

その祈りが終わるか終わらないうちに、答えが与えられた。井戸のまわりに集まった女たちの中で、礼儀正しい 1 人の娘が彼の注意をひいた。彼女が井戸からもどって来たときに、旅人は、彼女に近づいて、眉にのせた水がめの水を少しくださいと頼んだ。彼女は快くその願いをきき入れ、らくだにも水を飲ませようと申し出た。これは、そのころ、身分の高い人の娘でも、父の家畜や群れのために行う仕事であった。こうして、願ったとおりのしるしが与えられた。娘は「非常に美し」かった。そして、彼女の積極

的親切心は、優しい心と活発で活動的性格をあらわしていた。こうして、しもべは、ここまで神の手に導かれたのである。しもべは娘の親切に対して、高価な贈り物をしたあとで、彼女がだれの娘であるかをたずねた。そしてしもべは、彼女がアブラハムのおいのベトエルの娘であることを知ると、「頭を下げ、主を拝し」た。 PP 85.2

その人は、彼女の父の家でもてなしを受けることを願った。そして、彼は、その感謝の言葉の中で、アブラハムと自分との関係を明らかにした。娘は家に帰り、事の次第を話した。すると、彼女の兄のラバンは、旅人とその連れの人々をもてなすために、直ちに迎えに出た。 PP 85.3

エリエゼルは、自分の任務と井戸での祈りなどの事情のいっさいを話すまでは、食事をしようとしなかった。それから、彼は言った。「あなたがたが、もしわたしの主人にいつくしみと、まことを尽そうと思われるなら、そうとわたしにお話しください。そうでなければ、そうでないとお話しください。それによってわたしは右か左に決めましょう」（同 24：49）。そこで彼らは答えた。「この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません。リベカがここにおりますから連れて行って、主が言われたように、あなたの主人の子の妻にしてください」（同 24：50、51）。 PP 85.4

家族は同意したが、リベカ自身、父の家を離れてそんな遠方へ行き、アブラハムのむすこの妻になる気があるかどうか聞いてみることになった。彼女は、事のなりゆきから、神が自分をイサクの葵に選ばれたことを信じた。そして彼女は、「行きます」と言った。 PP 85.5

しもべは、自分の任務が成功したことを主人がどんなに喜んでくれるかと思って、早く出発したいと思った。そして、彼らは翌朝帰途についた。アブラハムはベエルシバに住み、イサクはその隣の地方で羊の世話をしていたが、ハランからの使いの者の到着を迎えようとして、父の天幕に帰って来ていた。「イサクは夕暮、野に出て歩いていたが、目をあげて、らくだの来るのを見た。リベカは目をあげてイサクを見、らくだ からおりて、しもべに言った、『わたしたちに向かって、野を歩いて来るあの人はだれでしょう』。しもべは言った、『あれはわたしの主人です』。するとリベカは、被衣（か

ずき）で身をおおった。しもべは自分がしたことのすべてをイサクに話した。イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た」（同 24：63～67）。 PP 85.6

アブラハムは、カインの時代から彼の時代までの、神を恐れる者と恐れない者との結婚がどんな結果に終わるかをよく知っていた。彼自身とハガルとの結婚の結果、また、イシマエルやロトの結婚関係の結果を、彼は目の前に見ていた。アブラハムとサラの信仰が欠けていたために、イシマエルが生まれ、義人の種族が神を敬わない者と混じった。父の子に及ぼす影響は、偶像礼拝者である母親の側の親族と、イシマエルがめとった異邦の妻たちによってその力をそがれた。ハガルのしっと、そして彼女がイシマエルのために選んだ妻たちのしっとは、アブラハムの家庭を防壁のように取り巻き、彼がどんなに努力しても取り去ることはできなかった。 PP 86.1

アブラハムの初期の訓育は、イシマエルに効果がなかったわけではない。しかし、彼の妻たちの影響によって彼の家庭で偶像礼拝が根をおろした。彼は、父親から離れて、神に対する愛も恐れもない家庭の争闘と競争に憤激して、「その手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆ら」うという、粗暴で略奪を事とするさばくの酋長の生活にはいってしまったのである（同 16：12）。イシマエルは、晩年に、その悪行を悔いて、彼の父の家に帰った。しかし、彼が子孫に与えた品性の特徴は消えなかった。彼の子孫は強大な国民となったが、それは、粗暴な異邦の民族で、常にイサクの子孫を悩まし苦しめるものとなった。 PP 86.2

ロトの妻は利己的で、宗教心のない女であった。そして、彼女は、自分の夫をアブラハムから離れさせようとした。ロトは、彼女さえ望まなければ、賢明で神を恐れるアブラハムの勧告も聞けないソドムにとどまっていたくなかった。もし、彼が初期に、アブラハムから忠実に教え込まれていなかったならば、彼の妻の感化と罪悪の町の交友とによって、神から離れていたことであろう。ロトの結婚とソドムに住宅を選んだことは、その後、数世代にわたってこの世界に起こった一連の不幸な出来事の出発点となった。 PP 86.3

神を恐れる者が、神を恐れない者と結合すれば必ず危険が伴う。「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだろうか」（アモス 3：3）。結婚関係の幸福と繁栄は、ふたりの和合にかかっている。しかし、信者と未信者の間には、趣味、傾向、目的などに根本的相違がある。彼らは、2 人の主人に仕えている。彼らの間に一致はあり得ない。どんなに純粋で正しい原則を持っているとしても、信者でない伴侶は、神から引き離す傾向を持っている。 PP 86.4

回心前に結婚関係にはいった者は、その悔い改めによって、彼らの信仰がどんなに異なっていようとも、伴侶に忠実であるべき義務は、さらに増大した。しかし、神の要求は、試練や迫害を招こうとも、地上のどの関係よりも上位におかれなければならない。愛と柔和の精神をもってすれば、この忠誠さは、未信者を主に導く力となるかも知れない。しかし、クリスチャンが、神を知らない者と結婚することは、聖書の中で禁じられている。「不信者と、つり合わないくびきを共にするな」と主は命じられる（Ⅱコリント 6：14、17、18）。イサクは、世界の祝福となる約束の相続人となり、神から大きな栄誉を受けた。しかし、彼が 40 歳のとき、経験豊かで神を恐れるしもべに命じて、彼の妻を選ばせるという父の判断に従った。聖書は、この結婚が愛に満ちた幸福な家庭を築いたことを庭しく描いている。「イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た」。 PP 86.5

イサクの歩いた道と、現代の青年たち、またクリスチャンと自称する人々でさえ追い求めている道とは、なんと異なっていることであろう。青年たちは、だれを愛そうと、それは自分だけで決定すればよく、神や親たちからはなんの支配も受けることではないと考え やすい。彼らは、一人前の男子、女子になるずっと前から、親たちの助けなど受けずに、自分で選択することができると考える。たいてい、数年の結婚生活で、まちがいを見つけるのは十分であるが、悲しむべき結果を防ぐのには遅すぎる。なぜなら、急いで相手を選んだのと同じ知恵と自制の欠如が、事情をさらに悪化させて、彼らの結婚生活を耐えられないくびきにしてしまうのである。こうして現世の幸福と永遠の生命の希望を破壊した人が多い。 PP 86.6

もし注意深く考慮し、年配の経験豊かな人々の勧告を求めるべき問題があるとすれば、それは結婚問題である。もし、聖書の勧告を必要とし、祈りのうちに神の指導を求めるべき時があるとすれば、それは、一生を結合する段階にはいる前である。 PP 87.1

親たちは、子供たちの将来の幸福について責任があることを忘れてはならない。イサクが父の判断を尊重したことは、彼が、服従の生活を愛するように訓育された結果であった。アブラハムは、子供たちに、親の権威を尊重するように教えたが、彼は日常生活において、その権威が利己的または独裁的支配ではなくて、愛に基づき、彼らの福利と幸福を考慮したものであることを示した。 PP 87.2

父親と母親は、青年たちの愛情に指導を与え、よく似合った伴侶になる人を愛するようにさせる義務があることを感じなければならない。親たちは、神の恵みの助けを受けて、自分たちの教えと模範によって、子供たちが清く、気高くなり、善と真実にひきつけられるように、彼らの品性を幼いときから形造ることを義務と思わなければならない。類は友を呼び、似た者はよく理解し合う。真実、純潔、善良を愛する心を幼いときから心に植えつけるようにしよう。そうすれば、青年は、そうした品性の持ち主との交わりを求めることであろう。 PP 87.3

親たちは、自分たちの品性とその家庭生活に、天の父の愛と恩恵とを実証するように努めよう。家庭は、太陽の光に満ちたところにしよう。これは、子供たちにとって、土地や金銭よりもはるかに価値がある。彼らの心に家庭の愛を燃やしつづけ、子供たちが幼少時代の家庭をふりかえるとき、そこを天国に次ぐ平和と幸福なところとして思い出すことができるようにしよう。家庭の者が、みな、同じ性格の者ではないから、忍耐と寛容の精神を働かせるべき時も時おり起ころう。しかし、愛と自制によって、すべての者は堅く結ばれて 1 つになるのである。 PP 87.4

真の愛は、高く清い原則である。それは、衝動的に生じ、激しく試みられると、急に消えてしまう愛とは全く異なったものである。青年たちは、親の家で忠実に義務を果たすことによって、自分自身の家庭を持つ準備をしなければならない。青年たちは家庭で自制を実行し、親切で、礼儀正しく、クリスチャン的同情の精神をあらわそう。こう

して、彼の心には、愛があたたかく保たれる。そして、このような家庭から出て、自分の家族のかしらとなる者は、自分の生涯の伴侶として選んだ人の幸福を増進させる方法を知っている。結婚は愛の終わりではなくて、愛の始まりに過ぎない。 PP 87.5

第 16 章　ヤコブとエサウ

本章は、創世記 25：19～34、27 章に基づく PP 87.6

イサクのふたこのむすこ、ヤコブとエサウは、その性質も、生活ぶりも著しく異なっていた。この相違は、彼らの誕生の前から神の天使に予告されていた。天使は、リベカが苦しみながら祈ったときに、2 人のむすこが彼女に与えられること、そして、おのおのが大きな国民の先祖になり、1 人が他よりも偉大になり、弟が優位を占めるに至る彼らの将来の歴史などを、彼女に明らかにした。 PP 87.7

エサウは自分を楽しませることを好み、ただ現在のことばかりに心を奪われて成長した。彼は、束縛に耐えられず、自由奔放な狩りを楽しみ、早くから猟師の生活を選んだ。しかし、彼は父親のお気に入りで あった。物静かで、平和を愛する牧羊者は、長子の勇気と活気に心をひかれた。エサウは、恐れることなく、山や砂漠を歩き回って、父親に獲物を持って帰り、心おどる冒険談を話して聞かせるのであった。ヤコブは、思慮深く、忠実で用心深く、現在のことよりは将来のことを考えていたので、家にいて家畜の世話をしたり、土を耕したりして満足していた。母親は、彼の忍耐力、倹約の精神、先見の明などを高く評価した。ヤコブの愛情は深く強かった。そして、彼の物静かで根気強い思いやりの精神は、エサウの荒々しい、時おりの親切よりは、彼女により大きな幸福感を与えた。リベカにとって、ヤコブはいとしいむすこであった。 PP 87.8

まずアブラハムに与えられ、そして、そのむすこに確証が与えられた約束は、イサクとリベカの心の大きな願いであり希望であった。エサウとヤコブは、その約束をよく知っていた。彼らは、長子の特権を非常に重要なものと考えるように教えられていた。というのは、それが、ただ単にこの地上の富の相続だけでなくて、霊的に優位が与えられることをも含んでいたからである。それを受ける者は、家族の祭司となり、その子孫からこの世界の贖い主が出ることになっていた。一方、長子の特権を受けた者は責任も負わされた。祝福の継承者は、彼の生涯を神の奉仕にささげなければならなかった。彼

は、アブラハムのように、神の要求に従順でなければならなかった。結婚、家庭関係、公の生活などで、彼は、神のみこころをうかがわなければならなかった。 PP 88.1

イサクは、こうした特権と条件とをむすこたちに知らせ、長子の特権を受けるのは、長子のエサウであることを言明した。しかし、エサウは献身を好まず、宗教生活を送る気持ちがなかった。彼にとって、霊的な長子の特権に付随した要求は、好ましくないというよりはやっかいな制限とさえ思われた。アブラハムと神との契約の条件であった神の律法は、奴隷のくびきのようにエサウには思われた。彼は放縦を好み、ただ自分の欲するままにふるまう自由を望むだけであった。彼にとって、権力と富、飲食と宴楽が幸福なのであった。彼は、なんの束縛もない奔放な流浪の生活の自由を誇った。リベカは、天使の言葉を覚えていて、夫よりはもっとはっきりした洞察力でむすこたちの性格を読んだ。神の約束の相続権は、ヤコブのためにあるかのように彼女は思い込んだ。リベカは、イサクに天使の言葉を語った。しかし、父親の愛情は長子に注がれていて、がんとして自分の意志を変えなかった。 PP 88.2

ヤコブは、長子の特権が自分に与えられるという神の告示を母親から聞き、なんとかしてその特権を自分のものにしたいという言葉には表現できない願望に満たされた。彼が渇望したのは、父親の富を所有することではなかった。彼が願い求めたものは、霊的長子の特権であった。義人アブラハムのような神との交わりにはいり、家族のために犠牲をささげ、選民と約束の救い主の先祖となり、契約の祝福に含まれている永遠の嗣業にあずかることなどが、彼の熱心に求めてやまない特権であり、誉れであった。彼の心は常に将来のことに向けられ、目には見えない祝福を得ようと努めていた。 PP 88.3

彼は、霊的祝福について、父親が語るすべてのことをひそかな願いをいだいて聞き入った。そして、母親から聞いたことも大切に心に秘めていた。彼は、日夜そのことばかり考えていたので、それが彼の生活の最も重大な関心事となった。しかし、ヤコブは、このように現世の祝福よりは永遠の祝福を尊重はしたが、まだ彼の敬う神について体験上の知識はなかった。彼の心は神の恵みによって新たにされていなかった。彼は、兄が長子の権利を保持するかぎり、自分に関する約束は実現し得ないと思った。そして、彼

は、兄が軽視しても自分には非常に貴重なその祝福を確保しようと、絶えず策略をめぐらしていた。 PP 88.4

ある日、エサウが狩りから疲れ果てて帰ってきて、ヤコブが煮ていた食物を要求した。ヤコブは、始終このことばかりを考えていたので、この機を逸せず、長子の特権とひきかえに兄の飢えを満たそうとした。「わたしは死にそうだ。長子の特権などわたしに何になろう」と、無分別でわがままな狩人は叫ん だ。こうして、エサウは 1 杯の赤いあつもので彼の長子の特権をゆすり渡し、誓ってその取引を確認した。今少し待てば父の天幕で食物を得られたのに、彼は、自分の一時の欲望を満たすために、神ご自身が、彼の父祖たちに約束された栄光ある相続権を軽々しく手放した。彼は、ただ現在のことだけに興味を持った。彼は、地上のもののために、天のものを、一時の快楽のために未来の幸福を犠牲にしてしまうのであった。「このようにしてエサウは長子の特権を軽んじた」（創世記 25：32、34）。彼は、それを譲渡して一種の解放感を味わった。もう彼には何のじゃまものもなかった。好きかってができた。こうした気ままな楽しみや、誤った自由のために、なんと多くの人々が今もなお、清く汚れのない天の永遠の嗣業をつぐ相続権を売り渡していることであろう。 PP 88.5

エサウは、ただ単なる外のかたちとこの世的の魅力にひかれて、ヘテ人の 2 人の娘を妻にめとった。彼らは偽りの神の礼拝者であった。そして、その偶像礼拝はイサクとリベカを非常に悲しませた。エサウは、選民と異邦人との雑婚を禁じる誓約の条件の 1 つを犯した。しかし、イサクは、長子の特権を彼に与える決意を変えなかった。リベカの説得も、ヤコブの祝福に対する強い希望も、エサウのその義務に対する無関心も、父の意志をひるがえす力はなかった。 PP 89.1

何年かが経過し、イサクは年老いて目がかすみ、死期が近づいたので、長子に祝福を与えることをもはや延ばすべきではないと思った。しかし、リベカとヤコブの反対を知っていたので、彼は厳粛な儀式をひそかに行おうとした。こうしたときには、ふるまいを設ける習慣であったので、老父は、「野に出かけ、わたしのために、しかの肉をとってきて、わたしの好きなおいしい食べ物を作り、……わたしは死ぬ前にあなたを祝福しよう」とエサウに命じた（同 27：3、4）。 PP 89.2

リベカは、彼が何をしようとするかを読みとった。彼女は、それが神のみこころの啓示とは相反することを確信した。イサクは、神の怒りを招く危険にさらされていた。そして、神が召された地位に弟むすこをつかせまいとしているのであった。彼女は、イサクを説き伏せようとしたがむだだったので、策略を用いる決意をした。 PP 89.3

エサウが狩りに出かけると、すぐにリベカは自分の考えの実行にとりかかった。彼女は、ヤコブに事の次第を話し、その祝福がついにしかも決定的にエサウに与えられるのを防止するために、すばやく行動する必要があることを告げた。もしヤコブが母親の指示に従えば、神の約束通りに祝福を受けることができると彼女は保証した。ヤコブは、彼女の考えた計画に、直ちに同意はしなかった。父親を欺くことは大きな苦痛であった。このような罪は、祝福ではなくてのろいをもたらすものだと彼は感じた。しかし、彼は、良心の声にさからって母親の言葉に従い始めた。あからさまのうそを言うつもりではなかったが、ひとたび父の前に出てしまうと引きさがるわけにいかなくなった。彼は、不正手段によって熱望した祝福を手に入れた。 PP 89.4

ヤコブとリベカは、目的を達したものの、彼らの詐欺行為によって得たものは、苦悩と悲哀だけであった。神は、ヤコブが長子の特権を得るであろうと言われたのであるから、神が彼らのためにそうしてくださるのを信仰をもって待っておれば、神の言葉は、神ご自身がよいと思われるときに達成されたことであろう。しかし、今日神の子であると公言する多くの人々のように、彼らはこのことを主の手に委ねようとしなかった。リベカは、自分がむすこにまちがったことを勧めたことを非常に後悔した。これが、ヤコブをリベカから引き離す原因になり、彼女はふたたび彼の顔を見ることがてきなくなった。ヤコブは長子の特権を獲得したその瞬間から、自責の念にかられた。彼は、父と兄と自分の魂と、そして、神に対して罪を犯したのである。彼は、ほんのわずかの時間の間に、一生の悔いを残すことをした。後年、彼自身のむすこたちの罪深い行いが彼の心を苦しめたとき、この光景が彼の前に鮮明によみがえるのであった。 PP 89.5

ヤコブが父の天幕を去ると、すぐ、エサウが入ってきた。エサウは長子の特権を売り渡し、その取引を厳粛な宣誓によって確認はしたが、彼は、今弟がなん と言おうと祝福を獲得しようと決意した。長子の霊的特権には物質的特権も含まれていて、家族の

指導権と父の富の二人前が与えられることになっていた。彼が高く評価したのは、こうした祝福であった。「父よ、起きてあなたの子のしかの肉を食べ、あなたみずから、わたしを祝福してください」と彼は言った（同 27：31）。 PP 89.6

驚きと苦悩にふるえながら、目の見えない老父は、自分が欺かれたことを知った。彼が長く楽しみにしてきた希望はくじかれた。そして、彼はエサウの感じる失望を身にしみて味わった。しかし、自分の計画が失敗し、自分がやめようとしていたそのこと自体が実現したというのは、神の摂理であったという確信が彼の心にひらめいた。彼は、天使がリベカに語った言葉を思い出した。そして、罪を犯したとはいうものの、ヤコブが神のご計画を成就するには、最も適任であることをイサクは認めた。彼は、祝福の言葉を語っていたときに霊感を受けた。そして、今、すべての事態を承知の上で、彼が知らずにヤコブに与えた祝福を是認した。「彼を祝福した。ゆえに彼が祝福を得るであろう」（同 27：33）。 PP 90.1

エサウは、祝福が自分の手元にあると思ったときには、それを軽々しく評価したが、永久に彼から離れ去ったとなると、手に入れたいと思った。彼の衝動的で激しやすい性質がそのままあらわれ、彼の悲しみと怒りは大きかった。彼は、激しく泣き叫んだ。「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください」「あなたはわたしのために祝福を残しておかれませんでしたか」（同 27：34、36）。しかし、すでにしてしまった約束は、とりかえすことができなかった。彼が軽率に手放した長子の特権は、ふたたび取りもどすことができなかった。「1 杯の食」のため、すなわち、制することをしなかった食欲の瞬間的満足のために、エサウは長子の権利を売った。しかし、彼が自分の愚かなことを悟ったときには時すでにおそく、祝福を取りもどすことはできなかった。「彼は……涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである」（ヘブル 12：16、17）。エサウは悔い改めるならば、神の恵みを求める特権がなくなったわけではなかった。しかし、彼は長子の特権を回復する方法を見つけることはできなかった。彼の悲しみは、罪を認めたことからではなかった。彼は、神との和解を願わなかった。彼は罪の結果を悲しんだが、罪そのものを悲しまなかった。 PP 90.2

エサウは、神の祝福と要求に無関心であったために、「俗悪な者」と聖書のなかで呼ばれている（同 12：16）。彼は、キリストが価を払われた贖罪を軽く評価して、地上の朽ちるもののために、天の相続権を犠牲にする人々を代表している。ただ現在のために生き、将来に対してなんの配慮も準備もない人がおびただしくいる。彼らは、エサウのように、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのちなのだ」と言う（Ｉコリント 15：32）。彼らは、自分たちのしたいほうだいのことをしている。彼らは、自己否定を実行するよりは、最も重大なことがらを犠牲にする。誤った食欲の満足か、あるいは、自己を否定し神を恐れる者だけに約束された天の祝福かのどちらかを捨てなければならないとすれば、食欲の満足のほうが重要で、神と天のほうは文字通り見捨てられてしまう。何と多くの人々、また、クリスチャンと称する人々でさえ、健康を害し、魂の感受性を麻痺させる嗜好物にふけっていることであろう。すべての肉と霊の汚れから身を清めて、神を恐れつつ清潔を達成する義務が示されると、彼らはそれを好まない。彼らは、こうした有害な快楽を楽しみながら、天国に入ることができないことに気づく。そして、永遠の命の道は狭いために、その道を歩くのをやめてしまおうとする。 PP 90.3

多くの人々は、肉の欲にふけるために長子の特権を売り払っている。健康は犠牲になり、知能は薄弱になり、天国の希望は失われる。しかも、それらはすべてただ一時の快楽のためであり、人間を弱め、堕落させる放縦のためである。エサウが軽率な取引の愚かさを悟ったときには時すでにおそく、取りもどすことができなかったように、利己的満足のために、天国の相続権を譲渡する者は、神の日に同じ運命にあ うのである。 PP 90.4

第 17 章　ヤコブの逃亡と放浪

本章は、創世記 28～31 章に基づく PP 91.1

エサウの怒りに生命をおびやかされて、ヤコブは逃亡者となって父の家を出た。しかし、彼は、父の祝福をたずさえていった。イサクは、契約の約束をヤコブにもう 1 度くり返し、彼がその相続者であるから、メソポタミヤの母方の家族のなかから妻をめとるように命じた。しかしヤコブは、深く物思いに沈んでさびしい旅に出かけた。彼は、ただ 1 本のつえをたよりにして、荒々しい遊牧の民の住んでいる原野を何百キロも旅しなければならなかった。彼は後悔と恐怖に襲われ、怒った兄につけられないように人目を避けていた。彼は、神が彼に与えようとされた祝福を永遠に失ったのかと恐れた。そして、サタンは、そばで彼を試みるのであった。 PP 91.2

2 日目の夕方、彼は父の家から遠く離れたところに来ていた。彼は、自分が放浪の身に陥ったことを感じた。そして、この苦しみは、すべて、自分のまちがった行為の結果であることを悟った。絶望の暗黒が、彼の心におしかぶさり、祈ることすらできなかった。しかし、その極度の寂しさのなかで、これまでになかったほどに神の保護の必要を痛感した。彼は、涙を流して深く恥じ入り、罪を告白し、自分が全く見捨てられていないという確証を願い求めた。それでも彼の重い心は軽くならなかった。彼は全く自信を失い、祖先の神は彼を見捨てられたのではないかと感じた。 PP 91.3

しかし、神はヤコブを見捨てられなかった。神の憐れみは、なお、罪深い不信のしもべに注がれていた。主はヤコブを憐れみ、彼が最も必要としていた救い主を示されたのである。彼は罪を犯した。しかし、ふたたび神の恵みに回復される道が示されたので、彼の心は感謝にあふれた。 PP 91.4

放浪者は旅に疲れ果てて、石をまくらにして地に横たわった。彼が寝ていると、1 つの光り輝くはしごが地上に立ち、その頂が天に達しているのが見えた。このはしごの上を天使たちが上り下りしていた。その上のほうに栄光の主がおられて、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である」という彼の声が天から聞こえた（創

世記 28：13）。彼がいま、放浪者、逃亡者として横たわっている地は、彼と彼の子孫に与えられることが約束された。そして、「地の諸族はあなたと子孫とによって祝福をうけるであろう」という確証が与えられた。この約束は、アブラハムとイサクに与えられたものであったが、それがいまヤコブに繰り返して与えられた。それから、現在の彼の寂しさと苦悩を特に考慮して、慰安と激励の言葉が語られた。「わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう」（同 14、15）。 PP 91.5

主は、ヤコブを取りかこむ悪感化と、彼がさらされる危険を知っておられた。主は、この悔い改めた逃亡者をあわれみ、彼の未来を示して、彼に関する神のみこころを理解させ、彼がただひとりで、偶像礼拝者や陰謀をめぐらす人々の中に行ったときにあわねばならぬ誘惑に抵抗する準備を与えられた。彼は、自分の目ざすべき高い標準を常に念頭に持っていなければならなかった。そして、神の計画は自分によって成就されるのだという自覚のもとに、常に忠実に励まなければならなかった。 PP 91.6

この幻の中で順罪の計画が彼に示された。それは、十分なものではなかったが、当時の彼に必要な部分が与えられた。彼の夢のなかの神秘的なはしごは、キリストがナタナエルとの会話の中で引用されたのと同じものであった。「天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」と彼は言われた（ヨハネ 1：51）。人間が神 の政府に反逆するまでは、神と人との間に自由な交わりがあった。しかしアダムとエバの罪が天と地とを隔ててしまったので、人間は創造主と交わることができなくなった。ところがこの世界は、孤立した絶望のうちに放任されたのではなかった。はしごは、交わりの仲介者として任命されたイエスを代表していた。もし、彼がご自分のいさおしによって、罪がもたらした深い淵に橋をかけて下さらなかったならば、奉仕の天使たちは、堕落した人類と交わることができなかったであろう。キリストは、弱く力ない人間を、無限の力の源泉につないで下さる。 PP 91.7

このようなことが、すべて夢の中でヤコブにあらわされた。彼の心は啓示のある部分をすぐに理解したけれども、その偉大で神秘的な真理は、彼の一生涯の研究であって、彼の心に少しずつ明らかにされていった。 PP 92.1

ヤコブが目をさますと、あたりはまだ夜の静けさに包まれていた。幻の輝かしい光景は消えていた。さびしい山々の輪郭の上に星空が輝いて見えるだけであった。 PP 92.2

しかし、彼は、神が自分と共におられるという厳粛な感に打たれた。見えない臨在が寂しい場所に満ちていた。「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。……これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と彼は言った（創世記 28：16、17）。 PP 92.3

「ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注い」だ（同 28：18）。重大な事件を記念するときの習慣に従って、ヤコブは神のあわれみの記念碑を立てた。それは、彼がこのあたりを通るときに、この神聖な場所にしばらく足をとめて主を礼拝するためであった。そして、彼はその場所をベテル「神の家」と呼んだ。彼は深い感謝の念をいだいて、神が彼と共におられるという約束をくりかえした。そして、彼は厳粛な誓いをたてた。「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたかくださるすべての物の 10 分の 1 を、わたしは必ずあなたにささげます」（同 28：20～22）。 PP 92.4

ヤコブはここで、神と取引をしようとしているのではなかった。主は、すでに彼に繁栄を約束しておられた。だからこの誓いは、神の愛とあわれみの保証に対する感謝として彼の心からあふれ出たものであった。ヤコブは神に感謝を言いあらわす必要を感じた。そして特別に神の恵みのしるしが与えられたならば、神に返礼すべきであると思った。それと同様に、われわれも、与えられるあらゆる祝福に対して、すべての憐れみの源泉であられる神に感謝をあらわさなければならない。クリスチャンは、時おり自分の過去の生涯をふりかえってみて試練のときに支持が与えられ、暗黒と絶望のなかで道が

開かれ、倒れるはかりのときに勇気づけられたことなど神から与えられた尊い救済の経験を思い出して感謝しなければならない。彼は、こうしたすべてのことを、天使の保護の証拠と認めるべきである。このような数えつくすことのできない祝福を思うとき、クリスチャンは、謙虚で、感謝の心をもって、「わたしに賜わったもろもろの恵みについて、どうして主に報いることができようか」と時おりたずねてみなければならない（詩篇 116：12）。 PP 92.5

われわれの時間、才能、財産などは、これらの祝福をわれわれに委託された神に捧げるべきである。われわれが特別に危険から救出されるとか、または、新しい予期しない恵みにあずかる場合には、言葉て感謝を表現するだけでなくて、ヤコブのように神のわざのために捧げ物や献金をして、神の恵みに感謝はう。われわれは絶えず神の恵みを受けているのであるから、絶えず捧げるべきである。 PP 92.6

「あなたがくださるすべての物の 10 分の 1 を、わたしは必ずあなたにささげます」とヤコブは言った（創世記 28：22）。福音の十分な光と特権にあずかっているわれわれは、十分恵みにあずからなかった古代の人々が神に捧げた物よりも少なく捧げて満足すべきであろうか。いや、大きな祝福にあずかればあず かるほど、われわれの責任も、それに従って大きくなるのではなかろうか。しかし、われわれの評価はなんと低いことであろうか。はかり知れない愛と想像に絶する価値ある賜物に応えるに当たって、われわれの時間や金銭や愛を、数学的法則によって測ろうとすることはなんとむなしいことであろう。キリストのために、10 分の 1 なのであるか。これほどの価値あるものに対して、ああ、なんと僅少で恥ずかしい返礼であろうか。カルバリーの十字架から、キリストは全的献身を求めておられる。われわれの持ち物も、われわれ自身も、すべてを神に捧げなければならない。 PP 92.7

ヤコブは、神の約束に対する新しい永続的信仰と、天使の存在と保護の確証をいだいて、「東の民の地」にむかって旅を続けた（同 29：1）。ところが、約百年前に、アブラハムのしもべが到着したときとは、状態がなんと異なっていたことであろう。しもべは、らくだに乗った多くの召使をつれ、金銭とりっぱな贈り物を持って来た。ところがむすこは、旅につかれた旅人として、つえのほか何の持ち物もなく、たった 1 人

でやってきた。ヤコブも、アブラハムのしもべのように、井戸のかたわらで休んだ。そして、彼が、ラバンの妹娘のラケルに会ったのはここであった。井戸から石を取りのけ、家畜に水を飲ませる手伝いをしたのは、今度はヤコブであった。ヤコブは、自分が彼らの親類であることを話して、ラバンの家庭に歓迎されることになった。彼は、持ち物も、供の者も連れずにやってきたが、わずか数週間て彼の熱心さと熟練さとか認められて、長く滞在するように勧められた。こうしてヤコブは、ラケルを妻にめとろためにラバンのために 7 年間働くことになった。 PP 93.1

昔、結婚の契約が正式に認められるに先だって、花婿はその身分に応じて、いくらかの金銭またはそれに相当する物品を、妻の父に手渡す習慣であった。これは、結婚関係の安全を保つものと考えられていた。父親は家族を養うたくわえもしていない男に、娘の幸福を託すことは安全でないと考えた。もし彼らが倹約と努力によって家業にはげみ、家畜や土地を手に入れることができないようであれば、彼らの一生は見込みがないと思われた。それでも、妻のために支払うものを何も持っていない者を試みる方法が設けられていた。彼らは、納入すべき結納金の額に応じて、きめられた期間、愛する娘の父親のために働くことが許された。氷婚者が忠実に任務を果たし、他の点でもりっぱであることを証明すれば娘を妻にすることかできた。そして、一般には結納金として父が受け取ったものは、結婚のときに娘に与えられた。しかし、ラケルとレアの場合は、両方とも娘たちに与えるべき結納金を、ラバンは利己的に自分のものにしてしまった。このことについて、彼らはメソポタミヤを出発する直前に言った。「彼はわたしたちを売ったばかりでなく、わたしたちのその金をさえ使い果したのです」（同 31：15）。 PP 93.2

古代の習慣は、時おり、ラバンのように悪用する者はあっても、よい結果をもたらした。求婚者が妻を得るために働かなければならなかったことは、早婚を防ぎ、家族をささえる能力とともに、その愛情の深さをもためすよい機会であった。今日はこれと全く反対なので、多くの悪い結果が生じている。結婚に先だって、お互いの習慣や性質などについて知る機会はほとんどない場合が多い。そして、日常生活については全く他人同然で式をあげてしまう。彼らが互いに適合していないことを発見したときは時すでに

おそく、その結婚が一生悲惨な結果に終わる者が多い。人であり父である者の怠惰と無能、または悪習慣のために、妻や子供たちが苦しい思いをする場合がある。もし、古代の習慣に従って、求婚者の性格を結婚の前にためすことができれば、大きな不幸を避けることができたであろう。 PP 93.3

ヤコブは、ラケルのために 7 年間忠実に働いた。そして、その年月は、「彼女を愛したので、ただ数日のように思われた」（同 29：20）。ところが、利己的で強欲なラバンは、非常に貴重な働き人を引きとめておくため、無情にもラケルのかわりにレアを与えて、ヤコブを欺いた。レアもこうした欺きに加担したために、ヤコブは彼女を愛する気になれなかった。ヤコブか憤慨して、ラバンを責めると、ラバンはあと 7 年働けば ラケルを与えようと言った。しかし、ラバンは家族の恥であるから、レアを捨ててはならないと言い張った。こうしてヤコブは、心も張り裂けるばかりの苦境に立たされた。彼はついに、レアをとどめておいたまま、ラケルと結婚する決心をした。ヤコブが最も愛したのはラケルであった。しかし、彼が彼女を他の者より愛したことは、ねたみとそねみの原因となった。そして、彼の生涯は、姉妹のふたり妻の争いによって悲惨なものになった。 PP 93.4

ヤコブは、メソポタミヤに 20 年間とどまって、ラバンのために働いた。ところがラバンは、肉身のつながりを無視して、彼らの間柄から得られるだけの利益を得ようとしていた。ラバンはふたりの娘のために 14 年の労働をヤコブに要求した。そして、その後の期間においては、ヤコブの賃銀を 10 回も変更した。それにもかかわらずヤコブの働きは勤勉で忠実であった。ラバンとヤコブが最後に会ったときの会話のなかで、彼がラバンに言った言葉は、無情な主人のために彼がどんなにたゆまず務めたかを生々しく描写している。「わたしはこの 20 年、あなたと一緒にいましたが、その間あなたの雌羊も雌やぎも子を産みそこねたことはなく、またわたしはあなたの群れの雄羊を食べたこともありませんでした。また野獣が、かみ裂いたものは、あなたのもとに持ってこないで、自分でそれを償いました。また昼盗まれたものも、夜盗まれたものも、あなたはわたしにその償いを求められました。わたしのことを言えば、昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした」（同 31：38～40）。 PP 94.1

羊飼いは、昼も夜も群れを守っていなければならなかった。羊の群れは盗まれるおそれがあった。また、数多くのどうもうな野獣に襲われる危険もあり、よく見張っていないと群れが襲われ、大きな損害をこうむるのであった。ヤコブの下で多くの羊飼いが働いていて、ラバンの広範囲にわたる群れを養っていたが、彼自身がすべての責任を負っていた。1 年の中のある期間は、彼自身が群れといつもいて、乾燥期には群れがかわいて死なないように、また最も寒い数か月の間は、群れがひどい夜の霜にこごえないように守らなければならなかった。ヤコブは羊飼いのかしらであった。彼の雇い人たちは、彼の下で働く羊飼いであった。もし、羊がいなくなれば、羊飼いのかしらの損失であった。もし群れの状態がよくなければ、ヤコブはその群れの世話をまかせた者を呼んで、詳しい説明を要求した。 PP 94.2

羊飼いが勤勉でよく羊の世話をして、委ねられた無力な生き物を憐れむことなどを例にあげて、聖書の記者は、福音の最も尊い真理をいくつか説明している。キリストは、ご自分と民との関係を羊飼いにたとえられた。人間の堕落後、キリストはご自分の質が、罪の暗い道で滅びる運命に陥ったのを見られた。彼は、これらのさまよう人々を救うために、天の父の家の誉れと栄光とを捨てられた。「わたしは、うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くし」「それゆえ、わたしはわが群れを助けて、再びかすめさせず」「地の獣も彼らを食うことはない」（エゼキエル 34：16、22、28）。「昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所」である彼のおりに群れを導く彼の声が聞こえる（イザヤ 4：6）。彼は根気強く群れを守られる。彼は弱い者を強め、苦しみを和らげ、腕に小羊をだき、ふところに入れてたずさえられる。羊は彼を愛する。「ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」（ヨハネ 10：5）。 PP 94.3

キリストは言われる。「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている」（ヨハネ 10：11～14）。 PP 94.4

大牧者キリストは、彼の牧者たちに、彼の下で働く羊飼いとして群れの世話をすることを委ねられた。そして、ご自分が持たれた同じ関心を彼らも持って、主から委ねられた任務の清い責任を感じるように命 じられる。主は、彼らに、忠実に群れを養い、弱ったものを強め、気絶しそうになったものを生きかえらせ、かみ砕くおおかみから彼らを守るように、厳粛にお命じになった。 PP 94.5

キリストは羊を救うために、ご自分の命を捨てられた。そして、彼は、彼の牧者たちに、このように表現された愛を彼らの模範としてお示しになる。しかし、「羊が自分のものでない雇人は」群れに対して真の関心をいだいていない。彼は、ただ利益のために働くのであって、自分のことしか考えない。彼は、委ねられたものの益ではなくて、自分の利益を図る。そして、危険が迫ってくると、群れを捨てて逃げてしまう。 PP 95.1

使徒ペテロは、羊飼いたちに勧めている。「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである」（Ｉペテロ 5：2、3）。パウロもこう言っている。「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている」（使徒行伝 20：28、29）。 PP 95.2

忠実な羊飼いに負わせられる世話や重荷を、好ましくない務めとみなすすべての者を、使徒は責めて言う。「しいられてするのではなく、……自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい」（Ｉペテロ 5：2）。大牧者キリストは、こうした不忠実な羊飼いをすべて進んで解任される。キリストの教会は彼の血によって贖われたものであるから、すべての羊飼いは委ねられた羊のために無限の犠牲が払われたことを自覚しなければならない。そのおのおのに無限の価値を認めて、彼らを

健康ですぐれた状態に保つために、たゆまず努力しなければならない。キリストの霊に満たされた羊飼いは、彼の自己否定の模範にならい、委ねられたものの幸福のために絶えず働くのである。そして、群れは彼の保護のもとに栄える。 PP 95.3

すべての者は、各自の任務の責任を問われる。主はすべての羊飼いに、「あなたに賜わった群れ、あなたの麗しい群れはどこにいるのか」と要求される（エレミヤ 13：20）。忠実な者は、豊かな報いを受ける。「大牧者が現れる時には、しぼむことのない栄光の冠を受けるであろう」と使徒は言っている（Ⅰペテロ 5：4）。 PP 95.4

ヤコブがラバンの仕事に疲れて、カナンに帰ろうと思い、ラバンに言った。「わたしを去らせて、わたしの故郷、わたしの国へ行かせてください。あなたに仕えて得たわたしの妻子を、わたしに与えて行かせてください。わたしがあなたのために働いた骨折りは、あなたがこぞんじです」（創世記 30：25、26）。しかし、ラバンは、彼にとどまることを勧めて言った。「わたしは主があなたのゆえに、わたしを恵まれるしるしを見ました」（同 30：27）。彼は、財産がヤコブの管理下で増加したのを知った。 PP 95.5

ヤコブは言った。「わたしが来る前には、あなたの持っておられたものはわずかでしたが、ふえて多くなりました」（同 30：30）。しかし、時がたつにつれて、「大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、およびらくだ、ろばを持つようになった」ヤコブを、ラバンはうらやむようになった（同 30：43）。ラバンのむすこたちも、父親と同じように彼をねたみ、その悪意に満ちた言葉がヤコブの耳に入った。彼は、「われわれの父の物をことごとく奪い、父の物によってあのすべての富を獲たのだ」「またヤコブがラバンの顔を見るのに、それは自分に対して以前のようではなかった」（同 31：1、2）。 PP 95.6

ヤコブは、エサウに会う恐れさえなければ、とっくの昔に、この悪賢い親類のもとを去っていたことであろう。ところがヤコブは、ラバンのむすこたちが、彼の富を自分たちのものだと考えて、暴力に訴えてでも手に入れようとする危険を感じた。彼は、非常に悩み苦し んで、どうしてよいかわからなくなった。しかし、彼は、ベテルでの慈悲深い約束を思い出し、この問題を神に訴えて指示を仰いだ。彼の祈りは夢のなかでこ

たえられた。「あなたの先祖の国へ帰り、親族のもとに行きなさい。わたしはあなたと共にいるであろう」（同 31：3）。 PP 95.7

ラバンの不在のときが出発の絶好の機会であった。家畜や羊の群れが大急ぎで集められ、先に送り出された。そしてヤコブは、妻子、しもべたちを伴ってユフラテ川を渡り、カナンの国境にあるギレアデに向かって急いだ。ラバンは、彼らの逃亡を 3 日後に知ってその後を追いかけ、彼らが出発してから 7 日目に、彼らに追いついた。ラバンは、激怒していた。 PP 96.1

そして、彼の一隊はヤコブの群れよりははるかに強力だったので、わけなく彼らを引きもどせると思っていた。逃亡者たちは、まさに一大危機に当面した。 PP 96.2

ラバンの抱いた敵対心が実行に移されなかったのは、神ご自身が、彼のしもべを守護するために介入されたからである。「わたしはあなたがたに害を加える力をもっているが、あなたがたの父の神が昨夜わたしに告げて、『おまえは心して、ヤコブによしあしを言うな』と言われました」とラバンは言った（同 31：29）。つまり彼は無理にヤコブを引き戻したり、または、有利な条件を出して誘ってはならなかった。ラバンは娘たちの結納金を取り上げ、ヤコブを、悪がしこくきびしく取り扱った。ところが、今、彼は、彼独特のそらぞらしい態度で、ヤコブがひそかに出発したことと、父親に告別の宴を開く機会を与えず、娘や孫たちに別れを言う暇を与えなかったことを責めた。 PP 96.3

それに答えて、ヤコブは明瞭にラバンの利己心と強欲な仕打ちを述べた。そして、彼白身の忠実さと誠実さをあかししてもらいたいと彼に訴えた。「もし、わたしの父の神、アブラハムの神、イサクのかしこむ者がわたしと共におられなかったなら、あなたはきっとわたしを、から手で去らせたでしょう。神はわたしの悩みと、わたしの労苦とを顧みられて昨夜あなたを戒められたのです」（同 31：43）。 PP 96.4

ラバンは、ヤコブの言った事実を否定することはできなかった。そこで彼は、平和の契約を結ぼうと言った。ヤコブはその申し出に同意し、石を積み重ねて、その契約のしるしにした。ラバンは「われわれが互に別れたのちも、どうか主がわたしとあなたと

の間を見守られるように」と言って、この石塚をミズパ（見守る塔）と名づけた（同31：49）。 PP 96.5

「更にラバンはヤコブに言った、『あなたとわたしとの間にわたしが建てたこの石塚をごらんなさい、この柱をごらんなさい。この石塚を越えてわたしがあなたに害を加えず、またこの石塚とこの柱を越えてあなたがわたしに害を加えないように、どうかこの石塚があかしとなり、この柱があかしとなるように。どうかアブラハムの神、ナホルの神、彼らの父の神がわれわれの間をさばかれるように』。ヤコブは父イサクのかしこむ者によって誓った」（同 31：51～53）。この契約を確認するために、彼らは宴を開いた。彼らは、その夜楽しく語り合って過ごした。そして夜明けにラバンと彼の従者たちは去って行った。この離別を境にして、アブラハムの子孫とメソポタミヤの住民との接触はとだえてしまった。 PP 96.6

第 18 章　苦闘の一夜

本章は、創世記 32、33 章に基づく PP 96.7

ヤコブは神の指示に従ってパダンアラムを出発したものの、20 年前に逃亡者として歩いた道を引き返すのは、なんとなく不安なものであった。彼は、父をあざむいた罪を忘れることができなかった。彼は、自分の長い逃亡生活が、その罪の直接の結果であることを知っていた。彼は、日夜そうしたことを考えて良心に責められ心沈む思いで旅を続けた。生まれ故郷の山々が遠くに見え始めたとき、ヤコブは深い感動をおぼえた。彼の目前に、過去の出来事がはっきりと浮かび上がった。罪の記憶とともに、神の彼 に対するあわれみの情と、天の助けと導きの約束が思い出された。 PP 96.8

旅の終わりが近づくにつれて、彼は、エサウのことを考えて、不安な予感を感じた。エサウは、ヤコブが逃亡したあと、自分 1 人で父の財産を相続したつもりであった。そこへ、ヤコブが帰ってくるという知らせはヤコブが遺産を取りに来たと思わせる恐れがあった。エサウは、害を加えようとすれば、ヤコブに大きな損害を与えることができた。そしてエサウは、ヤコブに対する復讐のためばかりでなく、これまで、長年自己のものとみなしてきた富を確保するためにも、ヤコブに暴力をふるうことができた。 PP 97.1

主は、ふたたび保護のしるしをヤコブにお与えになった。彼らがギレアデ山から南下していると、彼らを保護するように、天の使いの軍勢が二軍に分かれて彼らの一隊の前と後ろを取り囲んでいた。ヤコブは、昔、ベテルで見た夢を思い出した。そして、カナンから逃亡したときに希望と勇気を与えた天使が、帰途の守護に当たっている確証を見て重い心が軽くなった。ヤコブは「『これは神の陣営です』と言って、その所の名をマハナイム（二軍または、2 つの陣営）」と名づけた（創世記 32：2）。 PP 97.2

しかし、ヤコブは、自分の安全を確保するなんらかの方法を講じなければならないことを感じた。そこで彼は兄弟に使者を送って、和解の言葉を伝えさせた。彼は、エサウにどう言うべきかを彼らにはっきりと教えた。2 人の兄弟が生まれる以前から、兄は

弟に仕えるといわれていたので、この記憶が感情を傷つけてはならなかった。そこで彼は、彼のしもべたちが彼の「主人エサウ」のところに送られているのだと言った。そして、彼の前に現れたときには、自分たちの主人のことを、「あなたのしもべヤコブ」と呼び、彼が貧しい放浪者として父の財産を要求するために帰国したと思われないために、注意ぶかく次のように言わせた。 PP 97.3

「わたしは牛、ろば、羊、男女の奴隷を持っています。それでわが主に申し上げて、あなたの前に恵みを得ようと人をつかわしたのです」（同 32：5）。 PP 97.4

しかし、しもべたちは、エサウが 400 人を率いて近づいていることと、彼の友好的伝言にはなんの返答もしないという知らせを持って帰った。エサウは復讐のために来ているにちがいなかった。天幕は恐怖に満たされた。「ヤコブは大いに恐れ、苦し」んだ（同 32：7）。彼は、引き返すことも、前に進むこともできなかった。武装も防備もない彼の一隊は、敵と戦う用意は全くなかった。そこで彼は、彼らを二組に分け、一組が攻撃されれば他の一組が逃げられるようにした。彼は、多くの群れのなかから数多くの贈り物を、友好的言葉とともにエサウのところに送り出した。彼は、自分の力のかぎりを尽くして兄弟に対する過去の悪行の償いをしようとした。そして、心を低くして悔い改めるとともに、神の保護を祈り求めた。「『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵もう』と言われた主よ、あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は 2 つの組にもなりました。どうぞ、兄エサウの手からわたしをお救いください。わたしは彼がきて、わたしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます」（同 32：9～11）。 PP 97.5

こうして彼らはヤボクの渡しに着いた。そして、夜になったので、ヤコブは家族の者たちに川の浅瀬を渡らせ自分は 1 人であとに残った。彼は、その夜祈り明かすことにし、神と自分だけになりたいと思った。神は、エサウの心を和らげることがおできであった。ヤコブは、神に頼るほかなかった。 PP 97.6

そこはものさびしい山地で、野獣がひそみ、盗賊や人殺しが出没するところであった。ヤコブは、ただ 1 人でなんの防備もなく、深い悲しみに沈んで地にひれ伏した。

それは真夜中であった。彼の愛する家族の者たちがみな遠くへ行き、危険と死にさらされている。彼にとって何よりもつらいことは、彼自身の罪悪のゆえに、罪のない者たちが危険にさらされることであった。彼は、真剣な叫びと涙をもって神に祈った。すると突然、力強い手が彼の上におかれた。彼は、敵が彼の命をねらっているのだと思い、敵の手か らのがれようと全力を尽くした。暗黒のなかで、両者は必死に争った。ヤコブは一言も言わなかったが、全力を尽くして一瞬でも力をゆるめようとしなかった。こうして、必死の戦いをしながらも、彼は罪の意識に心が重かった。彼の罪が彼の前に立ちはだかって、彼を神から引き離すのであった。しかし、この恐るべき窮地にあって、彼は神の約束を思い起こした。そして、彼は真心から、神の隣れみを哀願した。 PP 97.7

格闘は夜明け近くまで続いた。見知らぬ相手の指がヤコブの腰に触れるや、彼はたちどころに障害のある身になってしまった。ヤコブは、この敵がだれであるかがわかった。彼は天使と戦っていたことを知った。彼のほとんど超人的力でも勝てなかったのはそのためであった。この方は、「契約の天使」キリストで、ご自分をヤコブに現された。不能となり、激しい痛みに苦しみながらも、ヤコブは、彼を放そうとしなかった。ヤコブは悔いくずおれて天使にすがり、「泣いてこれにあわれみを求め」、祝福を懇願した（ホセア 12：4）。彼は、罪の赦しの確証をどうしても受けなければならなかった。肉体がどんなに苦痛を感じても、この目的から心をそらせることはできなかった。彼の決意はますます強く、信仰は燃え、最後まで耐えぬこうとするのであった。天使は、ヤコブからのがれようとして、「夜が明けるからわたしを去らせてください」と言ったが、ヤコブは答えて、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と言った（創世記 32：26）。もしこれが、ヤコブの高慢無礼で自己過信から出たものであれば、彼は、直ちに滅ぼされたことであろう。しかし、それは、自己の無価値を告白するとともに、神が忠実に約束を果たされることを信頼する者の確信であった。 PP 98.1

ヤコブは「天の使と争って勝」った（ホセア 12：4）。罪深く、まちがいを犯した人間が、謙遜と悔い改めと自己降伏とによって、天の王に勝ったのである。彼はふるえ

る手で神の約束にすがった。そして、無限の愛に富む神の心は、罪人の哀願を退けることができなかった。 PP 98.2

欺瞞によって長子の特権を獲得するという罪にヤコブを陥れた誤りが、彼の前にはっきりと示された。彼は、神の約束に信頼せず、神が、ご自分の時と方法によって達成しようとされることを、自分の努力で実現させようとした。彼が赦された証拠として、彼の名が、彼の罪を思い起こさせるものから、勝利を記念する名に変えられた。「あなたはもはや名をヤコブ〔おしのける者〕と言わずイスラエルと言いなさい。あなたが神と人とに、力を争って勝ったからです」と天使は言った（創世記 32：28）。 PP 98.3

ヤコブは、彼の魂が願い求めた祝福を受けた。彼が人をおしのけ欺いた罪は赦された。彼の人生の危機は去った。疑惑、困惑、後悔の念が彼の生涯を苦しいものにしたが、今はすべてが変わった。神との和解による平安は楽しいものであった。ヤコブは、もう兄に会うことを恐れなくなった。彼の罪を赦された神は、エサウの心を動かして、ヤコブの謙遜と悔い改めを彼に受け入れさせることができるのであった。ヤコブが天使と格闘している間に、もう 1 人の天使がエサウのところに送られた。エサウは夢のなかで、父の家から 20 年の間離れて暮らした弟を見た。また、彼が母親の死を知って、どんなに悲しむかを見た。そして彼が、神の軍勢に囲まれているのを見た。エサウは、この夢を兵卒たちに語った。そして、彼の父の神がヤコブと共におられるから、彼に害を加えないように命じた。 PP 98.4

ついに、戦士を引き連れた砂漠の族長の一隊と、妻子や羊飼いたち、侍女たち、それに多くの家畜や子の群れを従えたヤコブの一団とが、両方から接近した。ヤコブはつえによりすがりながら、戦士の一団に近づいた。彼は前夜の格闘のために、顔は青さめ、からだの自由を失い、痛みに耐えながら、休み休み足を運んだ。しかし彼の顔は喜びと平和に輝いていた。からだの自由を失った彼を見て、「エサウは走ってきて迎え、彼を抱き、そのくびをかかえて口づけし、共に泣いた」（同 33：4）。エサウの荒武者たちの心も、この光景に強く心を打たれた。エサウが彼らに夢の話をしてはいたものの、彼らは首領の心の変化を理解することができなかった。彼らは、ヤコブの弱々し い姿

を見た。しかし、この彼の弱さが、彼の力の原因であったことを知ることはできなかった。 PP 98.5

ヤコブは、破滅が目前に迫って、ヤボク川のほとりで苦闘した夜、人間の助けのむなしさと、人間の力に頼ることの不安定さとを教えられた。彼は、唯一の援助は神から来るべきであることを悟った。しかも彼は、その神に対して恐ろしい罪を犯したのであった。彼は、自分の無力と無価値とを認めて、罪を悔い改める者に神が約束された憐れみを願い求めた。彼が神に赦され、受け入れられたことを保証するものはこの約束であった。天地は過ぎ去っても、この言葉は必ず成就する。あの恐ろしい格闘のときに彼を支えたのはこれであった。 PP 99.1

ヤコブの格闘と苦悩の夜の経験は、神の民が、キリスト再臨の直前に経験しなければならない試練をあらわしている。預言者エレミヤは、清い幻のなかでこの時代をながめて言った。「われわれはおののきの声を聞いた。恐れがあり、平安はない。……どの人の顔色も青く変っている……悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である」（エレミヤ 30：5～7）。 PP 99.2

キリストが、人間のための仲保者の働きを終了されるとき、この悩みの時が始まる。そのときに、すべての人の運命が決定され、罪を清める贖いの血はもうないのである。イエスが人間のために、神の前に立つ仲保者としての地位を去られるときに、厳粛な宣言が下される。「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」（黙示録 22：11）。すると、神の霊の制御力が地から取り除かれる。ちょうど、ヤコブが、怒った兄エサウに殺されそうになったのと同様に、神の民も彼らを滅ぼそうとする悪者に生命を脅かされる。そして、ヤコブがエサウの手から救い出されることを 1 晩中祈ったように、義なる者は彼らの周囲の敵からの救済を日夜祈り求める。 PP 99.3

サタンは、神の天使たちの前でヤコブを訴え、彼は罪を犯したから、彼を滅ぼす権利があると主張した。サタンは、エサウを動かして、ヤコブに対して軍勢を進ませた。また、サタンは、ヤコブが一晩中格闘している間、罪を思い起こさせ、彼を失望させ、神にすかるのをやめさせようとした。この苦悩のときに、ヤコブは天使を捕えて涙なが

らに訴えたのである。すると、天使は、彼の信仰を試みるために、彼の罪を思い出させて、彼からのがれようとした。しかし、ヤコブは天使を行かせなかった。彼は、神が憐れみ深いことを知っていたので、神の憐れみによりすがった。彼は、自分がすでに罪を悔い改めたことをさし示して、切に救いを願い求めた。ヤコブは、その生涯をふりかえってみると絶望するばかりであった。しかし彼は、天使を捕えてはなさず、苦悩の叫びをあげて真剣に願い求め、ついに聞かれたのである。 PP 99.4

神の民も、悪の勢力との最後の戦いにおいて、これと同じ経験をするのである。神は、神の救出力に対する彼らの信仰、忍耐、確信を試みられる。サタンは、彼らの絶望的であること、そして、彼らの罪は大きすぎて、赦しを受けることはできないと思わせ、彼らを恐怖に陥れようとする。彼らは、自分の欠点を十分知っていて、その生涯をふりかえってみれば、絶望である。しかし、彼らは、神の大きな憐れみと自分たちの真心からの悔い改めを思い出す。そして、無力な罪人が悔い改めるときにキリストによって与えられる神の約束を懇願する。彼らの祈りが直ちに聞かれなくても、彼らの信仰はくじけない。彼らは、ヤコブが天使を捕えたように、神の力をしっかり握って、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と心から言うのである。 PP 99.5

もし、ヤコブが欺瞞によって長子の特権を獲得した罪を、前もって悔い改めていなかったならば、神は彼の祈りを聞き、彼の命を憐れみのうちに保護なさることはできなかった。それと同様に、悩みの時においても、神の民が恐怖と苦悩にさいなまれるときに、告白していない罪が彼らの前に現れてくるならば、彼らは圧倒されてしまうであろう。絶望が彼らの信仰を切り離し、神に救済を求める確信を持てなくする。 しかし彼らは自己の無価値なことを深く認めるけれども、告白すべき悪を隠していない。彼らの罪は、キリストの贖罪の血によってぬぐい去られていて、彼らはそれを思い出すことができないのである。 PP 99.6

サタンは、人生の小事に忠実でなくても神はそれを見すごされるというように多くの人々に信じこませる。しかし、神は、悪を是認も黙認もなさらないことが、ヤコブを扱われた方法によって示された。罪の弁解をして隠そうとする者、そして罪を告白せず

赦されないまま、天の記録に罪を残しておく者は、みな、サタンに打ち負かされる。彼らがりっぱなことを言い、栄誉ある地位にあればあるほど、彼らの行為は、神の前にいまわしく、大いなる敵は確実に勝利を収める。 PP 100.1

しかし、ヤコブの生涯は、罪に陥っても真に悔い改めて神にたち帰る者を、神は見捨てられないことを証明している。ヤコブが、自分の力をふるって獲得できなかったものを得たのは、自己降伏と堅い信仰によってであった。こうして、神は、彼の熱望した祝福を与え得るものは神の能力と恵みだけであることを教えられた。最後の時代においてもこれと同様である。彼らは危険に当面し、絶望に陥るとき、ただ、贖罪の功績だけに頼らなければならない。われわれは自力では何もできない。全く無力で無価値なわれわれは、十字架につけられ復活された救い主の功績に頼らなければならない。そうするかぎり、だれ 1 人滅びることはない。 PP 100.2

われわれの罪の長い暗黒の記録は、無限の神の目の前におかれている。帳簿は完全である。われわれの罪は、1 つとして忘れ去られてはいない。しかし、昔、神のしもべの叫びに耳を傾けられた神は、信仰の祈りを聞いて、われわれの罪を赦される。神は約束された。そして、神は約束を守られるのである。ヤコブは、不撓不屈の精神を持っていたから祈りが聞かれた。彼の経験は、たゆまず祈りぬくことに力があることを証拠だてた。今こそわれわれは、神に聞かれる祈りと不動の信仰についての教訓を学ばなければならない。キリストの教会、また、クリスチャン個々の最大の勝利は、才能や教育、あるいは富、または人間の援助によって得られるものではない。その勝利とは、神との交わりの部屋で熱心に苦闘する魂が、信仰によって力強いみ腕をつかむときに得られる。すべての罪を捨て、熱心に神の祝福を求めようとしなければそれを得ることができない。しかし、ヤコブのように、神の約束をしっかりにぎり、彼のように熱心に屈せず願い求める者はみな、彼のように聞かれるのである。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう」（ルカ 18：7、8）。 PP 100.3

第 19 章　カナンに帰る

本章は、創世記 34～36 章に基づく PP 100.4

ヤコブはヨルダン川を渡って、「無事カナンの地のシケムの町」に着いた（創世記 33：18）。こうして、ふたたび故郷に安全に帰らせてくださいと、神に願ったベテルでのヤコブの祈りは聞かれた。彼は、しばらくの間シケムの谷に住んでいた。アブラハムが 100 年以上も前に初めて天幕を張り、約束の国で最初の祭壇を築いたのはここであった。ヤコブはここで、「天幕を張った野の一部をシケムの父ハモルの子らの手から 100 ケシタで買い取り、そこに祭壇を建てて、これをエル・エロヘ・イスラエルと名づけた」（同 33：19、20）。――「神、イスラエルの神」の意である。アブラハムと同様に、ヤコブも自分の天幕のそばに主のための祭壇をたて、朝夕の犠牲を捧げるときに、家族の者を集めた。また後に、彼が井戸を掘ったのもここであった。そして、それから 17 世紀が経過したときに、ヤコブの子であられる救い主イエスが来られて、真昼の暑さの中で、そのかたわらに休み、驚嘆して聞き入る人々に「永遠の命に至る 水」の泉についてお語りになったのである（ヨハネ 4：14）。 PP 100.5

ヤコブとそのむすこたちのシケム滞在は、暴行と流血に終わった。家族のなかの 1 人の娘がはずかしめられた。そして娘の 2 人の兄弟は殺人罪を犯した。1 人の軽はずみな若者の不法行為に対する報復として、町中が破壊され、男たちは殺された。このような恐ろしい結果の元をただせば、ヤコブの娘が、「その地の女たちに会おうと出かけて行」き、神を敬わない人々と交際しようとしたからであった。神を恐れない人々の中で楽しみを求める者は、自分をサタンの側において、彼の誘惑を招いているのである。 PP 101.1

シメオンとレビの非道な残虐行為には、それ相当の理由がなかったわけではなかった。しかし、シケム人への彼らの行動は、恐ろしい罪であった。彼らは、自分たちの策略を巧みにヤコブから隠していた。ヤコブは彼らの行った報復の知らせを聞いて恐怖に

満たされた。彼は、むすこたちの虚偽と暴行にはなはだしく心を痛めて、ただこう言っただけであった。 PP 101.2

「あなたがたはわたしをこの地の住民……に忌みきらわせ、わたしに迷惑をかけた。わたしは、人数が少ないから、彼らが集まってわたしを攻め撃つならば、わたしも家族も滅ぼされるであろう」（創世記 34：30）。しかし、ヤコブが彼らの流血の行為をどんなに悲しみ、きらったかということは、それから約 50 年後に、彼がエジプトでの臨終の床にあったときに言った言葉にあらわれている。「シメオンとレビとは兄弟。彼らのつるぎは暴虐の武器。わが魂よ、彼らの会議に臨むな。わが栄えよ、彼らのつどいに連なるな。……彼らの怒りは、激しいゆえにのろわれ、彼らの憤りは、はなはだしいゆえにのろわれる」（同 49：5～7）。 PP 101.3

このようなことは、深く恥じ入るべきことであるとヤコブは感じた。彼のむすこたちの性格のなかに、残酷と虚偽があらわれていた。天幕のなかには、偽りの神々があった。そして、彼の家族のなかでさえ、偶像礼拝が、ある程度まで根をおろし始めていた。もし、主が彼らにふさわしい取り扱いをされるとすれば、彼らが周りの国々の復讐を受けるのをそのまま放任されるのではなかろうか。 PP 101.4

こうして、ヤコブが苦しみに沈んでいたときに、主は、ベテルにむかって南へ進むように彼にお命じになった。ヤコブは、この場所のことを考えると、天使の幻と神のあわれみの約束だけでなくて、自分がそこで、主を自分の神にすると契ったことも思い出した。この聖なる場所に行くに先だって、彼の家族は偶像礼拝の汚れから清められなければならないと、ヤコブは決心した。そこで彼は、天幕にいるすべての者に命じた。「あなたがたのうちにある異なる神々を捨て、身を清めて着物を着替えなさい。われわれは立ってベテルに上り、その所でわたしの苦難の日にわたしにこたえ、かっわたしの行く道で共におられた神に祭壇を造ろう」（同 35：2、3）。 PP 101.5

ヤコブは深い感激にふけりながら、自分が父の天幕を逃げ出して、1 人さびしく流浪の生活に入り、初めてベテルに来たときのこと、そして、主が夜の幻のうちに彼にお現れになった物語を語った。神がどんなに驚くべき恵みを彼にお与えになったかを思い起こしたときに、彼自身が感謝の念にあふれるとともに、彼のむすこたちもまた強く心

を打たれた。これは、彼らがベテルに着いてから、神の礼拝に参加するのにこの上もないよい準備であった。「そこで彼らは持っている異なる神々と、耳につけている耳輪をことごとくヤコブに与えたので、ヤコブはこれをシケムのほとりにあるテレビンの木の下に埋めた」（同 35：4）。 PP 101.6

神は、カナンの住民の心に恐怖心を起こされたので、彼らはシケムの虐殺の復讐をしなかった。ヤコブの一族は、無事、ベテルに到着した。主は、ここで再びヤコブに現れて、契約の約束を新たにされた。「そこでヤコブは神が自分と語られたその場所に、1 本の石の柱を立て」た（同 35：14）。 PP 101.7

ヤコブは、ベテルで、彼の父の家の尊ばれた一員として長く共に暮らしていたリベカのうば、デボラの死を悲しむために呼ばれた。デボラは、女主人のリベカに従って、メソポタミヤからカナンの地に来たのであった。この婦人の存在は、ヤコブに自分の幼かっ たころ、特に、強くやさしい愛をもって自分をはぐくんでくれた母をなつかしく思い起こさせた。デボラは大きな悲しみのうちに、かしの木の下に葬られ、その木は、「なげきのかしの木」と呼ばれた。デボラの忠実な奉仕の生活の記念と、その死に対する人々の悲しみとが、神のみ言葉のなかに保存される価値のあるものとみなされたことは、注目に値することである。 PP 101.8

ベテルからヘブロンまでは、わずか 2 日で行ける所であったが、その途中でヤコブは、ラケルの死という耐えがたい悲しみに出会った。ヤコブは、彼女のために 7 年間の労働に 2 度も従事したが、彼女を愛したためにその労苦をいとわなかった。その愛がいかに深く永続的なものであったかは、ずっと後になって、ヤコブが死に臨んだときにたずねてきたに、その生涯をふりかえって言った言葉のなかにあらわれている。「わたしがパダンから帰って来る途中ラケルはカナンの地で死に、わたしは悲しんだ。そこはエフラタに行くまでには、なお隔たりがあった。わたしはエフラタ、すなわちベツレヘムへ行く道のかたわらに彼女を葬った」と彼は言った（同 48：7）。ヤコブは、その長い苦しい一生の出来事のなかで、ただラケルの死だけを思い起こしたのである。 PP 102.1

ラケルは死ぬ前に、2 番目のむすこを生んだ。彼女は、最後の息のなかから、その子を「ベノニ」（わたしの悲しみの子）と呼んだ。しかし、父親は「ベニヤミン」（わたしの右の手の子、またはわたしの力）と名づけた。ラケルは、死んだ場所に葬られた。そして、記念のためにその場所に柱が建てられた。 PP 102.2

エフラタへ行く途中で、もう 1 つのかくれた罪悪がヤコブの家族を傷つけ、長子ルベンは、長子の特権と名誉とを失うにいたった。 PP 102.3

ついに、ヤコブは旅路の終わりに来た。そして、「ヘブロンのマムレにいる父イサクのもとへ行った。ここはアブラハムとイサクとが寄留した所である」（同 35：27）。彼は父が死ぬまでここにとどまっていた。衰弱して目の見えないイサクにとって、長く離れていたむすこの親切な心づかいは、1 人さびしくとり残された彼の晩年の慰めであった。 PP 102.4

ヤコブとエサウは、父の臨終の床で出会った。かつて兄は、このときを復讐の機会にしようとしていたのであったが、その後、彼の気持ちは大きく変わった。そして、ヤコブは、長子の特権の霊的祝福に満足して、父の富の継承を兄に譲った。エサウが求め尊んだ遺産もこれだけであった。彼らは、もう、ねたみや憎しみによって仲たがいをしてはいなかったが、彼らは別れて、エサウはセイル山に移っていった。豊かな祝福をお与えになる神は、ヤコブが求めた更にすぐれたものをお与えになっただけではなく、それに加えて世の富もまたお与えになった。2 人の兄弟の「財産が多くて、一緒にいることができなかったからである。すなわち彼らが寄留した地は彼らの家畜のゆえに、彼らを支えることができなかったのである」（同 36：7）。こうして別れることは、ヤコブに関する神のみこころにかなったことであった。兄弟たちは、その信仰が著しく異なっていたから、彼らが別れて住むほうがよかったのである。 PP 102.5

エサウとヤコブは、同じように神の知識を授けられた。そして、2 人は自由に神の戒めの道を歩いて、神の恵みにあずかることができたのである。しかし、彼らは、2 人ともそうはしなかった。2 人の兄弟は、異なった道を歩き、彼らの道はさらに広く大きく別れていくのであった。 PP 102.6

神が独断的選択を行い、エサウを救いの祝福から閉め出されたというようなことはない。神の恵みの賜物はキリストによって、すべての者に分け隔てなく与えられている。人間が滅びるのは、自分自身の選択によるのであって、そのように選ばれたのではない。神は、み言葉の中に、すべての魂が永遠の命に選ばれる条件をお示しになった。それは、キリストを信じる信仰によって、神の戒めに従うことである。神は、神の律法と一致した品性を選ばれるのであるから、だれでも神の要求される標準に達する者は、栄光の王国にはいることができる。キリストご自身はこう言われた。「御子を信じる者は永遠の命をもつ」（ヨハネ 3：36）。 PP 102.7

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな 天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」（マタイ 7：21）。そして、主は、黙示録のなかで言われる。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」（黙示録 22：14）。人間の最後の救いについて、み言葉の中にあらわされている選びとは、これだけである。 PP 102.8

おそれおののいて自分の救いを達成しようとする者はみな選ばれている。武具をまとって、信仰のよき戦いをする者は選ばれている。目をさまして祈り、み言葉を研究し、誘惑からのがれる者は選ばれている。常に信仰を持ち、神のみ口から出るすべてのことばに従おうとする者は選ばれている。贖罪に必要なことがらはすべての者に無代で与えられている。贖罪の成果は、条件に応じる者に与えられる。 PP 103.1

エサウは契約の祝福を軽べつした。彼は霊的利益よりは、物質的利益を高く評価した。そして、彼は望んでいたものが与えられた。彼が神の民から離されたのは、彼自身が故意にそう選んだのであった。ヤコブは、信仰の遺産を選んだ。彼は、策略と欺きと偽りによってそれを手にしたが、神は、彼の罪が矯正されていくことをお許しになった。ヤコブは、その後あらゆる苦い経験をなめたのであったが、自分の志をひるがえしたり、自分の選択を放棄したりはしなかった。彼は、人間の技巧や策略にたよって祝福を得ようとすることは、神にさからっていることであることを学んだ。ヤコブは、ヤボクの渡しで、夜、組打ちをしてから後は全く変わった人になった。自己過信が根本からぬき取

られた。それ以来、初めのころの狡猾さがみられなくなった。策略と欺瞞のかわりに、そぼくと真実さが彼の生活にあらわれた。彼は、全能のみ腕にひたすらたよるという教訓を学んだ。そして、試練と苦難のただなかにあっても、心を低くして神のみこころに従った。彼の品性の卑しい性質は炉の火で焼かれ、真の金が精練されて、アブラハムとイサクの信仰が、なんのかげりもなくヤコブのうちに見られるようになった。 PP 103.2

ヤコブの罪とその罪への一連の出来事は、悪影響を及ぼさないわけにはいかなかった。それは、彼のむすこたちの性質とその生涯に苦い実となってあらわれるにいたった。このむすこたちが成人したころ、彼らの性質に重大な欠点があらわれた。一夫多妻の結果が家庭内に明らかに見られた。この恐ろしい悪は、愛の源泉そのものを枯らし、その影響は最も神聖なきずなを弱める。数人の母のねたみは、家庭の関係をみじめなものにした。子供たちは争い合い、他からのさしずを受けるのをきらって成長した。そして、父親の生涯は心労と悲しみにおおわれ、暗くなった。 PP 103.3

しかし、ラケルの長男ヨセフは、著しく異なった性質の持ち主であった。彼のまれに見る容貌の美は、彼の精神と心の内面的美の反映であった。ヨセフは純粋で、活動的で、歓喜にあふれていた。そして、道徳的にも真剣で堅固な性質をあらわしていた。彼は、父親の教えに耳を傾け、神に従うことを愛した。後年エジプトに行ったとき、彼のうちに著しくあらわれた柔和、忠誠、誠実などの特性が、すでに彼の日常生活のなかに見られた。母親がなくなっていたために、彼は、父親に強い愛着をおぼえた。そして、ヤコブの心は、年をとってから生まれたこの子と堅く結ばれていた。彼は「他のどの子よりも」ヨセフを愛した。 PP 103.4

しかし、この愛情さえ、悩みと悲しみの原因になった。不覚にも、ヤコブはヨセフに対する偏愛を表面にあらわして、他のむすこたちのねたみを起こさせた。ヨセフは、兄弟たちの悪い行動を見て非常に苦しんだ。彼は、穏やかに兄弟たちに忠告したが、それはただ、彼らの憎しみと恨みをさらに激しくするだけであった。ヨセフは彼らが神に対して罪を犯すのを見るにしのびなかった。そこで彼は、そのことを父に話し、父の権威によって彼らを改めさせることができるように望んだ。 PP 103.5

ヤコブは、苛酷または厳格な処置をとって、彼らを怒らせることを注意深く避けた。ヤコブは、自分がどんなに子供たちのことを憂慮しているかを、強い感動 をもって話した。そして、父の白髪を尊びその名をはずかしめないように願った。特に、こうした神の律法を無視する行為によって、神の名を汚さないように彼らに熱心に訴えた。むすこたちは、彼らの悪行が父に知られたことを恥じ、悔い改めたように思われた。しかし、明るみに出たために彼らの気持ちはさらに悪化したが、彼らはそれをかくしているに過ぎなかった。 PP 103.6

普通なら偉い人々が着るような高価な上衣を、ヤコブが無分別にもヨセフに与えたことは、さらに父親の偏愛を示すものと思われて、年上の兄弟たちをさしおいて、ラケルのむすこに長子の特権を授けるのではないかという疑念をさえ起こさせるのであった。 PP 104.1

ある日、少年が、彼の見た夢を彼らに語ったために、彼らはますますヨセフを憎んだ。「わたしたちが畑の中で束を結わえていたとき、わたしの束が起きて立っと、あなたがたの束がまわりにきて、わたしの束を拝みました」とヨセフは言った（創世記 37：7）。「あなたはほんとうにわたしたちの王になるのか。あなたは実際わたしたちを治めるのか」と兄弟たちは、彼をねたましく思い、怒って言った（同 37：8）。 PP 104.2

やがて彼は、また同じような意味の夢をもう 1 つ見て、それを語った。「日と月と 11 の星とがわたしを拝みました」（同 37：9）。この夢は、最初のものと同様にその意味がすぐわかった。そこにいた父は、彼をとがめて言った。「あなたが見たその夢はどういうのか。ほんとうにわたしとあなたの母と、兄弟たちとが行って地に伏し、あなたを拝むのか」（同 37：10）。彼の言葉はきびしい譴責であったけれども、ヤコブは、主がヨセフに将来のことをあらわしておられるのを信じた。 PP 104.3

ヨセフが兄弟たちの前に立ったとき、彼のりっぱな顔は、聖霊の啓示の光に輝いていたので、彼らは称賛せずにはおれなかった。しかし、彼らは、自分たちの悪行を捨てようとはせず、自分たちの罪を責める彼の純潔さを憎んだ。カインの心を動かしたのと同じ精神が彼らの心に燃え上がった。 PP 104.4

兄弟たちは、羊の群れの草を求めて、ここかしこと移動し、時には数か月も遠くへ行って家にいないことがよくあった。前述のような事情のあとで、兄弟たちは、父がシケムに買っておいた場所へ出かけて行った。ところが、しばらく時がたってもなんのたよりも来ないので、父親は彼らの安全を気づかいだした。というのは、彼らが前にシケムの人々に残酷なことをしていたからである。そこで彼は、ヨセフを彼らのところへつかわし、彼らが安全かどうかを行って見てこさせることにした。もしヤコブが、兄弟たちのヨセフに対する憎悪心を知っていたならば、ヨセフを 1 人で彼らのところへは送らなかったであろう。しかし兄弟たちは注意深くヨセフに対する感情を表に出さなかった。 PP 104.5

ヨセフは喜んで父から離れていった。しかし、年とった父も、この若者も、ふたりがもう 1 度会うまでの間にどんなことが起こるのかを夢想だにしなかった。ヨセフは、1 人で長いさびしい旅を終えてシケムに到着したが、兄弟たちや羊の群れはそこには見つからなかった。彼らのことを尋ねているうちに、1 人の人がドタンに行くように教えてくれた。ヨセフはすでに 50 マイル以上も歩いてきたが、まだこれから 15 マイルも先に行かなければならない。しかし、ヨセフは、兄弟たちが自分には不親切であっても、なお彼らを愛していたから、彼らに会って父親を安心させようと思い、疲労を忘れて先へ急いだ。 PP 104.6

兄弟たちはヨセフが近づくのを見た。彼が、彼らに会うために遠くから旅をしてきて疲れて、うえているのであるから、兄弟の愛をもって喜んで迎えるべきであるにもかかわらず、彼らは激しい憎しみを和らげなかった。彼らは父の愛のしるしである上衣を見て、怒り狂った。「あの夢見る者がやって来る」と彼らはあざ笑って叫んだ。長い間ひそかにいだいていたねたみとふくしゅうの精神が、今彼らをとりこにした。「さあ、彼を殺して穴に投げ入れ、悪い獣が彼を食ったと言おう。そして彼の夢がどうなるか見よう」と彼らは言った（同 37：19、20）。 PP 104.7

もしルベンがいなかったら、彼らはその計略を実行していたことであろう。ルベンは兄弟を殺害することに加わることができなかった。そして、ヨセフを生き たまま穴に投げ入れて、そのままほうっておいて死ぬにまかせようと言った。しかし、ルベンは

ひそかにヨセフを助けて、父のところに帰らせようとたくらんでいた。ルベンは、その計画に一同の同意を得たあとで、自分の感情をおさえきれなくなった。そして自分の真の目的が何であるかを発見されるのを恐れて仲間を離れていった。 PP 104.8

ヨセフは危険が身に迫っていることも気づかず、さがしていた兄弟たちが見つかったことを喜んだ。しかし彼は、期待していたあいさつの言葉の代わりに、怒りとふくしゅうの目でにらまれて驚いた。彼は捕えられ、上衣を脱がされた。そのあざけりと脅かしは、彼らがヨセフの命を奪おうとしていることを明らかに示した。だれも彼の哀願に耳をかす者はなかった。彼は怒り狂った男たちのなすままになっていた。彼らは、ヨセフを荒々しく引っぱって行き、深い穴へ投げこんだ。そして逃げられないことを確かめた上で、そのままの状態で彼を餓死させようとした。こうして彼らは、「すわってパンを食べた」（同 37：25）。 PP 105.1

しかし、兄弟たちのなかには、不安な気持ちをいだいた者があった。復讐によって得られると思った満足感がなかったのである。やがて旅人の一団が近づいてくるのが見えた。それはヨルダンの向こうのイシマエルの隊商で、香料その他の商品を持ってエジプトへ行く途中であった。ユダは、兄弟を穴の中においたまま死なせるよりは、異邦の商人に売ろうと言い出した。そうすれば、彼を都合よく追放することができて、殺さないですむ。「彼はわれわれの兄弟、われわれの肉身だから、彼に手を下してはならない」と言った（同 37：27）。他の者もみなこれに賛成したので、ヨセフは急いで穴から引き上げられた。 PP 105.2

ヨセフは、隊商を見るとすぐに恐ろしい自分の運命に気づいた。奴隷になることは死ぬよりも恐ろしい運命であった。恐ろしさのあまり、泣き叫んで、兄弟たち 1 人 1 人にすがって頼んだがなんの役にも立たなかった。あわれみの情を表した者もあったが、他の者から嘲笑されることを恐れて何も言わなかった。すべての者が、こうなっては引くに引けないところまで行ってしまったことに気づいた。もしもヨセフを救うならば、ヨセフは起こったことを父に知らせるにちがいない。そして父は、愛するむすこに対する彼らの残酷な行為を許すはずはないのであった。彼らは、ヨセフの哀願に対して心を

鬼にして異邦の商人の手にヨセフを渡してしまった。隊商は進んで行き、やがて見えなくなった。 PP 105.3

ルベンが穴にもどってみると、ヨセフはいなかった。ルベンは驚きと自責の念にさいなまれて、自分の着物を裂き、兄弟たちのところに来て、「あの子はいない。ああ、わたしはどこへ行くことができよう」と叫んだ（同 37：30）。ルベンは、ヨセフの運命を聞いてもう彼を取りもどすことができないことを知り、彼らと 1 つになってその罪をかくすようになってしまった。彼らは雄やぎを殺してヨセフの着物をその血にひたした。そしてそれを父のところに持って行って、これを野で見つけた、これはヨセフのではないかと思う、と言った。「わたしたちはこれを見つけましたが、これはあなたの子の着物か、どうか見さだめてください」と彼らは言った（同 37：32）。 PP 105.4

彼らは、この時の恐ろしさを予期してはいたが、父の心がはり裂けるばかりに苦しみ、悲しみの窮みに達して泣き叫ぶのを目撃しなければならないとは思っていなかった。「わが子の着物だ。悪い獣が彼を食ったのだ。確かにヨセフはかみ裂かれたのだ」とヤコブは言った（同 37：33）。むすこや娘たちがどんなに彼を慰めようとしてもむだであった。ヤコブは、「衣服を裂き、荒布を腰にまとって、長い間その子のために嘆いた」（同 37：34）。時がたっても彼の悲しみは慰められなかった。「わたしは嘆きながら陰府（よみ）に下って、わが子のもとへ行こう」と言って彼は嘆き悲しんだ（同 37：35）。むすこたちは、自分たちのしたことの恐ろしさを感じた。しかし彼らは父の譴責を恐れて、彼らの罪を心にかくしていた。それは自分たちにさえ、非常に大きな罪と思われたのである。 PP 105.5

第 20 章　エジプトにおけるヨセフ

本章は、創世着記 39～41 章に基づく PP 106.1

一方、ヨセフは、売られた隊商につれられてエジプトに向かった。隊商がカナンの国境に向かって南下したとき、ヨセフは遠方に父の天幕が張ってある山を見ることができた。彼は愛する父親のさびしさと苦しさを察して激しく泣いた。ふたたびドタンで起こったことを思い出した。彼は兄弟たちの怒りを見、彼らの恐ろしい目つきを身に感じた。泣き叫んで訴える彼に浴びせられた鋭い侮蔑の言葉が彼の耳に鳴っていた。彼は将来のことを考えて恐れおののいた。たいせつに扱われたむすこから、いやしい無力な奴隷になるとはなんという変わりようであろう。ただ 1 人、友もなく異国に連れられていく彼の運命はどうなることであろうか。ヨセフは、しばし悲哀と恐怖の念にかられて気が狂いそうであった。 PP 106.2

しかし、神の摂理のうちに、このような経験さえも祝福になるのであった。ヨセフはわずかの時間のうちに、数年かかっても得られない教訓を学んだ。彼の父は、強くやさしい愛の人であったが、彼を特別に愛してあまやかしたことは彼のためにならなかった。この愚かな偏愛は兄弟たちを怒らせ、彼らに残虐行為を行わせ、ヨセフを家庭から引き離す原因になった。その影響は、彼自身の性格にもあらわれていた。彼は、これまでに助長された欠点を改める必要があった。彼はうぬぼれの強い苛酷な人間になりつつあった。彼は、父親のやさしい保護になれていたので、前途の困難と、異国人また奴隷としてのきびしい、誰の保護もない生活になんの準備もないことを感じた。 PP 106.3

そのとき彼は、父の神のことを考えた。彼は幼いときから、神を愛し恐れることを教えられていた。彼は父の天幕の中で、ヤコブが逃亡者となって家を脱出したときに見た幻の話をよく聞いたものであった。彼はヤコブに与えられた主の約束とそれが成就した方法、すなわち、父が最も必要に迫られたときに、神の天使が現れて彼を教え、慰め、保護したことを教えられていた。また、彼は、人間のために贖い主を与えられた神の愛について学んでいた。彼は今、こうした尊い教訓をまざまざと思い出した。ヨセフは、

先祖の神が自分の神であることを信じた。彼はその時その場所で自分を全く主に捧げ、イスラエルを守るものが、流浪の地で彼と共にいてくださるように祈った。 PP 106.4

彼はどのような環境のもとにあっても、天の王の臣民らしく行動し、神に忠誠を尽くそうと決心して大きな感動をおぼえた。彼は、専心、主に仕えようと思った。彼は勇敢に試練に当面し、忠実に義務を果たそうとした。この 1 日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になった。その恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着なおとなに彼を変えたのである。 PP 106.5

エジプトに到着したヨセフは、パロの侍衛長ポテパルに売られてそこで 10 年間仕えた。ここで彼は非常に大きな誘惑にあった。彼は、偶像礼拝のただ中にいた。偽りの神の礼拝は、王宮のあらゆる栄華に取り巻かれ、当時最高の文明国の富と教養にささえられていた。しかし、ヨセフは彼の純真さと神への忠誠を保った。彼の周囲には、至るところに罪悪の光景や物音があったが、彼はそれを見ようとも聞こうともしないのであった。彼は、禁じられた問題を考えないのであった。彼はエジプト人の好感を得ようと望んで原則を隠すことをしなかった。もし、彼がそうしたならば、試練に負けたことであろう。しかし彼は、父祖の信仰を恥と思わず、自分が主の礼拝者であることを少しも隠そうとしなかった。 PP 106.6

「主がヨセフと共におられたので、彼は幸運な者となり、……その主人は主が彼とともにおられることと、主が彼の手のすることをすべて栄えさせられるのを見た」（創世記 39：2、3）。ポテパルのヨセフに対する信任は日ごとに増し、彼はついにポテパルの家令に任じられ、財産を全部ゆだねられた。「そこで彼は持ち物をみなヨセフの手にゆだねて、自分が食べる物のほかは、何をも顧みなかった」（同 39：6）。 PP 106.7

ヨセフに委ねられたものが、すべて驚くべき繁栄をもたらしたことは、直接奇跡が行われたためではなかった。それは彼の勤勉と管理と活動に対して、天からの祝福が加えられたのである。ヨセフは、この成功を神の恵みに帰し、偶像礼拝者の主人もそれがこれまでにない繁栄の秘訣であることを認めた。ところが、目的に向かってたゆまず努力をするのでなければ、成功を収めることはできない。神は、神のしもべが忠実である

ことによって栄光を受けられた。神を信じる者の純潔と高潔とが、偶像礼拝者とは著しく対照的にあらわされることを神は望まれた。こうして、異教の暗黒のただ中にあって、天の恵みの光が輝かされるのであった。 PP 107.1

ヨセフの温順と忠誠は、侍衛長の心を捕え、ヨセフを奴隷というよりもむすこであると思うようになった。ヨセフは、地位の高い人や学者と接し、科学、語学、社会情勢などの知識を得た。これは、彼が将来エジプトの総理大臣となるのに必要な教育であった。 PP 107.2

ところがヨセフの信仰と誠実とが、火のような試練にあうことになった。主人の妻が神の律法を犯すように彼を誘惑した。彼はこれまで、異教国にみなぎっていた腐敗に染まずにいた。しかし、突然、強く、魅惑的に迫ったこの誘惑に、彼はどうしたらよいであろうか。ヨセフは拒絶すればどういう結果になるかをよく知っていた。応じればそれは秘密にされて、寵愛と報賞を受ける。反対にそれを拒めば、汚名を着せられて投獄され、殺されるかも知れなかった。彼の将来の人生のすべてがこの一瞬の決断にかかっていた。原則が勝利するであろうか。ヨセフはそれでもなお神に忠誠を尽くすであろうか。天使たちは、言葉にあらわせない不安をいだいて、この光景をながめた。 PP 107.3

ヨセフの答えは、宗教的原則の力を示した。彼は、地上の主人の信頼を裏切ろうとしなかった。そして、結果がどうなろうと、彼は天の主人に忠実であろうと願った。多くの人々は、神と聖天使たちの目が見守っているなかで、同胞の前ではしないようなかってなふるまいをする。しかし、ヨセフはまず第一に神のことを考えた。「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう」と彼は言った（同 39：9）。 PP 107.4

もし、神がわれわれのなすこと、言うことのすべてを見聞きして、その言行動作をそのまま記録しておられること、そして、われわれはいつかそのすべてに当面すべきであることを常に念頭においていれば、罪を犯すことを恐れるであろう。青年たちはどこにいて、何をしようとも神の面前にあることを覚えていよう。われわれの行動は、なに 1 つ注視の目をのがれることができない。至高者からわれわれの道を隠すことはできな

い。人間の法律は時としてきびしく思われるが、犯罪が発見されないまま処罰を免れることがよくある。しかし、神の律法はそうではない。どんな夜中の暗黒も、犯罪者を隠すことはできない。自分 1 人だけであると思っていても、目に見えない目撃者がすべての行為を見ている。心の動機でさえも、神の目にはあきらかである。すべての行為、すべての言葉、すべての思いは、あたかも全世界にその人が 1 人しかいないかのようにはっきり認められて、天の注目が彼に集中しているのである。 PP 107.5

ヨセフは、廉潔であったために苦しみを受けた。彼を誘惑した者は、道にはずれた罪の汚名をヨセフに着せて恨みを晴らし、彼を獄屋に投げ入れた。もしポテパルが妻の訴えをそのとおりに信じたならば、ヘブルの青年の命はなかったことであろう。しかし、ヨセフの生活態度に常にあらわされていた慎みと正直とは、彼の無実を証明していた。しかし、主人の家の評判を傷つけないために、ヨセフは恥辱と束縛を受けることになった。 PP 107.6

ヨセフは初め獄屋番の苛酷な扱いを受けた。「彼の足は足かせをもって痛められ、彼の首は鉄の首輪にはめられ、彼の言葉の成る時まで、主のみ言葉が彼を試みた」と詩篇記者は言っている（詩篇 105：18、19）。しかし、ヨセフの真の品性は、この暗い獄屋の中でも輝いていた。彼は、信仰と忍耐とを堅く守り通した。彼の長年の忠実な奉仕は、ここで不当な報いを受けることになったが、彼は気分を害したり、 信頼を失ったりはしなかった。ヨセフは自己の無実を自覚していたから、心は平静であった。そして、神に自分のことを委ねていた。彼は自分の逆境を悲しまず、かえって他の人々の悲しみを軽減することによって、自分の悲しみを忘れようとした。彼は、獄屋のなかでもなすべき働きを見いだした。神は、この苦難という学校のなかで、さらに偉大なことに役立つ準備を与えようとされたが、ヨセフは必要な訓練を受けることを拒まなかった。彼は獄屋のなかで、圧迫と専制の結果、また、犯罪の結果を目撃し、正義、同情、慈悲の教訓を学んだ。これが、知恵と同情をもって権威を行使するための準備を彼に与えたのである。 PP 107.7

ヨセフは徐々に獄屋番の信任を得るようになり、ついには、すべての囚人の責任を委ねられるようになった。彼の日常生活にあらわれた誠実さ、また、悩み苦しむ人々に

対する同情など、彼が獄屋のなかで行ったことがヨセフの将来の繁栄と名誉への道を開いた。われわれが他人に輝かす光は、すべて、また自分たちに反映する。悲しむ者に語るすべての親切で同情に満ちた言葉、しいたげられている者を救うすべての行為、貧しい人々へのすべての贈り物などは、それらが正しい動機から出たものであるならば、必ず祝福となってそれを与えた者にもどってくる。 PP 108.1

エジプト王の給仕役の長と料理役の長とが、罪を犯して獄屋に入れられ、ヨセフの責任下におかれた。ある朝 2 人が思い悩んでいたので、ヨセフは親切にそのわけをたずねた。すると、2 人とも不思議な夢を見て、その意味を知りたく思っているのだと語った。ヨセフは、「解くことは神によるのではありませんか。どうぞ、わたしに話してください」と言った（創世記 40：8）。彼らはおのおのその夢を語り、ヨセフが夢の解き明かしをした。それによると、3 日のうちに給仕役の長はもとの地位にもどって以前と同じようにパロの手に杯をささげるようになるが、料理役の長のほうは王の命令によって殺されるというのであった。そして、それはヨセフの言ったとおりになった。 PP 108.2

王の給仕役の長は、ヨセフの夢の解き明かしと、獄屋での数多くの親切で慈悲深い行為に深く感謝した。ヨセフはそれに答えて、自分が獄屋に不当につながれていることを涙ながらに訴えて、彼の件を王に取り計らってくれるように頼んだ。「それで、あなたがしあわせになられたら、わたしを覚えていて、どうかわたしに恵みを施し、わたしの事をパロに話して、この家からわたしを出してください。わたしは、実はヘブルびとの地からさらわれてきた者です。またここでもわたしは地下の獄屋に入れられるような事はしなかったのです」とヨセフは言った（同 40：14、15）。給仕役の長の夢はそのとおり実現した。しかし、彼は、ふたたび王の愛顧をこうむったとき、恩人ヨセフのことをすっかり忘れてしまった。ヨセフは、それから 2 年近くも獄屋の中に残された。彼の心にともされた希望はうすれ、多くの苦難の上に、人に忘れ去られる苦しみを心に痛く感じるのであった。 PP 108.3

しかし、神のみ手は獄屋の扉をまさにあけようとしていた。エジプトの王は、一夜のうちに 2 つの夢を見た。それらは、明らかに同じ事件を指示し、しかも大きな災い

を予告しているかのように思われた。王は、その夢の意味を理解することができなかった。しかし夢は王の心を悩ましつづけた。エジプトのすべての魔術師や知者たちも、それを解き明かすことかできなかった。王の困惑と苦悩はますますつのり、王宮全体が恐怖に襲われた。この大騒ぎが起こったときに、給仕役の長は自分が夢を見たときの事情を思い出し、それとともにヨセフの記憶がよみがえってきた。そして、自分の怠慢と忘恩とを考えて、自責の念に苦しめられた。彼はただちに、自分と料理役の長とが見た夢をヘブルの囚人が解き明かしてくれて、彼の言ったとおりになったことを王に話した。 PP 108.4

パロが、白国の魔術師や知者たちを退けて、異国人、しかも奴隷の意見を聞くということは恥辱であった。しかし、彼は、心の苦悩が解決されるのであれば、どんなに身分の卑しい者の言うことでも聞き入れようとしていた。使いの者が、すぐにヨセフのところに送られた。彼は囚人の着物を脱ぎ、ひげをそった。彼の髪の毛が、屈辱と投獄の期間に長くのびていたからである。こうして彼は、王の面前に召し出された。 PP 108.5

「パロはヨセフに言った、『わたしは夢を見たが、これを解き明かす者がない、聞くところによると、あなたは夢を聞いて、解き明かしができるそうだ』。ヨセフはパロに答えて言った、『いいえ、わたしではありません。神がパロに平安をお告げになりましょう』」（同 41：15、16）。 PP 109.1

ヨセフのパロへの答えの中に、彼の謙遜と、神への信仰があらわされている。彼は、つつしみ深く、すぐれた知恵が自分にあるなどとは言わなかった。「いいえ、わたしではありません」。神だけがこれらの秘密を解き明かすことができるのである。 PP 109.2

そこでパロは、彼の夢を語った。「夢にわたしは川の岸に立っていた。その川から肥え太った、美しい 7 頭の雌牛が上がってきて葦を食っていた。その後、弱く、非常に醜い、やせ細った他の 7 頭の雌牛がまた上がってきた。わたしはエジプト全国で、このような醜いものをまだ見たことがない。ところがそのやせた醜い雌牛が、初めの 7 頭の肥えた雌牛を食いつくしたが、腹にはいっても、腹にはいった事が知れずやはり初

めのように醜かった。ここでわたしは目が覚めた。わたしはまた夢をみた。1 本の茎に 7 つの実った良い穂が出てきた。その後、やせ衰えて、東風に焼けた 7 つの穂が出てきたが、そのやせた穂が、あの 7 つの良い穂をのみつくした。わたしは魔術師に話したが、わたしにそのわけを示しうる者はなかった」。 PP 109.3

「ヨセフはパロに言った、『パロの夢は 1 つです。神がこれからしようとすることをパロに示されたのです』」。これから 7 年間の豊作が続き、畑も果樹園もこれまでにないほどの大豊作となる。しかしそのあとで 7 年間の凶作が続き、「後に来るそのききんが、非常に激しいから、その豊作は国のうちで記憶されなくなるでしょう」。夢が 2 度くりかえされたのは、それがまちがいなく間もなく起こるという証拠であった。彼は続けて言った。「それゆえパロは今、さとく、かつ賢い人を尋ね出してエジプトの国を治めさせなさい。パロはこうして国中に監督を置き、その 7 年の豊作のうちに、エジプトの国の産物の 5 分の 1 を取り、続いて来る良い年々のすべての食糧を彼らに集めさせ、穀物を食糧として、パロの手で町々にたくわえ守らせなさい、こうすれば食糧は、エジプトの国に臨む 7 年のききんに備えて、この国のためにたくわえとなり、この国はききんによって滅びることがないでしょう」（同 41：17～25、31、33～36）。 PP 109.4

解き明かしは、理路整然としていた。また、ヨセフの提案した政策は、堅実、賢明なものであったために、その正確なことは疑う余地がなかった。しかし、この計画の実行を、いったいだれに委ねるべきであろうか。この人選に全国民の存亡がかかっていた。王は困惑した。しばらく、士はこの任命について考慮中であった。王は給仕役の長から、ヨセフが知恵と思慮深さをもって、獄屋の管理に当たったことを聞いていた。ヨセフが行政の手腕においても、優秀な能力の持ち主であることは明らかであった。給仕役の長は、今や、自責の念にかられていたので、恩人ヨセフを心からほめちぎって、かつての忘恩の罪を償おうと努めた。さらに王の調査は、給仕役の長の報告にまちがいのないことを証明した。王国に臨む危険を指示する知恵を持ち、それに当面するのに必要な準備のある者は、国中でヨセフのほかになかった。 PP 109.5

そこで王は、彼が提案した計画を実行に移す唯一の資格ある人物がヨセフであることを確信した。神の力がヨセフと共にあったことは明らかであった。しかもこの危機に臨んで、国家の諸問題に対処し得る資格のある者は、王の役人のなかに 1 人もいなかった。ヨセフがヘブル人の奴隷であることなどは、彼の明確な知恵と適正な判断力を考慮したとき、たいした問題ではなかった、「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか」と王は家来たちに言った（同 41：38）。 PP 109.6

任命は決定された。ヨセフにとって驚くべき宣言がなされた。「神がこれを皆あなたに示された。あなたのようにさとく賢い者はない。あなたはわたしの家を治めてください。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょう。わたしはただ王の位でだけあなたにまさる」。王は、ヨセフの高い地位をあらわす記章を彼に与えようとするのであった。「そしてパロは指 輪を手からはずして、ヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、金の鎖をくびにかけ、自分の第 2 の車に彼を乗せ、『ひざまずけ』とその前に呼ばわらせ、こうして彼をエジプト全国のつかさとした」（同 41：39、40、42、43）。 PP 109.7

「王はその家のつかさとしてその所有をことごとくつかさどらせ、その心のままに君たちを教えさせ、長老たちに知恵を授けさせた」（詩篇 105：21、22）。ヨセフは獄屋からエジプト全国のつかさにと高められた。それは、高い名誉ある地位ではあるが困難と危険とが伴うものであった。人間は、高い頂に立てば必ず危険にあうものである。嵐は谷間の低いところに咲く花をそこなうことはないとしても、山頂にある大木を根こぎにすることがある。同様に、平凡な生活のときには廉潔を保って来た人も、世的成功と名誉に伴って誘惑に敗れて深い穴に落ちこむことがある。しかし、ヨセフの品性は、繁栄のときと逆境のときの両方の試練に耐えた。牢獄の中においてあらわされた神への忠誠は、パロの王宮に立ったときにもあらわされた。彼はこのときでさえも異教の地の他国人であり、真の神を礼拝する親族から遠く離れていた。しかし、彼は神のみ手が自分の歩む道を指示したことを心から信じ、神に常に信頼しつつ忠実に与えられた義務を果たしたのである。ヨセフを通して、王やエジプトの高官たちの注目は、真の神に向け

られた。彼らは偶像礼拝を続けてはいたものの、主なる神の礼拝者の生活と品性にあらわれた原則を尊敬するようになった。 PP 110.1

ヨセフはどのようにして堅固な品性を持ち、正しく知恵ある者としての記録を残すことができたのであろうか。彼は幼少の時代から、自分の好みよりも義務を第一にしていた。青年時代の廉潔、単純な信頼、高尚な性質が成人したのちの行動となって実を結んだ。純潔で素朴な生活が、肉体的、知的能力の両方が力強く発達するのに有益であった。神のみわざを通して神と交わり、信仰の継承者たちに伝えられた偉大な真理の数々を瞑想することにより、ヨセフの霊的な性質は高められ、気高くされ、他のどんな研究も及ばないほどに、彼の心を広げて強くした。最も低いところから、最も高いところにいたるまで、あらゆる場所にあって忠実に義務を果たしたことはすべての能力を最高の奉仕のために発揮する訓練となった。創造主のみこころに従って生きる者は、最も真実で最も高尚な品性を発達させることができる。「主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」（ヨブ 28：28）。 PP 110.2

人生における小さなことが、品性の発展にどんな影響をおよぼすかを悟っている人は非常に少ない。われわれのなすべきことで、ほんとうに小さいというものは 1 つとしてない。われわれが日ごとに直面する環境は、われわれの忠実さをためし、さらに大きな信頼を受ける資格がある者かどうかをためすために意図されている。平常の生活での事務や取引において原則を保ち続けることによって、心は快楽や好みよりも義務の要求を第一に考えるように習慣づけられる。このようにして訓練された心は、風にそよぐ葦のように善と悪との間にゆらぐことはない。彼らは誠実と真実の習慣をつけてきたために義務に対して忠実である。彼らは小さなことに忠実であることによって、大きなことにおいても忠実である力を得るのである。 PP 110.3

正しい品性は、オフルの純金よりもさらに大いなる価値がある。それがなければ、だれひとり栄誉ある名声を博すことはできない。しかし、品性は遺伝しない。それは買うこともできない。道徳上の美点も、すぐれた知的素質も決して偶然の結果ではない。最も尊い賜物も、活用しなければなんの価値もない高尚な品性の形成は、一生涯かかる

仕事である。それは、熱心でたゆまぬ努力の結果でなければならない。神は機会をお与えになる。成功は、その活用いかんにかかっている。 PP 110.4

第 21 章　ヨセフと兄弟たち

本章は、創世記 41：54～56、42～50 章に基づく PP 111.1

豊年の開始と同時に、やがて近づいてくるききんのための準備も始まった。ヨセフの指揮のもとに、エジプト全国の主要な町々には、巨大な倉庫がつくられ、期待された収穫物の余剰を保存する十分の手はずが整った。この同じ方針は、豊作の 7 年間続けられ、ついに貯蔵してある穀物の量を計ることができないまでになった。 PP 111.2

やがて、ヨセフが予告したように 7 年間のききんがやってきた。「ヨセフの言ったように 7 年のききんが始まった。そのききんはすべての国にあったが、エジプト全国には食物があった。やがてエジプト全国が飢えた時、民はパロに食物を叫び求めた。そこでパロはすべてのエジプトびとに言った、『ヨセフのもとに行き、彼の言うようにせよ』。ききんが地の全面にあったので、ヨセフはすべての穀倉を開いて、エジプトびとに売った」（創世記 41：54～56）。 PP 111.3

ききんはカナンの地にもおよび、ヤコブが住んでいた地方でも激しくなってきた。エジプトの王が十分なたくわえをしていると聞いて、ヤコブの 10 人のむすこたちは、穀物を買うためにエジプトにむかった。彼らは到着すると、王の役人のところに行く指示を受けた。そして、買いに来た他の人々とともにエジプト全国のつかさの前にすすんだ。「ヨセフの兄弟たちはきて、地にひれ伏し、彼を拝した」「ヨセフは、兄弟たちであるのを知っていたが、彼らはヨセフとは知らなかった」（同 42：6、8）。彼のヘブルの名は、王に与えられた名前に変えられていたし、このエジプトのつかさと、彼らがイシマエルびとに売った若者とはまったく似かよう点はなかった。ヨセフは、兄弟たちが腰をかがめておじぎしているのを見て、かつて彼が見た夢を思い出し、昔の光景がはっきりとよみがえってきた。彼は鋭いまなざしで一同を見わたしたが、ベニヤミンがいないことに気がついた。ベニヤミンも、これらの残忍な兄弟たちの非道な策略のために犠牲になったのではなかろうか。彼は、事実を知ろうと思った。彼は「あなたがたは回

し者で、この国のすきをうかがうためにきたのです」ときびしく詰問した（同 42：9）。 PP 111.4

彼らはヨセフに答えた、「いいえ、わが主よ、しもべらはただ食糧を買うためにきたのです。われわれは皆、1 人の人の子で、真実な者です。しもべらは回し者ではありません」（同 42：10、11）。ヨセフは、自分が彼らと一緒にいたころのような高慢な心を、彼らがまだもっているかどうかを知りたかった。また、家のことについて、少しでも手がかりになることを聞き出したいと思った。しかし、兄弟たちの言うことがどんなにあてにならないものかも彼はよく知っていた。そこで同じことをくりかえして尋ねたが、兄弟たちは、「しもべらは 12 人兄弟で、カナンの地にいるひとりの人の子です。末の弟は今、父と一緒にいますが、他のひとりはいなくなりました」と答えた（同 42：13）。 PP 111.5

司は、兄弟たちが物語ることの真実性を疑っているかのようなふりをして、彼らをあいかわらず回し者のように扱った。そして、彼らをためしたいと思うから、彼らがエジプトに残り、1 人だけ行って末の弟を連れてくるようにと彼は命じた。もしも兄弟たちが彼の要求に同意しなければ、回し者として取り扱われるのであった、しかし、ヤコブのむすこたちがそんなことをしていれば、家族は食物の不足に苦しまなければならないからそのような取りきめには同意することができなかった。それに、いったいだれが兄弟たちを牢獄に残したまま、ただ 1 人で旅に出かけるだろうか。そんな事情のもとで父に会うことがどうしてできようか。彼らは殺されるか、あるいは奴隷にされるかもしれないありさまであった。たとえ、ベニヤミンを連れてきたとしても、彼らと同じ運命にあうかもしれない。兄弟たちは、たった 1 人残ったむすこを失わせて、父をさらに悲しませるよりも、一緒にそのままいて、共に苦しむことにきめた。彼らは、こうしてみな一緒に 3 日間、監禁所に入れられた。 PP 111.6

ヨセフが兄弟たちから離れていた年月の間に、ヤコブの子らは品性が変わっていった。彼らは、かつては嫉妬心が強く、乱暴で、人をだまし、残酷で執念深かった。しかし、こうして逆境の中で試練にあったときに、彼らは無我の精神をあらわし、互いに真

実で父に孝養をつくし、彼ら自身すでに中年に達していたが、父の権威に従うようになった。 PP 112.1

エジプトの牢獄の中ですごした 3 日間は、兄弟たちが、過去の罪の数々を反省する苦い悲しみの日々であった。ベニヤミンを連れてこなければ、回し者であるとの疑いは確定するし、ベニヤミンを連れて行くことに父が同意してくれる希望はほとんどなかった。 PP 112.2

3 日目になって、ヨセフは兄弟たちを召し出した。彼は、もはやこれ以上兄弟たちを拘留しようとは考えなかった。すでに長く、父とその家族たちは食べ物の不足に苦しんでいる。ヨセフは言った。「こうすればあなたがたは助かるでしょう。わたしは神を恐れます。もしあなたがたが真実な者なら、兄弟のひとりをあなたがたのいる監禁所に残し、あなたがたは穀物を携えて行って、家族の飢えを救いなさい。そして末の弟をわたしのもとに連れてきなさい。そうすればあなたがたの言葉のほんとうであることがわかって、死を免れるでしょう」（同 42：18～20）。 PP 112.3

兄弟たちは、父がベニヤミンを彼らと一緒にエジプトへ行かせないだろうと言いつつもこの計画を受け入れることに同意した。ヨセフは、兄弟たちに通訳者を通して話していたので、兄弟たちは自分たちの言葉がつかさにはわからないと思い、自分たちの思うままをヨセフの前で語り合っていた。彼らは互いに、自分たちのヨセフに対するあつかいがまちがっていたことを反省し、「確かにわれわれは弟の事で罪がある。彼がしきりに願った時、その心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでこの苦しみに会うのだ」と言った（同 42：21）。ドタンでヨセフを救おうと計ったルベンは、「わたしはあなたがたに、この子供に罪を犯すなと言ったではないか。それにもかかわらずあなたがたは聞き入れなかった。それで彼の血の報いを受けるのです」とつけ加えた（同 42：22）。ヨセフはもはや感情をおさえることができず、外に出て泣いた。それからまたもどってきて、ヨセフは兄弟たちの前でシメオンをしばり、牢獄に入れた。かつて彼らがヨセフを残酷にあつかったとき、シメオンが兄弟たちをそそのかした主謀者であった。彼が選ばれたのは、そのためであった。 PP 112.4

兄弟たちに、立ち去る許可を与える前に、ヨセフは彼らに穀物を与え、その代金は、各自の袋の口のところにひそかに返すように指示した。また彼は故郷への旅路の間の家畜の飼料も与えた。帰る途中で、彼らの 1 人が袋をあけ、金袋を見つけて驚いた。このことを他の者に知らせると彼らはあわてふためき、「神がわれわれにされたこのことは何事だろう」と話し合った（同 42：28）。彼らは、これを主からの賜物とすべきだろうか、あるいは、主が彼らの罪を罰するためにこのようなことをし、さらに深い苦しみにあわせようとしておられるのだろうか。兄弟たちは、神が彼らの罪を見られて罰せられるのだと考えた。 PP 112.5

ヤコブは、むすこたちの帰りを今か今かと待っていたが、彼らが到着するや、天幕中の者がみな集まり、彼らが、エジプトで起こったいろいろなことを父に話すのを熱心に聞いた。すべての者の心は、驚きと不安に満たされた。その上、袋をあけてみるとめいめいの袋の中に金包みがはいっているのを見て、エジプトの司の行動にはなにか悪いたくらみがあるように思えて、彼らの恐怖心はますますつのった、悩み、苦しんだ老父は叫んだ。「あなたがたはわたしに子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。今度はベニヤミンをも取り去る。これらはみなわたしの身にふりかかって来るのだ」。ルベンは答えた。「もしわたしが彼をあなたのもとに連れて帰らなかったら、わたしのふたりの子を殺してください。ただ彼をわたしの手にまかせてください。わたしはきっと、あなたのもとに彼を連れて帰ります」。この軽率な言葉は、ヤコブの心を慰めることができなかった。彼の答えは、「わたしの子はあなたがたと共に下って行ってはならない。彼の兄は死に、ただひとり彼が残って いるのだから。もしあなたがたの行く道で彼が災に会えば、あなたがたは、しらがのわたしを悲しんで陰府に下らせるであろう」（同 42：36～38）。 PP 112.6

しかし、ききんは続いた。時がたつにつれてエジプトから持ってきた穀物もほとんどなくなった。ヤコブのむすこたちは、ベニヤミンを連れずにエジプトに行くことはむだなことを知っていた。彼らは父の決心を変える望みが全くないことがわかっていたので、だまってなりゆきを見守っていた。飢饉はいよいよ激しさを増していった。宿営にいるすべての人々の沈んだ表情を見て、年老いたヤコブは、彼らの必要をさとった。つ

いに彼は、「また行って、われわれのために少しの食糧を買ってきなさい」と言った（同 43：2）。 PP 113.1

ユダは答えた。「あの人はわれわれをきびしく戒めて、弟が一緒でなければ、わたしの顔を見てはならないと言いました。もしあなたが弟をわれわれと一緒にやってくださるなら、われわれは下って行って、あなたのために食糧を買ってきましょう。しかし、もし彼をやられないなら、われわれは下って行きません。あの人がわれわれに、弟が一緒でなければわたしの顔を見てはならないと言ったのですから」。父の決心が揺らぎ始めたのを見てユダはさらに、「あの子をわたしと一緒にやってくだされば、われわれは立って行きましょう。そしてわれわれもあなたも、われわれの子供らも生きながらえ、死を免れましょう」（同 43：3～5、8）と言い、自分がベニヤミンの身を保証し、もしもベニヤミンを父のもとに返さなかったならば、自分が永久にその責任を負うと言った。 PP 113.2

ヤコブは、もはや同意せざるを得なくなり、むすこたちに、旅に出る準備をすることを命じた。ヤコブは、飢饉で荒廃した国で産出する「少しの乳香、少しの蜜、香料、もつやく、ふすだしう、あめんどう」を司のため、そして、倍額の金を持っていくことを命じた。「弟も連れ、立って、またその人の所へ行きなさい。どうか全能の神がその人の前であなたがたをあわれみ、もうひとりの兄弟とベニヤミンとを、返させてくださるように。もしわたしが子を失わなければならないのなら、失ってもよい」（同 43：11、13、14）。 PP 113.3

彼らはもう一度エジプトに行き、ヨセフの前に出た。ヨセフが、自分の母の子、ベニヤミンを見ると深く感動した。それでもヨセフは感情をあらわさず彼らを自分の家に連れてゆき、食事を共にする準備を命じた。つかさの邸宅に連れてゆかれた兄弟たちは、袋の中にあった金包みのことで呼ばれたのではないかと大きな不安にかられた。彼らは、自分たちを奴隷にするために金がわざと袋の中に入れられたのだと思った。 PP 113.4

困り果てた兄弟たちは、ヨセフの家司に、自分たちがエジプトに来た事情や、自分たちがなんの罪もないことを証明するために、袋の中にあった金包みを持ってきたこと。それから食糧を買うための金も持ってきたことなどを話し、「われわれの銀を袋に入れ

た者が、だれであるかは分りません」とつけ加えた。すると家司は答えた。「安心しなさい。恐れてはいけません。その宝はあなたがたの神、あなたがたの父の神が、あなたがたの袋に入れてあなたがたに賜わったので魂あなたがたの銀はわたしが受け取りました」（同 43：22。23）。彼らの心配はなくなった。そして、シメオンが牢獄から出されて、兄弟たちに加わったとき、彼らはたしかに神は憐れみ深いおかただと感じた。 PP 113.5

司がふたたび彼らの前に現れると、彼らは贈り物をさし出し、身を低くし、「地に伏して、彼を拝した」。このとき、ヨセフはもう一度前に見た夢を思い出したヨセフは、彼の客へのあいさつがすむとすぐ、「あなたがたの父、あなたがたがさきに話していたその老人は無事ですか。なお生きながらえておられますか」とたずねた。「あなたのしもべ、われわれの父は無事で、なお生きながらえています」と兄弟たちは答えてもう一度礼をした（同 43：26、27、28）。それから、ヨセフはベニヤミンに目をとめて、「これはあなたがたが前にわたしに話した末の弟ですか」と言った。「わが子よ、どうか神があなたを恵まれるように」となつかしさのあまり言っただけで、それ以上何も言えなかった。彼は「へやにはいって泣いた」（同 43：29、30）。 PP 113.6

ヨセフは、ふたたび冷静をとりもどしてみんなのところへかえり、一同食事にとりかかった。エジプト人は、階級制度によって、異民族と食事をともにすることを禁じられていた。ヤコブのむすこたちは、自分たちだけの席に着いた、司は、身分が高いために 1 人で食事をし、エジプト人たちは、また別の食卓に着いた。すべての者が席に着いたとき、兄弟たちは、年令にしたがって正しい順序にすわらせられたのを見て非常に驚いた。「ヨセフの前から、めいめいの分が運ばれたが、ベニヤミンの分は他のいずれの者の分よりも 5 倍多かった」（同 43：34）。こうして、ベニヤミンにだけ特に好意を示すならば、自分のときと同じように、兄弟たちが末の弟にも羨望や嫉妬をあらわすかもしれぬとヨセフは考えた。兄弟たちは、あいかわらずヨセフには言葉が通じないと思って、互いに自由に話し合っていた。これは、ヨセフが兄弟たちの本当の感情を知るよい機会であった。彼は、さらに兄弟たちをためそうと思い、彼らが出発する前にヨセフ自身の銀の杯を末の弟の袋の中にかくすように命じた。 PP 114.1

彼らは喜んで出発した。シメオンもベニヤミンも彼らと共にいる。動物の背中には穀物が積まれていた。兄弟たちは、やっと自分たちを囲んでいるように見えた危機から安全に脱出したと思った。しかし、彼らが町はずれに着くか着かないうちに、家司が追いついて、「あなたがたはなぜ悪をもって善に報いるのですか、なぜわたしの銀の杯を盗んだのですか。これはわたしの仁人が飲む時に使い、またいつも占いに用いるものではありませんか。あなたがたのした事は悪いことです」ときびしく問いただした（同44：4、5）。その杯は、その中に盛られたどんな毒も見わける力があると思われていた。当時、このような杯は毒殺を防ぐために珍重されていたのである。 PP 114.2

この家司の非難に、旅人一洞は答えた。「わが宅は、どうしてそのようなことを言われるのですか。しもべらは決してそのようなことはいたしません。袋の口で見つけた銀でさえ、カナンの地からあなたの所に持ち帰ったほどです。どうして、われわれは御主人の家から銀や金を盗みましょう。しもべらのうちのだれの所でそれが見つかっても、その者は死に、またわれわれはわが主の奴隷となりましょう」（同 44：7～9）。「家司は言った、『それではあなたがたの言葉のようにしよう。杯の見つかった者はわたしの奴隷とならなければならない。ほかの者は無罪です』」（同 44：10）。 PP 114.3

ただちに取り調べがはじまった。「そこで彼らは、めいめい急いで袋を地におろし、1 人 1 人その袋を開いた」（同 44：11）。そして家司はルベンから始めて年令順に年下の者まで捜したところ、ベニヤミンの袋の中から銀の杯が発見された。 PP 114.4

兄弟たちは、あまりの悲しさに衣服を裂き、重い足どりでまた町へもどった。約束の通りに、ベニヤミンは奴隷の生涯を送らなければならない。彼らは、家司のあとについて邸宅に行ったところ、そこに司がまだいるのを見つけて、彼の前にひれ伏した。ヨセフは彼らに言った。「あなたがたのこのしわざは何事ですか。わたしのような人は、必ず占い当てることを知らないのですか」（同 44：15）。ヨセフは、兄弟たちから罪を自覚することばを聞きたいと思っていた。彼は、占いの力が自分にあると言ったわけではないが、彼らの生涯の秘密さえも見通すことができるのだと彼らに信じさせたかったのである。 PP 114.5

ユダは答えた。「われわれはわが主に何を言い、何を述べ得ましょう。どうしてわれわれは身の潔白をあらわし得ましょう。神がしもべらの罪をあはかれました、われわれと、杯を持っていた者とは共にわが主の奴隷となりましょう」（同 44：16）。 PP 114.6

ヨセフは答えた。「わたしは決してそのようなことはしない。杯を持っている者だけがわたしの奴隷とならなければならない。ほかの者は安全に父のもとへ上って行きなさい」（同 44：17）。 PP 114.7

深い悲しみにくれて、ユダは司に近づき哀願した。「ああ、わが主よ、どうぞわが主の耳にひとこと言わせてください。しもべをおこらないでください。あなたはパロのようなかたです」（同 44：18）。ユダは、ヨセフを失ったときどんなに父が悲しんだか、そして、ヤコブが最も愛した妻ラケルの残した、ただひとりの 子ベニヤミンをエジプトに連れてくることもどんなにためらったかを、感動的な言葉で雄弁に述べた。彼は言った。「わたしがあなたのしもべである父のもとに帰って行くとき、もしこの子供が一緒にいなかったら、どうなるでしょう。父の魂は子供の魂に結ばれているのです。この子供がわれわれと一緒にいないのを見たら、父は死ぬでしょう。そうすればしもべらは、あなたのしもべであるしらがの父を悲しんで陰府に下らせることになるでしょう。しもべは父にこの子供の身を請け合って『もしわたしがこの子をあなたのもとに連れ帰らなかったら、わたしは父に対して永久に罪を負いましょう』と言ったのです。どうか、しもべをこの子供の代りに、わが主の奴隷としてとどまらせ、この子供を兄弟たちと一緒に上り行かせてください、この子供を連れずに、どうしてわたしは父のもとに上り行くことができましょう。父が災に会うのを見るに忍びません」（同 44：30～34）。 PP 114.8

ヨセフは満足した。彼は兄弟たちの中に真の悔い改めの実を見ることができた。このユダの高潔な言葉を聞いて、兄弟たち以外の者に外に行くように命じ、声をあげて泣き叫んだ。「わたしはヨセフです。父はまだ生きながらえていますか」（同 45：3）。 PP 115.1

兄弟たちは恐れ驚いて身動きひとつせず、立ったまま黙っていた。嫉妬にかられて殺そうと企て、ついに、奴隷に売ってしまった弟ヨセフが、エジプトの司になっているとは。ヨセフを苦しめたすべての悪行が、彼らの目に浮かんだ。彼らは、ヨセフが見た夢をさげすみ、けんめいになってその実現を妨げようとしたことを思い出した。ところが、今、彼ら自身が実際にその通りのことを行っているのである。今や彼らはまったくヨセフの手中におかれていた。疑いもなく、ヨセフは自分が受けたひどい取り扱いの仕返しをするだろうと思うのであった。 PP 115.2

ヨセフは、兄弟たちの取り乱したさまを見て、やさしく「わたしに近寄ってください」と言った。彼らが近寄ったので彼は続けた。「わたしはあなたがたの弟ヨセフです。あなたがたがエジプトに売った者です。しかしわたしをここに売ったのを嘆くことも、悔むこともいりません。神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされたのです」（同 45：4、5）。ヨセフは、兄弟たちが自分に対する残酷な行為のために、もう十分に苦しんでいることを感じて、彼らの恐怖心を取りのぞき、自責の痛みをやわらげようと気高くも努めた。 PP 115.3

彼は続けて言った。「この 2 年の間、国中にききんがあったが、なお 5 年の間は耕すことも刈り入れることもないでしょう。神は、あなたがたのすえを地に残すため、また大いなる救をもってあなたがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされたのです。それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神です。神はわたしをパロの父とし、その全家の主とし、またエジプト全国のつかさとされました。あなたがたは父のもとに急ぎ上って言いなさい、『あなたの子ヨセフが、こう言いました。神がわたしをエジプト全国の主とされたから、ためらわずにわたしの所へ下ってきなさい。あなたはゴセンの地に住み、あなたも、あなたの子らも、孫たちも、羊も牛も、その他のものもみな、わたしの近くにおらせます。ききんはなお 5 年つづきますから、あなたも、家族も、その他のものも、みな困らないように、わたしはそこで養いましょう』。あなたがたと弟ベニヤミンが目に見るとおり、あなたがたに口ずから語っているのはこのわたしです』。そしてヨセフは弟ベニヤミンのくびを抱いて泣き、ベニヤミンも彼のくびを抱いて泣いた。またヨセフはすべての兄弟たちに口づけし、彼

らを抱いて泣いた。そして後、兄弟たちは彼と語った」（同 45：6～12、14、15）。兄弟たちは、心を低くして罪を告白し、赦しを請い求めた。彼らも長い間、不安と悔恨の念に苦しんできたが、今、ヨセフが生きていたことを知ってよろこんだ。 PP 115.4

この事件はすぐに王の耳に入った。王は、ヨセフに深く感謝していたので、「わたしはあなたがたに、エジプトの地の良い物を与えます」（同 45：18）と言ってヨセフが家族を迎えることに承認を与えた。兄弟たちは車や食糧を十分に与えられ、全家族と従者たちがエジプトに移住するのに必要なすべてのも のを得て出発した。ヨセフは、ベニヤミンに他の兄たちよりも高価なものを贈った。故郷に帰る途中で争いが起こるのを心配して、出発するにあたり、「途中で争ってはなりません」と告げてみんなに贈りものをした。 PP 115.5

ヤコブのむすこたちは、「ヨセフはなお生きていてエジプト全国のつかさです」という喜びの知らせをもって父のところに帰った。ヤコブは最初、驚きのあまり、それをほんとうだと信じることができなかった。しかし、車や、荷物を積んだ家畜の長い列を見、もうひとたびベニヤミンを見たヤコブは、それを信じた。「満足だ。わが子ヨセフがまだ生きている。わたしは死ぬ前に行って彼を見よう」と喜びにみたされて叫んだ（同 45：26、28）。 PP 116.1

10 人の兄弟たちは、もう 1 つ身を低くしてなすべきことがあった。彼らは、長年父の生涯を苦しめ、また、彼ら自身の生活を悲惨なものにした欺瞞と残酷な行為とを父に告白した。ヤコブは、彼らがそれほど卑劣な罪を犯していたとは思わなかった。しかし、神がすべてのことをよいように支配してくださったので、むすこたちのあやまちを赦し、祝福した。 PP 116.2

父とむすこたちと、その家族、羊や家畜の群れ、また、多くの従者たちは、やがてエジプトへと旅立った。彼らは喜びに満たされて旅を続けた。彼らがベエルシバに着いたとき、ヤコブは感謝の犠牲をささげ、主が共におられるという確証が与えられることを祈り求めた。夜の幻のうちに主のみ声が聞こえた。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民

にする。わたしはあなたと一緒にエジプトに下り、また必ずあなたを導き上るであろう」（同 46：3、4）。 PP 116.3

「恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民にする」との保証には意味があった。アブラハムに対してその子孫が星の数ほどになるとの約束が与えられたが、それでも選民の数はわずかずつしかふえていかなかった。それにカナンの地も預言されたような大いなる国民の発展には十分な土地ではなかった。そこには強力な異教民族が住みついており、「4 代目」になるまでは占領できないことになっていた。もしもイスラエルの子孫がここで数の多い民族になるとすれば、彼らはカナンの人々を追放するか、あるいは彼らの中に離散するかしなければならなかった。カナン人を追い出すことは、神のご計画に従えば、彼らには不可能であった。また、カナンの人々に混じって生活すれば、偶像礼拝に誘いこまれる危険があった。しかしながら、エジプトは神の御目的の成就に必要な条件がそなわっていたのである。灌漑もよく、肥沃なエジプトの一地区が彼らに開放され、そこは人口が急速に増加するのに好都合であった。「羊飼はすべて、エジプトびとの忌む者」であるといわれて、職業的反感にもエジプトで当面するのであったが、かえってそのために、異なった別の民族としての区別を保つことができて、エジプトびとの偶像礼拝に加わらずにすんだ。 PP 116.4

一行はエジプトに着いて、まっすぐにゴセンの地に向かった。ヨセフは、エジプトの司の乗る車に乗り、多くのいかめしい従者たちを従えて到着した。彼は、自分を取りまく華麗な光景も彼の威厳ある地位のことも忘れてしまった。彼は、ただ 1 つのことで心がいっぱいになり、ただ 1 つの熱望に心をおどらせていた。彼は、旅人たちが近づいてくるのを見ると、長年の間心に秘めていた父を慕う気持ちを、もはやおさえることができなかった。彼は馬車からとびおり、父のもとにかけよって歓迎した。そして「父に会い、そのくびを抱き、くびをかかえて久しく泣いた。時に、イスラエルはヨセフに言った、『あなたがなお生きていて、わたしはあなたの顔を見たので今は死んでもよい』」（同 46：29、30）。 PP 116.5

ヨセフは、兄弟たち 5 人をパロに会わせるために連れてゆき、将来、家を建てる土地の許可をもらおうと思った。パロは総理大臣ヨセフに感謝の念をいだいていたから、

彼らをエジプトの名誉ある公職につかせることもできたであろう。しかし、ヨセフは兄弟たちが主の真の礼拝を忠実に行い、異教の王宮で誘惑にさらされることがないようにしようと思った。そこで、 王から質問された場合、正直に自分たちの職業を明かすように兄弟たちに助言した。ヤコブのむすこたちはその助言に従い、自分たちはこの地に寄留するために来ただけで、永住するつもりはないことを注意深く説明し、必要なときにはこの地を離れることができる余地を残しておいた。王は、彼らに住むところを与え、「地の最も良い所」であるゴセンの土地をおくった。 PP 116.6

彼らが到着して間もなく、ヨセフは、父ヤコブもまた、王のもとに連れて行った。ヤコブは、王の宮殿の中では一介の旅人にすぎなかったが、荘厳な大自然の中で、地上の王にまさる天の王と交わっていた。そこで、ヤコブは、自分がすぐれた立場にあることを意識しつつ手を上げてパロを祝福した。 PP 117.1

ヤコブは、ヨセフに再会したときに、今まで長い間の心労と悲哀とが、このように幸福な結末に至ったのだから、もう死んでもよいと言った。しかし、彼は、その後 17 年間も生きながらえて、平和なゴセンの地で余生を送った。これらの年月は、かつての年月とは全くうって変わった幸福なものであった。ヤコブは、むすこたちの真の悔い改めの証拠を見たし、家族が大いなる国民になってゆくのに必要なあらゆる条件がそなわっているのを見た。そして、彼は、やがてカナンにおいて、彼らがりっぱな国を築いて行くたしかな約束を理解した。ヤコブ自身、エジプトの総理大臣のなしうる、あらゆる愛と好意のしるしにかこまれていたのである。こうして、彼は長いあいだ失っていたむすこのもとで、幸福な日々を過ごし、静かに、そして平和に世を去った。 PP 117.2

ヤコブは、死期の近づいたのを感じて、ヨセフのもとに使いを送った。ヤコブは、カナンを与えるとの神のみ約束を堅く信じていた。「どうかわたしをエジプトには葬らないでください。わたしが先祖たちと共に眠るときには、わたしをエジプトから運び出して先祖たちの墓に葬ってください」と言った（同 47：29、30）。ヨセフはそうすることを約束したが、ヤコブはそれだけでは満足せずマクペラのほら穴の先祖たちの所に自分を葬るという厳粛な誓いを求めた。 PP 117.3

もう 1 つ、かたづけておかなければならない大切なことがあった。ヨセフのむすこたちも、イスラエルのむすこたちのなかに正式に受け入れる必要があった。ヨセフは父に最後の面会に来たとき、マナセとエフライムを連れていった。この青年たちは、母の側からいえば、エジプトの大祭司の血縁であった。また、彼らがエジプトびとになることを選べば、父ヨセフの地位から言っても、高い身分と富への道が開かれていた。しかしながらふたりのむすこが自分の民族につらなることがヨセフの希望であった。ヨセフは、自分のむすこたちに代わってエジプトの王宮が与えるすべての名誉を捨てて、神のみ言葉をゆだねられたいやしい羊飼いの部族を選び、神の契約の約束に対する信仰をあらわした。 PP 117.4

ヤコブはヨセフに向かって、「エジプトにいるあなたの所にわたしが来る前に、エジプトの国で生れたあなたのふたりの子はいまわたしの子とします。すなわちエフライムとマナセとはルベンとシメオンと同じようにわたしの子とします」と言った（同 48：5）。彼らは、ヤコブ自身のむすことされ、それぞれの部族のかしらになることになった。こうして、ルベンが失った長子の権の 1 つがヨセフに与えられた。これは、イスラエルにおける 2 倍の分であった。 PP 117.5

ヤコブの目は、老令のためにかすんでいたので、青年たちがそばに来ても気がつかなかった。しかし、今、彼らの姿を認めて、「これはだれですか」とたずねた。彼らがだれであるかを知らされて彼はこう言った。「彼らをわたしの所に連れてきて、わたしに祝福させてください」（同 48：9）。彼らが近づくと、ヤコブは彼らを抱いて口づけし、厳粛に彼らの頭の上に手をおいて祝福した。そして彼はこう祈った。「わが先祖アブラハムとイサクの仕えた神、生れてからきょうまでわたしを養われた神、すべての災からわたしをあがなわれたみ使よ、この子供たちを祝福してください」（同 48：15、16）。その言葉には、自己依存の精神もなければ、人間的な能力や技巧に頼る精神も見られなかった。神が彼を守り支えてくださったのである。また、過去の苦い日々についてのつぶやきも聞かれなかった。試練や悲しみも、もはや「身にふ りかかって来る」不幸ではなかった。彼の全生涯の旅路を通じて、ヤコブとともにおられた神の恵みといつくしみだけが記憶によみがえってきた。 PP 117.6

祝福は終わった。ヤコブはむすこに確証を与えた。そして、長い苦役と悲しみの年月を経なければならない次の世代の人々に、このような信仰のあかしを立てた。「わたしはやがて死にます。しかし、神はあなたがたと共におられて、あなたがたを先祖の国に導き返されるであろう」（同 48：21）。 PP 118.1

ついに、ヤコブのむすこたちは、彼の臨終の床に集まった。ヤコブはむすこたちを呼びよせて、「ヤコブの子らよ、集まって聞け。父イスラエルのことばを聞け」「後の日に、あなたがたの上に起ることを、告げましょう」と言った（同 49：2、1）。 PP 118.2

ヤコブは今までもいくたびか彼らの将来を案じ、各部族がたどる歴史を想像してみたのであった。むすこたちが、最後の祝福を受けようと待っているとき、主の霊感がヤコブに臨み、預言的な幻のうちに彼の子孫の将来が示された。次々とむすこの名があげられ、各自の性質が描写されて、部族の未来の歴史が簡潔に預言された。 PP 118.3

「ルベンよ、あなたはわが長子、 PP 118.4

わが勢い、わが力のはじめ、 PP 118.5

威光のすぐれた者、権力のすぐれた者」 PP 118.6

（創世記 49：3） PP 118.7

こうして、父は長子ルベンがどんな立場に立つはずであったかを描写した。しかし、ルベンはエダルにおける悲しむべき罪のために長子の祝福を受けることができなかった。ヤコブは続けて言った。 PP 118.8

「しかし、沸き立つ水のようだから、 PP 118.9

もはや、すぐれた者ではあり得ない」 PP 118.10

（創世記 49：4） PP 118.11

祭司職はレビに与えられ、王国とメシヤの約束はユダに与えられた。また、ヨセフには、2 倍の嗣業が与えられた。ルベンの部族は、イスラエルの中で卓越することなく、ユダやヨセフ、ダンほどの数もなく、最初にバビロンに捕囚となった。 PP 118.12

ルベンの次はシメオンとレビであった。彼らは共謀してシケムびとらを残酷にあつかった。ヨセフを売ったときに、一番罪深かったのも彼らであった。彼らについては次のように言われた。 PP 118.13

「わたしは彼らをヤコブのうちに分け、 PP 118.14

イスラエルのうちに散らそう」 PP 118.15

（創世記 49：7） PP 118.16

イスラエル民族のカナン入国直前に、民を数えたとき、シメオンは一番小さい部族であった。モーセも最後の祝福の中で、シメオンのことについては何も言ってはいない。カナンに定住したとき、この部族はユダの土地の小部分を受け、その家族たちは、後に、おのおの異なった強力な部落を作ったが、聖地の境界の外に定住することになった。 PP 118.17

レビは、カナンの各所に散在する 48 か所の剛以外はなんの嗣業も受けなかった。しかし、この部族は、他の部族が背信におちたときに、神への忠誠を示したことによって、聖所の清い務めをするように任命されて、のろいは祝福に変わった。 PP 118.18

長子の権の最高の祝福はユダに移された。ユダという名前の意味は「賛美」であるが、この部族の歴史が次のような預言の言葉によって明らかにされた。 PP 118.19

「ユダよ、兄弟たちはあなたをほめる。 PP 118.20

あなたの手は敵のくびを押え、 PP 118.21

父の子らはあなたの前に身をかがめるであろう。 PP 118.22

ユダは、ししの子。 PP 118.23

わが子よ、あなたは獲物をもって上って来る。 PP 118.24

彼は雄じしのようにうずくまり、 PP 118.25

雌じしのように身を伏せる。 PP 118.26

だれがこれを起すことができよう。 PP 118.27

つえはユダを離れず、 PP 118.28

立法者のつえはその足の間を離れることなく、 PP 118.29

シロの来る時までに及ぶであろう。 PP 119.1

もろもろの民は彼に従う」 PP 119.2

（創世記 49：8～10） PP 119.3

森林の王者、ししはこの部族にふさわしい象徴であった。この部族からダビデがあらわれ、ダビデの子、シロすなわち真の「ユダの部族のしし」があらわれた。ついに、この地上のすべての権力は彼を拝し、全国民は彼をあがめるようになる。 PP 119.4

ヤコブはたいていのむすこたちに未来の繁栄を預言した。そして最後にヨセフの番になった。ヤコブは「その兄弟たちの君たる者の頭」に祝福を祈り求めたとき、その心は喜びにあふれた。 PP 119.5

「ヨセフは実を結ぶ若木、 PP 119.6

泉のほとりの実を結ぶ若木。 PP 119.7

その枝は、かきねを越えるであろう。 PP 119.8

射る者は彼を激しく攻め、 PP 119.9

彼を射、彼をいたく悩ました。 PP 119.10

しかし彼の弓はなお強く、 PP 119.11

彼の腕は素早い。 PP 119.12

これはヤコブの全能者の手により、 PP 119.13

イスラエルの岩なる牧者の名により、 PP 119.14

あなたを助ける父の神により、 PP 119.15

また上なる天の祝福、 PP 119.16

下に横たわる淵の祝福、 PP 119.17

乳ぶさと胎の祝福をもって、 PP 119.18

あなたを恵まれる全能者による。 PP 119.19

あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、 PP 119.20

永久の丘の賜物にまさる。 PP 119.21

これらの祝福はヨセフのかしらに帰し、 PP 119.22

その兄弟たちの君たる者の頭の頂に帰する」 PP 119.23

（創世記 49：22～26） PP 119.24

ヤコブは熱烈に深く愛する人であった。彼のむすごたちに対する愛は強く、やさしく、彼らに対する遺言も決して偏愛や恨みに満ちた言葉ではなかった。彼はむすごたちを、みな赦し、最後まで愛し通した。彼の父親としての愛情は、希望と励ましに満ちた言葉の中にあらわれている。しかし、神の力が彼に臨み、霊感の導きのもとにあったときには、たとえそれがどんなに苦しいことであっても真実を語らなければならなかった。 PP 119.25

今や、最後の祝福の言葉も終わった。ヤコブは、もう 1 度、自分の埋葬の場所をくりかえして指定した。「わたしはわが民に加えられようとしている。マクペラの畑にあるほら穴に……わたしの先祖たちと共にわたしを葬ってください」「そこにアブラハムと妻サラとが葬られ、イサクと妻リベカもそこに葬られたが、わたしはまたそこにレアを葬った」（同 49：29～31、英語訳聖書）。こうして、彼の生涯の最後の行為は、神の約束に対する信仰を表明することであった。 PP 119.26

ヤコブの晩年は、悩みと苦しみの 1 日の後の平和で、静かな夕暮れのようであった。暗雲が彼の道を閉ざしたが、彼の人生の日没は晴れ上がり、天の光輝が彼の最後の時間を明るく照らした。聖書は次のように言っている。「夕暮になっても、光があるからである」「全き人に目をそそぎ、直き人を見よ。おだやかな人には子孫がある」（ゼカリヤ 14：7、詩篇 37：37）。 PP 119.27

ヤコブは、罪を犯して非常に苦しんだ。彼は大きな罪を犯して父の天幕を離れて以来、悩み、苦しみ、悲しみの長い年月を過ごした。彼は家のない逃亡者となり、母から離れ、しかもふたたびその母に会うことができなかった。彼は、7 年間も愛するラケルのために働いたが、卑劣な方法でだまされた。20 年もの間、貧欲で、利己的な親族のために苦労した。やがて、自分の富も増し、むすこたちの成長を見ることができたが、争いが絶えず分裂した家庭の中には少しの喜びも見いだすことができなかった。娘の受けたはずかしめ、それに対する兄弟たちの復讐、ラケルの死、ルベンの人の道に反した罪悪、ユダの罪、そして兄弟たちのヨセフに対する残酷な欺瞞と恨みによる苦悩など、なんと長く、暗い罪悪の数々が彼の目の前に広がったことであろう。ヤコブは、いくどとなく、彼の最初の失敗の実を刈り取ったのであった。彼 は幾たびも自分自身の犯し

た罪を、そのむすこたちがくりかえすのを見た。しかし、このようなこらしめは苦しかったが、その目的を果たしたのである。訓練は悲しいものと思われたが、「平安な義の実を結」んだのである（ヘブル 12：11）。 PP 119.28

聖書は、特に神の恵みを受けた善人たちの失敗を、そのまま記録している。実のところ、彼らの美徳よりも、むしろ欠点のほうを詳しく書いてあるくらいである。多くの人々は、このことを不思議に思い、無神論者は、このために聖書を軽蔑する。しかし、聖書が真実であるという最大の証拠は、事実を修飾せず、聖書の主要な人物の罪さえもおおい隠していないことである。人間の心は偏見をいだきやすいもので、人類歴史が絶対的に公平であるということはあり得ない。もしも聖書が、霊感を受けない人間の書いたものであれば、疑いもなく、これらのりっぱな人物の品性も、さらに美化して書いたことであろう。しかし、われわれは、ここに、彼らの経験が正しく記録されたものを持っている。 PP 120.1

神から恵みを受け、大いなる責任を委ねられた人物も、今日のわれわれが、苦しみ、よろめき、しばしばあやまちを犯すのと同様に、時には誘惑に負け、罪を犯した。彼らの欠点と愚行とがはっきり書いてあるのは、われわれに対する励ましと警告のためである。もしも彼らが全然あやまちのない者として記録されていたならば、われわれのように罪深い者は自分の失敗やあやまちに絶望してしまうかもしれない。しかし、われわれと同じように失望しつつも戦いぬき、われわれと同様の誘惑に負けたが、それでも神の恵みによって勇気づけられ、勝利したことを知るとき、われわれもまた、義を追い求めるように励まされるのである。彼らが、時には打ちひしがれながらも、ふたたび立ちなおって神の祝福にあずかったように、われわれもイエスの力によって勝利者となることができるのである。一方彼らの生涯の記録は警告でもある。神は、いかなることがあっても、罰すべきものを赦さないことを教えている。神は、ご自分の最も愛する者の中にも罪をごらんになり、光や責任がわずかしか与えられていない者よりも、彼らを厳格に取りあつかわれるのである。 PP 120.2

ヤコブを埋葬したのち、兄弟たちの心はふたたび恐怖に満たされた。ヨセフは兄弟たちを親切にあっかったにもかかわらず、彼らは良心の苛責から不信と疑惑をいだいた。

ヨセフは父親のことを考えて復讐を遅らせたのであろう。ヨセフは、こんどこそ長い間延ばしていた罪の罰を、自分たちに与えるだろうと彼らは考えた。兄弟たちはあえて直接ヨセフのもとに行こうとはせず、「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました、『おまえたちはヨセフに言いなさい、「あなたの兄弟たちはあなたに悪をおこなったが、どうかそのとがと罪をゆるしてやってください」』。今どうかあなたの父の神に仕えるしもべらのとがをゆるしてください」とことづけた（創世記 50：16、17）。このことづけを聞いてヨセフは泣いた。兄弟たちは、勇気を出して彼のもとに来て、「このとおり、わたしたちはあなたのしもべです」と言って彼の前にひれ伏した。ヨセフの兄弟たちに対する愛は深く、無我の精神から出たものであったが、兄弟たちがまだ自分に復讐の精神があると思っていることに心を痛めた。彼は言った。「恐れることはいりません。わたしが神に代ることができましょうか。あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて、今日のように多くの民の命を救おうと計らわれました。それゆえ恐れることはいりません。わたしはあなたがたとあなたがたの子供たちを養いましょう」（同 50：18、19～21）。 PP 120.3

ヨセフの生涯はキリストの生涯を代表している。兄弟たちがヨセフを奴隷に売ったのはねたみからであった。彼らは、ヨセフが自分たちより偉大な者になるのを止めようと思った。彼がエジプトに連れていかれたとき、自分たちはこれ以上、彼の夢に悩まされることはない、これで実現の可能性は完全になくなったと得意がった。しかし、彼らの行動はすべて神の支配のもとにおかれて、彼らが妨げようとした出来事そのものを成就することになった。同じようにユダヤびとの祭司や長老たちは、人々の評判が次第にキ リストのほうに傾くことを恐れてキリストをねたんだ。彼らは、キリストが王になることを妨げようとして彼を殺したが、かえって彼ら自身がキリストを王位につける結果をもたらしたのである。 PP 120.4

ヨセフは、エジプトの奴隷になることによって、父の家族の救済者となった。しかし、このことは兄弟たちの罪を軽くするものではなかった。同じようにキリストは敵のために十字架につけられ、人類の贖い主、堕落した人類の救い主、全世界の支配者となられた。しかし、神がご自分の栄光と人類の幸福のために、摂理のみ手によって諸事件

を支配されなかった場合と同様に、キリストを殺した人々の罪は、重かったのである。 PP 121.1

ヨセフが兄弟たちによって異邦人に売られたのと同じく、キリストもまた、ご自身の弟子のひとりによって、最も憎むべき敵に売り渡された。ヨセフは、節操を守ったために、偽証によって牢獄に投げ込まれた。キリストも同じように、彼の自己否定の生涯が周囲の人々の罪に対する譴責となり、正しかったためにあざけられ、捨てられたのである。なんのとがも犯さないのに、偽証人の言葉によって罪に定められた。ヨセフが、不正と圧迫を受けても忍耐し、柔和であって、また無情な兄弟たちに対しても赦しと高貴で寛大な精神をあらわしたことは、悪人たちの嘲笑と悪意の中にあってもつぶやくことなく忍耐し、彼を殺害した者ばかりでなく、彼のもとに来て罪を告白し、赦しを求めるすべての者を赦す救い主を象徴している。 PP 121.2

ヨセフは父の死後 54 年生きながらえた。彼は、「エフライムの三代の子孫を見た。マナセの子マキルの子らも生れてヨセフのひざの上に置かれ」るまで生きた（同 50：23）。彼は、自分の民が繁栄し、その数がふえてゆくのを目撃した。神がイスラエルを約束の地に回復されるという信仰は、彼の一生を通じてゆるぐことがなかった。 PP 121.3

ヨセフは自分の死期が近づいたのを知ると、親族を集めた。パロの地にあって大きな栄誉を受けたヨセフではあったが、彼にとってはエジプトは異国でしかなかった。彼の最後の行為は、彼がイスラエルと運命を共にしたことを示している。彼の最後の言葉は、「神は必ずあなたがたを顧みて、この国から連れ出し、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に導き上られるでしょう」であった（同 50：24）。それから彼はイスラエルの子らに、必ず自分の骨をカナンの地に持っていくよう、厳粛な誓いを求めた。「こうしてヨセフは 110 歳で死んだ。彼らはこれに薬を塗り、棺に納めて、エジプトに置いた」（同 50：26）。その後、苦役の幾世紀かが続いたが、その棺はヨセフの臨終の言葉を思い出させるのであった。そして、イスラエルびとに、彼らがエジプトの寄留者にすぎないことをあかしし、約束の地を待望しつづけるように命じた。なぜなら、解放の時は必ず来るからであった。 PP 121.4

第 22 章　モーセ

本章は、出エジプト記 1～4 章に基づく PP 121.5

エジプトの人々は、飢饉の間の食糧を得るために家畜や土地を王に売ったので、ついに、いつまでも奴隷でいなければならなくなった。しかし、ヨセフは、彼らを救済する賢明な策を立てた。彼は、人々を王の小作人として、王の土地を確保させ、彼らの勤労の実の 5 分の 1 を年貢として納めさせることにした。 PP 121.6

しかし、ヤコブのむすこたちには、このような条件を設ける必要がなかった。彼らは、ヨセフがエジプトの国家に尽くした功労によって、国土の一部分が居住地として与えられただけでなく、税金も免除され、飢饉の間の食物も十分に供給された。王は、他の国々が飢饉のために滅びようとしていた時に、エジプトが豊作に恵まれたのは、ヨセフの神のあわれみ深い介入によるものであることを公然と認めた。王は、また、ヨセフの行政が国家を大いに豊かにしたことを認めて、感謝の意をあらわし、ヤコブの家族を厚くもてな した。だが、時代は移り、エジプトに大きな貢献をした偉大な人物ヨセフも、またその業績によって祝福を受けた人々も死んでしまった。そして、「ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起った」（出エジプト 1：8）。彼はヨセフの業績を知らなかったわけではないが、むしろ認めようとはせず、できるだけ忘れ去ろうとつとめた。「彼はその民に言った、『見よ、イスラエルびとなるこの民は、われわれにとって、あまりにも多く、また強すぎる。さあ、われわれは、抜かりなく彼らを取り扱おう。彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、われわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう』」（同 1：9、10）。 PP 121.7

イスラエル人は、そのころすでに数が非常に多くなっていた。「けれどもイスラエルの子孫は多くの子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなって、国に満ちるようになった」（同 1：7）。ヨセフの庇護と、当時の王の好意のもとに、イスラエル人は急速に増加していった。しかし彼らは、特殊な民族としての特徴を保って、エジプト人の習慣や宗教を取り入れなかった。それで彼らの数の増加は戦争が起これば、彼らがエジプ

トの敵に味方するのではないかという不安を、王や国民に与えた。しかし、政策は彼らを国外に追放することを禁じていた。それにイスラエル人の多くの者は、有能で知力のすぐれた技術者であって、また、国家を富裕にするのに貢献することが大であった。王は、これらの職人を壮大な宮殿や神殿の建設にも必要とした。それで、王は、イスラエル人を、国家に土地と財産を売り渡したエジプト人と同列においた。やがて管理の役人を彼らの上に立てて、彼らを完全に奴隷化してしまった。「エジプトびとはイスラエルの人々をきびしく使い、つらい務をもってその生活を苦しめた。すなわち、しっくいこね、れんが作り、および田畑のあらゆる務に当らせたが、そのすべての労役はきびしかった」「しかしイスラエルの人々が苦しめられるにしたがって、いよいよふえひろが」った（同 1：13、14、12）。 PP 122.1

王と側近たちは、きびしい労役をもってイスラエルびとを苦しめ、その数を減らし、彼らの独立精神を粉砕しようとはかった。しかし、この計画の実行に失敗するや、彼らはもっと残忍な手段をとった。もしヘブルのり男子が生まれたらその場で殺せという命令が助産婦に発せられた。彼らは職務上、この命令を実行できる立場にあった。サタンがこのことの扇動者であった。サタンは、イスラエル人の中から救済者があらわれることを知っていて、王を動かしてヘブルの男子を殺してしまえば、神の計画を挫折できると考えた。しかし、助産婦たちは神を畏れて、残忍な王の命令に従わなかった。主は、彼女たちの行動を承認し、祝福をお与えになった。王は、自分の計画が失敗したので非常に怒り、命令をもっと急速で広範囲に実施することを命じた。かよわい赤子たちを捜し出して殺せという命令が全国に出された。「そこでパロはそのすべての民に命じて言った、『ヘブルびとに男の子が生れたならば、みなナイル川に投げこめ。しかし女の子はみな生かしておけ』」（同 1：22）。 PP 122.2

この命令が完全に実施されていたとき、神を敬うレビの部族のイスラエル人、アムラムと、妻ヨケベテの間に男の子が生まれた。その赤子は「麗しい」男の子であった。両親は、イスラエルの救いの日が近いこと、また神は、その民のために解放者をお立てになることを信じて、この幼子を殺さない決心をした。神を信じる信仰は両親の心を強め、「彼らはまた、王の命令をも恐れなかった」（ヘブル 11：23） PP 122.3

母親は、3 ヶ月の間はなんとか子供を隠すことができたが、それ以上安全に彼を守ることはできないと思い、パピルスで編んだ小さなかごを用意し、水を通さないようにアスファルトと樹脂を塗り、子供をその中に入れ、川岸の葦の中においた、そこに母親か残って見ていれば、子供の生命と自分とを危険にさらすかも知れなかった。そこで、その子の姉ミリアムが、表面は何事もないようなふりをして、その辺にいて幼い弟のようすを注意深く見守っていた。ところが、そのほかにも彼を見守る者があった。母親は熱心に祈って、その子を神の守護にゆだねた。そして、人の目にこそ見えなかったが、み使いたちがこのささやか なかごの上を飛びかっていた。天使はそこに、パロの娘を導いた。彼女は、そこで小さなかごを見つけて不思議に思い、その中に美しい男の子を見るや、その事情をすべて察知した。彼女は、赤子の涙を見てあわれに思い、だいじな赤子の生命を助けようとこれほどの努力をしている未知の母に心から同情した。彼女は、この子を助け出し、自分の養子にしようと決心した。 PP 122.4

ミリアムは、ひそかに事のなりゆきをうかがっていた。子供がやさしくいたわられているのを見て、近寄って行き、ついにこう言った。「わたしが行ってヘブルの女のうちから、あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか」（出エジプト 2：7）。すると、そうしてよいという許しが与えられた。ミリアムは、すぐに喜びの知らせをもって母親のもとにいそぎ、直ちに彼女を連れてパロの娘の前に出た。「この子を連れて行って、わたしに代り、乳を飲ませてください。わたしはその報酬をさしあげます」と王女は言った（同 2：9）。 PP 123.1

神は母親の祈りを聞かれた。彼女の信仰は報われた。今やヨケベテは深く感謝して、この安全で幸福な任務にとりかかった。彼女は、その子を神のために教育する機会を忠実に活用した。彼女は、この子が何か大いなる働きのために守られたことを確信した。やがては、王宮の母親に彼を返さなければならないこと、そして、それは彼を神から引き離すような環境であることを彼女は知っていた。そのために、彼女はほかの子供たちよりも、もっと熱心に注意深く教育をほどこすようになった。彼女は、彼の心に神を畏れ、真理と正義とを愛するように教えこむことに力を入れ、あらゆる腐敗した影響から彼が守られることをひたすら祈り求めた。彼女は偶像礼拝の罪とむなしさを彼に示した。

そして、彼が小さいときから彼の祈りを聞き、どんな危急の場合にも助けてくださるただ 1 人の生きた神を拝し、祈るように教えた。 PP 123.2

母親は、できるだけ少年を自分の手もとにおいたが、彼が 12 歳になると手放さなければならなかった。彼はそまつな小屋からパロの娘の宮殿に連れてゆかれ、「そして彼はその子となった」（同 2：10）。彼は、ここにきても幼少時代に受けた教訓を忘れなかった。彼は母親のそばで学んだ教訓を忘れることができなかった。それらの教訓は、高慢と無神論、また、華麗な宮殿の中に暗躍する罪悪を防ぐ盾となった。 PP 123.3

この異郷の奴隷であったヘブルの一女性の感化は、なんと偉大な結果をもたらしたことであろう。モーセのその後の全生涯、イスラエルの指導者として果たした大事業は、クリスチャンの母親の働きの重要性を証明している。これに匹敵する仕事はほかにない。母親は、子供の運命の大部分を自分の手のうちに握っている。彼女は成長中の頭脳と品性をあつかい、現世だけではなく、永遠のために働いているのである。彼女はやがて、芽を出し善悪いずれかの実を結ぶ種をまいているのである。母親は、カンバスの上に美しい姿をかいたり、大理石を彫刻しているのではなく、神のみかたちを人間の魂におしているのである。特に、幼少時代に子供たちの品性を形成する重要な責任が母親に負わされている。成長中の頭脳にこのとき与えられる印象は、生涯消え去らない。親たちは、子供たちをクリスチャンにするために、幼いうちから彼らを教え、訓練しなければならない。子供たちは地上の王国の継承者となるためではなく、神に仕える王たちとして永遠に支配する訓練を受けるためにわれわれの手もとにおかれているのである。 PP 123.4

すべての母親は、自分に与えられている時間の尊さを知らなければならない。母親の働きは、厳粛な審判の目にためされる。そのとき、男女の失敗と犯罪の多くは、子供たちの足を正しい道に導く義務を負わされた者が、無知であり怠慢であった結果であることを知るであろう。また、天才的才能と誠実と清い生活の光をもって世界を輝かした多くの者は、彼らの力と成功の源泉であった原則を、神に祈るクリスチャンの母親から授けられたことを知ることであろう。 PP 123.5

モーセはパロの王宮で、政治的また軍事的に最高の訓練を受けた。王は、娘の養子を次の王位継承者に指名し、青年モーセはその高い地位につくた めの教育を受けた。「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があった」（使徒行伝 7：22）。彼は軍隊の指導者としての能力を発揮してエジプト軍の中で名声を博し、一般の人々からも傑出した人物と思われた。サタンの策略は失敗に終わった。ヘブルの男の子をすべて殺せとの命令そのものによって、神の民の未来の指導者の教育と訓練がほどこされるように、神はお導きになった。 PP 123.6

イスラエルの長老たちは、彼らの救済の時が近いこと、また、神はモーセを用いてその仕事を行われることを、天使から教えられていた。天使は、モーセに、主がその民を苦役から救うために、彼を選ばれたことを知らせた。モーセは、自由を武力によってかちえるものと考え、ヘブル人をエジプト軍に敵対させようとした。モーセは、こうした考えから自分の感情をしっかり押えていた。さもないと、パロや養母への愛着から神のみこころを十分になしえないのではないかと恐れたからである。 PP 124.1

エジプトの法律によれば、パロの王位に座る者は、みな、神官たちの階級に属さなければならなかった。モーセは正式な後継者であったので、この神秘的な国家宗教を伝授されるべきであった。 PP 124.2

これは、神官たちにゆだねられた義務であった。モーセは非常に勤勉でまじめな研究家ではあったが、彼を偶像礼拝に参加させることはできなかった。彼は、十位につけないかもしれないとおどかされた。また、あくまでもヘブル人の信仰を離れずにいるならば、パロの王女から破門されるかもしれないと警告された。しかし、天地の創造主であるただ 1 人の神以外は何をも礼封しないという彼の決意はゆるがなかった。彼は、神官や偶像礼拝者たちに無感覚な対象に迷信的な礼拝をすることのむなしさを指摘して話し合った。だれも、彼の議論に反ばくすることも、彼の意志をかえることもできなかった。さしあたり、モーセのこうした決意は、その高い身分のためと、王や国民が彼に好感をいだいていたために、しばらく黙認されたのである。 PP 124.3

「信仰によって、モーセは、成人したとき、ハロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリス

トのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである」（ヘブル 11：24～26）。モーセは、地上の偉大な人物の中で傑出した者となり、地上の最も華麗な王国の宮殿の中でも一段と輝き、王国の権力を示す笏を持って支配するのにふさわしい名であった。彼の知的な偉大さは、各時代の偉人よりもはるかにすぐれていた。歴史家、詩人、哲学者、軍隊の指揮官、また、立法官として彼と並び得る者はなかった。しかし、彼は、こうした世界を前において、「罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び」、富、偉大さ、名誉などを得ることができる有望な将来を断固として拒む道徳的能力をもっていた。 PP 124.4

モーセは、神が謙虚で従順なしもべにお与えになる最後の報酬について教えられた。であるから、それに比較すれば、世的な利益などはまったく無価値なものになってしまうのであった。彼らは、パロの壮麗な宮殿や王座をさし示して、モーセの心を引きつけようとした。しかし神を度外視した罪の快楽が、その堂々たる宮廷にあることを彼は知っていた。彼は、華麗な宮殿や王冠のむこうの、罪に汚れていないみ国において、至高者の聖徒たちに与えられる大きな栄光を仰いでいた。彼は、信仰によって、天の王が勝利者の頭におかれる朽ちない冠を見ていた。このような信仰が、モーセに、地上の偉大な人々を離れて、貧しい軽蔑された民族に加わり、罪に仕えるよりは神に従うことを選ばせたのである。 PP 124.5

モーセは、王宮に 40 歳までとどまった。彼はしはしば自分の民族のあわれな状態のことを考え、苦役にあえぐ兄弟たちの所に行き、神が解放のために働いてくださることを保証して励ました。 PP 124.6

また、ときには、不正と圧迫に民が苦しめられているのを目撃して憤慨し、彼らのあだを打とうと興奮した。ある日、彼が外に出てみるとエジプト人がイスラ エルびとを打っているのを見て、とびかかってエジプト人を殺してしまった、この行動を目撃したのはそのイスラエル人だけだったので、モーセはいちはやく砂の中に死体を埋めた。こうして、彼は自分がイスラエル人の運動を支持していることを示し、彼らが自由を回復するために立ち上がるのを見たいと望んだ。「彼は、自分の手によって神が兄弟たち

を救って下さることを、みんなが悟るものと思っていたが、実際はそれを悟らなかったのである」（使徒行伝 7：25）。イスラエル人には、まだ解放の用意ができていなかった。翌日、モーセは 2 人のヘブル人が互いに争っているのを見たが、明らかにその 1 人のほうが悪かった。モーセは、悪い人のほうに注意した。ところが、彼はすぐにモーセに反発し、彼の仲裁する権利を拒んだ。「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思うのですか」と、彼の罪を非難した（出エジプト 2：14）。 PP 124.7

このことは、たちまちのうちにエジプト人の知るところとなり、大きく誇張されて間もなくパロの耳にも入った。この行動はたいへんなことのように王に報告された。すなわち、モーセは、自分の民族をエジプト人に反抗させ、政府を打ち倒し、自ら王座につこうとしている、彼が生きているかぎり、国家の安全は期することはできないというのであった。王は、直ちにモーセを殺すことに決めた。しかし、彼は、危険をさとって逃亡し、アラビアに行った PP 125.1

主が彼の道を導かれた。モーセは、同じく真の神を礼拝するミデアンの王であり祭司であるエテロの家にたどりついた。その後間もなく、モーセはエテロの娘の 1 人と結婚し、義父のもとで羊の群れを飼って、そこに 40 年をすごした。 PP 125.2

モーセは、エジプト人を殺したとき、父祖たちがくりかえして犯したと同様に、神がご自身でなしとげると約束されたことがらを自分の手で実現しようとする同じあやまちを犯した。モーセが考えたように、戦争によって民族を解放しようとすることは、神のみこころではなかった。それは、神だけに栄光を帰すようになるために、神の大いなる力によって実現するはすであった、しかしこうした性急なモーセの行動も、神の口的達成のために神か支配しておられたのである。モーセは、まだ、この大いなる仕事に当たる備えができていなかった。彼もまた、アブラハムやヤコブが学んだのと同じ信仰の教訓、すなわち神の約束の成就のためには、人間的な知恵や力にたよらず、神の力にたよることを学ぶ必要があった。そのほかにも、さびしい山々の中で受けるべき教訓があった。モーセは、自己否定と困難という学校で、忍耐を学び、自分の感情をおさえることを学ぶべきであった。また、モーセは、賢明に人を支配することができるようになる

前に、まず、彼自身が服従する訓練を受けなければならなかった。イスラエル人に神のみこころを伝えることができるようになる前に、彼自身の心が全く神と調和していなければならなかった。モーセは、自分の経験から、援助を求めるすべてのものを、父親のようにめんどうをみる準備が必要であった。 PP 125.3

多くの人々は、長い困苦と心労の期間を非常な時間の損失だと考えて、免除されることを願うものである。しかし、無限の知恵をもたれた神は、民族の将来の指導者を40 年間もいやしい羊飼いの仕事に召された。こうして、自分を忘れてやさしく羊の群れをいたわって、世話をする習慣が養われて、彼はイスラエルびとの心やさしく忍耐強い羊飼いとなることができるのであった。どのようにすぐれた人為的訓練や教養であっても、この経験のかわりにはならない。 PP 125.4

モーセは、忘れなければならないものがたくさんあった。エジプトにおいて彼を囲んでいた環境、たとえば、養母の愛情、国王の孫という高い身分、いたるところに見られる浪費、教養の高さ、鋭敏な眼識、そして、偽りの宗教の神秘性、壮麗な偶像礼拝の儀式、荘重な建築や彫刻など、すべては成長中の彼の頭脳に深い印象を与え、彼の習慣や品性の形成に相当の影響をおよぼした。これらの印象をとり去ることができるのは、時間と環境の変化と、そして、神との交わりであった。モーセにとっても誤謬を捨てて真理を受け入れることは必死の激しい戦いを要した。しか し、その戦いが人間の力では耐えられないほど激しくなるときには、神が助けをお与えになるのであった。 PP 125.5

神のみわざをなすために選ばれたすべての人々の中に人間的な要素が見られる。だが、彼らは、型にはまった習慣や品性に満足して、じっとしている人々ではなかった。彼らは、熱心に神から知恵を得ようと求め、神のために働くことを学ぼうとするのである。使徒ヤコブは、「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と言っている（ヤコブ 1：5）。しかし、神は、人々が暗黒の中にとどまって満足しているあいだは、天よりの光をお与えにならない。人間は、神の助けを受けるために、まず自分の弱さ、足りなさを自覚しなければならない。彼は、自分

の中に大いなる変化が起こるように専心努力しなければならない。彼は、目をさまして熱心にたゆまず祈り、努力しなければならない。悪い習慣や風習は捨てなければならない。これらのあやまちを正し、正しい原則に調和するように堅く決心して励んでこそ、勝利は得られるのである。多くの人は、当然得られる地位を得られないでいる。というのは、彼らが自分で実行するように神から力が与えられているのに、神が彼らのためにしてくださるのを待っているからである。有用な働きにふさわしい者はすべて、最もきびしい、知的、道徳的訓練によって鍛えられなければならない。そのとき、神は人間の努力に神の力を加えて助けてくださるのである。 PP 126.1

モーセは、山々の岩壁にかこまれ、ただ 1 人で神と交わった。もはや、エジプトの華麗な神殿が彼の心に迷信と虚偽を印象づけることはなかった。永遠の山々の壮大ななかめに、モーセは至高者の威光を仰ぎ、それとは対照的にエジプトの神々がいかに力なく、むなしいものであるかを認めた。いたるところに創造主のみ名がしるされていた。モーセは、神のみ前に立っているかのように感じ、その偉大な力に圧倒された。ここで彼の高慢と自己満足とは一掃された。荒野のきびしい質素な生活の中では、エジプトの安易でぜいたくな生活の影響は影をひそめた。モーセは、忍耐力が強く、敬神深く、謙遜な人となり、「その人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」（民数記 12：3）。しかし、ヤコブの偉大な神を信じる信仰は強かった。 PP 126.2

モーセは、年月の経過とともに、羊の群れとさびしい場所を放浪しつつ、民の苦しい状態について考えた。彼は父祖たちをあつかわれた神の方法や、選民の嗣業として与えられた約束を思い返して、日夜イスラエルのために祈りを捧げた。天使がモーセの周りを明るく照らした。モーセは、ここで、神の霊感を受けて創世記を書いた。モーセがただ 1 人で、長い年月を荒野で過ごしたことは、彼と彼の民族ばかりでなく、後世の人々のためにも豊かな祝福となった。 PP 126.3

「多くの日を経て、エジプトの王は死んだ。イスラエルの人々は、その苦役の務のゆえにうめき、また叫んだが、その苦役のゆえの叫びは神に届いた。神は彼らのうめきを聞き、神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚え、神はイスラエルの人々を顧み、神は彼らをしろしめされた」（出エジプト 2：23～25）。イスラエルの救済の時

が来た。しかし、神のみこころは、人間の自尊心を傷つけるような方法でなされるべきであった。救済者は、手につえだけを持ち、卑しい羊飼いとして出て行くのであった。しかし、神はそのつえを神の力の象徴にしようとなさった。 PP 126.4

ある日、モーセが「神の山」ホレブの近くて羊の群れを導いていると、しばが燃えているのに、その枝や葉や幹が焼きっくされないのを見た。彼がこの驚くべき光景を見ようと近づいたとき、炎の中から声がして彼の名を呼んだ。モーセは、ふるえるくちびるで「ここにいます」と答えた。彼は軽率にそこに近づいてはならないことを警告された。「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。……わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」（同 3：5、6）。それは、過去の時代に、父祖たちに契約の天使として出現なさったお方であった。「モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した」（同 3：6 下句）。 PP 126.5

神のみ前にくるすべての者の態度は、謙遜で敬神深いものでなければならない。われわれは、イエスのみ名によって、確信を持ってみ前に出ることができるが、あたかも神がわれわれと同等であられるかのように、無遠慮な態度で近づくべきではない。 PP 127.1

近づくことのできない光の中に住み、偉大で、全能であられる聖なる神にむかって、あたかも同等か、あるいは目下のものに話しかけるような言葉を用いる人がある。また、神の家の中において、地上の王たちの謁見室では決してしないような不謹慎な態度をとる人がいる。これらの人々は、自分が今、セラピムたちが賛美を捧げ、み使いたちもそのみ前にあって翼をもって顔をおおう神のみ前にあるということをおぼえていなければならない。神は大いに一尊ばなければならない方である。神のご臨在を真に感じる者はみな、そのみ前に謙虚に伏し、神の幻を仰いだヤコブのように、「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と叫ぶのである（創世記 28：17）。 PP 127.2

モーセが、神のみ前で敬虔な思いで待っていると、みことばが聞こえてきた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、つぶさに見、また追い使う者のゆえに彼

らの叫ぶのを聞いた。わたしは彼らの苦しみを知っている。わたしは下って、彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上って、良い広い地、乳と蜜の流れる地……に至らせようとしている。……さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」（出エジプト 3：7～10）。 PP 127.3

モーセはこの命令に驚き、恐れ、しりごみしながら、「わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパロのところへ行って、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか」と言った。すると、「わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしのあなたをつかわしたしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えるであろう」と神は答えられた（同 3：11、12）。 PP 127.4

モーセは、やがて直面する多くの困苦を考えた。そして、盲目的で、無知で、不信仰な自分の民のことを考えた。しかもその多くは、神についての知識をまったく持っていないのである。モーセは神に言った。「わたしがイスラエルの人々のところへ行って、彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわたしに聞くならば、なんと答えましょうか」（同 3：13）。 PP 127.5

神の答えは、「わたしは、有って有る者」「イスラエルの人々にこう言いなさい、『「わたしは有る」というかたが、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と」いうのであった（同 3：14）。 PP 127.6

モーセはまず、イスラエル人の中で、長い間エジプトの労役を嘆いていた、気高くて義を愛する長老たちを集め、神が解放の約束をお与えになったことを彼らに伝えることを命じられた。それから、モーセは、民の長老たちとともに王の前に行き、次のように言うことになった。「ヘブルびとの神、主がわたしたちに現れられました。それで、わたしたちを、3 日の道のりほど荒野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげることを許してください」（同 3：18）。 PP 127.7

モーセは、イスラエルびとを行かせてくださいとの訴えに、パロが逆らうことを前もって知らされていた。しかし、神のしもべは勇気を捨ててはならないのであった。というのは、このときこそ、神がエジプト人とイスラエル人の前において、そのみ力をあらわされるからである。「それで、わたしは下を伸べて、エジプトのうちに行おうとする、さまざまの不思議をもってエジプトを打とう。その後に彼はあなたがたを去らせるであろう」（同 3：20）。 PP 127.8

旅の準備についての指示も与えられた。主は言われた。「わたしはこの民にエジプトびとの好意を得させる。あなたがたは去るときに、むなし手で去ってはならない。女はみな、その隣の女と、家に宿っている女に、銀の飾り、金の飾り、また衣服を求めなさい」（同 3：21、22）。エジプト人は、イスラエル人に不当の労役を強制して富を蓄積した。それで、イスラエル人が新しい家郷にむかって出発するに際して、 長年の労働の報酬を求めることは当然の権利であった。そこで彼らは、値うちのある運びやすいものを求めることになった。神は、エジプト人がイスラエル人に好意を示すように導かれた。イスラエル人の救済のためになされる偉大な奇跡は、圧迫者たちの心に恐怖を起こさせ、奴隷たちの要求を彼らがかなえるのであった。 PP 127.9

モーセは、自分の前にある多くの困難に打ち勝てそうもないと思った。神が、たしかにモーセをつかわされたというどんな証拠を、人々に示すことができるだろうか。モーセは言った。「しかし、彼らはわたしを信ぜず、またわたしの声に聞き従わないで言うでしょう、『主はあなたに現れなかった』と」（同 4：1）。そのとき、彼自身にもはっきりとわかるような確実な証拠を示された。彼はつえを地に投げるように命じられ、そうすると「へびになったので、モーセはその前から身を避けた」。彼がそれをつかまえると、今度は手のなかでつえとなった。彼はまた、手をふところに入れるように命じられたので、その通りにしたところ「それを出すと、手は、重い皮膚病にかかって、雪のように白くなっていた」（同 4：3、6）。また、手をふところにもどすように言われてもどすと、回復して、もとの肉のようになっていた。主は、これらのしるしによって、モーセに確証を与え、パロと同様に、イスラエル人にも、エジプトの王よりも偉大な人間がここに現れたことを悟らせようとなさった。 PP 128.1

しかし、神のしもべモーセは、自分の前にある不思議な驚くべき働きのことを思って圧倒されていた、彼は、苦しんで恐怖をいだき、話がよくできないことを口実にして、嘆願した。「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」（同 4：10）。彼は、長い間、エジプト人と交わっていなかったので、以前のようにエジプトの言葉をはっきり知っておらず以前のようにすぐに言葉が使えそうもなかった。 PP 128.2

主は彼に言われた。「だれが人に口を授けたのか。話せず聞えず、また、見え、見えなくする者はだれか。主なるわたしではないか」。さらに「それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあって、あなたの言うべきことを教えるであろう」と、神が助けてくださる保証が加えられた（同 4：11、12）。それでも、モーセは、もっとほかに適当な人を選んでほしいと嘆願した。最初のうちは、このような弁解も謙遜と臆病から出たものであった。しかし、主があらゆる困難を取り除き最後の成功を与えると約束されているのに、それでもなおしりごみして、自己の不適任をかこつことは神への不信を示すものであった。それは、偉大な事業に彼を召された神に、彼をその働きに適した者とする力がないか、それとも、神は人選を誤られたかということを暗にほのめかしていた。 PP 128.3

次に、モーセは、エジプトのことばを毎日使っていて、完全に話すことのできる兄、アロンのことを考えた。モーセは、アロンが彼に会うために来ていることを知らされた。主からの次の言葉は絶対的命令であった。「あなたは彼に語って言葉をその口に授けなさい。わたしはあなたの口と共にあり、彼の口と共にあって、あなたがたのなすべきことを教え、彼はあなたに代って民に語るであろう。彼はあなたの口となり、あなたは彼のために、神に代るであろう。あなたはそのつえを手に執り、それをもって、しるしを行いなさい」（同 4：15～17）。モーセはもはやこれ以上逆らうことができなくなった。言いわけの余地がまったくなくなってしまったからである。 PP 128.4

神の命令がモーセに与えられたとき、彼は、自信がなく、口が重く、臆病であった。彼は、イスラエル人に対する神の代弁者としての、自分の不適任さを思って圧倒された。しかし、ひとたびその任務を受け入れるや、主にまったく信頼を寄せ、全心をこめて働

きを始めた。彼はこの偉大な働きのために、彼の知力のかぎりを尽くして働いた。神は、モーセのこのような従順な態度を祝福されたので、彼は雄弁になり、希望に満ち、落ちつきを取りもどして、人間にゆだねられた最大の働きにふさわしい人物となった。これこそ神にまったく信頼し、主のご命令に完全に従う者の品性を神が強化されるよい実例である。 PP 128.5

人間は、神がお与えになる責任を受け入れ、全力を尽くして正しく遂行しようと願うときに、力と能力とを受けるものである。たとえ、その地位がどんなに低く、その能力にかぎりがあったとしても、神の力に信頼し、その働きを忠実に果たそうとする者は、真に偉大な者になるのである。もしも、モーセが自分の力と知恵に頼り、大きな責任を自分から進んで負ったとすれば、彼はそのような働きに全然不適当であることを示したことであろう。人間が自分の弱さを認めるという事実は、少なくとも彼が、与えられた仕事の大きさを認識し、神を彼の力、助言者とするということの証拠である。 PP 129.1

モーセは、義父のもとに帰り、エジプトにいる兄弟たちのもとを訪れたいことを話した。エテロもそれに同意し、「安んじて行きなさい」と彼を祝福した。モーセは妻と子供たちを連れて旅に出た。彼は、自分の働きの目的を話せば、彼らを一緒に行かせてくれないと思ったので、何も言わなかった。しかし、彼はエジプトに着く前に、家族の身の安全を考えて、彼らをミデアンの家に送りかえすことがいちばんよいと思った。 PP 129.2

モーセは、40 年前に、パロやエジプト人たちが彼に対して怒ったことを心ひそかに恐れていたので、エジプトに帰ることはなかなか気が進まなかった。しかし、神のご命令に従って出発したあとで、主は、すでに敵は死んだことをモーセにお告げになった。 PP 129.3

モーセは、ミデアンからの途中で、神が怒っておられるという驚嘆すべき恐ろしい警告を受けた。1 人の天使が、モーセをおどすような態度で現れ、あたかも、彼をただちに滅ぼすかのように思われた。それにはなんの説明もなかった。しかし、モーセは、神のご要求の 1 つを軽視したことを思い出した。 PP 129.4

彼は、妻の言うままになって、末の子に割礼の儀式を行うことをなおざりにしていた。モーセは、イスラエルの民に約束された神の祝福に、その子があずかるための条件を、まだ実行していなかった。選ばれた指導者が、このようなことを怠るならば、人々の間で神の戒めの力を弱めることになる。チッポラは夫が殺されることを恐れて、自分で儀式を行ったので、天使は、モーセが旅を続けるのを許した。モーセは、パロに対する任務を帯びて、非常に危険な立場におかれることになった。彼の生命は、聖なる天使たちに守護されていたからこそ安全であった。しかし、当然果たすべき義務を怠っていては安全ではなかった。なぜなら、彼は、神の天使たちに保護されることができないからであった。 PP 129.5

キリスト再臨直前の悩みの時にも、義人たちは天のみ使いたちの奉仕によって守られるのである。しかし、神の律法を犯す者は安全ではない。天使たちは、神の戒めの 1 つでも無視する者を保護することはできないのである。 PP 129.6

第 23 章　エジプトの災害

本章は、出エジプト記 5～10 章に基づく PP 129.7

アロンは、天使の指示に従って、これまで長い間、別れていた彼の兄弟に会いに出かけた。彼らは、ホレブに近い砂漠のさびしいところで出会った。彼らは、ここで話し合い、モーセは、「自分をつかわされた主のすべての言葉と、命じられたすべてのしるしをアロンに告げた」（出エジプト 4：28）。彼らは、一緒にエジプトに向かい、ゴセンの地につくと、直ちにイスラエルの長老たちを集めた。アロンは、神がモーセになさったことを全部彼らに語って聞かせた。そして、神がモーセにお与えになったしるしを民の前に示した。「民は信じた。彼らは主がイスラエルの人々を顧み、その苦しみを見られたのを聞き、伏して礼拝した」（出エジプト 4：31）。 PP 129.8

また、モーセには、王に言うべき言葉がゆだねられていた。2 人の兄弟は、王の王からつかわされた大使として、パロの宮殿に入り、その名によって語った。「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭をさせなさい』と」（同 5：1）。 PP 129.9

「主はいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」と王は言った（同 5：2）。 PP 130.1

「ヘブルびとの神がわたしたちに現れました。どうか、わたしたちを 3 日の道のりほど荒野に行かせ、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください。そうしなければ主は疫病か、つるぎをもって、わたしたちを悩まされるからです」と彼らは答えた（同 5：3）。 PP 130.2

モーセとアロンのこと、また、彼らが人々の間でどんなことをあおり立てていたのかという知らせが、すでに王の耳に達していた。王は怒って言った。「モーセとアロンよ、あなたがたは、なぜ民に働きをやめさせようとするのか。自分の労役につくがよい」。こうした外国人の妨害によって、王国はすでに損失をこうむっていた。王は、そ

れを思って言葉を続けた。「見よ、今や土民の数は多い。しかも、あなたがたは彼らに労役を休ませようとするのか」（同 5：4、5）。 PP 130.3

イスラエル人は、奴隷になっている間に、神の律法の知識をかなり見失い、その戒めから離れていた。安息日は、一般に無視され、作業を監督する者が不当に彼らを働かせたので、安息日が守れないことは明白であった。しかし、モーセは、神に従うことが救いの第一条件であることを、神の民に明らかに小した。こうして彼らが、再び安息日を守ろうとしていることが、圧制者たちに知られるようになった。 PP 130.4

十分に警戒しはじめた王は、イスラエル人が王の仕事に反逆を企てるのではないかと疑った。不満は、怠惰の結果起こった。王は、危険な陰謀を企てる時間が彼らにないようにしなければならないと考えた。そこで王は、直ちに彼らの束縛をきびしくし、独立精神をくだく手段に出た。その日、彼らの労働をさらにきつくし、圧迫を加える命令が出された。 PP 130.5

エジプトで、最も広く使用された建築の材料は、太陽で焼いたれんがであった。最も壮麗な建物の壁もこのれんがの上に西をはりつけたものであった。れんがの製造には、多くの奴隷が使用された。粘土のつなぎとして、麦わらをきざんだものが混せられていたので、そのために多量の麦わらが必要であった。王は、麦わらの供給をそのときから停止することを命じた。労働者たちは、自分たちでわらをさがすとともに、同量のれんがを作ることがきびしく要求された。 PP 130.6

この命令は、国内のイスラエル人を非常に困難な状態に陥れた。エジプト人の監督は、ヘブル人の下役を任命し、彼らのもとにある人々の仕事の責任をとらせた。王の要求が実施され、人々は、わらの代わりに刈り株を集めるために、国中にちらばった。しかし、これでは、従来と同量の仕事を完成することは不可能であった。製造が順調に進行しないために、ヘブル人の下役たちは、激しく打たれた。 PP 130.7

この下役たちは、こうした圧迫が、王からではなく、監督から出たものであると思い、王のところに苦情を訴えた。しかし、パロは、彼らの訴えを嘲笑した。「彼らはなまけ者だ。それだから、彼らは叫んで、『行ってわたしたちの神に犠牲をささげさせよ』と言うのだ」（同 5：8）。彼らは、もどって働くように命令され、仕事が軽くされる

ことは、絶対にあり得ないことを知らされた。彼らは、モーセとアロンのところに帰ってきて叫んで言った。「主があなたがたをごらんになって、さばかれますように。あなたがたは、わたしたちをパロとその家来たちにきらわせ、つるぎを彼らの手に渡して、殺させようとしておられるのです」（同 5：21） PP 130.8

このような非難を聞いたモーセは、非常に苦しんだ。民の苦悩は、いっそう激しくなった。国内いたるところで、老人や青年たちが絶望の声をあげ、口をそろえて、彼らの悲惨な状態をモーセのせいにした。 PP 130.9

モーセは非常な苦境に陥り、神のみ前に出て叫んだ。「主よ、あなたは、なぜこの民をひどい目にあわされるのですか。なんのためにわたしをつかわされたのですか。わたしがパロのもとに行って、あなたの名によって語ってからこのかた、彼はこの民をひどい目にあわせるばかりです。また、あなたは、すこしもあな たの民を救おうとなさいません」（同 5：22、23）。 PP 130.10

それに答えて、神はこうおおせになった。「今、あなたは、わたしがパロに何をしようとしているかを見るであろう。すなわちパロは強い手にしいられて、彼らを去らせるであろう。否、彼は強い手にしいられて、彼らを国から追い出すであろう」（同 6：1）。神は、ご自分が父祖たちと結ばれた契約をモーセに思い起こさせ、それが必ず成就されるという確証をお与えになった。 PP 131.1

イスラエル人の中には、エジプトの奴隷生活中、ずっと主の礼拝を守り続けていた人々が少数ながらいた。この人々は、自分らの子供たちが、毎日、異教の憎むべきことをながめ、偽りの神々を礼拝したりさえするようになったのを見て、非常に心を痛めていた。彼らは、大きな苦しみのなかから、エジプト人のくびきからの解放と偶像礼拝の堕落的影響から救われることを、主に叫び求めた。彼らは、自分たちの信仰を隠そうとせず、天地の創造者であられる唯一の真の生きた神が、彼らの礼拝の対象であることを、エジプト人に知らせた。彼らは、世界の創造からヤコブの時代にわたってあらわされた神の存在と能力の証拠を列挙した。こうして、エジプト人はヘブル人の宗教を詳しく知る機会に恵まれていた。しかし、彼らは、奴隷から教えられることを屈辱とし、神を礼

拝する者たちを買収によって誘惑した。そして、それがうまくいかないと、今度は脅迫と残酷な行為に及んだ。 PP 131.2

イスラエルの長老たちは、父祖に与えられた約束や、エジプトからの解放に関するヨセフの生前の預言をくり返して、兄弟たちの衰えがちな信仰を保とうとつとめた。それに喜んで封を傾けて信じる者もあれば、周りの状態を見て希望をいだこうとしない者もあった。エジプト人は、奴隷たちの間に伝わった情報を聞いて、そうした彼らの期待を嘲笑し、彼らの神の力をあなどって拒否した。エジプト人は、彼らが奴隷であることを指摘して、「もしあなたの神か正しく、あわれみに富み、エジプトの神々にまさる力を持っているなら、なぜあなたがたを自由な民にしないのですか」とののしって言った。エジプト人は、自分たち自身の状態を考えてみよと彼らに言った。エジプト人は、イスラエル人か偽りの神と呼ぶ神々を礼拝しているにもかかわらず、豊かで、強大な国民である。こうした繁栄を与え、イスラエル人を奴隷として彼らに与えたのも、この神々であると彼らは言うのであった。そして、自分たちには、主を礼拝する者を迫害し、滅亡させる能力があると誇った。パロもまた、ヘブル人の神は、その民を彼らの手から解放することは不可能だと誇っていた。 PP 131.3

多くのイスラエル人は、こうした言葉を聞いて希望を失った。万事がエジプト人の言う通りになるような気がした。彼らは、奴隷であった。監督が情け容赦なく命じるままに、すべて耐えていかねばならなかった。イスラエル人の子供たちは、狩り出されて殺された。そして、彼ら自身の生活も苦しかった。それでも、彼らは天の神を礼拝していた。もし、主がすべての神々よりすぐれたおかたであるなら、彼らを偶像礼拝者の奴隷にしたままほうっておかれない。神に忠実であった者たちは、彼らが奴隷生活に陥るのを主が許されたのは、イスラエルが神から離れ、異邦人と結婚し、偶像礼拝をしたためであることを知っていた。彼らは、神が間もなく圧制者のくびきを砕いてくださることを、力強く兄弟たちに語った。 PP 131.4

ヘブル人は、特別に信仰の試練や、真の苦しみ、困難にあわずに自由を獲得することを期待した。しかし、彼らには、まだ、救われる準備ができていなかった。彼らには、神に対する信仰がほとんどなかった。また、神が彼らのために働くのに最適だと思われ

るときまで、忍んで苦しみに耐える気持ちがなかった、異国に移住することに付随した困難にあうよりは、奴隷のままでいたほうがよいと思う者か多かった。また、エジプト人の生活になじんでしまった者は、エジプトに定住することを選んだ。そのため、主はパロの前で最初に力をあらわされたときに、彼らをお救いにならなかった。神は、いろいろな出来事を支配して、エジプト王の残酷な精神がつのるのを許し、それとともに、ご自身を民にあらわそうとなさった。人々は、神の義と力と愛とを見ることによって、エジプトを離れ、神の 奉仕に献身するようになるのであった。もし多くのイスラエル人が、これほどまでに堕落せず、また、エジプトを離れることをきらわなかったならば、モーセの働きは、はるかにやさしかったことであろう。 PP 131.5

主は、モーセに、神の恵みの新しい確証をもって、民のところに行き、救済の約束をくり返すようにお命じになった。モーセは、命令された通りに出ていったが、人々は耳を傾けようとしなかった。聖書にはこう書かれている。「彼らは心の痛みと、きびしい奴隷の務のゆえに、モーセに聞き従わなかった」。再び神の言葉がモーセに与えられた。「エジプトの王パロのところに行って、彼がイスラエルの人々をその国から去らせるように話しなさい」。モーセは失望して答えた。「イスラエルの人々でさえ、わたしの言うことを聞かなかったのに、どうして……パロが聞き入れましょうか」。モーセは、アロンを伴ってパロのもとに行き、もう一度「イスラエルの人々をエジプトの地から導き出」すことを要求するように命じられたのである（同 6：9～13）。 PP 132.1

モーセは、神がエジプトに罰を下し、驚くべきみ力の現れによって、イスラエル人を救い出されるまで、王は、譲らないであろうと知らされた。モーセは、もし、王が災いからのがれようと思えば、避けることができるように、1 つ 1 つの災いが降される前に、それがどういう性質のもので、どういう結果になるかを説明するのであった。1 つの刑罰を彼が拒むたびに、さらに激しい刑罰が続いて降り、パロの高慢な心が低くされ、ついには天地の創造者をまことの生きた神として認めるようになるのであった。もし、エジプト人が主の命令に逆らうならば、主は、それを彼らの偉大な人々の知恵がどんなにむなしく、彼らの神々の力がどんなに弱いものであるかを知る機会にしようとされた。神は、エジプト人を偶像礼拝のゆえに罰し、彼らがなんの感覚もない神々から祝福を受

けたといって誇っていることを沈黙させようとされた。こうして、諸国の人々は、神の力を知らされて、その偉大なわざに恐れおののくのである。また、神の民は、偶像礼拝をやめて、神に純粋な礼拝をささげるようになり、神ご自身の名があがめられるのである。 PP 132.2

モーセとアロンは、再びエジプト王の華麗な宮廷に入っていった。高い柱廊、輝く装飾、美しい絵画、異教の神々の彫像などに囲まれて、奴隷民族を代表する 2 人は、当時の最も強大な王国の君主を前にして、イスラエルの解放を命じる神の言葉を語うために立ったのである。王は、彼らが神からの命令を持っている証拠として奇跡を要求した。モーセとアロンには、そのような要求があった場合、どのように行動すべきかという指示が与えられていたので、アロンがつえをとり、パロの前に投げた。それは、へびになった。王は「知者と魔術師」を召しよせた。すると彼らも「おのおのそのつえを投げたが、それらはへびになった。しかし、アロンのつえは彼らのつえを、のみつくした」（同 7：12）。そこで、王は、今までよりもさらに心をかたくなにして、自分の魔術師はモーセやアロンと同じ力を持っていると言った。王は、主のしもべたちを詐欺師であると非難し、彼らの要求をしりぞけても安全であると考えた。王は、彼らの言葉をあなどったが、彼らに危害を加えることは、神の力によってとどめられた。 PP 132.3

パロの前で、モーセとアロンが示した奇跡は、神のみ手によって行われたのであって、彼らが持っていた人間的な力によるものではなかった。これらのしるしと不思議は、「わたしは有る」という大いなるかたが、モーセをつかわされたことと、イスラエル人を解放して、彼らを生きた神に仕えさせることが 1 三の義務であることをパロに悟らせるためのものであった。魔術師たちも、しるしや不思議を行ったが、彼らは自分たちの力だけで行ったのではなく、主のわざに対抗するために、彼らに助けを与えた彼らの神、サタンの力によるものであった。 PP 132.4

魔術師たちは、ほんとうに彼らのつえをへびに変えたのではなかった。彼らは、大いなる欺瞞者の助けを得て、魔術を用いてへびのように見せかけることができたのであった。つえを生きたへびに変えることは、サタンの力の及ばないことである。悪の君は、堕落天使の知恵と能力をことごとく身につけているとは いえ、創造する力、すなわち、

生命を与える力は持っていない。これは、ただ神のみの特権である。しかし、サタンは自分の力でできることはことごとく行い、にせものをつくり出した。つえは、人間の日にはへびに変わって見えた。パロと廷臣は、それらがへびであると信じていた。その外観からは、モーセによってつくりだされたへびと区別することは全くできなかった。主は、ほんとうのへびがにせのへびをのみつくすようにされたが、パロはそのことでさえ神の力のわざではなく、自分の家来たちの魔術よりもさらにすぐれた魔術の結果であると思っていた。 PP 132.5

神の命令に逆らったパロは、そのかたくなな心を正当化しようとのぞみ、神がモーセを通して行われた奇跡を無視する口実をさがしていた。サタンはちょうど彼がほしがっていたものを与えた。サタンは、魔術師たちに行わせたしわざによって、モーセとアロンが単なる魔術師にすぎず彼らがたずさえてきた使命は、神からのものとして重要視する必要はないとエジプト人に思わせようとした。このように、サタンの欺瞞はその目的を果たし、エジプト人を大胆にして神にそむかせ、また、パロの心を堅くして不信に陥れた。サタンはさらに、モーセやアロンの使命が神からのものであるという信仰をゆるがせ、自分の手下のがわを勝利させようとした。王は、イスラエルの人々が、奴隷から解放されて生きた神に仕えることを喜ばなかった。 PP 133.1

しかし、悪の君が魔術師を通して不思議を行ったのには、もっと深い目的があった。彼は、モーセが、イスラエルの人々を奴隷のきずなから解放することは、人類を罪の支配から解放するキリストを予表していることをよく知っていた。彼は、キリストがこの世に現れるとき、彼が神から世に送られた証拠として力ある奇跡を行われるのを知っていた。サタンは、キリストの力におののいた。サタンは、モーセを通してなされた神のみわざのにせものをつくり出すことによって、イスラエルの解放をさまたげると共に、その後の時代にまで影響を及ぼし、人々にキリストの奇跡を信じさせまいとした。サタンは、絶えずキリストのみわざのにせものをつくり、自分の勢力範囲を確立しようとしている、サタンは、キリストの奇跡が、人間の技巧と能力の結果であるかのように見せかけて、人々にそう思わせている、彼は、このようにして、多くの人々の心からキリス

トが神の子であるという信仰を失わせ、あがないの計画を通して与えられる恵み深いあわれみの招きを、人々が退けるようにしむける。 PP 133.2

次の朝、モーセとアロンは川岸に行くように指示されたが、そこは王がしばしば行くところであった。ナイル川のはんらんが、全エジプトの食物と富の源であったので、川は神として礼拝されていた。王は祈りをささげるために毎日ここに来ていた。ここで 2 人の兄弟は、再びパロに伝えるべき言葉をくり返して告げ、それからつえをのべて水を打った。すると、その清い水は血に変わり、魚は死に、川は不快なにおいを放った。家の中の水も、飲み水としてたくわえてあった水も同じように血に変わった。「エジプトの魔術師らも秘術をもって同じようにおこなった」。しかし「パロは身をめぐらして家に入り、またこのことをも心に留めなかった」（同 7：22、23）。この災いは 7 日間続いたが、なんの効果もなかった。 PP 133.3

再びつえが水の上にのべられて、かえるが川からのぼって国中にひろがった。かえるは家々に群がり、寝室に入り、かまどやこねばちにさえ入った。エジプト人は、かえるを神聖なものとしていたので殺そうとしなかった。しかし、かえるのわざわいはついに耐えられなくなった。かえるはパロの宮殿にさえ群がったので、王は、たまりかねてそれを取り除かせた。 PP 133.4

魔術師たちはかえるをつくり出すようには見えたが、それを取り去ることはできなかった。パロはそれを見て、いくらか心を低くした。彼は、モーセとアロンを召して言った。「かえるをわたしと、わたしの民から取り去るように主に願ってください。そのときわたしはこの民を去らせて、主に犠牲をささげさせるでしょう」（同 8：8）。2 人は、王が以前に高慢なことを言ったことを彼に指摘して災いが取り去られることを祈る時を定めてもらいたいと王に求めた。王は、次の日を指定した。彼は、それまでにかえるが自然にいなくな ってしまい、彼がイスラエルの神に服従するというはなはだしい屈辱にあわなくてもすむようにとひそかに願っていた。しかし、災いは定められた時まで続いた。そして、エジプトのいたる所で死んだかえるが腐って、その死がいが空気を汚染した。 PP 133.5

主は、かえるを一瞬のうちにちりに帰すことがおできになったが、そうはなさらなかった。それは、かえるが取り去られたのち、王と人々が、それを魔術師たちの行う魔法の結果であるということのないためであった。かえるは死に、1 か所にうず高く集められた。これこそ、王と全エジプトの人々が、彼らのむなしい哲学では否定することのできない証拠であった。これは、魔術によって行われたものではなくて、天の神の刑罰であった。「パロは息つくひまのできたのを見て、主が言われたように、その心をかたくなに」した（同 8：15）。アロンが神の命令を受けて手をのべると、エジプト全国にわたって、地のちりがぶよになった。パロは、魔術師を呼び出して同じことをさせたが、彼らにはできなかった。このように神のわざはサタンのわざよりもすぐれていることが明らかにされた。魔術師たち自身も、「これは神の指です」と認めた。しかし、王はまだ動かされなかった。 PP 134.1

訴えも警告も効果がなかったので、もう 1 つの刑罰が下った。それが偶然に起こったと言われることのないように、それがいつ起こるかという予告がなされた。あぶが家々を満たし、地の上に群がったので「地はあぶの群れのために害をうけた」（同 8：24）。これらのあぶは大きく有毒で、人間や動物はそれにかまれると激しい痛みをおぼえた。この刑罰は、すてに予告されていたように、ゴセンの地には及ばなかった。 PP 134.2

そこでパロは、イスラエル人に、エジプトで神に犠牲をささげる許可を与えたが、彼らは、そのような条件を受け入れなかった。モーセは言った。「そうすることはできません。……もし、エジプトびとの目の前で、彼らの忌むものを犠牲にささげるならば、彼らはわたしたちを石で打たないでしょうか」（同 8：26）。 PP 134.3

ヘブル人が犠牲としてささげるように要求されていた獣は、エジプト人が神則なものとしていた動物に属していた。こうした動物は非常に尊ばれていたので、たとえ事故によるものであっても、1 匹でも殺すことは死刑に値する犯罪であった。ヘブル人がエジプトで、彼らの主人の気にさわらないように礼拝することはほとんど不可能であった。モーセは、3 日間荒野に行かせてほしいと再び申し出た。王はそれに同意し、災いが取り去られるように祈願してほしいと彼に願った。彼らは祈ることを約束した。そして、

もう欺くことはやめてほしいと王に強く訴えた。災いはとどめられたが、王は、頑強に反逆して心をかたくし、なおも従おうとしなかった。 PP 134.4

もっと恐ろしい打撃が続いた。野にいるエジプトの全家畜に疫病が下った。神聖な獣も、雄牛、雌牛、羊、馬、らくだ、ろばなど労役用の家畜も殺された。ヘブルびとがその刑罰から免れることは明らかに宣言されていたので、パロがイスラエル人の家に使者を送ったところ、モーセの宣言が正しかったことが証明された。「イスラエルの人々の家畜は 1 頭も死ななかった」（同 9：6）。王は、それでもなお頑強に逆らった。 PP 134.5

次に、モーセは、かまどの灰をとって、「パロの目の前で天にむかって、まき散らしなさい」と命令された（同 9：8）。この行為には深い意義があった。400 年前、神はアブラハムに、彼の民が将来迫害されることを、けむっているかまどと、燃える燈火の象徴によってお小しになっていた。神は、彼らを迫害する者をさばき、捕われている人々に多くの所有物を与えて連れ出すであろうと宣言しておられた。イスラエル人は、エジプトで長い間苦難のかまどの中で苦しんできた。モーセのこの行為は、彼らにとって、神かその契約を覚えておられることと、彼らの解放の時が来たことの保証であった。 PP 134.6

天に向かってまかれた灰の細かい粒子が、エジプト全国にまき散らされると、それはいたる所で「人と獣に付いて、うみの出るはれもの」を生じさせた（同 9：9）。祭司と魔術師は、それまでパロのかたくなさ を助長していたが、今や、その刑罰は彼らにまで及んだ。彼らは、不快きわまる苦しい病に打ちひしがれ、誇っていた力も、ただ彼らをはずかしめるだけになり、もはやイスラエルの神に立ち向かうことができなくなった。全国民は自分の身さえ守ることのできない魔術師にたよっていることの愚かさを知らされた。 PP 134.7

それでもなお、パロの心はさらにかたくなになっていった。そこで、主は彼にみことばを送って宣言された。「わたしは、こんどは、もろもろの災を、あなたと、あなたの家来と、あなたの民にくだし、わたしに並ぶものが全地にないことを知らせるであろう。……しかし、わたしがあなたをながらえさせたのは、あなたにわたしの力を見させ

るため」である（同 9：14～16）。これは、神が、この目的のために、彼を生かしておかれたということではなく、むしろ神のみ摂理が諸事件を支配して、イスラエルの解放のために定められたちょうどその時に、彼を王位につけたということである。この高慢な暴君は、彼の犯した罪により、神のあわれみを受けるに値しない者となっていたが、それでも彼の頑迷さを通して、主がエジプトの地で驚くべきことをあらわすために彼の生命は保たれていた。諸事件のなりゆきを定めるのは、神の摂理である。神は、神の力の大きな現れにあえて逆らおうとしない、もっとあわれみ深い王を王位につけることもおできであった。しかし、それでは、主の目的は成就されなかったであろう。神の民がエジプト人のはなはだしい残酷な取りあつかいを受けることを神が許されたのは、彼らが偶像礼拝の堕落的な影響について欺かれることのないためであった。主は、こうしたパロとの交渉のうちに偶像礼拝に対する憎悪を示し、残酷と圧迫とを罰せずにはおかない神の決意を示された。 PP 135.1

神は、パロについて宣言された。「わたしが彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせないであろう」（同 4：21）。王の心をかたくなにするために、何か超自然の力が用いられたのではない。神は、パロに神の力の最も著しい証拠をお示しになったのであったが、王はかたくなにも光を心に留めることを拒んだ、無限の力の表小をことごとく退けた彼は、反抗の決意をさらに固めた。彼が最初の奇跡を退けたときにまいた反逆の種は、その実を結んだ。彼が、彼白身の道を歩む危険を冒し続け、ますます強精の度合いを増すにつれて、彼の心はいよいよかたくなになり、ついに、長子の冷たい死に顔をながめなくてはならないようになった、 PP 135.2

神は、そのしもべを通して人間に語り、注意や警告をお与えになり、その罪を非難なさる。神は、すべての人の品性が決定される前に、そのあやまちを正す機会をお与えになるが、もしその人が正されることを拒否するならば、神のみ力は、その人の行為の傾向をほかに向けるために干渉することをしない。彼には同じことをくり返すことが容易なのである。彼は、聖霊の感化に反対して心をかたくなにしている。光を退け続けると、さらに強力な感化力であっても永続的な印象をうけつけなくなるのである。 PP 135.3

1度、試みに負けた者は、2度目にはさらにたやすく屈服する。罪をくり返すたびに抵抗する力は弱まり、目は暗くなり、確信は消え去る。まかれた放縦の種はみな実を結ぶ。神は、その収穫を妨げるために奇跡を行うようなことはなさらない。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」（ガラテヤ 6：7）。神の真理に対して神を恐れぬ不敵さと、愚かな無関心を示す者は、彼自身がまいたものの収穫を刈り取っているのである。こうして、多くの者は、かつて彼らの魂をゆり動かした真理を、冷たい無関心な態度で聞くようになるのである。彼らは、真理に対して怠慢と反抗の種をまき、そのような収穫を刈り取るのである PP 135.4

悪の道は、変えようと思えばいつでも変えられるし、憐れみの招きを軽くあしらっても、なおくり返しその招きを感じることができると考えて、良心の声をしずめている人々は、非常に危険な道を歩んでいる。彼らは、自分の力のすべてを大反逆者サタンの側に置いておきながら、いよいよどうにもならなくなって危険に囲まれたときに、自分の指導者を変えればよいと考えている。しかし、これはそれほど容易にできる ことではない。罪にふけってきた生涯の体験、教育、訓練などが品性をすっかり形成しているのであるから、彼らはもはやイエスのみかたちを受け入れることができなくなっている。もし光が彼らの道を照らしていなかったならば、事情は異なっていたであろう。憐れみのみ手がのべられて、その申しいでを受け入れる機会が彼らに与えられるかもしれない。しかし、長い間拒まれ、侮られてきた光は、ついに取り去られてしまうのである。 PP 135.5

パロには、次に雹の災いが下されることになり、警告が与えられた。「それゆえ、いま、人をやって、あなたの家畜と、あなたが野にもっているすべてのものを、のがれさせなさい。人も獣も、すべて野にあって家に帰らないものは降る雹に打たれて死ぬであろう」（出エジプト 9：19）。エジプトでは、雨や雹は珍しく、予告されたようなあらしはこれまでになかった。この知らせは、すみやかに広まり、主の言葉を信じた者はみな彼らの家畜を集めたが、警告を侮った者は家畜を野に残しておいた。こうして、刑罰のうちにも神のあわれみがあらわされ、人々は試みられ、どれだけの人が神のみ力のあらわれを通して神を恐れるようになったかが明らかにされた。 PP 136.1

予告通りに、嵐がやってきた。雷と雹に火がまじり、「エジプト全国には、国をなしてこのかた、かつてないものであった。雹はエジプト全国にわたって、すべて畑にいる人と獣を打った。雹はまた畑のすべての青物を打ち、野のもろもろの木を折り砕いた」（同 9：24、25）。破滅と荒廃が、滅びの天使の通ったあとを示していた。ゴセンの地だけが助かった。地は、生きた神の支配のもとにある。そして、白然は、神のみ声に従っている。だから神に従うことだけが安全であることが、エジプト人に明らかに示された。 PP 136.2

全エジプトは、神の刑罰の恐ろしい降下を前にしておののいた。パロは急いで 2 人の兄弟を召して叫んだ。「わたしはこんどは罪を犯した。主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い。主に祈願してください。この雷と雹はもうじゅうぶんです。わたしはあなたがたを去らせます。もはやとどまらなくてもよろしい」。モーセは答えた。「わたしは町を出ると、すぐ、主にむかってわたしの手を伸べひろげます。すると雷はやみ、雹はもはや降らなくなり、あなたは、地が主のものであることを知られましょう。しかし、あなたとあなたの家来たちは、なお、神なる主を恐れないことを、わたしは知っています」（同 9：27～30）。 PP 136.3

モーセは、争闘がまだ終わっていないことを知っていた。パロの告白と約束は、彼の気持ちが全く変わったためではなく、恐怖と苦悩のためやむを得ずなされたものであった。しかし、モーセは彼の願いを聞き入れると約束した。それは王に、これ以上強情をはる機会を与えたくなかったからである。預言者は、激しい嵐も気に留めず出て行った。パロとパロのすべての家来たちは、主がその使命者を守護なさる力を目撃していた。モーセは町の外に出て、「主にむかって手を伸べひろげたので、雷と霊はやみ、雨は地に降らなくなった」（同 9：33）。ところが、王は恐怖心が去るとすぐ、もとのかたくなな心にもどった。 PP 136.4

そこで、主はモーセに言われた。「パロのもとに行きなさい。わたしは彼の心とその家来たちの心をかたくなにした。これは、わたしがこれらのしるしを、彼らの中に行うためである。また、わたしがエジプトびとをあしらったこと、また彼らの中にわたしが行ったしるしを、あなたがたが、子や孫の耳に語り伝えるためである。そしてあなた

がたは、わたしが主であることを知るであろう」（同 10：1、2）。主は、ただご自分だけがまことの生きた神であるという信仰を強くイスラエルの人々にいだかせるために、そのみ力をあらわされた。神は、イスラエル人とエジプト人の間の相違について明らかな証拠をお与えになり、すべての国民が侮り、圧迫しているヘブル人が、天の神の保護のもとにあることを諸国民に知らせようとされた。 PP 136.5

モーセは、もし王がいつまでも強情をはり続けるならば、いなごの災いが送られ、それは地のおもてをおおい、残されているすべての青物を食べ尽くし、家々を満たし、宮殿さえも満たすであろうと警告した。モーセは、そのようなこらしめは「あなたの父たちも、また、祖父たちも、彼らが地上にあった日から今日に至 るまで、かつて見たことのないものである」と言った（同 10：6）。 PP 136.6

パロ王の重臣たちは、驚いて立ちすくんだ。国は家畜の死によってばく大な損失をこうむっていた。多くの人が雹で死んだ。森林は倒され、穀物はそこなわれた。彼らは、ヘブル人の労力で得たものを急速にことごとく失っていた。全上は飢餓の脅威にさらされていた。つかさたちや廷臣たちは、王のまわりにつめ寄り、怒って要求した。「いつまで、この人はわれわれのわなとなるのでしょう。この人々を去らせ、彼らの神なる主に仕えさせては、どうでしょう。エジプトが滅びてしまうことに、まだ気づかれないのですか」（同 10：7）。 PP 137.1

モーセとアロンが再び召されて行くと、王は彼らに言った。「行って、あなたがたの神、主に仕えなさい。しかし、行くものはだれだれか」（同 10：8）。モーセは言った。「わたしたちは幼い者も、老いた者も行きます。むすこも娘も携え、羊も牛も連れて行きます。わたしたちは主の祭を執り行わなければならないのですから」（同 10：9）。 PP 137.2

王は激しい怒りに満たされた。「万一、わたしが、あなたがたに子供を連れてまで去らせるようなことがあれば、主があなたがたと共にいますがよい」と彼は叫んだ。「あなたがたは悪いたくらみをしている。それはいけない。あなたがたは男だけ行って主に仕えるがよい。それが、あなたがたの要求であった」（同 10：10、11）。彼らは、ついにパロの前から追い出された。パロは、重労働によってイスラエル人を滅ぼそうと

したのだが、今度は、彼らの幸福に深い関心をよせ、子供たちをやさしく見守っているかのように見せかけた。彼の真の目的は、男たちが帰ってくる保証として女と子供を手もとに置いておくことであった。 PP 137.3

さて、モーセがつえを地の上にさしのべると、東風が吹いていなごを運んで来た。「その数がはなはだ多く、このようないなごは前にもなく、また後にもないであろう」（同 10：14）。いなごは空をおおったので、地は暗くなった。そして、残されていた青物をことごとく食べ尽くした。パロは、大急ぎで預言者たちを召して言った。「わたしは、あなたがたの神、主に対し、また、あなたがたに対して罪を犯しました。それで、どうか、もう 1 度だけ、わたしの罪をゆるしてください。そしてあなたがたの神、主に祈願して、ただ、この死をわたしから離れさせてください」（同 10：16、17）。彼らがそのようにすると、強い西風がいなごを紅海に運んでいった。王はそれでもなお、彼のかたくなな決意を変えようとしなかった。 PP 137.4

エジプト人は、まさに絶望に陥るところであった。これまで彼らに下った天罰は、ほとんど耐えがたいように思われ、これから先は、どうなることかとあやぶまれた。国民は、彼らの代表者として、パロを礼拝していた。ところが、自然界のすべての力をみ心のままにお用いになる真の神に、パロが逆らっていることを彼らの多くははっきりと悟った。ヘブルの奴隷たちは、全く奇跡的な方法で助けられたために、救済の確信をいだくようになった。監督たちはこれまでのように彼らを抑圧しようとしなかった。エジプトのいたるところで奴隷たちが立ち上がって、その受けた圧迫の報復をするのではないかと、人々はひそかに恐れた。人々は、いたるところで息を殺して次にはいったい何が起こるだろうかとささやき合っていた。 PP 137.5

突然、暗黒が全国にのぞんだ。それは非常に濃い暗黒であったので、「そのくらやみは、さわれるほどであ」った（同 10：21）。人々から光がとり去られたばかりでなく、空気もまた息がつまるようであったので、呼吸するのも困難であった。「3 日の間、人々は互に見ることもできず、まただれもその所から立つ者もなかった。しかし、イスラエルの人々には、みな、その住む所に光があった」（同 10：23）。太陽と月はエジプト人の礼拝の対象であった。この不思議な暗黒の中で、エジプト人と彼らの神々は、

奴隷たちのために働き出した力に打たれた。この刑罰は、恐るべきものであったとはいえ、神は憐れみ深く、滅ぼすことを喜ぶ方ではないということを証拠だてるものであった。神は最後の最も恐ろしい災いを彼らの上に下す前に、人々に反省と悔い改めのときをお与えになった。 PP 137.6

恐怖は、ついに、パロを動かしてさらに譲歩させた。3 日のくらやみののち、パロはモーセを召し、もし、羊と牛を残すならば、人々を去らせようと言った。堅く決意したヘブルびとは、「ひずめ 1 つも残しません」と答えた。「わたしたちは、その場所に行くまでは、何をもって、主に仕えるべきかを知らないからです」。王は、怒りをおさえることができなかった。「わたしの所から去りなさい。心して、わたしの顔は 2 度と見てはならない。わたしの顔を見る日には、あなたの命はないであろう」とパロは言った。モーセは言った。「よくぞ仰せられました。わたしは、2 度と、あなたの顔を見ないでしょう」（同 10：26、28、29）。 PP 138.1

「モーセその人は、エジフトの国で、バロの家来たちの日と民の目とに、はなはだ大いなるものと見えた」（同 11：3）。モーセは、畏敬の念をもってエジプト人に迎えられた。人々は彼だけが災いを取り去る力を持っている者であるとあがめていたので、王も彼に害を加える勇気がなかった。彼らは、イスラエル人にエジプトを立ち去る許可が与えられることを願っていた。モーセの要求に最後まで反対したのは王と祭司たちであった。 PP 138.2

第 24 章　過越の祭り

本章は、出エジプト記 11 章、12：1～32 に基づく PP 138.3

イスラエルの解放を叫ぶ要求が、はじめてエジプト王に示されたとき、最も恐ろしい災いの警告が与えられた。モーセは、パロに、次のように言うように命令された。「主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺すであろう」（出エジプト 4：22、23）。イスラエル人はエジプト人に軽蔑されていたが、神からは、神の律法の保管者として選ばれる光栄に浴していた。彼らには、特別の祝福と特権が与えられ、諸国民の間で、長子がほかの兄弟たちよりすぐれているのと 1 司様の優位を占めていた。 PP 138.4

エジプトが最初に警告された刑罰は、最後に与えられるのであった。神は、忍耐深く、憐れみに富んでおられる。神は、ご自分のかたちに造られた者を、やさしく守られる。もし、エジプト人が、畑の産物や羊や牛の群れなどを失ったとき、悔い改めていたならば子供たちは打たれなかったであろう。しかし、国民は心をかたくなにして神の命令を退けたために、今、最後の災いが訪れようとしていた。 PP 138.5

モーセが、再びパロの前に姿を現すならば殺されることになっていた。しかし、神の最後のことばを、反抗的な王に伝えなければならなかったので、モーセは、また王の前に来て、その恐ろしい宣告をするのであった。「主はこう仰せられる、『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中へ出て行くであろう。エジフトの国のうちのういごは、位に座するパロのういごをはじめ、ひきうすの後にいる、はしためのういごに至るまで、みな死に、また家畜のういごもみな死ぬであろう。そしてエジプト全国に大いなる叫びが起るであろう。このようなことはかってなく、また、ふたたびないであろう』と。しかし、すべて、イスラエルの人々にむかっては、人にむかっても、獣にむかっても、犬さえその舌を鳴らさないであろう。これによって主がエジプトびととイスラエルびととの間の

区別をされるのを、あなたがたは知るであろう。これらのあなたの家来たちは、みな、わたしのもとに下ってきて、ひれ伏して言うであろう、『あなたもあなたに従う民もみな出て行ってください』と。その後、わたしは出て行きます」（同 11：4～8）。 PP 138.6

この宣告が執行される前に、主はモーセを通して、イスラエルの子らにエジプトから出て行くことについての指示と、特に、迫っている刑罰から守護されるようにするための指示を与えられた。それぞれ家族は自分たちだけか、あるいは他の家族と一緒になるかし て、「傷のない」小羊、または小やぎをほふり、ヒソプの束でその血を「家の入口の 2 つの柱と、かもい」に塗らなければならなかった。それは滅びの天使が真夜中に通過するとき、その家にはいらないためであった（出エジプト 12：1～28 参照）。彼らは、モーセが言ったように、その夜、焼いた肉に種入れぬパンと苦菜を添えて食べなければならなかった。「腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である」（同 12：11）。 PP 138.7

主は言われた。「その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国におる人と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。……その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであろう。わたしがエジプトの国を撃つ時、災が臨んで、あなたがたを滅ぼすことはないであろう」（同 12：12、13）。 PP 139.1

この大いなる解放を記念して、後世のイスラエル人は、みな 1 つの祭りを年ごとに守ることになった。「この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれを守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない」。後世、彼らがこの祭りを行うとき、彼らはモーセが命じたようにこの大いなる解放の物語を、その子孫にくり返して聞かせなければならなかった。「あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプトびとを撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』」（同 12：14、27）。 PP 139.2

さらに、人間と家畜のういごは共に主のものとなり、あがないによってのみ、自分たちのものとなったが、それはエジプトのういごが殺されたとき、イスラエルのういごが恵みによって救われたとはいえ、もし、贖いの犠牲がなかったならば、同じ運命にさらされていたことを認めるものであった。「ういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国において、すべてのういごを撃ち殺した日に、イスラエルのういごを、人も獣も、ことごとく聖別して、わたしに帰せしめた。彼らはわたしのものとなろであろう」と主は言われた（民数記 3：13）。主は、幕屋の制度を制定されたのち、聖所の奉仕に当たる者としてイスラエルのういこの代わりに、レビの部族をお選びになった。主は言われた。「彼らはイスラエルの人々のうちから、全くわたしにささげられたものだからである。イスラエルの人々のうちの初めに生れた者、すなわち、すべてのういこの代りに、わたしは彼らを取ってわたしのものとした」（民数記 8：16）。しかし、すべての人々には、神の憐れみを認めるしるしとして、長子の贖い金を払うことが要求された（同 18：15、16 参照）。 PP 139.3

過越の祭りは記念の祭りであると共に、また、一象徴的な祭りでもあった。それはエジプトからの解放を指示していたばかりでなく、キリストがその民を罪の束縛から自由にして成就される、さらに驚くべき解放をも表示していた。犠牲の小羊は、われわれの救いの唯一の希望である「神の小羊」をあらわしている。「わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ」と使徒は言った（1 コリント 5：7）。過越の小羊はほふられるだけでは十分ではなく、その血を柱に注がなければならなかった。そのように、キリストの血といさおしは魂にも適用されなければならない。われわれは、キリストが死なれたのは世のためばかりでなく、われわれ 1 人 1 人のためであることを信じなければならない。われわれは、順いの犠牲の功績を自分のものとしなければならない。 PP 139.4

血を注ぐのに用いられたヒソプは、清めの象徴で、重いひふ病や、死人にさわって汚れた人々のきよめにも用いられていた。詩篇記者の祈りにも、そのような意味がうかがわれる。「ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。

わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」（詩篇 51：7）。 PP 139.5

小羊は、そのまま調理され、骨は 1 本も折られなかったが、そのようにわれわれのために死なれることになっていた神の小羊の骨は、1 本でも折れてはならなかった（ヨハネ 19：36 参照）。こうして、キリストの犠牲の完全さが示されていた。 PP 139.6

肉は、食べなければならなかった。われわれは、罪が赦されるためにキリストを信じるというだけでは、まだ十分ではない。われわれはみ言葉を通して、キリストから来る霊的な力と栄養とを、信仰によって絶えず受けていなければならない。キリストは言われた。「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり」。キリストはこの言葉の意味を説明して、こう言われた。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（同 6：53、54、63）。イエスは、父の律法を受け入れ、その生活において律法の原則を実行し、心の中にその精神と恵みの力をあらわされた。ヨハネは言っている。「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」（同 1：14）。 PP 140.1

キリストに従う者は、彼の経験にあずかる者でなければならない。彼らは神の言葉を受け入れ、消化し、それが彼らの生活と行為を動機づける力となるようにしなければならない。彼らは、キリストの力によって彼のかたちに変えられ、神のご性質を反映しなければならない。彼らは、神の子の肉を食べ、血を飲まなければならない。そうしなければ、彼らの中に生命はない。キリストの精神と働きが彼の弟子たちの精神となり、働きとなるべきである。 PP 140.2

小羊は苦菜と共に食べなければならなかったが、それはエジプトでの奴隷の苦しさを示していた。そのようにわれわれがキリストを食べるとき、われわれは心のうちで自分の犯した罪の悔い改めをしていなければならない。種入れぬパンを用いたことにも深い意味があった。それは過越の祭りのさだめに明らかにしるされており、ユダヤ人も実際に厳格に守っていたので、その祭りの期間中、彼らの家でパン種を見ることは絶対に

なかった。同じようにキリストから生命と栄養を受ける者はみな、罪のパン種を取り除かなければならない。パウロは、コリントの教会にそのように書いている。「新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。……わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪悪とのパン種を用いずに、パン種のはいっていない純粋で真実なパンをもって、祭をしようではないか」（1 コリント 5：7、8）。 PP 140.3

奴隷たちは、自由を得るに先だって、間もなく成就されようとしている大いなる解放を信じていることを表さなければならなかった。血のしるしを彼らの家に塗り、彼らとその家族はエジプト人から離れて、それぞれの家の中に集まっていなければならなかった。もしイスラエル人が、与えられた命令のどのような点でも、無視したり、彼らの子供をエジプト人から離すことを怠ったり、小羊を殺しても門の柱に血を塗ることを忘れたり、あるいはだれか家の外に出ているようなことがあったならば、彼らは安全ではなかったであろう。彼らが、必要なことをことごとくすませていると心から思っていたとしても、ただ真剣にそう思っただけでは救われなかったのである。主の命令に注意を払わなかった者は、みな滅びの天使によって、そのういごを失うのであった。 PP 140.4

イスラエルの人々は、従順によって彼らの信仰の証拠を示さなければならなかった。そのように、キリストの血の功績によって救われようと望んでいる者は、みな救いを得るために、自分でもしなければならないことがあるのを知るべきである。罪の刑罰からわれわれを贖うことができるのはキリストだけである。しかし、われわれも罪から離れて服従しなければならない。人間は信仰によって救われるのであって、行いによるのではないが、その人の信仰は、行いによって示される必要がある。神は、み子を罪のなだめの供え物として死ぬためにお与えになり、真理の光、すなわち生命の道を明らかにされた。そして必要なてだてと、さだめと、特権をお与えになった。そこで人間もこうした救いの方法と力を合わせなければならない。神がお備えになった助けを感謝して活用し、神のご要求をことごとく信じ、それに従わなければならない。 PP 140.5

モーセがイスラエル人に向かって、彼らの救済のために神が備えられたことをくり返して述べたとき、「民は……伏して礼拝した」（出エジプト 12：27）。喜ばしい自由の希望も、彼らの圧迫者の上に臨もうとしている刑罰の恐ろしさも、また、彼らが急いで立ち去るための苦心と労力なども、すべて一時は忘れ去られて、彼らの恵み深い解放者であられる神への感謝で心は満ちあふれた。エジプト人の多くは、ヘブル人の神こそ唯一の真の神であることを認めるようになっていた。これらの人々は、滅びの天使が国中をめぐるとき、イスラエルの家に避難させてもらいたいと嘆願した。彼らは喜んで迎えいれられた。彼らはその後、ヤコブの神に仕え、イスラエルの民と共にエジプトから出て行くことを誓った。 PP 141.1

イスラエル人は、神がお与えになった指示に従った。彼らは大急ぎで、秘密のうちに出発の準備をした。家族が集められ、過越の小羊がほふられて、肉は火で焼かれ、種入れぬパンと苦菜がそなえられた。家庭の祭司である父親は、門柱に血を注ぎ、家の中にはいって家族と一緒にいた。彼らは大急ぎで、黙って過越の小羊を食べた。人々は、恐れおののいて、祈りつつ見張っていた。長子たちの心は、じょうぶなおとなから小さな子供にいたるまで、言うに言われぬ恐怖に襲われた。父親と母親は、その夜下ろうとしている恐ろしい災いを思いながら、彼らの愛する長子をその腕にだきしめていた。しかし、イスラエルのどの家にも死の天使は来なかった。血のしるし（それは救い主の保護のしるしであった）が、彼らの戸にあったので滅ぼす者ははいらなかった。 PP 141.2

真夜中に、「エジプトに大いなる叫びがあった。死人のない家がなかったからである」。国のすべてのういごは「位に座するパロのういこから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで、また、すべての家畜のういご」は滅ぼす者にうたれた（同12：30、29）。エジプトの広大な領土のいたるところで、すべての家庭が誇りとしていたものが殺された。悲しむ者の叫びと嘆く声がどこからも聞こえた。王と廷臣たちは顔を青くし、足をふるわせながら、この恐ろしいありさまをながめて立ちすくんだ。パロは、前に、自分がどのように大声で叫んだかを思い出した。「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を

知らない。またイスラエルを去らせはしない」（同 5：2）。今、彼の天に対する不敵な誇りはくじかれた。「夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せて言った、『あなたがたとイスラエルの人々は立ってわたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言うように、行って主に仕えなさい。あなたがたの言うように羊と牛とを取って行きなさい。また、わたしを祝福しなさい』」。王の大臣たちも国民も、イスラエル人に嘆願して「すみやかに国を去らせようとした。彼らは『われわれはみな死ぬ』と思ったからである」（同 12：31、32、33）。 PP 141.3

第 25 章　エジプト脱出

本章は、出エジプト記 12：34～51、13～15 蟻に基づく PP 141.4

イスラエル人は、腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って黙々と畏敬の念をいだいて立ち、王からの出発の命令を今か今かと待っていた。彼らは、夜が明ける前に出発した。神の力のあらわれが、奴隷たちの心に信仰の火をともした。圧迫者を恐怖に陥れた災いが下っていた間に、イスラエル人は、次第にゴセンに集まってきた。彼らの脱出は突然ではあったが、それにもかかわらず、群衆を移動させるのに必要な組織と統制の用意はすでになされていたので、彼らは定められた指揮者のもとに隊を組んだ。 PP 141.5

出発したのは、「女と子供を除いて徒歩の男子は約 60 万人であった。また多くの入り混じった群衆および羊、牛など非常に多くの家畜も彼らと共に上った」（出エジプト 12：37、38）。この群衆の中 には、イスラエルの神を信じる信仰によって行動した人々ばかりではなく、むしろそれ以上の多くの人々が、ただ災いをのがれることを望んで加わっていた。また、単なる興奮と好奇心にかられて、この移動する群衆のあとについて来た人々もいた。こういう種類の人々は、イスラエルにとっていつも妨害となり、わなとなった。 PP 141.6

イスラエルの人々は、また「羊、牛など非常に多くの家畜」を引きつれて出た。これらは、イスラエル人のものであり、彼らはエジプト人がしたように、自分たちの所有物を王に売るようなことをしなかった。ヤコブとむすこたちは、羊や牛をエジプトにつれて来たが、それらはエジプトで非常にふえていた。イスラエル人はエジプトを去る前に、モーセの指示に従って、未払いの賃金に対する賠償を要求した。エジプト人は、彼らが出ていくことを切望していたので、彼らの要求を拒まなかった。奴隷たちは、圧迫者から得た宝を多く携えて出て行った。 PP 142.1

数百年前にアブラハムが幻によって啓示された歴史の期間が、この日に終わりを告げた。「あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを

400 年の間、悩ますでしょう。しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう」（創世記 15：13、14）。その 400 年が満ちた。「ちょうどその日に、主はイスラエルの人々を、その軍団に従ってエジプトの国から導き出された」（出エジプト 12：51、40、41、13：19 参照）。イスラエル人がエジプトを離れたとき、ヨセフの骨という貴重な遺物を携えていた。ヨセフの骨は、長い間神の約束の成就を待つとともに、暗い奴隷生活の年月の間、イスラエルの解放を思い起こさせるものであった。 PP 142.2

主は、カナンに向かうのに、ペリシテ人の国を通って行く最短の道を行かせずに、紅海の岸にそって南に彼らを導かれた。「民が戦いを見れば悔いてエジプトに帰るであろうと、神は思われたからである」（同 13：17、18、20～22 参照）。もし、彼らがペリシテの国を通ろうとしていたならば、彼らの旅は妨害されたであろう。ペリシテ人は、イスラエル人を主人のところから逃走している奴隷と見なし、ためらうことなくイスラエル人に戦いをいどんだことであろう。イスラエル人は、貧弱な準備しかなかったので、この強力で好戦的な民族と戦いをまじえることはてきなかった。彼らは、神に関してほとんど知識を持っておらず、信仰も弱かったので恐怖に襲われ、心がくじけてしまったことであろう。彼らは、武器もなく、戦いにも慣れておらず、長い束縛によって心がくじかれていた。その上、女、子供、羊、牛などを引き連れていた。主は彼らを紅海に行く道にお導きになって、ご自分が裁きの神であると同時に、憐れみの神であることをあらわされた。 PP 142.3

「こうして彼らは更にスコテから進んで、荒野の端にあるエタムに宿営した。主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを照し、昼も夜も彼らを進み行かせられた。昼は雲の柱、夜は火の柱が、民の前から離れなかった」（同 13：20～22）。「主は雲をひろげておおいとし、夜は火をもって照された」と詩篇記者は言っている（詩篇 105：39、Ｉコリント 10：1、2 参照）。目に見えない指導者の旗じるしが、いつも彼らのそばにあった。昼は、雲が彼らの旅路を導き、また、イスラエルの軍勢の頭上に天蓋のようにひろがっていた。それは、焼けるような熱から保護する役目を果たし、その涼気と湿度は、かわききって干からびた砂漠の中で、

生気を回復させるものとしてまことにありがたいものであった。夜になるとそれは火の柱になって、彼らの天幕を照らし、たえず主のご臨在をあかししていた。 PP 142.4

イザヤの最も美しく、慰めに満ちた預言の言葉のなかで、この雲と火の柱は、悪の勢力との最後の大争闘において、神が、神の民を守られることの象徴として用いられている。「その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨 を避けて隠れる所となる」（イザヤ４：5、6）。 PP 142.5

彼らは、荒涼とした砂漠を通って旅を続けた。彼らは早くも、この道をたどって行けばどこに行きつくのだろうかと思いはじめていた。彼らは苦しい旅路に疲れはじめ、ある者は心の中でエジプト人が追跡してくるのではないかと恐れはじめていた。しかし、雲が前進するので、彼らも従った。それから主は、モーセに狭い岩の谷のほうに歩を転じ、海のそばに天幕をはるように命令された。パロは、彼らを追跡してはくるけれども、神が彼らをお救いになって、神に栄光が帰されることがモーセに示された。 PP 143.1

エジプトでは、イスラエル人が荒野にとどまって礼拝をするかわりに、紅海に向かって前進しているという知らせが広まった。パロの大臣たちは王に向かって、奴隷たちは逃亡してしまって、2 度と戻ってこないだろうと言った。人々は、神の力によって長子が殺されたと考えたのは愚かであったと後悔した。エジプトの指導者たちは恐怖から立ちなおって、災いは自然現象の結果であると説明した。「われわれはなぜこのようにイスラエルを去らせて、われわれに仕えさせないようにしたのであろう」と悲痛な叫び声をあげた（出エジプト 14：5）。 PP 143.2

パロは、「えり抜きの戦車 600 と、エジプトのすべての戦車」および騎兵、指揮者、歩兵からなる彼の軍勢を集めた（同 14：7）。王自身も彼の王国の勇士たちを従えて、攻撃軍の先頭に立った。彼らは、神々の恵みによって戦いに勝利をおさめる確証として祭司も共に連れてきた。王は、堂々たる彼の勢力を誇示して、イスラエル人の勇気をくじこうと思った。エジプト人は、イスラエルの神に屈服させられたために、他国民の嘲笑の的になったのではないかと恐れていた。そこで、もし彼らが今出て行って、その偉

力を示し、逃亡者を連れもどしたならば、奴隷たちの労働力を取り返すと同時に、彼らの栄光を再び回復することができるのであった。 PP 143.3

ヘブル人は、海のそばに天幕を張った。海の水は彼らの前に立ちはだかって、通り抜けることのできない障害のように思われた。一方、南側にはけわしい山があって、彼らの進行を妨げていた。突然、彼らは遠くかなたに強力な軍勢の接近を示す武器のきらめきと戦車の動きを見た。エジプトの軍勢が近づくにつれて、彼らが全力で追跡してくるのがわかった。 PP 143.4

イスラエルの人々は恐怖に襲われた。主に叫ぶ者もあったが、大部分の者はモーセのところにかけよってつぶやいた。「エジプトに墓がないので、荒野で死なせるために、わたしたちを携え出したのですか。なぜわたしたちをエジプトから導き出して、こんなにするのですか。わたしたちがエジプトであなたに告げて、『わたしたちを捨てておいて、エジプトびとに仕えさせてください』と言ったのは、このことではありませんか。荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかったのです」（同14：11、12）。 PP 143.5

民のために示された神の力を、何度も目撃しているにもかかわらずなぜ彼らは、このような弱い信仰しか持てないのかと、モーセは非常に悩んだ。モーセが神の明らかな命令に従ってきたことがわかっているのに、彼らはなぜ自分たちのおかれた、危険で困難な事態の責任をすべてモーセに負わせようとするのであろうか。事実、神が彼らをお救いになるために介入なさらなければ、解放される可能性はなかったのである。しかし、モーセは神の命令に従ったために、このような事態におかれたのであったから、その結果を恐れていなかった。モーセは静かに、確信をもって人々に答えた。「あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きょう、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、2 度と彼らを見ないであろう。主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」（同 14：13、14）。 PP 143.6

イスラエルの軍勢を、主のみ前にじっと待たせておくことは容易なことではなかった。彼らは訓練と自己抑制に欠けていたので、狂暴になり、道理をわきまえなかった。

彼らは直ちに圧迫者の手に落ちるものと思って、大声で激しく泣き叫んだ。彼らは、驚くべき雲の柱を、神が前進せよとお命じになる合図と見て従ってきたが、今彼らは、それが何かの恐ろしい災い の前兆ではなかったろうかと疑った。なぜなら、雲は、彼らを山の反対側の通り抜けることのできない道に導いたからであった。こうして神の天使は、彼らの混乱した心には、災いの先ぶれと思われたのである。 PP 143.7

さて、エジプトの軍勢が今にも彼らを餌食にしようとして近づいてきたとき、雲の柱は天に向かっておごそかに昇っていった。そして、イスラエル人の頭上を越え、イスラエル人とエジプトの軍勢との間に下った。追われる者と追う者の間に暗黒の障壁が立ちはだかった。エジプト人は、もはや、ヘブル人の陣営を見分けることができなくなり、やむを得ず立ち止まった。しかし、夜のやみが深まるにつれて、この雲の壁はヘブル人には大きな光となり、真昼の輝きをもって全陣営を照らした。 PP 144.1

こうして、イスラエル人の心に希望がよみがえった。モーセは、主に向かって声を上げた。「主はモーセに言われた、『あなたは、なぜわたしにむかって叫ぶのか。イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい』」（同14：15、16）。 PP 144.2

詩篇記者はイスラエル人が海を渡ったことを述べて、こう歌っている。「あなたの大路は海の中にあり、あなたの道は大水の中にあり、あなたの足跡はたずねえなかった。あなたは、その民をモーセとアロンの手によって羊の群れのように導かれた」（詩篇77：19、20）。モーセが、つえをのべると水は分かれ、イスラエル人は海の中のかわいた地を行ったが、その間、水は壁のように両側に立っていた。神の火の柱から出る光は、あわだった大波の上を照らし、海の水の中に巨大なみそのように開かれて、はるか向こう岸までかすんで見える道を照らしていた。 PP 144.3

「エジプトびとは追ってきて、パロのすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らのあとについて海の中にはいった。暁の更に、主は火と雲の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢を乱し」、エジプト人が驚いて見ている前で、この不思議な雲は火の柱に変わった（出エジプト 14：23、24）。雷鳴がとどろき、いなずま

がひらめいた。「雲は水を注ぎいだし、空は雷をとどろかし、あなたの矢は四方こきらめいた。あなたの雷のとどろきは、つむじ風の中にあり、あなたのいなずまは世を照し、地は震い動いた」（詩篇 77：17、18）。 PP 144.4

エジプト人はあわてふためいた。荒れ狂う自然界の中に、彼らは怒りを発せられた神の声を聞き、きびすを返して再びもとの岸辺に逃げかえろうとした。しかし、モーセがつえをさしのべると、おしとどめられていた水がほえたけるような音をたててもとにもどり、黒い海の深みにエジプトの軍勢をのみこんでしまった。 PP 144.5

夜が明けると、イスラエルの群衆は、彼らの強力な敵の残骸、すなわち武具をまとった死体が岸辺に散乱しているのを見た。一夜のうちに彼らは最も恐ろしい危機から完全に救われたのであった。彼らは、戦いに不慣れな奴隷の無力な大群衆で、女子、子供、家畜などをかかえ、前方は海に面し、後方からは強力なエジプトの軍勢の追跡を受けた。しかし、彼らは水を分けて開かれた進路を見、彼らの敵が勝利を目前にしていながら、波にのまれてしまったのを見た。主だけが彼らを救われたのである。彼らは感謝と信仰にみたされて、主に心を向けた。彼らは、心の喜びを歌と賛美であらわした。神の霊がモーセに臨んだので、彼は人々を指揮して勝利を感謝する賛美の歌をうたわせた。この賛美は最も古く、われわれが知っている賛美の歌の中では、最も荘厳なものの 1 つである。 PP 144.6

「主にむかってわたしは歌おう、 PP 144.7

彼は輝かしくも勝ちを得られた、 PP 144.8

彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。 PP 144.9

主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、 PP 144.10

彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、 PP 144.11

彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。 PP 144.12

主はいくさびと、その名は主。 PP 144.13

彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた、 PP 144.14

そのすぐれた指揮者たちは紅海に沈んだ。 PP 144.15

大水は彼らをおおい、彼らは石のように淵に下った。 PP 145.1

主よ、あなたの右の手は力をもって栄光にかがやく、 PP 145.2

主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。…… PP 145.3

主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、 PP 145.4

だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、 PP 145.5

ほむべくして恐るべきもの、 PP 145.6

くすしきわざを行うものであろうか。…… PP 145.7

あなたは、あがなわれた民を恵みをもって導き、 PP 145.8

み力をもって、あなたの聖なるすまいに伴われた。 PP 145.9

もろもろの民は聞いて震え、…… PP 145.10

恐れと、おののきとは彼らに臨み、 PP 145.11

み腕の大いなるゆえに、彼らは石のように黙した、 PP 145.12

主よ、あなたの民の通りすぎるまで、 PP 145.13

あなたが買いとられた民の通りすぎるまで。 PP 145.14

あなたは彼らを導いて、 PP 145.15

あなたの嗣業の山に植えられる。 PP 145.16

主よ、これこそあなたのすまいとして、 PP 145.17

みずから造られた所」 PP 145.18

（出エジプト 15：1～17） PP 145.19

この崇高な賛美の歌は、深いふちの音のようにイスラエルの大軍勢からわき起こった。イスラエルの代表的な女性であったモーセの姉ミリアムが、この賛美の歌をうたいながら先頭に進むと、人々もタンバリンを取り、踊りながら従った。荒野と海の遠くかなたまで、喜びに満ちた歌のおりかえしが響きわたり、山々は、「主にむかって歌え、彼は輝かしくも勝ちを得られた」という彼らのたたえの言葉をこだました（同 15：21）。 PP 145.20

この歌と、この歌が記念する大いなる解放は、ヘブル人の心にいつまでも消えない印象を与えた。この歌は、代々にわたり、イスラエルの預言者や歌人たちによってくり返し歌われ、主は、彼によりたのむ者の力であり、救いであることをあかしされた。こ

の歌は、ユダヤ民族だけのものではない。それは義の敵がすべて滅び、神のイスラエルが最後に勝利をおさめる未来をさし示している。パトモスの預言者は、白い衣をまとった多くの人々が敵に「うち勝」ち「神の立琴を手にして」「火のまじったガラスの海」のそばに立っているのを見た。「彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌っ」た（黙示録 15：2、3）。 PP 145.21

「主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まことのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください」（詩篇 115：1）。イスラエルの救いの歌にみなぎっていたのはこのような精神であった。この精神が神を愛し、恐れるすべての人々の心の中になければならない。神は、われわれの魂を罪の束縛から解放することによって、紅海でヘブル人にお与えになったものよりはるかに大いなる解放をもたらしてくださるのである。われわれも、ヘブルの軍勢のように、真心から主を賛美し、「人の子らになされたくすしきみわざ」に対して、声をあげなければならない。神の大いなる憐れみを深く思い、神から与えられるさまざまなほかの小さな賜物をもたいせつにする者は、喜びの帯をつけ、その心のうちに主に対する音楽をかなでるのである。 PP 145.22

われわれが神のみ手から受ける日ごとの祝福と、なにものにもましてわれわれに幸福と、天国とを得られるようにしてくださったイエスの死は、われわれの絶えまない感謝の主題でなければならない。神は、われわれをご自身に結びつけ、神のたいせつな宝物としてくださり、なんと大きな憐れみと、たぐいない愛をわれわれ失われた罪人に示されたことであろう。われわれが神の子とよばれるために、なんという大きな犠牲が贖い主によって払われたことであろう。われわれは大いなる贖罪の計画の中で、われわれに与えられる祝福に満ちた望みを思って神をたたえなければならない。われわれは、天の遺産と神の豊かな約束が与えられていることを考えて、神をたたえなければならない。イエスがわれわれのために生きてとりなしをしてくださることをたたえなければならない。 PP 145.23

「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」と創造主は言われた（同 50：23）。天の全住民は 1 つになって神を賛美している。われわれが彼らの輝く列につら

なるときにそれを歌えるように、今、天使の歌を学ぼう。詩篇記者と共に言おう。「わた しは生けるかぎりは主をほめたたえ、ながらえる間は、わが神をほめうたおう」（同 146：2）。「神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください」（同 67：5）。 PP 145.24

神は、み摂理のうちにヘブル人を海に面した山の中に導かれたが、それは、神が彼らを救う力を示し、彼らを圧迫する者の誇りをあからさまにくじくためであった。神は別の方法を用いて彼らを救うこともできたが、彼らの信仰を試み、神に対する彼らの信頼を強めるために、この方法をお選びになった。人々は疲労し、恐怖に満たされていた。しかし、モーセが前進せよと命じたときもし彼らがためらっていたならば、神は彼らのために道を開くことをなさらなかったであろう。「信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとおるように渡った」（ヘブル 11：29）。彼らは、水の中を進んで行くことによって、モーセを通してお語りになった神の言葉を信じていることを示した。彼らが力のかぎりを尽くしたときに、イスラエルの力ある神が海を分けて、彼らの歩む道をお作りになった。 PP 146.1

ここに教えられている驚くべき教訓は、いつの時代にもあてはまるのである。クリスチャンの生涯は、しばしば危険にさらされ、義務を果たすことか困難に思われる。われわれは、前方には滅び、後方には束縛や死が迫っているように考える。それにもかかわらず神のみ声は明らかに「前進せよ」と語っている。われわれの目が、暗黒を貫いて見ることができなくても、また、冷たい波を足もとに感じても、われわれはこの命令に従わなくてはならない。われわれの前進を妨げる障害物は、ためらったり疑ったりしていては取り去られることはない。すべての不安のかげが消えうせ、失敗や敗北の危険が全くなくなるまで服従をのばす者は、絶対に服従することはない。「障害物が取り除かれて、われわれの道が明らかに見えるようになるまで待とう」と不信はささやく。しかし、信仰はすべてを望み、すべてを信じておおしく前進することを勧める。 PP 146.2

エジプト人にとって、暗黒の壁であった雲は、ヘブル人には全陣営を照らし、彼らの行く手に光を投げかける大いなる照明の光であった。そのように摂理のうちになされることは、信じない者には暗黒と絶望をもたらすが、信じ、よりたのむ魂には輝く光明

であり、平和である。神がお導きになる道は、荒野や海を通っているかも知れないが、安全な道なのである。 PP 146.3

第 26 章　紅海からシナイへ

本章は、出エジプト記 15：22～27、16～18 章に基づく PP 146.4

イスラエルの全会衆は、雲の柱に導かれて、紅海からふたたび旅に出た。彼らの周囲の光景は非常にものさびしく、樹木のない荒れ果てたながめの山々と不毛の平原で、敵の死体を海岸に横たえた紅海が、はるか向こうにひろがっていた。それでも彼らは、自由を得た喜びに満たされ、不満の思いは全く消えうせた。 PP 146.5

しかし 3 日間旅を続けたが、水を見つけることができなかった。持参した水のたくわえは使い果たしてしまった。太陽の照りつける平原を、疲れた足を引きずって歩く彼らの焼けつくのどのかわきを癒すものはなにもなかった。モーセは、この地域をよく知っていたので、ほかの人たちの知らないこと、すなわち、メラが 1 番近い水の泉のあるところであるが、その水は飲めない水であるということを知っていた。彼は、はなはだしく気をもみながら、彼らを導く雲を見守った。水だ、水だという喜びの叫び声が一同に伝わるのを、彼は沈む思いで聞いた。男も女も子供たちも、喜んで水の泉にかけ寄ったのであるが、人々の間から苦悩の叫び声が起こった。水は苦かったのである。 PP 146.6

腹立たしさと絶望のうちに、彼らは、あの不思議な雲のなかに神が臨在して、彼らばかりでなくモーセを導いてこられたことを忘れて、モーセが自分たちをこんな道に導いてきたといって責めたてた。モーセは、 彼らの苦しみを気のどくに思い、彼らが忘れていたことをした。彼は熱心に神の助けを叫び求めたのである。「主は彼に 1 本の木を示されたので、それを水に投げ入れると、水は甘くなった」（出エジプト 15：25）。ここで、モーセを通して、イスラエルに次のような約束が与えられた。「あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を 1 つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである」（同 15：26）。 PP 146.7

メラから、人々はエリムへ行ったが、そこには、「水の泉 12 と、なつめやしの木 70 本」があった（同 15：27）。ここに彼らは数日とどまってから、シンの荒野へ入って行った。エジプトを出てから 1 か月たって彼らははじめて荒野に宿営した。食料のたくわえは乏しくなりかけていた。荒野には食用の草が乏しく、家畜は減りはじめていた。この大群衆にどのようにして食物を与えたらよいだろうか。またもや、彼らは疑いをいだいてつぶやいた。民のつかさたちや長老たちまで一緒になって、神から任命された指導者たちにむかって、つぶやいて言った。「われわれはエジプトの地で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に、主の手にかかって死んでいたら良かった。あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている」（同 16：3）。 PP 147.1

彼らはまだ飢えてはいなかった。そのときの必要は満たされていたのであるが、彼らは将来を恐れたのである。この大群衆が、荒野の旅をどのようにして生きていくのか、彼らはわかっていなかった。彼らは子供たちが飢え死にする光景を想像した。主は、これまで彼らを救ってくださったおかたに、人々の心をむけさせようとして、いろいろな困難を彼らに経験させ、食料の供給をとめられたのである。もし欠乏の中にあって神に呼び求めるなら、神は依然として、神の愛と守りについてはっきりした証拠をお与えになるのである。神の戒めに従うなら、病気になることはないと、神は約束されたのであるから、自分も子供たちも飢え死にするかも知れないと予想することは、彼らの罪深い不信であった。 PP 147.2

神は、彼らの神となって、彼らをご自分の民とし、彼らをもっと広く、もっとよい国へ導くと約束されたのに彼らは、その国へ行く途中、妨害に出あうたびにすぐ失望した。神は彼らを向上させて、高潔にし、彼らを地上の賞賛に値する国とするために、不思議な方法をもってエジプトの奴隷の境遇から救い出された。しかし、彼らは困難に出会い、欠乏に耐えることが必要であった。神は彼らを堕落の状態から引き出し、彼らが諸国民の中で尊敬される立場を占め、重要で神聖な責任を負わされるのにふさわしいものにしようとしておられた。もし彼らが、彼らのために神が行われたすべてのことを考えて神を信じていたら、彼らは、喜んで不便と欠乏と、実際の苦難にも耐えたのである。

しかし、彼らは神の力の証拠を常に目で見ることができないかぎり、神に信頼しようとしなかった。彼らはエジプトでの苦しい仕事を忘れた。奴隷の境遇から救済されたときに彼らのために神の恵みと力があらわされたことを彼らは忘れた。死の天使がエジプトの長子を全部殺したときに、イスラエルの子らは生かされたことを彼らは忘れた。彼らが開かれた道を安全に渡ったときに、追跡してきた敵の軍勢が海の水にのまれて滅びたことを、彼らは忘れた。彼らは、目前の不便と試練だけを目にとめてそれを感じた。そして、「神はわれわれのために大いなることをしてくださった。われわれは奴隷であったのに、神はわれわれを大いなる国民にしてくださるのだ」と言わないで、彼らは、途中の困難について語り、このたいくつな放浪はいつ終わるのだろうと思った。 PP 147.3

イスラエルの荒野生活の歴史は、世の終わりの神のイスラエル人の益のために記録された。荒野の放浪者たちがあちらこちらへさまよって、飢え、かわき、疲れた時に、彼らの救済のために神の力がいちじるしくあらわれたことなどの神の行為の記録は、すべて各時代の神の民に対する警告と教えに満ちている。ヘブル人のいろいろな経験は、彼らがカナンの約束 の地へ入るための準備の学校であった。神は、今日の神の民が、古代イスラエル人の経験した試練を、へりくだった心と教えを受ける精神をもってふりかえり、天のカナンにはいる準備に役立てるように望んでおられる。 PP 147.4

イスラエル人の経験をふりかえってみて、彼らの不信とつぶやきに驚き、自分たちであったら、あんなに忘恩的にはならなかっただろうと思う人たちが多い。しかし、彼らの信仰がちょっとした試みによってためされてさえ、彼らは古代イスラエルと同じように信仰も忍耐も発揮しないのである。苦境に陥ると、彼らは神が彼らを清めるために選ばれた道についてつぶやく。現在の必要は満たされているのに、多くの者は将来のことを神に信頼しようとしないで、貧乏になりはしないか、子供たちが苦しみはしないかと絶えず心配する。ある人たちは、いつも悪いことを予想したり、実際に困難なことがあると、それを大げさに考えたりするので、彼らの目は、感謝しなければならない多くの恵みに対して盲目になっている。彼らは、困難に出会うときに、唯一の力の源であら

れる神に助けを求めようとしないで、不安とつぶやきの心を起こし、かえって神から離れてしまうのである。 PP 148.1

われわれは、このように不信であってよいだろうか。どうして感謝しなかったり、信頼しなかったりしてよいだろうか。イエスはわれわれの友である。全天はわれわれの幸福に関心を持っている。われわれの心配と恐れは神の聖霊を悲しませる。いらだたせ、疲れさせるだけで、試みに耐える助けとならない心配をしてはならない。われわれの幸福が地上の事物にあるかのように、将来の必要に対する備えを人生の主要事として、神への不信をいだいてはならない。神の民が、心配事にうちひしがれることは、みこころではない。しかし主は、われわれの道になんの危険もないとは言われない。神はご自分の民を罪と悪のこの世から連れ出そうとは言われず、われわれに確実な避け所をさし示される。主は、重荷を負って疲れている者に、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と招いておられる（マタイ 11：28）。自分自身のくびにかけた心配とこの世の苦労というくびきをはずしなさい。そして、「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」（同 11：29）。心配事をすべて神にまかせて、神のうちに休みと平安をみいだすことができるのである。「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」（Ｉペテロ 5：7）。 PP 148.2

「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」と使徒パウロは言っている（ヘブル 3：12）。神がわれわれのために行われたすべてのことを考えて、われわれの信仰を、強く、積極的で、持久力のあるものとしなければならない。つぶやき、不平を言うのでなく、われわれの心のことばは、「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ」でなければならない（詩篇 103:1、2）。 PP 148.3

神は、イスラエルの必要を心にとめておられないのではなかった。神は彼らの指導者に、「わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう」と言われた（出エジ

プト 16：4）。そして、毎日与えられるものを集め、6 日目は、安息日を清く守ることができるように 2 倍の分量を集めるようにとの命令が与えられた。 PP 148.4

モーセは会衆に、彼らの必要が満たされることを保証して、「主は夕暮にはあなたがたに肉を与えて食べさせ、朝にはパンを与えて飽き足らせられるであろう」と言った。彼はさらに、「いったいわれわれは何者なのか。あなたがたのつぶやくのは、われわれにむかってでなく、主にむかってである」とつけ加え、アロンに命じて、「あなたがたは主の前に近づきなさい。主があなたがたのつぶやきを聞かれたからである」と人々に言わせた。アロンが語っているとき、「彼らが荒野の方を望むと、見よ、主の栄光が雲のうちに現れていた」（同 16：8、9、10）。彼らが これまでに 1 度も見たことのない輝きは、神のご臨在を象徴していた。感覚に訴える啓示を通して、彼らは神についての知識を得るのであった。彼らが神のみ名をおそれ、神のみ声に従うように、人間モーセではなく、至高者であられる神が、彼らの指導者であられることを彼らに教えねばならなかった。 PP 148.5

夕暮れになると、宿営はうずらの大群におおわれ、全会衆に十分ゆきわたった。朝になると、地面に、「薄いうろこのようなものがあり、ちょうど地に結ぶ薄い霜のようであった」「それはコエンドロの実のようで白」かった。人々はそれをマナと呼んだ。モーセは、「これは主があなたがたの食物として賜わるパンである」と言った（同 16：14、31、15）。人々はマナを集めたが、全部の人たちに十分供給するだけあった。人々は、「ひきうすでひき、または、うすでつき、かまで煮て、これをもちとした」「その味は蜜を入れたせんべいのようであった」（民数記 11：8、出エジプト 16：31）。彼らは毎日、1 人 1 オメル集めるように命じられたが、それを朝まで残しておいてはならなかった。なかには翌日までとっておこうとした者があったが、翌朝になると食べられなくなっていた。その日の分は、朝集めなければならなかった。地面に残っていたものは全部、太陽にとけたからである。 PP 149.1

マナを集めるとき、きまった分量よりも多く集める者もあれば、少なく集める者もあった。「オメルでそれを計ってみると、多く集めた者にも余らず、少なく集めた者にも不足しなかった」（出エジプト 16：18）。この聖句についての説明と、それからの

実際的な教訓について、使徒パウロはコリント人への第 2 の手紙にこう書いている。「それは、ほかの人々に楽をさせて、あなたがたに苦労をさせようとするのではなく、持ち物を等しくするためである。すなわち、今の場合は、あなたがたの余裕があの人たちの欠乏を補い、後には、彼らの余裕があなたがたの欠乏を補い、こうして等しくなるようにするのである。それは『多く得た者も余ることがなく、少ししか得なかった者も足りないことはなかった』と書いてあるとおりである」（Ⅱコリント 8：13～15）。 PP 149.2

6 日目には、人々はおのおの 2 オメル集めた。司たちは急いでやってきて、そのことをモーセに知らせた。するとモーセはこう答えた、「主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残ったものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と」（出エジプト 16：23）。彼らはそのとおりにしたが、それは変化していなかった。そこでモーセは言った。「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日であるから、きょうは野でそれを獲られないであろう。6 日の間はそれを集めなければならない。7 日目は安息日であるから、その日には無いであろう」（同 16：25、26）。 PP 149.3

神はご自分のきよい日を、イスラエルの時代と同じように、いまもなお、きよく守るように要求しておられる。クリスチャンは、みな、ヘブル人に与えられた命令を、主から自分たちに与えられた命令とみなさねばならない。安息日の前の日は、きよい時間のためにすべてのことを準備するための備え日としなければならない。どんなことがあっても、自分自身の用事のために、きよい時間にくいこむようなことがあってはならない。神は、病人や苦しんでいる人の世話をするように命じられた。彼らを安楽にするために必要な働きは、慈善の働きであって、安息日を犯すことにはならない。しかし、不必要な仕事は全部避けねばならない。備え日にすませられる小さなことを、不注意のために安息日のはじまるまで延ばす人が多い。そのようなことがあってはならない。安息日のはじめまでしないでおいた仕事は、安息日が過ぎるまでそのままにしておくべきである。こうすることによって思慮の足りない人々は、そのことをよく記憶していて、今後は注意深く 6 日の間に自分自身のことをするようになる。 PP 149.4

イスラエル人は、荒野での長い間の滞在中に、毎週三重の奇跡を目に見たが、それは彼らの心に安息日の神聖さを印象づけるためのものであった。すなわち、6 日目には 2 倍の分量のマナがふり、7 日目には全然ふらなかった。そして、ほかのときには翌日までとっておいたものは食べられなくなっていたが、安 息日に必要な分は新鮮なまま保存がきいたのであった。 PP 149.5

マナが与えられたときの事情をよく考えてみると、安息日は、律法がシナイで与えられたときに創設されたと多くの人が主張しているが、そうではないという決定的な証拠が見られる。イスラエル人は、シナイに到着する前に、安息日を守らなければならないことを知っていた。安息日には全然降らなかったので、その準備として金曜日ごとに 2 倍の分量のマナを集めなければならなかったことによって、安息日が清いものであることが絶えず心に印象づけられた。安息、日にマナを集めに出る人々がいると、神は、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか」と言われた（同 16：28）。 PP 150.1

「イスラエルの人々は人の住む地に着くまで 40 年の間マナを食べた。すなわち、彼らはカナンの地の境に至るまでマナを食べた」（同 16：35）。40 年の間、彼らはこの奇跡的な供給によって、神の絶えることのない守護とやさしい愛を毎日自覚させられた。詩篇記者のことばに、神は「天の穀物を彼らに与えられた。人は天使のパンを食べた」と言われている（詩篇 78：24、25）。天使のパンとは、天使たちによって彼らに与えられた食物ということである。「天の穀物」によって養われた彼らは、神の約束が与えられているならば、あたかもカナンの肥沃な平野の波打つ穀物畑にかこまれているかのように、欠乏することはないということを毎日教えられた。 PP 150.2

イスラエルを養うために天から降ってきたマナは、世に生命を与えるために、神のみもとからこられたおかたを象徴していた。イエスはこう言われた。「わたしは命のパンである。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」（ヨハネ 6：48～51）。来世において

神の民に与えられる祝福の約束の中に「勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう」と言われている（黙示録 2：17）。 PP 150.3

シンの荒野を去ったのちに、イスラエル人はレピデムに宿営した。ここには水がなかったので、彼らは、また神の摂理を疑った。人々は盲目的に、そして僭越にもモーセのところへやってきて、「わたしたちに飲む水をください」と要求した。しかし、モーセは忍耐しつづけた。「あなたがたはなぜわたしと争うのか、なぜ主を試みるのか」と彼は言った。彼らは怒って叫んだ。「あなたはなぜわたしたちをエジプトから導き出して、わたしたちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとするのですか」（出エジプト 17：2、3）。食物が豊富に供給されたときに、彼らは自分たちの不信とつぶやきを思い出して恥ずかしく思い、これからは主に信頼しますと約束した。しかし、彼らはすぐにその約束を忘れ、信仰の最初の試みに失敗した。彼らを導いてきた雲の柱は恐るべき秘密を隠しているように思えた。また、モーセはいったい何者なのだ、いったい彼はなんの目的でわれわれをエジプトから連れ出してきたのだと、彼らはたずねた。疑いと不信が彼らの心を満たした。彼らはモーセが彼らの所有物によって私腹をこやそうとして、彼らを欠乏と苦難にあわせて、自分たちと子供たちを殺そうとたくらんでいるのだと言って、大胆に彼を責めた。怒りと憤りのさわぎの中で、彼らはモーセを石で打とうとした。 PP 150.4

困ったモーセは、主にむかって、「わたしはこの民をどうすればよいのでしょう」と叫んだ。彼は、エジプトで奇跡を行ったつえをとり、イスラエルの長老たちを連れて、民の前に行くように命じられた。主は、モーセにこう言われた。「見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つであろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むことができる」（同 17：4、6）。モーセがそのようにすると、水が生きた水の流れとなってわき出て、宿営に豊富に供給することができた。神は、モーセにそのつえをふり上げて、エジプトの災いのように、何か恐ろしい災いを、このようなつぶやきを扇動した人々の上に下 すようにとお命じにならないで、大きな憐れみをもって、このつえを彼らの救いをもたらす道具とされたのであった。 PP 150.5

「神は荒野で岩を裂き、淵から飲むように豊かに彼らに飲ませ、また岩から流れを引いて、川のように水を流れさせられた」（詩篇 78：15、16）。モーセは岩を打ったが、モーセのかたわらに立って、いのちの水を流れさせたのは、雲の柱におおわれていた神のみ子であった。モーセと長老たちばかりでなく、離れて立っていた会衆のすべてが主の栄光を見た。しかし、もし雲がとり除かれたら、彼らはその中にとどまっておられるお方の恐るべき輝きで殺されたであろう。 PP 151.1

人々は、のどのかわきのあまり、神を試みて、「主はわたしたちのうちにおられるかどうか」（出エジプト 17：7）――「もし神がわたしたちをここにつれてこられたのだったら、なぜパンと同じように水をお与えにならないのか」と言った。このような不信の表明は罪悪であって、モーセは神の刑罰が彼らの上にくだることを恐れた。そこで彼はその場所の名をマッサ（試み）、また、メリバ（小言）と呼んで、彼らの罪の記念とした。 PP 151.2

新たな危険がいまや彼らを脅かした。主は、彼らが神に向かってつぶやいたために、彼らが敵の攻撃にさらされるのをおゆるしになった。その地方に住んでいた野蛮で好戦的な部族アマレク人が、彼らに手むかい、疲れ果ててしんがりになっていた人々を襲った。モーセは、民の大多数に戦いの準備がないことを知っていたので、ヨシュアに、各部族から一団の兵士たちを選抜し、翌朝敵にむかって進撃するように命じた。一方、モーセは、手に神のつえを持って近くの高台に立つことになった。そこで次の日、ヨシュアとその一団は敵を攻撃し、一方モーセとアロンとホルは、戦場を見おろす丘の上に場所を占めた。モーセは、右手に神のつえを持って、両手を天にさし出し、イスラエル軍の成功を祈った。戦闘が進むにつれて、モーセの両手が上のほうへさし上げられている間はイスラエルが勝ったが、彼の手が下がると敵が勝つことがわかった。モーセは疲れたので、アロンとホルが太陽の沈むころまでその手をささえて、敵を敗走させた。 PP 151.3

アロンとホルは、モーセの手をささえて、モーセが、神から人々に語る言葉を受けている間に、人々は彼の困難な働きをささえなければならないことを彼らに示していた。モーセの行為もまた意味深いもので、神が人々の運命をそのみ手ににぎっておられるこ

とを示した。すなわち、人々が神に信頼するときに、神は彼らのために戦って敵を征服されるが、人々が神にたよらないで自分自身の力にたよるときに、彼らは、神を知らない人たちよりも弱くなり、敵は彼らを打ち負かすのであった。 PP 151.4

モーセが、手を天に向かってさしのべ、民のためにとりなしているときにヘブル人が勝利したように、神のイスラエルは、信仰によって、偉大なる助け手の力にたよるときに勝利するのである。しかし、神の力は人間の力と結合しなければならない。モーセは、イスラエルが活動しなければ、神は、敵を打ち負かしてくださらないと思った。大指導者モーセが主に訴えている間、ヨシュアとその勇敢な部下たちは、イスラエルと神の敵を撃退するために全力を尽くしていた。 PP 151.5

アマレク人が敗北したあとで、神はモーセに、「これを書物にしるして記念とし、それをヨシュアの耳に入れなさい。わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消し去るであろう」と言われた（同 17：14）。大指導者モーセは、死の直前に、人々に厳粛な命令を伝えた。「あなたがエジプトから出てきた時、道でアマレクびとがあなたにしたことを記憶しなければならない。すなわち彼らは道であなたに出会い、あなたがうみ疲れている時、うしろについてきていたすべての弱っている者を攻め撃った。このように彼らは神を恐れなかった。……あなたはアマレクの名を天の下から消し去らなければならない。この事を忘れてはならない」（申命記 25：17～19）。この邪悪なアマレク人について、主は、「アマレクの手は主のみ座に敵対する」と宣言された（出エジプト 17：16、英語訳）。 PP 151.6

アマレク人は、神のご品性や主権について無知ではなかった。しかし、彼らは、神をかしこみおそれようとしないで、神の力に公然と反抗した。アマレク人は、モーセがエジプト人の前で行った不思議なわざを嘲笑し、周囲の国民の恐怖をあざけった。彼らは、ヘブル人を 1 人も残さず滅ぼすことを彼らの神々にかけて誓い、イスラエルの神は無力で自分たちに抵抗できないといばった。彼らは、イスラエル人から害を受けたこともなければ、脅かされたこともなかった。彼らの攻撃は全然挑発されたものではなかった。アマレク人がイスラエル人を滅ぼそうとしたのは、イスラエルの神に対する憎しみと反抗を示すためであった。アマレク人は、長年の間横暴な罪人で、彼らの罪悪はそ

の報復が行われることを神に叫び求めていたが、神の憐れみは依然として彼らの悔い改めをうながしていた。しかし、アマレク人の男たちが、疲労して全く防備のないイスラエルの隊列を襲ったとき、彼らは自分たちの国民の運命を決定した。神の守護は、神の子らの最も弱い者たちの上にあった。天の神は、彼らに対するどんな残虐な行為も圧迫も見のがされない。神を愛し、おそれるすべての者たちの上に、神のみ手は盾としてさし出される。人間はそのみ手を撃たないように気をつけるがよい。なぜなら、そのみ手は正義の剣をふるうからである。 PP 152.1

イスラエル人が、そのとき宿営していた場所からあまり遠くないところに、モーセの義父エテロの家があった。エテロはヘブル人の救済について聞いていたので、このとき彼らを訪問して、モーセにその妻とふたりの子供を返してやろうとして出かけて行った。大指導者モーセは彼らの到着を使者たちから知らされると、喜んで出迎え、まず対面のあいさつをすませて、彼らを自分の天幕へ案内した。モーセは、イスラエル人をエジプトから導き出す危険な仕事をする間、自分の家族を送り返していたのであったが、今、彼は、再び家族と会って安心し、喜ぶことができた。彼はエテロに、イスラエルに対する神の不思議な導きについて語った。エテロは喜んで、主を祝福し、モーセや長老たちと共に犠牲を捧げ、神の憐れみを記念して厳粛な祝宴を開いた。 PP 152.2

エテロは、宿営に滞在していたとき、モーセに負わされている重荷が重いことをすぐにさとった。無知で、訓練されていない大群衆の中に、秩序と規律を保つことは実にたいへんな仕事であった。モーセは、人々の指導者また行政官として認められていて、人々の全般的な利害問題と義務のことだけでなく、人々の間に生ずる論争まで彼のところへ持ち込まれていた。モーセはそれを許していた。というのは、そのことによって、彼が、「神の定めと判決を知らせるのです」と言ったように、彼らに教える機会が与えられたからである。しかし、エテロはこれに抗議して言った。「このことはあなたに重過ぎるから、ひとりですることができない」「あなたも……必ず疲れ果てるであろう」（同 18：16、18）。そこでエテロは、適当な人々を、1000 人の長、100 人の長、50 人の長、10 人の長として任命するように助言した。それらの人々は、「有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人」でなければならなかった（同 18：21）。これら

の人々が小さな事件を全部さばき、一方、最もむずかしい重大事件はやはりモーセのところに持ち込まれることになった。エテロはモーセに、「あなたは民のために神の前にいて、事件を神に述べなさい。あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩むべき道と、なすべき事を彼らに知らせなさい」と言った（同 18：19、20）。勧告は受け入れられた。それはモーセの眉の重荷を軽くしたばかりでなく、その結果、人々の間にもっと完全な秩序が確立された。 PP 152.3

主は、モーセに大きな栄誉を与え、彼の手によって不思議なわざを行われた。しかしモーセは、自分は人々を教えるために選ばれたのだから、自分自身は人から教えを受ける必要はないとは考えなかった。イスラエルの選ばれた指導者である彼は、ミデアンの敬虔な祭司の助言を喜んで聞き、その計画を賢明な措置として採用した。 PP 152.4

人々は、レピデムから雲の柱の動きに従って、旅を続けた。彼らは、不毛の平原を横切り、けわしい坂を越え、岩に囲まれた狭い道を通って行った。砂漠 を横断していると、しばしば前方に、けわしい山々がが巨大なとりでのように、彼らの道の真向こうにそびえ立ち、これ以上前進することができないように見えた。しかし、近づいてみると、山腹のあちらこちらに通路が開けて、その向こうにまた平原が見えるのであった。こうした奥深いじゃりの山道を通りぬけて、彼らは導かれて行った。それは荘厳で印象的な光景であった。両側に何百フィートもそびえ立つ断崖の間を、家畜を連れたイスラエルの大群が、目のとどくかぎり生きたうしおのように流れて行った。すると、彼らの眼前に、荘厳なシナイ山がその威容を現した。雲の柱がその頂上にとどまったので、人々は、その下の平原に天幕を張った。ここが 1 年近くの間彼らの居住地になるのであった。夜になると、火の柱が彼らに神の守護を保証し、彼らが眠りについている間に天のパンが静かに宿営の上に降った。 PP 152.5

夜明けが山の暗い尾根を金色に染め、太陽の金色の光線が深い谷間にさし込むと、これらの疲れ果てた旅人たちには、それが神のみ座からのあわれみの光のように見えた。四方の広大な、けわしい山は、その孤独な雄大さの中にあって、永遠の存在と威厳を語っているように思えた。ここで、心は厳粛と畏敬の念に打たれた。人々は「てんびんをもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはか」られたお方の

前にあって、自己の無知と弱さを思わせられた（イザヤ 40：12）。ここでイスラエル人は、かつて神が人類に示された最もすばらしい啓示を受けるのであった。ここに主はご自分の民を集めて、その聖なる律法をご自身の声で宣言することによって、ご自分の戒めの神聖さを彼らに印象づけられるのであった。彼らは、堕落した奴隷生活を送り、偶像礼拝と長い間接触していたために、その影響を習慣と品性に刻まれていたので、徹底的な大改革が彼らのうちに行われることになった。神は、ご自身を彼らに知らせることによって、彼らをもっと高い道徳的水準に引き上げるために働いておられた。 PP 153.1

第 27 章　十戒

本章は、出エジプト記 19～24 章に基づく PP 153.2

シナイに宿営するとまもなく、モーセは神に会うために山へ召された。彼はただ 1 人でけわしい道を登って行って、主の臨在の場所を示す雲に近づいた。イスラエルは、いま神との親密な、特殊な関係に入れられるのであった。すなわち、彼らは、神の統治下にある 1 つの教会、1 つの国民として統合されるのであった。民のために、モーセに次のような言葉が与えられた。 PP 153.3

「あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」（出エジプト 19：4～6）。 PP 153.4

モーセは宿営にもどって、イスラエルの長老たちを呼び集め、神の言葉を彼らにくりかえした。彼らは、「われわれは主が言われたことを、みな行います」と答えた（同 19：8）。こうして彼らは、神と厳粛な契約を結び、神を彼らの統治者として受け入れることを誓い、これによって、彼らは特別な意味で、神の権威の下にある民となった。 PP 153.5

再びモーセは山に登った。主は彼に、「見よ、わたしは濃い雲のうちにあって、あなたに臨むであろう。それはわたしがあなたと語るのを民に聞かせて、彼らに長くあなたを信じさせるためである」と言われた（同 19：9）。人々は、道中で困難に出会ったとき、モーセとアロンにむかってつぶやき、イスラエルの群れを滅ぼすためにエジプトから連れ出したのだと言って彼らを責めた。主は、彼らがモーセの教えに信頼するようになるために、彼らの前でモーセに栄誉を 与えようと望まれた。 PP 153.6

神は、ご自分の律法を語られる時を、その重大性に応じて、荘厳な光景にしようともくろまれた。民は、神への奉仕に関連した 1 つ 1 つを最高の尊敬をもって見なけれ

ばならないことを印象づけられるのであった。主はモーセに、「あなたは民のところに行って、きょうとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わせ、3 日目までに備えさせなさい。3 日目に主が、すべての民の目の前で、シナイ山に下るからである」と言われた（同 19：10、11）。それまでの数日の間に、すべての者が神の前に出るための厳粛な準備に時間を費やすのであった。彼らの体と衣服は、汚れから清められねばならなかった。そして、モーセが彼らの罪を指摘するときに、彼らは心が不義から清められるように、へりくだって、断食と祈りに専念するのであった。 PP 154.1

命令されたとおりに準備がなされると、次の命令に従って、モーセは、人も動物も聖域に侵入することがないように、山の周囲に境界を設けるように指示した。もしだれでもあえてその境界に触れるようなことがあれば、たちどころに死の刑罰が下るのであった。 PP 154.2

3 日目の朝、民のすべての目が山の方へ向けられると、その頂上は濃い雲でおおわれ、それがますます濃く暗くなって下のほうへくだり、ついに全山が暗黒と恐るべき神秘につつまれた。そのとき、ラッパの音が聞こえて民を神との会合に呼び集めたので、モーセは彼らを山のふもとへ導いた。濃い暗黒の中からあざやかないなずまがひらめき、雷鳴が周囲の山々に反響をくりかえした。「シナイ山は全山煙った。主が火のなかにあって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた」（同 19：18）。集まった群衆に、「主の栄光は山の頂で、燃える火のように」見えた。そして、「ラッパの音が、いよいよ高くなった」（同 24：17、19：19）。エホバのご臨在のしるしは恐るべきものであったので、イスラエルの群衆は恐ろしさにふるえ、主の前にひれ伏した。モーセさえ、「わたしは恐ろしさのあまり、おののいている」と言った（ヘブル 12：21）。 PP 154.3

するとかみなりはやみ、ラッパの音も聞こえず、大地は静かになった。厳粛な沈黙の瞬間があった。そのとき神のみ声が聞こえた。つき従った天使たちに囲まれて、山の上に立たれた主は、ご自身をおおっている濃い暗黒の中から語って、ご自分の律法をお知らせになった。モーセは、その光景を描写してこう言っている。 PP 154.4

「主はシナイからこられ、 PP 154.5

セイルからわれわれにむかってのぼられ、 PP 154.6

パランの山から光を放たれ、 PP 154.7

ちよろずの聖者の中からこられた。 PP 154.8

その右の手には燃える火があった。 PP 154.9

まことに主はその民を愛される。 PP 154.10

すべて主に聖別されたものは、み手のうちにある。 PP 154.11

彼らはあなたの足もとに座して、 PP 154.12

教をうける」 PP 154.13

（申命記 33：2、3） PP 154.14

主は、おそるべき威厳を備えた司法者、立法者としてばかりでなく、憐れみ深い民の守護者として、ご自身をあらわされた。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」（出エジプト 20：2）。イスラエル人がすでに自分たちの案内者であり、救済者であると知ったおかた、彼らをエジプトから連れ出して、海の中に道をつけ、パロとその軍勢を全滅させられたお方、エジプトのどんな神々よりもまさったお方であることを示されたお方――そのお方が、今、ご自分の律法を語られたのである。 PP 154.15

律法は、このとき、ヘブル人だけのために語られたのではなかった。神は彼らに栄誉を与えて、ご自分の律法の守護者また遵守者とされたが、それは全世界のための聖なる委託として保持すべきものであった。十戒は、全人類に適用されるのであって、すべての人の教えと統治のために与えられたのである。十戒は、短くて、簡潔で、権威があって、神と人とに対す る人間の義務を網羅し、その全部は愛という根本的な大原則に基づいている。「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』」（ルカ 10：27、申命記 6：4、5、レビ 19：8 参照）。十戒の中には、この原則が詳しく定められ、人間の状態と環境に適合されている。 PP 154.16

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」（出エジプト 20：3）。 PP 155.1

永遠に自存し、創造されたお方でなく、自らすべてのものの根源であって維持者であられる主だけが、最高の尊敬と礼拝をお受けになる資格がある。人間は、主以外のなにものをも第一に愛して奉仕することを禁じられている。神に対するわれわれの愛を減少させたり、神に捧げるべき奉仕をさまたげるようなものを心にいだくときに、われわれはそれを自分の神としているのである。 PP 155.2

「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」（同 20：4、5）。 PP 155.3

第 2 条は、像や類似した形のものによって真の神を礼拝することを禁じている。多くの異教国民は、自分たちの像は神を礼拝するための象徴にすぎないと主張した。しかし、神はこのような礼拝は罪であると宣言された。物体をもって永遠のお方を象徴しようと試みるときに、神に関する人間の観念は低下するのである。人の心は主の無限の完全さから離れるときに、創造主よりも被造物のほうへひかれるのである。そして神についての観念が低下するにつれて、人間は堕落するのである。 PP 155.4

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」（同 20：5）。人と神との密接で聖なる関係が、結婚の象徴によってあらわされている。偶像礼拝は霊的姦淫であるから、これに対する神の不快がねたみと呼ばれていることはふさわしい。 PP 155.5

「わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし」（同 20：5）。子供たちが親の悪行の影響を受けることは避けられないが、その罪にあずからないかぎり、親の不義のために罰せられることはない。しかし、子供はたいてい親の歩いた道を歩くものである。遺伝と手本によって、むすこたちは父親の罪にあずかる者となる。肉体的病気と退化ばかりでなく、悪い傾向、ゆがめられた食欲、堕落した品行が、父から子へ、また、三代四代と受けつがれる。この恐るべき事実は、人間が罪の道に歩くのを抑制する厳粛な力とならねばならない。 PP 155.6

「わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう」（同 20：6）。第 2 条の偽りの神々を礼拝することを禁止することの中には、真

の神を礼拝するようにとの命令が暗に含まれている。神を憎む者に対して怒りが三、四代に及ぶと予告されているのに対して、神への奉仕に忠実な者に対しては、千代まで憐れみが約束されている。 PP 155.7

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう」（同 20：7）。 PP 155.8

この戒めは、偽証や日常ののののしりの言葉を禁じているばかりでなく、そのおそるべき意味も考えないで、神のみ名を軽々しく、あるいは不注意に使うことを禁じている。日常の会話において、神について無思慮に発言することや、ささいなことを神に訴えることや、神のみ名を、幾度も無思慮にくりかえすことなどは、神のみ栄えを汚すことになる。「そのみ名は聖にして、おそれおおい」（詩篇 111：9）。神のとうといご品性についての観念が心に印象づけられるように、だれもが、神の尊厳と純潔と神聖さとを瞑想すべきである。そして、彼の清いみ名は、うやうやしく厳粛に言わなければならない。 PP 155.9

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。6 日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。7 日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は 6 日のうちに、天と地と海と、その中の すべてのものを造って、7 日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」（出エジプト 20：8～11）。 PP 155.10

安息日は、新しい制度として取り入れられたものではなく、創造のときに制定されたものである。それは創造主のみわざの記念としておぼえられ、守られるのである。安息日は、神を天地の創造者としてさし示すことによって、真の神とすべての偽りの神とを区別している。7 日目を守る者はだれでも、その行為によって、彼らが主の礼拝者であることを表示するのである。このように、安息日は、この地上において神に仕える者があるかぎり、神に対する人間の忠誠のしるしである。第 4 条は、十戒の中で、立法者の名と称号が 2 つともしるされている唯一の戒めである。それは律法がだれの権威

によって授けられたかを示している唯一の戒めである。このように第 4 条は、律法の確実性と拘束力の証拠として、それに押された神の印を含んでいる。 PP 156.1

神は、人間に、働くために 6 日間をお与えになり、彼ら自身の働きがその 6 日の働き日になされるように要求される。病人や苦しんでいる者はいつでも世話しなければならないので、必要とあわれみの行為は安息日にもゆるされるが、不必要な働きは厳格にこれを避けなければならない。「安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息、日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日ととなえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず」（イザヤ 58：13）。禁止はこれだけではない。「むなしい言葉を語らない」と、預言者イザヤは言っている。安息日に、商売の話をしたり、商売の計画をたてたりする者は、神から実際に商売の取引に従事したのと同じにみなされる。安息日をきよく守るためには、世俗的なことがらを心に思いめぐらすことさえしてはならない。この戒めには、われわれの門のうちにいるすべてのものが含まれている。家の中の同居人は、この清い時間の間、世俗的な用事をやめるのである。この清い日には、みんなが 1 つになって、心からの奉仕によって、神をあがめねばならない。 PP 156.2

「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」（出エジプト 20：12）。 PP 156.3

親は、ほかのだれも受けることのできない愛情と尊敬を受ける資格がある。神は、お与えになった子供たちの責任を親に負わせられた。そして、子供たちが幼いころは、親が子供たちに対して、神の立場に立つことを神ご自身が定められた。親の正当な権威を拒む者は、神の権威を拒んでいる。第 5 条は、子供たちが親を尊敬し、親に従順に従うことを要求しているだけでなく、親を愛し、いたわり、重荷を軽くし、その評判をまもり、老齢の彼らを助け、慰めることを要求している。それは、また、牧師、統治者、その他神が権威をおゆだねになったすべての人を尊敬するように命じている。 PP 156.4

「これが第 1 の戒めであって、次の約束がそれについている」と、使徒パウロは言っている（エペソ 6：2）。まもなくカナンにはいることを予期していたイスラエルに

とって、これは、従順な者にとって、その美しい国で長く生活する保証であった。しかしこれにはもっと広い意味と、神のすべてのイスラエルが含まれていて、地が罪ののろいから解放されたときの永遠の生活が約束されているのである。 PP 156.5

「あなたは殺してはならない」（出エジプト 20：13）。 PP 156.6

命を縮めるすべての不正行為、憎しみと復讐の精神、また、他を傷つける行為を行わせたり、他が傷つくことを望んだりさせる悪感情を心にいだくこと（なぜなら、すべて兄弟を憎む者は人殺しだからである）、利己的精神をいだいて、貧者や苦しむ者を顧みないこと、健康を害するすべての放縦、また、不必要な消耗、過労に陥ることは、程度の差こそあっても、すべて第 6 条の違反である。 PP 156.7

「あなたは姦淫してはならない」（同 20：14）。 PP 156.8

この戒めは、不純な行為だけでなく、好色的な思いや欲望、あるいは、そうしたものを刺激する行為を禁止している。外にあらわれた生活だけでなく、ひそかな意図や心の感情においても、純潔が要求される。 キリストは神の律法について深遠な義務をお教えになり、邪悪な思いや目つきは、不法な行為と全く同様に罪であると言われた。 PP 156.9

「あなたは盗んではならない」（同 20：15）。 PP 157.1

この禁止には、公私の罪が含まれている。第 8 条は、人間をさらったり、奴隷売買をしたりすることを有罪とし、征服のための戦争を禁じている。 PP 157.2

それは窃盗と強盗を有罪としている。それは日常生活のどんな小さなことがらにも厳密な正直さを要求している。それは商売における不正を禁じ、正当な借金や賃金の支払いを要求している。それは、他人の無知、弱点、不幸につけこんで私腹をこやす行為は、すべて天の書に詐欺として記録されることを宣言している。 PP 157.3

「あなたは隣人について、偽証してはならない」（同 20：16）。 PP 157.4

どんなことにおいても、偽りを言うこと、隣人を欺こうとするすべての試みや意図が、ここに含まれている。欺こうとする意図が虚偽となるのである。目つき、手の動き、顔の表情によって、ことばと同じように効果的にうそが語られるかもしれない。わざと誇張されたしゃべり方、まちがった印象あるいは誇張された印象を伝えるように計面さ

れた暗示やほのめかし、事実であっても誤解を招くような言い方などはすべて虚偽である。この戒めは、虚偽や悪意のある憶測や中傷、告げ口などによって隣人の評判を傷つける行為をすべて禁じている。事実を故意に隠して、その結果他人に害をおよぼすことは、第 9 条の違反である。 PP 157.5

「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」（同 20：17）。 PP 157.6

第 10 条は、あらゆる罪の根絶をはかるもので、罪の行為が生じる根源の利己的欲望を禁じている。神の律法に従って、他人の所有に対してよこしまな欲望をいだかないものは、同胞に対して悪い行為を犯すことはしないであろう。 PP 157.7

かみなりと炎の中で、驚くべき大立法者の権力と威厳のあらわれとともに語られた十戒の清い条文はこのようなものであった。神は、人々がその光景をいつまでも忘れることがないように、また、彼らが律法の創始者、すなわち、天地の創造主に対する深い尊敬心をいだくようになるために、律法の宣布に力と栄光のあらわれが伴うようにされた。神は、また、すべての人々に律法の神聖さ、重要性、永遠性を示そうとされた。 PP 157.8

イスラエルの人々は、恐怖に圧倒された。神のおことばの恐るべき力に、彼らのふるえる心は耐えられないように思われた。なぜなら、神の大いなる正義の法則が彼らの前に示されたとき、彼らは、聖なる神の御目にうつる罪の憎むべき性格と自分自身の不義を、これまでになかったほどにさとったからである。彼らは恐れおののいて、山から遠く離れて立った。群衆はモーセに叫んで言った。「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従います。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう」。指導者モーセは答えて言った。「恐れてはならない。神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前において、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まれたのである」。しかし、モーセは、「神のおられる濃い雲に近づいて行った」けれども、民は離れたところにとどまっていて、その光景を恐れて見守っていた（同 20：19～21）。 PP 157.9

人々の心は、奴隷生活と偶像礼拝によって盲目になり、堕落していたので、神の 10 の戒めの深遠な原則を十分に理解する備えができていなかった。人々が十戒の義務をもっと十分に理解し、励行するために、十戒の原則を例示し、適用するための、追加的な戒めが与えられた。これは、かぎりない知恵と公平によって作られ、司たちがこれに従ってさばきを行ったので、おきてと呼ばれた。これは十戒とちがって、モーセに個人的に授けられ、モーセはそれを人々に伝えた。 PP 157.10

この律法の最初の部分は召使に関するものであった。昔、犯罪人が裁判人によって奴隷として売られ ることがあった。ある場合には、債務者が債権者によって売られた。貧困のために、自分自身や子供たちを売ることさえあった。しかし、ヘブル人は一生の間奴隷として売られることはなかった。使役の期間は 6 か年と限られていた。7 年目に当人は自由の身となった。人をさらったり、故意に殺害したり、親の権威に反逆すると、死刑の罰を受けた。イスラエル人でない奴隷を保有することはゆるされたが、その生命と身体は厳重に保護された。奴隷の殺害者は処罰され、主人が奴隷に傷害を加えることは、たとえ 1 本の歯の損失であっても、その奴隷が自由の身になる権利を与えた。 PP 157.11

イスラエル人は、さきごろまで自分たちが奴隷だったので、召使を持てるようになったからといって、彼らは自分たちがエジプト人の監督たちの下で経験してきた、残虐と搾取の精神を持つことがないように気をつけねばならなかった。自分たち自身のにがい奴隷生活の記憶から、彼らは召使の立場になって考え、親切で憐れみ深く、自分がとり扱われたいと望むように他人をとり扱うことができるようにならねばならなかった。 PP 158.1

やもめと孤児の権利は特に保護され、彼らの無力な状態に対するやさしい考慮が命じられた。「もしあなたが彼らを悩まして、彼らがわたしにむかって叫ぶならば、わたしは必ずその叫びを聞くであろう。そしてわたしの怒りは燃えたち、つるぎをもってあなたがたを殺すであろう。あなたがたの妻は寡婦となり、あなたがたの子供たちは孤児となるであろう」と主は宣告された（同 22：23、24）。イスラエルに加わった外国人は、不正と圧制から保護されなければならなかった。「あなたは寄留の他国人をしえた

げてはならない。あなたがたはエジプトの国で寄留の他国人であったので、寄留の他国人の心を知っているからである」（同 23：9）。 PP 158.2

貧しい者から利息を取ることが禁示された。貧しい人の上着や毛布を質として取った場合には、日が暮れるまでに返さねばならなかった。盗みの罪を犯した者は倍にして返すことを要求された。司たちを尊敬するように命令され、裁判人は虚偽の申し立てに加担したり、わいろをとったりして、裁判を曲げることがないように警告された。中傷や悪口は禁止され、個人的な敵に対してさえ、親切な行為をするように命じられた。 PP 158.3

人々は再び安息日の聖なる義務を思い起こさせられた。年ごとの祭りが定められ、そのときには、国中の男子はすべて感謝のささげ物と収穫物の初穂をたずさえて主の前に集まるのであった。こうした規則の目的が明らかにされた。それは単なる専横的な主権の発動から出たものではなかった。すべてはイスラエルの益のために与えられたのであった。「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならない」。すなわち、聖なる神から認められるのにふさわしい者とならねばならないと、主は言われた（同 22：31）。 PP 158.4

これらの律法は、モーセによって記録されたもので、国家の法律の基礎として、大切に保存すべきものであった。そして、十戒とともに、それを説明するために与えられたこれらも、イスラエルに対する神の約束の成就の条件となるのであった。 PP 158.5

そこで、主から民に次の言葉が与えられた。「見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い、彼にそむいてはならない。わたしの名が彼のうちにあるゆえに、彼はあなたがたのとがをゆるさないであろう。しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語ることを行うならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだとするであろう」（同 23：20～22）。イスラエルの放浪の初めから終わりまで、キリストは、雲と火の柱の中にあって、彼らの指導者となられた。来たるべき救い主をさし示すいろいろな型がある一方では、現実に救い主がそこにおられて、人々のためにモーセに命令を与え、彼らの前に、唯一の祝福の道を示された。山から下

ると、「モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、『わた したちは主の仰せられた言葉を皆、行います』」（同 24：3）。モーセはこの誓いを、それに従うことを誓った主のみことばとともに、1 つの書に記録した。 PP 158.6

それから契約の批准が続いた。山のふもとに祭壇が築かれ、そのそばに、民が契約を受け入れた証拠として、「イスラエルの 12 部族に従って」12 の柱が建てられた（同 24：4）。それから、この務めのために選ばれた若者によって、犠牲が捧げられた。 PP 159.1

捧げ物の血を祭壇に注いでから、モーセは、「契約の書を取って、これを民に読み聞かせた」（同 24：7）。こうして、契約の条件が厳粛にくりかえされたが、だれでも、それに従うかどうかを選ぶことは自由であった。彼らはまず、神のみ声に従うことを約束したが、それから、神のおきてが宣言されるのを彼らは聞いた。この契約にどれだけのことが含まれているかを彼らがよく認めるように、その原則が詳細に述べられた。ふたたび人々は口をそろえて答えた。「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」（同 24：7）。「モーセが、律法に従ってすべての戒めを民全体に宣言したとき、……血を取って、契約書と民全体とにふりかけ、そして、『これは、神があなたがたに対して立てられた契約の血である』と言った」（ヘブル 9：19、20）。 PP 159.2

いまや、主を王とする選ばれた民の国家の建設の手続きが完全に整った。モーセはすでに次の命令を受けていた。「あなたはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの 70 人の長老たちと共に、主のもとにのぼってきなさい。そしてあなたがたは遠く離れて礼拝しなさい。ただモーセひとりが主に近づき、他の者は近づいてはならない」（出エジプト 24：1、2）。人々が山のふもとで礼拝していたときに、これらの選ばれた人々は山へ召された。70 人の長老たちがイスラエルを統治するのにモーセを助けることになり、神は彼らにみ霊をそそがれ、神の力と偉大さを彼らにお見せになった。「そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった」（同 24：10）。彼らは神を見たのではなく、

そのご臨在の栄光を見たのであった。これより以前には、彼らはこのような光景に耐えることができなかった。しかし、神の力のあらわれに、彼らは恐れ、悔い改めていた。彼らは、神の栄光、純潔、憐れみを瞑想し、ついに彼らの瞑想の主題である神にいっそう近づくことができた。 PP 159.3

モーセとその従者ヨシュアは、今神に会うために召された。彼らがしばらく不在になるので、モーセは、アロンとホルを任命して自分の代理とし、彼らを助ける長老たちも任命した。「こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は 6 日のあいだ、山をおおっていた」（同 24：15、16）。6 日の間、雲は、神の特別な臨在のしるしとして山をおおっていた。しかし、神ご自身のあらわれや神のみこころの伝達はなかった。この期間、モーセは、至高者であられる神の謁見室へ呼ばれるのを待っていた。彼は、「山に登り、わたしの所にきて、そこにいなさい」と命じられていた（同 24：12）。彼の忍耐と服従心がためされたけれども、彼は忍耐して待ち続け、自分の立場を離れなかった。この待っている期間が彼にとっては準備の時、自己吟味の時であった。神に愛されたこのしもべさえ、直ちに、神のご臨在に近づいて行って、その栄光のあらわれに耐えることはできなかった。創造主と直接に交わる備えができる前に、心をさぐり、瞑想と祈りによって、神に献身するのに 6 日間を用いなければならなかった。 PP 159.4

7 日目に、それは安息日であったが、モーセは雲の中へ召された。濃い雲が、全イスラエルの目の前で開け、主の栄光が燃える火のように輝き出た。「モーセは雲の中にはいって、山に登った。そしてモーセは 40 日 40 夜、山にいた」（同 24：18）。山における 40 日間の滞在には、準備の 6 日間は含まれていなかった。6 日の間、ヨシュアはモーセと共にいて、彼らは共にマナを食べ、「山から流れ下る谷川」から飲んだ（申命記 9：21）。 PP 159.5

しかし、ヨシュアはモーセと一緒に雲の中に入らなかった。彼は外に残って、モーセの帰りを待ってい る間、毎日食べ、かつ飲んでいた。しかし、モーセは、40 日の間ずっと断食した。 PP 159.6

モーセは、山にいた間に、神のご臨在が特別にあらわされる聖所の建築について指示を受けた。「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい」というのが神の命令であった。3 度、安息日の遵守が命令された。「これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。……わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。……すべてこの日に仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう」（出エジプト 25：8、31：17、13、14）。神への奉仕のために、幕屋をすぐに建てるようにとの命令が与えられたばかりであった。そしていま、彼らの念頭にある目的は神の栄光であり、また礼拝の場所が非常に必要であるために、彼らは、安息日に建築のために働いてもよいと考えるかもしれなかった。この誤りを犯さないようにするために、注意が与えられた。神のための特別な働きがどんなに神聖であり、急を要しても、神の清い安息日を破ってはならなかった。 PP 160.1

これから、人々は彼らの王であられるおかたに臨在していただくのであった。「わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう」。幕屋で「わたしはイスラエルの人々に会うであろう」というのがモーセに与えられた保証であった（同 29：45、43）。神の権威の象徴として、また神のみこころのあらわれとして、神ご自身の指で 2 枚の石の板に刻まれた十戒の写しがモーセに渡されたが、それは聖所に納められて、国民の礼拝の目に見える中心となるのであった（申命記 9：10、出エジプト 32：15、16 参照）。 PP 160.2

イスラエルは奴隷の境遇から、すべての民にまさって高められ、王の王であられるおかたの特別な宝とされた。神は、彼らに聖なる委託物をゆだねるために、彼らを世から引き離された。神は彼らを律法の保管者とし、彼らによって神ご自身の知識を人々の中に保とうと望まれた。こうして天の光は、暗黒につつまれている世を照らし、すべての民族に偶像礼拝から離れて、生きた神に仕えるようにと訴えられる声が聞かれなければならなかった。もし、イスラエル人が、彼らの委託に忠実であるなら、彼らはこの世で強力な国家となるのである。神は彼らを防衛し、彼らを他のどの国民よりも高められるのである。神の光と真理は、彼らを通してあらわされ、彼らは、あらゆる種類の偶像

礼拝にまさって、神の礼拝のすぐれていることのよい例として異彩をはなつのであった。 PP 160.3

第 28 章　シナイでの偶像礼拝

本章は、出エジプト記 32～34 章に基づく PP 160.4

モーセがいなくなった間、イスラエルの人々は、不安な気持ちにおそわれて彼の帰りを待ちわびていた。人々は、モーセがヨシュアと共に山に登り、下方からも見えていた密雲の中に入っていったことを知っていた。密雲は山の頂上をおおい、ときおり神の臨在の光がいなずまのようにひらめいていた。彼らは、彼の帰りを今か今かと待った。彼らは、エジプトにいた時に、物質によって神を代表することに慣れていたので、目に見えないお方に頼ることはむずかしかった。そこで、彼らはモーセに頼って、かろうじて信仰を保っていた。 PP 160.5

ところが、彼が、彼らのあいだから取り去られてしまった。幾日も、幾週間も彼は帰ってこなかった。雲はまだ見えていたが、宿営の多くの人々には、モーセが彼らを捨てて行ってしまったか、それとも、燃える炎の中で焼き尽くされたかのように思われた。 PP 160.6

こうして彼らは待つ間に、すでに聞かされた律法をよく瞑想し、さらに神がこれからも与えようとしておられる啓示を受けるために、心の準備をする時間が与えられた。これは、そのための絶好の機会であった。 こうして彼らが、神の要求をさらに明らかに理解しようとつとめ、神の前にへりくだっていたならば、試練にあわないように守護されたことであろう。しかし、彼らは、そうしなかった。やがて彼らは注意しなくなって、無頓着になり、律法を犯すに至った。特に寄り集まり人はそうであった。彼らは、乳と蜜の流れる地、約束の国に行く途中で忍耐しきれなくなった。美しい国にはいる約束は、服従する者にだけ与えられるという条件であったが、彼らはこれを見失っていた。中にはエジプトへ引き返そうとする者もあった。しかし、カナンに向かって進むにしても、エジプトに引き返すにしても、大多数の人々は、もはやモーセを待たないことに決めてしまった。 PP 160.7

彼らは指導者を見失って途方にくれ、以前の迷信にもどっていった。「寄り集まり人」が、まず不平とつぶやきを言い始め、その後の背信の指導者になった。エジプト人が神としていた象徴の中には、牛、または子牛があった。そして、エジプトで、この種の偶像礼拝を行っていた者の発案によって、子牛が造られ、その礼拝が行われた。人々は神を代表する何かの像が、モーセの代わりに彼らの前に進むことを望んだ。 PP 161.1

神は、ご自分のどんな形をもお与えになったことはない。そして、こうした目的のために、物質で形を造ることを神は禁じておられた。エジプトと紅海での奇跡は、神が唯一の真の神で、イスラエルの目に見えない全能の救い主であられるという信仰を確立するために与えられた。目に見える神の臨在のしるしを見たい者のためには、雲と火の柱が与えられて群衆を守り、シナイ山の上には、神の栄光があらわれていた。しかし、神の臨在の雲が、なお彼らの前にあるのに、彼らの心はエジプトの偶像礼拝にもどり、目に見えない神の栄光を牛の像であらわした。 PP 161.2

モーセの不在中、司法権がアロンに委ねられていたので、大群衆は彼の天幕に集まって、「さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです」と要求した（出エジプト 32：1）。これまで、彼らを導いた雲は山の上に永久に止まってしまい、もはや旅の指示をしなくなったと彼らは言った。彼らには、それに代わって、偶像がなければならなかった。そして、もし彼らがある者らの意見に従ってエジプトへ帰るような時には、偶像をまず先頭にかついで行き、それを自分たちの神であると認めるならば、エジプト人から喜んで迎えられるであろうと考えた。 PP 161.3

こうした危機には、確固とした決断と、なにものにもくじけない勇気の人が必要であった。それは、自分の人気や身の安全、自分の生命そのものよりも、神の栄光を重んじる人である。しかし、そのときのイスラエルの指導者は、そうした品性の人ではなかった。アロンは一応人々をいさめた。しかし、危機に臨んでためらい恐れる彼の態度は、ますます人々をかたくなにするだけであった。騒ぎは大きくなった。人々は、盲目的に

なり、不合理な熱狂状態に陥った。神と結んだ契約を堅く保った者もいくらかあったが、大部分の人々は背信に加わった。偶像を造ることが、偶像礼拝であることを指摘した少数の勇敢な人々は、群衆の襲撃を受けて乱暴をされ、ついに混乱と興奮の中で生命を失った。 PP 161.4

アロンは、自分の身の安全を気づかった。彼は、神の栄光のために勇敢に立つかわりに、群衆の要求を受け入れた。アロンがまず第一にしたことは、すべての人々から金の耳輪を集めて、彼のところに持って来させることであった。そうすれば、彼らは虚栄心から、そのような犠牲を拒否してくるものと内心希望していた。しかし、彼らは快く装飾品をはずした。アロンはそれを用いて、エジプトの神をまねた子牛を鋳造した。人々は言った。「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」（同 32：4）。こうしてアロンは卑劣にも、主がはずかしめられるのを許した。そればかりではなかった。アロンは、金の像が人々に歓迎されたのを見て、その前に祭壇を築き、「あすは主の祭である」と布告した（同 32：5）。その布告は、ラッパによって組から組へと宿営全体に伝えられた。「そこで人々はあくる朝 早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立って戯れた」（同 32：6）。「主の祭」をするという口実のもとに、彼らは飲食にふけり、みだらな騒ぎを演じた。 PP 161.5

今日でも快楽を愛する心が「信心深い様子」のかげに隠れていることがなんと多いことであろう。礼拝の儀式を守りながらなおかつ人々が利己心または肉欲の満足にふけることを許す宗教は、イスラエルの時代と同様に今日でも、多くの人々に喜び迎えられている。そして、教会の権威ある地位の人が、清められていない人々の欲するところを受け入れて、彼らが罪を犯すのを助長する柔弱なアロンのような人々が、まだいるのである。 PP 162.1

ヘブル人は、神の声に服従することを厳粛に神に誓ってから、まだほんの数日しかたっていなかった。彼らは恐れおののいて山の前に立ち、「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」という言葉に耳を傾けたのであった（同 20：3）。神の栄光は、まだシナイ山の上にただよっていて、会衆に見えていた。それなのに、彼

らはそむいて他の神々を求めた。「彼らはホレブで子牛を造り、鋳物の像を拝んだ。彼らは神の栄光を草を食う牛の像と取り替えた」（詩篇 106：19、20）。慈愛深い父、全能の王としてご自分をあらわされた神に対して、これ以上の忘恩を示し、これ以上の大胆な侮辱を加えることができるであろうか。 PP 162.2

山にいたモーセは、宿営で背信が起こったことを知らされ、直ちにもどっていくように命じられた。主はモーセに言われた。「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鋳物の子牛を造り、これを拝」んだ（出エジプト 32：7、8）。神はこの出来事を、その始まったときに止めることもおできになった。しかし、反逆と背信に罰を与えてすべてのものの教訓とするために、このことがこうして頂点に達するのをお許しになった。 PP 162.3

神が、神の民と結ばれた契約は破棄された。そこで神はモーセに言われた。「それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」（同 32：10）。イスラエルの人々、特に寄り集まり人は、神に反逆する傾向があった。彼らは指導者にむかってつぶやき、その不信とかたくなさによって指導者を悩ますのであった。であるから、彼らを約束の国に導くことは、骨のおれるたいへんな仕事であった。彼らはすでに罪を犯して神の恵みを失い、当然滅ぼされる運命にあった。であるから、主は彼らを滅ぼし、モーセを大国民にしようと言われた。 PP 162.4

「わたしをとめるな。……わたし（は）……彼らを滅ぼしつくすであろう」と神は言われた。もし、神がイスラエルを滅ぼそうとなさるならば、いったいだれが彼らのために嘆願することができようか。たいていの人は、罪人が滅びるのを、そのまま放任しておくものである。人々の忘恩とつぶやきの声しか聞くことのできない苦労と重荷と犠牲の生活を捨てて、それに代わって安楽と栄誉ある地位とに喜んでつかない人間がいったいいるであろうか。神ご自身がモーセを解放すると言っておられたのである。 PP 162.5

しかし、モーセは失望と怒りしか感じられないところに、希望を見いだした。モーセは、「わたしをとめるな」という神の言葉を、哀願を禁じるのではなくて、それを奨励するものと解した。そして、モーセの祈りだけがイスラエルを救い得るものであって、そのような祈りによって、神は、ご自分の民をお救いになるものと考えた。「モーセはその神、主をなだめて言った、『主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか』」（同 32：11）。 PP 162.6

神は、神の民をお捨てになったことを明らかにされた。神は、彼らのことを「あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民」とモーセに言われた。しかし、モーセは、心を低くして、自分が指導者であったことを拒否した。彼らは、モーセのものではなくて、神の民であった。「大いなる力と強き手をもって、 ……導き出されたあなたの民」であった。「どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいでしょうか」と彼は訴えた（同 32：11、12）。 PP 162.7

イスラエル人がエジプトを出てから数か月の間に、彼らが驚くべき方法によって救われたことが、周囲のすべての国々に知れ渡った。異教徒は恐怖と不吉な予感に襲われた。すべてのものは、イスラエル人の神が、その民のためになさることを見守っていた。もしも、彼らが今滅ぼされたならば、敵は勝利をおさめ、神は恥辱をこうむるのであった。エジプト人は、神が自分たちの非難どおりに荒野で犠牲を捧げるためではなくて、滅ぼすために神の民を導き出したのだと言うことであろう。エジプト人は、イスラエル人の罪については考えない。神がこれほどまでに栄誉をお与えになった民を滅ぼすことは、神のみ名をはずかしめることであった。神から大きな栄誉を受けた者は、この地上で神のみ名に誉れを帰すために、なんと大きな責任が負わせられていることであろう。彼らは、罪を犯してその刑罰を招き、異邦人に神のみ名を汚させることのないように、十分注意しなければならない。 PP 163.1

モーセは、これまで神の導きのもとにイスラエル人のために多くのことを行ってきた。モーセは、彼らのために深い関心と愛をいだいて嘆願しているうちに、臆する気持

ちがなくなった。主は、彼の願いに耳を傾け、彼の無我の祈りをお聞きになった。彼は、そのしもべを試みられたのである。神は彼の忠実さと彼があやまちに陥り、恩を忘れた人々を愛するかどうかを試みられた。そして、モーセは、その試練に耐えたのである。モーセのイスラエルに対する関心は、利己的動機から出たものではなかった。神の選民が栄えることは、彼の個人的栄誉や大国民の父となる特権よりも、彼にとって大切なことであった。神は、モーセの忠実さ、心の素朴さ、誠実さをお喜びになって、彼を忠実な牧羊者として召して、イスラエル人を約束の国に導き入れるという大任命を彼にお与えになった。 PP 163.2

モーセは、「契約の石板」を持って、ヨシュアと一緒に山から下って来た。すると彼らは、興奮した群集が、大声でわめいている声を聞いた。戦士であったヨシュアは、初め敵の攻撃かと思って、「宿営の中に戦いの声がします」と言った（同 32：17）。しかし、モーセは、その騒ぎの性質をもっと正確に判断した。その物音は戦いの声ではなく、歌の声であった。「勝どきの声でなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の声である」（同 32：18）。 PP 163.3

彼らが宿営に近づいてみると、人々は偶像のまわりで大声をあげて踊っていた。それは、異教の人々の騒ぐ光景そのもので、エジプトの偶像礼拝をまねたものであった。厳粛でうやうやしく行われる神の礼拝と、それはなんと異なっていたことであろう。モーセは全く打ちのめされた感を受けた。モーセは、今、神の栄光のみ前から来たばかりであった。このような事態が起きたことは、知らされていたとは言え、これほどまでに恐ろしく堕落したイスラエル人の状態を見るとは思っていなかった。彼は激怒した。モーセは、彼らの犯罪に対する大きな憎悪を表すために、石の板を地に投げ捨て、人々の面前でそれを破壊してしまった。こうして、彼らが神の契約を破ったのと同様に、神の側でも、彼らと結んだ契約を破棄なさったことを示した。 PP 163.4

モーセは宿営の中に入り、騒いでいる人々の間を通って偶像を取り払い、火にくべて焼いた。あとで、それをこなごなに砕いて山から流れてくる川の上にまき、人々に飲ませた。こうして彼らが拝んでいた神が、全く無価値なものであることを示したのである。 PP 163.5

偉大な指導者モーセは、罪を犯した兄弟アロンを呼んで、「この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか」ときびしく尋ねた（同32：21）。アロンは、人々の要求が激しく、もし彼らの願いに応じなければ、自分は殺されてしまったであろうと言って弁解しようとした。「わが主よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのは、あなたがごぞんじです。彼らはわたしに言いました、『わ たしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセは、どうなったのかわからないからです』。そこでわたしは『だれでも、金を持っている者は、それを取りはずしなさい』と彼らに言いました。彼らがそれをわたしに渡したので、わたしがこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです」（同 32：22～24）。アロンは、火の中に投げ込まれた金が、超自然的力によって、奇跡的に子牛になったかのようにモーセに思わせようとした。しかし、彼の言いわけや弁解は、なんの益にもならなかった。アロンは、当然、罪人のかしらとして扱われた。 PP 163.6

アロンが一般の人々よりは、はるかに祝福と栄誉を与えられていたために、彼の罪はそれだけ憎むべきものであった。「主の聖者アロン」が偶像を造り、祭りを布告した（詩篇 106：16）。モーセの代弁者として選ばれ、神ご自身が「わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている」と言われた者が、偶像礼拝という神に対する反逆を止めることができなかった（出エジプト 4：14）。アロンは、エジプト人と彼らの神々を罰するために神に用いられた人であった。そのアロンが、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」という布告を鋳物の子牛の前で聞いても平然としていた（同 32：4）。モーセと共に山に行き、そこで主の栄光を見て、その栄光のあらわれは、何一つとして形に現すことができないことを知ったアロンが、神の栄光を変えて、子牛の像を造ったのである。モーセの不在中、人々の支配を神からゆだねられた者が、人々の反逆を許したのであった。「主はまた、はなはだしくアロンを怒って、彼を滅ぼそうとされた」（申命記 9：20）。しかし、モーセの熱烈な祈りによって、彼は救われた。彼は、自分の大きな罪を悔いて心を低くしたために、再び神の恵みに浴することが許された。 PP 164.1

もし、アロンが、どんなことになろうとも正しいことのために立つ勇気を持っていたならば、彼は背信を防ぐことができたことであろう。もし彼が神に対する忠誠を堅く保ち、シナイにおける危機について人々に語り、彼らが神の律法を守ることを厳粛に神に誓ったことを思い起こさせたならば、この罪悪は止められたことであろう。しかし、彼が人々の希望に同意して、平然と彼らの計画を進めていく姿を見て、彼らは勇気を増し、以前に計画していたことよりも、さらに大きな罪へと走っていった。 PP 164.2

宿営に帰ったモーセが、反逆をきびしく譴責し、激怒して、聖なる律法の板を砕いたことと、彼の兄弟の快い話しぶりと威厳ある態度とは全く対照的で、人々はアロンに同情を示した。アロンは、自分が人々の要求に屈した弱さを、人々のせいにして自己を弁護しようとした。それでも人々は、彼の柔和と忍耐に対して尊敬の念をいだいていた。 PP 164.3

ところが、神は、人とは別の見方をなさる。アロンの譲歩の精神と人の歓心を得ようとする気持ちは彼の目をくらまし、自分がどんなにいまわしい罪を許しているのかを見えなくした。彼がイスラエルに罪を犯させたために、幾千人の命が失われた。これとは対照的に、モーセはなんとりっぱな生涯を送ったことであろう。彼は、神のみこころを忠実に実行するとともに、イスラエルが幸福であることを自分の繁栄や栄誉や生命よりも大切にしたのである。 PP 164.4

神が罰をお与えになるすべての罪のうちで、他の人に悪を奨励することほど、神がきらわれるものはない。どんなにつらいことであっても、忠実に悪を責めて、神に忠誠を尽くすことを、神はそのしもべたちにお望みになる。神からの任命を受ける栄誉に浴した者は、弱い、人の言いなりになる日和見主義者であってはならない。彼らは、自己を高めたり、好ましくない義務を避けたりすることなく、ゆるぐことのない忠誠心をもって、神の働きをしなければならない。 PP 164.5

神はモーセの祈りによって、イスラエルを滅びから救われたとはいえ、彼らの反逆は、厳罰に処せられるべきであった。アロンが許した不法と反抗は、すみやかに鎮圧しなかったならば、いよいよ悪がはびこり、イスラエルの国を取りかえしのつかない滅亡に陥れたことであろう。その罪悪はきびしく罰して除去しなければならなかった。宿営

の門に立って、モーセは 人々に呼びかけた。「すべて主につく者はわたしのもとにきなさい」（出エジプト 32：26）。反逆に参加しなかった者は、モーセの右に立ち、反逆はしたが悔い改めた者は左に立つことになった。しかし、子牛を造ることを扇動した寄り集まり人が大部分を占めた大群衆は、頑強に反逆をやめなかった。そこでモーセは、イスラエルの神、主の名によって、偶像礼拝に加わらなかった右側にいる者らに、腰につるぎを帯びて、反逆をやめない者をすべて殺すことを命じた。「その日、民のうち、おおよそ 3000 人が倒れた」（同 32：28）。悪の指導者は、どんな地位の人でも、親族、友人であろうがみな殺された。しかし、悔い改めて身を低くした者は救われた。 PP 164.6

この恐ろしい刑罰を行った者は、神の権威によって行動し、天の王の宣告を執行したのであった。人間は、盲目的に同胞を裁いて罰することがあるから注意しなければならない。しかし、神が悪者に対する神の宣告の執行をお命じになるならば、従わなければならない。このつらい行為を行った者は、それに従事したことにより、反逆と偶像礼拝に対する憎しみをあらわし、真の神の奉仕にさらに自分たちを献身することを示した。主はレビの部族が忠実であったことを賞賛し、特別の栄誉をお与えになった。 PP 165.1

イスラエルの人々は、反逆罪を犯した。しかもそれは、彼らに豊かな恵みを賜った天の王に対してであった。彼らは、自分から進んで、その王の権威に従うことを誓っていたのであった。天の統治を維持するためには、反逆者に罰を与えなければならない。ここにおいても、なお、神の憐れみがあらわされていたのである。神は、律法を維持されるとともに、選択の自由、すなわち、すべての者が悔い改める機会をお与えになった。反逆しつづける者だけが、殺されたのである。 PP 165.2

神が偶像礼拝をおきらいになることを周囲の国々に証明するために、この罪を罰する必要があった。モーセは神の器として、罪を犯した者に罰を与えることにより、彼らの罪に対して公の抗議を厳粛に行ったことを記録に残さなければならなかった。その後、イスラエルの人々が、近隣の部族間の偶像礼拝を非難するようになれば、彼らは、主を神とする人々がホレブで子牛を造って礼拝したではないかと反論してくることであろう。

イスラエルは、そのとき、その恥ずかしい事実は認めないわけにはいかなくても、そのときの罪人たちの恐ろしい運命を示し、その罪が承認または黙認されたものでなかった証拠とすることができるのであった。 PP 165.3

正義だけでなく、愛もまた、この罪が罰せられることを要求した。神は、神の民の主権者であると同時に、保護者でもあられる。神は、他の者を滅ぼさないようにするために、反抗をやめない者たちを滅ぼされた。神は、カインの命を助けることによって、罪を罰しない結果が何であるかを宇宙にお示しになった。カインの生涯とその教えが彼の子孫に及ぼした影響は、ついに洪水によって全世界が滅ぼされなければならない状態へと導いた。洪水前の人々の歴史は、長命が罪人にとって祝福ではないことを証明している。神の大きな忍耐も彼らの悪を制することができなかった。長く生きれば生きるほど、彼らは腐敗していった。 PP 165.4

シナイでの背信もその通りであった。すみやかに刑罰が彼らに与えられなかったならば、同じ結果がまた見られたことであろう。全地は、ノアの時と同様に堕落したことであろう。もしも、これらの罪人たちが助かっていたならば、カインの命が助けられたときの結果以上の害悪が起こったことであろう。幾百万の人々に刑罰が下るようにならないために、数千人が死ぬことは、神の憐れみであった。多数を救うために、神は少数に罰を与えなければならない。そればかりでなく、人々が神への忠誠を捨ててしまったために、神の保護を受けることができなくなり、防備が除去されて国全体が敵の勢力下にさらされた。もし彼らが罪悪をすみやかに捨て去らなかったならば、彼らは直ちに数多くの強敵の餌食になってしまったことであろう。イスラエルの幸福とその後の各世代の幸福のためにも、犯罪はすみやかに罰せられる必要があった。そして、悪を行った罪人の命が絶たれることも罪人に対する憐れみの情が欠けていたわけ ではない。もしも、彼らの命が助けられたならば、彼らを神に反逆させた同じ精神が、彼らの間に憎しみや争いを起こし、ついには相互に殺し合うようになったことであろう。犯罪がすみやかに、きびしく罰せられたのは、世界に対する愛とイスラエルに対する愛のためであり、罪人に対する愛のためでもあった。 PP 165.5

人々が自分たちの罪の恐ろしさに気づいたとき、宿営全体は恐れおののいた。罪を犯した者はみな殺されるものと彼らは恐れた。モーセは、彼らの苦悩をあわれんで彼らのためにもう 1 度、神に嘆願することを約束した。「あなたがたは大いなる罪を犯した。それで今、わたしは主のもとに上って行く。あなたがたの罪を償うことが、できるかも知れない」と彼は言った（同 32：30）。彼は出かけて行って、神の前に告白して言った。「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならばーー。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」（同 32：31、32）。主はモーセに言われた。「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。しかし、今あなたは行って、わたしがあなたに告げたところに民を導きなさい。見よ、わたしの使はあなたに先立って行くであろう。ただし刑罰の日に、わたしは彼らの罪を罰するであろう」（同 32：33、34）。 PP 166.1

モーセの祈りの言葉は、われわれに天の記録のことを考えさせる。それにはすべての人の名がしるされ、善悪ともにその行為が正確に記録されている。命の書には、神に奉仕したすべての者の名がしるされている。もしそのうちの誰かが神から離れたり、または、頑強に罪から離れず、ついに聖霊の働きに心を堅く閉じてしまったりするならば、彼らの名は、審判のときに命の書から消され、滅ぼされてしまう。モーセは、罪人の運命がどんなに恐ろしいものであるかを知っていた。しかし、モーセは、もしイスラエルの人々が主に拒否されるならば、彼らと共に自分の名も消されることを願ったのである。彼は、それほどまでに恵みに満ちた救いにあずかった人々の上に、神の刑罰がくだるのを見るにしのびなかったのである。イスラエル人のためのモーセのとりなしは、罪人のためのキリストのとりなしを代表している。しかし主は、キリストが負われたような罪人の罪をモーセが負うことはお許しにならなかった。主は言われた。「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう」（同 32：33）。 PP 166.2

人々は、深い悲しみのうちに死者を葬った。つるぎで殺された者は 3000 人であった。間もなく宿営の中に疫病が起こった。そして、こんどは、神が彼らと共に旅してく

ださらないという知らせがあった。主は言われた。「あなたがたは、かたくなな民であるから、わたしが道であなたがたを滅ぼすことのないように、あなたがたのうちにあって一緒にはのぼらないであろう」。そして、「今、あなたがたの飾りを身から取り去りなさい。そうすればわたしはあなたがたになすべきことを知るであろう」という命令が出された（同 33：3、5）。こうして、宿営全体の人々は悲しみに沈んだ。悔い改めとへりくだった思いをもって、「イスラエルの人々はホレブ山以来その飾りを取り除いていた」（同 33：6）。 PP 166.3

礼拝の一時的場所として用いられていた天幕が、神の指示に従って「宿営を離れて」張られた。これは、神が人々の間からお離れになったもう 1 つの証拠であった。神はモーセにご自分をあらわされたのであるが、このような人々には、あらわされなかったのである。人々は、この譴責を深く感じ、罪感に苦しむ群衆は、それを何か大きなわざわいの前兆であるかと考えた。神は、彼らを全滅させるために、モーセを宿営から離されたのではなかろうか。しかし、彼らに全く希望がなかったわけではなかった。天幕は宿営の外に張られたけれども、モーセはそれを「会見の幕屋」と名づけた。真に悔い改め、主に帰ることを願う者は、すべてそこへ行って彼らの罪を告白し、神の憐れみを求めるようにという指示が与えられた。彼らが天幕に帰った時に、モーセは幕屋に入った。人々は、モーセが自分たちのために行うとりなし が受け入れられたしるしを、必死になって見守っていた。もし、神が降りて来られてモーセに会われるならば、彼らは全滅のうきめにあわずにすむという希望がもてたのである。雲の柱が下ってきて、幕屋の入口に立ったときに、人々は喜びの声をあげて泣き、「立っておのおの自分の天幕の入口で礼拝した」（同 33：10）。 PP 166.4

モーセは、自分に委ねられた人々の強情なことと盲目なことをよく知っていた。彼は、自分の当面する困難も知っていた。しかし、人々を説き伏せるためには、神の助けがなければならないことを彼は知った。彼は、さらに明らかな神のみこころの啓示と神の臨在の確証を祈り求めた。「ごらんください。あなたは『この民を導きのぼれ』とわたしに言いながら、わたしと一緒につかわされる者を知らせてくださいません。しかも、あなたはかつて『わたしはお前を選んだ。お前はまたわたしの前に恵みを得た』と仰せ

になりました。それで今、わたしがもし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうか、あなたの道を示し、あなたをわたしに知らせ、あなたの前に恵みを得させてください。また、この国民があなたの民であることを覚えてください」（同 33：12、13）。 PP 167.1

「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」という答えが与えられた（同 33：14）。しかし、モーセはまだ満足しなかった。もし神がイスラエルの人々を、かたくなで罪を悔いないままの状態に放任されるなら、恐ろしい結果が生じることを彼は恐れた。彼は、自分が兄弟たちと別に切り離されてしまうことができなかった。そして彼は、神の恵みが神の民に回復されて、神の臨在のしるしが彼らの旅を導くようになることを祈った。「もしあなた自身が一緒に行かれないならば、わたしたちをここからのぼらせないでください。わたしとあなたの民とが、あなたの前に恵みを得ることは、何によって知られましょうか。それはあなたがわたしたちと一緒に行かれて、わたしとあなたの民とが、地の面にある諸民と異なるものになるからではありませんか」（同 33：15、16）。 PP 167.2

すると主は言われた。「あなたはわたしの前に恵みを得、またわたしは名をもってあなたを知るから、あなたの言ったこの事をもするであろう」（同 33：17）。それでも、モーセは嘆願をやめなかった。すべての祈りは聞かれていたが、彼は、さらに大きな神の恵みのしるしを渇望した。彼は、ここで、今までどんな人間もこれまでにしたことのないことを願った。「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示しください」（同 33：18）。 PP 167.3

神は、これを不遜きわまる願いとしてお退けにならず、恵み深い言葉を賜った。「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」よう（同 33：19）。おおい隠されていない神の栄光をながめて生きることのできる人間はこの地上にはいない。しかし、モーセは、彼の耐え得るだけの神の栄光を見ることが約束されたのである。モーセは、再び山の頂に召された。そこで、世界を創造し、「山を移される」（ヨブ 9：5）み手が、土のちりから造られた人間であるこの信仰の勇者を、岩の裂けめにおいて、その前に、神の栄光とそのもろもろの善を通らせられた。 PP 167.4

神の臨在に関する他のすべての約束にまさって、この経験が前途に横たわる働きに対する成功の確証をモーセに与えた。そして、モーセはエジプトで学んだすべてのこと、また、為政者や軍の指揮官としての彼のすべての能力よりも、この経験をはるかに大きく評価した。この世のどんな能力や技術や学識であっても、神の臨在の代わりとはならない。 PP 167.5

罪人にとって、生きた神の手に陥ることは恐ろしいことである。しかし、モーセは、永遠の神のみ前に 1 人で立ち、なんの恐れも感じなかった。それは、彼の魂が彼の創造主のみこころと一致していたからである。詩篇記者は次のように言った。「もしわたしが心に不義をいだいていたならば、主はお聞きにならないであろう」（詩篇 66：18）。「主の親しみは主をおそれる者のためにあり、主はその契約を彼らに知らせられる」（同 25：14）。 PP 167.6

神は、ご自身をこう言われた。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの 豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさ」ぬ者（出エジプト 34：6、7）。 PP 167.7

「モーセは急ぎ地に伏して拝し」た。モーセはもう 1 度、神が神の民を赦してくださり、彼らをご自分の嗣業となさるように嘆願した。彼の祈りは聞かれた。主は、深い憐れみをもってイスラエルに再び恵みをたまい、これまで「地のいずこにも、いかなる民のうちにも、いまだ行われたことのない不思議を」彼らのために行うことを約束された（同 34：8、10）。 PP 168.1

モーセは、山に 40 日 40 夜いた。そして、最初のときと同様に、彼はこの間も奇跡的に支えられた。だれも、彼と一緒に行くことは許されなかった。また、彼の不在中、だれ 1 人山に近づくことも許されなかった。彼は、神の命令に従って、2 つの石の板を用意して、それを山の頂に持って行った。主は再び、「契約の言葉、十戒を板の上に書いた」（同 34：28）。 PP 168.2

こうして長い間、神と交わっている間に、モーセの顔は、神の臨在の栄光を反映していた。モーセは、自分では気づかなかったが、山から降りて来たとき、彼の顔はあか

あかと輝いていた。それと同じ光が裁き人らの前に立ったステパノの顔にも輝いた。「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」（使徒行伝 6：15）。アロンも人々も、モーセを避けてあとずさりした。「彼らは恐れてこれに近づかなかった」（出エジプト 34：30）。何が原因だかわからなかったが、彼らがあわてふためいているのを見て、モーセは彼らに近づいて来るように言った。彼は、神の和解の契約を彼らに示し、神の恵みが回復されたことを知らせた。彼らは、モーセの声がただ愛と懇願以外のなにものでもないことを悟ってついに、1 人の者が勇敢に彼に近づいていった。しかし、あまりの恐ろしさのために何も言うことができず、ただ、モーセの顔を指さし、そして、天を指さすだけであった。大指導者モーセには、その意味がわかった。彼らは罪を意識していたので、自分たちはまだ神の怒りのもとにあると考え、天の光に耐えることができなかった。ところが、もし彼らが神に服従していたならば、喜びに満たされたことであろう。罪には恐怖がある。罪から解放された魂は、天の光から隠れようとは望まないのである。 PP 168.3

モーセは、彼らに多くのことを伝えなければならなかった。そして、彼らの恐怖をあわれんで、顔おおいを当てた。そして、その後、神と交わって宿営に帰ってくるときには、いつでもそうすることにした。 PP 168.4

神はこの輝きによって、神の律法の清く高尚な性質とキリストによってあらわされる福音の栄光を、イスラエルの人々に強く印象づけようとされた。モーセが山にいる間に、神は律法の板だけでなく、救いの計画をもモーセにお与えになった。モーセは、ユダヤ時代のすべての典型や象徴に、キリストの犠牲が予表されているのを知った。そして、モーセの顔があのように光り輝いたのは、神の律法の栄光であったとともに、カルバリーから輝く天からの光でもあった。この神の光は、目に見えるモーセを仲保者とした時代の栄光の象徴であった。彼は、ただ 1 人の真の仲保者キリストを代表していたのである。 PP 168.5

モーセの顔に反映した栄光は、キリストの仲保によって、神の律法を守る人々に与えられる祝福を示していた。それは、われわれの神との交わりが密接であればあるほど、

神のご要求に対するわれわれの知識も明らかになり、いよいよ神のかたちに近づき、神の性質にあずかることも、ますます容易になる。 PP 168.6

モーセは、キリストの型であった。人々が栄光を見ることができなかったので、イスラエルの仲保者モーセは顔おおいをつけた。 PP 168.7

そのように、天からの仲保者キリストは、この世界に来られたときに、神性を人性でおおわれたのである。もしもキリストが、天の輝きにつつまれておいでになったならば、罪深い人間に近づくことはおできにならなかったことであろう。人々は、彼の臨在の栄光に耐えられなかったことであろう。そこで、彼は、ご自分を低くして、「罪の肉の様」になり、堕落した人類のところに来て、彼らを引き上げようとされたのである（ローマ８：3）。 PP 168.8

第 29 章　律法に対するサタンの敵意

神の律法をくつがえそうとするサタンの最初の努力は、罪を知らない天の住民の間で行われ、しばらくのうちは首尾よく成功するかのように思われた。多数の天使たちがそれに迷わされた。しかし、サタンは勝利したかのように思われたものの、その結果は彼の敗北と損失、神からの離反と天からの追放であった。 PP 169.1

この戦いが地上で再開されたときも、サタンは、一見優勢であった。人間は罪を犯したために彼に捕えられ、人間の王国もまた、大反逆者の手中に陥ってしまった。こうして、サタンが独立王国を建て、神とそのみ子の権威に反抗する道が開かれたように思われた。しかし、救済の計画が設けられて、人間は再び神と調和し、神の律法に従順な者となり、ついに人間も地球も、悪魔の力からあがなわれることが可能になった。 PP 169.2

サタンは再び敗北した。そして、彼は、敗北を勝利に変えようとして、再び人間を欺く手段をとった。サタンは、堕落した人類を神に反逆させようとして、今度は人間に神の律法を犯すことを可能にしたのは、神の不当な処置であると言った。「なぜ神は、その結果がどうなるかを知りながら、人間が試みられ、罪を犯し、悲惨と死をもたらすことを許されたのか」と言葉巧みに言った。アダムの子孫は、彼らに、再び機会を与えられた忍耐深い神の恵みを忘れ、自分たちの反逆が、天の王にどのような驚くべき大いなる犠牲を払わせたかを考えもせずに誘惑者に耳をかし、サタンの破壊力から自分たちを救うことのできる唯一のお方に対してつぶやいた。 PP 169.3

神に対して同じ反抗的不満をくり返している人々が、今日も大勢いる。彼らは、人間から選択の自由を奪うことは、知的存在としての権利を取り去って、人間を単なる機械人形にしてしまうのに等しいことを理解していない。意志を強制することは、神のみ旨でない。人間は自由意志を持った道徳的存在として創造された。他の諸世界の住民たちと同じく、人間は、従順か否かの試みを受けなければならない。だが、人間は必然的に悪に負ける立場に置かれているのではない。人間が抵抗できないような誘惑や試練は、

1 つとして襲ってくることが許されていない。神が十分の備えをしてくださったから、人間はサタンとの戦いにおいて決して敗北する必要はなかったのである。 PP 169.4

人間が地上にふえるにしたがって、ほとんど全世界が反逆の側に加わった。今度も、サタンは勝利を得たように思われた。しかし、全能の力は、再び悪の活動をさえぎり、地上は洪水により道徳的堕落から清められた。「あなたのさばきが地に行われるとき、世に住む者は正義を学ぶ……。悪しき者は恵まれても、なお正義を学ばず、……主の威光を仰ぐことをしない」（イザヤ 26：9、10）と預言者は言っている。洪水後がそうであった。地の住民は、神の刑罰から解放されると、再び主に反逆した。この世は、神の契約と定めとを 2 度も退けた。洪水前の民もノアの子孫も共に天の権威をかえりみなかった。 PP 169.5

そこで神はアブラハムと契約を結び、律法の保管者となる民族を召された。この民をいざない滅ぼすために、サタンはただちにわなを仕掛けてきた。ヤコブの子供たちは異邦の民と結婚し、その偶像の礼拝に加わるように誘惑された。だが、ヨセフは神に忠実であった。彼の忠誠は、真の信仰をたえずあかししていた。サタンがヨセフの兄弟たちにヨセフをねたむ心を起こさせて、彼を異国に奴隷として売らせたのは、この光を消すためであった。しかし、神は、エジプトの民にも神に関する知識が与えられるように、これらの出来事を支配なさった。ヨセフはポテパルの家でも牢獄でも、神を恐れつつ、国家の宰相という高い地位につくにふさわしい教育と訓練を授けられた。彼の感化力は、パロの宮廷から国土全体に及び、神を知る知識は遠く広くゆきわたった。エジプトにいるイスラエル人も繁栄して富裕となり、神に忠実な者はみな広範囲に及ぶ感化を与えた。 PP 169.6

偶像に仕える祭司たちは、新しい宗教が人気を博するのを見て驚いた。彼らは天の神に反抗するサタンにそそのかされて、この光を消そうとはかった。王位の継承者の教育は、この祭司たちに委ねられていた。未来の君主の性格を形成し、ヘブル人を苛酷に圧迫させたのは、断固として神に反対する精神と偶像礼拝熱であった。 PP 170.1

モーセがエジプトをのがれてから 40 年の間に、偶像礼拝が勝利を得たように思われた。イスラエル人の期待は年々弱まっていった。王も国民も自分たちの力を誇り、イス

ラエルの神をあざけった。この精神はだんだんとつのり、ついにパロ王がモーセと対決するに及んで頂点に達した。 PP 170.2

モーセが「イスラエルの神、主」の言葉をたずさえて王の前に出たとき、王が「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従（わ）……なければならないのか。わたしは主を知らない」（出エジプト 5：2）と答えたのは、彼が真の神を知らなかったためではなく、その力に対して反抗していたためであった。パロが天の命令に反対したのは無知のためではなく、徹頭徹尾、憎悪と反抗によるものであった。 PP 170.3

エジプト人は、長い間神の知識を退けてきたにもかかわらず、主はなお悔い改めの機会を彼らにお与えになっていた。ヨセフの時代には、エジプトはイスラエルの避難所であった。神の民に好意が示されたことは、神のみ名の栄えであった。しかし、今や、怒ることおそく、憐れみに富む寛容な神も、災害を次々に送られることになった。エジプト人は、自分たちの拝んでいた対象そのものによって、苦しめられ、主の力の証拠を示された。そして、望む者はみな神に従って刑罰をのがれることができた。王の強情と頑迷が神のことを広く伝える結果になり、多くのエジプト人が神に仕えるようになった。 PP 170.4

イスラエル人は、異邦人と結合し、その偶像礼拝をまねる傾向が強かった。そこで、神はヨセフの感化が広くゆきわたり、彼らが独自の民族として存続するのに好都合なエジプトに、彼らが下っていくのを許された。ここで、ヘブル人は、エジプト人の偶像礼拝の堕落とエジプト滞在期間後半の残酷なとりあつかいと圧制の結果、偶像礼拝に嫌悪感をいだき、先祖の神のもとにのがれたいと思うようになるはずであった。サタンは、こうした摂理そのものを、自分の目的達成のために利用して、イスラエル人の心を暗くし、彼らに異邦の教師の風習を模倣させた。エジプト人は動物を迷信的に尊重していたために、ヘブル人は奴隷生活をしている間、いけにえの供え物を捧げることが許されなかった。こうして、彼らの思いは、犠牲を捧げることによって、偉大なるいけにえキリストに向けられることもなく、彼らの信仰は弱まった。イスラエル解放の時が来ると、サタンは強硬に神の意志に反抗した。彼はなんとしても、200 万人以上をかぞえるこの大いなる民族を無知と迷信の中に閉じ込めておきたかった。神が祝福してその数をふ

やし、地上の強国にすると約束された民、そして、神がご自分のみこころを人々に知らせるために用いようとされた民、すなわち、神が律法の保管者にしようとされたというそういう人々を、サタンは暗黒と束縛の中に置き、彼らの心から神の記憶をぬぐい去ろうとつとめた。 PP 170.5

王の前で奇跡が行われたとき、サタンはその場にいて、その力に対抗し、パロが神の至上権を認めて、その命令に従わないようにしていた。サタンは力のかぎりを尽くして神のわざを模倣し、そのみ旨に抵抗した。しかしながら、その結果はただイスラエル人に対しても、全エジプト人に対しても、神の力と栄光がさらに輝かしく現されることになり、生きた真の神の存在とその主権をいっそう明瞭にしたにすぎなかった。 PP 170.6

神は、ご自分の力を強力にあらわすと共に、エジプトのすべての神々に刑罰を下してイスラエルを解放された。「こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、その選ばれた民を導いて歌いつつ出て行かせられた。……これは彼らが主の定めを守り、そのおきてを行うためである」（詩篇 105：43～45）。神は、彼らをよい国へ導くために、奴隷の状態からお救いになった。神は摂理のうちに敵をさける避難所として、国土を彼らのために備えて、彼らがみ翼のか げに宿ることのできるようにされた。神は彼らをご自分に引き寄せ、永遠のみ腕で囲みたいと望まれた。そして、彼らがその恵みと憐れみにこたえて、生きた神の前に他のいかなる神々をも持たず、み名を高め、これを地上に輝かすことをお求めになった。 PP 170.7

エジプトの奴隷であった間に、イスラエル人の多くは、全くと言っていいほど神を忘れ、その戒めを異邦の習慣や伝統と混合してしまっていた。神は彼らをシナイに導き、そこでご自分の声で律法を宣言された。 PP 171.1

サタンと悪天使たちは地上にいた。神が民に律法を宣言しておられるあいだでさえ、サタンは彼らを罪にいざなおうとたくらんでいた。彼は神が選ばれたこの民を、天の神の面前で屈伏させてしまおうとしていた。彼は、彼らを偶像崇拝に陥れることによって、すべての礼拝のもつ力を破滅させようとしていた。なぜなら、自分より高くないもの、自分の手のわざによって象徴され得るものをあがめることによって、人間はどうして高

められることができるであろうか。もし、人々が刻んだ像や獣や爬虫類の形で神をあらわそうとするほどに、無限の神の力と威厳と栄光に対して盲目になり、創造主のみかたちに造られた人間がこれらのいまわしい無意味な対象にぬかずくほどに、主と自分たちの関係を忘れてしまうならば、邪悪な放縦の道が開かれ、心のよこしまな欲情のおもむくままに、サタンの完全な支配に服してしまう。 PP 171.2

サタンは、シナイの山麓から、神の律法をくつがえす計画の実行にかかり、こうして天で始めたのと同じ働きを押し進めた。モーセが神と共に山にいた 40 日の間、サタンは忙しく働いて、疑惑と背信と反逆をひき起こしていた。神が契約の民に託すべき律法を書きしるしておられるあいだに、イスラエル人は主への忠誠を拒んで、金の神々を要求していた。民が守ることを誓った律法の戒めを手にして、モーセが神の栄光の恐るべき臨在から出てきたとき、彼らはその戒めに公然と反抗して、金の偶像の前にぬかずいて礼拝していた。 PP 171.3

サタンは主なる神に対するこの大胆な侮辱と冒瀆にイスラエルを誘い込むことによって、彼らの滅亡を招こうと計画していた。彼らがこれほどにも堕落し、神から与えられた特権と祝福の目覚めと、そして、自分たちがくり返し厳粛に誓った忠誠を全く忘れてしまったのであるから、主は彼らを捨て去って、滅ぼしてしまわれるだろうとサタンは考えた。こうして、生きた神の知識を保存する約束のすえ、アブラハムのすえは滅ぼされてしまい、サタンを征服することになっていた真のすえであられる方が来ないように彼は願ったのである。大反逆者はイスラエルを滅亡させ、それによって神のみ旨の遂行を妨げようと考えていた。だが、またしても彼は敗北した。イスラエルの民は罪深くはあったが滅ぼされなかった。頑強にサタンにくみした者たちは絶たれたが、へりくだって悔い改めた民は、憐れみによって赦された。この罪の歴史は、偶像礼拝の罪とその罰、また、神の公正と忍耐深い憐れみを、末長くあかししている。 PP 171.4

全宇宙がシナイの光景をながめていた。この 2 つの統治の方法が示されたことによって、神の統治とサタンの統治の対照が明らかにされた。今一度、罪を知らない他の世界の住民たちは、サタンの背信の結果を見、かつ、彼の支配が行われた場合に天に樹立されたであろうと思われる統治がどんなものかを見たのであった。 PP 171.5

人々に第 2 の戒めを犯させることにより、サタンは、神に対する彼らの観念を堕落させようと意図した。彼は第 4 の戒めを人々の念頭から取り去ることによって神を全く忘れさせようとした。異邦の神々にまさって崇敬と礼拝を神がお求めになるわけは神が創造者であり、その他のものはみな神に創造されて存在するからである。聖書には、このようにしるされている。預言者エレミヤは言う、「主はまことの神である。生きた神であり、永遠の王である。……天地を造らなかった神々は地の上、天の下から滅び去る。……主はその力をもって地を造り、その知恵をもって世界を建て、その悟りをもって天をのべられた」「すべての人は愚かで知恵がなく、すべての金細工人はその造った偶像のために恥をこうむる。その偶像は 偽り物で、そのうちに息がないからだ。これらは、むなしいもので、迷いのわざである。罰せられる時に滅びるものである。ヤコブの分である彼はこのようなものではない。彼は万物の造り主だからである」（エレミヤ 10：10～12、14～16）。神の創造力の記念である安息日は、天地の造り主としての神をさし示す。したがって、それは創造者の存在を絶えずあかしし、その偉大さ、その知恵、その愛を思い起こさせる。もし安息日がいつも清く守られていたなら、無神論者や偶像礼拝者などはあり得なかったことであろう。 PP 171.6

エデンで設けられた安息日の制度は、世界の誕生と共に古い。それは創世以来、すべての父祖たちが順守してきたものである。エジプトの奴隷時代には、イスラエル人は工事監督にしいられて、やむを得ず安息日を破った。そして、彼らはその神聖さをおおかた見失ってしまった。律法がシナイで宣言されたとき、第 4 の戒めの最初は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という言葉であって、安息日がそのとき制定されたのではないことを示している。その創設は創造にまでさかのぼる。人々の心から神を消し去るために、サタンはこの偉大な記念をくずそうとした。人々をいざなって創造主を忘れさせることができれば、彼らは悪の力に抵抗しなくなり、サタンは確実に獲物を捕えることができるのであった。 PP 172.1

サタンは、神の律法に対する敵意をいだいていたから、十戒の 1 つ 1 つの戒めに対して戦いをいどんだ。すべてのものの父である神を愛し、これに忠誠を尽くすという大原則と、子が親を愛しこれに従順を尽くすという原則とは密接に関連している。親の権

威を侮れば、やがて、神の権威を侮るようになる。したがって、サタンは第 5 条の義務を軽減しようと努力した。異邦民族のあいだでは、この戒めの原則はほとんど守られていなかった。多くの国々において、年をとって自分の世話ができなくなった親は、捨てられたり、殺されたりした。家族の中で母親は尊ばれず、夫が死ぬと、彼女は長男の権威に従わなければならなかった。子は、親に従順であるべきことをモーセは命じた。しかし、イスラエル人が主から離れたとき、第 5 条も他の戒めと共に無視されるに至った。 PP 172.2

サタンは「初めから、人殺しであっ」た（ヨハネ 8：44）。彼は、人類を支配する力を得るやいなや人々を互いに憎み、殺させたばかりでなく、彼らをいっそう大胆に神の権威に反抗させ、第 6 条を破ることを彼らの宗教の一部とした。 PP 172.3

神の性質をゆがんで考えたために、異邦民族は、神の恵みを得るには人身御供が必要だと信ずるようになった。そして、最も恐るべき残虐がいろいろな形の偶像礼拝のもとで行われてきた。その 1 つは、偶像の前で自分の子供たちに火の中をくぐらせる風習であった。子供たちのなかで、この試練から無傷で出てくることができたとき、民は自分たちの供え物が受け入れられたと信じた。このようにして出てきた者は、神々から特に恵まれた者とみなされて種々の恩典を与えられ、以後は大いに尊重され、どんな大きな犯罪を犯しても処罰されることはなかった。しかし、火の中をくぐるあいだにやけどをした者の運命は定まっていた。神々の怒りは、そのいけにえの生命を奪わなければしずまらないと信じられていた。したがって、その子は、犠牲としてささげられた。背信のはなはだしかった時代には、こうした憎むべきことが、ある程度イスラエル人のあいだにも行われていた。 PP 172.4

第 7 条を犯すこともまた、古くから宗教の名において行われていた。最もみだらな忌むべき儀式が、異邦の宗教の一部とされた。神々自身が不道徳なものとしてあらわされ、その礼拝者は、低級な欲望をほしいままにしていた。男色が広く行われ、祭りのときにはだれもが公然と不道徳なことをした。 PP 172.5

一夫多妻は、ごく初期から行われていた。それは洪水前の世界に神の怒りを招いた罪のひとつであった。だが、洪水後それは再び広く行われた。サタンは、とりわけ結婚

制度をゆがめ、その義務を弱め、その神聖さを減ずることに力を入れた。というのは、人間のうちにある神のかたちをそこない、悲惨と悪徳に戸を開くのに、これほど確実な方法はなかったからである。 PP 172.6

大争闘の初めから、神の性格を誤解させ、その律 法に反逆させることがサタンの意図したところであった。そして、これはみごとに成功しているように見える。多数の者がサタンの欺瞞に耳を貸し、神に反逆している。しかし、悪の働きのただ中にあって、神のみ旨は着実に完成をめざして前進する。神は、すべての造られた者に、ご自分の公義と慈愛を明らかにしておられる。サタンの誘惑によって全人類は神の律法を犯す者となった。だがみ子の犠牲によって彼らが神に立ち帰る道が開かれた。キリストの恩恵を通して彼らは天父の律法に従うことができるようにされる。このように、いつの時代にも神は背信と反逆のただ中から、ご自分に忠実な 1 つの民――「心のうちにわが律法をたもつ」民（イザヤ 51：7）――をお集めになる。 PP 172.7

サタンは、欺きによって天使たちをいざなった。彼は、いつの時代にも人々の間で、同じような方法で彼の仕事を進めてきた。そして、彼は最後までこの方針を続けるであろう。もし、サタンが公然と、神とその律法に戦いをいどんでいることを表明すれば、人々は警戒するであろう。しかし、彼は自分の本性を隠し、真理と誤謬とを混ぜ合わせている。最も危険な偽りは、真理と混ぜ合わせられたものである。こうして人々は誤りを受け入れて魂を捕えられ破滅に陥る。この方法によって、サタンは世界を自分の側に引き入れている。だが、彼の勝利が永遠に終わる日が来ようとしている。 PP 173.1

反逆に対する神の処置の結果、長い間ひそかに進められてきた仕事のおおいが完全に取りのぞかれる。サタンの支配の成果と神の定めを無視した結果は、すべての造られた者の前に明らかにされるであろう。神の律法は完全に擁護される。神の処置はことごとく、ご自分の民の永遠の幸福と、神が造られたすべての世界の幸福のためにとられたものであることが理解される。サタン自身も宇宙の見守る中で、神の統治の公正とその律法の正義を告白する。 PP 173.2

神が立ちあがって、これまで侮られてきたご自分の権威を擁護される時は遠い先ではない。「主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる」「その来る日

には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」（イザヤ 26：21、マラキ 3：2）。神が山に下って律法を宣言されたとき、イスラエルの民は、その罪深さのために神の臨在の輝く栄光によって焼き尽くされることのないように、そこに近づくことを禁じられた。神の律法を宣言するために選ばれた場所に、こうした神の威光があらわれたとすれば、主が、これらの清い律法を執行するために来られる審判は、どんなに恐るべきものであろう。主の権威をふみにじってきた者たちは、最後の報復の大いなる日に、どうしてその栄光に耐え得よう。シナイの恐怖は最後の審判の光景をあらわすものであった。ラッパが鳴り響いて、イスラエルは、神と会うために召集された。天使のかしらの声と神のラッパの音が、全地から、生きている者と死んだ者を審判者の御前に召し集めるのである。大勢の天使を伴った天父とみ子が、シナイ山の上に臨在された。大いなる審判の日には、キリストが「父の栄光のうちに、御使たちを従えて来る」（マタイ 16：27）。そのとき、キリストは、栄光のみ座につき、その前にあらゆる国民が集められる。 PP 173.3

神の臨在がシナイで現されたとき、主の栄光は全イスラエルの目の前で焼き尽くす火のようであった。しかし、キリストが聖天使たちを従えて栄光のうちに来臨されるとき、全地はその臨在の恐るべき光で燃えるように明るくなるであろう。「われらの神は来て、もだされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばわれる」（詩篇 50：3、4）。彼の御前から火の流れがほとばしり出て、天は燃えくずれ、地と、その上に造り出されたものもみな焼き尽くされる。「それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない者たちや、……福音に聞き従わない者たちに報復」される（Ⅱテサロニケ 1：7、8）。 PP 173.4

人間が創造されて以来、シナイで律法が宣言されたときのような神の力のあらわれは、他では見ること ができない。「シナイの主なる神の前に、イスラエルの神なる神の前に、地は震い、天は雨を降らせました」（詩篇 68：8）。自然界の恐怖すべき激動のさなかに、神の声がラッパの音のように雲の中から聞こえてきた。山はふもとから頂まで震え、イスラエルの民は恐怖で青ざめ、震えながら地上にひれ伏した。このよう

にみ声をもって地を揺り動かされた主は、今、宣言しておられる。「わたしはもう 1 度、地ばかりでなく天をも震わそう」（ヘブル 12：26）。また、聖書はこう記している。「主は高い所から呼ばわり、その聖なるすまいから声を出し」、「天も地もふるい動く」（エレミヤ 25：30、ヨエル 3：16）。来たるべきその大いなる日に、天そのものも「巻物が巻かれるように」姿を消す（黙示録 6：14）。すべての山々島々は、その場所を動かされる。「地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く。そのとがはその上に重く、ついに倒れて再び起きあがることはない」（イザヤ 24：20）。 PP 173.5

「それゆえ、すべての手は弱り」、すべての顔は「青く変っている」「すべての人の心は溶け去る。彼らは恐れおののき、苦しみと悩みに捕えられ」る。「わたしはその悪のために世を罰し、……高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする」と主は言われる（イザヤ 13：7、エレミヤ 30：6、イザヤ 13：7、8、11）。 PP 174.1

モーセが、あかしの板を受けて神の臨在のもとから山を下ってきたとき、罪あるイスラエルは彼の顔を輝かしている光に耐えられなかった。まして、律法を犯し、贖罪を拒んだ者の審判のために、全天の万軍に囲まれ、父の栄光に包まれて現れる神のみ子を、罪人たちはどうして仰ぐことができるであろう。神の律法を軽視し、キリストの血を足の下に踏みにじった者たち、「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者」はみな「ほら穴や山の岩かげに」身を隠し、山と岩とに向かって言う、「われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」（黙示録 6：15、16、17）。「その日、人々は……しろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」（イザヤ 2：20、21）。 PP 174.2

そのとき、神に対するサタンの反逆は、彼自身の滅びと、彼の側につくことを選んだすべての者の滅びに終わったことが明らかとなる。彼は、罪を犯すことによって大きな幸福を味わうことができると主張してきた。だが「罪の支払う報酬は死である」こと

が明らかとなる（ローマ 6：23）。「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」（マラキ 4：1）。あらゆる罪の根であるサタンと、その枝である悪者たちとは全く絶ち滅ぼされる。罪は終わりを告げ、それから生じたわざわいと滅びもなくなる。詩篇作者は言っている、「あなたは……悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。敵は絶えはてて、とこしえに滅び……ました」（詩篇 9：5、6）。 PP 174.3

しかし、神の審判のラッパを聞いても、神の子らには恐れをいだく理由がない。「主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである」（ヨエル 3：16）。神の律法を犯す者に恐怖と滅亡をもたらすその日が、従順な者には「言葉につくせない、輝きにみちた喜び」を与える（Ｉペテロ 1：8）。 PP 174.4

主は「いけにえをもってわたしと契約を結んだわが聖徒をわたしのもとに集めよ」と言われる。「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである」（詩篇 50：5、6）。 PP 174.5

「その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者との区別を知るようになる」（マラキ 3：18）。「義を知る者よ、心のうちにわが律法をたもつ者よ、わたしに聞け」「見よ、わたしはよろめかす杯をあなたの手から取り除……いた。あなたは再びこれを飲むことはない」「わたしこそあなたを慰める者だ」（イザヤ 51：7、22、12）。「『山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移るこ となく、平安を与えるわが契約は動くことがない』とあなたをあわれまれる主は言われる」（イザヤ 54：10）。 PP 174.6

贖罪の大いなる計画は、この世界を完全に神の恵みのもとに引きかえす。罪によって失われたすべてのものが回復される。人間ばかりでなく、地も贖われて、従順な者たちの永遠のすみかとなる。6000 年のあいだ、サタンは地の所有を維持しようと努力してきた。だが、今や創造当初の神のみ旨が完成される。「いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く」（ダニエル 7：18）。 PP 175.1

「日いずるところから日の入るところまで、主のみ名はほめたたえられる」（詩篇113：3）。「その日には、主ひとり、その名一つのみとなる」「主は全地の王となられる」（ゼカリヤ 14：9）。聖書は言う、「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり」、「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立」つ（詩篇 119：89、111：7、8）。サタンが憎んで滅ぼそうとした聖なるおきては、罪のない宇宙であがめられる。そして、「地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に生やされる」（イザヤ 61：11）。 PP 175.2

第 30 章　幕屋の制度と儀式

本章は、出エジプト記 25～40 章、レビ記 4、16 章に基づく PP 175.3

モーセが山で神と共にいたときに、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」（出エジプト 25：8）という命令がくだされ、幕屋の建築についてあますところなく指示が与えられた。イスラエル人は、背信によって神の臨在の祝福を失い、そのためしばらくの間、彼らのあいだに神のための聖所を建てることは不可能となった。だが、彼らが再び神の恵みを受けるようになってから、偉大なる指導者モーセは、この神の命令の実現に着手した。 PP 175.4

選ばれた人々は、神聖な建物の建設に必要な技能と知恵を神から特別に与えられていた。その大きさと形、使用する材料、内部の造作に関する細かい指示を含めたその構造設計は、神ご自身がモーセにお与えになった。手で造られる幕屋は、「ほんとうのものの模型」「天にあるもののひな型」（ヘブル 9：24、23）――われわれの大いなる大祭司キリストが、ご自分の生命を犠牲となさった後で、罪人のために奉仕なさる天の神殿のひな型であった。神は、山でモーセの前に天の聖所の光景を示し、すべてのものを示された通りに造ることを命じられた。モーセはこれらのすべての指示を慎重に記録し、それを民の指導者たちに伝えた。 PP 175.5

聖所の建築には、多額の費用を要する準備が必要であった。貴重で高価な材料が、大量になければならなかった。しかし、主は、心からの捧げ物だけをお受けになった。モーセは「すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい」という神の命令を民に伝えた（出エジプト 25：2）。まず初めに神への献身と犠牲の精神が、いと高き者のすみかを造るために要求された。 PP 175.6

民はみな、いっせいにこれに応じた。「すべて心に感じた者、すべて心から喜んでする者は、会見の幕屋の作業と、そのもろもろの奉仕と、聖なる服とのために、主にささげる物を携えてきた。すなわち、すべて心から喜んでする男女は、鼻輪、耳輪、指輪、

首飾り、およびすべての金の飾りを携えてきた。すべて金のささげ物を主にささげる者はそのようにした」（同 35：21、22）。 PP 175.7

「すべて青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮を持っている者は、それを携えてきた。すべて銀、青銅のささげ物をささげることのできる者は、それを主にささげる物として携えてきた。また、すべて組立ての工事に用いる アカシヤ材を持っている者は、それを携えてきた。また、すべて心に知恵ある女たちは、その手をもって紡ぎ、その紡いだ青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸を携えてきた。すべて知恵があって、心に感じた女たちは、やぎの毛を紡いだ。 PP 175.8

また、かしらたちは縞めのう、およびエポデと胸当にはめる宝石を携えてきた。また、ともしびと、注ぎ油と、香ばしい薫香のための香料と、油とを携えてきた」（同 35：23～28）。 PP 176.1

聖所の建設が進んでいるあいだも、老若の民はーー男も女も子供もーー捧げ物を続々と持参したので、工事の監督たちは、もうこれで十分集まり、使いきれないほどになったと考えるほどであった。そこで、モーセは宿営中にふれさせた。「『男も女も、もはや聖所のために、さざげ物をするに及ばない』。それで民は携えて来ることをやめた」（同 36：6）。イスラエル人のつぶやきと、彼らの罪のためにくだった神の刑罰とは、後世への警告として記録されている。また、彼らの献身と熱意と物惜しみしない心とは、われわれが大いに学ぶべき模範である。すべて神の礼拝を愛し、その聖なる臨在の祝福を重んじる者は、神が彼らと会う家を建てるにあたって同じ犠牲の精神をあらわす。彼らは自分の所有する最善のものを捧げ物として主のもとに携えてきたいと望む。神のために建てられた家は、負債を負ったまま放任しておいてはいけない。それは、主のみ栄えではないからである。ちょうど幕屋の建設者たちのように、工事にたずさわる者が、「もう捧げ物を持ってこなくてもよろしい」と言うことができるように、工事を完成するに十分の額が豊かに捧げられるようでなくてはいけない。 PP 176.2

幕屋はイスラエル人が旅をするときは、取りはずして持ち運びができるように建設された。従って、それは小さく、長さが 55 フィート、幅と高さが 18 フィートほどのものであった。だが、それは壮麗な構造であった。建物とその造作に用いられた木材は、

シナイで手に入れられるどんな木材よりも腐朽しにくいアカシヤ材であった。壁は銀の台にすえられ、柱と横木で結び合わされた立て板であるが、金でおおわれているために、見たところ全体が金のようであった。屋根は 4 組の幕から成り、最も内側のものが「亜麻の撚糸、青糸、紫糸、緋糸で造り、巧みなわざをもって、……ケルビムを織り出」したものであった（同 36：8）。他の 3 組はそれぞれ、やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮でできていて、完全な防護となるように配列されていた。 PP 176.3

建物は、金でおおった柱からたれ下がった豪華な幕、すなわち、とばりによって 2 つの部屋に分けられていた。そして、同じようなとばりが第 1 の部屋の入口を閉ざしていた。これらは、天井となっている内部のおおいと同じく、青糸、紫糸、緋糸などのはなやかな色彩で美しく飾られていた。そこには、天の聖所のつとめに関係があるとともに、地上の神の民に仕える霊である天使の群れを代表するケルビムが、金糸、銀糸によって織り込まれていた。 PP 176.4

聖なる幕屋は、庭と呼ばれる広場に囲まれており、その庭には、青銅の柱につるされた亜麻のたれ布、すなわち、囲いが張りめぐらされていた。この囲いの入口は東端にあった。そこは、聖所の幕には劣るものの、やはり高価な材料で美しく作られた幕で閉ざされていた。庭のたれ布は、幕屋の壁のおよそ半分の高さしかなかったので、建物は外側の人々からよく見えた。庭の中には、入口に近いところに、燔祭のための青銅の祭壇があった。この祭壇の上で、すべての犠牲は火に焼かれて主に捧げられ、その角には贖いの血が注がれた。祭壇と幕屋の戸口との間には、イスラエルの女たちが心から捧げた鏡によって造られた、同じく青銅の洗盤があった。祭司たちは聖所にはいっていくときや、主に燔祭を捧げるために祭壇に近づいたりするときには、いつもこの洗盤で手と足を洗わなければならなかった。 PP 176.5

第 1 の部屋、すなわち聖所には、供えのパンの机、燭台、香の祭壇があった。供えのパンの机は、北側に置かれていた。それは、上部に飾りが施され、純金でおおわれていた。この机に、祭司は安息日ごとに乳香をふりかけた 12 個のパンを 2 段に重ねて置いた。取りのけたパンは聖なるものとみなされ、祭司 がこれを食べた。南側には、7

本に分かれて 7 つのあかりをともした燭台があった。その枝には精巧に細工したゆりに似た花の装飾が施され、全体はひとかたまりの金塊によって作られていた。幕屋には窓がなかったために、あかりは一度に全部消されることはなく、昼夜の別なく光を放っていた。至聖所と神の面前から聖所を隔てているとばりのすぐ前には、金の香の祭壇が置かれていた。祭司は、この祭壇で朝夕香をたき、その角には罪祭の血をつけなければならなかった。そして、この祭壇には大いなる贖罪の日に血が注がれた。この祭壇の火は、神ご自身によって点じられ、大切に保存された。清い香は、日夜聖所の 2 つの部屋とその周り、そして幕屋の遠くにまで芳しい香りを放った。 PP 176.6

内部のとばりの奥は至聖所であったが、これが贖罪と仲保との象徴的奉仕の中心であり、また、天と地をむすぶ輪であった。この部屋には、内も外も金でおおわれたアカシヤ材の箱があって、その上の周囲に金の飾り縁があった。それは、神ご自身がしるされた十戒の石の板を収めるために作られたものであった。十戒は神とイスラエルの間に立てられた契約の基盤であったことから、これは神の契約の箱と呼ばれた。 PP 177.1

この聖なる箱のふたは、贖罪所と呼ばれた。これは 1 つの金塊から作られ、その両端には金のケルビムが立っていた。これらの天使の一方の翼は高く伸ばされ、もう一方の翼は崇敬とけんそんをあらわして自分の体をおおっていた（エゼキエル 1：11 参照）。 PP 177.2

互いに向かい合い、敬虔に箱を見下すこのケルビムの姿勢は、天の万軍が神の律法に対していだいている崇敬の念と、贖罪の計画に対する関心をあらわしていた。 PP 177.3

贖罪所の上方には、神の臨在のあらわれであるシエキーナーがあった。神は、ケルビムの間からみこころをお知らせになった。神のお告げは時として、雲からの声によって大祭司に伝えられた。また、時として、承認もしくは受容をあらわすために光が右側の天使を照らし、不賛成もしくは拒否をあらわすために、影もしくは雲が左側の天使をおおうこともあった。 PP 177.4

箱におさめられた神の律法は、義と審判の大原則であった。この律法は違反者に死を宣告した。だが、律法の上には贖罪所があり、そこに神の臨在があらわされ、また、

そこから、贖罪によって、悔い改めた罪人にゆるしが与えられた。こうしてわれわれの贖いのためのキリストのみわざが、聖所の奉仕のなかで象徴され、「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけ」したのである（詩篇 85：10）。 PP 177.5

幕屋の内部の光景の輝かしさは、どんな言葉をもってしても描写することができない。――金の燭台の光を反射する金張りの壁、きらびやかに刺繍した天使の浮き出るたれ幕のまばゆい色合い、金色に輝く机と香の祭壇、そして第 2 のとばりのむこうには、聖なる箱と神秘的なケルビム、その上方の主の臨在が目に見える形であらわされる聖なるシェキーナー。だが、このすべては人間の贖いのわざの中核である、天にある神の神殿の栄光をおぼろげに反映するものにすぎない。 PP 177.6

幕屋の建築には、約半年を要した。これが完成したとき、モーセは建築した人々の工事をことごとく点検し、これを彼が山で示された型と、神から受けた指示に照らし合わせた。「彼らは主が命じられたとおりに、それをなしとげていたので、モーセは彼らを祝福した」（出エジプト 39：43）。大勢のイスラエルの民は聖なる建物を見ようとして、非常な興味をもって群がってきた。彼らが、敬虔な満ち足りた気持ちでこれに見入っているときに、雲の柱が幕屋の上にたなびき、その上にくだり、これを包んだ。そして「主の栄光が幕屋に満ちた」（同 40：34）。ここに神の威光があらわされ、しばらくの間、モーセも中にはいることができなかった。民は、彼らの手のわざが受け入れられたしるしを感慨深く見つめていた。人々は、歓喜の声を上げたりはしなかった。厳粛な畏怖がすべての者を包んでいた。だが、心の喜びは涙となってあふれ、神が降りてこられて、自分たちと共にお住みになることの感謝が、低くはあったが熱のこもったささやきとなったのである。 PP 177.7

神の指示により、レビ人が聖所の奉仕のために選ばれた。ずっと初期のころには、すべての男子が自分の家族の祭司であった。アブラハムの時代には、祭司職は長男の生まれながらの権利とみなされていた。しかし、主はここで聖所の務めのために、全イスラエルの長子の代わりに、レビ族をお受け入れになった。神は、この特別の栄誉を与えることによって、彼らが忠実に主に仕えたことと、イスラエルが金の小牛を拝んで背信

した時に、主のさばきを忠実に果たした彼らの忠誠を認めたことをあらわされた。しかし、祭司職は、アロンの家だけにかぎられていた。アロンとその子らだけが主の前で仕えることを赦された。レビ族のその他の者たちには幕屋とその備品に関する責任がゆだねられた。そして、彼らは奉仕にたずさわる祭司に付き添うことはできたが、いけにえを捧げたり、香をたいたり、おおいをかぶせていない清い備品を見たりすることは許されなかった。 PP 178.1

祭司にはその職務に従って、特別の衣服が定められた。「あなたの兄弟アロンのために聖なる衣服を作って、彼に栄えと麗しきをもたせなければならない」という指示がモーセに与えられた（同 28：2）。普通の祭司の衣服は白亜麻で、1 つ織りになっていた。すそは足の近くまでたれ下がり、腰は青糸、紫糸、赤糸で刺繍をほどこした白亜麻の帯で結ばれていた。このほかに亜麻布のかぶり物、すなわち帽子がついて、彼らの服装はそろったのである。モーセは燃えるしばのところで、彼の立っている場所は聖であるからくつを脱ぐようにと命じられた。そのように、祭司も足にくつをつけたまま聖所に入ることはできなかった。足についているちりでさえ、清い場所の神聖を汚すのである。彼らは聖所にはいる前に庭でくつを脱ぎ、また幕屋や燔祭の祭壇で仕える前に、手足を洗わなければならなかった。こうして、神の御前に近づこうとする者からは、あらゆる汚れが取り除かれなければならないことが、たえず教えられた。 PP 178.2

大祭司の衣服は、その高い地位にふさわしく、高価な材料で美しく作られていた。一般の祭司の着る亜麻の衣服に加えて、彼は同じく 1 つ織りの青衣を着用した。そのすそには、金の鈴と、青糸、紫糸、緋糸で作ったざくろの装飾がほどこしてあった。その上に金糸、青糸、紫糸、緋糸、白糸で織った短衣エポデを着用した。これは美しく作られた同色の帯でゆわえつけられていた。エポデには袖がなく、金刺繍の肩当てには、イスラエル 12 の部族の名を記した 2 個のしまめのうがはめ込まれていた。 PP 178.3

エポデの上には、祭司服の中で最も神聖な胸当があった。これは、エポデと同じ材料でできていた。形は一指当たり平方の正方形で、金の環に結びつけられた青ひもで肩からつるされていた。 PP 178.4

周囲は神の都の 12 の土台を形成するのと同じ、さまざまな宝石で縁取られていた。縁の内側には金にはめ込まれた 12 の宝石が 4 列に配され、これには肩当てと同じく 12 部族の名が彫られていた。主は、「アロンが聖所にはいる時は、さばきの胸当にあるイスラエルの子たちの名をその胸に置き、主の前に常に覚えとしなければならない」と命じられた（同 28：29）。そのように、罪人のために父の前で、ご自分の血による嘆願をなさる偉大なる大祭司キリストも、ご自分の心に、すべて悔い改めた信じる魂の名を記しておられる。「わたしは貧しく、かつ乏しい。しかし主はわたしをかえりみられます」と詩篇記者はうたっている（詩篇 40：17）。 PP 178.5

胸当の左右には特に輝いた 2 つの大きな宝石があった。これはウリムとトンミムと呼ばれていた。これによって神のみこころが大祭司を通して知らされた。決定すべき問題が主の前に持ち出されたとき、右の宝石の周囲に光輪がかかれば、これは神の是認もしくは認可のしるしとなり、左の宝石にかげりができれば、これは拒否もしくは認可されないしるしとなった。 PP 178.6

大祭司の帽子は白亜麻のかぶりものであったが、それには「主に聖なるもの」としるした金の板が青ひもで結ばれていた。祭司の衣服と動作のすべては、それを見る者に、神の神聖なこと、その礼拝が清いものであること、神の前に来る者には純潔が要求されることなどを、深く感銘させるものでなければならな かった。 PP 178.7

聖所そのものばかりでなく、祭司の務めもまた、「天にある聖所のひな型と影とに仕え」るものであった（ヘブル 8：5）。このように、この務めは非常に重大なものであった。そして、主は、モーセを通して、この象徴的な奉仕のあらゆる点に関する明確な指示をお与えになった。聖所の務めは、2 つの部分から成っていた。すなわち、日ごとの奉仕と年ごとの奉仕とである。日ごとの奉仕は幕屋の庭の燔祭の祭壇と聖所とで行われ、年ごとの奉仕は至聖所で行われた。 PP 179.1

大祭司を除いては、いかなる人も聖所の奥の部屋を見ることができなかった。その祭司も、年に 1 度だけで、しかもきわめて細心かつ厳粛な準備ののちに初めてそこにはいることができた。彼は震えおののきながら、神の前に行った。そして、民は、うやうやしく沈黙を守って彼の帰りを待ち、熱心に神の祝福を求めて祈っていた。大祭司は、

贖罪所の前でイスラエルのために贖いをした。そして、神は栄光の雲のうちで彼に会われた。大祭司がここに通例の時間より長くとどまることがあると、彼らは、自分たちの罪か、あるいは、大祭司自身の罪のために、彼が主の栄光によって絶たれてしまったのではないかと恐れるのであった。 PP 179.2

日ごとの務めは、朝夕の燔祭、金の祭壇における香の供え物、及び個人個人の罪のための特別な供え物から成っていた。そして、ほかに、安息日の供え物、新月の供え物、祭日の供え物があった。 PP 179.3

朝に夕に 1 歳の小羊が適当な素祭と共に祭壇で焼かれ、こうして主に対する民族の日々の献身と、キリストのあがないの血に、彼らが絶えず依存していることが象徴されていた。聖所の務めのために捧げられる供え物は「傷のないもの」でなければならないと、神は言明された（出エジプト 12：5）。祭司たちは、犠牲として捧げられる動物をみなよく調べ、傷があるものは、ことごとく退けなければならなかった。「傷のない」供え物だけが、「きずも、しみもない小羊」（Ⅰペテロ 1：19）として、ご自身をお捧げになる主の完全な純潔を象徴するものとなることができた。使徒パウロは、キリストに従う者たちが自分自身を捧げることの例証として、この犠牲を指摘している。「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」（ローマ 12：1）。われわれは自らを神の礼拝のために捧げなければならない。そして、この供え物をできるだけ完全に近いものとするように努めるべきである。神は、われわれの捧げ得る最善のものでなければお喜びにならないのである。心から神を愛する者は、生涯の最上の奉仕を神に捧げたいと望み、神のみこころを行う能力を増進する律法に、自分たちの持っているあらゆる力を調和させようと絶えずつとめるのである。 PP 179.4

祭司は、日ごとの務めにおける他のいかなる行為よりも、香を捧げるときに、神の御前に一番近づいたのである。聖所の内部のとばりは建物の上部にまで及んでいなかったので、贖罪所の上にあらわれた神の栄光は、第 1 の部屋からも部分的に見ることができた。祭司は、主の前に香を捧げながら、契約の箱のほうを見た。香の煙が立ちのぼ

るとき、神の栄光は贖罪所の上にくだり、至聖所に満ちた。そして、それは両方の部屋にまで満ちて、祭司が幕屋の戸口にまで退かなければならないことがよくあった。この象徴的礼拝において、祭司が自分には見えない贖罪所を信仰によって仰いだように、神の民は今、人の目に見えないが、天の聖所で彼らのためにとりなしておられる偉大なる大祭司キリストに祈りを捧げなければならない。 PP 179.5

イスラエルの祈りと共にのぼった香は、キリストの功績と仲保、キリストの完全な義をあらわしている。これは信仰によって神の民のものとされる。そして、ただこれによってのみ、罪深い人間の礼拝が神に受け入れられる。 PP 179.6

至聖所のとばりの前には、絶えずとりなしの行われる祭壇があり、聖所の前には常供の贖いの祭壇があった。血と香によって、人間は神に近づくことがで きたーーこれらは、偉大な仲保者キリストをさし示す象徴であった。この仲保者を通して、罪人は主に近づくことができ、また、このキリストを通してはじめて、あわれみと救いが悔い改めて信じる魂に与えられるのである。 PP 179.7

祭司が朝夕、香の時間に聖所にはいるとき、日ごとのいけにえは外の庭の祭壇に捧げられる準備ができていた。これは、幕屋に集まった礼拝者たちが、非常な関心を示すときであった。彼らは、祭司の務めを通じて神の前に出るに先だって、まじめに心をさぐり、罪を告白しなければならなかった。彼らは、顔を聖所に向けて心を合わせ、黙祷を捧げた。こうして、彼らの祈願が香の煙と共に立ちのぼった。そして、彼らは信仰によって贖罪の犠牲に予表された約束の救い主の功績にすがった。朝夕のいけにえを捧げるために定められた時間は、清い時とみなされた。やがて、ユダヤ民族全体は、その時間を所定の礼拝の時間として守るようになった。そしてのちにユダヤ人が遠国に捕われの身として散らされたときも、彼らはこの決まった時間に、エルサレムの方角を向いて、イスラエルの神に祈願を捧げた。この習慣はキリスト者にとって、朝夕の祈りの模範である。神は、礼拝の精神のない単なる儀式をきらわれる。しかし、神を愛し、朝に夕に頭をたれて犯した罪の赦しを求め、必要な祝福を願う者たちを大きな喜びをもってごらんになる。 PP 180.1

供えのパンは、絶やすことなく捧げる常供の供え物として主の前に置かれた。こうして、これは、日ごとの犠牲の一部であった。これは、常に主のみ顔の前に置かれていたために、供えのパン、すなわち「み前のパン」と呼ばれていた。これは、霊肉の食物が神から与えられるものであること、しかも、それがキリストの仲保を通してはじめて得られることを認めたものであった。神は、天のパンによって荒野のイスラエルを養われたが、彼らは、いまなお、肉体のための食物であれ、霊の祝福であれ、神の賜物に依存していた。マナと供えのパンは、共に、われわれのために常に神の御前におられる生きたパンであられるキリストを示していた。キリストご自身「わたしは天から下ってきた生きたパンである」と仰せになった（ヨハネ 6：48～51 参照）。パンの前には乳香が置かれた。パンが安息日ごとに取り除かれて新しいパンと代わるとき、乳香は神の前の記念として祭壇でたかれた。 PP 180.2

日ごとの務めのうちで最も重要な部分は、個人個人のために行われた務めであった。悔い改めた罪人は供え物を幕屋の戸口にたずさえ、このいけにえに手を置いて罪を告白し、こうして象徴的にその罪を彼自身から無垢の犠牲の上に移し変えた。それから動物は、彼の手で殺された。祭司は、血を聖所に運んで、この罪人の犯した律法を入れた箱の前方にたれているとばりの前に注いだ。この儀式によって、罪は血によって象徴的に聖所に移された。 PP 180.3

血が聖所の中にたずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、「これは……あなたがたが会衆の罪を負（う）……ため、あなたがたに賜わった物である」（レビ 10：17）と言ったように、祭司がその肉を食べなければならなかった。これらの儀式は、共に、悔い改めた者から聖所へと罪が移されることを象徴したものであった。 PP 180.4

こうしたつとめが、1 年を通じて毎日行われていた。このようにイスラエルの罪が聖所に移されたので聖所は汚れ、そのため、罪を取り除く特別の務めが必要となった。神は、祭壇と同様に 2 つの聖所の部屋についてもあがないをなし、「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない」とお命じになった（同 16：19）。 PP 180.5

年に 1 度、祭司は聖所のきよめのために至聖所にはいった。そこで果たされるつとめが、年ごとのつとめを完了した。 PP 180.6

贖罪の日には、2 匹のやぎが幕屋の戸口に連れてこられ、それぞれにくじが引かれた。すなわち、「1 つのくじは主のため、1 つのくじはアザゼルのため」であった。はじめのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた。そして、祭司はその血をとばりの内部にたずさえて、贖罪所の上に注いだ。「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らの もろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならない」（同 16：16）。 PP 180.7

「そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう」（同 16：21、22）。このように、やぎが送り出されてはじめて、民は自分たちを罪から解放された者とみなした。贖罪のわざがなされている間、すべての人は魂を悩まさなければならなかった。日常の働きをやめて、イスラエルの全会衆は、その日を厳粛に神の御前にへりくだって過ごし、祈り、断食し、心を深くさぐったのであった。 PP 181.1

贖罪に関する重要な真理が、この年ごとの務めによって民に教えられた。1 年間にわたって捧げられた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全な贖いを果たしたのではなかった。それは、ただ、罪が聖所に移される手段を提供したにすぎない。罪人は血を捧げることによって、律法の権威を認め、律法に違反した罪を告白し、世の罪を除くおかたへの信仰を表明した。だが、彼は律法の宣告から完全に解放されたのではなかった。贖罪の日に、大祭司は会衆のための供え物をとり、血をたずさえて至聖所にはいり、それを律法の板の上の贖罪所に注いだ。こうして、罪人の生命を求める律法の要求が満たされた。 PP 181.2

次に、祭司は、仲保者として自分の上に罪を負い、聖所を出てイスラエルの罪の重荷をになった。彼は幕屋の戸口でアザゼルのやぎに手を置き、「イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ」た。そして、これらの罪を背負ったやぎが送り出される時に、罪はやぎと共に、永遠に民から切り離されたものとみなされた。これが、「天にある聖所のひな型と影」で行われた礼拝であった（ヘブル 8：5）。 PP 181.3

すでに述べたように、地上の聖所は山で示された型に従ってモーセが建てたものである。それは、「今の時代に対する比喩」であって、「供え物やいけにえ」が捧げられた。そのふたつの聖なる部屋は、「天にあるもののひな型」であり、われらの大祭司キリストが、「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる」（同 9：9、23、8：2）。使徒ヨハネが幻のうちに、天にある神の宮を示されたとき、彼は、「7 つのともし火が、御座の前で燃えていた」のを見た。また、天使が「金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった」（黙示録 4：5、8：3）。ここで預言者は、天の聖所の第 1 の部屋を見ることが許された。そして、彼はそこに、地上の聖所では金の燭台と香の祭壇であらわされていた「7 つのともし火」と「金の祭壇」を見た。再び「天にある神の聖所が開けて」、彼は奥のとばりの内部、すなわち、至聖所を見た。ここに彼は、モーセの作った神の律法をいれた清い箱によって示されていた「契約の箱」を見た（黙示録 11：19）。 PP 181.4

モーセは、「見たままの型にしたがって」地上の聖所を造った（使徒行伝 7：44）。パウロは、それが完成されたとき、「幕屋と儀式用の器具いっさい」は「天にあるもののひな型」であったと述べている（ヘブル 9：23）。ヨハネも天に聖所を見たと言っている。イエスが、われわれのために奉仕しておられるその聖所が本来のものであって、モーセの建てた聖所はその写しであった。 PP 181.5

天の宮は王の王である神の住居である。そこでは、千の幾千倍の者がこれに仕え、万の幾万倍の者がその前にはべり、輝かしい守護のセラピムが顔をおおって崇敬を捧げる永遠のみ座の栄光で満ちている。地上のいかなる建造物も、その広大さと輝かしさを

あらわすことができない。だが、天の聖所と、人 間のあがないのためにそこで行われる大いなるみわざとに関する重要な真理が、地上の聖所とそのつとめによって教えられた。 PP 181.6

われわれの救い主は、昇天ののち大祭司としての務めを始められた。「キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さった」とパウロは言っている（同 9：24）。キリストの務めが 2 つに大きく分けられ、そのおのおのがある期間を占め、天の聖所において明確な場所を占めるように、象徴的な務めも日ごとの奉仕と、年ごとの奉仕の 2 区分から成り、それぞれに幕屋の部屋が 1 つずつあてられていた。 PP 182.1

キリストが昇天に際して神の御前に現れ、悔い改めた罪人のためにご自分の血による嘆願をなさったように、祭司は日ごとの務めにおいて、罪人のために聖所でいけにえの血を注いだ。 PP 182.2

キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の時まで聖所の記録に残るのである。そのように象徴においても、罪祭の血は悔い改めた者から罪を取り除いたが、罪は贖罪の日まで聖所に残った。 PP 182.3

大いなる最後の報いの日に、死者は、「そのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれ」る（黙示録 20：12）。このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、清められるのである。象徴においては、この大いなる贖罪のみわざ、つまり、罪を消し去ることは、贖罪の日の務めによってあらわされた。すなわち、地上の聖所を汚していた罪を除いて清めることは、罪祭の血によってなしとげられた。真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された。 PP 182.4

サタンは罪の創始者であり、神のみ子の死を招いたあらゆる罪の直接の扇動者であるから、正義は、サタンが最後の刑罰を受けることを要求する。人間を贖い、宇宙を罪

からきよめるキリストのみわざは、天の聖所から罪を取り除いて、これらの罪をサタンの上に置き、サタンが最後の刑罰を負うことによって閉じられる。そのように、象徴的奉仕においても 1 年間の務めは、聖所の清めと、アザゼルのやぎの頭の上に罪を言いあらわす告白をもって閉じられた。 PP 182.5

こうして、幕屋の務めと、のちにこれにとって代わった神殿の務めから、民はキリストの死とその務めに関する心理を日ごとに学び、そして、毎年 1 度、彼らの心はキリストとサタンとの間の大争闘の終結、宇宙が罪と罪人から清められる最終的な清めに向けられたのであった。 PP 182.6

第 31 章　ナダブとアビウの罪

本章は、レビ記 10：1～11 に基づく PP 182.7

幕屋が神にささげられたあとで、祭司たちは清い務めにたずさわるために聖別された。これらの式典は、7 日を要し、毎日特別の儀式があった。8 日目から祭司たちは、それぞれの務めを始めた。アロンは、むすこたちに助けられて、神が要求された犠牲を捧げ、両手を上げて民を祝福した。それまで、すべてが神の命じられた通りに行われてきた。そして、神は、犠牲を受け入れ、ご自分の栄光を著しくあらわされた。火が主のもとから下って、祭壇の上の捧げ物を焼き尽くした。民は、畏怖と強い関心とをもって、この神の力の驚くべきあらわれを見つめた。彼らは、そこに神の栄光と恵みのしるしを見、いっせいに賛美と崇敬の叫びをあげ、主のみ前にあるかのように顔を伏せた。 PP 182.8

しかし、その後まもなく、恐るべき不幸が、突然大祭司の一家にふりかかった。礼拝のとき、民の祈祷 と賛美が神のもとにのぼっていく間に、アロンのふたりのむすこが、それぞれ香炉をとり、主の前にうるわしいかおりとして立ちのぼる薫香をそれにたいた。だが、彼らは、主の命令にそむいて「異火（ことび）」を使った。薫香をたくにあたって、彼らは神ご自身がともし、このために使うように命じられた神聖な火を用いずに、普通の火を用いてしまった。この罪のために、火が主の前から出て、民の見ている前で彼らを焼き滅ぼした。 PP 182.9

ナダブとアビウは、モーセとアロンに次いで、イスラエルのうちで高い地位にあった。彼らは、特に主からの栄誉を受け、70 人の長老たちと共に、山で主の栄光を見ることを許された者たちであった。しかし、それだからといって、彼らの罪の言い訳がなりたったり、それが軽く見すごされたりしてはならなかった。むしろ、このために彼らの罪はいっそう重くなった。人は、大きな光を受けたからとか、また、イスラエルの君たちのように山にのぼって神と交わり、神の栄光に浴する特権を得たからといって、自分はそのあとで罪を犯しても罰せられないと考えてはならない。また、このような栄誉

を受けたのであるから、神は自分の罪をきびしく罰せられることはないと思ってはならない。そのように考えることは致命的な誤りである。与えられる光と特権が大きければ、その光に応じた徳と聖潔がそこに要求される。神は、これ以下のものはお受けになることができない。大きな祝福や特権を得たからといって、もう安全であると思い、軽率にふるまってはならない。それらは、罪を黙認するものでもなければ、また、神が、その人々を厳格にあつかわれないと思ってよいものでもない。神から与えられた恩典はみな、もっと熱烈な精神をもち、活発に努力して、神のみ旨の遂行を活発に行うための神の手段である。 PP 183.1

ナダブとアビウは、少年時代に自制の訓練を受けなかった。父親が相手の言いなりになる性質で、正しいことに対する確固たる態度が欠けていたために、彼は子供のしつけをないがしろにした。むすこたちは好きなことをするにまかせてあった。彼らはかってにふるまう習慣が長く続いたために、最も神聖な職務の責任を負わせられても、その習慣からぬけきれなかった。彼らは、父親の権威を尊ぶことを教えられていなかった。そして、彼らは神の要求に厳格に従う必要を認めなかった。アロンがあやまってむすこたちを甘やかしたために、ついに彼らは神の刑罰を受けなければならなくなった。 PP 183.2

神は、民らが崇敬と畏怖をもって神に近づき、しかも神の定められた方法に従わなければならないことを教えようとなさった。神は、なまはんかな従順をお受けになることができない。厳粛な礼拝のときにあたって、ほとんどすべてのことが神の指示どおりに行われるというだけでは不十分であった。戒めから離れ、世俗のものと神聖なものとを区別しない者に、神はのろいを宣告しておられる。神は預言者によってこう宣言なさる。「わざわいなるかな、彼らは悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい、暗きを光とし、光を暗しと……する。わざわいなるかな、彼らはおのれを見て、賢しとし、みずから顧みて、さとしとする。……彼らはまいないによって悪しき者を義とし、義人からその義を奪う。……彼らは万軍の主の律法を捨て、イスラエルの聖者の言葉を侮った」（イザヤ 5：20～24）。だれも自分を欺いて、神の戒めの一部は不必要であるとか、神はご自分の要求なさることの代わりのものでもお受けになるとか考えてはならない。

預言者エレミヤは、「主が命じられたのでなければ、だれが命じて、その事の成ったことがあるか」と言った（哀歌 3：37）。神は、みことばの中に、人がその好みに従って服従してもしなくても、結果は同じだというような命令は 1 つもしておられない。もし、人間が厳格な従順以外の道を選ぶなら、「その終りはついに死に至る道となる」のである（箴言 14：12）。 PP 183.3

「モーセはまたアロンおよびその子エレアザルとイタマルとに言った、『あなたがたは髪の毛を乱し、また衣服を裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないため……である。……あなたがたの上に主の注ぎ油があるからである』」。偉大な指導者モーセは、その兄弟に、「わたしは、わたしに近づく者のうちに、 わたしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであろう」という神のことばを思い起こさせた（レビ 10：6、7、3）。アロンは無言のままだった。恐ろしい罪のために、なんの警告もなしにむすこたちが断たれたので、父親の胸ははりさけそうであった。だが、彼は自分の感情を表さなかった。この罪は自分が義務を怠ったためであることを、彼はここで悟った。彼は悲嘆をあらわして、罪に共感するそぶりを見せてはならなかった。会衆を神に対してつぶやかせてはならなかった。 PP 183.4

主は、他の人々に恐怖をいだかせるために、ご自分の罰の正当性を神の民に認めさせようと望まれる。イスラエルの中には、この恐ろしい刑罰を警告として、神の忍耐を軽んじて滅亡する運命から救われた者が出るのであった。自分の罪の言い訳をしようとする罪人に対して、まちがった同情を示す者を、神は責められる。罪には道徳的な感覚を失わせる作用があり、そのために悪を行う者は、その罪の大きさを自覚しない。そして、それを悟らせる聖霊の力がないので、彼は自分の罪に対してなかば盲目的な状態に陥っている。このような罪に陥っている者に、その危険を教えるのは、キリストのしもべたちの務めである。罪の本性と罪から生ずる結果に対して、罪人の目を盲目にさせて警告の効力を失わせる者は、そうすることが自分たちの愛の証拠であるとうぬぼれがちである。しかし、実は、彼らは神の聖霊のわざに正面から対立して、これを妨げるために働いている。彼らは、罪人を欺いて、滅亡の断崖にいこわせている。彼らは、自分た

ちでその罪にあずかり、罪人が悔い改めないことの恐るべき責任を背負っている。このまちがった同情の結果、実に多くの人々が滅びに陥ってしまった。 PP 184.1

もしもナダブとアビウが、初めから酒をほしいだけ飲んで半ば泥酔状態になっていなければ、この致命的な罪を犯すことはなかったであろう。彼らは神の臨在のあらわれる聖所にはいる前には、細心の注意を払って、厳粛に準備することが必要であることを承知していた。だが、彼らは不節制によって、清い職務にたずさわる資格を失ってしまった。 PP 184.2

彼らの心は混乱し、道徳的感覚は鈍り、神聖なものと世俗のものとの区別ができなくなってしまった。アロンとそのほかの子らはこう警告された。「あなたも、あなたの子たちも会見の幕屋にはいる時には、死ぬことのないように、ぶどう酒と濃い酒を飲んではならない。これはあなたがたが代々永く守るべき定めとしなければならない。これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものと清いものとの区別をすることができるため、また主が……語られたすべての定めを、イスラエルの人々に教えることができるためである」（同 10：9～11）。飲酒はからだを弱め、思想を混乱させ、道義を低下させる作用を持つ。それは、人に聖なるものの神聖さと、神の要求の拘束力を認めさせない。清い責任ある地位についた者はみな、きびしく節制を守って頭脳を明晰にして善悪を区別し、原則に堅く立ち、公正を行い、あわれみの心を持つ知恵がなければならなかった。 PP 184.3

それと同じ義務が、キリストに従う 1 人 1 人に負わされている。使徒ペテロは、「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である」と言明している（Ｉペテロ 2：9）。われわれは創造主に喜ばれる礼拝をささげることができるように、あらゆる力をできるだけ最善の状態に保つことを神から求められている。酒が用いられれば、これらのイスラエルの祭司たちの場合と同じ結果が生じるであろう。良心は罪に対する感受性を失い、次第に悪に慣れて、ついに世俗のものと神聖なものの区別が見分けられなくなってしまう。そのとき、われわれはどうして神が要求される標準に合致できるであろうか。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のもので

はないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである」。あらゆる時代のキリストの教会に、この厳粛で 恐るべき警告が与えられている。すなわち、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」（Ｉコリント 6：19、20、10：31、3：17）。 PP 184.4

第 32 章　律法と契約

アダムとエバは、創造の当初、神の律法のことを知っていた。彼らは、律法の要求を知っていた。戒めは彼らの心に書かれていた。人間が罪を犯して堕落したときに、律法は変更されなかった。しかし、彼らを再び服従に立ち帰らせるために救済策が設けられた。救い主の約束が与えられ、大いなる罪祭、キリストの死を予表した捧げ物の犠牲制度が設けられた。しかし、もし神の律法を犯すことがなかったならば、死もなければ、救い主の必要もなかった。従って、犠牲の必要もなかった。 PP 185.1

アダムは、彼の子孫に神の律法を教えた。そして、神の律法は、父から子へと後の世代に伝わっていった。しかし、人間の贖罪のために恵み深い備えが与えられたにもかかわらず、それを受け入れ、服従した者は少なかった。この世界は罪のために非常に堕落したために、洪水によって腐敗から潔められなければならなかった。律法は、ノアとノアの家族によって保存された。そして、ノアは、子孫に十戒を教えた。人類が再び神から離れたとき、主は、アブラハムを選び、彼についてこう言われた。「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」（創世記 26：5）。 PP 185.2

アブラハムに割礼の儀式が与えられた。割礼を受けた者は、神の奉仕に献身したというしるしであった。それは、彼らが偶像礼拝から離れて、神の律法を守るという契約であった。アブラハムの子孫は異教徒と同盟を結んで、彼らの風習を取り入れて、この契約を守らなかったために、エジプトに滞在して奴隷生活を送ることになった。ところが、彼らが偶像教徒と交わったり、エジプト人にしいて屈服させられたりしたために、神の戒めは、異教主義の下劣で残忍な教えによって、さらに汚された。そこで、主は、彼らをエジプトから救出されたとき、栄光に包まれ、天使たちを従えて、シナイに降りてこられて、恐ろしい威光をもって、すべての民に聞こえるように、主の律法を語られた。 PP 185.3

主は、その時においても、忘れることの早い人間の記憶に主の戒めを委ねることをせず、それを石の板に書かれた。主は、イスラエルが、ご自分の清い戒めに異教の伝説を混合したり、あるいは主の律法を人間の法令や習慣と混同したりすることが全くないようにされた。しかし、主は、ただ十戒の戒めを彼らに与えただけでやめられなかった。人々は、すぐに誤った方向に惑わされるために、主は、1 つでも誘惑の戸をあけておかないようにされた。 PP 185.4

モーセは、神がお命じになるままにおきてを書き、その要求項目を細かく人々に教えるように命じられた。人間の神と同胞に対する義務、そして、他国人に対する義務に関するこのような教えは、十戒の原則を単に拡大、明細にしたものであって、だれも考えちがいをしないようにするためであった。これらは、石の板に書かれた十の戒めの神聖さを守るためのものであった。 PP 185.5

アダムが堕落後に、神から与えられ、ノアが保存し、そしてアブラハムが守った神の律法を人間が遵守していたのであれば、割礼の儀式の必要はなかったはずであった。そして、もしもアブラハムの子孫が契約を守り、そのしるしの割礼を行っていたのであれば、偶像礼拝に惑わされたり、エジプトの奴隷生活に苦しむ必要もなかったのである。彼らは、神の律法を心の中にたくわえていて、それをシナイから宣言されることも、石の板に刻まれることも必要がなかったことであろう。そして、人々が十戒の原則を実行していたのであれば、モーセに追加的に指示が与えられる 必要もなかったことであろう。 PP 185.6

アダムに与えられた犠牲制度もまた、アダムの子孫によって曲解された。迷信、偶像礼拝、残酷、不道徳などが、神の定められた単純で意味深い儀式を腐敗させた。イスラエルの人々は、長い間偶像教徒と接触していたために、彼らの礼拝に異教の習慣を多く取り入れていた。そこで、主は、シナイで犠牲の儀式に関して明確な指示をお与えになった。幕屋が完成したあとで、主は、贖罪所の上の栄光の雲の中からモーセと交わり、ささげ物の制度に関する十分な指示と、聖所で続けるべき礼拝の形式とをお与えになった。こうして礼典律は、モーセに与えられたもので、モーセはそれを書物に書いた。し

かし、シナイから語られた十戒の律法は、石の板の上に神ご自身がお書きになったもので、契約の箱の中に大切に保存された。 PP 186.1

この礼典律のことを言っている聖句を用いて、この 2 つの制度を織りまぜて考え、道徳律は廃されたということを証明しようとする人々が多くいる。しかし、これは聖書の曲解である。この 2 つの制度には、実に明瞭な区別がある。儀式の制度は、キリストとキリストの犠牲、そしてキリストの祭司職を示す象徴によって成り立っている。犠牲と儀式のこの礼典律は、世の罪を取り除く神の小羊であられるキリストの死という型の実体があらわれるまで、ヘブル人が行うべきものであった。そのとき、すべての犠牲の捧げ物は、終わることになっていた。キリストが、「取り除いて、十字架につけてしまわれた」のはこの律法であった（コロサイ 2：14）。しかし、十戒の律法に関して、詩篇記者は、「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり」と宣言している（詩篇 119：89）。キリストご自身も、「わたしが律法……を廃するためにきた、と思ってはならない。……よく言っておく」。――この断言をできるかぎり強調して――「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」と主は言われた（マタイ 5：7、18）。ここでキリストは、神の律法が過去において、また当時何を要求したかということばかりでなく、これらの律法の要求は、天地の続くかぎり継続するものであることを教えられた。神の律法は、神のみ座と同様に不変のものである。律法はあらゆる時代の人間に、服従を要求し続けるのである。 PP 186.2

シナイから宣言された律法に関して、ネヘミヤは「あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け」と言った（ネヘミヤ 9：13）。「異邦人への使徒」パウロは、「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」と言っている（ローマ 7：12）。これは、十戒以外のものではあり得ない。なぜなら、これは、「あなたはむさぼってはならない」という律法だからである。 PP 186.3

救い主の死は、典型と影の律法を廃したけれども、われわれの道徳律に対する義務を少しも軽減しなかったのである。律法を犯した罪を贖うために、キリストが死ななけ

ればならなかったという事実は、かえって律法の不変性を証明したのである。神の律法を取り消し、旧約を廃止するためにキリストが来られたと主張する人々は、ユダヤ時代が暗黒で、ヘブルの宗教が単なる形式と儀式だけであったように言うが、それはまちがいである。神が選民を扱われた方法が記されている聖なる歴史の全体のなかに、偉大な、わたしは有ると言われたおかたの栄光に輝く足跡をたどることができる。主が、イスラエルの唯一の支配者として認められ、律法を人々にお与えになった時ほどに、彼の力と栄光が、人々にあらわされた時はなかった。そのとき、王権は人間の手に握られていなかった。目にこそ見えなかったが、イスラエルの王のはなばなしい出現は、言葉に表現できない荘麗さといかめしさがあった。 PP 186.4

このような神の臨在があらわされたときは、いつもキリストによって神の栄光が現された。救い主がこの世に降臨なさった時ばかりでなく、人類の堕落およびその贖罪の約束が与えられたとき以来、各時代を通じて「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」ておられた（Ⅱコリント 5：19）。キリストは、 家長時代とユダヤ時代の両時代にわたって、犠牲制度の基礎であり中心であった。われわれの先祖が罪を犯して以来、神と人間の間には直接の交わりはなかった。父なる神は、この世界をキリストの手にお委ねになった。そして、神は、キリストの仲保の働きによって、人間を救い、神の律法の権威と神聖さを擁護なさるのである。堕落した人間と天との交わりは、すべてキリストを通じて行われた。われわれの先祖に贖罪の約束を与えたのは、神のみ子であった。家長たちにご自分をあらわされたのは、キリストであった。アダム、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてモーセなどは福音を理解した。彼らは人間の身代わりと保証であられるキリストによる救いを待望した。これらの古代の聖者たちは、この世界に人間となって来られることになっていた救い主と交わったのであった。彼らのなかにはキリストや天使たちと顔を合わせて話した者もあった。 PP 186.5

キリストは、荒野におけるヘブル人の指導者であられた。彼は、主とも呼ばれた天使なる神であって、雲の柱に包まれて、軍勢の前に進まれた。ただそれだけでなく、イスラエルに律法を与えられたのも彼であった。キリストは、シナイの荘厳な栄光の中か

ら、すべての人に父なる神の十戒を宣言された。石の板に刻まれた律法をモーセに与えたのも彼であった。 PP 187.1

預言者によって人々に語られたのは、キリストであった。使徒ペテロは、キリスト教会にあてて、「あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである」と言っている（Ｉペテロ 1：10、11）。旧約聖書を通して、われわれに語るのはキリストの声である。「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」（黙示録 19：10）。 PP 187.2

イエスは、ご自分が人々の間におられて教えられたときに、人々の心を旧約にお向けになった。イエスはユダヤ人に、「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われた（ヨハネ 5：39）。このときは、旧約聖書が、聖書として存在していたに過ぎなかった。また、人の子は、「彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう」と言い、さらにつけ加えて、「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」と言われた（ルカ 16：29、31）。 PP 187.3

礼典律は、キリストによって与えられた。それを行う必要がなくなった後になって、パウロはユダヤ人に礼典律の真の位置と価値とを述べ、それが贖罪の計画の中でどんな位置を占め、キリストの働きにどんな関係があったかを示した。そして偉大な使徒パウロは、この律法が栄えあるものであって、それを創設された神にふさわしいものであると宣言するのである。聖所の中の厳粛な儀式は、その後の各時代を通じてあらわされる大真理を象徴していた。イスラエルの祈りと共にのぼる香の煙は、キリストの義を代表している。ただこれだけが、罪人の祈りを神に受け入れられるものにする。血のしたたる祭壇上の犠牲は、来たるべき贖い主を示していた。そして、至聖所からは神の臨在のしるしが輝き出ていて、人はそれを認めることができた。こうして、暗黒と背教の時代

を通じて、人々の心の中に信仰が生々しく保たれ、ついに、約束のメシヤの来臨の時にまで及んだのである。 PP 187.4

イエスは、人間のかたちをとって地上に来られる前から、ご自分の民の光――世の光であられた。罪におおわれた世界の暗黒を貫いた最初の光は、キリストから来たものであった。地上の住民に注がれた天の輝かしい光はすべて彼から来たのである。キリストは贖罪の計画の中で、アルファであり、オメガであり――始めであり、終わりであられる。 PP 187.5

救い主が、罪の赦しのためにその血を注ぎ、天にのぼって、「わたしたちのために神のみまえに出て下さっ」てからというものは、光は、カルバリーの十字架と天の聖所から流れ出ている（ヘブル 9：24）。しかし、われわれにさらに明らかな光が与えられたからといって、来たるべき救い主を型によって示された初期 の人々を軽蔑してはならない。キリストの福音は、ユダヤの制度を明らかにし、礼典律を意義深いものにした。新しい真理が啓示されるにつれて、初めから与えられていた真理がより明瞭に理解され、神がご自分の選民をあつかわれる方法のなかに、神の品性とみ旨があらわされた。われわれが新しい光に浴することに、人間を救おうとされる神のみこころのあらわれである贖罪の計画が、さらに明らかに理解されるようになる。われわれは、霊感の言葉の中に新しい美と力とを見る。そして、ますます深く、そのページの研究に没頭するのである。 PP 187.6

神は、ヘブル人と外部の世界との間に隔ての壁をおき、人類の他の大部分を度外視して、イスラエルだけを保護し、愛されたという考えを持っている者が多い。しかし、神の民が、自分たちと同胞との間に隔ての壁を作ることは神のみこころではなかった。無限の愛にあふれた神のみこころは、地のすべての住民に手をさしのべておられた。彼らは、神を拒んでしまったが、神は常にご自分を彼らにあらわそうと努め、彼らを神の愛と恵みにあずかる者にしようとなさった。神の祝福が選民に与えられたのは、彼らが他を祝福するためであった。 PP 188.1

神はアブラハムを召し、アブラハムに繁栄と名誉をお与えになった。そして、アブラハムが旅をしたすべての国々で、彼の忠実さが人々に光を輝かした。アブラハムは、

彼のまわりの人々から離れて生活しなかった。アブラハムは、近隣の国々の王たちと友好的関係を持続し、その王たちの中には、アブラハムを非常に尊敬した者もあった。そして、アブラハムの正直、無我、勇気慈悲の心などは、神の品性のあらわれであった。メソポタミヤ、カナン、エジプト、そしてソドムにおいても、神の代表者によって天の神があらわされた。 PP 188.2

そのように、神はヨセフによって、エジプトの人々と、この強国に関係のあったすべての国々にご自身をあらわされたのである。神は、なぜ、エジプト人の中でヨセフを高めようとされたのであろうか。神は、ヤコブの子らに対する神のみこころを他の方法によって完成なさることもできたのである。しかし、神は、ヨセフを光とすることを望まれた。そして、ヨセフを王の宮殿に住ませ、天からの光が遠いところにも近いところにもひろがっていくようにされたのである。その知恵と正義、日常生活における潔白と愛、また、偶像教国の人々の幸福のための献身などによって、ヨセフはキリストの代表者となっていたのである。エジプト全国の人々が、感謝と賛美の心をいだいて、自分たちの恩人ヨセフを見るときに、彼らはそこに自分たちの創造主と、贖い主イエスの愛を認めるようになるためであった。同様に神はまた、モーセを用いて、地上最大の王国の王位のかたわらに光を置かれた。それは、知ろうと思う者は、だれでも真の生きた神について学ぶことができるためであった。そして、この光のすべては、エジプト人の上に神の刑罰のみ手が伸べられる前に与えられたのである。 PP 188.3

エジプトからイスラエル人が救い出されたことによって、神の力が遠近に広く知れ渡った。エリコ城内の好戦的な人々は、震えおののいた。「わたしたちはそれを聞くと、心は消え、あなたがたのゆえに人々は全く勇気を失ってしまいました。あなたがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられるからです」とラハブは言った（ヨシュア 2：11）。出エジプト後、数世紀たってからも、ペリシテ人の祭司たちは、エジプトに降った災害のことを人々に思い起こさせて、イスラエルの神に反抗しないように警告を発した。 PP 188.4

神は、イスラエルを召し、祝福し、高められた。それは、彼らが神の律法に従い、彼らだけが神の恵みを受け神の祝福をひとり占めにするためではなくて、彼らを通じて、

地のすべての住民に神ご自身をあらわすためであった。神が、まわりの偶像教徒とは離れていなければならないと彼らにお命じになったのは、そのためであった。 PP 188.5

神は、偶像礼拝とそれに伴うすべての罪を憎まれる。そして、神は他の国民と交わって、「彼らのおこないにならって」神を忘れてはならないとお命じになった（出エジプト 23：24）。神は、彼らの心が神から離れ去ってはいけないので、異教徒との結婚を お禁じになった。神の民が「自らは世の汚れに染まずに」身を清く保つことは、今日と同様昔も必要であった（ヤコブ 1：27）。世は真理と義に反するものであるから、世の精神にとらわれないようにしなければならなかった。しかし、神は、神の民が自己だけを正しいとする排他的精神をもって自分を世から区別し、世に感化を及ぼさないようにすることは、神のみこころではなかった。 PP 188.6

各時代のキリストの弟子たちは、主と同じように世の光となるべきであった。「山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中（すなわち世の中）のすべてのものを照させるのである」と救い主は言われた。また、つけ加えて、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と言われた（マタイ 5：14、15、16）。エノク、ノア、アブラハム、ヨセフ、モーセなどは、この通りのことをしたのである。神がイスラエルの人々にするようにご計画になったのは、まさしくこのことであった。 PP 189.1

周囲の人々に光を輝かさないで、それを隠してしまったのは、サタンに支配された彼らの邪悪な不信の心からであった。彼らが、異教徒の罪深い習慣に従ったのも、あるいは、神の愛と保護とは自分たちだけのものであるかのようにふるまって、高慢に排他的になったのも、この同じ頑迷な精神のためであった。 PP 189.2

聖書には、永遠に不変の律法と、仮の一時的な律法の 2 つの律法が示されているのと同様に、契約にも 2 種類ある。恵みの契約は、まず、エデンで人間に与えられたのである。人間が堕落したあとで、女のすえがへびのかしらを砕くという約束が与えられた。この契約は、すべての人に罪の赦しを与え、キリストを信じる信仰によって、その

後従うことができるように、神の恵みの助けを与えた。それは、また、神の律法に忠誠を尽くすことを条件にして、永遠の命を約束した。こうして、家長たちは、救いの希望を与えられたのである。 PP 189.3

この同じ契約は、アブラハムにくり返されて、「地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」という約束が与えられた（創世記 22：18）。この約束はキリストを指示したものであった。アブラハムは、このことを理解し（ガラテヤ 3：6、16 参照）、キリストに頼って罪の赦しを求めた。彼が義と認められたのはこの信仰であった。アブラハムとの契約は、神の律法の権威をも維持した。主は、アブラハムに現れて、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われた（創世記 17：1）。この忠実なしもべについて、神は、「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」とあかしされた（同 26：5）。そして、主は、「わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであろう」と彼に宣言された（同 17：7）。 PP 189.4

この契約はアダムと取りかわされ、また、アブラハムにくり返して与えられたとはいえ、キリストの死によって初めて批准されたのである。これは、初めて贖罪の知らせがかすかながら与えられたときから、神の約束によって存在していたのである。人々は、これを信仰によって受け入れていた。しかし、それがキリストによって批准されたときに、それは新しい契約と呼ばれた。神の律法がこの契約の基礎であった。律法は、単に、神のみこころに人々をもう一度調和させ、彼らが神の律法に従うことができるようにする手段であったに過ぎない。 PP 189.5

もう 1 つの契約は、聖書で「古い」契約と呼ばれているが、それは、シナイで神とイスラエルの間に結ばれたもので、それは、そのとき犠牲の血によって批准された。アブラハムに与えられた契約は、キリストの血によって批准され、「第 2 の」または、「新しい」契約と呼ばれている。それは、この契約に印を押す血が、第 1 の契約の血のあとに流されたからである。新しい契約が、アブラハムの時代に効力をもっていたことは、そのとき、神の約束と誓いとによって保証されたことによって明らかである。

「それは、偽ることのあ り得ない神に立てられた 2 つの不変の事がらによって」である（ヘブル 6：18）。 PP 189.6

ところが、もし、アブラハムに与えられた契約が、贖罪の約束を含んだものであったならば、なぜ、シナイでもう 1 つの契約を結ぶ必要があったのであろうか。人々は、その奴隷時代に、神に関する知識と、アブラハムに与えられた契約の原則の大部分を忘れてしまっていた。神は、彼らをエジプトから救出し、神の力と恵みを彼らにあらわし、彼らが、神を愛し、信頼するようになることを望まれた。神は、彼らを紅海にお導きになった。そこでエジプト人の追跡によって、彼らは全く逃げ場を失ってしまった。それは彼らが自分たちには全く力がなく神の助けの必要なことを悟るためであった。このようにしてのちに、神は彼らを救い出されたのである。こうして、彼らは神に対する愛と感謝に満たされ、神が彼らを救う力を持っておられることを確信した。神は、地上の奴隷生活からの救済者として、ご自分を人々に結びつけられた。 PP 190.1

しかし、さらに大きな真理を彼らの心に深く印象づけなければならなかった。彼らは、偶像礼拝と腐敗のなかで生活していたので、神の神聖さと、自分たちの心のはなはだしい罪深さと、自分たちの力だけでは、神の律法を守ることができないこと、そして、彼らには、救い主が必要であることを真に自覚していなかった。こうしたことを、すべて、彼らは学ばなければならなかった。 PP 190.2

神は、彼らをシナイに導き、ご自分の栄光をあらわされた。神は、彼らに律法を与え、服従することを条件にして、大きな祝福をお約束になった。「それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、……あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」（出エジプト 19：5、6）。人々は、自分たちの心の罪深さと、キリストの助けがなくては神の律法を守ることができないことを自覚しなかった。そして、彼らは直ちに神と契約を結んでしまった。彼らは、自分たちの義を確立することができると感じて、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」と宣言した（同 24：7）。彼らは、恐るべき威光のうちに律法が宣言されるのを見、山の前で恐れおののいた。しかし、それにもかかわらず、その後わずか数週間しかたたないうちに、彼らは神との契約を破り、偶像にひ

ざまずいて礼拝したのである。彼らは、契約を破ってしまったために、神の恵みを受けることは望めなくなった。そして、今、自分たちの罪深さと、ゆるしの必要を認めた彼らは、アブラハムの契約にあらわされ、そして、犠牲のささげものによって示された救い主の必要を感じるようになった。彼らは今、信仰と愛によって、罪の奴隷からの救い主としての神に結びつけられた。こうしてこそ、彼らは新しい契約の祝福を感謝する用意ができたのである。 PP 190.3

「古い契約」の条件は、従って生きよということであった。「人がこれを行うことによって生きるものである」。しかし、「この律法の言葉を守り行わない者はのろわれる」（エゼキエル 20：11、レビ 18：5 参照、申命記 27：26）。「新しい契約」は、「さらにまさった約束」によるもので、罪の赦しの約束と、心を新たにする神の恵みと、神の律法の原則に心を一致させる約束によるのである。「しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。……わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」（エレミヤ 31：33、34）。 PP 190.4

石の板に刻まれたのと同じ律法が、聖霊によって心の板に書かれるのである。自分自身の義を確立させようと努力するかわりに、われわれは、キリストの義を受け入れる。キリストの血がわれわれの罪を贖うのである。キリストの服従が、われわれに代わって受け入れられる。こうして、聖霊によって新しくされた心は、「御霊の実」を結ぶのである。キリストの恵みによって、われわれは心に書かれた神の律法に従って生きるのである。キリストのみ霊を持っているから、彼が歩かれたように歩くのである。彼は預言者によって、ご自分のことを言われた。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわ たしの心のうちにあります」（詩篇 40：8）。そして、彼がこの地上におられたときには、「わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない」と言われた（ヨハネ 8：29）。 PP 190.5

使徒パウロは、新しい契約のもとにおける信仰と律法の関係を明らかに述べている。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエ

ス・キリストにより、神に対して平和を得ている」「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである」「律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を」――人間は罪深い性質を持っているから、律法を守ることができない。だから律法は、人間を義とすることはできない――「神は……御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである」（ローマ 5：1、3：31、8：3、4）。 PP 191.1

神の働きは、その発展の段階に相違があり、そして、ちがった時代の人々の要求に応じるために、そのカのあらわれ方に相違があったけれども、すべての時代において同じであった。最初の福音の約束から始まって、家長時代とユダヤ時代を通じ、そして、現代に至るまで、贖罪の計画にある神のみこころは、徐々に展開されて与えられたのである。ユダヤの律法の儀式や礼典の中に象徴された救い主は、福音の中に啓示されたものと全く同じであった。神の姿をかこんでいた雲は取り去られた。おおい隠していたものが除かれた。そして、イエス、世の贖い主はお現れになったのである。シナイから律法を宣言された方、そして、モーセに礼典律の戒めをお与えになった方は、山の上で説教をされたお方と同じである。律法と預言者の基礎として、彼が宣言された神への愛という大原則は、彼がモーセを通じてヘブル人に語られたものの反復に過ぎなかった。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」（申命記 6：4、5、レビ 19：18）。両時代を通じて、教師は同じである。神の要求されるところは同じである。神の統治の原則は同じである。なぜなら、「変化とか回転の影とかいうものはない」お方から、すべてのものがでているからである（ヤコブ 1：17）。 PP 191.2

第 33 章　シナイからカデシへ

本章は、民数記 11、12 章に基づく PP 191.3

幕屋の建設は、イスラエルがシナイに到着してから、しばらくの間始まらなかった。聖所は、エジプトを出て 2 年目の年の初めになって建て始められた。その後、祭司の聖別、過越の祭、民の人数の調査、民事、宗教制度の重要な取りきめの完成などがあって、人々は約 1 年近くをシナイの宿営で過ごした。彼らの礼拝は、ここで形を整え、律法が国家の政治のために与えられ、カナンの地に入る準備として、強力な組織づくりが行われた。 PP 191.4

イスラエルの政治の特徴は、組織が実に行き届いていることであって、その徹底的なことと共に、単純なことも驚くばかりであった。神が創造されたすべての物の完全と整然さに表示された著しい秩序が、ヘブルの制度にあらわれていた。神が権威と統治の中心であって、イスラエルの王であった。モーセは、神の任命によって、彼らの目に見える指導者として立ち、神の名によって律法を執行した。後に、部族の長老の中から 70 人の長老が選ばれて、国家の一般民事を扱ってモーセを助けた。次に祭司たちがいて、聖所で主のみこころをうかがった。かしら、またはつかさが部族を支配した。その下に、「1000 人の長、100 人の長、50 人の長、10 人の長」がいて、最後 にいろいろな役をするつかさびとがいた（申命記 1：15）。 PP 191.5

ヘブル人の天幕は、秩序整然としていた。それは 3 大区分に分けられ、それぞれの区分の宿営する場所が定まっていた。中央には目に見えない王の住居である幕屋があった。祭司とレビ人はその周囲に配置された。その外側に、他のすべての部族が天幕を張った。 PP 192.1

幕屋とそれに付属する物は、宿営中も旅行中もすべてレビ人に委ねられた。幕屋が進むときは、レビ人が幕屋を取りくずさなければならなかった。停止する場所に到着すると、彼らが幕屋を組み立てた。他の部族の人は近寄ると殺されるので、だれも近づくことはできなかった。レビ人は、レビの 3 人のむすこの子孫に従って、3 組に分けられ

て、それぞれに特別の場所と仕事が与えられた。幕屋の前の一番近いところに、モーセとアロンの天幕があった。南のほうに、契約の箱その他の器物の管理をするコハテ人が宿営した。北のほうには、幕屋の柱や横木や座の管理をするメラリ人、幕屋の後方には、天幕のおおいやあげばりをゆだねられたゲルション人の場所があった。 PP 192.2

各部族の位置もまた定められていた。各部族は、主が命ぜられたとおりに、おのおのその部族の旗のもとに前進し、宿営しなければならなかった。「イスラエルの人々は、おのおのその部隊の旗のもとに、その父祖の家の旗印にしたがって宿営しなければならない。また会見の幕屋のまわりに、それに向かって宿営しなければならない」「彼らは宿営するのと同じように、おのおのその位置で、その旗にしたがって進まなければならない」（民数記 2：2、17）。エジプトからイスラエルについて来た入り混じった群衆は、部族と同じ場所を占めることは許されなかった。彼らは宿営の外に住むべきであった。そして彼らの子孫は、3 代目になるまで会衆から除外されることになっていた（申命記 23：7、8 参照）。 PP 192.3

宿営の中、全体と宿営の周りは、厳格な秩序を保つとともに、細心の注意を払って清潔に保つことが命じられた。衛生の規則が徹底的に実施された。どんな理由であろうと、汚れた人は宿営の中に入ることを禁止された。このような大群衆の中で健康を保つために、こうした規定はどうしても欠くことができないものであった。イスラエルが清い神の臨在を仰ぐためには、完全な秩序と清潔を維持することが必要であった。神は、こう言われた。「あなたの神、主があなたを救い、敵をあなたにわたそうと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保たなければならない」（申命記 23：14）。 PP 192.4

イスラエルが旅をするときは、すべて、「主の契約の箱は、……彼らに先立って行き、彼らのために休む所を尋ねもとめた」（民数記 10：33）。神の聖なる律法の入った契約の箱は、コハテの子らにかつがれて、先頭に立って行くのであった。その前にモーセとアロンが行った。そして、銀のラッパを持った祭司たちがその近くにいた。この祭司たちは、モーセから指示を受けて、それをラッパによって人々に知らせた。各組の指導者は、ラッパで知らされたとおりに、取るべき行動をすべて明らかに指示しなけれ

ばならなかった。ラッパの指示に従うことを怠った者は、誰でも罰として殺されることになっていた。 PP 192.5

神は、秩序の神である。天と関係がある者は、すべて、完全な秩序を保っている。服従と完全な規律が、天使軍の行動の特徴である。秩序と行動の一致があってはじめて、成功をおさめることができる。神は、イスラエルの時代と同様に、今日も神の働きにおいて、秩序と組織を要求される。神のために働いている者は、だれでも軽率で中途はんぱなやり方でなくて、物事をよく考えてしなければならない。神は、神の働きが、信仰と正確さをもって行われることを望まれる。それは、神が、ご自分の是認の印をその働きに押すことができるためである。神ご自身が、イスラエル人のすべての旅行の指示をお与えになった。彼らの宿営の場所は、雲の柱がおりてくることによって指示された。そして、彼らがそこにとどまっていなければならない間、雲は聖所の上にとどまっていた。彼らが旅を続ける時には、雲が幕屋のはるか上にあがって 行った。止まるときも進むときもともに、厳粛な祈りが捧げられた。「契約の箱の進むときモーセは言った、『主よ、立ちあがってください。あなたの敵は打ち散らされ、あなたを憎む者どもは、あなたの前から逃げ去りますように』。またそのとどまるとき、彼は言った、『主よ、帰ってきてください、イスラエルのちよろずの人に』」（民数記 10：35、36）。 PP 192.6

シナイからカナンの国境のカデシまでは、わずか 11 日の旅程であった。そして、ついに雲が前進の合図をしたときに、イスラエルの軍勢はすみやかに美しい地に入ることを期待して、行進を開始したのであった。主は、彼らをエジプトから救い出したときに奇跡を行われた。そして、今は、彼らは、神を彼らの王として受け入れる正式の契約を結び、至高者の選民として認められていたのであるから、どんな祝福でも受けることを期待できるのであった。 PP 193.1

それなのに、彼らは長く滞在していたところを不本意ながら出発したのである。彼らは、そこを自分たちの故郷のように思っていた。神は、あの花崗岩の防壁の中に、ご自分の民を他のあらゆる国々から区別して集めて、彼らに神の清い律法をくり返してお与えになった。彼らは、神の栄光が何度もあらわれた清い山の、灰色の峰や不毛の山頂

をながめることを愛した。そこは、神と天使たちが現れた場所として、ゆかりの地となっていたので、そこを無造作に去ったり、あるいはうれしそうに去ったりするのでさえ、申しわけないことのように彼らは思うのであった。 PP 193.2

しかし、ラッパを吹く者の合図に従って、宿営全体は幕屋をまん中にかついで、各部族がそれぞれの旗のもとの定められた位置について出発した。すべての目は、雲がどの方向に導いていくかを熱心に見ようと努めていた。雲が、黒々と荒れ果てた巨大な山々が重なっている東方へ動いて行ったとき、多くの人の心に悲しみと疑惑の念が起こった。 PP 193.3

前進するに従って、道はますます困難になってきた。彼らの進む道は、石の多い峡谷と不毛の荒れ地であった。彼らの周り一面は、広大な砂漠であった。――「荒野なる、穴の多い荒れた地、かわいた濃い暗黒の地、人の通らない、人の住まない地」であった（エレミヤ 2：6）。岩にかこまれた谷間から谷間を、男や女や子供たちが、動物に車を引かせ、牛、羊などの長い行列を従えて通っていった。その進みぐあいは、どうしても遅々としてはかどらなかった。長い間宿営したあとの群衆は、道中の危険や苦難に耐える準備がなかった。 PP 193.4

3 日の旅が過ぎると、つぶやきの声が公然とあがるようになった。つぶやきは、まず入り混じった群衆から起こった。彼らの多くは、完全にイスラエルに合同していないで、何か非難する材料はないものかと目を見張っていた。進行の方向が彼らは気に入らなかった。モーセも彼らも共に、雲の指導に従っているのは十分承知していながら、彼らは絶えずモーセの指導に何かと不平を言った。不満は伝染性を持っている。そして、それは間もなく宿営全体に広がっていった。 PP 193.5

彼らは、また肉を食べたいと言いだした。彼らは、マナが十分に与えられていながら満足しなかった。イスラエル人は、エジプトの奴隷生活の間、最も単純な食物を食べて生命をつながなければならなかった。しかし、困苦と激しい労働と空腹のために、それをおいしく食べることができた。ところが、彼らと一緒に来ていたエジプト人の多くは、ぜいたくな食事になれていた。まず、このような人々がつぶやき始めたのである。

イスラエルがシナイに到着する直前にマナが与えられたとき、主は彼らの熱心な願いに応じて肉をお与えになったが、それはただ 1 日だけのことであった。 PP 193.6

神は、マナと同様に肉もたやすくお備えになることができたのであるが、それが与えられなかったことは、彼らのためを考えた上でのことであった。多くの者がエジプトで食べ慣れていた刺激性のある食物よりも更によい食物を与えることが、神のみこころであった。ゆがめられた食欲を、もっと健康な状態にもどさなければならなかった。それは、神がエデンの園で、アダムとエバにお与えになった地の果実など、人間に最初に与えられた食物を楽しむことができるよう になるためであった。イスラエルの人々に動物の肉がほとんど与えられなかったのは、こうした理由からであった。 PP 193.7

サタンは、こうした制限が不正で残酷なもののように人々に思わせた。サタンは、禁じられたものを人々がほしがるようにしむけた。なんの制限もなく食欲をほしいままにすれば、肉欲にふけりやすくなるのをサタンは知っていた。こうして、人々はたやすく彼の手中に陥った。病気と不幸の創始者は、最も成功をおさめる場所で人々を攻撃する。サタンは、エバに禁断の実を食べるように誘惑してからこのかた、主として食欲への誘惑によって、人々を罪に陥れた。サタンがイスラエルの人々を神に対してつぶやかせたのも、この同じ方法によってであった。飲食の不節制は、人々を低い欲望にふけらせるもととなり、ひいては、人々にすべての道徳的義務を無視させる原因になる。彼らが誘惑に襲われるならば、なんの抵抗力も持たないのである。 PP 194.1

神は、イスラエルの人々を、純潔で清く幸福な国民として、カナンに確立させるためにエジプトから連れ出されたのである。この目的を達成するために、神は彼らに訓練の過程をお与えになった。それは彼ら自身のためであるとともに、彼らの子孫のためであった。彼らが神の賢明な制限に従って、快く食欲を制したのであれば、彼らのうちには、衰弱と病気はなかったことであろう。彼らの子孫は、身体的にも、精神的にも活気にあふれていたことであろう。彼らは、真理と義務に関する明らかな知覚、鋭い識別力、健全な判断力を持っていたことであろう。しかし、神の制限と要求に快く従わなかったことが大きな理由となって、彼らは神が望まれた高い標準に到達できず、神が与えようとしておられた祝福を受けることができなかった。 PP 194.2

「おのが欲のために食物を求めて、その心のうちに神を試みた。また彼らは神に逆らって言った、『神は荒野に宴を設けることができるだろうか。見よ、神が岩を打たれると、水はほとばしりいで、流れがあふれた。神はまたパンを与えることができるだろうか。民のために肉を備えることができるだろうか』と。それゆえ、主は聞いて憤られた」と詩篇記者は言った（詩篇 78：18～21）。紅海からシナイへ行く旅の途中には、つぶやきと騒ぎがたびたび起こった。しかし、神は、彼らの無知と盲目をあわれまれて、彼らの罪をすぐに罰することをなさらなかった。しかしそのことがあった後で、神は、ホレブでご自分を彼らにあらわされた。彼らは大きな光を受けていた。彼らは、神の威光と力とあわれみの証人となったからであった。そのため、彼らの不信と不満は大きな罪となるのであった。そればかりでなく、彼らは、主を王として受け入れ、その権力に従うことを誓っていた。彼らのつぶやきは、今となっては反逆であった。イスラエルを無政府と滅亡とから守ろうとするなら、これは、反逆として直ちに厳罰が与えられなければならなかった。「主の火が彼らのうちに燃えあがって、宿営の端を焼いた」（民数記 11：1）。つぶやいた者のなかの最も罪深い人々は、雲の中からのいなびかりによって死んだ。 PP 194.3

人々は恐れて、彼らのために主に懇願することをモーセに求めた。モーセが主に祈ったので、その火はしずまった。この刑罰を記念して、人々はその所の名をタベラ（燃えあがる）と呼んだ。 PP 194.4

ところが、間もなく、つぶやきは以前よりもひどくなった。この恐ろしい刑罰は、生き残った人々にへりくだりと悔い改めの心を起こさせるどころか、ますます彼らのつぶやきを増す一方に思われた。目をどこに向けても人々が天幕の戸口に集まって、泣きわめいていた。「彼らのうちにいた多くの寄り集まりびとは欲心を起し、イスラエルの人々もまた再び泣いてほった、『ああ、肉が食べたい。われわれは思い起すが、エジプトでは、ただで、魚を食べた。きゅうりも、すいかも、にらも、たまねぎも、そして、にんにくも。しかし、いま、われわれの精根は尽きた。われわれの目の前には、このマナのほか何もない』」（同 11：4～6）。こうして、彼らは創造主がお与えになった食物に不満の声をあげた。しかし彼らは、その食物が彼らに適したものである証拠を常に

目の前に見ていた。彼 らは困難に耐えていたにもかかわらず、全部族の中でだれ 1 人として、からだの弱った者は出なかったのである。 PP 194.5

モーセは失望した。モーセ自身の子孫が大きな国民にされるということであったが、モーセは、イスラエルが滅ぼされることのないように嘆願した。モーセは、イスラエルを愛して、彼らが滅ぼされてしまうよりは、むしろ自分の名を命の書から消し去ってくださいと祈ったのであった。モーセは、自分のすべてを彼らのために捧げ尽くしたにもかかわらず、彼らの態度はこのようなありさまであった。彼らは、自分たちの困難、また取り越し苦労などのすべてを、モーセのせいにした。そして、人々の悪意に満ちたつぶやきは、モーセの背負っている苦労と責任の重荷をさらに重くした。モーセは困惑して、神に対する信頼を失いそうになった。彼の祈りは、ほとんど不平のように聞こえる。「あなたはなぜ、しもべに悪い仕打ちをされるのですか。どうしてわたしはあなたの前に恵みを得ないで、このすべての民の重荷を負わされるのですか。……わたしはどこから肉を獲て、このすべての民に与えることができましょうか。彼らは泣いて、『肉を食べさせよ』とわたしに言っているのです。わたしひとりでは、このすべての民を負うことができません。それはわたしには重過ぎます」（同 11：11～14）。 PP 195.1

主は、モーセの祈りをお聞きになり、イスラエルの長老 70 人を集めるようにお命じになった。この人々は、年をとったばかりでなく、気品と正しい判断と経験の豊かな人々であった。彼らを「会見の幕屋に連れてきて、そこにあなたと共に立たせなさい。わたしは下って、その所で、あなたと語り、またわたしはあなたの上にある霊を、彼らにも分け与えるであろう。彼らはあなたと共に、民の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにするであろう」と主は言われた。 PP 195.2

主は、モーセが自分と責任を分担するために、最も忠実で有能な人々を選ぶことをお許しになった。それは、彼らの影響によって、人々が乱暴を働くのを防ぎ、反乱をしずめることができるようにするためであった。しかし、この人々が役職についたために、後で、重大な弊害が起こることになった。もしも、モーセが神の力と恵みの証拠に対して、それにふさわしい信仰をあらわしていたならば、この人々は選ばれなかったことであろう。しかし、モーセは、自分自身の重荷と任務とをあまりに大きく考え過ぎ、自分

は、ただ神に用いられる器に過ぎないという事実をほとんど見失ってしまった。イスラエルののろいとなっていたつぶやきの精神を、たとえどんなにわずかであっても、モーセが心にいだくことは、許されなかった。もしもモーセが、完全に神に信頼していたならば、主は、彼をたえず導き、どんな緊急事態が起こっても、力をお与えになったことであろう。 PP 195.3

モーセは、神が人々のためにしようとしておられることの準備をするように命じられた。「あなたがたは身を清めて、あすを待ちなさい。あなたがたは肉を食べることができるであろう。あなたがたが泣いて主の耳に、わたしたちは肉が食べたい。エジプトにいた時は良かったと言ったからである。それゆえ、主はあなたがたに肉を与えて食べさせられるであろう。あなたがたがそれを食べるのは、1 日や 2 日や 5 日や 10 日や 20 日ではなく、1 か月に及び、ついにあなたがたの鼻から出るようになり、あなたがたは、それに飽き果てるであろう。それはあなたがたのうちにおられる主を軽んじて、その前に泣き、なぜわたしたちはエジプトから出てきたのだろうと言ったからである」（同 11：18～20）。 PP 195.4

「わたしと共におる民は徒歩の男子だけでも 60 万です。ところがあなたは、『わたしは彼らに肉を与えて 1 か月のあいだ食べさせよう』と言われます。羊と牛の群れを彼らのためにほふって、彼らを飽きさせるというのですか。海のすべての魚を彼らのために集めて、彼らを飽きさせるというのですか」とモーセは言った（同 11：21、22）。 PP 195.5

モーセは、信頼の念の薄いことを主から責められた。「主の手は短かろうか。あなたは、いま、わたしの言葉の成るかどうかを見るであろう」（同 11：23）。 PP 195.6

モーセは、主の言葉を会衆に伝えた。そして、70 人の長老の任命を発表した。偉大な指導者が、これらの選ばれた人々に与えた任命の言葉は、現代の裁判官や立法官にとっても、正当な裁判の模範とするに十分価値のあるものである。「あなたがたは、兄弟たちの間の訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさばかなければならない。あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見てはならない。小さい

者にも大いなる者にも聞かなければならない。人の顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである」（申命記 1：16、17）。 PP 196.1

さて、モーセは、70 人を幕屋に召集した。「主は雲のうちにあって下り、モーセと語られ、モーセの上にある霊を、その 70 人の長老たちにも分け与えられた。その霊が彼らの上にとどまった時、彼らは預言した」（民数記 11：25）。ペンテコステの日の弟子たちのように、彼らは、「上からの力」に満たされた。こうして、主は、彼らの任務のために準備を与え、会衆の前で彼らに栄誉をお与えになった。それは、この人々がモーセと一致して、イスラエルの統治をするために、神に選ばれた者であるという信頼を人々が持つためであった。 PP 196.2

再び、大指導者の気高い無我の精神の証拠が示された。70 人の中の 2 人は、自分たちはそのような責任ある地位には適さないと考えて、幕屋で兄弟たちに加わっていなかった。しかし、神の霊が彼らのいるところで与えられて、彼らも預言した。このことの知らせを受けたヨシュアは、そのような不統一なことは、分裂の恐れがあるからやめさせようと思った。ヨシュアは、彼の主人の名誉を傷つけまいとして、「わが主、モーセよ、彼らをさし止めてください」と言った。モーセは答えて、「あなたは、わたしのためを思って、ねたみを起しているのか。主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ」というのであった（同 11：28、29）。 PP 196.3

強い風が海から吹いて来て、うずらの群れを運んできた。「その落ちた範囲は、宿営の周囲で、こちら側も、おおよそ 1 日の行程、あちら側も、おおよそ 1 日の行程、地面から高さおおよそ 2 キュビトであった」。人々は、その日一日中、そしてその晩も次の日も一日中、奇跡的に与えられた食物を集めた。それはおびただしい量であった。「集めることの最も少ない者も、10 ホメルほど集めた」（同 11：31、32）。すぐ使わない分は、かわかして保存することができたから、食料は、約束通りに丸 1 か月分は十分にあった。 PP 196.4

神は、人々があまりにもほしがるために、彼らのために、最善のものではなかったが、お与えになった。彼らは、自分たちの体のためになるものでは満足しなかったので

ある。彼らの反逆的欲求は満たされたけれども、彼らはそのために苦しまなければならなかった。彼らは、食べたいだけ食べた。彼らの不節制は直ちに罰せられた。「主は非常に激しい疫病をもって民を撃たれた」（同 11：33）。多くの人々が熱病で倒れた。一方、彼らの中の最も罪深い人々は、彼らがほしがった食物を口にするやいなや、打たれた。 PP 196.5

タベラを出たあと、次に宿営したのは、ハゼロテであったが、ここでまた、苦い試練がモーセを待っていた。アロンとミリアムは、イスラエルの中で栄誉と指導の地位に立っていた。2 人とも預言の賜物が与えられていた。 PP 196.6

また、2 人とも、ヘブル人の救済のときには、モーセとともに働くように神の命令を受けたのであった。主は、預言者ミカによって、「モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だたせた」と言われた（ミカ 6：4）。ミリアムはまだ子供であったが、赤子モーセを隠した小さなかごをナイル川のそばで見張ったりして、幼いときから品性の力強さをあらわしていた。ミリアムは、詩と音楽の才能が豊かに与えられていたので、イスラエルの女たちを指導して、紅海の岸辺で歌い踊った。ミリアムは、モーセとアロンに次いで、人々から愛され、天の誉れを受けていた。しかし、天で初めに不和をもたらした同じ罪悪がミリアムの心に起こり、その不満にすぐ同情した者があった。 PP 196.7

70 人の長老を任命することに関して、ミリアムとアロンは、なんの相談も受けなかった。そのために、彼 らはモーセに対してねたみをいだいた。イスラエルがシナイに向かう途中で、エテロの訪問があったとき、モーセは、義理の父の勧告をすぐに受け入れたので、アロンとミリアムは、彼のモーセに与える影響が自分たちよりも強力になるのではないかと恐れた。70 人の長老の組織が定められたときも、彼らは、自分たちの権威が無視されたと思った。ミリアムとアロンは、モーセがどんなに重い苦労と責任を背負っていたかを知らなかった。しかし、彼らは、自分たちがモーセを助けるように選ばれたために、自分たちも同じように指導の責任を分担したものと考え、それ以上の助け手を任命することはよけいなことであると考えたのである。 PP 196.8

モーセは、他のだれも感じたことがないほど、自分に委ねられた大きな任務の重要性を感じた。彼は自分の弱さを感じて、神の勧告を仰いだ。アロンは、自分を過大に評価して、神をさほど信頼しなかった。アロンは責任が負わせられていたときに、シナイでの偶像礼拝に関して、卑怯にも妥協的態度をとって、彼の品性の弱さを暴露した。しかし、ミリアムとアロンは、ねたみと野心に目がくらんで、このことを考えなかった。アロンはその家族が祭司職に任じられて、神から大きな栄誉を与えられていた。それにもかかわらず、このことでさえ、彼の自己賞揚の欲望を助長した。「彼らは言った、『主はただモーセによって語られるのか。われわれによっても語られるのではないのか』」（民数記 12：2）。自分たちも同様に神の恵みを受けているとみなして、自分たちも同じ地位と権威が与えられているものと感じた。 PP 197.1

ミリアムは不満をいだいて、神が特にご支配になった事件について不平の種を見いだした。ミリアムは、モーセの結婚を喜んでいなかった。モーセがヘブル人のうちから妻をめとらないで、外国の女を選んだことは、ミリアムの家族と国民の誇りを傷つけるものであった。チッポラは、あからさまに軽蔑された取り扱いを受けた。 PP 197.2

モーセの妻は「クシの女」と呼ばれているが、ミアアン人であって、アブラハムの子孫であった。彼女は、容貌の点では、ヘブル人よりいくぶんか浅黒いところが異なっていた。チッポラはイスラエル人ではなかったが、真の神の礼拝者であった。チッホラは、小心で、遠慮がちで、やさしく、愛情がこまやかであった。そして人の苦痛を見ると非常に心を痛めた。モーセはエジプトへ行く途中で、チッポラがミデアンへ帰ることに同意したのはこのためであった。モーセは、エジプト人に降る刑罰を見る苦痛を、彼女に与えたくなかったのである。 PP 197.3

チッポラは、荒野で彼女の夫に再会した。そして、モーセが重い荷を背負って体力をすり減らしているのに気づき、自分の心配をエテロに語った。そこでエテロが、その場合どうすればよいかを提案することになったのである。チッポラに対して、ミリアムが反感をいだいた主な理由はこうしたことがあったからである。ミリアムは自分もアロンも無視されたと思って感情を害した。そして、その原因がモーセの妻にあると考えた。自分たちが前のように相談にあずからないのは、チッポラが妨げているためであるとミ

リアムは思い込んだ。もし、アロンが正しいことのために堅く立ったならば、このような悪をとどめることができたことであろう。しかし、アロンは、ミリアムにその行動が罪深いものであることを示さずに、かえってミリアムに同情し、彼女のつぶやきの言葉を聞き、そのねたみに同意するようになってしまった。 PP 197.4

モーセは彼らの非難をつぶやかず、黙って耐えた。モーセが人々の不信とつぶやきを忍耐し、彼のゆるがぬ助け手であるべき人々の誇りとねたみに耐えることができたのは、ミデアンで苦労しながら待っていた年月の間の経験、すなわち、彼がそこで得た謙遜と忍耐の精神のおかげであった。モーセは、「その人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」（同 12：3）。そのため、モーセは、すべての人にまさって神の知恵と指導とが与えられていた。聖書に、「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる」とある（詩篇 25：9）。柔和な者は、すなおで、喜んで教えを受けるから、主に導かれるのである。彼らは神のみこころを知って行おうと、まじ めに願っている。救い主は、「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、……この教が……わかるであろう」と約束された（ヨハネ 7：17）。そして、使徒ヤコブによって、「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と宣言された（ヤコブ 1：5）。しかし、主の約束は、快く主に全く従う者にだけ与えられる。神は、どの人の意志をも強制されない。であるから、高ぶって教えを受けない者や、自分かってなことをしようとしている者を導くことはできない。二心の人、自分自身の意志のままに行動しようとする人は、神のみこころを行うと口では言っているが、「そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない」と書かれているのである（同 1：7）。 PP 197.5

神はモーセを選んで、神の霊を彼の上にお与えになったのである。そして、ミリアムとアロンは、つぶやいたことによって、定められた指導者に対してばかりでなく、神ご自身に対して、不忠誠の罪を犯したのである。つぶやいた扇動者たちは、幕屋に呼ばれ、モーセと顔を合わせた。「主は雲の柱のうちにあって下り、幕屋の入口に立って、アロンとミリアムを呼ばれた」（民数記 12：5）。彼らが預言の賜物を与えられてい

たことはなにも拒否されなかった。神は、彼らとも夢と幻のうちにお語りになったことがあったであろう。しかし、主ご自身が「わたしの全家に忠信なる者である」と宣言されたところのモーセには、それよりももっと親密な交わりが与えられていた。神は、モーセとは口ずから語られた。「『なぜ、あなたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか』。主は彼らにむかい怒りを発して去られた」（同 12：8、9）。神の怒りのしるしとして、雲が幕屋から離れた。そして、ミリアムは打たれた。彼女は「重い皮膚病となり、その身は雪のように白くなった」（同 12：10）。アロンは助かったが、ミリアムの罰によって、彼もきびしく譴責された。こうして彼らの誇りは打ち砕かれて、アロンは自分たちの罪を告白し、ミリアムがこの恐ろしい罰を受けたまま滅びることがないように嘆願した。モーセの祈りにこたえて、ミリアムの重い皮膚病は癒された。しかし、ミリアムは 7 日の間、宿営の外に閉じ込められた。ミリアムが宿営から追放されてはじめて、神の恵みの象徴である雲が、再び幕屋にとどまるようになった。ミリアムの高い地位に対する尊敬と、ミリアムの受けた罰を悲しんで、全会衆はハゼロテにとどまって、彼女の帰りを待った。 PP 198.1

このように主の怒りがあらわされたのは、イスラエル全体に対する警告のためであって、不満と不服従の精神が強くなるのを防ぐためであった。もしも、ミリアムのねたみと不満とが著しく譴責されないままでいると、さらに大きな害毒を及ぼしたことであろう。ねたみは人の心の中の最も悪魔的性質の 1 つであって、最も恐ろしい結果を生じるものである。賢者は言っている。「憤りはむごく、怒りははげしい、しかしねたみの前には、だれが立ちえよう」（箴言 27：4）。初めに天で不和を起こしたのは、ねたみであった。そして、ねたみのゆえに人々の間で数えきれない害がもたらされた。「ねたみと党派心とのあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為とがある」（ヤコブ 3：16）。 PP 198.2

人のことを悪く言ったり、他の人の動機や行為をさばくことは、小さいことであると思ってはならない。「兄弟の悪口を言ったり、自分の兄弟をさばいたりする者は、律法をそしり、律法をさばくやからである。もしあなたが律法をさばくなら、律法の実行者ではなくて、その審判者なのである」（同 4：11）。審判者は、ただ 1 人だけであ

る。「主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう」（Ｉコリント ４：5）。そして、だれでも同胞をさばいて罪に定める者は、創造者の権威を侵害しているのである。 PP 198.3

聖書は、神がご自分の使者として行動するように召された人々を、軽々しく非難することがないように特に教えている。使徒ペテロは、極悪の罪人を描写して言っている。「大胆不敵なわがまま者であって、栄光ある者たちをそしってはばかるところがない。しか し、御使たちは、勢いにおいても力においても、彼らにまさっているにかかわらず、彼らを主のみまえに訴えそしることはしない」（Ⅱペテロ ２：10、11）。また、パウロは教会の上に立てられた者について、勧告を与えて、「長老に対する訴訟は、ふたりか ３ 人の証人がない場合には受理してはならない」と言っている（Ｉテモテ ５：19）。神の民の指導者と、教師としての重い責任を人々に負わせられた神は、人々がそのしもべたちをどのようにあつかうかの責任を問われる。われわれは、神が尊ばれた人々を尊ばなければならない。神が、神の働きの重荷を負わせられた人々をねたみ、つぶやくすべての者にとって、ミリアムに下った罰は、自分に対する譴責であると思わなければならない。 PP 198.4

第 34 章　12 人の斥候

本章は、民数記 13、14 章に基づく PP 199.1

ヘブルの軍勢は、ホレブの山を去ってから 11 日後に、パランの荒野にあるカデシに天幕を張った。ここは、約束の国境から遠くなかった。人々の希望によって、ここから斥候を送り出して国をさぐらせることになった。モーセがこのことを主に申し上げると、各部族のつかさを 1 人ずつ、そのために選ぶようにという指示と、許可が与えられた。斥候はさしず通りに選ばれた。そして、モーセは国土の様子を行って見てくるように彼らに命じた。そこは、どんなところか、どんなありさまで、どんな資源があるか、どんな人々が住んでいるか、強いか弱いか、多いか少ないか、また、土地は、肥えているかやせているか、どんなものができるかを見て、その地のくだものを取ってくるようにと言った。 PP 199.2

彼らは出かけて行った。そして、彼らは、南の国境からはいって、北の果てまで進んだ。彼らは、出かけてから 40 日たって帰ってきた。イスラエルの人々は、大きな希望をいだいていた。そして、期待に胸をふくらませて待っていた。斥候たちの帰った知らせが、部族から部族へと伝わり、歓呼の声があがった。人々は走り出て、危険な任務を果たして無事に帰ってきた使者たちを出迎えた。斥候たちは、地が肥えていることを示すくだものの見本を持ってきた。そのころは、ぶどうの熟す季節であった。そして、彼らは、2 人の男が棒でかつがねばならないほど大きな房を持ってきた。また、いちじくやざくろもたくさん実っていたので、彼らはそれも持ってきた。 PP 199.3

人々は、自分たちがこんなによい地を手に入れるようになることを喜び、斥候たちがモーセに報告している言葉を一言も聞きもらすまいと、熱心に耳を傾けた。「わたしたちはあなたが、つかわした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。これはそのくだものです」と斥候たちは、まず言った（民数記 13：27）。人々は熱狂した。彼らは、主の声に心から従って、今すぐにも、その地を占領するために出かけようとした。しかし、その国がどんなに美しく、また土地が肥えているか話した後で、

斥候の中の 2 人のほかは、イスラエルの人々が、カナンを征服しようと思えば、どんな困難と危険にあわなければならないかを、詳しく述べた。彼らは、カナンの各地に散在する強国を列挙し、その町々が城壁に囲まれていて、非常に大きく、そのなかの住民も強力で、征服は不可能であろうと言った。彼らは、また、そこでアナクの子孫である巨人たちを見、国土の占領はとうてい考えられないと言った。 PP 199.4

ここで事態は一変した。斥候たちがサタンにそそのかされて失望し、彼らの不信を口にしたとき、人々の希望と勇気は絶望に変わった。彼らの不信仰は会衆の上に暗い影を投げ、選民のためにくり返し現された神の大きな力を忘れさせた。人々は落ちついて反省しようとしなかった。ここまで彼らを導かれたおかたが、必ずこの土地をお与えになることを彼らは考えなかった。神がどんなに驚くべき方法で、海を開いて道となし、パロの追跡軍を滅ぼして、圧制者よ り救ってくださったかを、彼らは思い起こさなかった。彼らは、神を考えに入れなかった。そして、ただ武力だけに頼っているかのように行動した。 PP 199.5

彼らは、自分たちの不信仰によって、神の力を制限し、ここまで彼らを安全に導かれた手にたよらなかった。そして、彼らはまた、モーセとアロンに対してつぶやくという彼らの以前のあやまちをくり返した。「これでわたしたちの大きな望みは、みな消えてしまった。ここは、わたしたちが、わざわざエジプトから占領するためにやって来た地なのだ」と彼らは言った。彼らは、指導者が人々を欺き、イスラエルの民を苦難に陥れていると非難した。 PP 200.1

人々は、失望と絶望に陥り、自暴自棄になった。悲しそうなうめき声があがった。そして、それに心乱れてつぶやく声が混じった。カレブは、何が起こったのかに気づき、あえて神の言葉の正しさを守るために立ち上がった。カレブはできるかぎりを尽くして、不忠実な仲間たちの悪影響を阻止しようとした。しばらくの間、人々は、美しい国に関するカレブの希望と勇気に満ちた言葉に、静かに耳を傾けた。彼は、すでに斥候たちが言ったことと反対のことは言わなかった。城壁は高く、カナン人は強い。しかし、神は、イスラエルにその国を与えるとお約束になったのである。「わたしたちはすぐにのぼっ

て、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」とカレブは勧めた（同13：30）。 PP 200.2

しかし、10 人の斥候たちは、カレブの言葉をさえぎって、彼らの前進をはばむものを今までよりももっと大げさに言った。「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです。……その所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」と彼らは言った（同 13：31～33）。 PP 200.3

一度誤った道にふみ込んだこの人々は、頑強にカレブとヨシュアに敵対し、モーセに敵対し、そして神に敵対したのである。前進しようとすることに、彼らはいよいよ心をかたくなにした。カナンを占領しようとする試みは、みな阻止しようと彼らは決心した。彼らは、自分たちの与えた悪影響をいかにもまことらしくするために、真実を曲げたのである。そこは、「そこに住む者を滅ぼす地です」と彼らは言った（同 13：32）。これは、悪い報告であるばかりでなく、いつわりの報告である。これは、つじつまが合わないことである。斥候たちは、その国が実り豊かで栄えたところであると言い、人々は大きいと言った。もしも、気候が不順で「住む者を滅ぼす地」であるとするならば、以上のことはみなあり得ないことである。しかし、人が一度不信を心にいだいてしまうならば、彼らは、サタンの支配に身を委ねたのであって、どこまでサタンにひかれていくかわからないのである。 PP 200.4

「そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした」（同 14：1）。暴動が起こり、公然と反旗をひるがえす者があいついで起こった。なぜなら、サタンが完全に指導権を握り、人々は理性を失ったのかと思われた。神が、彼らのよこしまな言葉を聞き、臨在の天使である主が、雲の柱に包まれた中で、彼らの恐ろしい怒りの爆発をごらんになったことを忘れて、彼らは、モーセとアロンをのろった。彼らは悲しんで、「わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに」と言った（同 14：2）。それから彼らは、神に反抗心を起こした。「なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの

妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか。……わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」（同 14：3、4）。こうして、彼らは、モーセだけでなく、神ご自身が彼らを欺いて、所有することのできない国を約束したのだと非難した。そして、彼らは、全能の神の強い手によって助け出された苦難と奴隷の地へ、彼らを連れもどす指導者を選ぼうとまでした。 PP 200.5

恥と苦悩に心を痛めて、「モーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前でひれふした」（同 14：5）。 彼らは、人々のこうした無分別な激しい考えをどうして思いとどまらせたらよいかわからなかった。カレブとヨシュアは、騒動を静めようと試みた。 PP 200.6

悲しみと怒りの表現として、彼らは衣を裂いて人々の中に飛び込んでいった。そして、鳴り響く大声で暴風のように泣きわめく声と反逆的悲嘆の声を圧倒して、彼らは言った。「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」（同 14：7～9）。 PP 201.1

カナン人は、すでに彼らの罪悪のますめを満たしていたので、神は、これ以上彼らを忍ぶことができなかった。彼らからは神の保護が取り除かれたので、やすやすと彼らを打ち負かすことができたのである。神の契約によって、その地は、イスラエルのものであると保証された。しかし、不忠実な斥候の偽りの報告が受け入れられ、それによって全会衆が欺かれた。これは、反逆者たちのしわざであった。もし、たった 2 人が悪い報告をし、あとの 10 人が、全部主の名によって国を占領しようと人々を励ましたとしても、彼らはよこしまな不信のために、10 人の言うことよりは、2 人の言葉を受け入れたことであろう。しかし、正しい側に立った者はただ 2 人で、10 人は反逆の側についてしまったのである。 PP 201.2

不忠実な斥候たちは、口をきわめてカレブとヨシュアを責めた。そして、彼らを石で打てという声があがった。気の狂った群衆は石をつかんでこの忠実な人々を殺そうとした。彼らは狂ったような叫び声をあげて前進した。ところが急に、彼らの手から石は落ち、声は静まり、彼らはふるえおののいた。神が彼らの殺意をとどめるために介入なさったのである。神の臨在の栄光が、燃える光のように幕屋を照らした。すべての民が主のしるしを見た。彼らよりも大きな力のあるお方が、ご自身をあらわされた。こうなっては、あえて反逆しつづける者はひとりもなかった。悪い報告をした斥候たちは、恐怖に身を縮めて、息せき切って天幕に帰った。 PP 201.3

さて、モーセが立って幕屋に入った。主は、モーセに言われた。「わたしは疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし、あなたを彼らよりも大いなる強い国民としよう」（同 14：12）。しかし、モーセは再び民のために嘆願した。モーセは、民が滅ぼされて自分が彼らよりも大きな国民にされることに同意することはできなかった。 PP 201.4

モーセは神の憐れみを請うて言った。「どうぞ、あなたが約束されたように、いま主の大いなる力を現してください。あなたはかつて、『主は怒ることおそく、いつくしみに富み……』と言われました。どうぞ、あなたの大いなるいつくしみによって、エジプトからこのかた、今にいたるまで、この民をゆるされたように、この民の罪をおゆるしください」（同 14：17～19）。 PP 201.5

主は、イスラエルを直ちに滅ぼすことはしないとお約束になった。しかし、彼らの不信とおくびょうのために主は、彼らの敵を征服するために力をあらわすことができなくなった。そこで、主は、憐れみのうちに、唯一の安全な道として、彼らに紅海にもどることをお命じになった。 PP 201.6

人々は反逆して、「この荒野で死んでいたらよかったのに」と叫んだ。今この願いは聞かれることになった。「あなたがたが、わたしの耳に語ったように、わたしはあなたがたにするであろう。あなたがたは死体となって、この荒野に倒れるであろう。あなたがたのうち、わたしにむかってつぶやいた者、すなわち、すべて数えられた 20 歳以上の者はみな倒れるであろう。……しかし、あなたがたが、えじきになるであろうと言ったあなたがたの子供は、わたしが導いて、はいるであろう。彼らはあなたがたが、い

やしめた地を知るようになるであろう」と主は宣言された（同 14：28～31）。そして、カレブについて主は言われた。「ただし、わたしのしもべカレブは違った心をもっていて、わたしに完全に従ったので、わたしは彼が行ってきた 地に彼を導き入れるであろう。彼の子孫はそれを所有するにいたるであろう」（同 14：24）。斥候たちが 40 日の旅をしたのと同じように、イスラエルの軍勢は、40 年の間荒野をさまようことになった。 PP 201.7

モーセがこの神の決定を人々に知らせると、彼らの怒りは悲しみに変わった。彼らは、その罰が正当なことを知っていた。10 人の不忠実な斥候は疫病にかかって、全イスラエルの目の前で死んだ。彼らの運命を見て、人々は自分たちの運命を知った。 PP 202.1

今となっては、彼らは、自分たちの罪深い行為を心から悔いているように思えた。しかし、彼らの悲しみは、忘恩と不従順を感じたからではなく、むしろ彼らの悪行の結果のためであった。主がお決めになったことを容赦なくなさることがわかったとき、人々はまたわがままな気持ちを起こし、自分たちは荒野に帰りたくないと主張した。神が、敵の地から引き返すようにお命じになったのは、彼らの表面的服従が真実かどうかを試みておられたのであったが、それが真の服従でなかったことが明らかになった。彼らは、激情の支配するままに動き、神に従うことを勧めた斥候たちを殺そうとしたことによって、非常な罪を犯したことは認めたけれども、彼らは、ただ恐るべきあやまちを犯したことと、その結果が彼らを悲惨な末路に陥れるものであることを知って、恐れたにすぎなかった。彼らの心に変化はなかった。そして、彼らは、また似たような暴動を起こすきっかけを必要としていたにすぎなかった。このことは、モーセが神の権威によって、彼らに荒野へ引き返すように命じたときに起こった。 PP 202.2

イスラエルが 40 年の間、カナンにはいれないという命令は、モーセとアロン、カレブとヨシュアにとって苦い失望であった。しかし、彼らはつぶやくことなく、神の決定を受け入れた。しかし、神の御処置についてつぶやき、エジプトに帰りたいと言っていた人々は、自分たちが侮った祝福が彼らから取り去られた時に、激しく泣き悲しんだ。彼らは取るに足らぬことのためにつぶやいてきた。そこで、神は今、悲しむ理由を彼ら

にお与えになった。もし、彼らの罪がそのまま目の前に示された時に、彼らが自分たちの罪を悲しんだのであれば、この宣告は与えられなかったはずであった。だが、彼らは、この刑罰を悲しんだ。彼らの悲しみは、悔い改めではなかったから、この宣告の取り消しを得ることはできなかった。 PP 202.3

その夜、人々は泣き明かしたが、朝とともに希望がわいた。彼らは、自分たちのおくびょうの償いをしようと決心した。神が行って、園を占領せよとお命じになった時に、彼らは拒絶したのであった。そして、神が今退却をお命じになると、彼らは同じように反抗した。彼らは国に攻め上って、占領しようと心に決めた。あるいは神は彼らの働きを受け入れて、彼らに対するみこころをお変えになるかも知れない。 PP 202.4

神は、神が決められた時に、彼らが入国するのを彼らの特権とし義務となさった。しかし、彼らの故意の怠慢のために、その許可は取り下げられた。サタンは、彼らのカナン入国を妨げて、自己の目的を果たした。神が命じられた時に、彼らが拒んだその同じことを、今度は、神が禁じておられるにもかかわらず行うようにサタンは人々をそそのかした。こうして大欺瞞者は、彼らを再び反逆に導いて勝利を得た。彼らは、彼らと力を合わせて、カナンを占領するために働いてくださる神の力に信頼しなかった。それにもかかわらず今度は神の助けを受けずに、自分たちの力だけで、その仕事をなしとげようとしたのである。「われわれは主にむかって罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたように、われわれは上って行って戦いましょう」と彼らは叫んだ（申命記1：41）。彼らは、罪の結果、これほどまでに恐ろしく盲目になっていた。主は、「上って行って戦え」とはお命じにならなかった。彼らが戦って国を獲得することは、神のみこころではなかった。それは厳格に神の命令に従うことによって行われるべきであった。 PP 202.5

人々の心に変化はなかったけれども、彼らは、斥候たちの報告を聞いて、反逆した自分たちの罪深さと愚かさを告白するに至った。ここで彼らは自分たちが軽率に投げ捨てた祝福の価値を認めた。彼らがカナンに入れないのは、自分自身の不信のためであることを告白した。「われわれは罪を犯しました」と 彼らは言った。そして彼らは、神が約束を実行なさらぬことを激しく非難したけれども、落ち度は神ではなくて、彼らに

あることを認めた。この告白は真の悔い改めから出たものではなくても、神が彼らを正義をもってあしらわれることを示した。 PP 202.6

主は今もなお、同じような方法によって、人々にご自分の正義を認めさせ、み名に栄えを帰しておられる。神を愛すると言う人々が、神の摂理に対してつぶやき、神の約束をあなどり、誘惑に負けて悪天使と一緒になって神のみこころを挫折させようとすることがある。そのような時に、主は、彼らが真に悔い改めていないにもかかわらず、彼らに罪を認めさせ、自分たちの悪い行為を認めさせ、神が彼らを義と恵みをもってあしらっておられることを認めざるを得ないように、事情を支配なさることがよくあるのである。神は、このようにして、反対の勢力を活動させて、やみの働きをあらわになさるのである。そして、悪い行為に走ろうとする精神には、根本的変更はなくても、神の栄えのためとなり、圧迫と誤解を受けてきた神の忠実な譴責者たちが正しかったことを認める告白がなされるに至るのである。最後に神の怒りが注がれる時にも同じことが起こる。「主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり」、不信心な者の「すべての不信心なしわざ」を責めるためである（ユダ 14、15）。すべての罪人は、自分に与えられた宣告を聞いて、その正当なことを認めるに至る。 PP 203.1

神からの禁令があるにもかかわらず、イスラエルは、カナンの征服に着手しようとした。武具をまとい、武器を手にした彼らは、戦いの準備を完了したつもりであった。しかし、神の目と、悲しみに沈んだ神のしもべたちの目から見れば、はなはだしく不十分なものであった。約 40 年後、主が上っていってエリコを征服せよとお命じになった時に、主は共に行くと約束なさった。神の律法を入れた箱が、軍勢の前にかつがれて行った。主のお定めになった指導者が、神のさしずに従って、彼らの行動を指揮することになっていた。このような指導の下にあれば、どんな損害も受けることはなかった。しかし、今は、神の命令と指導者たちの厳粛な禁令にもかかわらず彼らは箱もなければ、モーセも共に行かないまま、敵の軍隊に向かって行った。 PP 203.2

警告のラッパが鳴った。モーセは、彼らの後を追って警告した。「あなたがたは、それをなし遂げることもできないのに、どうして、そのように主の命にそむくのか。あ

なたがたは上って行ってはならない。主があなたがたのうちにおられないから、あなたがたは敵の前に、撃ち破られるであろう。そこには、アマレクびとと、カナンびとがあなたがたの前にいるから、あなたがたは、つるぎに倒れるであろう」（民数記 14：41～43）。 PP 203.3

カナン人は、この民を守っているように思われる不思議な力と、彼らのために行われた奇跡について聞いていた。そこで彼らは、この侵入軍を撃退するために、強力な軍隊を召集した。攻撃軍のほうには指導者がなかった。勝利を願う祈りも捧げられなかった。彼らは、自分たちの運命を逆転させるか、それとも戦死するかといった、死にものぐるいの気持ちで出発した。彼らは戦争の訓練は受けていなかったけれども、武装した大群衆であった。そして、急に猛攻撃を加えることによって、どんな反撃をも撃退できると考えた。彼らは、あえて攻撃をしかけない敵に、無謀にもこちらから挑戦した。 PP 203.4

カナン人は、困難な山道や、急で非常に危険な坂をのぼらなければ行けない岩の上の台地に陣取っていた。ヘブル人のおびただしい数は、それだけ彼らの敗北を悲惨なものにするに過ぎなかった。彼らは山の小道をよじ登り、上方の敵の恐ろしい攻撃に身をさらした。巨大な石が上から大音響と共に落下してきて、ヘブル人の道を死者の血で染めた。頂上に達した者も登って行くだけで力尽きて、激しい反撃にたまりかね、多くの損害をこうむって退却した。大虐殺の行われたあとには、多くの戦死者のしかばねが横たわっていた。イスラエルの軍隊は完全に敗北した。神にそむいて試みた攻撃の結果は、破壊と死であった。 PP 203.5

ついに降伏するほかなく、生き残った者たちは「帰ってきて、主の前で泣いたが」主は彼らの声を聞かれなかった（申命記 1：45）。大軍の接近を恐怖に震えながら待っていたイスラエルの敵は、この大勝利によって、イスラエルに抵抗する確信を持つようになった。彼らは、これまで神がその民のために行われた驚くべきことを聞いていたが、それを今はみな偽りであったとし、なんの恐れる理由もないと感じるようになった。このイスラエルの最初の敗北は、カナン人に勇気と決意を起こさせた。これは、彼らの征服を非常に困難なものにした。イスラエルは、勝ち誇る敵の前から退却して、荒野へ

行くほかなかった。彼らは、その世代のすべての者が荒野を墓場としなければならないことを知っていた。 PP 204.1

第 35 章　コラの反逆

本章は、民数記 16、17 章に基づく PP 204.2

イスラエルに降った刑罰は、しばらくの間、彼らのつぶやきと不従順をおさえるのに役立った。しかし、彼らの心の中には、なお反逆の精神が残っていて、ついに苦い実を結んだのであった。これまでの反逆は、興奮した群衆が、突然衝動的に起こした民衆の混乱に過ぎなかった。しかし、今度のは神ご自身が任命された指導者の権威をくつがえそうとする決意から生じた根深い陰謀であった。 PP 204.3

この運動の主謀者のコラは、コハテの氏族のレビ人でモーセのいとこであった。彼は才能に恵まれた有力者であった。彼は幕屋の務めに任じられていたが、その地位では満足せず、祭司職の地位につきたいと切望した。以前は、どの家族の長子にも委ねられていた祭司職が、アロンとその家族に与えられたことが、ねたみと不満の原因であった。コラは、しばらくの間、公然と反逆行為に出ることはしなかったが、ひそかにモーセとアロンの権威に反抗していた。彼はついに、一般の民事と宗教の両方の権威を打倒する大胆な謀略を考えた。彼に同調する者も現れた。幕屋の南側にあるコラとコハテ人の天幕のそばに、ルベンの部族の天幕があった。この部族の 2 人のつかさであるダタンとアビラムの天幕は、コラの天幕の近くにあった。このつかさたちは、直ちに彼の野心的陰謀に参加した。彼らは、ヤコブの長子の子孫であったから、施政権は自分たちに属するものであると主張し、コラと祭司職の特権を共有しようともくろんだ。 PP 204.4

一般の人々の考え方も、コラの策略に賛成であった。彼らは、失望の苦しさを味わっている時であったから、以前の疑い、嫉妬、憎しみなどが思い出されて、彼らの不平が、再び忍耐深い指導者に向けられたのであった。イスラエルの人々は、彼らが神に導かれているということを常に忘れた。彼らは、契約の天使が彼らの目に見えない指導者であり、キリストが雲の柱にかくれて彼らの前に進み、モーセは、彼からすべての指示を受けているということを忘れた。 PP 204.5

彼らは、自分たちすべての者が荒野で死なねばならないという恐ろしい宣告に服することを好まなかった。そこで彼らは、あらゆる口実を設けて、彼らを導き滅びを宣告したのはモーセであって、神ではないと思いこもうとした。この地上の最も柔和な人が最善を尽くしても、この民の反抗をしずめることはできなかった。彼らの隊列が乱れ、欠員が生じたことは、彼らの以前のかたくなさに対する神の怒りのしるしであったにもかかわらず、彼らは、これから教訓を学ばなかった。彼らは、再び誘惑に負けた。 PP 204.6

モーセにとって、不穏な大群衆の指導者としての現在の地位よりは、つつましい羊飼いの生活のほうがはるかに平和であり、幸福であった。しかし、これは、モーセが選んだものではなかった。羊飼いのつえのかわりに、権力のつえが彼に与えられた。これは、神が彼を解放されるまでおろすことができないものであった。 PP 204.7

すべての人の心の秘密を読まれる神は、コラと彼 の共謀者の計画に注目し、神の民が、この共謀者たちの欺瞞から逃れることができるように、警告と指示をお与えになった。彼らはモーセに、ねたみと不平をいだいたためにミリアムにくだった神の刑罰を見たのであった。主は、モーセが預言者よりも偉大であると言われた。「彼とは、わたしは口ずから語」ると言われた。神はさらに「なぜ、あなたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか」と言われた（民数記 12：8）。こうした教えは、アロンとミリアムのためだけでなく、イスラエルのすべての者に与えられたのである。 PP 204.8

コラと彼の共謀者たちは、特別に神の力と偉大さとを示される恵みにあずかった人々であった。彼らは、モーセと共に山に登り、神の栄光を見せられた者たちであった。しかし、それから後で変化が起こった。最初はささいなものであった誘惑に心を奪われているうちに、誘惑が強化されていった。そして、彼らの心はついにサタンに支配され、謀反を起こすに至った。彼らは民の繁栄に大きな関心をもっていると表明した。彼らは、まず自分たちの間で不平をささやきあい、引き続いてイスラエルの指導者たちにそれをひろめた。人々は、彼らのほのめかしの言葉を直ちに信じた。そこで、彼らは、さらにそれを押し進め、ついに自分たちは神のための熱意に動かされていると思い込むようになった。 PP 205.1

彼らは、民のなかのおもだった 250 人のつかさたちを離反させることに成功した。彼らは、こうしたしっかりした有力者たちの支持を得たので、政治を根本的に改め、モーセとアロンの行政を大いに改善することができるという自信を持った。 PP 205.2

ねたみは羨望を生じ、羨望は反逆をひき起こしたのである。彼らはモーセに、こうした大きな権力と栄誉にあずかる権利があるのかという問題を語り合った。彼らは、モーセの地位を非常にねたましく思い、自分たちのだれであっても、彼と同じ地位を占めることができると考えるようになった。そして、モーセとアロンの地位はこの 2 人が自分かってに占有したものであると思いちがいをして、他の人々にもそのように思わせた。この指導者たちは、祭司職と行政権を手に入れて、自分たちを主の会衆の上に立てたが、彼らの家は、イスラエルの他の家族以上に栄誉を受ける資格はないのであると、不平家たちは言った。また、彼らは、民よりも清くはない。であるから、神の特別の臨在と保護を同様に受けている兄弟たちと同じ地位で十分であるというのであった。 PP 205.3

共謀者たちの次の仕事は、民を動かすことであった。あやまちを犯し、譴責に値するものに、同情と賞賛ほど好ましいものはない。こういう方法で、コラと仲間たちは、会衆の注意をひいて支持を得た。彼らは、人々がつぶやいたために、神の怒りをこうむったと非難することはまちがいであると言った。会衆は、自己の権利を主張しただけであるから、落ち度はないと言った。また、彼らは、モーセが独裁者であると言った。そして、民は清い民であり、主が民の中におられるにもかかわらず、モーセは彼らを罪人扱いにして譴責したのであると言った。 PP 205.4

コラは、人々が遭遇した困難、また、不平と不服従の結果、多くの者が滅ぼされた荒野の旅路を回顧した。それを聞いた人々は、もしモーセがちがった道を進んだならば、あのような困難はきっと避けられたにちがいないと考えた。そこで彼らは、すべての災難を彼のせいにし、カナンに入国できないのも、モーセとアロンの不手ぎわの結果であると思い込んだ。もし、コラが彼らの指導者になるならば、罪を譴責するかわりに、彼らの善行を認めて勇気づけ、平穏で順調な旅をすることであろう。荒野をさまよい歩くかわりに、約束の国に直行することであろうと人々は思うのであった。 PP 205.5

この反逆活動においては、これまでにかつてなかった団結と調和が、会衆の不平分子の間にあった。こうして民の間で成功をおさめたコラは、モーセに奪われた権力を抑圧しなければ、イスラエルの自由が失われてしまうと堅く信じるようになった。彼はまた、神がこのことを自分に示し、手おくれにならないうちに、政変を断行する権威が彼に与えられたと主張した。しかし、モーセに対するコラの告発を受け入れ ない者も多かった。彼らは、モーセの忍耐と献身的な活動を思い出して、気がとがめたのである。 PP 205.6

であるから、モーセのイスラエルに対する深い関心に、なにかの利己的動機を結びつける必要があった。そこでモーセは、人々の持ち物を没収するために、彼らを荒野に導いて滅ぼそうとしているのだという以前の非難をくりかえした。 PP 206.1

しばらくの間、この運動は秘密のうちに進められた。しかし、この運動が表面化するだけの勢力を得るやいなや、コラは派閥の先頭に立って、コラとその仲間とが、同様に受けるべき権威を、モーセとアロンが奪っていると公に非難した。さらに、人々の自由と独立が侵害されたという攻撃も行われた。共謀者たちは言った。「あなたがたは、分を越えています。全会衆は、ことごとく聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、どうしてあなたがたは、主の会衆の上に立つのですか」（民数記 16：3）。 PP 206.2

モーセは、この根深い陰謀に気づかなかったが、その恐ろしい意味が突然明らかになったとき、彼は、ひれ伏して神に黙祷を捧げた。彼は悲痛な面持ちで立ち上がったが、泰然自若としていた。天来の指示が彼に与えられていた。「あす、主は、主につくものはだれ、聖なる者はだれであるかを示して、その人をみもとに近づけられるであろう」と彼は言った（同 16：5）。すべての者に反省の時間があるように、試験は翌日に延期された。そのとき、祭司職を希望する者が、それぞれ香炉を持って来て、会衆の面前において、幕屋で香を捧げることになった。聖職に任じられた者だけが、聖所で奉仕することができるということが律法に明記されていた。祭司であったナダブとアビウでさえ、神の命令に反して、「異火」を捧げた時に滅ぼされたのである。しかし、モーセは、

こうした危険を冒してまで神に訴えるつもりがあるかどうかを、告発者たちにたずねた。 PP 206.3

モーセは、コラと仲間のレビ人たちを選び出して言った。「イスラエルの神はあなたがたをイスラエルの会衆のうちから分かち、主に近づかせて、主の幕屋の務をさせ、かっ会衆の前に立って仕えさせられる。これはあなたがたにとって、小さいことであろうか。神はあなたとあなたの兄弟なるレビの子たちをみな近づけられた。あなたがたはなお、その上に祭司となることを求めるのか。あなたとあなたの仲間は、みなそのために集まって主に敵している。あなたがたはアロンをなんと思って、彼に対してつぶやくのか」（同 16：9～11）。 PP 206.4

ダタンとアビラムは、コラほどの強硬な態度をとらなかった。そこでモーセは、彼らが全く堕落して共謀に加わったのではなかろうと思って、彼らをモーセのところに呼んで彼に対する彼らの苦情を聞こうと思った。しかし、彼らは来ようともせず、無礼にも彼の権威を認めなかった。彼らは、会衆が聞いているところで、こたえて言った。「あなたは乳と蜜の流れろ地から、わたしたちを導き出して、荒野でわたしたちを殺そうとしている。これは小さいことでしょうか。その上、あなたはわたしたちに君臨しようとしている。かつまた、あなたはわたしたちを、乳と蜜の流れる地に導いて行かず、畑と、ぶどう畑とを嗣業として与えもしない。これらの人々の目をくらまそうとするのですか。わたしたちは参りません」（同 16：13、14）。 PP 206.5

このようにして、彼らは自分たちの奴隷状態を、主が約束の地を描かれたのと全く同じ言葉で描いた。彼らはモーセが自分の権威を確立するために、神の指示のもとに行動しているふりをしたと非難したのである。そして彼らは、もはや彼の野心的計画のままに、盲目的に、カナンに向かってみたり、荒野に向かってみたりはしないと言った。こうして、やさしい父親、また忍耐深い羊飼いのようであった彼を、極悪非道な暴君、または強奪者のように彼らは言うのであった。彼ら自身の罪の罰として、カナンに入れなくなったことを、モーセのせいにしたのである。 PP 206.6

人々の同情が、謀反を起こした側に集まることは明白であった。しかし、モーセは自己を弁護しようとはしなかった。彼は、彼の動機が純粋で、彼の行動が正しいことを

神があかししてくださるように、人々の前で厳粛に神に訴えて、神が彼の裁判官になってくださるように哀願した。 PP 206.7

翌日、コラを先頭に 250 人の司たちが、火皿をたずさえて現れた。彼らは、幕屋の庭に導き入れられ、人々は外側に集まって結果を待っていた。コラとその仲間たちの敗北を目撃させるために会衆を集めたのはモーセではなかった。それは、反逆者たちが、盲目的推測によって自分たちの勝利を目撃させようとして、彼らを集めたのであった。会衆の大部分は、アロンに対抗して勝つ自信を十分に持っていたコラに公然と味方していた。 PP 207.1

こうして、彼らが神の前に出たときに、「主の栄光は全会衆に現れた」。モーセとアロンに、神の警告が伝えられた。「あなたがたはこの会衆を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼすであろう」。しかし、彼らはひれ伏して、祈って言った。「神よ、すべての肉なる者の命の神よ、このひとりの人が、罪を犯したからといって、あなたは全会衆に対して怒られるのですか」（同 16：19、21、22）。 PP 207.2

モーセが、彼のところに来ることを拒んだ人々に最後の警告を与えるために、70 人の長老たちと共に下っていったときに、コラは会衆から退いて、ダタンとアビラムに加わった。群衆は従ってきた。モーセは、彼の使命を伝えるに先だち、神の指示によって、人々に命じた。「どうぞ、あなたがたはこれらの悪い人々の天幕を離れてください。彼らのものには何にも触れてはならない。彼らのもろもろの罪によって、あなたがたも滅ぼされてはいけないから」と人々に命じた（同 16：26）。みなの者は、刑罰が下されようとしているのを知って、この警告に従った。反逆の主謀者たちは、彼らが欺いてきた者たちから捨てられたことを知ったが、その不敵な態度を変えなかった。彼らは、神の警告を無視するかのように、家族と共に天幕の入口に立っていた。 PP 207.3

ここで、モーセは、会衆の面前でイスラエルの神の名によって宣言した。「あなたがたは主がこれらのすべての事をさせるために、わたしをつかわされたこと、またわたしが、これを自分の心にしたがって行うものでないことを、次のことによって知るであろう。すなわち、もしこれらの人々が、普通の死に方で死に、普通の運命に会うのであれば、主がわたしをつかわされたのではない。しかし、主が新しい事をされ、地が口を

開いて、これらの人々と、それに属する者とを、ことごとくのみつくして、生きながら陰府に下らせられるならば、あなたがたはこれらの人々が、主を侮ったのであることを知らなければならない」（同 16：28～30）。 PP 207.4

イスラエルの人々は、次に何が起こるかと思って、恐怖におびえながら、いっせいにモーセを見つめて立っていた。彼が語り終えると、堅い大地が裂けて、反逆者たちは彼らのすべての持ち物と共に、生きながら穴の中に落ちていった。そして、「彼らは会衆のうちから、断ち滅ぼされた」（同 16：33）。人々は、その罪に関与した自責の念にかられて逃げ去った。 PP 207.5

しかし、刑罰はこれで終わったのではなかった。雲から火がひらめいて、薫香を供えた 250 人のつかさたちを焼き尽くした。この人々は、最初に反逆したのではなかったので、首謀者たちと共に滅ぼされなかった。彼らは首謀者たちの最後を見て、悔い改める機会が与えられた。しかし、彼らは反逆者に共鳴し、彼らと運命を共にした。 PP 207.6

モーセが、切迫している刑罰からのがれるようにイスラエルに嘆願したとき、もし、コラと彼の仲間が悔い改めて赦しを求めたならば、神の刑罰は、そのときでも止められたかも知れなかった。しかし、彼らの頑迷さが彼らの運命を決定したのである。全会衆も多かれ少なかれ、彼らに共鳴したのであるから、罪があったのである。しかし神は、大いなる憐れみをもって、反逆の指導者と、指導に従った者とを区別された。欺かれてしまった民には、まだ悔い改める余裕が与えられていた。彼らが誤っており、モーセが正しいという圧倒的証拠が与えられた。著しい神の力のあらわれによって、すべての疑惑が取り除かれた。 PP 207.7

ヘブル人に先だって行かれた天使であられるイエスは、彼らを滅びから救おうとされた。彼は、なんとかして彼らを赦そうとしておられた。神の刑罰が身辺に迫り、悔い改めをうながした。抵抗することのできない特別の天からの介入によって、彼らの反逆は 阻止された。もし彼らが、今、神の摂理の介入に応じるならば、救われるのであった。彼らは、滅びを恐れて刑罰からのがれたけれども、彼らの反逆心は癒されていなかった。その夜、彼らはおびえて天幕に帰ったが、悔い改めてはいなかった。 PP 207.8

人々は、コラと彼の仲間たちの甘言によって、自分たちは非常にりっぱな民であると思い込み、モーセから、虐待と不当な扱いを受けたのだと本当に思い込んだ。もし、コラとその仲間が誤っていて、モーセが正しかったと認めるならば、彼らが荒野で死ぬという宣告も、神の言葉として受けなければならないのであった。彼らは、これに服することを好まず、モーセに欺かれたと信じようと試みた。彼らは、今にも新秩序が制定されて、譴責のかわりに賞賛、また、心労と争闘のかわりに安易な生活が与えられることを望んでいた。滅ぼされた人々は、へつらいの言葉を語り、彼らに大きな関心と愛をあらわしていた。それで、人々は、コラと彼の仲間は善良な人々にちがいなく、彼らが滅ぼされたのは、何かの理由で、モーセのせいだと考えた。 PP 208.1

神が自分たちを救うために用いられる器を拒否し、軽蔑することほど、神への大きな侮辱はあり得ない。イスラエル人は、そうしたばかりでなくて、モーセとアロンを 2 人とも殺害しようとたくらんだ。しかし、彼らは、自分たちのこうした恐ろしい罪の赦しを神に求める必要を認めなかったのである。猶予の夜は、悔い改めと告白ではなくて、彼らが大罪人であることを示した証拠に抵抗する手段を工夫するために過ごされた。彼らはなお、神が任命された人々を憎み、その権威に逆らおうとした。サタンは、彼らの判断力をゆがめ、盲目にして滅びに陥れようとしていた。 PP 208.2

イスラエルの全会衆は、穴に落ちた不運な罪人たちの叫びを聞いて、驚いて逃げ去った。「恐らく地はわたしたちをも、のみつくすであろう」と彼らは言った。「その翌日、イスラエルの人々の会衆は、みなモーセとアロンとにつぶやいて言った、『あなたがたは主の民を殺しました』」（同 16：34、41）。こうして、彼らは、今にも忠実で献身的な彼らの指導者に暴力をふるおうとした。 PP 208.3

幕屋にたれこめた雲の中に、神の栄光が現れた。そして、雲から声がモーセとアロンに語って言った。「あなたがたはこの会衆を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼそう」（同 16：45）。 PP 208.4

モーセにはなんの罪もなかったから、恐れをいだかなかった。彼は、急いで会衆を離れて、彼らを滅びるままにしておかなかった。モーセは、この恐ろしい危機にあって、自分が飼っている群れに対して真の羊飼いとしての思いやりをみせて、そこを去ろうと

しなかった。彼は神の選民が、神の怒りによって全滅されないように嘆願した。こうした彼のとりなしによって、復讐の手は止められ、不服従で反抗的なイスラエルは全滅をまぬかれたのである。 PP 208.5

だが、怒りの使者はすでに出発していた。人々は、すでに疫病に倒れていた。アロンはモーセの指示に従って、薫香を手にして、急いで会衆のまん中に行き、「彼らのために罪のあがない」をした。彼は、「すでに死んだ者と、なお生きている者との間に立」った（同 16：46、48）。薫香の煙とともに、幕屋でのモーセの祈りも神のもとにのぼっていった。そして疫病はやんだ。しかし、つぶやきと反逆の罪の結果として、1 万 4 千人のイスラエル人が死んだのである。 PP 208.6

祭司職は、アロンの家に定められたという証拠が、さらに与えられた。神の指示に従って、各部族はつえを準備し、それに部族の名を書きしるした。アロンの名は、レビのつえに書かれた。つえは、幕屋の中の「あかしの箱の前に」置かれた。どのつえからでも芽が出るならば、主がその部族を祭司職に選ばれたしるしとなるのであった。その翌日、見よ、「レビの家のために出したアロンのつえは芽をふき、つぼみを出し、花が咲いて、あめんどうの実を結んでいた」（同 17：8）。そのつえは、人々に見せたあとで、後世への証拠として、幕屋の中に保存された。この奇跡は、祭司職に関する問題を難なく解決した。 PP 208.7

こうして、モーセとアロンとは、神の権威のもとに語ったということが十分に証拠立てられた。そして、人々は、荒野で死ぬという好ましくない事実を認めなけれ ばならなくなった。「ああ、わたしたちは死ぬ。破滅です、全滅です」と彼らは叫んだ（同 17：12）。彼らは、指導者に反逆した罪を告白し、コラとその仲間の者が神の正しい刑罰によって滅ぼされたことを認めた。 PP 208.8

天においてサタンを反逆させたのと同じ精神が、小規模ではあったが、コラの反逆のなかに見られたのである。神の統治に対する不満をルシファーにいだかせ、天の秩序をくつがえそうとさせたのは、誇りと野心であった。サタンは堕落以来、この同じねたみと不満、地位や名誉に対する野心を人間の心に植えつけようとしてきた。こうして、彼は、コラ、ダタン、アビラムの心を動かし、自己高揚心を起こさせ、ねたみ、不信、

反逆の精神をかきたてたのである。サタンは彼らに、神の任命された人々を拒ませて、彼らの指導者であられる神を拒否させたのである。彼らは、モーセとアロンに向かってつぶやき、神を冒瀆していながらも、なお、自分たちは正しく、彼らの罪を忠実に譴責した人々をサタンに動かされているとみなすほどに欺かれていた。 PP 209.1

コラの滅亡の根底に横たわっていた同じ悪が、なお、存在しているのではなかろうか。誇りと野心は広く人の心を支配している。そして、この精神は、ねたみと最高の地位を求める心を起こさせる。魂は神から離れ去って、無意識のうちにサタンの側に引かれるのである。多くの者、また、キリストの従者であると公言する者でさえ、自分を高めるために熱心に考え、計画し、努力している。そして、人々の共鳴と支持を得るためには、あえて事実をもまげ、主のしもべたちを偽って悪く言い、自己の心のいやしい利己的動機を、彼らの動機であるかのように非難するのである。十分の証拠があるにもかかわらず、虚偽をくりかえしているうちに、彼らはついにそれを事実であると思うようになる。神が任命された人々に対する民の信頼を失わせようとしていながら、自分たちは善事を行い、真に神に奉仕していると思い込むのである。 PP 209.2

ヘブル人は、主の指示と制限に服従することを喜ばなかった。彼らは、拘束をきらい、譴責を甘受しなかった。こういうわけで、彼らはモーセにつぶやいたのである。もし、彼らが欲することを自由にすることができたならば、指導者に対する不平は少なかったことであろう。教会の全歴史を通じて、神のしもべたちはこの同じ精神に当面したのである。 PP 209.3

人間は、罪にふけることによって、心の中にサタンがつけ込むすきを与える。そして、1 つの悪から次の悪へと進んでいく。光の拒否によって思考は暗く、心は堅くなる。そして、容易に次の罪を犯し、さらに大きな光を拒み、ついには罪を犯すことが習慣になってしまうのである。罪は彼らにとって、悪いものとは思われなくなる。神のみ言葉を忠実に説いて、彼らの罪を譴責するものは、当然彼らから憎まれる。彼らは、改革に必要な苦痛と犠牲に耐えることを喜ばず主のしもべに反抗し、その譴責を不当できびしいものであると非難するのである。コラと同様に、人々には罪はなく、譴責者が災害の原因であるというのである。ねたみと不満の持ち主は、こうした欺瞞によって良心をな

だめ、結束して不和の種をまき、教会を築こうとする者の手を弱めるのである。 PP 209.4

神のみわざを推し進めるために召された人々の働きは、ことごとく疑惑の目で見られたのである。また、すべての行為は、ねたみとあらさがしの精神をもった人々に悪口を浴びせられた。ルーテル、ウエスレー、また他の改革者の時代においても、このとおりであった。これは今日も同様である。 PP 209.5

もし、コラが、イスラエルに伝えられたすべての譴責と指令が神から出たものであることを知っていたならば、あのようなことはしなかったことであろう。しかし、彼は、これを知ることができたのである。神は、ご自分がイスラエルの指導者であることの十分な証拠を、すでに与えておられた。しかし、コラと彼の仲間は、光を拒んだので目がくらみ、神の力のどんな著しい現れも、彼らを納得させることができなかった。彼らは、それらをすべて人間的、またはサタンの力に帰していた。これと同じことを人々が行った。彼らは、コラとその仲間が滅ぼされた翌日、モーセのところに来て「あなたがたは主の民を殺しました」と言った。彼らは、民を欺いた者の滅びを見て、彼らの行為が 神の不興を招いたという決定的証拠を示されたにもかかわらず、神の刑罰をサタンのせいにし、モーセとアロンが、正しく清い人々を悪魔の力によって死なせたと言ったのである。彼らの運命を決定したのは、この行為であった。彼らは聖霊に対する罪を犯した。人の心は、この罪によって堅く閉ざされて、神の恵みに浴することができなくなるのである。「また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は……ゆるされることはない」とキリストは言われた（マタイ12：32）。この言葉は、救い主が神の力によって恵みのわざをなさったときに、ユダヤ人がそれをベルゼブルによって行われたと言ったのに対して語られたものである。神は聖霊の働きによって人間と交わられる。であるから、この働きをサタンのものであると故意に拒む者は、魂と天との通路を断ち切ってしまうのである。 PP 209.6

神は、聖霊の働きによって罪人を譴責し、罪を悟らせられる。であるから、聖霊がついに拒否されてしまうならば、神はその魂のためにもう何もおできにならない。神のあわれみの最後の手段がとられたのである。罪人は自分を神から切り離した。そして、

罪には、それからの救済策がないのである。罪人に罪を認めさせて、悔い改めさせるために働く力が、もうなにも残されていないのである。「そのなすにまかせよ」と神は命じられる（ホセア 4：17）。そして、「罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある」（ヘブル 10：26、27）。 PP 210.1

第 36 章　イスラエルの流浪

イスラエルの人々は、約 40 年のあいだ荒野に消息を絶った。モーセは、「カデシ・バルネアを出てこのかた、ゼレデ川を渡るまでの間の日は 38 年であって、その世代のいくさびとはみな死に絶えて、宿営のうちにいなくなった。主が彼らに誓われたとおりである。まことに主の手が彼らを攻め、宿営のうちから滅ぼし去られたので、彼らはついに死に絶えた」と書いている（申命記 2：14、15）。 PP 210.2

この年月の間、人々は自分たちが神の懲罰のもとにあることを常に思い起こさせられた。彼らは、カデシで反逆を起こして神を拒んだ。そして、神も、しばらくの間彼らを拒否された。彼らは、神の契約に不忠実であったから、契約のしるしである割礼の儀式にあずかってはならなかった。彼らは、奴隷の地に帰りたいと願って、自由を獲得する資格がないことを明示した。であるから、奴隷の境遇からの解放を記念して制定された過越の祭りを行ってはならなかったのである。 PP 210.3

しかし、幕屋での務めが続いていたことは、神が人々を全くお見捨てになったのではないことを証拠立てていた。また、神は摂理的に彼らの必要を満たされた。モーセは、民の放浪の歴史をくり返して述べた。「あなたの神、主が、あなたのするすべての事において、あなたを恵み、あなたがこの大いなる荒野を通るのを、見守られたからである。あなたの神、主がこの 40 年の間、あなたと共におられたので、あなたは何も乏しいことがなかった」（同 2：7）。 PP 210.4

ネヘミヤが記録したレビ人たちによる賛美の言葉には、彼らが神に捨てられて、放浪していた年月の間にもなお、神がイスラエルの民を保護なさったことが、目に見えるように描写されている。「あなたは大いなるあわれみをもって彼らを荒野に見捨てられず、昼は雲の柱を彼らの上から離さないで道々彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らの行くべき道を照されました。またあなたは良きみたまを賜わって彼らを教え、あなたのマナを常に彼らの口に与え、また水を彼らに与えて、かわきをとどめ、40 年の間彼ら

を荒野で養われたので、彼らはなんの欠けるところもなく、その衣服も古びず、その足もはれませんでした」（ネヘミヤ 9：19～21）。 PP 210.5

荒野の放浪は、謀反を起こし、つぶやいた人々に対する罰として決められただけでなく、成長しつつあ った次の世代を訓練して、約束の国にはいる準備を与えるためのものでもあった。モーセは、彼らに言った。「人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練される」「それはあなたを苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るためであった。それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、あなたも知らずあなたの先祖たちも知らなかったマナをもって、あなたを養われた。人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべてのことばによって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記 8：5、2、3）。 PP 210.6

「主はこれを荒野の地で見いだし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた」「彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもって彼らを救い、その愛とあわれみとによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた」（同 32：10、イザヤ 63：9）。 PP 211.1

それにもかかわらず、荒野における彼らの唯一の記録は、彼らの主に対する反逆であった。コラの謀反の結果 1 万 4 千人のイスラエル人が死んだ。ほかにも、同じように、神の権威を無視した精神を示した事件が起こった。ある時には、エジプトからイスラエル人と共にやって来た寄り集まり人の 1 人であるエジプト人と、イスラエルの女との間のむすこが、彼の属する宿営を離れて、イスラエル人の場所へはいり、そこに自分の天幕を張る権利を主張したのである。これは、神の戒めが禁じていたことであって、エジプト人の子孫は 3 代まで会衆から除外されていたのである。そこで、彼とイスラエル人との間の争いは、裁判にかけられて、彼の負けと決まった。 PP 211.2

彼は、この決定に激怒し、裁判官をのろい、興奮のあまり、神の名を汚したのである。彼は、ただちにモーセの前に連れてこられた。「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない」という戒めはあったが、このような場合のことについて

は、なんの規定もなかった（出エジプト 21：17）。これは、非常に恐ろしい犯罪であったので、神からの特別の指示を仰ぐ必要があった。この人は、神のみこころがはっきりするまで監禁された。神ご自身が判決を下された。神を汚した者は、神の指示のもとに宿営の外に連れ出されて、石で打たれた。彼の罪の証人たちが彼の頭に手をおき、彼に対する告訴が真実であることを厳粛に証明した。それから、彼らが最初に石を投げ、そのあとで、そばに立っていた人々が刑の執行に加わった。 PP 211.3

これに続いて、同じような違反に対する律法が布告された。「あなたはまたイスラエルの人々に言いなさい、『だれでも、その神をのろう者は、その罪を負わなければならない。主の名を汚す者は必ず殺されるであろう。全会衆は必ず彼を石で撃たなければならない。他国の者でも、この国に生れた者でも、主の名を汚すときは殺されなければならない』」（レビ 24：15、16）。 PP 211.4

このようなきびしい刑罰が、興奮のあまり口にした言葉に課せられるなら、果たして神は愛と正義の神であろうかという疑問をもつ人々もあろう。しかし、神に敵意をいだいて発した言葉は大罪であることを示すことは、愛も正義もともに要求するところである。最初の違反者に与えられた罰は、他の者に対して、神のみ名を敬わなければならないという警告であった。しかし、もしこの人の罪が罰せられずにすんだならば、他の者たちは、規律を乱し、そのために多くの人の命が犠牲にされたことであろう。 PP 211.5

イスラエルの民と共に、エジプトから来た寄り集まり人は、いつも誘惑と紛争の原因であった。彼らは、偶像礼拝を捨て、真の神を礼拝すると言っていた。しかし、彼らの幼少期の教育と訓練は、彼らの習慣と品性をすでに形成しており、偶像礼拝と不敬虔な精神に少なからず感化されていた。彼らは、誰よりも争いを起こし、まっ先に不平を言い、偶像礼拝の習慣や神に対するつぶやきを宿営のなかに満たした。 PP 211.6

荒野に引き返してから間もなく、安息日違反者が出るという出来事が起こった。これは、その事情から見て、特に罪深い事件であった。主がイスラエルに約束の国を与えないと言われたのを聞いて、人々は 反逆の精神を抱いた。民のひとりが、カナンに入られないことを怒って、安息日にたきぎを拾いに出かけ、公然と第 4 条を犯し、神の

戒めに反抗を示したのである。荒野を放浪していた間は、7 日目に火をたくことはきびしく禁じられていた。この禁令は、気候が寒くなり、火が必要なときもあるカナンでは施行されるものではなかった。しかし、荒野では、暖をとるために火をたく必要はなかった。この人の行為は、故意に第 4 条の戒めを犯したのであった。すなわち、それは、不注意や無知の罪ではなくて、僭越の罪であった。 PP 211.7

彼は、その場で捕らえられて、モーセのところに連れて来られた。安息日を犯す者には、死刑の罰が与えられることになっていた。しかし、その罰がどのように執行されるかは、まだ示されていなかった。モーセが、このことを主の前に申し上げると、指示が与えられた。「その人は必ず殺されなければならない。全会衆は宿営の外で、彼を石で撃ち殺さなければならない」（民数記 15：35）。冒瀆の罪と故意に安息日を犯した罪は、ともに神の権威に対する侮辱をあらわしたものであるために、同じ刑罰を受けた。 PP 212.1

今日も創造を記念する安息日を、単なるユダヤの制度として、これを拒否し、もしそれを守るべきものであるとすれば、その違反は死刑でなければならないと主張する人が多くいる。しかし、神のみ名を汚す罪も、安息日を犯す罪と同じ刑罰が与えられているのである。それならば、第 3 条も、ユダヤ人だけに当てはまるものとして廃止すべきであろうか。死罪のことからこのように証明しようとすれば、それは第 4 条と同様に、第 3 条、第 5 条、そして十戒のほとんど全部に当てはまるのである。今、神は、神の戒めの違反者をすぐに罰せられないとしても、神のみことばは、罪の支払う報酬は死であると言っている。そして、最後の審判のときに、神の聖なる戒めを犯したものの運命は死であることが明らかにされる。 PP 212.2

荒野の 40 年間において、人々は、毎週マナの奇跡によって、安息日を清く守らなければならないことを思い起こさせられた。しかし、これでさえも彼らを従順に導くことはできなかった。彼らは、このように著しい刑罰に値する違反を公然と大胆に犯すことはなかったけれども、第 4 条の戒めの遵守が非常に不規則になった。神は、預言者を通して、彼らは、「大いにわたしの安息日を汚した」と宣言された（エゼキエル 20：13～24 参照）。第 1 代目の人々が、約束の国から除外された理山の 1 つに、この点が

あげられている。しかし、彼らの子供たちも教訓を学ばなかった。彼らは、40 年間、荒野を放浪している間に、安息日をないがしろにしたのであった。神は、彼らがカナンに入るのをおとどめにはならなかった。しかし、神は、彼らが約束の国に移住した後で、異邦の諸国に離散されるであろうと言われたのである。 PP 212.3

イスラエルの人々は、カデシから荒野へ引き返した。そして、荒野の放浪期間を終えた。「イスラエルの人々の全会衆は正月になってチンの荒野にはいった。そして民はカデシにとどまった」（民数記 20：1）。 PP 212.4

ここで、ミリアムが死んで葬られた。大きな希望をもってエジプトを出た幾百万人のイスラエル人は、紅海のほとりで、主の勝利を祝って、歌い踊ったのであった。しかし、彼らは一生の間放浪を続けて、ついに荒野で死に絶えることになった。 PP 212.5

罪は、彼らのくちびるから、祝福の杯をはらいのけた。次の世代は、その教訓を学んだであろうか。「すべてこれらの事があったにもかかわらず、彼らはなお罪を犯し、そのくすしきみわざを信じなかった。……神が彼らを殺されたとき、彼らは神をたずね、悔いて神を熱心に求めた。こうして彼らは、神は彼らの岩、いと高き神は彼らのあがないぬしであることを思い出した」（詩篇 78：32～35）。しかし、彼らは、真心から立ち帰ることをしなかった。彼らは、敵に苦しめられたとき、唯一の救済者であられる神の助けを求めた。しかし、「彼らの心は神にむかって堅実でなく、神の契約に真実でなかった。しかし神はあわれみに富まれるので、彼らの不義をゆるして滅ぼさず、しばしばその怒りをおさえて、……また神は、彼らがただ肉であって、過ぎ去れば再び帰りこぬ風であることを思い出された」（同 78：37～39）。 PP 212.6

第 37 章　打たれた岩

本章は、民数記 20：1～13 に基づく PP 213.1

荒野におけるイスラエル人のかわきを癒した泉の水は、まず、最初にホレブの打たれた岩から流れ出た。彼らが、放浪していた全期間を通じて、必要な場合は、どんなところでも、神の憐れみ深い奇跡が行われて、水が供給された。しかし、水は、ホレブからいつまでも流れ出ていたのではなかった。彼らの旅の途中で、水が必要なときには、どこでも宿営のそばの岩の裂け目から水がわき出た。 PP 213.2

清水をイスラエルのために流れ出させたのは、キリストが、ご自分のみことばによってなさったのである。「彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」（Ｉコリント 10：4）、彼は、霊的祝福と同様に、すべての物質的祝福の源である。真の岩なるキリストは、彼らの放浪期間を通じて、彼らと共におられたのである。「主が彼らを導いて、さばくを通らせられたとき、彼らは、かわいたことがなかった。主は彼らのために岩から水を流れさせ、また岩を裂かれると、水がほとばしり出た」「かわいた地に川のように流れた」（イザヤ 48：21、詩篇 105：41）。 PP 213.3

打たれた岩は、キリストの型で、この象徴によって、最も尊い霊的真理が教えられた。打たれた岩から生命を与える水が流れ出たように、「神にたたかれ」「われわれのとがのために傷つけられ」「われわれの不義のために砕かれた」キリストから、失われた人類のための救いの川が流れ出たのである（イザヤ 53：4、5）。岩が 1 度打たれたように、キリストも「多くの人の罪を負うために、1 度だけご自身をささげられた」のである（ヘブル 9：28）。われわれの救い主は、二度と犠牲になられるべきではなかった。キリストの恵みの祝福を求める者は、悔い改めて、主のみ名によって、心の願いを述べるだけでよいのである。こうした祈りは、イエスのみ傷を万軍の主のみ前にもたらし、新たにもう一度、生命を与える血潮を流れさせるのである。イスラエルのために岩から水が流れ出たことによって、それが象徴されていたのである。 PP 213.4

荒野で岩から水が流れ出たことは、イスラエルがカナンに定住したのちも、非常な喜びをもって祝われた。キリストの在世当時、この祝日は、最も感銘的な儀式となっていた。それは、各地からエルサレムに人々が集まってくるときに行われた仮庵の祭りとともに祝われた。祭司は、毎日、祭りの 7 日間を通じて、音楽を奏する者とレビ人の合唱隊を伴ってシロアムの泉に行き、そこで金の 1 つの容器に水をくむのであった。礼拝に集まった群衆は、彼らのあとに従った。そして、泉に近づくことのできる者はみなその水を飲んだ。「あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ」と喜ばしい歌声があがるのであった（イザヤ 12：3）。それから、祭司の手でくまれた水は、ラッパの響きと、「エルサレムよ、われらの足はあなたの門のうちに立っている」という歌声のなかを、宮までたずさえられた（詩篇 122：2）。そして、賛美の歌声が高まり、群衆が、楽器と荘重なラッパの音に和して高らかに歌う合唱隊に加わって歌っているとき、その水は、燔祭の壇の上に注がれた。 PP 213.5

救い主は、この象徴的儀式によって、ご自分が彼らのためにもたらされた祝福に彼らの心を向けようとされた。「祭の終りの大事な日に」イエスは、宮の庭に響き渡る大声で言われた。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」「これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである」とヨハネは言った（ヨハネ 7：37～39）。かわききった荒野にわき出て、荒れ果てた地に花を咲かせ、死にかけた者に生命を与えるために流れ出た新鮮な水は、キリストだけが与え得る神の恵みの象徴である。これは、命の水のように魂を清め、生きかえらせ、力づける。キリストが内住しておられる者のうちには、つきない恵みと力の泉がある。イエスは、 真心から彼を求めるすべての者の生活を楽しくし、その道を照らしてくださる。イエスの愛を心に受け入れるならば、それは、永遠の命に至るよいわざとなってわき出る。それは、泉がわき出た魂を祝福するばかりでなくて、その生きた水は、正しい言葉や行為となってわき出て、周りにいるかわいた人々をうるおすのである。 PP 213.6

キリストは、この同じ象徴を、ヤコブの井戸のそばでサマリヤの女と語られたときに用いられた。「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」（ヨハネ 4：14）。キリストは、2 つの型を結合された。彼は、岩であり、生きた水である。 PP 214.1

この同じ美しく意味深い象徴が、聖書全体に用いられている。キリストが来られる幾世紀も以前に、モーセは彼を救いの岩としてさし示した（申命記 32：15 参照）。詩篇記者は、彼のことを、「わがあがないぬし」「わが力の岩」「わたしの及びがたいほどの高い岩」「のがれの岩」「わが心の力」「わが避け所の岩」と歌っている。ダビデの詩のなかで、神の恵みは、天の羊飼いが、その群れを導かれるみどりの牧場の中の冷たい「いこいのみぎわ」としても描かれている。また、「あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる。いのちの泉はあなたのもとにあり」と彼は歌った（詩篇 19：14、62：7、61：2、71：3、73：26、94：22、23：2、36：8、9）。賢者ソロモンは、「知恵の泉は、わいて流れる川である」と言った（箴言 18：4）。エレミヤにとって、キリストは、「生ける水の源」であり、ゼカリヤにとっては、「罪と汚れとを清める 1 つの泉」であった（エレミヤ 2：13、ゼカリヤ 13：1）。 PP 214.2

イザヤは、キリストを描写して、「とこしえの岩」また「疲れた地にある大きな岩の陰のよう」であると言った（イザヤ 26：4、32：2）。彼は、尊い約束を記録し、イスラエルのために流れた生きた水のことを、まざまざと思い起こさせている。「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない」「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ」「……荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである」「さあ、かわいている者はみな水にきたれ」との招待が発せられている（イザヤ 41：17、44：3、35：6、55：1）。また、聖書の終わりのほうでも、この招待がくり返されている。生命の水の流れは、「水晶のように輝」き、神と小羊のみ座から流れ出ている。「いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受

けるがよい」という恵み深い招声は、各時代を通じて響きわたっているのである（黙示録 22：1、17）。 PP 214.3

ヘブルの軍勢がカデシに到着する少し前に、宿営の外にわいていた泉の水が枯れた。主は、もう一度、人々を試みようとなさったのである。彼らが、神の摂理に信頼するか、それとも、父祖たちの不信仰をまねるかどうかをためそうとされた。 PP 214.4

彼らは、すでに、カナンの山々の見えるところにきていた。彼らは、あと数日の行進で約束の国の境に着くことができた。彼らは、エサウの子孫の国であるエドムから少し離れたところにいた。そして、カナンへの道はそこを通っていた。モーセに次のような指示が与えられた。「身をめぐらせて北に進みなさい。おまえはまた民に命じて言え、『あなたがたは、エサウの子孫、すなわちセイルに住んでいるあなたがたの兄弟の領内を通ろうとしている。彼らはあなたがたを恐れるであろう。……あなたがたは彼らから金で食物を買って食べ、また金で水を買って飲まなければならない』」（申命記 2：3～6）。このような指示が与えられたことによって、水が枯れた理由が十分に説明されたはずであった。彼らは、よく肥えた、水の豊富な地帯を通って、カナンに直行しようとしていた。神は、彼らが、何にも妨げられずに、エドムを通過し、食物を買う機会と、群衆のために十分な水とを約束しておられた。奇跡的な水の流出が止まったことは喜ぶべきことで、荒野の放浪が終わったしるしであった。もし彼らが不信仰のために盲目になって いなかったならば、このことを理解したはずであった。しかし、神の約束の成就の証拠となるべきことが、疑いとつぶやきの原因となった。人々は、神が彼らにカナンをお与えになるという希望を全く捨ててしまったようであった。そして、彼らは、荒野の祝福を求めてやまなかったのである。 PP 214.5

神が、人々をカナンに入国させる前に、人々は、神の約束を信じたことを示さなければならなかった。彼らがエドムに到着する前に水は止まった。彼らは、しばらくの間、見るところによらず、信仰によって歩かなければならなかったのである。彼らは、この第一の試練にあって、父祖たちと同じ狂暴で忘恩の精神をあらわした。宿営内で水を求める声があがるやいなや、彼らは、長年彼らの必要を満たしたみ手を忘れて、神に助けを求めるかわりに、神に向かってつぶやいた。彼らは、絶望の叫びをあげて、「さきに

われわれの兄弟たちが主の前に死んだ時、われわれも死んでいたらよかったものを」と言った（民数記 20：3）。それは、コラの反逆のときに滅ぼされた人々の中に、自分たちも入っていればよかったと望んだことである。 PP 215.1

彼らの叫びは、モーセとアロンに向けられたものであった。「なぜ、あなたがたは主の会衆をこの荒野に導いて、われわれと、われわれの家畜とを、ここで死なせようとするのですか。どうしてあなたがたはわれわれをエジプトから上らせて、この悪い所に導き入れたのですか。ここには種をまく所もなく、いちじくもなく、ぶどうもなく、ざくろもなく、また飲む水もありません」（同 20：4、5）。 PP 215.2

そこで、指導者たちは幕屋の入口に行って地にひれ伏した。ふたたび、「主の栄光が……現れ」、主は、モーセに指示をお与えになった。「あなたは、つえをとり、あなたの兄弟アロンと共に会衆を集め、その目の前で岩に命じて水を出させなさい。こうしてあなたは彼らのために岩から水を出」させなさい（同 20：6、8）。 PP 215.3

2 人の兄弟は、群衆の前に出て行った。モーセは、神のつえを手に持っていた。彼らは、もう老人であった。彼らは、長い間、イスラエルの強情と反抗に耐えてきた。だが、ついに、モーセは忍耐しきれなかった。「そむく人たちよ、聞きなさい。われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならないのであろうか」と叫んで、モーセは神の命令に従って岩に命じるかわりに、つえで岩を 2 度も打ったのである（同 20：10）。 PP 215.4

水は豊かにわき出て、群衆を満足させた。しかし、大きなあやまちがなされた。モーセは、短気を起こして語った。彼の言葉は、神のみ栄えが汚されたことに対する義憤からではなくて、人間の感情の表現であった。彼は「そむく人たちよ、聞きなさい」と言った。この譴責の言葉は事実であった。しかし、真実でさえも、感情的になり、短気を起こして語るべきではない。神がかつてイスラエルの反逆を責めるようにモーセに命じられたとき、その言葉は、彼にとっては苦痛であり、彼らにも耐えがたいものであった。しかし、神は彼を支えて、その言葉を語る力をお与えになったのである。しかし、彼が自分で彼らを責めようとしたとき、彼は、神の霊を悲しませ、民に害毒を及ぼしただけであった。彼が忍耐と自制を欠いたことは明らかであった。こうして、これはモー

セのこれまでの行動が神の指導のもとにあったかどうかを人々に疑わせ、彼ら自身の罪の弁解をする機会を与えた。民と同様に、モーセも神を怒らせた。彼の行動は、最初から、批評非難の的であったと彼らは言った。今や彼らは、そのしもべによって語られた神のすべての譴責を拒もうとして待機していた口実を見つけたのである。 PP 215.5

モーセは、神に対する不信をあらわした。「われわれがあなたがたのために……水を出さなければならないのであろうか」と彼は言って、主が約束を果たされないかのように尋ねた。「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかった」と主は 2 人の兄弟に言われた（同 20：12）。水が枯れ、人々がつぶやき反抗したときに、神の約束に対する彼ら自身の信仰は動揺した。親たちは、不信仰のために荒野で滅びる運命にあったが、彼らと同じ精神が子供たちにもあらわれた。彼らも約束を受けそこなうのであろうか。疲れ果て、 意気消沈したモーセとアロンは、人々の間にゆきわたった考えを止めようと努力しなかった。もし彼らが神に対する不動の信仰をいだいていることを明らかにし、人々に事情をよく説明したならば、彼らがこの試練に耐えられるようにすることができたことであろう。行政官として、彼らに与えられた権限を敏速に、決断をもって行使したならば、彼らは、つぶやきをしずめることができたかも知れなかった。神に援助を仰ぐ前に、自分たちの最善を尽くして、事態を収拾することが彼らの責任であった。カデシにおける不平がすみやかにしずめられていたならば、どれほどの害毒が防がれたことであろう。 PP 215.6

モーセは、性急な行動によって、神が教えようとされた教訓の効果を無にしてしまった。キリストを象徴した岩は、1 度打たれたのである。そのように、キリストは 1 度ささげられたのであった。2 度目には、ただ岩に命じるだけでよかったのである。それは、われわれがイエスの名によって、祝福を求めさえすればよいのと同じである。岩を 2 度打つことによって、この美しいキリストの象徴の意味がなくなってしまった。 PP 216.1

それだけでなく、モーセとアロンは、ただ神だけに属する力を我が物顔に装った。神の介入が必要であるということは、非常に厳粛な事態であった。イスラエルの指導者たちは、これを機会に人々の敬神の念を助長し、神の力と恵みに対する信仰を強めなけ

ればならなかった。「われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならないのであろうか」と彼らは、怒って叫んだ。彼らは人間的弱さと情をもった彼ら自身にその力があるかのようにふるまい、自分たちを神の位置においたのである。モーセは、絶えず、つぶやき反抗する民に疲れ果てて、全能者なる神が彼の援助者であられることを忘れた。そして、彼は、神の力を受けることをせずに、人間の弱さをあらわして、彼の記録に汚点を残したのである。彼は、仕事を完成するまで、純潔、堅実、無我の精神を保つことができたのであるが、ついに敗北した。神は賛美され、高められなければならない時に、イスラエルの会衆の前で、恥辱をこうむられたのである。 PP 216.2

神は、この場合、その悪行によってモーセとアロンを怒らせた人々に罪の宣告をなさらなかった。譴責は、すべて指導者に下った。神の代表者が、神を尊ばなかった。モーセとアロンは、民のつぶやきが、彼らに対してではなく、神に対して行われたものであることを忘れて、人々が彼ら自身につぶやいていると感じた。彼らは、自分自身をながめて、自分たちを哀れに思い、無意識のうちに罪を犯し、神の前における人々の大きな罪を、彼らに示すことをしなかった。 PP 216.3

非常にきびしく、屈辱的な刑罰がすぐに宣告された。「あなたがたはわたしを信じないで、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを現さなかったから、この会衆をわたしが彼らに与えた地に導き入れることができないであろう」（同 20：12）。彼らは、ヨルダンを渡る前に、反抗的なイスラエルと共に死ななければならなかった。もし、モーセとアロンが自尊心をいだいたり、神の警告と譴責に対して怒りをいだいたりしたならば、彼らの罪はさらに大きくなったことであろう。しかし、彼らは、故意、または、計画的な罪を犯したのではなかったから、その責めは受けなかった。彼らは、突然の誘惑に負けたのであって、それをすぐに心から悔い改めたのである。主は、彼らの悔い改めを受け入れられた。しかし、彼らの罪が民の間におよぼす害を考えられた時に、刑罰を免じることはおできにならなかった。 PP 216.4

モーセは、自分に下った宣告を隠そうとしなかった。彼は、神に栄光を帰さなかったために、彼らを約束の国に導くことができないことを人々に告げた。彼は、自分の上に下ったきびしい刑罰に注目することを人々に命じた。そして、彼らが自分自身の罪に

よって招いた刑罰を、単なる人間のせいにしてつぶやいたことを、神がどうみなされるかをよく考えるようにとモーセは言った。 PP 216.5

彼は、また、神にその宣告の取り消しを嘆願したが、拒否されたことを彼らに告げた。「主はあなたがたのゆえにわたしを怒り、わたしに聞かれなかった」と言った（申命記 3：26）。 PP 216.6

イスラエルの人々は、困難や試練にあった時には、 いつでも神がそのことに無関係であって、モーセが彼らをエジプトから導きだしたと非難するのであった。彼らがその放浪期間を通じて、旅の苦難についてつぶやき、指導者に不平を言ったとき、モーセは、「あなたがたのつぶやきは、神に対するものである。あなたを救われたのは、わたしではなくて、神である」と言うのであった。しかし、「われわれがあなたがたのためにこの岩から水を出さなければならないの」か、と彼が岩の前で早まって言った時に、彼は、人々の非難を事実上承認したことになった。こうして、彼らの不信をますます強め、彼らのつぶやきを正当化したことになったのである。主は、こうした印象を人々の心から永久に取り除くために、モーセが約束の地にはいることを禁じられたのである。彼らの指導者は、モーセではなく、偉大な天使であられたというまちがいのない証拠が与えられた。主は、彼についてこう言われた。「見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い（なさい）……わたしの名が彼のうちにあるゆえに」（出エジプト 23：20～21）。 PP 216.7

「主は、あなたがたのゆえに、わたしを怒られた」とモーセは言った。全イスラエルの目はモーセに向けられた。そして、彼の罪は、彼を神の民の指導者として選ばれた神の名誉を傷つけた。彼の罪は、全会衆に知れわたった。もし、それが軽々しく扱われたとすれば、責任の地位にある者が激しく試みられた場合ならば、不信仰も短気も赦されるのであるという印象が残ったことであろう。しかし、1 つの罪のために、モーセとアロンがカナンに入国できないと宣告されたときに、人々は、神が人をかたよりみるかたでなく、罪を犯す者を必ず罰せられるかたであることを知ったのである。 PP 217.1

イスラエルの歴史は、後世の人々の警告と教訓のために記録されなければならなかった。未来のすべての人々は、天の神が、公平な支配者で、どんな場合でも罪を正当化なさらないかたであることを知らなければならない。しかし、罪が、どんなにはなはだしい害毒を及ぼすものであるかを認める者は少ない。神は非常に恵み深いから、罪人を罰せられないと、人間は、自分かってな考えをいだくものである。しかし、聖書の歴史に照らしてみれば、恵みと愛の神は、罪を、宇宙の平和と幸福を破壊する致命的悪として処理されることが明白である。 PP 217.2

モーセのあの誠実さと忠実さをもってしても、彼のあやまちに対する懲罰を避けることはできなかった。神は人々の大きな罪をお赦しになったのであるが、指導者の罪は、指導される者の罪と同一に扱うことはできなかった。神は、地上のいかなる人よりも、モーセを尊ばれた。神は、ご自分の栄光を彼にあらわされた。また、彼によって、神の戒めをイスラエルに伝達されたのである。モーセが、大きな光と知識を与えられていたことが、彼の罪をさらに重いものにした。過去の忠誠も、1 つの誤った行為の償いにならない。人に与えられた光と特権が大きければ大きいほど、その責任も大きくなり、その失敗がはなはだしければはなはだしいほど、刑罰も重くなるのである。 PP 217.3

モーセは、人々が考えるほどの重罪を犯したわけではなかった。彼の罪は、普通一般のものであった。詩篇記者は、「彼がそのくちびるで軽卒なことを言ったからである」と言った（詩篇 106：33）。人間の判断では、これはささいなことに思われるであろう。しかし、もし神が、ご自分の最も忠実で尊ばれたしもべの罪に対してこれほどきびしい処置を取られたのであれば、他の者の罪も赦されないことであろう。自己高揚の精神、兄弟たちを非難する意向を、神はお喜びにならない。こうした悪にふける者は、神のみわざに疑惑を投げかけ、懐疑論者の不信に対するよい口実を与えるのである。人間の地位が重要であればあるほど、その感化は大きい。であるから、それだけで、忍耐と謙遜を養う必要も大きいのである。 PP 217.4

神の子供たち、特に責任の地位に立つ人が、神に帰すべき栄光を自分に帰したりするならば、サタンが狂喜するのである。サタンは勝利したのである。サタンも、こうして堕落した。彼は、こうして実に巧みに他の者を堕落させる。神は、われわれが彼の策

略 に警戒するために神のみ言葉のなかに、自己高揚の危険に関する教訓を数多くお与えになったのである。われわれの心の衝動、思考能力、性質などは、一瞬でも神の霊の支配下になくてもよいものはない。もし、ほんの少しのすきでも与えるならば、サタンは、神が人にお与えになる祝福、または、神の許しのもとに臨む試練などを利用して、人間を試み、苦難を与え、滅ぼそうとするのである。であるから、その人の霊的光がどんなに大きくても、また、どんなに神の恵みと祝福にあずかっていても、常に主の前に謙遜に歩み、神がすべての思いを導き、すべての衝動を支配されるように嘆願しなければならないのである。 PP 217.5

神を信じると公言する者は、すべて、どんなに腹だたしいことが起こっても、心を守り、自制するという神聖な責任が負わせられている。モーセに負わせられた重荷は非常に重かった。彼のようなきびしい試練を受ける人は、今後、またとないであろう。しかし、そうだからといって、これは彼の罪の赦しの口実にはならなかった。神は、神の民のために十分な準備をしておられたのである。そして、もし彼らが神の力に信頼していたならば、彼らは環境にもてあそばれるようなことはなかったであろう。どんなに激しい誘惑であっても、罪の言いわけにはならない。どんな圧力が魂に加えられたにしても、犯罪は、われわれ自身の行為なのである。この世と陰府（よみ）のいかなる力も、人間に悪を強制することはできない。サタンは、われわれの弱点を攻撃するが、われわれは負ける必要はない。攻撃がどんなに激しく、不意に襲ってきても、神はわれわれに助けを備えられた。われわれは、神の力によって勝利することができるのである。 PP 218.1

第 38 章　エドムを回避して

本章は、民数記 20：14～29、21：1～9 に基づく PP 218.2

イスラエルが、カデシで宿営を張ったところは、エドムの国境からわずかの距離のところにあったので、モーセも民も、エドムを通って、約束の地に進みたいと切望した。そこで彼らは、神の指示のもとに、エドムの王に使者をつかわした。 PP 218.3

「あなたの兄弟、イスラエルはこう申します、『あなたはわたしたちが遭遇したすべての患難をご存じです。わたしたちの先祖はエジプトに下って行って、わたしたちは年久しくエジプトに住んでいましたが、エジプトびとがわたしたちと、わたしたちの先祖を悩ましたので、わたしたちが主に呼ばわったとき、主はわたしたちの声を聞き、ひとりの天の使をつかわして、わたしたちをエジプトから導き出されました。わたしたちは今あなたの領地の端にあるカデシの町におります。どうぞ、わたしたちにあなたの国を通らせてください。わたしたちは畑もぶどう畑も通りません。また井戸の水も飲みません。ただ王の大路を通り、あなたの領地を過ぎるまでは右にも左にも曲りません』」（民数記 20：14～17）。 PP 218.4

このていねいな依頼に対する返答は、おどしの言葉であった。「あなたはわたしの領地をとおってはなりません。さもないと、わたしはつるぎをもって出て、あなたに立ちむかうでしょう」（同 20：18）。 PP 218.5

イスラエルの指導者たちは、この拒絶に驚いて、ふたたび願い出て、こう約束した。「わたしたちは大路を通ります。もしわたしたちとわたしたちの家畜とが、あなたの水を飲むことがあれば、その価を払います。わたしは徒歩で通るだけですから何事もないでしょう」（同 20：19）。 PP 218.6

「あなたは通ることはなりません」というのが答えであった（同 20：20）。困難な通路には、すでに、武器をもったエドムの軍隊が配置されていたので、その方向に、人々を安全に進めることは不可能であった。しかもヘブル人は、武力に訴えることを禁

じられていた。彼らは、エドムの地を回避して、長い旅をしなければならなかった。 PP 218.7

もし、人々が試練にあったときに、神に信頼したならば、主の軍勢の将であられたお方は、彼らを導い てエドムを通られたことであろう。そして、まわりの国民たちは、彼らに恐れをいだき、敵意ではなくて、むしろ好意を示したことであろう。しかし、イスラエル人は、敏速に、神の言葉に従って行動しなかった。そして、彼らが、ぶつぶつ不平を言っている間に、絶好の機会は去ってしまった。やっと王に願い出る準備ができたときに、それは拒否されてしまった。彼らが、エジプトを去った時から、サタンは、絶えず彼らの道に妨害や誘惑を投げかけて、彼らに約束の地カナンを継がせないようにしていた。そして人々は、不信仰であったために、サタンの活動する道を開き、神の目的に逆らった。 PP 218.8

神の天使がわれわれのために働こうと待機している時に、神のみ言葉を信じて敏速に行動することは、重要なことである。悪天使はわれわれが前進することに戦いをいどんでくる。神の摂理が、神の子供たちに前進を命じ、彼らのために大いなることをしようとされるとき、サタンは、ためらいと遅延とによって、主を怒らせようと彼らを誘惑する。彼は、争いの精神をあおり、つぶやきや不信の念を起こさせ、こうして、神が与えようと望まれた祝福を奪い去ろうとするのである。神のしもべたちは、神の摂理によって、道が開かれる時には、即座に行動する義勇兵でなければならない。彼らのがわで時を延ばせば、それはサタンに彼らを滅ぼすために働く時間を与えることになる。 PP 219.1

エドム人は、イスラエルを恐れるであろうという宣言に続いて、エドムを通過することに関してモーセに最初に与えられた指示の中で、神は、神の民が、この有利な立場を利用することを禁じられた。イスラエルのために神の力が働き、エドム人は恐怖に襲われていたから、彼らを打ち負かすことは容易であった。しかし、ヘブル人は、彼らを襲撃してはならなかった。彼らは、こう命じられた。「それゆえ、あなたがたはみずから深く慎み、彼らと争ってはならない。彼らの地は、足の裏で踏むほどでも、あなたがたに与えないであろう。わたしがセイル山をエサウに与えて、領地とさせたからである」

（申命記 2：4、5）。エドム人は、アブラハムとイサクの子孫で、神は、これらの神のしもべたちのゆえに、エサウの子孫に恵みをお与えになった。神は、彼らに、セイル山を領土としてお与えになった。そして、彼らが罪を犯して、神の恵みの圏外に行ってしまうまで、彼らを妨害してはならなかった。ヘブル人は罪の升目を満たしたカナンの住民の土地を奪い、彼らを全滅させることになっていた。しかし、エドム人は、まだ猶予されていたので、そのように恵み深く彼らを扱わなければならなかった。神は、憐れみを喜ばれる。そして、刑罰を下すに先だって、慈悲をあらわされる。神は、カナンの住民を滅ぼすことを要求されるに先だって、エドムの人々を猶予することを、イスラエルに教えられる。 PP 219.2

エドムとイスラエルの先祖は、兄弟であった。であるから、兄弟の情けと礼儀がお互いの間にあるべきであった。イスラエル人は、国の中を通ることを拒否されて侮辱されたことの復讐を、そのときもまた将来も、してはならなかった。彼らは、エドムの地は、少しでも所有することを期待してはならなかった。イスラエル人は、神に恵まれた選民であったとはいえ、神が定められた制限に従わなければならなかった。神は、大きな嗣業を彼らに約束された。しかし、彼らだけが地の権利を所有しているように考えて、他の者をすべて押し出してはいけなかった。彼らは、エドム人とのすべての交渉に注意して、不正を行わないようにという指示が与えられた。また、必要な食糧の購入や彼らとの取引の際には、すぐに支払いをすべきであった。イスラエルが、神に信頼し、神のみ言葉に服従することを促すために、「あなたの神、主が、……あなたを恵み、……あなたは何も乏しいことがなかった」という言葉が彼らに語られた（同 2：7）。彼らは、豊かな資源を持っておられる神を持っているのであるから、エドム人に依存してはならなかった。イスラエル人は、武力、または欺瞞的行為によって、彼らのどんな所有をも獲得しようとしてはならなかった。彼らは、すべての交渉において、「あなたを愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という神の律法の原則を実践しなければならなかった（マタイ 22：39、ロ ーマ 13：9、ガラテヤ 5：14、レビ 19：18 参照）。 PP 219.3

もし彼らが、神のみこころに従って、こういう態度でエドムを通過したならば、それは、彼らばかりでなくてエドムの住民たちにも祝福となったことであろう。なぜなら、

それは、神の民と神の礼拝に対する親しみを彼らに与え、ヤコブの神が、神を愛しおそれる者をいかに繁栄させられるかを目撃する機会を与えたからである。しかし、イスラエルの不信仰は、こうしたことをすべて妨げた。神は、人々の欲求に応じて水をお与えになったけれども、その不信仰の罰を彼らが受けることを許された。彼らは、ふたたび荒野へ引き返し、奇跡の泉からの水を飲んで、かわきをいやすことになるのであった。しかし、もし彼らが神に信頼していたならば、それはもはや不必要なことであった。 PP 220.1

したがって、イスラエルの群衆はふたたび南に向かい、エドムの山々や谷間に点在する緑地をながめたあとでは、なおさら、もの寂しく思われる不毛の荒地を進んでいった。この陰うつな荒野を見おろしている山々の峰のかなたにホル山がそびえていた。その頂上は、アロンの死と埋葬の場となるところであった。イスラエル人がこの山に到着したとき、神は、モーセにお命じになった。 PP 220.2

「あなたはアロンとその子エレアザルを連れてホル山に登り、アロンに衣服を脱がせて、それをその子エレアザルに着せなさい。アロンはそのところで死んで、その民に連なるであろう」（民数記 20：25、26）。 PP 220.3

この老人 2 人と青年は、共に山の頂上によじ登った。120 年の風雪に耐え、モーセとアロンの髪は雪のように白かった。彼らの長年の波乱に富んだ生涯は、人間に課せられた最も激しい試練に耐えるとともに、最も大きな栄誉に輝いたものであった。彼らは、生まれながらの豊かな才能の人であった。そして、彼らのすべての能力は、無限の神との交わりによって啓発され、高尚にされ、高貴なものにされたのである。彼らの生涯は、神と人間とに対する無我の活動のために費やされた。彼らの容貌は、その偉大な知力、堅固で高尚な目的、そして、激しい情熱をあらわしていた。 PP 220.4

モーセとアロンは、長年、その責任や労苦を共に負ってきた。彼らは、共に無数の危険に遭遇し、共に神の驚くべき祝福にあずかった。しかし、いまや 2 人が別れなければならない時が近づいた。彼らは、非常にゆっくり進んで行った。お互いが一緒にいる一瞬一瞬がたいせつなものだったのである。登り坂はけわしく、苦しいものであった。彼らは、たびたび立ち止まって休息することに、過去や未来のことを語り合った。彼ら

の前にはさまよい歩いた荒野の光景が、一面に広がっていた。眼下の平原にはイスラエルの群衆の宿営があった。選ばれた 2 人は、その生涯の大部分を彼らのために費やしたのである。そして、彼らの幸福を切に願って、大きな犠牲を払ってきた。エドムの山々の向こうに、約束の地への道が通じているのであった。しかし、モーセとアロンは、その祝福にあずかれないのであった。彼らの心に反抗的感情はなく、つぶやきの言葉も彼らの口からもれなかった。しかし、彼らを父祖たちの嗣業から除外したものが何であったかを彼らが思い出したとき、彼らの顔には、厳粛な悲しみがただようのであった。 PP 220.5

イスラエルのためになすべきアロンの仕事は終わった。40 年の昔、神は重大な任務を負わせられたモーセと力を合わせるように、83 歳の彼を召されたのである。彼は、兄弟と協力して、イスラエル人をエジプトから導き出した。彼は、ヘブルの軍勢がアマレクと戦ったとき、偉大な指導者の手を支えたのである。彼は、シナイ山に登り、神の臨在に近づき、神の栄光を見ることを許された。主は、アロンの家族を祭司の職務に任じ、アロンを大祭司の聖職に任じて、栄誉をお与えになった。神は、コラと彼の仲間を滅ぼして、刑罰の恐ろしさを示し、彼の聖職を支持された。疫病が止められたのは、アロンのとりなしによってであった。彼の 2 人のむすこが神の明白な命令を無視して殺された時も、彼は反抗もせず、つぶやきもしなかった。しかし、彼の高貴な生涯の記録に汚点がついた。アロンは、シナイで民の要求に屈して金の子牛を造り、悲しむべき罪を犯した。また彼は、ミリアムと共にモーセをねたみ、つぶやいて罪を犯した。 彼は、カデシにおいて岩に命じて水を出させるべきときに、モーセと共に命令にそむいて主の怒りをこうむった。 PP 220.6

神は、神の民のこの偉大な指導者たちが、キリストの代表者であることを望まれた。アロンは、胸にイスラエルの名をかけていた。彼は、神のみこころを人々に伝えた。彼は、贖罪の日に、すべてのイスラエルの会衆の仲保者として至聖所に入り、「血をたずさえないで行くことはな」かった（ヘブル 9：7）。キリストが、民のための贖罪のわざを終えて、彼を待っている民を祝福するためにおいでになるように、アロンは務めを終えて、会衆を祝福するために出て来るのであった。われわれの大祭司の代表としての

聖職が崇高な性質のものであったことが、カデシにおけるアロンの罪をきわめて大きなものとしたのである。 PP 221.1

モーセは深い悲しみに沈みながら、アロンの清い衣服を脱がせて、エレアザルに着せた。こうして、エレアザルは、神の命令によってアロンの後継者になった。アロンは、カデシでの罪のために、カナンで神の大祭司の務めを行う特権を失った。彼は、約束の地で最初の犠牲をささげ、イスラエルの嗣業を聖別することができなかったのである。モーセは、民を国境まで導く責任を続いてになわなければならなかった。彼は、約束の国が見えるところまで来るのであったが、なかに入ることはできなかった。これらの神のしもべたちがカデシの岩の前に立ったときに、遭遇した試練につぶやくことなく耐え得たならば、彼らの将来はどんなに変わったことであろうか。1 つのまちがった行為は、二度と元にもどすことができない。一瞬の誘惑、または、無分別によって失われたものは、一生かかってもとり返すことができない。 PP 221.2

2 人の大指導者が宿営からいなくなり、アロンの聖職の後継者と一般に認められていたエレアザルが同行したということは、人々にある種の不安感を与えた。そして、民は、憂慮して彼らの帰還を待ったのである。民が周囲の大群衆を見わたしたときに、エジプトを出た大人のほとんどが、荒野で死んでしまったことに気づいた。一同は、モーセとアロンに与えられた宣告を思い出し、不吉な予感に襲われた。ホル山頂への神秘的な旅の目的に気づいた者もあって、苦い思い出と自責の念にかられて、彼らの指導者たちの身の上を案じていた。 PP 221.3

ついに、モーセとエレアザルがゆっくりと山をおりてくる姿が現れた。しかし、アロンは彼らと一緒にいなかった。エレアザルは、祭司服を身にまとい、父の聖職を受け継いだことを示していた。人々は悲しみながら指導者のまわりに集まってきた。モーセは、アロンがホル山上で彼の腕に抱かれて死んだことと、彼らが、彼をそこに葬ってきたことを告げた。会衆は声をあげて嘆き悲しんだ。彼らは何度もアロンを悲しませたけれども、みなアロンを愛していたのである。「イスラエルの全家は 30 日の間アロンのために泣いた」（民数記 20：29）。 PP 221.4

イスラエルの大祭司の埋葬に関して、聖書は簡単に、「アロンはその所で死んでそこに葬られ」た、と記録しているだけである（申命記 10：6）。神の明白な命令のもとに行われたこの埋葬と今日の習慣とは、なんと著しく異なっていることであろう。現代、高い地位の人の葬式は、虚飾と度を越した誇示の場となっている。世界最大の人物のひとりであったアロンが死んだ時には、彼の近親の友が 2 人、彼の死を見守り、埋葬に列しただけであった。そして、ホル山上のあのものさびしい墓は、永久にイスラエルの目から隠されたのである。死者のためには、とかく大げさな行事が行われ、彼らの肉体を土に帰らせるのに多額の費用がかけられるが、それは、神をあがめることにはならない。 PP 221.5

全会衆は、アロンのために悲しんだ。しかし、彼らはモーセがどれほど心を痛めたかを知ることはできなかった。モーセは、アロンの死によって、自分自身の生涯の終わりが近づいたことを痛感させられた。彼の地上の生涯はあとわずかしかないのであったが、長年、喜びや悲しみ、また希望や恐れなどを共に分かちあった忠実な友を失ったことを彼は悲しんだ。モーセは、1 人で仕事を続けなければならなかった。しかし、彼は、神が自分の友であられることを知り、な おいっそう神によりすがったのである。 PP 221.6

ホル山を去ってから間もなくして、イスラエル人は、カナンの王の 1 人のアラドと戦って敗北した。しかし彼らは、熱心に神の助けを祈り求めたので、神からの援助が与えられて敵を追い返すことができた。ところが、この勝利は、人々に感謝の気持ちと、神に依存していることを感じさせるかわりに、高慢と自尊の精神をいだかせた。やがて彼らは、以前の習慣にもどってつぶやいた。約 40 年前、斥候たちの報告を聞いて反逆を起こした後、すぐにカナンにイスラエルの軍勢を進軍させることを許されなかったことを、今、彼らは不満に感じたのである。彼らは、現在と同様に、これまでにも敵を征服することができたかも知れなかったと考え、荒野の放浪は不必要な遅延であったと言った。 PP 222.1

彼らが南に向かって旅を続けたとき、行く手には、緑も、影もない熱い砂の渓谷が横たわっていた。道は長くけわしく思われ、彼らは、疲労とかわきに悩まされた。ふた

たび彼らは、信仰と忍耐の試練に耐えることができなかった。彼らは、自分たちの経験の暗い面ばかりをながめて、ますます神から遠ざかった。もし、カデシで水が止まった時に、つぶやきさえしなかったならば、エドムを迂回して旅をしなくてもよかったであろうということに、彼らは気づかなかった。神は、彼らのために、もっとすぐれたことを計画しておられた。彼らは、自分たちの罪に対する神の罰が軽かったことを、神に感謝すべきであった。しかし、彼らはそうしないで、もし神やモーセが妨害しなかったならば、今ごろは、約束の国を所有していたことであろうとうぬぼれた。彼ら自身で問題を引き起こして、自分たちの運命を神のご計画よりもはるかに困難なものにしながら、彼らの不運をすべて神のせいにした。こうして、彼らは、自分たちに対する神の取り扱いに不平をいだき、ついにはすべてのことに不満をいだくようになった。自由と、神が導き入れようとしておられる国よりも、エジプトのほうがはるかに輝かしく好ましく思われるのであった。 PP 222.2

イスラエルの人々は、不満をいだき、彼らの受けた祝福に対してさえ不平を言うようになった。「民は神とモーセとにむかい、つぶやいて言った、『あなたがたはなぜわたしたちをエジプトから導き上って、荒野で死なせようとするのですか。ここには食物もなく、水もありません。わたしたちはこの粗悪な食物はいやになりました』」（民数記 21：5）。 PP 222.3

モーセは、忠実に彼らの罪の大きさをさし示した。「あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない」ところで彼らを守ることのできたのは、神の力だけであった（申命記 8：15）。彼らは旅の間じゅう、毎日、神のあわれみ深い奇跡によって守護されていたのであった。彼らは、神が導かれるすべての道において、かわきをいやす水や、飢えを満たす天からのパンが与えられた。そして、昼は雲のかげ、夜は火の柱に守られて平和と安全が保たれた。彼らが岩山に登る時も、荒野のけわしい道をぬって進む時も、天使は彼らを守っていた。さまざまな困難にあったにもかかわらず彼らのあらゆる隊列のなかに 1 人の弱い者もなかった。彼らの足は、長い旅の間はれることもなく、彼らの衣服も古びなかったのである。神は、彼らの先に立って森林や砂漠の猛獣と毒へびとを制御せられた。こうした神の愛のあらゆる証拠を見ながらもな

お、人々がつぶやき続けるならば、主は、彼らが神のあわれみ深い保護を感謝し、悔い改めて、心を低くして神のもとに帰ってくるまで、神の保護を差しひかえられるのである。 PP 222.4

彼らは、神の力に保護されていたために、彼らを常に取り囲んでいた無数の危険に気づかなかったのである。彼らは、忘恩と不信のうちに死んでしまうと思っていた。そこで、主は、彼らに死がのぞむことをお許しになった。荒野にはびこっていた毒へびは、それにかまれると激しい炎症を起こして死ぬので、火のへびと呼ばれていた。神の保護のみ手がイスラエルから取り除かれると、多くの人々が毒へびにかまれた。 PP 222.5

こうして、宿営全体が恐怖と混乱に陥った。すでに死んだ人や、死にかけた人がどの天幕にも出た。誰 1 人安全ではなかった。時おり、新しい犠牲者が出たことを示す激しい叫びが、夜の静けさを破った。 すべての者は患者の看護をしたり、あるいは、まだかまれていない者たちを保護しようとしたりして必死に努めていた。いま、彼らのくちびるからは、つぶやきの言葉は漏れなかった。今の苦痛と比べるならば、これまでの彼らの困難や試練は、全くとるに足りないもののように思われた。 PP 222.6

人々は、今、神のみ前にへりくだった。彼らは、モーセのところに来て告白し、嘆願して言った。「わたしたちは主にむかい、またあなたにむかい、つぶやいて罪を犯しました」（民数記 21：7）。人々は、ついさきほどまで、モーセを彼らの最悪の敵とし、彼らのすべての困難と苦難の原因であると攻撃した。しかし、そういうことを言うやいなや、その非難が誤っているのに気づいた。真の苦難に当面したとき、彼らは、神にとりなすことができるただ 1 人の人、モーセのところに来た。「どうぞへびをわたしたちから取り去られるように主に祈ってください」と彼らは叫んだ（同節）。 PP 223.1

モーセは、本物に似せて青銅のへびを作り、それを人々のなかにかかげるようにという命令を神から受けた。かまれた者は、すべて、このへびを見上げて助かるのであった。彼は言われたとおりにした。そして、かまれた者は、みな、青銅のへびを見上げよ、そうすれば救われる、という喜ばしい知らせが宿営中にひびきわたった。すでに死んだ者も多かった。そして、モーセがへびをさおの上にかかげたとき、青銅のへびの像を見

上げただけでいやされるということを信じようとしない者もあった。そのような人は、不信仰のために滅びた。しかし、神が用意されたものを信じた者も多かった。父親、母親、兄弟、姉妹たちが、なんとかして苦しむ肉親の者や、瀕死の友人たちの生気のない目をへびに向けさせようと努めた。たとえどんなに弱り果てて、死にそうになっていても、もし彼らが一目でも見ることができれば、完全に癒されるのであった。 PP 223.2

人々は、それを見上げる者にこうした変化を起こさせる力が、青銅のへびにはないことをよく知っていた。癒しの力は、神からだけ来るものであった。知恵に富まれる神は、このような方法によって、ご自分の力をあらわされた。この簡単な方法によって、この苦難が、自分たちの罪のために起こったことを人々はさとらされた。それと共に、神に服従するならば、何も恐れることはないという保証が与えられたのである。なぜなら、神は、彼らを守られるからであった。 PP 223.3

青銅のへびを掲げたことは、イスラエルに重大な教訓を教えるためであった。彼らは、その致命傷から自分を救うことができなかった。ただ神だけが彼らを癒すことがおできであった。しかし、彼らには、神がお備えになった方法に、信仰を表明することが要求された。生きるためには、見なければならなかった。神がお受けになったのは彼らの信仰であった。そして、へびを見ることによって彼らの信仰が表された。へびそのものにはなんの力もなく、それがキリストの象徴であったことを、彼らは知っていた。こうして、キリストの功績に信仰をいだく必要が彼らに示された。これまで多くの者が神に捧げ物を携えてきて、それで自分たちの罪の贖いを十分にしたと考えていた。彼らは、やがて来られる贖い主に頼らなかった。こうした捧げ物は贖い主の象徴に過ぎなかった。彼らの捧げ物は、ただそれだけでは、青銅のへび以上に何の力も功績もないもので、それは、へびと同様に、偉大な罪祭であられるキリストに、彼らの心を向けるためだけのものであることを、主は、ここに教えようとなさった。 PP 223.4

「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3：14、15）。この地上に生を受けた者はみな、「悪魔とか、サタンとか呼ばれ」た「年を経たへび」の毒牙にかまれた（黙示録 12：9）。罪の致命的結果は、神がお備えになっ

た方法によってのみ除くことができる。イスラエルの人々は、上げられたへびを見ることによって救われた。こうしてながめたことは、信仰を意味していた。彼らは神の言葉を信じ、神が彼らの回復のためにお備えになった方法に信頼したから、生きたのである。そのように、罪人は、キリストを 仰ぎ見て生きることができる。罪人は、贖罪の犠牲を信じる信仰によって赦しを受ける。命のない動かないへびとは違って、キリストは悔い改める罪人をいやす力と功績を、ご自身のうちに持っておられる。 PP 223.5

罪人は、自分自身を救うことはできない。しかし、救いを得るためには、彼のなすべきことがある。「わたしに来る者を決して拒みはしない」とキリストは言われる（ヨハネ 6：37）。われわれは、彼のところに来なければならない。そして、罪を悔い改めるときに、キリストはわれわれを受け入れ、赦してくださることを信じなければならない。信仰は神の賜物である。しかし、信仰を働かせる力は、われわれに与えられている。信仰は神の恵みとあわれみの招待を、魂が把握する手である。 PP 224.1

われわれを恵みの契約の祝福にあずからせるのは、キリストの義にほかならない。これらの祝福にあずかろうと長く望んで努力した者が多くあったが、受けることができなかった。というのは、何かをすることによって自分たちをその恵みにあずかる価値のあるものにすることができるという考えを、彼らがいだいていたからである。彼らは、イエスが満ちあふれる力をもった救い主であることを信じて、自分から目を離すことをしなかった。われわれは、自分たち自身の功績が、われわれを救うと考えてはならない。キリストが、われわれの救いの唯一の希望である。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝 4：12）。 PP 224.2

われわれが神に全く信頼し、罪をお赦しになる救い主としてイエスの功績によりたのむならば、希望するすべての助けを受けることができる。あたかも自分自身を救う力が自分にあるかのように、自分をながめないことにしよう。われわれには、そうする力が全くないのであるから、イエスは、われわれのために死なれた。彼のうちにわれわれの希望、われわれの義、われわれの正義がある。われわれは、自分たちの罪深さを見て失望し、自分たちには救い主がないとか、主は、われわれをあわれんでくださらないと

考えて、恐れてはならない。彼は、今という今、われわれが力のないままの姿で主に近づき、救われるようにと招いておられる。 PP 224.3

天の神がお定めになった癒しの方法に、何の価値も認めなかったイスラエル人が多くあった。彼らのまわりには、すでに死んだ人や死にかけた人々が、一面に横たわっていた。そして、神の助けがなければ、彼ら自身の運命がどうなるかも明らかであった。彼らには、癒しが瞬間的に与えられるのであったが、彼らは、その傷の痛みと、刻々と迫ってくる死とを悲しみ続け、ついに、その力はつき果て、目は光を失った。もし、われわれが自分の必要を感じたならば、そのことを悲しんでばかりいてはならない。キリストがなければ自分たちはどんなに無力であるかを自覚しても失望することなく、十字架につけられ復活なさった救い主の功績に頼らなければならない。見よう、そして、生きよう。イエスは、約束なさった。イエスは、彼に来るすべての者をお救いになる。癒しを受けるべき幾百万の人々が、イエスの憐れみの招きを拒んだとしても、イエスの功績に頼る者は、1 人も滅びることはない。 PP 224.4

救いの計画の神秘が、ことごとく明らかにされるのでなければ、キリストを受け入れようとしない者が多い。すでに幾千という多くの人々が、キリストの十字架をながめ、そして、ながめることによって力を得たことを知っていながらも、彼らは、信仰をもって見ようとしない。多くの者は、哲学の迷路にさまよい、理由や証拠を発見しようとするが見つからない。彼らは、神がお与えになった証拠を拒んでいる。彼らは、義の太陽の輝きの理由が説明されるまでは、その光の中を歩こうとしない。このようなかたくなな人はみな、真理の知識を得ることはできない。神は、疑惑の種を全部取り去ってしまわれない。神は信仰を持つだけの十分な証拠をお与えになる。そして、人がそれを受け入れなければ、人の心は暗黒に閉ざされる。もしも、へびにかまれた人々が、見ることを承知する前に、疑ったり質問したりしていたならば、彼らは死んでしまったことであろう。まず見ることがわれわれ の義務である。そして、信仰をもって見ることが、われわれに命を与えるのである。 PP 224.5

第 39 章　バシャンの征服

本章は、申命記 2 章、3：1～11 に基づく PP 225.1

イスラエル人は、エドムの南方を通過したあと、北に向きをかえ、ふたたび約束の地に向かった。今、彼らの道は広大な高原を横切って走っていた。そこには、山からの冷たく気持ちの良いそよ風が吹きわたっていた。彼らがこれまで歩いてきた焼けつくような谷に比べれば、それはうれしい変化であった。彼らは元気と希望に満ちて前進し、ゼレデ川を渡ってモアブの国の東にはいった。それは、「モアブを敵視してはならない。またそれと争い戦ってはならない。彼らの地は、領地としてあなたに与えない。ロトの子孫にアルを与えて、領地とさせたからである」との命令が与えられていたからである（申命記 2：9）。また同じ命令が、同様にロトの子孫であったアンモン人にも与えられていた。 PP 225.2

イスラエルの軍勢は、なお北方に進み、まもなくアモサ人の国に入った。この頑強で好戦的な民族は、もともとカナンの国の南部にいたが、数が増したためヨルダン川を渡り、モアブ人と戦いを交えて、その領土の一部を占領した。彼らはここに定住し、アルノンから、北はヤボクに至る全土にゆるぎない支配をうちたてた。イスラエル人が通過したいと思ったヨルダンへの道は、この地域をまっすぐに通っていた。そこでモーセは、その都にいるアモリ人の王シホンに友好的な伝言を送った。「あなたの国を通らせてください。わたしは大路をとおっていきます、右にも左にも曲りません。金で食物を売ってわたしに食べさせ、金をとって水を与えてわたしに飲ませてください。徒歩で通らせてくださるだけでよいのです」（同 2：27、28）。ところが、答えは断固とした拒絶であった。こうして、全アモリ軍は召集され、侵入者の行く手をはばもうとした。この大軍は、イスラエル人を恐怖に陥れた。彼らには武装を整え、訓練の行き届いた軍隊と戦う準備がなかった。戦闘の技術では、敵が有利であった。人間の見るところでは、イスラエルがすぐ滅ぼされるのは明らかであった。 PP 225.3

しかし、モーセは雲の柱にしっかりと目をとめ、神の臨在のしるしが今なお彼らと共にあると語って民を励ました。同時に、彼は、人力の限りを尽くして戦いの備えをするように命じた。敵は戦争にはやり立ち、用意のないイスラエルを国内から抹殺することができると確信した。 PP 225.4

しかし、すでに全地の所有者である神からイスラエルの指導者にこのような指令が出ていたのである。「あなたがたは立ちあがり、進んでアルノン川を渡りなさい。わたしはヘシボンの王アモリびとシホンとその国とを、おまえの手に渡した。それを征服し始めよ。彼と争って戦え。きょうから、わたしは全天下の民に、おまえをおびえ恐れさせるであろう。彼らはおまえのうわさを聞いて震え、おまえのために苦しむであろう」（同 2：24、25）。 PP 225.5

もし、カナンの辺境にあるこれらの国々が、神のことばに反抗せず、イスラエルの進軍をさまたげなかったならば、滅びをまぬかれたことであろう。主は、これら異教の民にさえ、ご自身が忍耐強く、やさしく、憐れみ深いお方であることを示してこられた。アブラハムが幻の中で彼の子孫のイスラエルの子らが 400 年の間、異国の旅人となるであろうと告げられたとき、主は彼にこのような約束をお与えになった。「4 代目になって彼らはここに帰って来るでしょう。アモリびとの悪がまだ満ちないからです」（創世記 15：16）。アモリ人は偶像教徒であって、彼らが滅ぼされるのは、当然彼らの大いなる悪のゆえであったが、神は、ご自身が唯一の真の神であり、天地の創造主であることのまちがいのない証拠を彼らに与えるために、400 年の間、彼らに生きることをおゆるしになった。彼らは、イスラエル人がエジプトから導き出さ れたときに行われた神のすべての不思議なみわざを知っていた。十分な証拠が与えられていた。彼らは、もし、その偶像崇拝と放縦な生活から離れようと決心していたなら、真理を知ったことであろう。しかし彼らは光を拒み、偶像を捨てなかった。 PP 225.6

主が、その民を 2 度目にカナンの国境に導かれたとき、これらの異教国に主の力の証拠がさらに多く与えられた。イスラエル人がアラデ王とカナン人に対して勝利を得たことや、へびにかまれて死にそうになった者が救われた奇跡などによって、神がイスラエルと共におられることを彼らは見た。イスラエル人は、エドムの地を通ることを許さ

れず、長く困難な紅海の道をたどることを余儀なくされたのであったが、エドム、モアブ、アンモンの地を通る旅と宿営を続けた間中、彼らは何の敵対心も示さず、その地の民と持ち物に何の危害も加えなかった。アモリ人の国境に来たとき、イスラエル人はこれまで他の国々と交渉のあった時に用いた同じ規則を守ることを約束して、ただ国の中をまっすぐに通過する許可を求めたのであった。アモリ人の王が、この礼を尽くした願いを退け、無礼にも戦いをいどんで軍勢を召集したとき、彼らの悪の杯は満ちた。神は今、彼らをくつがえすためにその力を発揮されるのであった。 PP 226.1

イスラエル人は、アルノン川を渡り、敵に向かって進んだ。イスラエル軍は彼らと戦って勝利した。その勢いに乗じて、彼らはまもなくアモリ人の国を占領した。神の民の敵を追い払われたのは、主の軍勢の将なる主であった。もし、イスラエル人が彼に信頼していたならば、彼は同じことを 38 年前にしてくださったはずであった。 PP 226.2

イスラエル軍は、希望と勇気に満ちてどんどん前進した。彼らはなお北方に進み、まもなく、彼らの勇気と神に対する信仰を試みるに足る 1 つの国に到着した。彼らの前には、強力で人口も多いバシャン王国があった。「町は 60。……皆、高い石がきがあり、門があり、貫の木のある堅固な町であった。このほかに石がきのない町は、非常に多かった」（申命記 3：1～11 参照）。そこは、今日も世界の驚異となっている大きな石造りの町が群がっていた。家々は巨大な黒い石で造られ、その時代にそれを攻めるために用いられたどんな武力に対しても絶対に動かされないほどの巨大なものであった。その国土は、天然の洞穴、大絶壁、大きく開いた裂け目、岩の要塞にみちていた。この国の住民は、巨人族の子孫であって驚くほど大きく、力が強かった。また、暴力と残酷さは、はなはだしく、周囲のすべての国々から恐れられていた。国王オグは、巨人の国においてさえ、体格と武勇にきわだった存在であった。 PP 226.3

しかし、雲の柱は前へ進んだ。その導きに従ってヘブルの軍勢はエデレイに進んだ。そこに巨人の王は、軍勢を従えて彼らの近づくのを待っていた。オグは巧妙に戦いの場所を選んだ。エデレイの町は平原が急に高くなった高地のはずれにあって、でこぼこの火山岩でおおわれていた。そこに登るには、狭い曲がりくねった登りにくい道があるだ

けであった。負けた場合には、彼の軍隊はあの岩の荒野にかくれ場を見いだすことができ、外国人が彼らのあとを追うことは不可能であった。 PP 226.4

王は勝利を確信して、大軍を従えて平原に姿をあらわした。高台からは、神を汚すわめき声が聞こえ、勇みたった幾千の兵士のやりが見えた。ヘブル人が、その軍勢の中でもきわ立つ巨人中の巨人の雄姿を見、また、彼をとりまく軍勢を見、背後に幾千の軍勢をひかえた、一見、難攻不落のようなとりでを見たとき、イスラエルの多数の者の心は恐れで動揺した。しかし、モーセは冷静で落ちついていた。それは、主がバシャンの王についてこう言われたからである。「彼を恐れてはならない。わたしは彼と、そのすべての民と、その地をおまえの手に渡している。おまえはヘシボンに住んでいたアモリびとの王シホンにしたように、彼にするであろう」（同 3：2）。 PP 226.5

指導者の冷静な信仰は民の心に神に対する確信をいだかせた。彼らは、主の全能のみ腕にすべてを委ねた。そして主は彼らを見捨てられなかった。強力な巨人も、城壁のある町々も、武装した軍勢も、岩のとりでも、主の軍勢の将の前に立つことはできなか った。主は、軍を導かれた。主は、敵を散らされた。主は、イスラエルに勝利をもたらされた。巨人の王とその軍勢は敗北した。イスラエル人は、まもなく、その全土を手中におさめた。こうして悪と、憎むべき偶像礼拝を行っていた異邦の民族は、地からぬぐい去られた。 PP 226.6

ギレアデとバシャンを征服したとき、40 年近く前、カデシにおいて、イスラエルが長い間砂漠を放浪する運命に定められた時のことを思い起こす者が多くあった。彼らは約束の地に関する斥候の報告が多くの点において正しいものであるのを知った。町々は城壁で囲まれ、非常に大きく、そこには巨人が住んでいて、それと比べるとヘブル人は小人にすぎなかった。しかし、今彼らは、彼らの父たちの重大な過失は、神のみ力に信頼しなかったことであったのに気づいた。ただこれだけが、彼らをすぐに良い地に入ることを妨げたのであった。 PP 227.1

彼らが、最初、カナンに入る準備をしていたときには、その企てに伴う困難は今回よりはるかに少なかった。もし、民が神のみ声に従ったならば、神が彼らに先だっていき、彼らのために戦うと約束されたのであった。また、その地の民を追い出すために、

熊蜂を送ると約束された。国々の恐怖心はまだ広く行きわたっていなかったし、彼らの進軍を阻止する準備もなかった。しかし、主がイスラエルに前進を命じられた今は、目をさました強力な敵に向かって進まなければならず、彼らの進撃に備えて、武装を整えた大軍と戦わなければならなかった。 PP 227.2

民は、オグとシホンとの戦いにおいて、彼らの父親たちがみごとに失敗したのと同じ試練に出会った。しかし今、試練は神が以前にイスラエルに前進を命じられたときよりも、はるかにきびしかった。彼らが主のみ名によって前進することを命じられて、それを拒んで以来、彼らの道に横たわる困難は大いに増大した。こうして、神はなお、神の民を試みておられる。もし彼らが、その試みに耐えられないならば、神は彼らをふたたび同じ地点にもどされる。そして、2 度目の試練は、以前のよりはきびしく苛酷なのである。このことは、彼らが試練に耐えるまで続くのである。もし、彼らがなおもそむくならば、神は、彼らから光を取り去り、彼らを暗黒の中に捨ておかれるのである。 PP 227.3

ヘブル人は、前に軍隊が戦いに出たときに敗北し、数千の者が殺されたことを思い出した。そのとき、彼らは神の命令に全く反対して出て行ったのであった。彼らは神が任命された指導者モーセも、神の臨在のしるしである雲の柱も、また契約の箱もないままで出陣したのであった。しかし、今は、モーセが彼らと共にいて、希望と信仰の言葉を語って彼らの心を強めた。神のみ子は雲の柱につつまれて彼らの道を導かれた。そして、清い箱は軍勢と共にあった。 PP 227.4

この経験は、われわれに教訓を与える。イスラエルの力ある神は、われわれの神である。われわれは彼に信頼することができる。もし、われわれがそのご要求に従うならば、神は、昔の民のためになされたのと同じ著しい方法で、われわれのために働かれるのである。義務の道をたどっていこうとする者は、だれでも、ときには疑いと不信の念をいだくことがある。その道は、一見、越せそうもない障害物で閉ざされているように思われ、気の弱い者を落胆させることがある。しかし、神はこう言われる。前進せよ。どんな価を払っても、あなたの義務を行いなさい。どのように恐ろしく見え、心を恐怖

で満たすような困難でも、謙遜に、神に信頼して服従の道を前進するときに消え去るのである。 PP 227.5

第 40 章　欲に目がくらんだバラム

本章は、民数記 22～24 章に基づく PP 227.6

イスラエル人は、バシャンを征服したあとで、ヨルダン川が死海に注ぎ込む少し上流の地域に陣を張り、カナンに侵入する準備をすぐ整えた。そこは、エリコの平原の反対がわに当たっていた。彼らは、モアブ の国境にはいっていたので、モアブ人は、侵略者の接近によって恐怖に満たされていた。 PP 227.7

モアブの人々は、イスラエル人から何の危害も受けてはいなかった。しかし、周囲の国々に起こったすべてのことを見て、恐ろしい予感をいだいていた。彼らは、アモリ人から敗走したのであったが、そのアモリ人が、ヘブル人に征服され、アモリ人がモアブから奪った領地は、今イスラエル人の所有になっていた。バシャンの軍勢は、雲の柱の中に秘められた不思議な力の前に降伏し、巨大なとりでは、ヘブル人に占領された。モアブ人は、彼らを攻めてはこなかった。どんな武器を用いても、イスラエル人のために働く超自然的力には、勝つ望みがなかった。しかし、モアブ人はパロのように、魔術の力を借りて、神の働きに立ち向かおうとした。彼らは、イスラエルをのろおうとした。 PP 228.1

モアブ人とミデアン人は、種族と宗教の絆によって堅く結ばれていた。モアブの王バラクは、同族のミデアン人の恐怖心をかき立て、「この群衆は牛が野の草をなめつくすように、われわれの周囲の物をみな、なめつくそうとしている」と伝え、イスラエルに敵対する彼の計画に協力させた（民数記 22：4）。メソポタミヤの住人バラムは、超自然的能力の持ち主として知られ、その評判はモアブの地にまで聞こえていた。そこで、彼を呼んで助けてもらうことにした。彼に、イスラエルをのろい、魔法をかけてもらうために、「モアブの長老たちとミデアンの長老たち」がつかわされた（同 22：7）。 PP 228.2

使者たちはすぐに長い旅に出発し、山を越え、砂漠を横切ってメソポタミヤに行った。彼らは、バラムに会って王の言葉を伝えた。「エジプトから出てきた民があり、地

のおもてをおおっています。どうぞ今きてわたしのために彼らをのろってください。そうすればわたしは戦って、彼らを追い払うことができるかもしれません」（同 22：11）。 PP 228.3

バラムは、かつては善人であって、神の預言者であったが、背教して欲に目がくらんでいた。それでいてもなお自分はいと高き者のしもべであると自称していた。彼は、神がイスラエルのためになされたみわざについて無知ではなかったから、使者が用向きを伝えたとき、自分としては、バラクの報酬を拒み、使者を去らせるのが義務であることをよくわきまえていた。それにもかかわらず、彼はあえて誘惑に手を出し、主に勧告を求めるまでは、はっきりした解答を与えるわけにはいかないと言って、その夜は、使いの者たちを泊まらせた。バラムは自分ののろいがイスラエルに災いをもたらし得ないことを知っていた。神が、彼らについておられ、彼らが神に誠実であるかぎり、地の上、また、黄泉のどんな敵対力も勝つことはできなかった。しかし、「あなたが祝福する者は祝福され、あなたがのろう者はのろわれる」と使者に言われて、彼はうぬぼれた（同 22：6）。高価な贈り物の贈与、また、高い地位の約束などによって、彼は欲を起こした。彼は、贈られた宝を欲ばって受け取った。そして、口では神のみ旨に厳格に従うと言いながら、バラクの願いに応じようとした。 PP 228.4

夜、神の使いがバラムを訪れ、こう伝えた。「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。またその民をのろってはならない。彼らは祝福された者だからである」（同 22：12）。 PP 228.5

朝になってバラムは、不本意ながら使いの者たちを帰した。しかし、彼は主が言われたことは彼らに話さなかった。利得と名誉の夢が、もろくも破れてしまったので、彼は怒って気むずかしく叫んだ。「あなたがたは国にお帰りなさい。主はわたしがあなたがたと一緒に行くことを、お許しになりません」（同 22：13）。 PP 228.6

バラムは「不義の実を愛し」た（Ⅱペテロ 2：15）。神が、偶像であると言明されたむさぼりの罪によって、彼は日和見主義者となってしまった。この 1 つの過失によって、サタンは、彼を完全に支配するようになった。彼を破滅に陥れたのは、このむさぼりであった。誘惑者は、人々を神に仕えさせないようにしようとして、常にこの世の

利得と名誉を提供する。あまり良心的すぎては繁栄しないとサタンは人々に言う。こうして、多くの者は、厳格な誠実の道から離れるように誘われるのである。悪の 1 歩は、次の 1 歩を たやすくする。彼らは、ますます借越になる。彼らはひとたび貪欲と権力欲に支配されると、どんな恐ろしいことでも、あえてするようになる。多くの者は、自分はこの世の利得のために一時的に厳格な誠実の道を離れてもかまわないと思い、そして、目的が達せられたならば、いつでもそれをやめられると考えている。そのような人はサタンのわなに陥り、それから逃げることができないのである。 PP 228.7

預言者が来ることを拒んだことを、使いの者たちがバラクに報告したとき、彼らは、神がそれを禁じられたとは言わなかった。バラムは、もっと多くの報酬を得たいために来ないのだと簡単に考えた王は、最初の者たちよりもっと身分の高いつかさたちを多く送って、さらに高い栄誉を約束し、バラムが命じることは何でも承認する権威を彼らに与えた。バラクは、預言者に懇願して言った。「どんな妨げをも顧みず、どうぞわたしのところへおいでください。わたしはあなたを大いに優遇します。そしてあなたがわたしに言われる事はなんでもいたします。どうぞきてわたしのためにこの民をのろってください」（民数記 22：16、17）。 PP 229.1

バラムは、2 度試みられた。彼は、使者の懇請に答えて、自分が非常に良心的で誠実であって、金銀がどんなに積まれても、神のみ旨に逆らって出かけることはできないことを強調した。しかし、彼は、王の求めに応じたいと願っていた。神のみ旨が、すでにはっきりと知らされていたにもかかわらず、彼は、使者たちに、しばらくとどまるように勧め、もう 1 度神に尋ねてみようと言った。彼は永遠の神を、あたかも人間のように説得できると思った。 PP 229.2

夜、主はバラムに現れて言われた。「この人々はあなたを招きにきたのだから、立ってこの人々と一緒に行きなさい。ただしわたしが告げることだけを行わなければならない」（同 22：20）。バラムはすでに心に決めていたので、主は、ここまでバラムが自分の思い通りにすることを許されたのである。バラムは、神のみ旨を行うことを求めず、かえって自分の道を選び、主の承認を得ようとつとめたのである。 PP 229.3

今日も、同様のことをする者が数多くいる。彼らは、自分たちの傾向と一致しているならば、どんな義務も困難なく理解する。それは、聖書が明らかにし、環境と理性も共にそれをはっきり示しているのである。しかしこうした証拠が彼らの欲望と傾向に反するものであるため、彼らは、しばしば、それをないがしろにして、神のみ前に出て、自分の義務を知ろうとする。彼らは、一見、非常に良心的にふるまい、光を求めて長い祈りを捧げる。しかし、神を軽んじることはできない。神は、そのような人々が、欲望のままに行って、その結果、苦しむことをお許しになることがよくある。「しかしわが民はわたしの声に聞き従わず、……それゆえ、わたしは彼らをそのかたくなな心にまかせ、その思いのままに行くにまかせた」（詩篇 81：11、12）。義務をはっきり示されたとき、それを実行しなくてもよいという許しを受けるために、神に祈ろうなどと思ってはならない。かえって謙虚なへりくだった心をもって、その要求を履行するために、神の力と知恵を求めるべきである。 PP 229.4

モアブ人は堕落した偶像教徒であった。しかし、彼らが受けた光からすると、彼らの罪はバラムの罪ほど天の目に大きくはなかった。バラムは神の預言者であると言っていたのであるから、彼が語るすべてのことは、神の権威によって語られたものと受けとるべきであった。それゆえ、彼は自分かってなことを話すことを許されていなかった。彼は、神が彼にお与えになる使命を伝えねばならなかった。「わたしが告げることだけを行わなければならない」というのが神の命令であった。 PP 229.5

バラムは、もしモアブの使者たちが朝のうちに彼を迎えに来るならば、彼らといっしょに行ってもよいという許可をうけた。しかし、彼らは、彼が遅いのに困り果て、またもや断わられるのではないかと思って、彼に相談せずに家路についてしまった。こうなっては、もう、バラクの求めに応じなければならない理由は、すべてなくなってしまった。しかし、バラムは報酬を得ようと決心した。彼はいつも乗っている動物を引き出して出かけた。彼は今にも神の許可がとり去られはしないかと恐れた。彼は、欲した報酬を何かに 妨げられて取りそこなうまいとあせりながらけんめいに道を急いだ。 PP 229.6

しかし、「主の使は彼を妨げようとして、道に立ちふさがっていた」（民数記 22：22）。獣は、人には気づかない神の使いを見て、道を横にそれて畑に入った。バラムは獣を激しくむちで打って元の道に引きもどした。しかし、石垣にはさまれた狭い場所で、天使がもう 1 度現れると、獣はその恐ろしい姿を避けようとして、主人の足を石垣に押しつけた。バラムには天の介入が見えなかった。また、神が彼の道をはばんでおられることを知らなかった。バラムは激怒し、ろばを情け容赦なく打ち、前進させようとした。 PP 230.1

もう 1 度、「右にも左にも、曲る道がな」い「狭い所に」前と同じように、恐ろしい姿をした天使が現れた（同 22：26）。あわれな獣は、すっかりおびえて立ち止まり、バラムを乗せたまま地面にかがんでしまった。バラムは怒り狂って、つえで、これまで以上にひどく獣を打った。このとき、神は獣の口を開かれた。「ものを言わないろばが、人間の声でものを言い、この預言者の狂気じみたふるまいをはばんだのである」（Ⅱペテロ 2：16）。「わたしがあなたに何をしたというのですか。あなたは 3 度もわたしを打ったのです」（民数記 22：28）。 PP 230.2

バラムは、行く手を妨げられたのを怒って、言葉のわかる者に語るように獣に答えた。「お前がわたしを侮ったからだ。わたしの手につるぎがあれば、いま、お前を殺してしまうのだが」（同 22：29）。この自称魔術師は、自分が乗っている動物さえ殺す力がないのに、1 つの民族全体をのろって、彼らの力を麻痺させようとして、道を進んでいたのである。 PP 230.3

このとき、バラムの目が開かれた。彼は、抜き身の刀を持って彼を殺そうとかまえている神の使いを見た。彼は恐れ、「頭を垂れてひれ伏した」。天使は彼に言った。「なぜあなたは 3 度もろばを打ったのか。あなたが誤った道を行くので、わたしはあなたを妨げようとして出てきたのだ。ろばはわたしを見て 3 度も身を巡らしてわたしを避けた。もし、ろばが身を巡らしてわたしを避けなかったなら、わたしはきっと今あなたを殺して、ろばを生かしておいたであろう」（同 22：31～33）。 PP 230.4

バラムは、彼が残酷に扱ったあわれな動物に命を守ってもらったのであった。主の預言者であることを公言し、目が開かれて「全能者の幻を」見たと主張した者が、貪欲

と野心のために、彼のろばにはよく見えた神の使いを見ることができなかったのである（同 24：4）。「この世の神が不信の者たちの思いをくらませて」いる（Ⅱコリント 4：4）。いかに多くの者がこのように盲目であることか。彼らは、禁じられた道を進み、神の律法を破りながら、神と天使が彼らに敵対していることを見分けることができないのである。バラムと同じように、彼らは、自分が破滅するのをとどめる者に怒りを発するのである。 PP 230.5

バラムはろばの扱いによって、彼がどんな心の状態にあったかを示した。「正しい人はその家畜の命を顧みる、悪しき者は残忍をもって、あわれみとする」（箴言 12：10）。動物を虐待したり、怠慢によって彼らに苦痛を与えたりすることがどんなに罪深いかを認める者は少ない。人間を創造されたお方は、下等な動物をもお造りになったのである、「そのあわれみはすべてのみわざの上にあります」（詩篇 145：9）。動物は人間に仕えるために造られた。しかし、人間は無情な取り扱いや残酷な使役によって彼らに苦痛を与える権利はもっていない。「被造物全体が、……共にうめき共に産みの苦しみを続けている」原因は、人間の罪である（ローマ 8：22）。そのために人類だけでなく、動物もまた、苦しんで死ぬようになった。であるから、神が造られたものの上に罪がもたらした苦痛の重荷を増すかわりに、軽くしてやるように努めることが人間としての務めである。 PP 230.6

動物が自分の権威の下にいるからと言って、彼らを虐待する者は卑怯者であり暴君である。隣人であれ、動物であれ、それらに苦痛を与える性質は悪魔的である。あわれな物言わぬ動物たちは、話すことができないので、多くの者は自分たちの残酷な行為が知られるとは思っていない。しかし、もしこれらの人の目が、バラムと同じように開かれたならば、彼 らは神の使いが天の法廷で証人として立ち、彼らに有罪の証言をしているのを見るであろう。記録は天にのぼる。そして、神が造られたものを虐待する者にさばきが宣告される日が来るのである。 PP 230.7

神の使いを見たとき、バラムは恐れて叫んだ、「わたしは罪を犯しました。あなたがわたしをとどめようとして、道に立ちふさがっておられるのを、わたしは知りませんでした。それで今、もし、お気に召さないのであれば、わたしは帰りましょう」（民数

記 22：34）。主は彼が道を進んで行くことを許された。しかし、彼の言葉は、神の力に支配されなければならないことを、彼に理解させられた。神は、ヘブル人が神の保護の下にある証拠をモアブ人に示そうとされた。そして、このことは、神の許しがなければ、バラムは無力で、一言もイスラエルをのろうことができないことを彼らに明示して、効果的に行われたのである。 PP 231.1

モアブの王は、バラムが来ているという知らせを聞いて、大勢の家来を従えて、彼を国境まで出迎えた。多額の報賞が与えられるのに、どうして早く来なかったのかと王が驚いてバラムに言うと、預言者は答えた。「ごらんなさい。わたしはあなたのところにきています。しかし、今、何事かをみずから言うことができましょうか。わたしはただ神がわたしの口に授けられることを述べなければなりません」（同 22：38）。バラムは、この制限を非常に残念に思っていた。彼は主が彼を支配しておられるので、自分の目的が達成されないのではないかと恐れた。 PP 231.2

王は国家の高官たちと共に威儀をととのえ、バラムを「バアルのたかきところ」へ案内していき、そこからヘブルの軍勢をながめさせた（同 22：41・文語訳）。高い所に立ち、神が選ばれた民の陣営を見おろす預言者をながめてみよう。イスラエル人は、自分たちのすぐ近くで起こっていることを何も知らないでいる。日夜神の守りが自分たちをおおっていることを彼らは少しも知らない。神の民の目のなんと鈍いことであろう。いつの時代でも、彼らは、神の大いなる愛と憐れみを理解するのがなんとおそいことであろり。もし彼らが、彼らのために絶えず働く神の驚くべき力をはっきり知ることができたならば、彼らの心は、神の愛に対する感謝で満たされ、その威厳と力に対する畏敬の念に満たされないであろうか。 PP 231.3

バラムは、ヘブル人の犠牲の捧げ物についていくらか知っていた。そこで、彼は、彼らにまさる高価な捧げ物をすることによって神の祝福を得て、自分の罪深い計画を確実になしとげたいと思った。こうして偶像教徒のモアブ人の感情が彼の心を支配していった。彼の知恵は愚かとなり、彼の霊的視界は曇った。彼はサタンの力に屈服して目がくらんだ。 PP 231.4

バラムの指示によって 7 つの祭壇がたてられ、彼は祭壇ごとに犠牲を捧げた。それからバラクに、主がどう言われるかを知らせる約束をして、神に会うために「たかきところ」にしりぞいた。 PP 231.5

王は、モアブの貴族やっかさたちと共に、犠牲のかたわらに立っていた。そのまわりを群衆がとりまき、預言者の帰りをいまかいまかと待っていた。ついに彼が出てきた。人々は憎むべきイスラエル人のために働いたあの不思議な力を、永久に無能にする言葉を待ちかまえた。バラムは言った。 PP 231.6

「バラクはわたしをアラムから招き寄せ、 PP 231.7

モアブの王はわたしを東の山から招き寄せて言う、 PP 231.8

『きてわたしのためにヤコブをのろえ、 PP 231.9

きてイスラエルをのろえ』と。 PP 231.10

神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。 PP 231.11

主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。 PP 231.12

岩の頂からながめ、 PP 231.13

丘の上から見たが、 PP 231.14

これはひとり離れて住む民、 PP 231.15

もろもろの国民のうちに並ぶものはない。 PP 231.16

だれがヤコブの群衆を数え、 PP 231.17

イスラエルの無数の民を数え得よう。 PP 231.18

わたしは義人のように死に、 PP 231.19

わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」 PP 231.20

（同 23：7～10） PP 231.21

バラムは、イスラエルをのろうために来たことを告白 した。しかし、彼の言葉は彼の心の思いと正反対であった。彼の心はのろいで満ちていたが、祝福を宣言するようにしいられたのであった。 PP 231.22

バラムはイスラエルの陣営を見たとき、彼らの繁栄の証拠をながめて驚嘆した。彼は、彼らが組になってそこここに出没し、国を荒らしまわる、粗野で無秩序な群衆であ

って、周囲の国々からきらわれ、恐れられていると聞かされていた。しかし、彼らの外観は、それとは全く反対であった。彼は、彼らの陣営の驚くべき広さと完全な秩序を見た。すべてのものは、完全な規律と秩序のもとにあった。彼は、神がイスラエルにくだされた恵みと選民としての彼らの特殊な性質を示された。彼らは他の国々と同じ水準のものではなく、それらすべてをはるかに越えて高められたものであった。 PP 232.1

「これはひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちに並ぶものはない」（同 23：9）。これらの言葉が語られたとき、イスラエル人はまだ定住地をもたず、彼らの特性、習慣風習はバラムに知られていなかった。しかしイスラエルの後の歴史において、この預言はなんと正確に成就したことであろう。その捕囚のすべての年を通じ、また、国々に離散してからも、すべての時代にわたって彼らは異なった民として存在していた。同様に神の民――真のイスラエルーーは、すべての国々に散らばっているけれども、地上においては国籍を天に持つ旅人にすぎない。 PP 232.2

バラムは国家としてのヘブル人の歴史を示されただけでなく、時の終わりに至るまでの神のまことのイスラエルの増加と繁栄を見た。彼は、いと高きものの特別な恵みが、神を愛し、おそれる者にとどまるのを見た。彼らが、死の陰の暗い谷に入るとき、神のみ腕が彼らを支えるのを彼は見た。さらに、彼は、彼らが光栄と誉れと不死の冠をいただいて墓から出てくるのを見た。彼はあがなわれた者が、新しくされた地の朽ちない栄光の中に喜んでいるのを見た。その光景を凝視しながら彼は叫んだ。「だれがヤコブの群衆を数え、イスラエルの無数の民を数え得よう」（同 23：10）。すべての者の額に栄光の冠を見、すべての者の顔から輝き出る喜びを見、純粋な幸福に満ちた永遠の生命をながめたとき、彼の口から厳粛な祈りがほとばしった。「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」（同 23：10）。 PP 232.3

もし、バラムに神から与えられた光を受ける気持ちがあったならば、彼はここでその言葉どおりに実行したことであろう。彼はすぐにモアブ人とのすべての関係を断ち切ったであろう。もはや神の憐れみを僭越に求めることをせず、深い悔い改めによって神に立ち返ったことであろう。しかし、バラムは不義の報酬を愛した。そして、それを得ようと決心した。 PP 232.4

バラクは、のろいが草を枯らす害虫のように、イスラエルにかけられるものと心から期待していた。しかし、預言者の言葉に彼は怒って叫んだ。「あなたはわたしに何をするのですか。わたしは敵をのろうために、あなたを招いたのに、あなたはかえって敵を祝福するばかりです」（同 23：11）。バラムは、神の力に動かされて、しいて言わざるを得なかった言葉を、あたかも自分が神のみ心に対する良心的な服従をしたかのように公言した。そしてやむを得ずしたにかかわらず、それを自分の手柄にしようとした。「わたしは、主がわたしの口に授けられる事だけを語るように注意すべきではないでしょうか」と彼は答えた（同 23：12）。 PP 232.5

バラクはこの時に至ってもなお彼の目的を放棄できなかった。彼は、バラムが、ヘブル人の大陣営の堂々とした光景をながめておじけづき、彼らをのろうことができなかったのだと思った。王は、軍勢のごく一部分しか見えない地点に、預言者を連れていくことに決めた。もしバラムに隔離された部隊をのろわせることができれば、全陣営は、やがて破滅に陥るであろう。ピスガの山の頂上で、もう 1 度行われることになった。また、7 つの壇が築かれ、最初のときと同じ捧げ物がおかれた。王とつかさたちは、犠牲のそばに立ち、バラムは、神と会うために退いた。預言者は、ふたたび、自分では変えることも止めることもできない神の言葉を託された。 PP 232.6

気をもんで待ちかまえていた人々は、彼が現れた時に、「主はなんと言われましたか」と尋ねた（同 23：17）。彼の答えを聞いて、王とつかさたちは前と同様に恐怖に満たされた。 PP 233.1

「神は人のように偽ることはなく、 PP 233.2
また人の子のように悔いることもない。 PP 233.3
言ったことで、行わないことがあろうか、 PP 233.4
語ったことで、しとげないことがあろうか。 PP 233.5
祝福せよとの命をわたしはうけた、 PP 233.6
すでに神が祝福されたものを、 PP 233.7
わたしは変えることができない。 PP 233.8
だれもヤコブのうちに災のあるのを見ない、 PP 233.9

またイスラエルのうちに悩みのあるのを見ない。 PP 233.10

彼らの神、主が共にいまし、 PP 233.11

王をたたえる声がその中に聞える」 PP 233.12

（同 23：19～21） PP 233.13

この啓示によって、畏敬の念に満たされたバラムは、「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いがない」と叫んだ（同 23：23）。大魔術師バラムは、モアブ人の希望に応じて、彼の魔法の力を使おうとした。しかし、神は、このとき、イスラエルのためになんと驚くべきことをなさったことであろう。彼らが、神に保護されているかぎり、いかなる民族や国家が、サタンの全勢力の援助を受けて彼らに立ち向かっても、彼らに勝つことはできないのである。全世界は、神がその民のためになされた不思議なわざに驚くのである。すなわち、罪の道に進もうと決心した人が、神の力に支配されて、のろいの言葉のかわりに、壮大で、熱情に満ちた詩によって、最も豊かで尊い約束を語るようになったのである。またこのとき、イスラエルに対して表された神の恵みは、すべての時代の従順で忠実な神の子らに対する神のみ守りの保証であった。サタンが悪人を扇動して神の民を悪く言い、苦しめ、滅ぼそうとするとき、神の民はこのときの出来事を思い起こして、勇気を出し、神に対する信仰を強めるのである。 PP 233.14

モアブの王は失望落胆し、「彼らをのろうことも祝福することも、やめてください」と叫んだ（同 23：25）。しかし、かすかな望みがなお彼の心に残っていた。彼はもう 1 度試みてみようと思った。今度、彼は、バラムをペオル山へ連れていった。そこには彼らの神、バアルのみだらな礼拝に捧げられた神殿があった。そこに前と同じ数の壇がたてられ、同じ数の犠牲が捧げられた。しかし、バラムは前の時のように、神のみ旨を知るために 1 人になることをしなかった。彼は、魔術を使うようには見せかけなかった。ただ壇のそばに立ってイスラエルの天幕を見おろしていた。ふたたび神の霊が彼に臨んだ。そして神の言葉が彼のくちびるから聞こえた。 PP 233.15

「ヤコブよ、あなたの天幕は麗しい、 PP 233.16

イスラエルよ、あなたのすまいは、麗しい。 PP 233.17

それは遠く広がる谷々のよう、 PP 233.18

川べの園のよう、 PP 233.19

主が植えられた沈香樹のよう、 PP 233.20

流れのほとりの香柏のようだ。 PP 233.21

水は彼らのかめからあふれ、 PP 233.22

彼らの種は水の潤いに育つであろう。 PP 233.23

彼らの王はアガグよりも高くなり、 PP 233.24

彼らの国はあがめられるであろう。…… PP 233.25

彼らは雄じしのように身をかがめ、 PP 233.26

雌じしのように伏している。 PP 233.27

だれが彼らを起しえよう。 PP 233.28

あなたを祝福する者は祝福され、 PP 233.29

あなたをのろう者はのろわれるであろう」 PP 233.30

（同 24：5～9） PP 233.31

ここに神の民の繁栄が自然界の最も美しいものにたとえて表されている。預言者はイスラエルを豊かな産物でおおわれた肥えた谷、枯れることのない泉の水でうるおう庭、香り高いびゃくだんや堂々たる香柏になぞらえた。この最後の象徴は、霊感の言葉の中に見いだされる最も美しく、全く適切なものの 1 つである。レバノンの香柏は東方のすべての人々に尊 ばれた。この種に属する木は、人が行くところ世界のどこにでも見いだされる。それは、極地から熱帯地方にいたるまで、炎天を楽しみ、しかも、寒気に耐えて繁茂する。それは流れのほとりでは豊かに繁って育ち、ひからびた水のない荒地でも高くそびえる。それは根を深く山の岩間におろし、たけり狂う嵐にもおおしく立つ。冬の風が吹いてすべての葉が枯れるときにも、その葉はみずみずしい緑をたたえている。他のすべての木にまさって、レバノンの香柏は、その強さ、その堅さ、その不滅の活力がきわだっている。それゆえ、これはそのいのちが、「キリストと共に神のうちに隠されている」人々の象徴として用いられているのである（コロサイ 3：3）。聖書は、「正しい者は……レバノンの香柏のように育ちます」と言っている（詩篇 92：12）。神のみ手は香柏を森の王に高められた。「もみの木もその枝葉に及ばない。けやきもそ

の枝と比べられない。神の園のすべての木も、その麗しきこと、これに比すべきものはない」（エゼキエル 31：8）。香柏はくりかえし忠誠のしるしとして用いられている。聖書の中でそれが正しい人を表すために用いられていることは、天が神のみ旨を行う者をどのように見ているかを示すものである。 PP 233.32

バラムは、イスラエルの王がアガグより偉大で、力の強い者となることを預言した。アガグとは、当時非常に強い国であったアマレク人の王たちに与えられた名であった。しかし、イスラエルが神に忠実であるならば、すべての敵を従えることができる。イスラエルの王とは神のみ子をさしていた。その王座はいつの日か地上にすえられ、その権威はすべての地上の国の上に高められるのであった。 PP 234.1

バラクは、預言者の言葉を聞いて失望落胆し、恐怖と激しい怒りをおぼえた。彼は、万事が自分に不利であっても、バラムがなんとかよい答えをして、わずかでも彼を励ますことができたものにと憤慨した。彼は、預言者の妥協と欺きの行為を軽べつした。王は、激しく叫んで言った、「それで今あなたは急いで自分のところへ帰ってください。わたしはあなたを大いに優遇しようと思った。しかし、主はその優遇をあなたに得させないようにされました」（民数記 24：11）。バラムはそれに答えて、自分は神より与えられた言葉だけしか語ることができないことは、王も前もって聞かれたはずだと言うのであった。 PP 234.2

バラムは、自分の民のところへ帰る前に、世の救い主と神の敵の破滅について最も美しく崇高な預言を語った。 PP 234.3

「わたしは彼を見る、しかし今ではない。 PP 234.4

わたしは彼を望み見る、しかし近くではない。 PP 234.5

ヤコブから 1 つの星が出、 PP 234.6

イスラエルから 1 本のつえが起り、 PP 234.7

モアブのこめかみと、 PP 234.8

セツのすべての子らの脳天を撃つであろう」 PP 234.9

（同 24：17） PP 234.10

そして、彼は、モアブ人、エドム人、アマレク人、ケニ人らの完全な滅亡を預言して口を閉じ、モアブの王に希望の光を残さなかった。 PP 234.11

バラムは、富を与えられて昇進する望みもなくなり、王にうとんぜられ、神の不興を被ったことを感じながら自分から進んで行った務めから離れていった。彼が家に帰ったあとで、神の霊の支配力が彼から離れた。これまで制せられたに過ぎなかった貪欲が勢いをもりかえした。彼は、どんな手段に訴えてでもバラクが約束した報酬を得ようと決心した。バラムは、イスラエルの繁栄が、彼らの神に対する服従にあることを知っていた。そこで彼らを敗北させるには彼らを罪に誘う以外に方法はないと思った。今や彼はイスラエルにのろいを招く手段をモアブ人に勧告することによって、バラクの歓心を得ようと心に決めた。 PP 234.12

彼はすぐにモアブの国にひきかえした。そして、彼の計画を王に説明した。モアブ人自身も、イスラエルが神に忠実であるかぎり、神が彼らの盾となられることをはっきり悟った。バラムの提案は彼らを偶像礼拝に誘って神から彼らを引き離すことであった。もし彼らをバアルやアシタロテのみだらな礼拝に加わるように誘うことができれば、彼らの全能の守護者 は彼らの敵となり、彼らはまもなくまわりの残忍で好戦的な国々の餌食となるのであった。王はこの計画を喜んで受け入れた。バラム自身はとどまってその計画の実施を助けることとなった。 PP 234.13

バラムは、彼の悪魔的な企てが成功するのを見た、彼は神ののろいがその民にくだり、幾千の者が刑罰を受けるのを見た。しかし、イスラエルの中の罪を罰した神の義は、誘惑者がのがれるのを許さなかった。イスラエルとミデアン人とが戦った時に、バラムは殺された。彼が、「わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい」と叫んだとき、彼は自分の終わりが近いことを予感したのであった（同23：10）。しかし、彼は義人の生涯を送ることを選ばなかった。彼は、神の敵と同じ運命に陥った。 PP 235.1

バラムの運命はユダのそれと同じであった。彼らの性質は、互いによく似ている。両者とも神と富にかね仕えようとして、完全に失敗した。バラムは真の神を知り、彼に仕えることを公言した。ユダはイエスをメシヤとして信じ、彼に従う者たちに加わった。

しかし、バラムは主の奉仕を富と世俗のほまれを得る踏み石にしようと望み、これに失敗して、つまずき倒れ、滅びた。ユダは、キリストと結合することによって、メシヤがまもなく樹立すると彼が信じたこの世の王国において、富と昇進にあずかろうと期待した。彼の希望が裏切られると、彼は背教して破滅した、バラムもユダも大きな光を受け、大きな特典にあずかった。しかし、心にいだいた 1 つの罪が全人格を毒し、滅亡の原因となった。 PP 235.2

心の中にキリスト教徒にふさわしくない性質をとどめておくことは危険である。心に秘められた 1 つの罪は、徐々に性質を堕落させ、その高尚な能力をすべて悪い欲望に屈服させる。良心から 1 つの保護物を取り除くこと、1 つの悪い習慣にふけること、義務の重要な要求を 1 度怠ることなどは魂の防壁を破り、サタンがつけ入って、われわれを誤らせる道を開くのである。唯一の安全な道は、ダビデのように、次の祈りを、毎日、まごころから捧げることである。「わたしの歩みはあなたの道に堅く立ち、わたしの足はすべることがなかったのです」（詩篇 17：5）。 PP 235.3

第 41 章　ヨルダンにおける背教

本章は、民数記 25 章に基づく PP 235.4

勝ち誇ったイスラエルの軍勢は、喜びに満ち、神に対する信仰を新たにして、バシャンから帰った。彼らは、すでに、貴重な地域を占領していた。そして、すぐにカナンを征服することができると確信していた。彼らと約束の国との間には、ヨルダン川があるだけであった。川の向こうには、緑でおおわれた肥えた平原があった。そこには、泉から豊富にわき出た流れにうるおされ、おい茂ったしゆろの木陰があった。平原の西の端に、エリコの塔と宮殿が立ち並んでいた。そして、それが、しゅろの森に囲まれていたために、エリコは「しゅろの町」と呼ばれていた（申命記 34：3）。 PP 235.5

ヨルダンの東側、すなわち、彼らが通ってきた高原と川までの間にも、その幅数マイルに及ぶ平原が、川に沿って長く伸びていた。天然の保護を受けたこの流域は熱帯性の気候で、ここに、シッテム、すなわちアカシヤの木が茂っていた。そのために、この平原は、「シッテムの谷」と呼ばれた（ヨエル 3：18）。イスラエルが宿営したのはここで、川沿いのアカシヤの森が、彼らにころあいの宿り場となった。 PP 235.6

しかし、こうした魅力のある環境のなかで、武装した大軍や荒野の野獣以上に恐ろしい悪事に、彼らは当面しなければならなかった。自然の条件に恵まれた国土は、住民によって汚されていた。バアルが彼らのおもだった神であったが、その公の礼拝には、最も堕落した邪悪な行為が常に行われていた。いたるところに偶像礼拝とみだらなことで著名な場所があって、その名そのものが、人々の卑しさと腐敗を示していた。 PP 235.7

こうした環境は、イスラエル人に悪影響を及ぼした。彼らの心は、絶えずほのめかされた卑しい思いになれてきた。彼らは、安楽と怠惰な生活によって風紀をみだした。そして、ほとんど無意識のうちに神から離れ、やすやすと誘惑に負ける状態に陥っていた。 PP 236.1

ヨルダン河畔に宿営していた間に、モーセはカナン占領の準備を進めた。この偉大な指導者は、この務めに没頭していた。しかし、民にとってこの不安と期待の時期はどうにも耐えがたかった。幾週もたたないうちに、彼らの生活は徳と忠誠から恐ろしいまでに離れてしまっていた。 PP 236.2

最初、イスラエル人とこれらの異教徒との間には、ほとんど交渉がなかったのであるが、やがて、ミデアンの女たちがひそかに宿営に出入りするようになった。彼女たちの出現に警戒の色を見せる者もなかった。また、彼らのすることが、目だたないように行われたために、モーセの注意もこれに向けられなかった。この女たちがヘブル人と交わる目的は、彼らをだまして神の律法に違反させ、異教の儀式と習慣に注意を引き、偶像礼拝に誘うことであった。こうした動機は、友愛という名目の下に隠されていたため、民の守護に当たる者たちでさえそれに気づかなかった。 PP 236.3

バラムの提案によって、モアブの王は、神々をたたえる大祭を催すことに決めた。そして、バラムが、イスラエル人の参加を促すということがひそかに取り決められた。イスラエル人は、彼を神の預言者と見なしていたので、この目的を果たすのはぞうさなかった。大勢の民が、彼と共に祭りを見物した。彼らは禁じられた場所に足を踏み入れ、サタンのわなに捕らえられた。歌と踊りに浮かされ、異邦の女たちの美しさに魅せられて、彼らは主への忠誠心を捨ててしまった。一緒になって歓楽に身を委ねるにつれて、酒が感覚をくもらせ、自制心を失わせた。情欲がすべてを支配し、みだらな思いで良心を汚した彼らは、勧められるままに、偶像にひざをかがめた。彼らは異教の祭壇に犠牲を捧げ、最も堕落した儀式に参加した。 PP 236.4

この害毒が、恐ろしい伝染病のように、イスラエルの宿営に広がるには長時間を要しなかった。戦いにおいて敵を征服したはずの者たちが、異教の女の惑わしに負けてしまった。民は、魂を抜かれてしまったようであった。つかさたちや、おもだった人々が先頭に立って罪を犯した。そして多くの人々が罪を犯したため、背信は全国的なものとなった。「イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがった」（民数記 25：3）。モーセがこの悪に気づいたときは、すでに敵の計画は完全に成功し、イスラエル人はペオルの山のみだらな礼拝に参加していたばかりでなく、この異教の儀式がイスラ

エルの宿営の中でも行われようとしていた。モーセは憤りに満ち、神の怒りは燃え上がった。 PP 236.5

バラムのどのような魔術もイスラエルに対してなし得なかったことを、彼らのよこしまな風習はなしとげた。つまり、彼らは、イスラエルを神から引き離したのである。直ちに襲った刑罰によって、人々は、自分たちの罪の大きさにめざめた。 PP 236.6

恐ろしい疫病が宿営に発生し、幾万の人々がたちまちのうちに、その犠牲になった。この背信の指導者たちは、さばきびとによって殺されなければならないと、神は、お命じになった。この命令は、直ちに実行された。罪人たちは殺され、その死体は全イスラエルの目の前につるされた。それは、会衆が、指導者たちの受けたきびしい刑罰を見て、彼らの罪に対する神の嫌悪と彼らに対する神の怒りの恐ろしさを痛感するためであった。 PP 236.7

処罰の正しさをすべての者が認め、民は幕屋に急いで来て、涙を流し、心からへりくだった思いをいだいて、罪を告白した。幕屋の入口で、彼らがこうして神の前に泣いているとき、そして疫病がなお人々に死をもたらしていた時に、イスラエルのつかさのひとりであるジムリが、臆面もなく、「ミデアンの民の一族のかしら」の娘である遊女を伴って宿営にやってきて、彼女を自分の天幕に連れていった（同 25：15）。これほど大胆不敵な罪はまたとなかった。酒に酔いしれたジムリは、「ソドムのように」その罪をあらわして自分の恥を誇った（イザヤ 3：9）。祭司と指導者た ちが悲嘆と屈辱にうちひしがれて、「廊と祭壇との間で」泣き（ヨエル 2：17）、主が民のいのちを赦し、神の選民をはずかしめないようにと、主に嘆願していたそのおりもおり、このイスラエルのつかさは、あたかも神の報復にいどみ、民のさばきびとを嘲笑するかのように、全会衆の前で、自分の罪をこれ見よがしに誇ったのであった。大祭司エレアザルの子ピネハスは会衆のうちから立ち上がり、やりを手にとり、「そのイスラエルの人の後を追って、奥の間に入り」、2 人を殺した（民数記 25：8）。こうして疫病はやみ、神の刑罰を執行したこの祭司は、全イスラエルの前で名誉を受け、祭司職は彼とその家のものとして、永久に確認された。 PP 236.8

天来の言葉はこうであった。ピネハスは、イスラエルのうちから「わたしの怒りを……取り去った」「このゆえにあなたは言いなさい、『わたしは平和の契約を彼に授ける。これは彼とその後の子孫に永遠の祭司職の契約となるであろう。彼はその神のために熱心であって、イスラエルの人々のために罪のあがないをしたからである』と」（同・25：11～13）。 PP 237.1

シッテムにおける罪のためにイスラエルにくだった刑罰は、40 年近く以前に、「彼らは必ず荒野で死ぬであろう」という宣告を受けていたあの大群衆の残存者を滅ぼしてしまった（同 26：65）。ヨルダンの平野の宿営で、神のさしずにしたがって民を数えたところ、「モーセと祭司アロンがシナイの荒野でイスラエルの人々を数えた時に数えられた者はひとりもなかった。……彼らのうちエフンネの子カレブとヌンの子ヨシュアのほか、ひとりも残った者はなかった」（同 26：64、65）。 PP 237.2

神は、ミデアン人の誘惑に屈したイスラエルに刑罰をくだされたが、誘惑した者たちも神の正義の怒りをのがれることができなかった。レピデムで、イスラエルを攻め、疲れ果てて軍勢のあとに従っていた者たちを襲ったアマレク人は、長く後まで罰せられなかったが、イスラエル人を罪にいざなったミデアン人は、もっと危険な敵として、ただちに神の刑罰を受けた。神はモーセに命じられた。「ミデアンびとにイスラエルの人々のあだを報いなさい。その後、あなたはあなたの民に加えられるであろう」（同 31：2）。この命令はすぐに実行された。各部族から 1000 人が選ばれ、ピネハスの指揮のもとに送り出された。「彼らは主がモーセに命じられたようにミデアンびとと戦った……。その殺した者のほかにまたミデアンの王 5 人を殺した。……またベオルの子バラムをも、つるぎにかけて殺した」（同 31：7、8）。軍勢が捕虜とした女たちも、最も罪深く最も危険なイスラエルの敵であったので、モーセの命令によって殺された。 PP 237.3

これが、神の民に対して災いを図った民の最後であった。詩篇作者はこううたっている。「もろもろの国民は自分の作った穴に陥り、隠し設けた網に自分の足を捕らえられる」（詩篇 9：15）。「主はその民を捨てず、その嗣業を見捨てられないからです。さばきは正義に帰」る。人々が「相結んで正しい人の魂を責め」るとき、「主は彼らの

不義を彼らに報い、彼らをその悪のゆえに滅ぼされます」（詩篇 94：14、15、21、23）。 PP 237.4

バラムは、ヘブル人をのろうように求められたとき、魔術のすべてを尽くしても彼らに災いをもたらすことができなかった。それは主が、「ヤコブのうちに災のあるのを見」ず、また「イスラエルのうちに悩みのあるのを見ない」からであった（民数記 23：21）。だが彼らが誘惑に屈して神の律法を犯したとき、保護が彼らから取り去られた。神の民が戒めに忠実であるとき、「ヤコブには魔術がなく、イスラエルには占いがない」のである（同 23：23）。したがって、サタンの力と策略は、すべて、彼らを罪にいざなうために用いられる。神の律法の保管者であることを告白する者たちが、戒めを破るならば、それは彼らを神から引き離してしまう。そして彼らは、敵の前に立つことができなくなる。 PP 237.5

ミデアンの軍勢、また、魔術によっても征服されなかったイスラエル人は、ミデアンの遊女たちに負けてしまった。サタンに仕える女が魂をわなにかけて滅ぼす力は、こんなに強力なのである。「彼女は多くの人を傷つけて倒した、まことに、彼女に殺された者 は多い」（箴言 7：26）。こうして、セツの子孫は誘われて誠実の道からそれ、清い人々は堕落した。ヨセフも、また、こうした誘惑を受けた。このようにして、サムソンは自分の力、イスラエルの守りをペリシテ人の手に渡した。この点においてダビデもつまずいた。また、3 度にわたり神に愛された者と呼ばれた諸王の中の最も賢明な王ソロモンは情欲の奴隷となり、同じ魅惑の力のためにその誠実を犠牲にした。 PP 237.6

「これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」（Ｉコリント 10：11、12）。サタンは人間の心を扱うのに用いる材料を熟知している。彼は数千年にわたり、うむことなく研究してきたので、あらゆる人間を最も容易に攻撃することのできる点を知っている。彼は各世代にわたって、ペオルのバアルにおいてみごとに成功したのと同じ誘惑により、最も強固な人間、イスラエルのつかさたちをくつがえそうと働いてきた。どの時

代にも、官能の耽溺という岩に乗り上げて難破した人々が大勢いた。時が終わりに近づき、神の民が天のカナンの境界に立つとき、サタンは、昔と同じように、彼らをよい地に入らせまいとして、いっそう努力する。彼は一人一人にわなをしかける。気をつけなければならないのは、無知で無教育な人々ばかりではない。彼は最も高い地位、最も聖なる職務の人々をも誘惑する。もし彼らをいざなってその魂を堕落させることができれば、彼らを通して多くの人々を滅ぼすことができる。そして彼は今も、3000 年前に用いたのと同じ手段を用いる。この世の交わり、美貌の魅力、快楽の追求、歓楽、安楽、飲酒などによって、彼は第 7 条を犯させようとする。 PP 238.1

サタンは、イスラエルを偶像礼拝に導くにさきだって、みだらな生活にいざなった。神のかたちであるべき人間性をはずかしめ、自分自身のうちにある神の宮を汚す者は、下劣な心の欲望を満足させて神をどんなにはずかしめてもためらわない。官能の耽溺は精神を弱め、魂を堕落させる。動物的な性質の満足によって、道徳的、知的能力は麻痺して無感覚となる。 PP 238.2

だから情欲の奴隷が神の律法の神聖な義務を自覚したり、贖罪を感謝したり、あるいは魂の価値を正しく評価することはできない。善、純潔、真実、神への崇敬、聖なることがらへの愛など、人間を天の世界とつなぐこうした聖なる思いと気高い願望のすべてが、情欲の火で焼き尽くされる。魂は暗い荒涼とした荒れ地、悪霊の住み家、「あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつ」となる（黙示録 18：2）。神のかたちに造られた人間が、野獣と同等の水準に引き下げられる。 PP 238.3

ヘブル人が神の律法を犯すようにいざなわれ、民族に神の刑罰をもたらすことになったのは、偶像礼拝者と交わり、彼らの歓楽に加わったためであった。そのように今も、キリストに従う者を不信心な者と交わらせ、その娯楽に加えることによって、サタンは巧みに彼らを罪にさそい出す。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない」（Ⅱコリント 6：17）。神は昔のイスラエルに要求なさったと同じように、今のご自分の民にも、風習と習慣と原則において、この世とはっきり分離することを要求なさる。神のことばが教えることに忠実に従うなら、この区別は存在し、それはあいまいであることはあり得ない。ヘブル人が異教

徒に同化してはならないことを戒めた警告は、現在、不信心な者の精神と風習に、クリスチャンが同調することを禁じている警告と同様に明白なものであった。キリストはわれわれにこう語っておられる。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない」（Ⅰヨハネ２：15）。「世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」（ヤコブ４：4）。キリストに従う者は罪人と分離し、善を行う機会のあるときだけ彼らと交わるのでなければならない。われわれを神から引き離す感化力を持つ人々との交わりを避けるについては、どんなに断固とした態度を取 っても取りすぎることはない。「わたしたちを試みに会わせないで」くださいと祈る一方、できるだけ誘惑を避けなければならない（マタイ６：13）。 PP 238.4

イスラエル人が罪にいざなわれたのは、外面的には安楽で、安全な状態にあったときであった。彼らは、常に神を自分たちの前に置くことを怠り、祈りをおろそかにし、自負心をいだいた。安楽と放縦が魂のとりでを無防備にし、いやしい考えを起こさせた。原則という要塞をくつがえし、イスラエルをサタンの手に渡したのは、城壁の内部の反逆者たちであった。今なおこのようにして、サタンは魂の滅亡をはかっている。クリスチャンが公然と罪を犯すまでには、世間には知られない長い予備的な過程が心の中で進行している。精神は、たちまちにして純潔と聖潔から堕落と腐敗と犯罪へと急降下するのではない。神のかたちに造られた者を、獣、あるいは悪魔のかたちに堕落させるには時間がかかる。われわれは仰ぎ見ることによって変えられる。不純な思いにふけることによって、人間は、かつては嫌悪していた罪を快いものと思うようにもなることができる。 PP 239.1

サタンはあらゆる手段を尽くして、犯罪と堕落的な悪徳を広めようとしている。都市の通りを歩けば、必ず、小説に描かれた犯罪、または劇場で上演される犯罪のはでな広告にぶつかる。心は罪に慣らされてしまう。心の下劣な人物のたどった道が、今日、雑誌に掲載され、人々の欲望をかきたてるあらゆるものが刺激的な物語の中で示される。人々は堕落的な犯罪について聞いたり、読んだりすることが多いため、かつてはこうし

た情景を嫌悪して目をそむけた敏感な良心も、感覚がにぶって、こうしたことをむさぼるごとく心に思い浮かべるようになるのである。 PP 239.2

今日、この世界で、クリスチャンと称する人々にさえ人気のある娯楽の多くは、あの異邦人たちを陥れたのと同じ運命に至らせるものである。事実、そのなかで、サタンが魂を滅ぼすために活用しないものは、ほとんどない。サタンは、各時代を通じて、演劇によって情欲を刺激し、悪徳をたたえてきた。サタンは、歌劇の魅惑的表現と心を奪う音楽、ダンス、仮面舞踏会、トランプ遊びなどを用いて、原則の防壁を破り、肉欲にふける道を開くのである。誇りが助長され、欲求がほしいままに満たされるあらゆる快楽の集い、また、神のことを忘れて永遠のことがらを見失わせるあらゆるところで、サタンは、魂を彼のくさりでしばりつけている。 PP 239.3

「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉は、これから流れ出るからである」と賢者は勧告している（箴言 4：23）。人間は、その心に思うとおりの人がらになっていく（箴言 23：7・文語訳参照）。心は天の恵みによって新たにされるのでなければ、生活のきよめを求めても無益である。キリストの恵みとは関係なしに、気高く正しい品性を築こうとする者は、くずれる砂の上に家を建てているのである。それは、激しい誘惑のあらしが襲ってくると、倒れるに決まっている。「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」というダビデの祈りが、すべての魂の祈りでなければならない（詩篇 51：10）。天の賜物を受けてはじめて、われわれは「信仰により神の御力に守られ」ながら完全に向かって進むことができる（Ⅰペテロ 1：5）。 PP 239.4

だが、誘惑に抵抗するためにわれわれにもしなければならないことがある。サタンの策略の犠牲になりたくない者は、魂の道をよく守り、不純な思いを起こさせるものを読んだり、見たり、聞いたりしないようにしなければならない。魂の敵がほのめかしてくることになんのみさかいもなく、心が移ることのないようにしなければならない。使徒ペテロは言っている。「心の腰に帯を締め、身を慎み、……無知であった時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい」（同 1：13～15）。また、パウ

口は言っている。「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」（ピリピ 4：8）。それには真剣に祈り、絶えず目覚めていることが必要であ る。われわれは、心を上に引きつけ、純潔で聖なるものに向けさせる聖霊の変わらない感化力の助けを受けなければならない。そして、神のみことばを勤勉に学ばなければならない。「若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません」「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」と詩篇作者は言っている（詩篇 119：9、11）。 PP 239.5

ベテペオルにおけるイスラエルの罪は民族の上に神の刑罰をもたらした。そして同じ罪が、今はそのようにすみやかに処罰されないかもしれないが、それが報復を受けることはそのときと同じく確実である。「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう」（Ｉコリント 3：17）。自然はこれらの罪に恐ろしい刑罰を与えてきたが、この刑罰は遅かれ早かれ、罪人の一人一人に課せられるものである。人類を恐ろしいまでに退化させ、病と悩みの重荷を世界に負わせているのは、ほかの何にもましてこれらの罪である。自らの罪を人には隠すことができるかもしれないが、しかし、苦痛、病気、虚弱、死などによって、まちがいなくその結果を刈り取るのである。そして、この世のかなたには、永遠の刑罰をもって報いる最後の審判がある。「このようなことを行う者は、神の国をつぐことが」できず、サタンや悪天使たちと一緒に、「第二の死」である「火の池」を受けるであろう（ガラテヤ 5：21、黙示録 20：14）。 PP 240.1

「遊女のくちびるは蜜をしたたらせ、その言葉は油よりもなめらかである。しかしついには、彼女はにがよもぎのように苦く、もろ刃のつるぎのように鋭くなる」「あなたの道を彼女から遠く離し、その家の門に近づいてはならない。おそらくはあなたの誉を他人にわたし、あなたの年を無慈悲な者にわたすに至る。おそらくは他人があなたの資産によって満たされ、あなたの労苦は他人の家に行く。そしてあなたの終りが来て、あなたの身と、からだが滅びるとき、泣き悲し」む。「その家は死に下り、」「すべて

彼女のもとへ行く者は、帰らない」「彼女の客は陰府（よみ）の深みにおる」（箴言5：3、4、8～11、2：18、19、9：18）。 PP 240.2

第 42 章　律法の反復

本章は、申命記 4～6 章、28 章に基づく PP 240.3

主は、カナンを占領するために定められていた時が迫ったことを、モーセにお告げになった。老預言者モーセは、ヨルダン川と約束の地を見おろす高台に立って、深い興味をもって、民の嗣業をながめた。彼がカデシで犯した罪に対する宣告は、取り消すことができるのであろうか。彼は熱心に嘆願した。「主なる神よ、あなたの大いなる事と、あなたの強い手とを、たった今、しもべに示し始められました。天にも地にも、あなたのようなわざをなし、あなたのような力あるわざのできる神が、ほかにありましょうか。どうぞ、わたしにヨルダンを渡って行かせ、その向こう側の良い地、あの良い山地、およびレバノンを見ることのできるようにしてください」（申命記 3：23～25）。 PP 240.4

その答えはこうであった。「おまえはもはや足りている。この事については、重ねてわたしに言ってはならない。おまえはピスガの頂に登り、目をあげて西、北、南、東を望み見よ。おまえはこのヨルダンを渡ることができないからである」（同 3：26、27）。 PP 240.5

つぶやくことなく、モーセは、神のみ旨に従った。そして今、彼の大きな心配はイスラエルのことであった。彼が思ったほどに彼らの幸福を願う人がいたであろうか。彼は、心を尽くして祈りを捧げた。「すべての肉なるものの命の神、主よ、どうぞ、この会衆の上にひとりの人を立て、彼らの前に出入りし、彼らを導き出し、彼らを導き入れる者とし、主の会衆を牧者のない羊のようにしないでください」（民数記 27：16、17）。 PP 240.6

主はご自分のしもべの祈りを聞いて答えられた。「神の霊のやどっているヌンの子ヨシュアを選び、あなたの手をその上におき、彼を祭司エレアザルと全会衆の前に立たせて、彼らの前で職に任じなさい。そして彼にあなたの権威を分け与え、イスラエルの人々の全会衆を彼に従わせなさい」（同 27：18～20）。ヨシュアは長くモーセに仕え

てきた。そして、彼は知恵と能力と信仰の人であったので、彼の後継者として選ばれた。 PP 240.7

モーセの手が置かれるとともに、最も印象的な訓示が与えられて、ヨシュアは厳粛にイスラエルの指導者として聖別された。彼は、また、そのときすぐに統治に参加することを許された。ヨシュアに関する主のことばが、モーセを通して全会衆に与えられた。「彼は祭司エレアザルの前に立ち、エレアザルは彼のためにウリムをもって、主の前に判断を求めなければならない。ヨシュアとイスラエルの人々の全会衆とはエレアザルの言葉に従っていで、エレアザルの言葉に従ってはいらなければならない」（同 27：21）。 PP 241.1

イスラエルの目に見える指導者としての任務を退く前に、モーセは、エジプトからの解放と荒野の旅路との歴史をくり返し、シナイで告げられた律法を概括して教えるように命じられた。このときの会衆の中には、律法が与えられたとき、その光景の恐るべき厳粛さを理解できる年ごろになっていた者はほとんどいなかった。やがてヨルダンを渡って約束の地を占有しようとしているこの時に当たって、神は、彼らの前にご自分の律法の要求するところを示し、繁栄の条件として彼らに従順を求められるのであった。 PP 241.2

モーセは、最後の警告と勧告を与えようとして民の前に立った。その顔は聖なる光に輝いていた。髪は年を刻んで白かったが、姿勢は直立、顔色は壮健そのもの、目は澄んで曇りがなかった。それはおごそかなひとときであった。彼は深い感動をこめて、全能なる守護者の愛とあわれみを描き出した。 PP 241.3

「試みにあなたの前に過ぎ去った日について問え。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの端から、かの端までに、かつてこのように大いなる事があったであろうか。このようなことを聞いたことがあったであろうか。火の中から語られる神の声をあなたが聞いたように、聞いてなお生きていた民がかつてあったであろうか。あるいはまた、あなたがたの神、主がエジプトにおいて、あなたがたの目の前に、あなたがたのためにもろもろの事をなされたように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、強い手と、伸ばした腕と、大いなる恐るべき事とをもって臨み、1 つの国民を他の国民のう

ちから引き出して、自分の民とされた神が、かつてあったであろうか。あなたにこの事を示したのは、主こそ神であって、ほかに神のないことを知らせるためであった」（申命記 4：32～35）。 PP 241.4

「主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もっとも数の少ないものであった。ただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及」ぶことを（同 7：7～9）。 PP 241.5

イスラエルの民は、自分たちの悩みをいつもモーセのせいにしてきたが、今は、モーセが自負と野心と利己心に支配されているという疑いも晴れ、信頼に満ちて彼のことばを聞いた。モーセは、彼らのあやまちと、彼らの父祖の罪をありのままに述べた。彼らは長い荒野の流浪のために、たびたび忍耐しきれず反抗してきた。しかしカナンの占領が遅れたことの責めは主にはなかった。むしろ主は、すぐにも約束の地を彼らに占領させて、神の民を解放する彼の大きな力を万国民の前に現すことができないことを、彼らよりももっと深く悲しまれた。彼らは自負心と不信仰のゆえに、神を信頼せず、カナンに入る備えができていなかった。彼らは、神を主とする民を少しもあらわそうとしなかった。つまり、彼らは神のご性格である純潔と善良と慈愛とを身につけていなかったのである。彼らの父祖たちが信仰をもって神の命令に従い、 そのおきてに統治され、その定めに従って歩いていたならば、彼らはずっと以前にカナンに定着し、繁栄した、清い幸福な民族となっていたはずであった。良い地に入るのが遅れたために、周囲の諸民族の前で、神の名誉は傷つけられ、神の栄光は汚されたのである。 PP 241.6

神の律法の性格と価値を理解していたモーセは、ヘブル人に与えられたような知恵と正義とあわれみに満ちた律法を持っている国家はほかにないことを民に保証した。彼は言った。「わたしはわたしの神、主が命じられたとおりに、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたがはいって、自分のものとする地において、そのように

行うためである。あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」（同４：5、6）。 PP 242.1

モーセは彼らの注意を、「あなたがホレブにおいて、あなたの神、主の前に立った日」に向けた。そして、彼はヘブルの民に訴えた。「いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。また、いずれの大いなる国民に、今日、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか」（同４：10、7、8）。今日、イスラエルに対して言われたこの訴えがくり返されてよい。神が昔の民にお与えになった法律は、世界の文明諸国の法律よりは、はるかに知恵深く、優秀でより人道的であった。諸国の法律は、新しくされていない心のもつ弱点と、激しい感情を表示している。しかし、神のおきては天の刻印を帯びている。 PP 242.2

「主はあなたがたを取って、鉄の炉すなわちエジプトから導き出し、自分の所有の民とされた」とモーセは言った（同４：20）。彼らが間もなく入ろうとしている地、すなわち、神の律法に従うことを条件として、彼らのものになる土地が、次のように描写された。ところが、よい地の祝福を情熱をこめて描いたモーセが、神の民の罪のために、彼らの嗣業を受けることができなくなっているのを思い出して、イスラエルの人々は、こうした言葉を、どんなに感慨深く聞いたことであろう。 PP 242.3

「あなたの神、主があなたを良い地に導き入れられる」「あなたがたが行って取ろうとする地は、あなたがたが出てきたエジプトの地のようではない。あそこでは、青物畑でするように、あなたがたは種をまき、足でそれに水を注いだ。しかし、あなたがたが渡って行って取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨で潤っている」「そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、および渕のある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びざくろのある地、油のオリブの木、および蜜のある地、あなたが食べる食物に欠けることなく、なんの乏しいこともない地である。その地の石は鉄であって、その山からは銅を掘り取ることができる」「その地は、あなたの神、主が顧みられる所で、年の始

めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常にその上にある」（申命記 8：7～9、11：10～12）。 PP 242.4

「あなたの神、主は、あなたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに向かって、あなたに与えると誓われた地に、あなたをはいらせられる時、あなたが建てたものでない大きな美しい町々を得させ、あなたが満たしたものでないもろもろの良い物を満たした家を得させ、あなたが掘ったものでない掘り井戸を得させ、あなたが植えたものでないぶどう畑とオリブの畑とを得させられるであろう。あなたは食べて飽きるであろう。その時、あなたはみずから慎み、……主を忘れてはならない」「あなたがたは慎み、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れて……はならない。あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である」。主の前に悪を行うのであれば、そのとき、「あなたがたはヨルダンを渡って行って獲る地から、たちまち全滅するであろう」とモーセは言った（同 6：10～12、4：23、24、26）。 PP 242.5

律法を公に復唱したのち、モーセは神がお与えになったすべてのおきてと、定めと、さとしと、そして犠牲制度に関するすべての規定とを書き終えた。これをしるした書物は、係りの者にあずけられ、あかしの 箱の横に保管された。それでもなお、モーセは、民が神から離れはしないかと恐れた。彼はおごそかに、従順を条件として与えられる祝福と、みことばに従わない場合にくだるのろいとを彼らに示した。 PP 242.6

「もしあなたが、あなたの神、主の声によく聞き従い、わたしが、きょう、命じるすべての戒めを守り行うならば……あなたは町の内でも祝福され、畑でも祝福されるであろう。またあなたの身から生れるもの、地に産する物、家畜の産むもの……は祝福されるであろう。またあなたのかごと、こねばちは祝福されるであろう。あなたは、はいるにも祝福され、出るにも祝福されるであろう。敵が起ってあなたを攻める時は、主はあなたにそれを撃ち敗らせられるであろう。……主は命じて祝福をあなたの倉と、あなたの手のすべてのわざにくだ……されるであろう」（同 28：1～8）。 PP 243.1

「しかし、あなたの神、主の声に聞き従わず、きょう、わたしが命じるすべての戒めと定めとを守り行わないならば、このもろもろののろいがあなたに臨（む）……であろう」「あなたは主があなたを追いやられるもろもろの民のなかで驚きとなり、ことわ

ざとなり、笑い草となるであろう」「主は地のこのはてから、かのはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであろう。その国々の民のうちであなたは安きを得ず、また足の裏を休める所も得られないであろう。主はその所で、あなたの心をおののかせ、目を衰えさせ、精神を打ちしおれさせられるであろう。あなたの命は細い糸にかかっているようになり、夜昼恐れおののいて、その命もおぼつかなく思うであろう。あなたが心にいだく恐れと、目に見るものによって、朝には『ああ夕であればよいのに』と言い、夕には「ああ朝であればよいのに」と言うであろう」（同 28：15、37、64～67）。 PP 243.2

霊感によって、モーセは各時代を見通し、国家としてのイスラエルの最後の破滅と、ローマ軍によるエルサレム滅亡の恐るべき光景を描いた。「主は遠い所から、地のはてから 1 つの民を、はげたかが飛びかけるように、あなたに攻めきたらせられるであろう。これはあなたがその言葉を知らない民、顔の恐ろしい民であって、彼らは老人の身を顧みず、幼い者をあわれま」ない（同 28：49、50）。 PP 243.3

ずっとあとでエルサレムが、ローマ皇帝ティトゥスに包囲されたときの国土の荒廃と国民の苦悩がなまなましく描写された。「これは、……あなたの家畜が産むものや、地の産物を食って、……ついにあなたを全く滅ぼすであろう。その民は全国ですべての町を攻め囲み、ついにあなたが頼みとする、堅固な高い石がきをことごとく撃ちくず（す）……であろう。あなたは敵に囲まれ、激しく攻めなやまされて、ついにあなたの神、主が賜わったあなたの身から生れた者、むすこ、娘の肉を食べるに至るであろう」「またあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分のふところの夫や、むすこ、娘にもかくして、……自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである」（同 28：49～53、56、57）。 PP 243.4

モーセは次のような感銘深い言葉で訓示を閉じた。「わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの

前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができ、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に住むことができるであろう」（同 30：19、20）。 PP 243.5

これらの真理をすべての人の心にさらに深く刻むために、モーセはこれを韻文の形で表現した（同 32 章参照）。この歌は歴史的であるばかりでなく、預言的でもあった。それは、過去において、神がご自分の民にとられた驚くべき態度を回顧すると共に、未来の大いなる出来事、キリストが力と栄光のうちに 2 度目においでになるときの忠実な者の最終的な勝利を予 表していた。民はこの詩にうたわれた歴史を暗唱し、それを子や孫にまで教えるように命じられた。それは礼拝に集まった会衆によってうたわれ、人々が日常の仕事にとりかかる時にくり返されることになった。物覚えのよい子供の頭にこの言葉を刻み込んで、決して忘れないようにすることが親の務めであった。 PP 243.6

イスラエル人は特別な意味で神の律法の守護者、保管者となるのであるから、とりわけその戒めの意義と服従の重要さが彼らに教えられなければならなかった。また、彼らを通してその子や孫にまで教えられなければならなかった。主は、ご自分の定めについてこう命じられた。「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。……またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」（同 6：7～9）。 PP 244.1

「われわれの神、主があなたがたに命じられたこのあかしと、定めと、おきてとは、なんのためですか」（同 6：20）と子供たちが問う時が来たなら、親は、歴史にあらわされた神の恵みあるとりあつかい、すなわち彼らが、主の律法に従うことができるように、彼らをどのように解放してくださったかを述べ、彼らにこう告げなければならなかった。「主はこのすべての定めを行えと、われわれに命じられた。これはわれわれの神、主を恐れて、われわれが、つねにさいわいであり、また今日のように、主がわれわ

れを守って命を保たせるためである。もしわれわれが、命じられたとおりに、このすべての命令をわれわれの神、主の前に守って行うならば、それはわれわれの義となるであろう」（同 6：24、25）。 PP 244.2

第 43 章　モーセの死

本章は、申命記 31～34 章に基づく PP 244.3

神が、神の民をあっかわれる時は、いつでも、そこに神の愛と憐れみとともに、神の厳正公平な正義が混じっているものである。それが、ヘブル人の歴史のなかで実証されている。神は、イスラエルに大きな祝福をお与えになっていた。彼らに対する神のいつくしみが、感動的に描かれている。「わしがその巣のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれ」た（申命記 32：11、12）。だが、彼らの罪に対しては、なんとすみやかできびしい報復が臨んだことであろう。 PP 244.4

神の無限の愛は、失われた人類をあがなうために、ひとり子を賜わったことに示されている。キリストは父のご品性を人にあらわすために地上においでになったのであり、その生涯は天来の柔和と同情に満ちていた。しかし、キリストご自身が、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされる」と仰せになる（マタイ 5：18）。みもとに来て、ゆるしと平安を得るようにと忍耐強く愛情をもって罪人を招く同じ声が、審判に当たっては、ご自分のいつくしみを退ける者に、「のろわれた者どもよ、わたしを離れ」よ、とお命じになる（同 25：41）。聖書全体を通して、神はやさしい父であるばかりでなく、公正な審判者としてあらわされている。神は喜んで憐れみを示し、「悪と、とがと、罪とをゆるす」が、しかし、「罰すべき者をば決してゆるさ」ないお方である（出エジプト 34：7）。 PP 244.5

諸国の偉大な統治者であられる神は、モーセがイスラエルの会衆を良い地に導き入れることはできないと言明しておられた。そして、モーセの熱心な願いもこの宣告を取り消すことはできなかった。彼は、自分が死ななければならないことを知っていた。しかし、彼は、一瞬でもイスラエルの世話をやめなかった。彼は、会衆を約束の地に入れる準備を忠実に果たしてきた。モーセとヨシュアは、神の命に従って、幕屋に行った。すると、雲の柱がその入口の上に立った。ここで民は、おごそかにヨシュアの監督に委

ねられた。イスラエルの指導者としてのモーセの務めは終わっ た。それでもなお、彼は自分を忘れて民のことを思っていた。集まった群衆の中で、モーセは神の名により、後継者ヨシュアにこう語って励ました。「あなたはイスラエルの人々をわたしが彼らに誓った地に導き入れなければならない。それゆえ強くかつ勇ましくあれ。わたしはあなたと共にいるであろう」（申命記 31：23）。それから、彼は、民の長老たちや役人たちに向きなおり、彼が神から受けて彼らに伝えた教えに忠実に従うようにという厳粛な訓示を与えた。 PP 244.6

まもなく彼らの間から取り去られねばならない年老いたモーセを人々が見つめたとき、彼らは、新たに深い感謝にあふれ、彼の父親のようなやさしさ、賢明な勧告、疲れをいとわない労苦を思い起こした。彼らの罪が、神の公正な審判を招いたとき、彼らはモーセのとりなしによって救われたことが幾たびあったことであろう。彼らは心を責められて悲嘆にくれた。自分たちのかたくなな思いがモーセに罪を犯させ、そのために彼が死ななければならなくなったことを思い起こして、彼らの心は痛んだ。 PP 245.1

モーセの命と彼の務めが、なおも続いて、彼から人々が譴責されることよりも、この愛する指導者が取り去られることのほうが、イスラエルにとっては、さらに大きな譴責であった。彼らが、モーセの生涯を苦しいものにしたように、将来の指導者の生涯は苦しいものにすまいという自覚を、彼らに持たせることを神は望まれた。神は、祝福を与えて、民に語られた。そして、それが感謝して受け入れられないと、その祝福を取り去って、彼らが自分たちの罪をさとり、心から神に立ち帰るように導かれる。 PP 245.2

その当日、モーセは次のような命を受けた。「あなたは……ネボ山に登り、わたしがイスラエルの人々に与えて獲させるカナンの地を見渡せ。あなたは登って行くその山で死に、あなたの民に連なるであろう」（同 32：49、50）。モーセはそれまで、たびたび天の招きに従って宿営を離れて神と交わったことがあった。しかし彼は今、新しい神秘的な旅に出ようとしていた。彼は出かけて行って、自分の命を創造主の手に委ねなければならなかった。モーセはただ 1 人で死に、地上の友はだれも彼の最後を見とるのを許されないことを知っていた。前途には神秘と恐れが横たわり、それを思って彼の

心はひるんだ。何よりもつらいのは、彼が保護し、愛してきた民、長い間彼の関心と生命とが結びついていた民と別れなければならないことであった。だが、彼は、神に信頼することを学んでいた。彼は、自分と自分の民とを疑うことなく神の愛と憐れみに委ねた。 PP 245.3

モーセが民の集まりの中に立つのはこれが最後であった。神の霊がふたたび彼に宿り、彼は最も崇高で、感動的な言葉で各部族に祝福を宣言し、次のような言葉ですべてを祝福して終わった。 PP 245.4

「エシュルンよ、神に並ぶ者はほかにない。 PP 245.5

あなたを助けるために天に乗り、 PP 245.6

威光をもって空を通られる。 PP 245.7

とこしえにいます神はあなたのすみかであり、 PP 245.8

下には永遠の腕がある。 PP 245.9

敵をあなたの前から追い払って、 PP 245.10

『滅ぼせ』と言われた。 PP 245.11

イスラエルは安らかに住み、 PP 245.12

ヤコブの泉は穀物とぶどう酒の地に、 PP 245.13

ひとりいるであろう。 PP 245.14

また天は露をくだすであろう。 PP 245.15

イスラエルよ、あなたはしあわせである。 PP 245.16

だれがあなたのように、 PP 245.17

主に救われた民があるであろうか。 PP 245.18

主はあなたを助ける盾」 PP 245.19

（同 33：26～29） PP 245.20

モーセは会衆をあとに、黙々とただ 1 人山を登った。彼は「ネボ山に登り、……ピスガの頂へ行った」（同 34：1）。彼はその寂しい山頂に立ち、くもりのない目で前方に開けた光景をながめた。遠く西には地中海の青い水が見え、北にヘルモン山が空に

そびえ、東にモアブの高原と、その先にはイスラエルの勝利の地バシャンが広がり、南には遠く長く旅を続けてきた荒野が続いていた。 PP 245.21

モーセは、ただ 1 人で神の民と運命を共にするために、エジプトの宮廷の栄誉と将来の王位を捨てたときから始まった、彼の人生の変転と辛苦をふり返った。長年にわたり荒野でエテロの羊を飼ったこと、燃えるしばの中に天使が現れたこと、また、彼がイスラエルを解放するように召されたことを思い起こした。 PP 246.1

彼はまた、選民のためにあらわされたみ力の奇跡と、放浪と反抗の年月を導かれた神の忍耐と憐れみに思いをはせた。神がこうして彼らに尽くしてこられたにもかかわらず、そして、また、彼が祈りと労苦を重ねてきたにもかかわらず、エジプトを出た大群集の成人のうち、忠実であって約束の地に入ることのできたのはたった 2 人しかいなかった。自分の労苦の結果をふりかえったとき、彼の試練と犠牲の生涯はほとんど徒労であったように思われた。 PP 246.2

だが、彼は重荷を負ってきたことを悔いなかった。彼は、自分の任務と仕事は、神ご自身がお定めになったものであることを知っていた。はじめイスラエルを奴隷の境遇から導き出す者となるように召されたとき、彼はその責任からしりごみしたが、ひとたび任務についた以上は、その重荷を投げ捨てなかった。彼を解放し、反抗的なイスラエルを滅ぼそうと主が言われた時にも、モーセは同意することができなかった。彼の試練は大きかったが、彼には特別な神の恵みのしるしが与えられていた。彼は荒野の旅のあいだに神の力と栄光の現れを目撃し、その愛の交わりに豊かにあずかってきた。彼は、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に苦しむことを選んだのは賢明な決断であったと思った。 PP 246.3

神の民の指導者としての自分の生涯をふりかえってみると、1 つの誤った行為がその記録を傷つけていた。もしあの罪が消されるものなら、死も恐ろしくないと彼は思った。彼は、悔い改めと、約束のいけにえに対する信仰こそ、神のお求めになるすべてであるという確証が与えられた。そして、モーセは、ふたたび自分の罪を告白し、イエスの名によって赦しを願った。 PP 246.4

やがて約束の地のパノラマが彼の目に展開された。国土のすみずみが、彼の前にひろがった。それは遠くの不明瞭な光景ではなく、喜びにあふれた彼の目に、はっきりと美しく浮き出たのである。このながめは、その当時にあったままのものが見えたのではなく、それがイスラエルの領土となり、神の祝福のもとに将来どうなるかという光景であった。彼は第二のエデンを見ているようであった。山々はレバノンの杉でおおわれ、丘はオリブの木にいろどられ、ぶどうのかおりを放っていた。広い緑の平野には花が咲いて豊かに実り、ここには熱帯のしゅろの木が繁り、むこうには小麦、大麦が波立ち、日の当たる谷間では流れがささやき、小鳥がうたっていた、美しい町とみごとな庭園が趣をそえ、湖水は「海の富」（同 33：19）にあふれ、丘では羊が草をはみ、岩間にさえはちみつのしたたりがあった。それは神の霊に動かされて、かつてモーセが描き出した国土であった。「どうぞ主が……祝福されるように。上なる天の賜物と露、下に横たわる淵の賜物、日によって産する尊い賜物、……いにしえの山々の産する賜物、……地とそれに満ちる尊い賜物……が……くだるように」（同 33：13～16）。 PP 246.5

モーセは、選民がカナンに定着し、各部族がそれぞれの所有を与えられるのを見た。彼は、約束の地に定住した後の彼らの歴史を見た。彼らの背教と刑罰の長い悲しい物語が彼の目の前にひろがった。罪のために彼らが異邦人のあいだに散らされ、栄光がイスラエルを離れ、美しい都市が廃虚となり、民が異国に捕らえられて行くのを見た。また、彼らが先祖の国に帰還し、ついにはローマの支配下に置かれるのを見た。 PP 246.6

彼は時の流れをくだって、われらの救い主の初臨を見ることを許された。彼はベツレヘムの幼子イエスを見た。天使の大群が、神には栄光、地には平和と賛美して喜びうたう声を聞いた。彼は東方の博士をイエスのもとに導いた星を天に見た。そして、「ヤコブから 1 つの星が出、イスラエルから 1 本のつえが起」る（民数記 24：17）という預言のことばを思い出して、彼の心は大いなる光でみなぎりあふれた。 彼は、キリストが、ナザレで質素な生活を送り、愛と同情と癒しの奉仕をされたあとで、高慢で不信仰なユダヤ民族から拒否されるのを見た。彼は、彼らが神の律法を誇らかに高めながら、その律法をお与えになったかたをさげすみ退けるのを驚いて聞き入った。彼は、オリブ山で愛する都に涙の別れを告げられるイエスを見た。神から大きな祝福を受けた民、す

なわち、彼が労苦と祈りと犠牲をはらい、彼らのためなら自分の名がいのちの書から消されるのもいとわなかった民が最後的に退けられるのを見、「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」（マタイ 23：38）という恐るべきことばを聞いたとき、モーセの心は苦悩にうめき、神のみ子の悲しみをしのんで悲嘆の涙があふれ落ちた。 PP 246.7

彼は、ゲッセマネまで救い主につき従い、園の中の苦悶、裏切り、嘲笑、むち打ち――そして十字架を見た。モーセは、ちょうど自分が荒野でへびをあげたように、信じる者が「すべて永遠の命を得るため」に、神の子もあげられなければならないことを知った（ヨハネ 3：15）。ユダヤ民族が、彼らの贖い主、父祖たちの偉大な指導者であったみ使いに対し、偽善と悪魔的な憎しみを示すのを見て、モーセの心は悲嘆と、義憤と、戦慄をおぼえた。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」というキリストの苦悩の叫びを彼は聞いた（マルコ 15：34）。ヨセフの新しい墓に横たえられたキリストを彼は見た。どうすることもできない絶望の暗やみが世界を包んだように思われた。しかし、彼がふたたび目をあげると、キリストは勝利者として現れ、大勢のとりこを引き連れ、賛美の歌をうたう天使たちを従えて、昇天なさるのが見えた。光り輝く門が開かれ、天の万軍が凱旋の歌声高らかに彼らの司令官を迎えるのを、彼らは見た。そして、彼自身は、そこで救い主に従い、とこしえの門を開いて、キリストを迎える者になることが示された。その情景をながめるにつれて彼の顔は清い輝きを帯びてきた。神のみ子に比べるならば、彼の生涯の試練と犠牲はなんと小さく見えたことであろう。そして「永遠の重い栄光」と比べてなんと軽く見えたことであろう（Ⅱコリント 4：17）。彼は、ほんのわずかであるとはいえ、キリストの苦難にあずかる者とされたことを喜んだ。 PP 247.1

モーセは、イエスの弟子たちが出て行って、全世界に福音を伝えるのを見た。「肉による」イスラエルの民は、神から召されていた高い召しに応えることができず、不信仰のために世の光となり得なかった。また、彼らは神の憐れみを軽んじ、選民としての祝福を失ってしまった。しかし、神は、アブラハムの子孫をお捨てにならず、イスラエルを通して果たそうとなさった輝かしいみ旨が実現されることを彼は知った。キリスト

を通して、信仰の子となる者はみな、アブラハムの子孫に数えられるのであった。彼らは契約の約束を継ぐ者であった。彼らはアブラハムのように、神の律法と、み子の福音を守り、これを世に知らせる務めに召された。福音の光が、イエスの弟子たちを通して、「暗黒の中に住んでいる」（マタイ４：16）人々に輝き、異邦の国から幾千の人々がそののぼる輝きに集まってくるのをモーセは見た。彼はこれを見て、イスラエルの数が増加し、繁栄するのを喜んだ。 PP 247.2

次に、もう１つの光景が彼の前を通り過ぎた。彼は、先に、ユダヤ人が天父の律法をあがめると言いながら、キリストを拒絶するように導いたサタンのわざを示されていたが、今度はキリスト教界が、キリストを信じると言いながら、神の律法を拒絶するという同様な惑わしに陥るのを見た。彼は、祭司たちや長老たちが、「イエスを殺せ」「十字架につけよ」と狂い叫ぶのを聞いていたが、今度は、キリスト教の教師と自称する者たちが「律法を廃止せよ」と叫ぶのを聞いた。安息日が足の下に踏みつけられ、それに代わってにせの制度が確立されるのを彼は見た。ふたたびモーセは驚愕と戦慄に満たされた。キリストを信じる者が、聖なる山で主ご自身がお告げになった律法を、どうして拒むことができるのであろう。神を恐れる者が、天と地の統治の基礎である律法をどうして退けることができるのであろう。しかしモーセは、神の律法を尊びあがめる忠実な者たちが少数ながらいることを知って喜んだ。彼は、地上の諸勢力が神の律法 を守る者たちを滅ぼそうとする最後の大いなる戦いを見た。彼はさらに、その先に目を向けて、神が立ち上がり、罪を犯した地の住民を罰するのを望み見ると共に、み名を恐れる者たちは、その怒りの日におおいかくされるのを知った。神が、その「聖なるすみか」から語り、天と地を震わせて、律法を守った者たちと平和の契約を結ばれるのを彼は聞いた。栄光のうちにキリストが再臨し死んだ義人が不朽のいのちによみがえり、生きている聖徒は死を見ないで天に移され、喜びの歌をうたいながら共に神の都にのぼるのを彼は見た。 PP 247.3

さらに、もう １ つの光景が彼の眼前に展開される。それは、のろいのなくなった地、今しがた彼の前にひろげられた美しい約束の地よりなお美しくなった地である。そこには、罪はなく、死も侵入することができない。救われた諸民族は、そこに永遠の故郷を

見いだす。言葉に言い尽くせない喜びをもって、モーセはこの情景をながめる。それは、彼のどんな輝かしい想像も及ばぬ栄光に満ちた解放の実現である。地上の放浪は永久に終わり、神のイスラエルは、ついに良い地に入ったのであった。 PP 248.1

ふたたび幻は消え、彼の目は遠くにひろがるカナンの地を見た。そして疲れ果てた戦士のように、彼は横たわって休んだ。「こうして主のしもべモーセは主の言葉のとおりにモアブの地で死んだ。主は彼をベテペオルに対するモアブの地の谷に葬られたが、今日までその墓を知る人はない」（申命記 34：5、6）。モーセの在世中、彼の勧告に聞き従おうとしなかった多くの者は、もし彼の埋葬の場所を知ったならば、彼の遺体を偶像礼拝の対象とする危険があった。このために、それは人々から隠されたのであった。しかし神の使いたちが、この忠実なしもべのなきがらを埋葬し、さびしい墓を見守っていた。 PP 248.2

「イスラエルには、こののちモーセのような預言者は起らなかった。モーセは主が顔を合わせて知られた者であった。主は……彼を……つかわして、もろもろのしるしと不思議を行わせられた。モーセはイスラエルのすべての人の前で大いなる力をあらわし、大いなる恐るべき事をおこなった」（申命記 34：10～12）。 PP 248.3

もし、モーセの生涯が、カデシの岩から水を出す誉れを神に帰さなかったあの 1 つの罪で傷ついていなかったならば、彼は約束の地に入り、死を見ずに天に移されたことであろう。けれども、彼は長く墓の中にとどまらなかった。モーセを埋葬したみ使いたちを従えて、キリストご自身が天からおりてこられ、眠りについた聖徒を呼び起こされるのであった。サタンは、モーセに罪を犯させ、彼を死の支配下に置くことができたのを大いに喜んでいた。サタンは、「あなたは、ちりだから、ちりに帰る」という神の宣告どおり、死者は自分のものだと主張した（創世記 3：19）。墓の力は、かつて、打ち破られたことがなく、墓の中に入れられた者はみな自分のとりこであって、その暗い牢獄から解放することができない、と彼は主張した。 PP 248.4

このときはじめて、キリストは、死者に命を与えようとしておられた。いのちの君と輝く天使たちが墓に近づくと、サタンは自分の主権が脅かされるのを感じた。彼は悪天使たちと共に、自分のものと主張する領域を犯されまいとして抵抗した。サタンは、

神のしもべが彼の牢獄に入れられたことを誇った。モーセでさえ、神の律法を守ることができず、主に帰すべき栄光を自分に帰し、サタンが天から追放されるに至ったのと全く同じ罪を犯して、そのために自分の支配下に置かれたのであるとサタンは言った。この反逆者の首領は、彼がかつて神の統治に対して投げた最初の非難をくり返し、彼に対する神の不正をつぶやいた。 PP 248.5

キリストは、サタンと論争しようとはされなかった。キリストは、惑わしによって多数の天の住民を滅ぼした残忍な彼のしうちを非難することがおできであった。また、アダムを罪に誘い、人類に死をもたらしたエデンの欺瞞を指摘することもおできになった。あるいは、イスラエルをいざない、不平と反抗にかり立てて、モーセの寛容と忍耐の緒を切らせ、無防備の一瞬をついて罪を犯させ、死の力のもとに陥れたことをサタンに思い起こさせることもおできになった。だ が、キリストはすべてを天父に委ね、「主がおまえを戒めて下さるように」と仰せになった（ユダ 9）。キリストはサタンと論じられなかったが、そのときその場で、この堕落した敵の力を打ち破り、死者を生き返らせるみわざをお始めになった。ここに、サタンの言い争うことのできない神のみ子の権威が現された。永遠に復活が確かなものとされた。サタンは自分のとりこを奪われ、死んだ義人はふたたび生きることとなった。 PP 248.6

罪の結果、モーセはサタンの権力のもとに置かれていた。彼自身の功績によっては、彼は当然死の捕虜であった。だが彼は、贖い主のみ名の権威によって、永遠の命によみがえった。モーセは、栄光の体で墓から現れ出て、救い主と共に神の都にのぼった。 PP 249.1

キリストの犠牲によって実証されるまで、モーセをあつかわれた神の方法ほどに、著しく神の正義と愛をあらわしたものはほかになかった。神は、忘れてならない教訓、すなわち、神は厳密な従順をお求めになるということ、また、人は創造主に帰すべき栄光を自分に帰してはならないということを教えるために、モーセをカナンから締め出された。神は、イスラエルの嗣業にあずからせてほしいというモーセの祈りを受け入れることがおできにならなかった。しかし彼は、ご自分のしもべを忘れたり、捨てたりなさらなかった。天の神は、モーセが耐えてきた苦悩を理解し、争闘と試練の長い年月を忠

実に仕えてきた１つ１つの行為をご存じであった。神は、ピスガの頂上で、地上のカナンとは比較にならないほど輝かしい嗣業にモーセをお召しになったのであった。 PP 249.2

モーセは、天に移されたエリヤと共に変貌の山に現れた。彼らは、天父からみ子に光と栄光を伝えるためにつかわされた。こうして幾世紀も前に捧げられたモーセの祈りがついに果たされた、彼は、神の民の嗣業の中にある「良い山地」に立ち、イスラエルの約束がことごとく集中しているおかたについてあかしをした（申命記３：25）。天の神に尊ばれたモーセが、歴史において、人間の目の前に現れたのはこれが最後である。 PP 249.3

モーセはキリストの型であった。彼は、自らイスラエルに告げていた。「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」（同 18：15）。イスラエルの群集を地上のカナンに導く準備をさせるために、神は、モーセを苦難と困窮の学校で訓練するのをよしとされた。天のカナンに向かう神のイスラエルには、天来の指導者としての務めを果たすのに、人間の教えを必要としない指揮官がおられる。だが、その彼も苦難を通して全うされ、こうして、「主ご自身、試錬を受けて苦しまれたからこそ、試錬の中にある者たちを助けることができるのである」（ヘブル２：18）。われらの贖い主は、１つとして人間的弱さや欠陥を表されなかったが、われわれが約束の地に入ることができるために、死なれたのであった。 PP 249.4

「さて、モーセは、後に語らるべき事がらについてあかしをするために、仕える者として、神の家の全体に対して忠実であったが、キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神の家なのである」（同３：5、6）。 PP 249.5

第 44 章　ヨルダン川を渡って

本章は、ヨシュア記 1～4 章、5：1～12 に基づく PP 249.6

イスラエル人は、モーセの死を深く悲しみ、30 日の間彼を記念して特別の式を行った。彼らは、彼が取り去られるまでは、彼の賢明な勧告、父親のような柔和、不動の信仰などを十分に理解することはできなかった。彼らは、改めて深い感謝をあらわして、彼の生前の尊い教訓を思い起こした。 PP 249.7

モーセは死んだ。しかし、彼の感化力も共に死んだのではなかった。それは、生き続けて民の心に再現されるのであった。あの聖なる無我の生活は、長く人の心におぼえられ、生前彼の言葉をないがしろにした人々の生活までも形造る無言の説得力を持っていた。太陽が沈んだ後も長く落日の輝きが山頂を照らすように、純粋な人、聖潔な人、善良な人の行為はその人が去った後も長く世に光を投げ続ける。彼らの行為、彼らの言葉、彼らの模範は永久に生きる。「正しい人は……とこしえに覚えられる」（詩篇 112：6）。 PP 250.1

彼らは、大きな損失をこうむったことを悲しんだが、そのまま放任されてはいないことを知っていた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が幕屋の上に宿り、彼らが神の戒めに従って歩くなら、神は依然として彼らの導き手であり助け手であることを確証していた。 PP 250.2

今や、ヨシュアがイスラエルの指導者として認められた。彼は、これまで、主として軍人として知られてきており、その才能と人がらは、民の歴史のこの段階において、特に価値の高いものであった。彼は、勇気と決断力にすぐれ、忍耐強く、敏活、清廉で、自分にゆだねられた者たちを自分を忘れて世話し、とりわけ神に対する生きた信仰に動かされていた。これが、約束の地にはいるに際して、イスラエルの軍勢を指揮するように神から選ばれた人の特質であった。荒野を旅した間、彼はモーセに仕える首相として行動し、その静かで二心のない誠実と、他の人々が動揺したときにも堅く立ち、危険のさなかにあって真理を維持しようとした信念の強さによって、神のみ声によってその地

位に召される以前でさえ、すでにモーセの後継者としてふさわしいことが明らかであった。 PP 250.3

ヨシュアは、彼の前にある仕事のことを考えた時に、大きな不安と自己に対する不信感をいだいたのであるが、神からの保証が与えられて、恐怖が取り除かれた。「わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共におるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。……あなたはこの民に、わたしが彼らに与えると、その先祖たちに誓った地を獲させなければならない」「あなたがたが、足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう」（ヨシュア 1：5、6、3）。はるか遠くのレバノンの高地まで、また、地中海の岸辺まで、そして、東はユフラテ川の岸辺まで、そのすべてが彼らのものとなるのであった。 PP 250.4

この約束に命令が加えられた。「ただ強く、また雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法をことごとく守って……行わなければならない」、主はまた言われた。「この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い」「これを離れて右にも左にも曲ってはならない」「そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう」（同 1：7、8）。 PP 250.5

イスラエル人は、まだ、ヨルダン川の東がわに宿営していたが、このヨルダン川がカナン占領の最初の障害であった。神はまず、ヨシュアに、「あなたと、このすべての民とは、共に立って、このヨルダンを渡り、わたしが……与える地に行きなさい」と命じられた（同 1：2）。どのようにして渡るのかは、何も指示が与えられなかったが、ヨシュアは、神が何をお命じになろうとも、神の民がそれを果たすことができる道を開いてくださることを知っていた。この勇敢な指導者は、信仰をもって、直ちに前進の手配を始めた。 PP 250.6

川の数マイル向こう側で、イスラエル人が宿営している場所のちょうど反対のところに、強大な要塞都市エリコがあった。この都市は、事実上全土を攻め取るかぎであり、イスラエルの勝利の前に立ちはだかる、侮りがたい障害であった。そこで、ヨシュアは、2 人の若者をつかわして町を偵察させ、その住民の数や、資源、また要塞の強固さなどを確かめさせた。恐怖と疑惑をいだいた町の住民は、常に警戒体制をとっていたので、

2 人の使者は大きな危険にさらされた。しかし、エリコの女ラハブが、自分の命の危険もかえりみず、彼らをかくまってくれた。彼女の心づくしに報いて、2 人は町を攻め取るときに彼女を保護することを約束した。 PP 250.7

2 人は偵察から無事に帰り、「ほんとうに主はこ の国をことごとくわれわれの手にお与えになりました。この国の住民はみなわれわれの前に震えおののいています」と報告した（同 2：24）。エリコで 2 人は、こう言われてきた。「あなたがたがエジプトから出てこられた時、主があなたがたの前で紅海の水を干されたこと、およびあなたがたが、ヨルダンの向こう側にいたアモリびとのふたりのモシホンとオグにされたこと、すなわちふたりを、全滅されたことを、わたしたちは聞いたからです。わたしたちはそれを聞くと、心は消え、あなたがたのゆえに人々は全く勇気を失ってしまいました。あなたがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられるからです」（同 2：10、11）。 PP 250.8

今や前進の準備をととのえるようにという命令がくだされた。民は 3 日分の糧食を用意し、軍勢は戦闘の用意をしなければならなかった。すべての者がヨシュアの計画を心から受け入れ、信頼と支援を誓った。「あなたがわれわれに命じられたことをみな行います。あなたがつかわされる所へは、どこへでも行きます。われわれはすべてのことをモーセに聞き従ったように、あなたに聞き従います。ただ、どうぞ、あなたの神、主がモーセと共におられたように、あなたと共におられますように」（同 1：16、17）。 PP 251.1

シッテムのアカシヤの森の宿営をあとに、全軍は、ヨルダン川の岸にくだった。しかし、神の助けがなければとうてい渡る望みのないことが、だれにもわかっていた。その季節、すなわち春には山々の雪が溶けてヨルダンの水位を上げ、水は堤にまであふれて、いつもの浅瀬を歩いて渡ることは不可能であった。神は、イスラエルのヨルダン川を渡ることが奇跡的に行われることを意図なさった。ヨシュアは神の指令に従って、人々に自分たちを清めるように命じた。彼らは罪を捨て、すべての外面の汚れを払わなければならなかった。「あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである」と彼は言った（同 3：5）。「契約の箱」が全軍の前を行かなければならなかった。祭

司たちのかついだこの主の臨在のしるしが、宿営の中央のその場所を離れて川のほうに進むのを見たなら、彼らも「その所を出立して、そのあとに従わなければならな」かった（同 3：3）。川を渡る方法を前もって細かに述べたあとで、ヨシュアは言った。「生ける神があなたがたのうちにおいでになり、あなたがたの前から、カナンびと……を、必ず追い払われることを、次のことによって、あなたがたは知るであろう。ごらんなさい。全地の一主の契約の箱は、あなたがたに先立ってヨルダンを渡ろうとしている」（同 3：10、11）。 PP 251.2

定められたときに前進が始まり、祭司の肩にかつがれた箱が先陣の前を行った。民は退いて、箱との間に半マイル以上の距離を置くように命じられていた。祭司たちがヨルダンの岸をくだって行くのを、皆は非常な興味をもって見つめた。彼らは、祭司たちが聖なる箱をかついで 1 歩 1 歩、波立ちうねる流れのほうに進み、やがて、足が水につかるほどになるのを見た。そのとき突然、上の流れがうず高く立ち、下の水が流れ去り、川底が現れた。 PP 251.3

神の命令を受けて、祭司たちが川の中央にまで進んで立ちどまると、全軍が川に下って行って向こう岸に渡った。こうしてすべてのイスラエル人の心に、このヨルダン川の流れをとめたのは、40 年前、先祖たちのために紅海を開いたのと同じ力であることが強く刻みつけられた。民がみな渡ってしまうと、箱自身も西岸にかつぎ上げられた。それが安全な場所に達し、「祭司たちの足の裏がかわいた地にあがると同時に」、とどめられていた水は、元どおりに動き出し、川をどっとばかりに流れ下った（同 4：18）。 PP 251.4

後々の世代のために、この大いなる奇跡の証拠が残されることになった。箱をかついだ祭司たちが、なおヨルダン川のまん中にいる間に、前もって各部族から 1 名ずつ選ばれていた 12 人が、祭司の立っている川底の石を 1 つずつ取って西の岸に運んだ。これらの石は、川向こうの最初の宿営地に記念碑として立てられるのであった。「地のすべての民に、主の手に力のあることを知らせ、あなたがたの神、主をつねに恐れさせるため」とヨシュアが言ったように、人々は、神が行われた解放の物語を、子や孫に語り伝えるよ うに命じられた（同 4：24）。 PP 251.5

この奇跡のもつ影響力は、ヘブル人に対してもその敵に対しても重大なものであった。それは神が絶えず臨在して守ってくださることをイスラエルに保証し、神がモーセを通して働かれたように、ヨシュアを通して彼らのために働いてくださることを明らかにした。こうした保証は、その地の征服、すなわち、40 年前に父祖たちの信仰を動揺させた驚くべき任務に着手した彼らの心を強めるのに必要であった。川を渡る前に、主はヨシュアに、「きょうからわたしはすべてのイスラエルの前にあなたを尊い者とするであろう。こうしてわたしがモーセと共にいたように、あなたとともにおることを彼らに知らせるであろう」と言っておられたが、この奇跡が約束の成就となった。「この日、主はイスラエルのすべての人の前にヨシュアを尊い者とされたので、彼らはみなモーセを敬ったように、ヨシュアを一生のあいだ敬った」（同 3：7、4：14）。 PP 252.1

こうして、イスラエルのために現された神の力は、彼らに対する隣接諸民族の恐怖心を増大し、彼らをたやすく、しかも、完全に征服するためのものでもあった。神が、イスラエルの子らの前で、ヨルダンの水をとめたという知らせが、アモリ人の王やカナン人の王の耳に達したとき、彼らはふるえおののいた。ヘブル人はすでにミデアンの 5 人の王と、アモリ人の力ある王シホンと、バシャンのオグを殺していた上、今度は増水したヨルダンの急流を渡ってきたことが、すべての隣接諸民族を恐怖に陥れた。カナン人にとっても、全イスラエルにとっても、またヨシュア自身にとっても、天と地の玉であられる生ける神が、その民のうちにおられて、見放すことも、見捨てることもしないことが、まちがいなく明らかであった。 PP 252.2

ヘブル人は、ヨルダン川からさほど遠くないところに、カナンにおける最初の宿営を張った。ここでヨシュアは、「イスラエルの人々に割礼を行った」「イスラエルの人々はギルガルに宿営し……過越の祭を行った」（同 5：3、10）。カデシにおける反逆のとき以来、割礼の儀式が中止されていたことは、割礼が象徴している神と彼らとの契約が破られたことを絶えずイスラエルに証言してきた。そして、エジプトからの解放の記念である過越の祭りが中断していたのは、彼らが奴隷であった国へ帰りたいという願いを主がきらわれたことを現すものであった。しかし、今、拒絶の年月は終わりを告げた。もうひとたび、神はイスラエルをご自分の民として認め、契約のしるしが回復さ

れた。割礼の儀式は、荒野で生まれた民のすべてに行われた。「きょう、わたしはエジプトのはずかしめを、あなたがたからころがし去った」と主はヨシュアに言われた（同5：9）。そして、このために、彼らの宿営の場所は、ギルガル、すなわち「ころがし去」ると呼ばれた。 PP 252.3

異邦の諸国は、エジプトを出たヘブル人が、彼らが期待していたほど早くカナンを占領しなかったために、主と主の民を軽べつしていた。イスラエルが長い間、荒野をさすらったために、敵が勝利を得てしまった。そして彼らは、ヘブル人の神は、民を約束の地に導き入れることができないのだと言って嘲笑していた。しかし今、主は、力と恵みを著しくあらわして、民の前にヨルダン川を開かれたので、敵はもはや彼らをさげすむことができなくなった。 PP 252.4

「その月の 14 日の夕暮」、エリコの平野で、過越の祭りが行われた。「そして過越の祭の翌日、その地の穀物、すなわち種入れぬパンおよびいり麦を、その日に食べたが、その地の穀物を食べた翌日から、マナの降ることはやみ、イスラエルの人々は、もはやマナを獲なかった。その年はカナンの地の産物を食べた」（同 5：10～12）。長い年月におよぶ荒野のさすらいは終わった。ついにイスラエルの足は、約束の地を踏んだのであった。 PP 252.5

第 45 章　エリコの陥落

本章は、ヨシュア記 5：13～15、6～7 章に基づく PP 253.1

ヘブル人は、カナンに入国はしたものの、国土を征服していなかった。そして、国土占領の戦いは、人間の目に、長く困難なものに思われた。そこには、強大な種族が住んでいて、その領土が侵されるのを防ごうとしていた。種々の種族は、共通の危険を感じて団結した。彼らの馬と鉄の戦車、彼らの国土に関する知識、そして、彼らの軍事的訓練などは、彼らにとって大いに有利であった。その上、国土は要塞に守られ、「その町々は大きく、石がきは天に達してい」た（申命記 9：1）。このさし迫った戦いにおいて、イスラエル人が勝つためには、彼らの力以上の力の確証によるほかはなかった。 PP 253.2

国の強大な要塞の 1 つ、すなわち、巨大で富裕なエリコの町が、ギルガルの彼らの宿営から、少し離れて彼らの眼前にあった。熱帯のさまざまな産物を豊かに産出する肥沃な平野の縁に、華美と悪徳の住居であるほこらかな宮殿や神殿があった。そして、この高慢な町が、巨大な城壁に守られて、イスラエルの神に挑戦した。エリコは特に月の女神アシタロテに捧げられた偶像礼拝の本拠地の 1 つであった。カナン人の宗教において、最も卑しく、堕落的なものがことごとくここに集まっていた。ベテペオルで犯した自分たちの罪の恐るべき結果が、まだ心になまなましいイスラエルの民は、嫌悪と戦慄をもってこの異教の町を見ることができるだけであった。 PP 253.3

ヨシュアには、エリコを降伏させることがカナン征服の第一歩と思われた。だが、彼はまず神の指導の保証を求め、それが与えられた。彼が宿営を退いて瞑想し、イスラエルの神に、民に先立って進まれるように祈っていると、「抜き身のつるぎを手に」した背たけの高い威風堂々たる武装戦士の姿を彼は見た。「あなたはわれわれを助けるのですか。それともわれわれの敵を助けるのですか」とヨシュアが問うたところ、「わたしは主の軍勢の将として今きたのだ」という答えが与えられた。ホレブにおけるモーセと同じく、「あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたが立っている所は聖なる所である」

と命じられた（ヨシュア 5：13～15）。このことは、この不思議なお方がどなたであるかを示していた。イスラエルの指導者の前に立ったのは、高められたお方、キリストであった。ヨシュアは恐れおののいて、ひれ伏して拝した。そのとき、「わたしはエリコと、その王および大勇士を、あなたの手にわたしている」という保証のことばが与えられた（同 6：2）。そして、彼は町を占領するための指示を受けた。 PP 253.4

ヨシュアは、神の命令に従ってイスラエルの軍勢を整列させた。攻撃はいっさいしてはならなかった。彼らはただ、神の箱をかつぎ、ラッパを鳴らして、町の周囲を巡るのであった。選ばれた一団の戦士たちが先頭を行ったが、この場合、勝利は、自分たちの技量と武勇によって得るのではなく、神から与えられた指示に従うことによって得るのであった。ラッパを吹き鳴らす 7 人の祭司がそれに従った。その次に、栄光に輝く神の箱を、聖職にふさわしい衣服を身につけた祭司がかついで歩いた。そして、イスラエルの軍勢の各部族がそれぞれの旗をひるがえして従った。これが滅びる運命にあった町を取り囲んだ行軍であった。この強力な軍勢の足音と、おごそかなラッパの音が山々にこだまし、エリコの町になり響いたほかは、何の物音も聞こえなかった。1 周は終わり、軍勢は静かに天幕に帰り、箱は幕屋の所定の場所にもどされた。 PP 253.5

エリコの見張りは驚いて、すべての行動に注目して、当局に報告した。彼らは、この行動のすべての意味はわからなかったが、聖なる箱と祭司たちとともに、この強力な軍勢が、1 日に 1 度、町のまわりを行軍するのを見て、その情景の不思議さに、祭司も民も恐怖をいだいた。もう一度、彼らは強固な要塞を点検し、どんな激しい攻撃にも耐えられることを確かめた。こうした奇妙な示威行進からは、なんの損害を受ける ことかと言って笑う者も多かった。毎日、町を 1 周する行進を見て恐れる者もいた。紅海が、かつてこの民の前で分かれたこと、また、彼らのためにヨルダン川に道ができたばかりであることを、彼らは思い起こした。彼らのために神がさらにどんな不思議なことを行われるかわからなかった。 PP 253.6

6 日の間、イスラエルの軍勢は町のまわりを巡った。7 日目になり、夜が明けそめると、ヨシュアは主の軍勢を集めた。そして彼らは、エリコのまわりを 7 回行進して、

ラッパを力強く吹き鳴らし、大声で叫ぶように指令された。神が彼らにこの町をお与えになったからである。 PP 254.1

大軍は、滅びに定められた城壁のまわりをおごそかに行進した。規律正しい足並みと、時おり早朝の静けさを破るラッパの音以外は、すべてが静寂であった。堅い石でできた巨大な城壁は、人間の包囲をものともしないように思われた。1 周が終わり、2 周目が続き、3 周、4 周、5 周、6 周と進むにつれて、城壁の見張りの恐れは増していった。いったい、この不思議な行進はなんのためなのだろう。どんな大事件がこれから起ころうとしているのであろう。それには長い時間がかからなかった。第 7 周が終わると、長い行進が休止した。ひととき沈黙していたラッパが一度にどっと吹き鳴らされ、大地は震えた。堅固な石の城壁と巨大な塔と要塞は基礎からゆれ動いて、大音響を立てて地にくずれ落ちた。エリコの住民は、恐怖のために力を失い、イスラエルの軍勢は侵入して町を攻め取った。 PP 254.2

イスラエル人は、自分たちの力で勝利を得たのではなく、この征服はまったく主のものであった。そして、この地の初なりとして、エリコとその中のすべてのものは神への供えものとして捧げなければならなかった。カナンの征服にあたって、彼らは自分たちで戦うのではなく、ただ神のみ旨を果たす器として戦うにすぎないこと、また、財産や自己賞揚のためではなく、彼らの王であられる主の栄光を求めるべきことが、イスラエルに深く印象づけられなければならなかった。 PP 254.3

占領に先だって次のような命令が与えられていた。「この町と、その中のすべてのものは、主への奉納物として滅ぼされなければならない」「また、あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。……その奉納物をみずから取って、イスラエルの宿営を、滅ぼさるべきものとし、それを悩ますことのないためである」（同 6：17、18）。 PP 254.4

町の住民と、その中の命あるものは、「男も、女も、若い者も、老いた者も、また牛、羊、ろば」も、みなつるぎにかけられた（同 6：21）。斥候の約束どおりに、忠実なラハブとその家の者だけが助けられた。町は焼き払われ、宮廷と寺院、豪華な住居とそのぜいたくな設備、きらびやかな織物と高価な衣服は焼かれた火で焼くことのでき

ないもの、すなわち「銀と金、青銅と鉄の器」は、幕屋の奉仕のために捧げなければならなかった（同 6：24）。町のあった場所はのろわれた場所となり、エリコは、要塞として再建されてはならなかった。神の力によって崩壊された城壁を復興しようとする者があれば、その人の} 二に刑罰が下るのであった。全イスラエルの前で厳粛な宣言が下された。「おおよそ立って、このエリコの町を再建する人は、主の前にのろわれるであろう。その礎をすえる人は長子を失い、その門を建てる人は末の子を失うであろう」（同 6：26）。 PP 254.5

エリコの住民の完全な滅亡は、以前カナンの住民についてモーセを通して与えられていた、「あなたは彼らを全く滅ぼさなければならない」「これらの民の町々では、息のある者をひとりも生かしておいてはならない」という命令の実現であった（申命記 7：2、20：16）。この命令は、聖書の他の箇所に命じられている愛とあわれみの精神に反していると思う人が多いが、実際、それは、無限の知恵と恵みに満ちた命令であった。神はカナンにイスラエルを定住させ、地上における神の王国の表示となるべき国家と政府を彼らのうちに展開しようとしておられた。彼らは、ただ、真の宗教を継ぐだけでなく、その原則を全世界に広めなければならなかった。カナン人は最も邪悪で堕落的な異教に陥っていた。であるから、神の恵み深いみ旨を妨害するに決まっているものをその国土か ら一掃する必要があった。 PP 254.6

カナンの住民には、悔い改めの機会が十分に与えられていた。40 年前、紅海が開かれたことと、エジプトに刑罰がくだったことが、イスラエルの神の最高の能力を証明したのである。そして、今度は、ミデアンの王ギレアデと、バシャンの 11 の敗北によって、主がすべての神々の上におられることがさらに明らかに示された。神のご品性の神聖さと不潔をきらわれるお気持ちは、バアルペオルのいまわしい儀式に加わったイスラエル人にくだった刑罰にあらわされた。こうした出来事は、みな、エリコの住民に知られていた。そして、多くの者は、服従することは拒んだものの、ラハブと同じく、イスラエルの神、主は、「上の天にも、下の地にも、神でいらせられる」と悟った（ヨシュア 2：11）。カナン人の生活は、洪水前の人々と同様に、ただ天をののしり、地を汚

すだけであった。神に反逆し、人間に敵するこうした人々が、すみやかに処罰されることを、愛と義は共に要求していた。 PP 255.1

40 年前、不信仰な斥候たちを恐怖に陥れた高慢な町エリコの城壁を、天の軍勢は、なんとやすやすと打ち破ったことであろう。「わたしはエリコ……を、あなたの手にわたしている」とイスラエルの全能者は言われた（同 6：2）。このみことばに対して、人間の力は無力である。 PP 255.2

「信仰によって、エリコの城壁は……くずれおちた」（ヘブル 11：30）。主の軍勢の将は、ヨシュアにだけお語りになった。彼は、全会衆には、ご自分を現されなかった。それで、ヨシュアの言葉を信じるか疑うか、また、彼が、主の名によって語った言葉に従うか、それとも彼の権威を拒否するかは人々にかかっていた。神のみ子の指揮のもとに、彼らに付き添っていた天使の軍勢を、彼らは見ることができなかった。「これは、なんという無意味な運動であろう。雄羊の角のラッパを吹いて、毎日町の城壁の周囲を回ることは、なんとおかしなことであろう。このようなことは、そびえ立つ城塞になんの効果もあり得ない」と彼らは考えることができた。しかし、城壁がついにくずれ落ちるに先だって、このように長い間、儀式を継続する計画そのものが、イスラエルの人々の信仰を助長する機会となった。それは、彼らの力が、人間の知恵や能力にあるのではなく、ただ彼らの救いの神だけにあることを、人々の心に印象づけるためであった。こうして、彼らは、天来の指導者に全く信頼するようになっていくのであった。 PP 255.3

神は、彼に信頼する者のために、大きなことをなさる。神を信じると言っている人々に、もっと力がないのは、彼らが自分たち自身の知恵に頼りすぎ、主が、彼らのためにみ力をあらわす機会を主に与えないからである。しかし、彼らが、全く主に信頼し、忠実に彼に従うならば、どのような事態が起こっても、主は、主を信じる子供たちをお助けになる。 PP 255.4

ヨシュアは、エリコを滅ぼしてから、しばらくしてヨルダンの谷を西に数マイル進んだ谷間の小さな町、アイを攻撃することにした。派遣された斥候の報告によれば、住

民は少なく、町を滅ぼすのにはほんのわずかの軍勢でよいであろうということであった。 PP 255.5

神が、イスラエルのために大勝利をお与えになったために、彼らは自己過信に陥った。神が、彼らにカナンの国を約束なさったために、彼らは安心し、神の助けだけが、彼らに成功を与え得ることを自覚しなかった。ヨシュアでさえ、神の勧告を仰がないで、アイ征服の計画をたてた。 PP 255.6

イスラエルの人々は、自分自身の力を賛美し、彼らの敵を軽視しはじめた。勝利は、たやすく得られるように思われ、占領には、3000 人で十分であろうと思われた。彼らは、神がいっしょにおられることを確かめもせずに攻撃した。彼らは、門のすぐそばまで突進したところ、そこで、頑強な抵抗を受けた。敵の数とその十分な準備にあわてふためいた彼らは、列を乱してがけをかけおりた。カナン人は、すぐその後を追ってきた。「彼らを門の前から……追って、下り坂で彼らを殺した」（ヨシュア 7：5）。損害は少なく、死者は 36 人に過ぎなかったが、この敗北は会衆全体を失望させた。「民の心は消えて水のようになった」（同 7：5）。彼らが、実際の戦場でカナン人に会ったのは、これが最初であった。そして、この小さな町 の防衛軍の前から彼らが逃げ去ったのであれば、彼らの前にあるもっと大きな戦闘の結果はどうなることであろうか。ヨシュアは、彼らの不成功を、神の怒りの表現とみなし、悲嘆と不安のうちに、「衣服を裂き、イスラエルの長老たちと共に、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、ちりをかぶった」（同 7：6）。 PP 255.7

「ああ、主なる神よ、あなたはなにゆえ、この民にヨルダンを渡らせ、われわれをアモリびとの手に渡して滅ぼさせられるのですか。……ああ、主よ。イスラエルがすでに敵に背をむけた今となって、わたしはまた何を言い得ましょう。カナンびと、およびこの地に住むすべてのものは、これを聞いて、われわれを攻めかこみ、われわれの名を地から断ち去ってしまうでしょう。それであなたは、あなたの大いなる名のために、何をしようとされるのですか」と彼は叫んだ（同 7：7～9）。 PP 256.1

「立ちなさい。あなたはどうして、そのようにひれ伏しているのか。イスラエルは罪を犯し、わたしが彼らに命じておいた契約を破った」と、主はお答えになった（同

7：10、11）。それは、失望したり、悲しんだりする時ではなくて、すぐに、決定的行動をとるべき時であった。宿営の中に、隠れた罪があった。そして、主が神の民と共におられて祝福して下さるためには、まず、それをさがし出して、除かなければならなかった。「あなたがたが、その滅ぼされるべきものを、あなたがたのうちから滅ぼし去るのでなければ、わたしはもはやあなたがたとは共にいないであろう」（同 7：12）。 PP 256.2

神の刑罰を実行するように命じられた者の 1 人が、神の命令を無視した。そして、その犯罪人の罪が全国民に問われた。「彼らは奉納物を取り、盗み、かつ偽っ」た（同 7：11）。ヨシュアには、犯人を発見して、罰するようにという指示が与えられた。罪ある者を見破るために、くじが引かれることになった。罪人は、すぐに指摘されたのではなくて、しばらくの間、不明のままにされていた。それは、人々が、自分たちのなかにある罪の責任を感じるためであった。そして、深く心をさぐって、神の前にへりくだるためであった。 PP 256.3

ヨシュアは、朝早く、部族ごとに人々を集めた。そして、厳粛で印象的な儀式が始まった。調査は一歩一歩進められた。恐ろしい試験が、人々の身近に迫った。第一に部族、それから氏族、その次に家族、そして、その中の男と進行していき、ユダの部族のカルミの子アカンが、イスラエルを悩ます者として、神の指によって指摘されたのである。 PP 256.4

アカンがまちがいなく罪を犯し、不当の罰を受けたという非難が起こる余地を残さないために、ヨシュアは、アカンに、その事実を認めることを厳粛に命じた。アカンは、自分の犯罪を全部告白した。「ほんとうにわたしはイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。……わたしはぶんどり物のうちに、シナルの美しい外套 1 枚と銀 200 シケルと、目方 50 シケルの金の延べ棒 1 本のあるのを見て、ほしくなり、それを取りました。わたしの天幕の中に、地に隠してあります」（同 7：20、21）。使者たちがすぐに天幕にっかわされた。そして、指示された場所を掘ってみた。「それは彼の天幕に隠してあって、銀もその下にあった。彼らはそれを天幕の中から取り出して、ヨシュアと……主の前に置いた」（同 7：22、23）。 PP 256.5

宣告は下され、その執行もすぐに行われた。「なぜあなたはわれわれを悩ましたのか。主は、きょう、あなたを悩まされるであろう」とヨシュアは言った（同 7：25）。人々は、アカンの罪の責任を問われ、その罪の結果悩んだ。であるから、人々はその代表者によって、アカンの刑の執行に参加するのであった。「すべてのイスラエルびとは石で彼を撃ち殺し」た（同 7：25）。 PP 256.6

そうしてから、アカンの上に石塚を大きく積み上ば罪とその罰の記念とした。「その所の名は今日までアコルの谷と呼ばれている」。それは、「悩み」といり意味である（同 7：26）。「アカルは……イスラエルを悩ました者である」と歴代志にしるされているのはアカンのことである（歴代志上 2：7）。 PP 256.7

アカンは、最も明瞭で厳粛な警告と、最も偉大な神のみ力のあらわれに反抗して、罪を犯した。「あなたがたは、奉納物に手を触れてはならない。…… 滅ぼさるべきものと」ならないためであるとの警告が全イスラエルに発せられていた（ヨシュア 6：18）。この命令は、彼らが奇跡的にヨルダン川を渡り、割礼を行って、神の契約を認め、過越の祭りを祝った後、また、契約の天使、主の軍勢の将が彼らにご自分を現された後に与えられた。その後、エリコが滅びて、すべて神の律法を犯す者の当然受けなければならない滅びの証拠となった。イスラエルの勝利が、ただ神の力だけによるものであって、人々が自力でエリコを占領したのでないという事実は、ぶんどり物を私有することを禁じた命令をさらに厳粛で重要なものにした。神は、神ご自身のみ言葉の力によって、この城塞をくつがえされた。征服は神ご自身のものであった。だから、町とその中のすべてのものは、神だけに帰すべきであった。 PP 256.8

そうした勝利と刑罰の厳粛なときに、幾百万のイスラエルの中のただ 1 人が、あえて神の命令にそむいた。アカンは、シナルの高価な衣服を見て、それがほしくなった。彼は死に直面したときでさえ、それを「シナルの美しい外套 1 枚」と呼んだ（同 7：21）。1 つの罪は次の罪へと導いた。そして彼は、主の倉に捧げられた金と銀とを自分のものにした。彼は、カナンの国の初穂を神から奪った。 PP 257.1

アカンを死に至らせた恐ろしい罪の根は貧欲であった。これは、すべての罪の中で最も一般的なもので、最も軽視されている。他の罪は、発見されて罰せられるのである

が、第 10 条の罪は、非難されることさえまれである。この罪がどんなに極悪で、その結果がどんなに恐ろしいものであるかという教訓をアカンの生涯が教えている。 PP 257.2

貪欲は、徐々にひろがる悪である。アカンがいだいた貪欲心は、ついに習慣となり、断ち切れない鎖のように彼を束縛した。彼は、この悪を心にいだいて、それが、イスラエルに災いをもたらすことを考えて、恐怖心をいだいたことであろう。しかし、彼の感覚は、罪のために鈍くなった。そして、誘惑にあったとき、彼はもろくも負けてしまった。 PP 257.3

同様に厳粛で明瞭な警告があるにもかかわらず、同じような罪がなお、行われていないであろうか。アカンがエリコのぶんどり物について禁じられていたのと同様に、われわれも貪欲心をいだくことを明らかに禁じられている。神は、それを偶像礼拝であると言われた（コロサイ 3：5、エペソ 5：5 参照）。「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイ 6：24）。「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい」（ルカ 12：15）。「あなたがたの間では、口にすることさえしてはならない」（エペソ 5：3）という警告が与えられている。アカン、ユダアナニヤ、サッピラなどの恐ろしい運命に陥った人々の例が与えられている。これらの人々の背後に、「黎明の子」ルシファーがいる（イザヤ 14：12）。彼は、さらに高い地位を求めたために天の栄光と祝福を永遠に失ってしまった。しかし、このような警告が発せられているにもかかわらず、貪欲は、いたるところで見られる。 PP 257.4

どこにでも貪欲のみにくい足跡が見える。それは、家族の中に不満と争いを起こし、貧者の心に、金持ちに対するねたみと憎しみを起こす。それは、また、金持ちが貧者を、搾取、圧迫する原因でもある。この罪悪は世の中だけにとどまらず、教会の中にも入っている。ここでも、利己心をいだき、強欲で、人を欺き、慈善を怠り、「10 分の 1 と、ささげ物」において、神のものを奪うことが、なんと一般に行われていることであろう（マラキ 3：8）。悲しいことであるが、「正規の」教会員の中に多くのアカンがいる。堂々とした風采の人が多く教会に来て、主の聖餐に連なる。しかし、彼らの持ち物の中には、不法の利益、神がのろわれたものが隠されている。シナルの美しい衣服のために、

良心の声にそむき、天国の希望を犠牲にする者が数多くある。自分たちの誠実さと有用性を、銀貨の袋と交換してしまう者も多い。貧者の苦しい叫びを聞く者はいない。福音の光は、途中でさえぎられている。キリスト教の教えを裏切る行為を見て、世の人々は軽蔑の目を向ける。それにもかかわらず、貪欲な信者は宝をたくわえている。「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる」と主は言われる（マラキ３：8）。 PP 257.5

アカンの罪は、国民全体を不幸にした。1 人の罪をさがし出してそれを取り除くまで、神の怒りは教会の上にとどまる。教会が最も恐れなければならない勢力は、公然と攻撃する反対者や、無神論者や、神を汚す者などではなくて、キリストを信じるといいながら、矛盾した生活を送る人々である。イスラエルの神の祝福をさえぎり、神の民を弱めるのは、このような人々なのである。 PP 258.1

教会が困難に陥り、人々が冷淡になって、霊的に衰えて、神の敵に勝利を与えるようなとき、教会の人々は、いたずらに手をこまねいて、不幸な状態を悲しむことなく、宿営のなかにアカンがいないかどうかをたずねよう。各自は、謙遜に自分の心をさぐり、神の臨在をさえぎる隠れた罪を発見するように努めよう。 PP 258.2

アカンは罪を告白したけれども、時はすでにおそく、彼にはなんの役にも立たなかった。彼は、イスラエルの軍勢がアイで敗北し、失望したのを見た。しかし、彼は進み出て罪を告白しなかった。彼は、ヨシュアとイスラエルの長老たちが、言葉で表現できない大きな悲しみのうちに、地にひれ伏したのを見た。もし彼がその時に告白していたならば、それは、真の悔い改めの証拠となったことであろう。しかし、彼はまだ黙したままであった。彼は、大きな犯罪が行われたこと、そして、その罪の性質さえもはっきり宣言されたのを聞いた。しかし、彼は、くちびるを閉じていた。それから厳粛な調査が始まった。彼の部族、氏族、そして家族が指摘されたとき、彼の心は恐怖にふるえたことであろう。それでも彼は告白しなかったので、ついに、神の指が彼を指さすにいたった。こうして、彼は、罪をこれ以上かくすことができなくなって事実を認めた。同様の告白が、なんと多くなされていることであろう。事実が証明されたあとで、それを認めることと、神とわれわれだけに知られた罪を告白するのとは、非常な相違がある。ア

カンは、告白することによって、犯罪の罰をのがれようとする気がなかったならば、告白はしなかったことであろう。しかし、彼の告白は、その刑罰の正当なことを示したに過ぎなかった。彼は、罪に対する真の悔い改めも、悔悟も、目的の変更も、悪に対する憎しみも感じていなかった。 PP 258.3

すべての人の運命が、生か死かに決定したあとで、罪人が神のさばきの座の前に立つとき、同じような告白をする。各自は、自分に与えられる罰によって、自分の罪を認める。罪の宣告を受けた恐ろしさと、恐怖すべき審判のことを考えて、魂は、そう言わないではおられない。しかし、そうした告白は、罪人を救うことができない。 PP 258.4

多くの者は、アカンのように、自分たちの罪を人間の目から隠すことができれば安全であると思い、神は、厳格に罪を指摘なさらないだろうと安易に考えている。しかし、犠牲やささげ物では永遠に清めることができないその日に罪が発見されたのでは、すでにおそいのである。天の記録が開かれるとき、審判の主は、人の罪を言葉で宣言されるのではなくて、心の奥底まで見抜き、人を納得させずにはおかないまなざしでごらんになる。そうすると、すべての行為や、人生のすべての取引が、悪者の記憶にまざまざと印象づけられる。ヨシュアの時代のように、部族から氏族と人をさがし出す必要はない。彼自身のくちびるが、その恥を告白する。そのとき、人に知られなかった隠れた罪が、全世界に広く知られるのである。 PP 258.5

第 46 章　祝福とのろい

本章は、ヨシュア記 8 章に基づく PP 258.6

アカンに対する罪の宣告が執行された後で、ヨシュアは、すべての勇士たちを召集して、アイへ進撃するように命じられた。神の力が人々と共にあったので、彼らはすぐに町を占領した。 PP 258.7

イスラエル全体が、厳粛な宗教的礼拝を行うために、ここで軍事活動が停止された。人々は、カナンに 定住したいと熱望していた。しかし、まだ、家族のための家もなければ、土地もなかった。それらを手に入れるためには、カナン人を追い出さなければならなかった。しかし、この重要な働きは、延期しなければならなかった。彼らは、それよりももっと重要なことを先に果たさなければならなかった。 PP 258.8

民は、嗣業を手に入れる前に、神に対する忠誠の誓いを新たにしなければならなかった。部族をシケムのエバル山とゲリジム山に召集し、神の律法を厳粛に認めるようにとの指示が、モーセの最後の教えの中で、2 回与えられていた。この命令に従って、人々は、みな、男ばかりでなく、「女と子どもたち、ならびにイスラエルのうちに住む寄留の他国人」もギルガルの陣営を出て、カナンの地の中央に近いシケムの谷へ、敵国を通って進んで行った（ヨシュア 8：35）。彼らは、まだ征服していない敵にとり囲まれていたが、神に忠実であるかぎり、神の保護のもとに安全であった。ちょうどヤコブの時のように、「大いなる恐れが周囲の町々に起ったので」ヘブル人は妨害されなかった（創世記 35：5）。 PP 259.1

この厳粛な礼拝のために定められた場所は、すでに彼らの父祖たちの歴史とつながりのある聖なる場所であった。ここは、アブラハムがカナンの地で主に最初の祭壇を築いたところであった。ここは、アブラハムとヤコブが天幕を張ったところであった。ここにヤコブは畑を買い、部族の人たちはヨセフの遺体をそこに埋葬することになった。ここはまた、ヤコブの掘った井戸と、彼が家族の偶像をその下に埋めたかしの木があった。 PP 259.2

選ばれた土地は、パレスチナ全地で最も美しい土地の１つで、この大いなる印象的な光景が演じられる舞台としてふさわしかった。緑の野にオリーブの森が点在し、こんこんとあふれて尽きない泉から流れ出る川にうるおされ、野の花に彩られている美しい谷間が、不毛の山々の間に魅力をたたえてひろがっていた。その谷間の両がわに、エバル山とゲリジム山が近くに向かい合っていて、その低いところにある突出部が自然の講壇のように見え、その一方の上で話されることばの１つ１つが向かいがわにはっきり聞こえ、後方に広がる山腹は、おびただしい会衆の集合場所となっていた。 PP 259.3

モーセから与えられた指示に従って、大きな石の記念碑がエバル山に建てられた。この石に前もってしっくいをぬっておき、その上に律法が書き込まれた。それはシナイ山で語られて石の板に刻まれた十戒ばかりでなく、モーセに伝えられて本に書かれた律法もあった。この記念碑のそばに、切り出されたものでない石で祭壇が築かれ、その上で主にいけにえが捧げられた。のろいをかけられた山であるエバル山に祭壇が築かれたことには意味があって、それは、イスラエルが神の律法を犯したゆえに当然神の怒りを招いたのであり、もし、いけにえの祭壇によって象徴されたキリストの贖いがなければ、神の怒りがすぐにものぞむであろうということを示していた。 PP 259.4

レアとラケルから出た６つの部族はゲリジム山に、一方、召使の女たちから出た部族は、ルベン、ゼブルンと一緒にエバル山にそれぞれ場所をとった。祭司たちは、契約の箱と共に、中間の谷に場所を占めた。合図のラッパの音で静粛が宣言された。そして、その深い静けさとこの大会衆の面前で、ヨシュアは、聖なる契約の箱の横に立って、神の律法に従うことに伴う祝福を読み上げた。ゲリジム山の全部族は、アーメンをもってこれに応じた。次にヨシュアがのろいを読み上げると、エバル山の全部族が同じように同意をあらわし、幾千の声がひとりの声のように相和して、厳粛に応答した。続いて神の律法と、モーセから民に伝えられたさだめと戒めが朗読された。 PP 259.5

イスラエルは、律法をシナイ山で神の口から直接に与えられ、そして、神ご自身の手によって書かれたその聖なる戒めは、まだ契約の箱の中に保存されていた。いま、それは再びだれもが読めるところに書かれたのであった。カナンを占領できる契約条件を誰もが自分の目で見る特権が与えられた。誰もが契約の条件を受け入れることを表示し、

これに従えば祝福を受け、これに従わなければのろいを受けることに同意するのであった。律法は、記念の石に書かれ たばかりでなく、ヨシュア自身によって全イスラエルの聞いている前で読み上げられた。モーセが申命記全部を民に語り終えてから幾週間もたたない今、ヨシュアがふたたび律法を読み上げたのであった。 PP 259.6

イスラエルの男たちばかりでなく、女も子供たちも律法の朗読に聞き入った。彼らも、また、義務を知って実行することが重要であった。神はご自分のさだめに関して、イスラエルにこう命じておられた。「これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、またそれを手につけて、しるしとし、目の間に置いて覚えとし、これを子供たちに教え……なければならない。そうすれば、主が先祖たちに与えようと誓われた地に、あなたがたの住む日数およびあなたがたの子供たちの住む日数は、天が地をおおう日数のように多いであろう」（申命記 11：18～21）。 PP 260.1

律法の全部は、モーセが命じたように、7 年目ごとにイスラエルの全会衆の前で読まれるのであった。「7 年の終りごとに、すなわち、ゆるしの年の定めの時になり、かりいおの祭に、イスラエルのすべての人があなたの神、主の前に出るため、主の選ばれる場所に来るとき、あなたはイスラエルのすべての人の前でこの律法を読んで聞かせなければならない。すなわち男、女、子供およびあなたの町のうちに寄留している他国人など民を集め、彼らにこれを聞かせ、かっ学ばせなければならない。そうすれば彼らはあなたがたの神、主を恐れてこの律法の言葉を、ことごとく守り行うであろう。また彼らの子供たちでこれを知らない者も聞いて、あなたがたの神、主を恐れることを学ぶであろう。あなたがたがヨルダンを渡って行って取る地にながらえる日のあいだ常にそうしなければならない」（申命記 31：10～13）。 PP 260.2

サタンは、神の語られたことを人々に曲解させ、心をくもらせ、理解力を暗くして、彼らを罪に陥れようと絶えず働きかけている。であるから、主は、この点を明確にし、だれもご自分の要求をまちがえることがないように、明らかにしておられるのである。神は、サタンが、神の民に残忍で欺瞞的な力を及ぼさないように、絶えず彼らをご自分の保護の下に引き寄せようとしておられる。神はおそれ多くもご自身の声で彼らに語り、ご自身の手で生きたみ言葉をお書きになった。生命力が満ちて、真理の光を放っている

これらの祝福の言葉は、完全な指針として人に与えられているのである。サタンが心を捕らえ、主の約束と要求から人々の気持ちをそらせようとするので、これを頭にきざみつけ、心に印象づけるには、いっそうの努力が必要である。 PP 260.3

聖書の歴史の事実と教訓および主の警告と要求について人々に教えることに、宗教教師はいっそうの注意を払わねばならない。それには子供たちの理解力に適した単純な言葉で説明しなければならない。若い人たちが聖書によって教えられるように留意することが牧師と親たちの働きの一部でなければならない。 PP 260.4

親は子供たちを聖書のなかにあるいろいろな知識によって教育することができる。また、そうすることが彼らの義務である。しかし、むすこ娘たちに神のみ言葉に対する興味を持たせるには、親がみずから興味を持たねばならない。親が聖書の教えをよく知り、神がイスラエルに命じられたように、「家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も」これについて語らねばならない（申命記 11：19）。子供たちが神を愛し、おそれるようになることを望む者は、み言葉と、創造のわざにあらわされている神の恵みと威光と力について語らねばならない。 PP 260.5

聖書のどの章どの節も、神からの人類への伝達である。われわれは、その教えを手につけてしるしとし目の間に置いて覚えとしなければならない。われわれがそれを学んで従うときに、イスラエル人が、昼は雲の柱、夜は火の柱で導かれたように、それは神の民を導くのである。 PP 260.6

第 47 章　ギベオン人との同盟

本章は、ヨシュア記 9、10 章に基づく PP 261.1

イスラエル人は、シケムからギルガルの陣営へもどった。するとまもなく、ここに見知らぬ代表団がやってきて、協定を結びたいと希望した。使節団は、遠い国からやってきたと言い、彼らのようすからすればそれが真実らしく思えた。彼らの衣服は古びて破れ、くつはつぎ当てがしてあり、食料品はかびがはえ、酒を入れる皮袋は破れたのを旅の途中で急いでつくろったかのようにしばりつけてあった。 PP 261.2

パレスチナの国境の向こうの遠国で、彼らの同胞は、神が、神の民のために行われた不思議なわざを聞き、イスラエルと同盟を結ぶことを望んで、彼らを派遣したのだと、彼らは言うのであった。ヘブル人はカナンの偶像礼拝者たちと同盟を結ばないようにということを特別に警告されていたので、この来訪者たちの言っていることが真実かどうかについて一抹の疑いが指導者たちの心に浮かんだ。「あなたがたはわれわれのうちに住んでいるのかも知れない」と彼らは言った。これに対して使節団は、「われわれはあなたのしもべです」と答えただけだった。しかしヨシュアが、「あなたがたはだれですか。どこからきたのですか」と単刀直入につっこんで聞くと、彼らは前と同じ答えをくりかえして、それが真実である証拠として、こうつけ加えた。「ここにあるこのパンは、あなたがたの所に来るため、われわれが出立する日に、おのおの家から、まだあたたかなのを旅の食料として準備したのですが、今はもうかわいて砕けています。またぶどう酒を満たしたこれらの皮袋も、新しかったのですが、破れました。われわれのこの着物も、くつも、旅路がひじょうに長かったので、古びてしまいました」（ヨシュア記 9：7、8、12、13）。 PP 261.3

この陳情は成功した。ヘブル人は、「主のさしずを求めようとはしなかった。そしてヨシュアは彼らと和を講じ、契約を結んで、彼らを生かしておいた。会衆の長たちは彼らに誓いを立てた」（同 9：14、15）。こうして契約が結ばれた。それから 3 日のちに事実が暴露した。「彼らはその人々が近くの人々で、自分たちのうちに住んでいる

ということを聞いた」（同 9：16）。ギベオン人は、ヘブル人に抵抗することが不可能であることを知って、生き残るために策略を用いたのであった。 PP 261.4

自分たちが欺かれたことを知ったとき、イスラエル人の憤激は大きかった。その怒りは、彼らが 3 日間の旅ののち、カナンの地の中央に近いギベオン人の町に到着したとき、いっそう高まった。「会衆はみな、長たちにむかってつぶやいた」。しかし長たちは、欺瞞によって結ばれた契約ではあっても、「イスラエルの神、主をさして彼らに誓いを立てていたので」その契約を破ろうとしなかった。「イスラエルの人々は彼らを殺さなかった」（同 9：18）。ギベオン人は、偶像礼拝をやめて主の礼拝を受け入れることを誓ったのであった。だから彼らを生かしておくことは、偶像礼拝のカナン人を滅ぼすようにとの神のご命令にそむくことではなかった。だからヘブル人が誓ったことは罪を犯すことにはならなかった。その誓いは欺瞞によるものではあったが、無視してはならなかった。義務を誓ったからには、それが、悪い行為を義務づけるものでない以上、尊重すべきである。利益、報復、自己中心などを考慮に入れて、誓いを破るようなことがあってはならない。「偽りを言うくちびるは主に憎まれ」る（箴言 12：22）。「主の山に登るべき者はだれか。その聖所に立つべき者はだれか」。それは、「誓った事は自分の損害になっても変えること」のない者である（詩篇 24：3、15：4）。 PP 261.5

ギベオン人は、生かしておくことになったが、聖所のいやしい下働きをする奴隷となった。「ヨシュアは、その日、彼らを、会衆のため、また主の祭壇のため、主が選ばれる場所で、たきぎを切り、水をくむ者とした」（ヨシュア 9：27）。彼らは、この条件を喜んで受け入れ、自分たちがまちがっていたことに気づいて、生命を贖うためならどんな条件にも喜んで従った。「わ れわれは、今、あなたの手のうちにあります。われわれにあなたがして良いと思い、正しいと思うことをしてください」と彼らはヨシュアに言った（同 9：25）。彼らの子孫は何百年もの間、聖所の奉仕に従事した。 PP 261.6

ギベオン人の領地は 4 つの町から成っていた。民は王の統治下にはなくて、長老たちに支配されていた。中でも番重要な町、ギベオンは、「大きな町であって、王の都に

もひとしいものであり、……そのうちの人々が、すべて強かった」（同 10：2）。このような町の住民が、命を救うために屈辱的な手段に訴えたことは、イスラエル人がどれほどカナンの住民に恐れられていたかということの大きな証拠である。 PP 262.1

しかし、ギベオン人が正直にイスラエル人と交渉したのだったら、事はもっとうまくいったであろう。彼らは主に服従したことによって生かされたが、彼らの欺瞞は不名誉と苦役をもたらしたにすぎなかった。神は、異教を捨ててイスラエルに加わりたい者は、だれでも契約の祝福を受けられるように道を備えておられた。「あなたがたと共にいる寄留の他国人」（レビ 19：34）の条件に彼らは含まれ、この種の人たちは、ほとんど例外なしに、イスラエルと同じ恩典と特権を受けられるのであった。主の命令は次のようなものであった。 PP 262.2

「もし他国人があなたがたの国に寄留して共にいるならば、これをしえたげてはならない。あなたがたと共にいる寄留の他国人を、あなたがたと同じ国に生れた者のようにし、あなた自身のようにこれを愛さなければならない」（レビ 19：33、34）。過越の祭りといけにえの捧げ物については、こう命令されていた。「会衆たる者は、あなたがたも、あなたがたのうちに寄留している他国人も、同一の定めに従わなければならない。……他国の人も、主の前には、あなたがたと等しくなければならない」（民数記 15：15）。 PP 262.3

もしギベオン人が欺瞞的な手段に訴えなかったら、このような立場を与えられたのであった。「王の都にもひとしい」町の住民で、「そのうちの人々が、すべて強かった」といわれていた人々にとって、子孫末代まで、たきぎを切ったり、水をくんだりする者となることは、けっしてなまやさしい屈辱ではなかった。彼らは、欺瞞の目的で貧しい着物を身につけていたが、それは彼らがいつまでも人に使われる身分であるしるしとして、彼らにつけられた。こうして、何代にもわたって、彼らの奴隷状態は、神が虚偽を憎まれる証拠となるのであった。 PP 262.4

ギベオン人がイスラエルに屈服したことから、カナンの王たちはろうばいした。侵入者と和を講じた者に対してただちに報復手段がとられた。エルサレムの王アドニゼデクをかしらにして、5 人のカナンの王たちがギベオンに対抗して同盟を結んだ。彼らの

行動は早かった。ギベオン人は防衛の備えができていなかったので、彼らはギルガルのヨシュアに使者をつかわして言った。「あなたの手を引かないで、しもべどもを助けてください。早く、われわれの所に上ってきて、われわれを救い、助けてください、山地に住むアモリびとの王たちがみな集まって、われわれを攻めるからです」（ヨシュア10：6）。危険はギベオンの住民ばかりでなく、イスラエルにも迫った。この町は、中央および南部パレスチナへの交通路にまたがっていて、国を征服するにはここを確保しなければならなかった。 PP 262.5

ヨシュアは、ただちにギベオンの救援に向かう手はずをととのえた。包囲されたこの町の住民は、自分たちが行った欺瞞行為のために、ヨシュアが彼らの訴えを拒絶するのではないかと恐れた。しかし、ギベオン人はイスラエルの支配に服し、神への礼拝を受け入れたのであるから、彼らを保護する義務があると、ヨシュアは感じた。彼は、こんどは、神の助言なしに行動しようとはしなかった。主はその企てを激励された。次のような神の言葉が与えられた。 PP 262.6

「彼らを恐れてはならない。わたしが彼らをあなたの手にわたしたからである。彼らのうちには、あなたに当ることのできるものは、ひとりもないであろう」「そこでヨシュアはすべてのいくさびとと、すべての大勇士を率いて、ギルガルから上って行った」（同 10：8、7）。 PP 262.7

徹夜の強行軍で、ヨシュアの軍隊は朝方にはギベ オンの前方に到着した。同盟軍の毛たちは、ヨシュアが彼らを襲撃した時には、やっと軍勢を町の周囲に集結したばかりのところであった。結果は同盟軍の大敗北に終わった。おびただしい軍勢はヨシュアの前から敗走して、山道からベテホロンへ逃げた。山の頂上まで登りきると彼らは向こうがわの急な下り坂を一気にかけおりた。すると激しい雹の嵐が彼らを見舞った。「主は天から彼らの上に大石を降らし……イスラエルの人々がつるぎをもって殺したものよりも、雹に打たれて死んだもののほうが多かった」（同 10：11）。 PP 262.8

アモリ人が、山の要塞に逃げ込もうとして、無謀な戦いを続けている間、ヨシュアは、山の頂上から見おろしていたが、戦いを完結するには日が短いことに気がついた。

もし徹底的に打ち破らなければ、敵はふたたび勢いをもりかえして、戦いをくりかえすだろう。「ヨシュアはイスラエルの人々の前で主にむかって言った、 PP 263.1

『日よ、ギベオンの上にとどまれ、 PP 263.2

月よ、アヤロンの谷にやすらえ』。 PP 263.3

民がその敵を撃ち破るまで、日はとどまり、月は動かなかった。……日が天の中空にとどまって、急いで没しなかったこと、おおよそ 1 日であった」（同 10：12、13）。 PP 263.4

夜になる前に、ヨシュアに対する神の約束は果たされた。敵の全軍は彼の手に渡された。その日のできごとはいつまでもイスラエルの記憶に残ることになった。「これより先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれられた日は 1 日もなかった。主がイスラエルのために戦われたからである」（同 10：14）。「飛び行くあなたの矢の光のために、電光のようにきらめく、あなたのやりのために、日も月もそのすみかに立ち止まった。あなたは憤って地を行きめぐり、怒って諸国民を踏みつけられた。あなたはあなたの民を救うため、……出て行かれた」（ハバクク 3：11～13）。 PP 263.5

神の霊が、ヨシュアを動かして、イスラエルの神の力の証拠がふたたび与えられるようにと彼に祈らせたのであった。だから、この願いは偉大な指導者ヨシュアの僭越を示したものではなかった。ヨシュアは、神が必ずイスラエルの敵を打ち破られるという約束を受けていたのであったが、あたかも成功はイスラエルの軍勢にのみかかっているかのように熱心に努力した。彼は人間の力のかぎりを尽くしてから、信仰をもって神の助けを求めた。成功の秘訣は神の力と人間の努力の結合である。最高の結果を達成する者は、全能者の腕に絶対の信頼をおく人である。「日よ、ギベオンの上にとどまれ、月よ、アヤロンの谷にやすらえ」と命じた人は、ギルガルの陣営で、何時間も祈りのうちに地にひれ伏していた人である。祈りの人は力の人である。 PP 263.6

この偉大な奇跡は、被造物が創造主の支配下にあることの証拠である。サタンは、物質界における神の力を人の目から隠し、神のたゆまぬ活動を見せまいとする。この奇跡によって、自然の神よりも自然をあがめる者は譴責されるのである。 PP 263.7

神はみこころのままに、「火よ、あられよ、雪よ、霜よ、み言葉を行うあらしよ」と、自然の勢力を呼び集めて敵の力を打破される（詩篇 148：8）。異教のアモリ人が神の目的にさからったとき、神はみ手をくだして、イスラエルの敵の上に「天から……大石を降ら」された。地上歴史の最後の場面で、「主は武器の倉を開いてその怒りの武器を取り出された」ときに、もっと大きな戦いが、起こるといわれている（エレミヤ 50：25）。「あなたは雪の倉にはいったことがあるか。ひょうの倉を見たことがあるか。これらは悩みの時のため、いくさと戦いの日のため、わたしがたくわえて置いたものだ」と、神はたずねておられる（ヨブ 38：22、23）。 PP 263.8

黙示録の記者は、「大きな声が聖所の中から……『事はすでに成った』」と宣告するときに起こる破滅について書いている。彼は、「Ｉタラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた」と言っている（黙示録 16：17、21）。 PP 263.9

第 48 章　カナンの分配

本章は、ヨシュア記 10：40～43、11 章、14～22 章に基づく PP 264.1

ベテホロンでの勝利のあと、たちまち、カナンの南部が征服された。「こうしてヨシュアはその地の全部、すなわち、山地、ネゲズ平地、および山腹の地……を撃ち滅ぼし……た。……イスラエルの神、セがイスラエルのために戦われたので、ヨシュアはこれらすべての王たちと、その地をいちどきに取った。そしてヨシュアはイスラエルのすべての人を率いて、ギルガルの陣営に帰った」（ヨシュア 10：40～43）。 PP 264.2

パレスチナ北部の部族は、イスラエル軍の勝利に恐怖を感じ、これに対抗して同盟を結んだ。この同盟軍のかしらはメロム湖の西側までの地域であるハゾルの王ヤビンであった。「そして彼らは、そのすべての軍勢を率いて出てきた」（同 11：4）。この軍勢はイスラエルがこれまでにカナンで遭遇したどの軍勢よりも大きかった。「その大軍は浜べの砂のように数多く、馬と戦車も、ひじょうに多かった。これらの王たちはみな軍を集め、進んできて、共にメロムの水のほとりに陣をしき、イスラエルと戦おうとした」（同 11：4、5）。ふたたび激励の言葉がヨシュアに与えられた。「彼らのゆえに恐れてはならない。あすの今ごろ、わたしは彼らを皆イスラエルに渡して、ことごとく殺させるであろう」（同 11：6）。 PP 264.3

ヨシュアは、メロム湖の近くで同盟軍の陣営を襲い、その軍勢を徹底的に壊滅させた。「主は彼らをイスラエルの手に渡されたので、これを撃ち破り……ついにひとりも残さず撃ちとった」（同 11：8）。カナン人の誇りであり自慢の種であった戦車と馬は、イスラエルのぶんどり品としてはならなかった。神の命令によって戦車は焼かれ、馬はかたわにさせられて戦いの役に立たなくなった。イスラエル人は、戦車や馬に頼らず「彼らの神、主のみ名」に信頼すべきであった。 PP 264.4

町は次々と攻撃され、同盟軍の要塞ハゾルは焼かれた。戦いは数年続いたが、ついにヨシュアはカナンの支配者となった。「こうしてその地に戦争はやんだ」（同 11：23）。 PP 264.5

しかし、カナン人の勢力は打ち破られたが、彼らは完全に土地から立ちのかされていなかった。西部ではまだペリシテ人が海岸ぞいの肥沃な平野を占領しており、その北にはシドン人の領地があった。レバノンもまたシドン人の領有であった。南部では、エジプトまでの地域がイスラエルの敵によって占領されていた。 PP 264.6

しかし、ヨシュアが戦いを続けるのではなかった。この偉大な指導者は、イスラエルの指導から手をひく前にしなければならないことがあった、全地は、征服した土地も、まだ平定していない土地も、部族に割り当てねばならなかった。そして、それぞれの部族が自分たちの嗣業を完全に平定しなければならなかった。もし人々が神に忠実であったら、神は、彼らの前から敵を追い払ってくださるのであった。そして、彼らが神の契約に忠実でありさえしたら、もっと大きな所有を与えるであろうと、神は約束された。 PP 264.7

土地の分配は、ヨシュアと大祭司エレアザルおよび部族の首長たちに任され、各部族の配置はくじできめられた。モーセは、民がカナンを占領したときに、部族間に分配するように土地の境界を定め、各部族の首長がその分配に参加するように定めておいた。レビ族は、聖所の奉任に専念していたので、この割り当ての中に入らなかった。レビ人には、国内のあちらこちらにある 48 の都市が、彼らの嗣業として指定された。 PP 264.8

土地の分配をはじめる前に、カレブが、彼の部族の首長たちを従えて、特別な要求をもって出頭した。ヨシュアを除けば、カレブは、今や、イスラエルで最年長者であった。斥候たちの中で、カレブとヨシユアだけが、約束の地について、よい報告をもち帰って人々に主の名によってのぼって行ってそこを占領するようにと励ましたのであった。カレブは今、彼の忠誠の報いとして、その時与えられた約束、すなわち、「お まえの足で踏んだ地は、かならず長くおまえと子孫との嗣業となるであろう。おまえが全くわが神、主に従ったからである」という約束をヨシュアに思い出させた（同 14：9）。そこで彼は、ヘブロンを自分の所有としてもらいたいと願い出た。ここは、長年の間、アブラハム、イサク、ヤコブの土地であった。ここのマクペラの洞穴に、彼らが埋葬されていた。ヘブロンは、その手ごわい外見で斥候たちを恐れさせ、そのため全イスラエ

ルの勇気をくじいたおそるべきアナキ人の土地であった。ここは、とりわけカレブが神の力に信頼して自分の嗣業としてえらんだ土地であった。 PP 264.9

カレブは言った。「主がこの言葉をモーセに語られた時からこのかた、イスラエルが荒野に歩んだ 45 年の間、主は言われたように、わたしを生きながらえさせてくださいました。わたしは今日すでに 85 歳ですが、今もなお、モーセがわたしをつかわした日のように、健やかです。わたしの今の力は、あの時の力に劣らずどんな働きにも、戦いにも堪えることができます。それで主があの日語られたこの山地を、どうか今、わたしにください。あの日あなたも聞いたように、そこにはアナキびとがいて、その町々は大きく堅固です。しかし、主がわたしと共におられて、わたしはついには、主が言われたように、彼らを追い払うことができるでしょう」（同 14：10～12）。 PP 265.1

ユダのおもだった人々が、その願いを支持した。カレブ自身がユダ族から土地の分配について任命されていたので、彼はその権限を利己的な特典に用いたようにみられないように、首長たちの同意を得た上で、彼の主張を持ち出すことにしていたのである。 PP 265.2

彼の要求はすぐにかなえられた。この巨大な要塞の征服は、だれよりも彼にまかせるのが一番安全であった。「そこでヨシュアはエフンネの子カレブを祝福し、ヘブロンを彼に与えて嗣業とさせた」（同 14：13）。彼が全く主なる神に従ったからである。カレブの信仰は、今も、かつて斥候たちの悲観的な報告と反対のあかしをたてた時と全く同じであった。彼は神がご自分の民にカナンを占領させると言われた約束を信じていた。この点において彼は全く主に従ったのであった。彼は、民と共に荒野での長年の放浪に耐えて、失望と罪の重荷を共に味わった。それでも、彼はそのことについてなんの不平も言わずに、荒野で兄弟たちが滅ぼされたときにも彼を生き長らえさせてくださった神をあがめた。荒野の放浪中の困難と危険と疫病のさなかにも、カナンにはいってからの戦いの年月の間にも、主は彼を生き長らえさせられた。そしていま、80 歳を越えても彼の力は衰えていなかった。彼はすでに征服された土地を自分のために求めず、よりによって斥候たちが征服は不可能と考えた土地を求めた。彼は、イスラエルの信仰をたじろがせた力強い巨人たちから、神の助けによって奪取しようというのである。カレ

ブの願いの動機は、名誉欲や権勢欲ではなかった。この勇敢な老戦士は、神の栄えとなる模範を人々に示し、父祖たちが征服不可能と考えていた土地を征服するように部族を大いに激励しようと熱望していたのであった。 PP 265.3

カレブは、40 年間心にきめていた嗣業を手に入れた。そして神が共にいて下さることに信頼して、「アナクの子 3 人を追い払った」（ヨシュア 15：14）。自分と自分の一族のために土地を獲得してからも、彼の熱意は衰えなかった。彼は自分の嗣業に安住しないで、国のためと神の栄えのために、征服を拡大して行った。臆病者と反逆者は荒野で滅びた。しかし、正しい斥候たちはエスコルのぶどうを食べた。おのおのその信仰に従って与えられた。信じない者は、彼らの恐れていたことが実現するのを見た。神の約束にもかかわらず、彼らはカナンを継ぐことは不可能だと断言し、そしてその通りカナンを所有することができなかった。しかし、神に信頼した人々は、遭遇すべき困難を見ないで全能者の力を見、良い地に入った。昔の偉人たちが、「国々を征服し、……つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた」のは信仰によってであった（ヘブル 11：33、34）。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である」（Ⅰヨハネ 5：4）。 PP 265.4

土地の分配についてのもう 1 つの要求は、カレブの精神と全く異なった精神をあらわしていた。それ はヨセフの子らであるエフライムの部族とマナセの半部族から持ち出されたものであった。この部族は人数が多いことから、2 倍の地域を要求した。彼らのために指定された土地は最も肥えた土地で、シャロンの肥沃な平野を含んでいた。しかし、谷間の主要な町の多くは、まだカナン人が占領していたので、この部族は彼らの領地を征服するほねおりと危険にしりごみし、すでに平定された地域を余分につけ加えてほしいと希望した。エフライムの部族はイスラエルの最も大きい部族の 1 つで、また、ヨシュア自身の属している部族であったので、彼らは当然特別な考慮をしてもらう資格があると考えた。「わたしは数の多い民となったのに、あなたはなぜ、わたしの嗣業として、ただ 1 つのくじ、1 つの分だけを、くださったのですか」と彼らは言った（ヨシュア 17：14）。しかしこの妥協することを知らない指導者に、厳格な公正を曲げさせることはできなかった。 PP 265.5

彼は答えて言った。「もしあなたが数の多い民ならば、林に上っていって、そこで、ペリジびとやレパイムびとの地を自分で切り開くがよい。エフライムの山地が、あなたがたには狭いのだから」（同 17：15）。 PP 266.1

彼らの答えは不平の真因を暴露していた。彼らはカナン人を追い払う信仰と勇気に欠けていたのである。「山地はわたしどもに十分ではありません。かつまた平地におるカナンびとは、……みな鉄の戦車を持っています」と彼らは言った（同 17：16）。 PP 266.2

イスラエルの神の力は民に対して保証されていたので、もし、エフライム人がカレブの勇気と信仰をもっていたら、どんな敵も彼らの前に立つことはできなかったであろう。困難と危険を避けようという彼らの明らかな願いに対して、ヨシュアはこう言って応じた。「あなたは数の多い民で、大きな力をもっています。……カナンびとは鉄の戦車があって、強くはあるが、あなたはそれを追い払うことができます」（同 17：17、18）。こうして彼らの議論は自身たちに不利な結果をもたらした。彼らが主張するように、彼らは強大な民だから、兄弟たちと同じように、自分たちの道を十分に切り開いて行くことができたのである。神の助けによって、彼らは鉄の戦車を恐れるにはおよばなかったのである。 PP 266.3

それまで、ギルガルが国家の本部であり、幕屋の所在地であった。しかし、今、幕屋はその恒久的な所在地として選ばれた場所へ引っ越すことになった。それは、エフライムの土地にある小さな町シロであった。シロはカナンの地の中央に近く、どの部族にとっても都合のよい場所だった。国のこの部分は完全に平定されていたので、礼拝者たちは妨害される恐れがなかった。「そこでイスラエルの人々の全会衆は、……シロに集まり、そこに会見の幕屋を立てた」（同 18：1）。幕屋がギルガルから引っ越したとき、まだ宿営していた部族はそれと一緒に移動して、シロの近くに営を張った。それから自分たちの嗣業の土地に散って行くまで、これらの部族はここにとどまっていた。 PP 266.4

契約の箱は、シロに 300 年間とどまっていたが、ついにエリの一家の罪のためにペリシテ人の手に落ち、シロも滅ぼされた。契約の箱はふたたびここの幕屋にもどること

なく、聖所の奉仕はついにエルサレムの神殿に移され、シロは忘れ去られた。そこにはかつて幕屋があった場所の跡があるだけである。ずっと後に、その運命はエルサレムに対する警告に用いられた。主は預言者エレミヤによってこう宣告された。「わたしが初めにわたしの名を置いた場所シロへ行き、わが民イスラエルの悪のために、わたしがその場所に対して行ったことを見よ。……それゆえわたしはシロに対して行ったように、わたしの名をもって、となえられるこの家にも行う。すなわちあなたがたが頼みとする所、わたしがあなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの所に行う」（エレミヤ 7：12、14）。 PP 266.5

「こうして国の各地域を嗣業として分け与えることを終ったとき」、すなわち、全部の部族にそれぞれの嗣業が割り当てられたあとで、ヨシュアは自分の要求を出した（ヨシュア 19：49）。カレブと同じに、ヨシユアに対しては嗣業について特別な約束が与えられていた。しかし、彼は広い領地を求めないで、1 つの町だけを要求した。「イスラエルの人々は……彼が 求めた町を与えたが、……彼はその町を建てなおして、そこに住んだ」（同 19：49、50）。この町につけられた名は、テムナテ・セラすなわち、「残った部分」という意味の名であった。それは、征服の戦利品をまっさきに自分のものとしないで、民の一番いやしい者にいたるまでの分配がすむまで自分の要求を延ばした征服者のりっぱな品性と無我の精神を永久にあかしするのであった。 PP 266.6

レビ人に割り当てられた町のうちの 6 つーーヨルダン川の両側にそれぞれ 3 つずつーーが、のがれの町として指定され、人を殺した者が逃げ込んで身の安全を保つことができた。これらの町を指定することについてはモーセから命じられていた。「あなたがたのために町を選んで、のがれの町とし、あやまって人を殺した者を、そこにのがれさせなければならない。これは……のがれる町であって、人を殺した者が会衆の前に立って、さばきを受けないうちに、殺されることのないためである」（民数記 35：11、12）。 PP 267.1

この情け深い措置は、昔、個人的に報復する慣習があったために必要となったのである。すなわち、殺人者の処罰は、遺族の一番近親の者か跡継ぎの者にまかされていたのである。有罪が明瞭な場合には、役人の裁判を待つ必要はなかった。報復者は犯人を

どこでも追跡して、見つけ次第殺してよかった。主は当時この慣習を廃止することを適当と思われなかった。そこで、故意でなく、人を殺した者の安全を保証する道を講じられたのであった。 PP 267.2

のがれの町は、国のどこからでも半日で歩いて行けるところに配置されていた。町へ通じる道はいつも手入れが行きとどいていて、道のいたるところにはっきりと太い字で「のがれ」という言葉が書かれている道しるべが立てられていて、逃げて行く人が一刻も遅れることがないようになっていた。ヘブル人でも、他国人でも、滞在者でも、だれでもこの町に逃げることができた。しかし無罪の人が早まって殺されることがなかった一方、有罪の人は処罰をまぬかれることができなかった。のがれてきた人の事件は当局者によって公平な審判を受け、故意の殺人でなかったことが判明したときだけ、のがれの町の中で保護されるのであった。有罪の者は報復する人に引き渡された。また、保護を受ける資格のある人は、定められたのがれの町の内部にとどまっているという条件つきで保護された。もし定められた境界外に出て、血の報復をする人にみつかったら、彼は主が備えられた方法を無視した罰にその生命を奪われるのであった。しかし、大祭司が死ねば、のがれの町にかくまわれていた人々は自由にその嗣業にもどることができた。 PP 267.3

殺人の裁判では、被告は、たとえ外部の証拠がどんなに不利であろうと、1 人の証人の証言で刑を宣告されることはなかった。主は、「人を殺した者、すなわち故殺人はすべて証人の証言にしたがって殺されなければならない。しかし、だれもただひとりの証言によって殺されることはない」と命じられた（同 35：30）。イスラエルに対するこの命令をモーセに与えられたのは、キリストであった。大教師イエスは、この地上に弟子たちと共に、人としておられたとき、まちがっている者をとり扱う方法を教えるにあたって、1 人の人の証言で罪の有無を定めてはならないという教えをくりかえされた。1 人の見解や意見によって、論議の的となっている問題を解決してはならない。これらのことにおいてはどんなときでも、2 人以上の者が一緒になって、共に責任を負うべきである。「それは、2 人または 3 人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである」（マタイ 18：16）。 PP 267.4

殺人の裁判を受けた者が有罪ときまれば、どんな身のしろ金によっても贖うことはできなかった。主は、こう命じておられた。「人の血を流すものは、人に血を流される」（創世記 9：6）。「あなたがたは死に当る罪を犯した故殺人の命のあがないしろを取ってはならない。彼は必ず殺されなければならない」（民数記 35：31）。「その者をわたしの祭壇からでも、捕らえて行って殺さなければならない」（出エジプト 21：14）。「地の上に流された血は、それを流した者の血によらなければあがなうことができない」（民数記 35：33）。国民の安全と純潔のために、殺人の 罪はきびしく罰せられることが要求された。人間の命は、神だけがお与えになることができるのであって、それは神聖に守られねばならない。 PP 267.5

古代の神の民に定められたのがれの町は、キリストのうちに備えられているのがれを象徴している。この世ののがれの町をお定めになった情け深い救い主が、ご自身の血を流すことによって、神の律法を犯した者に確実なのがれの道をお備えになっているのであって、彼らはそこに逃げ込んで第二の死から守られることができるのである。ゆるしを求めて彼のもとに行く魂を、どんな権力も彼の手から引き離すことはできないのである。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」「だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」「それは、……前におかれている望みを捕らえようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである」（ローマ 8：1、34、ヘブル 6：18）。 PP 268.1

のがれの町に逃げ込む者はぐずぐずしていることができなかった。家族も職業も放棄した。愛する人々に別れを告げるひまさえない。彼は死ぬか生きるかの境目にいるのであって、ほかのことは全部、安全な場所にたどりつくという 1 つの目的のために、犠牲にしなくてはならない。疲れも忘れ、困難も気にかけていられない。のがれる人は、町の壁の中にはいるまでは一刻も歩みをゆるめようとしなかった。 PP 268.2

罪人は、キリストのうちにかくれ場を見いだすまでは永遠の死にさらされている。のがれる者は、ぶらついたり、軽率であったりすれば生きる唯一の機会が失われるかもしれなかった。同じように、ぐずぐずしたり無頓着であったりすることによって魂は滅

びるかもしれないのである。大敵サタンは、神の聖なる律法を破る人のあとを追っているので、自分の危険に気づかないで、永遠ののがれの町の中に保護を熱心に求めようとしない人は、この破壊者の手に陥るであろう。 PP 268.3

囚人が、のがれの町の外へ出たならば、いつでも血の報復者に引き渡された。こうして人々は、彼らの安全を守るために限りない知恵によって定められた方法を守らねばならないことを教えられた。そのように、罪人が、罪のゆるしを求めてキリストを信じるだけでは十分でない。彼は、信じ、従うことによって、キリストの内にいなければならないのであろ。「もしわたしたちが、真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある」（ヘブル 10：26、27）。 PP 268.4

イスラエルの 2 つの部族、ガドとルベンは、マナセの半部族と共に、ヨルダンを渡る前に嗣業をもらっていた。牧畜を仕事とする民にとって、羊の群れや家畜にとって、見渡すかぎり牧草地となっているギレアデとバシャンの広大な高原と深い森は、カナンそのものにも見いだせなかった魅力であった。2 部族と半部族はここに定住を希望した。そして、彼らに割り当てられた軍勢で、ヨルダン川を渡る兄弟たちと共に行かせ、彼らがその嗣業を手に入れるまで共に戦わせることを約束していた。この義務は忠実に果たされた。10 部族がカナンに入ったとき、「ルベンの子孫とガドの子孫、およびマナセの部族の半ばは、……戦いのために武装し、……主の前に渡って、エリコの平野に着いた」（ヨシュア 4：12、13）。何年もの間、彼らは兄弟たちの側に立って勇敢に戦ってきた。今、彼らの嗣業の地に入る時が来た。彼らは兄弟たちと共に戦い、戦利品も共にしてきた。彼らは、「多くの貨財と、おびただしい数の家畜と、金、銀、青銅、鉄、および多くの衣服を持って天幕に帰り」、それらを家族や羊群と共に残った人々に分け与えた（同 22：8）。 PP 268.5

彼らはこれから主の聖所から遠く離れたところに住むのであった。ヨシュアは、彼らが孤立して放牧の生活を送る時に、彼らの境界付近に住んでいる異教の部族の慣習に

陥る誘惑が強いことを知って、彼らのことを気づかいながら、その出発を見送った。 PP 268.6

ヨシュアやその他の指導者たちが、まだ不安な予 感に襲われていたとき、奇妙な知らせがとどいた。ヨルダン川のほとりで、イスラエルが奇跡的に川を渡った場所の近くに、2 部族半の人々が、シロの燔祭の祭壇に似たような大きな祭壇を建てたというのであった。神の律法には、聖所以外に礼拝の場所を設けることは死刑をもって禁じられていた。もしその祭壇の目的がこのようなものであったら、そのままにしておけば、人々を真の信仰から離れさせることになるだろう。 PP 268.7

民の代表者たちはシロに集まり、激しい興奮と義憤のうちに、すぐに違反者たちと戦うことが提案された。しかし、慎重派の説得によって、まず代表団を送って 2 部族半の人々から彼らの行為についての説明を求めることにした。各部族から 10 人のつかさが選ばれた。そのかしらはピネハスで、彼はペオルの問題で特に熱心だった人である。 PP 269.1

2 部族半の人々が、なんの説明もしないで、このように重大な疑惑を招く行為をしたことは、彼らの過失であった。代表者たちは、この兄弟たちがまちがっていることはもちろんのこととして、鋭い譴責をもって彼らに迫った。代表者たちは、彼らの行為は主に対する反逆であると言って責め、イスラエルがバアル・ペオルに加わったとき、どのように刑罰がくだったかを思い出すようにと告げた。全イスラエルを代表して、ピネハスは、ガドとルベンの子孫に、もし彼らがいけにえを捧げる祭壇のない土地に住みたくないのだったら、こちら側の兄弟たちの所有と特権をよろこんで分けるつもりだと述べた。 PP 269.2

これに答えて、2 部族半の人々は、彼らの祭壇はいけにえを捧げるためのものではなくて、川によって分けられてはいるけれども、彼らもカナンの兄弟たちと同じ信仰であるという証拠にすぎないのだと説明した。将来彼らの子孫が、イスラエルと関係のない者として幕屋から除外されるのではないかと彼らは恐れたのであった。もしそういうことになったら、この祭壇は、シロの主の祭壇に型どって造られているので、これを建てた人々も生きた神の礼拝者であるという証拠になるというのであった。 PP 269.3

代表団は、この説明を非常な喜びをもって受け入れ、すぐにその知らせを、彼らを派遣した人々のもとへ持ち帰った。戦う気持ちは消え去り、人々は喜んで一致し、神をほめたたえた。 PP 269.4

ガドとルベンの子らは、今その祭壇の上に、それが建てられた目的を示す碑文を刻んだ。それには、「これは、われわれの間にあって、主が神にいますというあかしをするものである」と書かれた（同 22：34）。こうして彼らは将来の誤解を防ぎ、誘惑のもとになりそうなものをとり除くことに努力した。 PP 269.5

最も価値のある動機に動かされている人々の間でさえ、ちょっとした誤解から重大な問題がなんとよく起こることであろう。そして、礼儀と寛容が実行されない時に、なんという重大で致命的になりかねない結果が起こり得ることであろう、10 部族は、アカンの事件の時に、彼らが自分たちの間にあった罪を発見する注意力に欠けていたことを神から譴責されたことを思い出したのである。そこで彼らは、敏速かつ熱心に行動しようと決心した。しかし、先の過失を避けようとするあまりに、極端になり過ぎたのだった。事情の真相を礼儀をもってたずねようとしないで、彼らは譴責と非難をもって兄弟たちに迫った。ガドとルベンの男たちが、同じ精神でこれに応じたら、戦う結果になったであろう。罪をゆるやかにあしらうことは避けねばならないが、一方、またきびしすぎる批判と、根拠のない疑いを避けることもたいせつである。 PP 269.6

自分自身の行為についてのちょっとした非難にも敏感であるにかかわらず、まちがっていると思われる人をあつかうのにはきびしすぎる人が多い。まちがった立場から、非難や譴責によって救われた者はない。むしろそのために正しい道からいっそう遠く離れ、良心の声にさからって心をかたくなにするようになる人が多い。親切な精神、礼儀正しい、寛容な態度は、あやまっている人々を救い、多くの罪をおおうのである。 PP 269.7

ルベン人とその仲間たちが示した知恵は、まねる価値がある。彼らは真の宗教運動を推進させようとまじめに努力していたのに、あやまって判断され、譴 責されたが、怒りを表さなかった。彼らは自己弁護を試みる前に礼儀をもって忍耐強く兄弟たちの非

難に耳を傾け、それから自分たちの動機を説明し、悪意がないことを示した。こうして、重大な結果をはらんだ問題が友好的に解決された。 PP 269.8

まちがって非難されても、正しい人は冷静で思慮深い態度をとることができる。神は、人から誤解され、まちがったことを言われていることを全部ご存じであるから、問題を神のみ手にまかせて安心していることができる。神は、アカンの罪をさぐり出されたのと同じように確実に、ご自分に信頼する人の主張を弁護して下さる。キリストの精神に動かされている人は、寛容で情け深い愛の心をもつのである。 PP 270.1

民の間に一致と兄弟の愛があることが神のみこころである。十字架におつきになる前のキリストの祈りは、ご自分が父と 1 つであられるように弟子たちが 1 つであるように、また、神がキリストをつかわされたことを世が信じるようにということであった。この最も感動的で驚くべき祈りは、各時代を通じて、われわれの耳にまで聞こえてくるのである。キリストのみことばは、「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします」であった（ヨハネ 17：20）。 PP 270.2

真理の原則は 1 つでも犠牲にすべきではないが、このような一致の状態に達することかわれわれのふだんの目標でなければならない。これこそわれわれが弟子であることの証拠である。イエスは言われた。「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」（同 13：35）。使徒ペテロは、教会にこう勧めている。「あなたがたは皆、心をひとつにし、同情し合い、兄弟愛をもち、あわれみ深くあり、謙虚でありなさい。悪をもって悪に報いず、悪口をもって悪口に報いずかえって、祝福をもって報いなさい 1 あなたがたが召されたのは、祝福を受け継ぐためなのである」（Ｉペテロ 3：8、9）。 PP 270.3

第 49 章　ヨシュアの決別の言葉

本章は、ヨシュア記 23 章、24 章に基づく PP 270.4

征服の戦いは終わり、ヨシュアは、彼の故郷のテムナテ・セラの平和な家に引退した。「主がイスラエルの周囲の敵を、ことごとく除いて、イスラエルに安息を賜わってのち、久しくたち、……ヨシュアはイスラエルのすべての人、その長老、かしらたち、さばきびと、つかさびとたちを呼び集め」た（ヨシュア 23：1、2）。 PP 270.5

人々が、それぞれの領地に落ちついてから、数年が経過した。そして、以前、イスラエルに刑罰をもたらした同じ罪悪が、すでに現れているのを見ることができた。ヨシュアは、自分の体が徐々に老衰していくのを感じ、まもなく務めを終えなければならないことを自覚して、彼の民の将来を非常に憂慮した。人々がもう 1 度この年老いた指導者のまわりに集まったとき、彼は父親以上の愛情をもって、彼らに語りかけたのである。「あなたがたは、すでにあなたがたの神、主が、このもろもろの国びとに行われたすべてのことを見た。あなたがたのために戦われたのは、あなたがたの神、主である」と、彼は言った（同 23：3）。カナン人はすでに征服されたとは言っても、彼らは、まだ、イスラエルに約束された土地の相当の部分を所有していた。だからヨシュアは、人々が安楽に落ちつくことなく、これらの偶像教国の人々を全く追放するように主が命じておられることを忘れないように勧告した。 PP 270.6

人々は、一般に、異教徒を追放する仕事の完成を急がなかった。部族は、おのおのの領地に分散し、軍隊も解散されたことだから、戦いを再開することは困難で、できそうもない企てのように思われた。しかし、ヨシュアは宣言した。「あなたがたの前から、その国民を打ち払い、あなたがたの目の前から追い払われるのは、あなたがたの神、主である。そしてあなたがたの神、主が約束されたように、あなたがたは彼らの 地を獲るであろう。それゆえ、あなたがたは堅く立って、モーセの律法の書にしるされていることを、ことごとく守って行わなければならない。それを離れて右にも左にも曲ってはならない」（同 23：5、6）。 PP 270.7

ヨシュアは、人々自身を証人として、彼らに訴え、彼らが条件に応じているかぎり、神は、忠実に約束を成就なさったことを告げた。「あなたがたがみな、心のうちにまた、肝に銘じて知っているように、あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、1 つも欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、1 つも欠けたものはなかった」と、彼は言った（同 23：14）。彼は、主がその約束を成就なさったように、刑罰の警告もまた成就なさるであろうと言った。「あなたがたの神、主があなたがたについて約束された、もろもろの良いことが、あなたがたに臨んだように、主はまた、もろもろの悪いことをあなたがたに下」す。「もし、あなたがたの神、主が命じられたその契約を犯」すならば「主はあなたがたにむかって怒りを発し、あなたがたは、主が賜わった良い地から、すみやかに滅びうせるであろう」（同 23：15、16）。 PP 271.1

神が、神の民を愛される愛は非常に大きいから、民の罪をお赦しになるというもっともらしい説を唱えて、サタンは多くの人々を欺くのである。神の脅迫の言葉は、神の道徳的政府の中で、ある種の役割を果たしはするが、それは文字通り成就するものではないと、サタンは言うのである。しかし、神は、その被造物に対するすべての扱いにおいて、罪の本性を明らかにあらわし、その確実な結果は、悲惨と死であることを実証して、義の原則を維持なさった。罪を無条件で赦すことは、これまでになかったし、これからもないのである。そのような赦しは神の政府の基礎そのものである義の原則を廃棄することになる。それは、堕落しない宇宙を驚嘆させることであろう。神は、忠実に罪の結果を指摘なさった。ところが、もしその警告が真実でないとすれば、どうして、神の約束が成就することを確かめることができようか。正義を廃棄するようないわゆる慈愛は、慈愛ではなくて弱さである。 PP 271.2

神は、生命の与え主である。初めから、神の律法はみな生命を与えるように定められたものである。しかし、罪が、神のお設けになった秩序を破壊して、不調和をもたらした。罪が存在するかぎり、苦難と死は避けられない。人間が罪の恐ろしい結果から、自分でのがれる希望を持つことができるのは、ただ、贖い主がわれわれに代わって罪ののろいを負ってくださったことのみによるのである。 PP 271.3

ヨシュアの死に先だって、部族のかしらと代表者たちは、彼の命令に従って、シケムに集まった。占領したすべての地の中で、この場所ほど思い出の多い場所はなかった。彼らは、アブラハムとヤコブに対する神の契約を思い出し、カナン入国に際して彼ら自身が行った厳粛な誓いをも想起した。ここにはエバル山とゲリジム山があって、彼らが、今、死期の近づいた指導者の前に集まって、くり返そうとしている誓約の無言の証人として立っていた。どこを向いても、神が彼らのために行われた証拠があった。神は、彼らが労することをしなかった地、彼らが建てなかった町、彼らが植えなかったぶどう畑やオリブ畑を、彼らにお与えになった。ヨシュアはもう 1 度イスラエルの歴史を回顧し、神の驚くべきお働きをふたたび述べて、すべての者が神の愛と恵みを深く感じて、「まごころと、真実とをもって」主に仕えるように勧めた（同 24：14）。 PP 271.4

ヨシュアの指示に従って、契約の箱がシロから持って来られた。これは、非常に厳粛な時の 1 つであって、この神の臨在の象徴は、彼が人々に与えようとした印象を強固なものにした。彼は、イスラエルに対する神の恵みを示したあとで、主の名によって、彼らが誰に仕えるかを選べと人々に呼びかけた。偶像礼拝は、なお、ある程度まで、ひそかに行われていた。それでヨシュアは、彼らに決心を促して、イスラエルから、この罪を除こうとしたのである。「もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、……あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい」と彼は言った（同 24：15）。ヨシュアは、強制的でなくて、彼らが心から神に仕えるようになることを望んだ。神 を愛することが、宗教の基礎そのものである。報酬を望んだり、あるいは、刑罰を恐れたりする気持ちだけから奉仕に携わるのでは、なんの益もない。神は、公然と反逆することと同様に、偽善と単なる形式的礼拝をおきらいになる。 PP 271.5

年老いた指導者は、人々に、自分が言ったことをあらゆる方面からよく考えて、彼らの周囲の堕落した偶像教国のような生活を真に望むかどうかを決定するように勧告した。もし力と祝福との根源である主に従うのがいけなければ、アブラハムが召し出されてきた「あなたがたの先祖が……仕えた神々でも」、また、「あなたがたの住む地のアモリびとの神々でも」、彼らが仕える者をきょう選べと言った（同 24：15）。彼のこうした最後の言葉は、イスラエルにとって鋭い譴責であった。 PP 272.1

アモリ人の神々は、その礼拝者を保護することができなかった。あの、アモリという悪い国は、その憎むべき、退廃的罪のために滅ぼされて、彼らがかつて所有していた良い国土は、神の民に与えられたのである。アモリ人が礼拝して滅ぼされたような神々を、イスラエルの人々が選んで礼拝するとは、なんと愚かなことであろう。「わたしとわたしの家とは共に主に仕えます」とヨシュアは言った（同 24：15）。指導者の心に燃えたのと同じ清い熱望が人々に伝わった。彼の訴えに全員は答えて言った。「主を捨てて、他の神々に仕えるなど、われわれは決していたしません」（同 24：16）。 PP 272.2

「あなたがたは主に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、……あなたがたの罪、あなたがたのとがを、ゆるされないからである」とヨシュアは言った（同 24：19）。真の改革が伴われるに先だって、人々は、自分たちの力だけでは、神に従うことが全く不可能であることを自覚しなければならなかった。彼らは律法を犯したために、罪人とされ、なんののがれる道も与えられなかった。彼らが自分自身の力と義にたよっているかぎり、罪の赦しを得ることは不可能であった。彼らは、神の完全な律法の要求を満たすことはできず、神に仕えると誓ってもむだであった。ただキリストを信じる信仰によってのみ、罪の赦しが与えられ、神の律法に従う力を受けることができるのである。彼らが神に受け入れられようとするならば、自分の力にたよって救いを得ようとするのをやめ、約束の救い主の功績に全的に信頼しなければならない。 PP 272.3

ヨシュアは、聴衆がよく自分たちの言葉を熟考して、彼らがなしとげられないような誓いをしないように、彼らを導こうと努めた。彼らは、熱誠こめて宣言をくり返した。「いいえ、われわれは主に仕えます」（同 24：21）。彼らは主を選んで、主に仕えることの証人と自らなることをおごそかに承認して、「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に聞きしたがいます」と、彼らの忠誠の誓約をもう一度くり返したのである（同 24：24）。 PP 272.4

「こうしてヨシュアは、その日、民と契約をむすび、シケムにおいて、定めと、おきてを、彼らのために設けた」（同 24：25）。彼は、この厳粛な誓約の記録を書いて、

律法の書と共に、契約の箱のそばに置いた。そして彼は、記念の柱を建てて言った。「『見よ、この石はわれわれのあかしとなるであろう。主がわれわれに語られたすべての言葉を、聞いたからである。それゆえ、あなたがたが自分の神を捨てることのないために、この石が、あなたがたのあかしとなるであろう』。こうしてヨシュアは民を、おのおのその嗣業の地に帰し去らせた」（同 24：27、28）。 PP 272.5

イスラエルのためになすべきヨシュアの働きは終わった。彼は、「全く主に従った」（民数記 32：12）。そして彼は、神の書の中で「主のしもべ」と書かれている（ヨシュア 24：29）。彼の労苦の恩恵をこうむった時代の人々の歴史は、公の指導者としての彼の品性の尊い証言である。「イスラエルはヨシユアの世にある日の間、また……ヨシュアのあとに生き残った長老たちが世にある日の間、つねに主に仕えた」（同 24：31）。 PP 272.6

第 50 章　10 分の 1 献金と捧げ物

ヘブル人の制度では、人々の収入の 10 分の 1 は、神を公に礼拝することを支持するために、聖別されていた。モーセは、このようにイスラエルに言明した。「地の 10 分の 1 は地の産物であれ、木の実であれ、すべて主のものであって、主に聖なる物である」「牛または羊の 10 分の 1 については、すべて……10 番目……は、主に聖なる物である」（レビ 27：30、32）。 PP 273.1

しかし、10 分の 1 制度は、ヘブル人が創設したものではなかった。主は、初期のころから、10 分の 1 をご自分のものとして主張され、それは、人々が認めて尊んだことであった。アブラハムは、いと高き神の祭司、メルキゼデクに 10 分の 1 を捧げた（創世記 14：20 参照）。ヤコブは、家を追われて放浪の旅に出たとき、ベテルで「あなたがくださるすべての物の 10 分の 1 を、わたしは必ずあなたにささげます」と主に約束した（同 28：22）。イスラエルの国が建設された時に、10 分の 1 の律法は、神のお定めになった定めの 1 つとして再確認された。彼らの繁栄は、これに従うか否かにかかっていた。 PP 273.2

10 分の 1 と捧げ物の制度は、神が、被造物にあらゆる祝福をお与えになる根源であるとともに、人間は、神が摂理の中にお与えになるよい賜物に対して、人間は、神に感謝すべきであるという大真理を人々に強く印象づけるためのものであった。 PP 273.3

「神は、すべての人々に命と息と万物とを与え」られた（使徒行伝 17：25）。「林のすべての獣はわたしのもの、丘の上の千々の家畜もわたしのものである」（詩篇 50：10）。「銀はわたしのもの、金もわたしのものである」と主は言われる（ハガイ 2：8）。そして、人間に、富を得る力をお与えになるのも神である（申命記 8：18 参照）。万物は、神からのものであることを認めたしるしとして、主の恵みの一部を、神の礼拝を維持するために供え物や捧げ物として、主にお返しすることを指示なさった。 PP 273.4

「10 分の 1 は……主のものであ」る。ここに、安息日の律法に用いられたのと同じ表現形式が用いられている。「7 日目はあなたの神、主の安息である」（出エジプト 20：10）。神は、人間の時間と財産の一定の部分をご自分のものとして保留なさった。そこで、人間は、そのどちらであっても私用に供すれば、罪を犯すことになるのである。 PP 273.5

10 分の 1 は、聖所の奉仕のために聖別された部族、レビ人のためだけに用いるために捧げられた。しかし、宗教的ささげ物は、これだけではなかった。初めの幕屋も、後に建てられた神殿も同様に、全く人々の自由献金によって建設されたのである。さらに、修理その他の諸費用のために、モーセは、人口調査のたびに各自は半シケルずつを「幕屋の用に当てる」ために捧げることを指示した。ネヘミヤの時代には、こうした目的のために毎年捧げ物をした（出エジプト 30：12～16、列王紀下 12：4、5、歴代志下 24：4～13、ネヘミヤ 10：32、33 参照）。罪祭や酬恩祭も、ときどき神の前に捧げられた。年ごとの祭りの時には、こうした供え物がおびただしく捧げられた。そして、貧者のためには、最もゆるやかな規則が設けられていた。 PP 273.6

10 分の 1 の保留以前でさえ、神の要求を認めなければならなかった。地のすべての産物の最初に実ったものは、神に捧げられた。羊の毛を刈った時や、麦を脱穀した時の最初のもの、油や酒の最初のものは、神のものとされた。それと同様にすべての動物のういごは、神のものであった。また、長子のためには、贖いの価を払ったのである。最初の実は、聖所で主の前に捧げられ、それから、それは祭司たちの用に供された。 PP 273.7

こうして、人々は常に神が彼らの畑や羊の群れや家畜などの真の所有者であって、神が、彼らの種まきや収穫のときに日光と雨をお与えになったこと、また、彼らの所有のすべては、神がお造りになったものであって、神が、彼らを神の財産の管理人になさったことを思い起こさせられた。 PP 273.8

イスラエルの人々が、畑や果樹園やぶどう畑の初物をたくさん携えて、幕屋に集まったとき、彼らは、人々の前で神の恵みをたたえたのである。祭司が、その捧げ物を受け取ったときに、それを捧げた人はあたかも自分が主のみ前にあるかのように言うので

あった。「わたしの先祖は、さすらいの一アラムびとでありました」（申命記 26：5）。そして、彼らがエジプトに下って行って、しいたげられたことと、そこから救い出されたことを述べ、「主は強い手と、伸べた腕と、大いなる恐るべき事と、しるしと、不思議とをもって、われわれをエジプトから導き出し、われわれをこの所へ連れてきて、乳と蜜の流れるこの地をわれわれに賜わりました。主よ、ごらんください。あなたがわたしに賜わった地の実の初物を、いま携えてきました」と言った（同 26：8～10）。 PP 274.1

宗教と慈善の目的のためにヘブル人に要求された献金額は、彼らの収入の 4 分の 1 に及んだ。人々の財産に、このような重税が課せられたのでは、人々は貧困に陥ってしまうと思われるであろう。ところが、この規則に忠実に従うことが、彼らの繁栄の条件の 1 つであった。彼らの服従を条件に、神は、こう約束なさった。「わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を、滅ぼさないようにしよう。……こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者ととなえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる」（マラキ 3：11、12）。 PP 274.2

預言者ハガイの時代には、人々が任意の捧げ物すら出し惜しんで神のご用のために捧げなかった結果の著しい例があげられている。ユダヤ人は、バビロンの捕囚から帰還後、主の神殿の再建にとりかかった。ところが頑強な敵の反対にあって、工事は中断された。そして、ひどいひでりがやって来て、彼らは困窮状態に陥り、神殿の建築完成は不可能だと思うようになった。「主の家を再び建てる時は、まだこない」と人々は言っていた。しかし、主の預言者は彼らに言った。「主の家はこのように荒れはてているのに、あなたがたは、みずから板で張った家に住んでいる時であろうか。それで今、万軍の主はこう言われる、あなたがたは自分のなすべきことをよく考えるがよい。あなたがたは多くまいても、取入れは少なく、食べても、飽きることはない。飲んでも、満たされない。着ても、暖まらない。賃銀を得ても、これを破れた袋に入れているようなものである」（ハガイ 1：2～6）。そして、その理由が述べられている「あなたがたは多くを望んだが、見よ、それは少なかった。あなたがたが家に持ってきたとき、わたしは

それを吹き払った。これは何ゆえであるかと、万軍の主は言われる。これはわたしの家が荒れはてているのに、あなたがたは、おのおの自分の家の事だけに、忙しくしている。それゆえ、あなたがたの上の天は露をさし止め、地はその産物をさし止めた。また、わたしは地にも、山にも、穀物にも、新しい酒にも、油にも、地に生じるものにも、人間にも、家畜にも、手で作るすべての作物にも、ひでりを呼び寄せた」（同 1：9～11）。「20 枡の麦の積まれる所に行ったが、わずかに 10 枡を得、また 50 桶をくもうとして、酒ぶねに行ったが、20 桶を得たのみであった。わたしは立ち枯れと、腐り穂と、ひょうをもってあなたがたと、あなたがたのすべての手のわざを撃った」（同 2：16、17）。 PP 274.3

こうした警告に目をさまして、人々は神の家の建築にとりかかった。すると、主の言葉が彼らに与えられた。「あなたがたはこの日より後、すなわち、9 月 24 日よりの事を思うがよい。また主の宮の基をすえた日から後の事を心にとめるがよい。……わたしはこの日から、あなたがたに恵みを与える」（同 2：18、19）。 PP 274.4

「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある」と賢者は言っている（箴言 11：24）。同じ教訓を、使徒パウロは新約聖書で教えている。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである」（Ⅱコリント 9：6、8）。 PP 274.5

神は、神の民イスラエルが、地のすべての住民に光を掲げる者になることをお望みであった。彼らは、神を公に礼拝することを維持して、生きた神の存在と主権のあかしを立てていたのである。そして、神に対する彼らの忠誠と愛の表現として、この礼拝を保っていくことが彼らの特権であった。主は、天からの賜物を受けた者たちの努力と捧げ物によって、光と真理が地に行きわたるようになることをお定めになった。神は、天使たちを、神の真理の使者になさることもおできであった。シナイ山から律法を宣言なさったように、ご自分の声で、みこころを人に知らせることもおできであった。しかし、

神は無限の愛と知恵によって、人間を召して、神ご自身の共労者となし、彼らを選んでこの働きをおさせになった。 PP 275.1

イスラエルの時代に、10 分の 1 と任意の捧げ物とは神の礼拝の儀式を維持するために必要であった。この時代に、神の民は、それ以下のものを捧げるべきであろうか。キリストがお与えになった原則によれば、われわれの捧げ物は、われわれに与えられた光と特権に比例してなされるべきである。「多く与えられた者からは多く求められ」る（ルカ 12：48）。救い主は、弟子たちを送り出されたとき、「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と彼らに言われた（マタイ 10：8）。われわれの祝福と特権が増加するに従い、特に、栄光に包まれた神のみ子の無比の犠牲を前にしては、救いの使命を他の人々に伝えるために、もっと多くの捧げ物をして、感謝を表すべきではないだろうか。福音の事業は、拡大するにつれて、昔よりは多くの資金がその維持のために必要である。それで、10 分の 1 と捧げ物の律法は、ヘブル時代におけるよりは、今日、さらにその必要が緊急度を加えた。もし神の民が、非キリスト教的な清められていない方法で資金を得る代わりに、多くの任意の捧げ物によって神の働きを支持したならば、神のみ名があがめられ、もっと多くの魂が、キリストに導かれることであろう。 PP 275.2

幕屋建設のためのモーセの募金計画は、大成功であった。勧める必要はなかった。現代の教会がよく行うような方法は何 1 つ用いなかった。彼は、大宴会を開かなかった。また、人々をはなやかなところ、ダンス場、一般の娯楽場などに招待しなかった。神の幕屋の建設資金を得るために、宝くじや、この種の世俗の方法を制定なさらなかった。主は、イスラエルの子らに、捧げ物を携えてくるように頼めとお命じになった。モーセは、心から喜んで捧げる者からは、誰からでも捧げ物を受け取った。そして、全部用いることができないほどたくさんの捧げ物を人々が携えて来たので、モーセは、人々にもう持って来ないようにと命じたほどであった。 PP 275.3

神は、人々を神の管理者になさった。神が人々の手にお任せになった財産は、福音を広く伝えるために神がお備えになった資金である。忠実なしもべには、もっと大きな責任が神から負わせられる。「わたしを尊ぶ者を、わたしは尊」ぶと主は言われる（サ

ムエル記上 2：30）。「神は喜んで施す人を愛して下さるのである」。そして神の民が、「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく」感謝して供え物や捧げ物を神のところに携えて来るとき、神が約束なさったように、神の祝福がそれに伴うのである（Ⅱコリント 9：7）。「わたしの宮に食物のあるように、10 分の 1 全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる」（マラキ 3：10）。 PP 275.4

第 51 章　貧しい者への神の配慮

貧者のために備えると同様に、人々が集会に集まることを奨励するために、すべての収入の第二の 10 分の 1 が要求された。第一の 10 分の 1 について、主は、「わたしはレビの子孫にはイスラエルにおいて、すべて 10 分の 1 を嗣業として与え」ると言われた（民数記 18：21）。しかし、第二の 10 分の 1 につ いては、次のようにお命じになった。「そしてあなたの神、主の前、すなわち主がその名を置くために選ばれる場所で、穀物と、ぶどう酒と、油との 10 分の 1 と、牛、羊のういごを食べ、こうして常にあなたの神、主を恐れることを学ばなければならない」（申命記 14：23、14：29、16：11～14 参照）。この 10 分の 1、または、それと同額の金を 2 年の間、聖所が建てられたところに携えてくることになっていた、神に感謝の捧げ物を捧げ、祭司のために規定された分も捧げたあとで、献納者はそめ残りの部分を宗教的祭りに用い、レビ人、他国人、孤児、寡婦などを呼んで食べさせなければならなかった。こうして年ごとの祭りの時に、感謝の捧げ物をして、祭りを行う準備がされていて、人々は、祭司やレビ人との交わりに導かれ、神の奉仕について教えと励ましを受けることができた。 PP 275.5

ところが、3 年目になるといつでもこの第二の 10 分の 1 は、「町のうちで彼らに飽きるほど食べさせ」とモーセが言ったように、レビ人や貧者を、家庭でもてなすことになっていた（申命記 26：12）。この 10 分の 1 は、慈善ともてなしの資金を提供した。 PP 276.1

貧者のためには、さらに考慮が払われていた。神のご要求に応じることに続いて、貧者に対する物惜しみしない、慈愛のこもったもてなしの精神ほど、モーセの律法の中で著しく表されているものはほかにない。神は神の民を大いに恵むとお約束になったとはいえ、貧困が全く彼らの間からなくなることは、神のみ旨ではなかった。神は、地上から貧者がいなくなることはないと言われた。神の民の間には、常に、彼らの同情、親切、愛を働かせる人々があるものである。今日と同様に、その時でも、不幸な人や病気

の人、また財産を失った人がいた。しかし、彼らが神から受けた教えに従っているかぎり、彼らの間にこじきをする者も、食に困る者もないはずであった。 PP 276.2

神の律法は、貧者が地の産物の幾分かを分けまえとして受ける権利を与えた。飢えた時には、隣人の畑、果樹園、ぶどう園などに行って、自由に穀物やくだものを食べて飢えを満たしてもよかった。イエスの弟子たちが安息日に畑を通りながら穀物を取って食べたのは、そうしてよいことになっていたからであった。 PP 276.3

収穫の畑、果樹園、ぶどう園などの落ち穂は、すべて貧者のものであった。「あなたが畑で穀物を刈る時、もしその 1 束を畑におき忘れたならば、それを取りに引き返してはならない。……あなたがオリブの実をうち落すときは、ふたたびその枝を捜してはならない。……またぶどう畑のぶどうを摘み取るときは、その残ったものを、ふたたび捜してはならない。それを寄留の他国人と孤児と寡婦に取らせなければならない。あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったことを記憶しなければならない」とモーセは言った（同 24：19～22、レビ 19：9、10 参照）。 PP 276.4

7 年目ごとに、貧者のために特別の用意がなされた。それは、安息の年と呼ばれて、収穫の終わった時から始まった。収穫の次の種まきの時には、種をまいてはならなかった。彼らは、春、ぶどう畑の手入れをしてはならなかった。そして、収穫もぶどうの実りも期待してはならなかった。地から自然に実ったものは、生のまま食べてもよかったが、そのどの部分でも倉にたくわえてはいけなかった。この年の収穫は、寄留の他国人、孤児、寡婦、また、野の獣さえも自由に食べてよかった（出エジプト 23：10、11、レビ 25：5 参照）。 PP 276.5

しかし、土地が通常人々の必要を満たすだけを産出していたのであれば、収穫を集めない年は、いったいどのようにして生きていたのであろうか。これに対して、神は十分なものを備えることを約束なさった「わたしは命じて 6 年目に、あなたがたに祝福をくだし、3 か年分の産物を実らせるであろう。あなたがたは 8 年目に種をまく時には、なお古い産物を食べているであろう。9 年目にその産物のできるまで、あなたがたは古いものを食べることができるであろう」（レビ 25：21、22）。 PP 276.6

安息の年を守ることは、土地にも人々にも共に有益なことであった。一季節の間、耕さないでおいた土地は、その後生産力が増大した。人々は畑の労働から解放された。そして、その間、種々の活動に従事することができるのであったが、すべての者は、暇の あるゆっくりした生活を楽しみ、その次の年からの労働に備えて体力をたくわえる機会としたのである。彼らは、もっと多くの時間を瞑想と祈祷に用い、主のお教えと要求なさることを学び、家族の者らを教えるために費やした。 PP 276.7

安息の年に、ヘブルの奴隷は解放され、しかも、何も持たせずに送り出してはならなかった。主は、こうお命じになった。「彼に自由を与えて去らせる時は、から手で去らせてはならない。群れと、打ち場と、酒ぶねのうちから取って、惜しみなく彼に与えなければならない。すなわちあなたの神、主があなたを恵まれたように、彼に与えなければならない」（申命記 15：13、14）。 PP 277.1

労働者の賃銀はすみやかに払わなければならなかった。「貧しく乏しい雇人は、同胞であれ、またはあなたの国で、町のうちに寄留している他国人であれ、それを虐待してはならない。賃銀はその日のうちに払い、それを日の入るまで延ばしてはならない。彼は貧しい者で、その心をこれにかけているからである」（同 24：14、15）。 PP 277.2

また、仕事を逃げてきた者の取り扱いについても特別の指示が与えられた。「主人を避けて、あなたのところに逃げてきた奴隷を、その主人にわたしてはならない。その者をあなたがたのうちに、あなたと共におらせ、町の 1 つのうち、彼が好んで選ぶ場所に住ませなければならない。彼を虐待してはならない」（同 23：15、16）。 PP 277.3

貧者にとって、安息の年は、負債から解放される年であった。ヘブル人は、常に利息なしで金を貸して、貧しい兄弟を助けるように命じられていた。貧者から利息を取ることは堅く禁じられていた。「あなたの兄弟が落ちぶれ、暮して行けない時は、彼を助け、寄留者または旅びとのようにして、あなたと共に生きながらえさせなければならない。彼から利子も利息も取ってはならない。あなたの神を恐れ、あなたの兄弟をあなたと共に生きながらえさせなければならない。あなたは利子を取って彼に金を貸してはな

らない。また利益をえるために食物を貸してはならない」（レビ 25：35～37）。もし負債が、解放の年まで未払いのままであれば、元金そのものを取り立てることはできなかった。このために、困っている兄弟に対する援助を差し控えないように、はっきりした警告が与えられていた。「もしあなたの兄弟で貧しい者がひとりでも……おるならば、その貧しい兄弟にむかって、心をかたくなにしてはならない。また手を閉じてはならない。……あなたは心に邪念を起し、『第 7 年のゆるしの年が近づいた』と言って、貧しい兄弟に対し、物を惜しんで、何も与えないことのないように慎まなければならない。その人があなたを主に訴えるならば、あなたは罪を得るであろう」「貧しい者はいつまでも国のうちに絶えることがないから、わたしは命じて言う、『あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者とに、手を開かなければならない』」「その必要とする物を貸し与え、乏しいのを補わなければならない」（申命記 15：7～9、11、8）。 PP 277.4

多く施しても、困るようになるなどと憂慮する必要は誰もなかった。神のいましめに従えば、必ず繁栄するのであった。「あなたは多くの国びとに貸すようになり、借りることはないであろう。またあなたは多くの国びとを治めるようになり、彼らがあなたを治めることはないであろう」と神は言われた（同 15：6）。 PP 277.5

「安息の年をななたび」「7 年を 7 回」数えると、大いなる解放の年、ヨベルの年になる。「あなたは……全国にラッパを響き渡らせなければならない。その 50 年目を聖別して、国中のすべての住民に自由をふれ示さなければならない。この年はあなたがたにはヨベルの年であって、あなたがたは、おのおのその所有の地に帰り、おのおのその家族に帰らなければならない」（レビ 25：8、9、10）。 PP 277.6

「7 月の 10 日」の「贖罪の日」に、ヨベルのラッパが鳴り響いた。ユダヤ人の住んでいるあらゆる場所で、その音が響き、ヤコブのすべての子らに、解放の年を迎えるように呼びかけた。腰罪の日に、イスラエルの罪の償いが完了し、人々は、喜ばしい心をもって、ヨベルの年を迎えた。 PP 277.7

安息の年と同様に、土地には種を蒔かず、収穫もしてはならなかった。そして、地が生じたものは、すべて貧者の正当な所有とみなされた。ヘブルの奴隷のある階級のも

の、すなわち、安息の年に自由を得なかった者は、すべてこの時に自由にされた。しかし、ヨベルの年を特に著しいものにしたのは、すべての土地が、その初めの所有主にもどったことであった、神の特別の指示に従って、土地はくじによって分配されていた。分配が行われたあとでは、誰もそれを自由に交換することばできなかった。貧しくなって、売らなければならないようになるまで、土地を売ってはならなかった。それでも、なお、その人かその人の親族が買いもどしたければ、買い手は売ることを拒んではならなかった。そして、買いもどされないままでいれば、その土地はヨベルの年に、最初の所有主かその子孫に返ってきたのである。 PP 278.1

主は、イスラエルに言われた。「地は永代には売ってはならない。地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしと共にいる寄留者、また旅びとである」（同25：23）。土地は神のものであって、彼らは、一時所有することを許されたこと、神が最初の所有主であり、正当な持ち主であること、そして、神は、貧者や不幸な人々を特に考慮することを望んでおられるという事実を、人々の心に強く印象づけなければならなかった。貧者は、富者と同様に、神の世界において同じ権利を持っていることを、すべてのものに印象づけなければならなかった。 PP 278.2

慈愛に富みたもうわれわれの創造主は、このような規定を設けて、苦しみを和らげ、希望の光を与え、欠乏と困苦の生活を送っている者に、日の光を輝かされたのである。 PP 278.3

主は、人々が過度に財産と権力を持とうと欲する心を持たないように、制限をおこうとされた。一方の階級は富の蓄積を続け、他方では貧困と堕落に陥れば大きな弊害が起こる。何かそこに制限がなければ、金持ちは権力を独占するようになり、貧者は、神の目の前にはすべての点において同様の価値があるにもかかわらず、繁栄している兄弟たちよりは劣っているようにみなされて取り扱われるのである。このような圧迫感が、貧しい階級の怒りの原因になる。失望と絶望感が、社会の道徳を退廃させ、あらゆる種類の犯罪の動機となるのである。神がお定めになった規定は、社会の平等を助長するためのものであった。安息の年とヨベルの年の規定は、その期間内に、国家の社会と政治組織にできたひずみを、大いに改善するものであった。 PP 278.4

こうした規定は、貧者と同様に富者を祝福するために考案された。それは、強欲と自己高揚の性質を抑制し、気高い慈善心を養い、そして、すべての階級間の友好と信頼をはぐくみ、社会秩序を助長して、国家を強固にするものであった。われわれはみな、大人類という織物の中に織り込まれていて、他を益し、向上させるための努力は、なんであれ、われわれの祝福となって返ってくる。相互依存の法則は、社会のすべての階級に行き渡っている。貧者は富者に依存し、富者は、また貧者に依存している。一階級は、神が金持ちにお与えになった祝福の一部を求めるが、他方、富者のがわでは、忠実な奉仕、頭脳や筋骨の力を必要としている。これらは、貧者の資本である。 PP 278.5

主の指示に従うことを条件にして、イスラエルには大きな祝福が約束された。主は、こう言われた。「わたしはその季節季節に、雨をあなたがたに与えるであろう。地は産物を出し、畑の木々は実を結ぶであろう。あなたがたの麦打ちは、ぶどうの取入れの時まで続き、ぶどうの取入れは、種まきの時まで続くであろう。あなたがたは飽きるほどパンを食べ、またあなたがたの地に安らかに住むであろう、わたしが国に平和を与えるから、あなたがたは安らかに寝ることができ、あなたがたを恐れさすものはないであろう。わたしはまた国のうちから悪い獣を絶やすであろう。つるぎがあなたがたの国を行き巡ることはないであろう。……わたしはあなたがたのうちに歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう。……しかし、あなたがたがもしわたしに聞き従わず、またこのすべての戒めを守らず……わたしの契約を破るならば、……あなたがたが種をまいてもむ だである。敵がそれを食べるであろう。わたしは顔をあなたがたにむけて攻め、あなたがたは敵の前に撃ちひしがれるであろう。またあなたがたの憎む者があなたがたを治めるであろう。あなたがたは追う者もないのに逃げるであろう」（同 26：4～17）。 PP 278.6

神の物質的祝福を万人が平等に分配すべきであるということを熱心に力説する人々が多くいる。しかし、これは、創造主のみこころではなかった。いろいろと事情が異なることは、品性をためし、啓発するために、神がお用いになる方法の 1 つである。 PP 279.1

けれども、世的財産を所有する者が自分たちは神の財産の単なる管理人に過ぎないことを自覚することを、神は望まれる。つまりそれは、苦しみ、悩む者たちの幸福のために用いるように、神から託された財産とみなすべきである。 PP 279.2

キリストは、貧しい人々はいつもあなたがたと共にいると言われ、苦しむ人々とご自分の利害を 1 つにされた。われわれの贖い主は、地上の子らの最も貧しく、最も卑しい者に同情なさる。主は、彼らはこの地上の主の代表者であると言われる。主は、彼らをわれわれの間に置いて、主が苦しむ者や抑えられた者にお感じになる愛を、われわれの心に呼び起こそうとなさるのである。彼らに対する憐れみと慈愛は、キリストご自身に対してあらわしたものであるかのように、キリストはお受けになるのである。彼らに対する残酷と無視は、主に対して行ったのと同じようにみなされる。 PP 279.3

神が貧者の幸福のためにお与えになった律法が守られていたなら、現在の世界の状態は、道徳的に、霊的に、物質的にどんなに異なったところとなったであろうか。利己心と自尊心は今ほどあらわされず、お互いの幸福と繁栄を願う思いやりの精神を互いに持っていることであろう。そして、今日のように貧困が各国の広大な地域に及ぶことはないであろう。 PP 279.4

神がお命じになった原則は、富者が貧者を圧迫し、貧者が富者を疑い憎んだ結果、各時代に起こった恐ろしい罪悪を阻止することであろう。それは、巨万の富の蓄積と過度のぜいたくな生活にふけることを防止するとともに、巨額の富の蓄積に必要な幾千、幾万の人々の労働賃銀が低いために必然的に起こる無知と堕落をも防ぐことであろう。この原則は、現在世界を無政府状態と流血ざたに陥れようとしている諸問題に平和的解決を与えることであろう。 PP 279.5

第 52 章　年ごとの祭り

本章は、レビ記 23 章に基づく PP 279.6

全イスラエルが、礼拝のために聖所に集まるのは、年に 3 回あった。しばらくの間、シロがこうした集会の場所になっていたが、後に、エルサレムが全国の礼拝の中心地になり、各部族は厳粛な祭りを行うためにここに集まった。 PP 279.7

人々は、彼らの土地を奪おうとする荒々しい好戦的種族に取り囲まれていた。しかし、体のじょうぶな男たちと旅行に耐え得る者は皆、その家を離れて全国の中心近くにあった集会の場所へ行くように命じられていた。敵が、こうした無防備の家々に攻め込んで、火と剣で荒らすのを、いったい何が防いだのであろうか。神が、人々の保護者になることをお約束になっていたのである。「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」（詩篇 34：7）。イスラエル人が、礼拝に行っている間、神の力が彼らの敵を抑えていた。「わたしは国々の民をあなたの前から追い払って、あなたの境を広くするであろう。あなたが年に 3 度のぼって、あなたの神、主の前に出る時には、だれもあなたの国を侵すことはないであろう」（出エジプト 34：24）。 PP 279.8

こうした祭りの第一のものは、ユダヤ暦の第 1 月、すなわちアビブの月に行われた過越の祭りと種入れぬパンの祭りで、これは（太陽暦の）3 月末から 4 月の初めに当たる。寒い冬が過ぎ、後の雨も終わり、自 然はことごとく春の新鮮さと美を楽しんでいた。岡や谷の草は緑にもえ、いたる所に野の花が咲き乱れて、陽気であった。月は満月に近かったので、夜も楽しかった。聖書の歌人は、この季節を次のように美しく歌っている。 PP 279.9

「見よ、冬は過ぎ、 PP 280.1

雨もやんで、すでに去り、 PP 280.2

もろもろの花は地にあらわれ、 PP 280.3

鳥のさえずる時がきた。 PP 280.4

山ばとの声がわれわれの地に聞える。 PP 280.5

いちじくの木はその実を結び、 PP 280.6

ぶどうの木は花咲いて、かんばしいにおいを放つ」 PP 280.7

（雅歌 2：11～13） PP 280.8

人々は、全国からエルサレムへの巡礼の旅に出た。羊飼いは羊の群れから、牧者は山々から、漁師はガリラヤ湖から、預言者の子らは、預言者の学校からというように、すべての者が神の臨在のあらわされた場所へと、その足を向けた。徒歩で旅する者が多かったので、彼らは、休み休み進んでいった。旅人の群れは、続々合流して聖都に到着するまでには、大群集になることもしばしばあった。 PP 280.9

美しい自然をながめて、イスラエルの人々の心は喜びに満ち、すべてのよい物の与え主なる神に感謝をあらわすのであった。彼らは、壮大なヘブルの詩を歌い、主の栄光と威光とをたたえた。合図のラッパの響きに、シンバルの音も加わって、感謝の合唱が始まると、それに幾百の声が和して、とどろき渡った。 PP 280.10

「人々がわたしにむかって『われらは主の家に行こう』 PP 280.11

と言ったとき、わたしは喜んだ。 PP 280.12

エルサレムよ、われらの足は PP 280.13

あなたの門のうちに立っている。 PP 280.14

……エルサレムよ、 PP 280.15

もろもろの部族すなわち主の部族が、…… PP 280.16

……主のみ名に感謝する……、 PP 280.17

エルサレムのために平安を祈れ、 PP 280.18

『エルサレムを愛する者は栄え』」 PP 280.19

（詩篇 122：1～6） PP 280.20

彼らの周りに、かつて異教徒がその祭壇の火をともした山々を見た時に、イスラエルの子らは歌った。 PP 280.21

「わたしは山にむかって目をあげる。 PP 280.22

わが助けは、どこから来るであろうか。 PP 280.23

わが助けは、天と地を造られた主から来る」 PP 280.24

（詩篇 121：1、2） PP 280.25

「主に信頼する者は、動かされることなくて、 PP 280.26

とこしえにあるシオンの山のようである。 PP 280.27

山々がエルサレムを囲んでいるように、 PP 280.28

主は今からとこしえにその民を囲まれる」 PP 280.29

（詩篇 125：1、2） PP 280.30

聖なる都の見える山まで登り、礼拝者の大群が、神殿に向かって進むのを見て、彼らの心は畏敬の念に満たされた。彼らは、香の煙が立ちのぼるのを見た。そして、聖なる儀式の時刻を知らせるレビ人のラッパの響きを聞いたとき、彼らも、深い感動をおぼえて歌った。 PP 280.31

「主は大いなる神であって、 PP 280.32

われらの神の都、その聖なる山で、 PP 280.33

大いにほめたたえられるべき方である。 PP 280.34

シオンの山は北の端が高くて、うるわしく、 PP 280.35

全地の喜びであり、大いなる王の都である」 PP 280.36

（詩篇 48：1、2） PP 280.37

「その城壁のうちに平安があり、 PP 280.38

もろもろの殿のうちに安全があるように」 PP 280.39

「わたしのために義の門を開け、 PP 280.40

わたしはその内にはいって、主に感謝しよう」 PP 280.41

「わたしはすべての民の前で PP 280.42

主にわが誓いをつぐないます。 PP 280.43

エルサレムよ、あなたの中で、 PP 280.44

主の家の大庭の中で、これをつぐないます。 PP 281.1

主をほめたたえよ」 PP 281.2

（詩篇 122：7、118：19、116：18、19） PP 281.3

エルサレムの住宅は、全部、旅人のために開放されて、へやは無料で提供された。しかし、それでも、集まった多くの人々を収容するには不十分で、都や周りの山々のあき地というあき地には、天幕が張られた。 PP 281.4

その月の 14 日の夕方に、過越の祭りが行われた。それは、エジプトの奴隷からの解放を記念するとともに人々を罪から解放する犠牲を予表した厳粛で印象深い儀式であった。救い主がカルバリーでおなくなりになった時に、過越の祭りの意義はもうなくなり、過越の祭りが象徴していた同じ事件の記念として、主の晩餐儀式が制定された。 PP 281.5

過越の祭りに引き続いて、7 日間の種入れぬパンの祭りがあった。その初めの日と第 7 日は聖会であって、どのような労働もしてはならなかった。祭りの第 2 日に、その年の収穫の初穂を神の前に捧げなければならなかった。パレスチナでは、大麦が一番早い穀物で、祭りの初めに実り始めていた。祭司は、大麦の穂を神の祭壇の前で揺り動かし、すべての物が神のものであることを認めた。この儀式がすまなければ、作物を集めてはならなかった。 PP 281.6

初穂を捧げてから 50 日目は、ペンテコステであった。それは、また、収穫の祭り、または 7 週の祭りとも呼ばれた。穀類が、食物として備えられたことの感謝の表現として、種を入れて焼いたパンを 2 つ、神の前に捧げた。ペンテコステは、ただ 1 日だけであったが、その日は、宗教の行事に捧げられた。 PP 281.7

7 月に、仮庵の祭り、または、取り入れの祭りがあった。この祭りは、神が果樹園やオリブ畑やぶどう園の産物を豊かに恵まれたことを認めたものであった。これは 1 年の祭りの中の最大の祭りであった。土地は産物を生じ、収穫は集めて倉に収められ、果物、油、酒などもたくわえられ、初穂は保存された。そして、今や、人々は、このように豊かに彼らをお恵みになった神に、感謝の供え物を携えてきたのである。 PP 281.8

この祭りは、特に、喜びにあふれた祝典であった。それは、大いなる贖罪の日の直後で、彼らの罪はもはや記憶されないという確証が与えられたあとであった。彼らは、神との和らぎを得て、神の恵みを感謝し、神の慈悲をたたえるために、今、神のみ前に

来たのであった。収穫の労働はすみ、新しい年の労苦はまだ始まっていなかったので、人々は、なんの心配もなく、この聖なる、歓喜にあふれた祭りの雰囲気に、心から溶け込むことができたのである。祭りに出席することを命じられたのは、父とむすこたちだけであったけれども、できるだけ全家族が出席すべきであった。そして、しもべたち、レビ人、他国人、貧者などが、彼らのもてなしにあずかったのである。 PP 281.9

仮庵の祭りは、過越の祭りと同様に、過ぎ去った出来事の記念であった。人々は、彼らの荒野の旅を記念して、家を離れ、仮庵、または、「美しい木の実と、なつめやしの枝と、茂った木の枝と、谷のはこやなぎの枝」などの緑の枝で作った仮小屋に住んだ（レビ 23：40。42、43 参照）。 PP 281.10

第 1 日目は、聖会であった。そして、祭りの 7 日間は第 8 日目が加えられて、これも同様のことが行われた。 PP 281.11

こうした年ごとの集会において、年長の者も青年も、神に仕える精神を助長される。それとともに、各地から参集した人々との交わりは、彼らと神との交わりと、お互いの間の交わりを強固にするのであった。現代においても、神の民が仮庵の祭りを祝うのは良いことである。それは、彼らに与えられた神の祝福を感謝して記念することであった。イスラエルの子らが、先祖のために行われた神の救済とエジプトからの旅の間の奇跡的保護とを祝ったように、われわれは、神があらゆる方法を講じて、われわれをこの世と誤りの暗黒の中から救い出して神の恵みと真理の尊い光の中に入れてくださったことを思い出して感謝すべきである。 PP 281.12

幕屋から遠方のところに住んでいた者は、毎年、1 か月以上も、年ごとの祭りに列席するために費やさなければならなかった。このような神への献身の例を 見るとき、宗教的礼拝の重要性と、われわれの利己的で世的な関心をおさえて、霊的で永遠に関することを助長することの必要性とを強く感じるべきである。神に仕えて、お互いを力づけ励まし合うために、共に交わる特権を怠る時に、われわれは損失をこうむる。神の言葉の真理は、われわれの心の中で、その活気と重要性を失ってしまう。われわれの心は、清めの力によって、啓発覚醒されなくなり、霊的に低下する。お互いに同情が欠けているために、クリスチャンとしてのわれわれの交わりにおいて大きな損失を招くのである。

自分を自己の殻の中に閉じこめてしまうものは、神が彼のためにご計画になった場所を満たしていない。われわれは、みな、1 人の天の父の子供たちで、お互いにその幸福は他に依存している。神の要求と人類の要求が、われわれに負わせられている。われわれの性質の社交的方面を正しく啓発させることによって、われわれは兄弟たちに同情を寄せるようになる。そして、他を祝福しようと努力することによって、われわれは幸福になるのである。 PP 281.13

仮庵の祭りは、ただ単に記念であるだけでなく、象徴でもあった。それは、荒野の旅をふり返っていただけでなくて、収穫の祭りと同様に、大いなる日の最後の収穫を予表していた。収穫の主は、そのとき、刈り入れ人をつかわして、毒麦をたばねて火に焼き、麦は倉に収める。そのとき、すべての悪人は滅ぼされる。彼らは、「かつてなかったようになる」（オバデヤ 16）。そして、全宇宙のすべての者は、神に対する喜ばしい賛美の声をあげる。「またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、『御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように』」（黙示録 5：13）。 PP 282.1

イスラエルの人々は、神が彼らをあわれんでエジプトの奴隷から解放し、荒野を旅していたときも、情け深くお守りになったことを思い出して、仮庵の祭りのときに神を賛美した。彼らは、また、終わったばかりの贖罪の日の儀式によって、赦され、受け入れられたことを自覚して喜んだ。しかし、主に贖われた者が、天のカナンに無事集められ、「被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」のろいから永遠に解放される時に、彼らは、言葉で言い表せない喜びを味わい、栄想二満たされるのである（ローマ 8：22）。人類のためのキリストの贖罪の働きはその時に終わるし、彼らの罪は、永久に消し去られるのである。 PP 282.2

「荒野と、かわいた地とは楽しみ、 PP 282.3

さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、 PP 282.4

さかんに花咲き、 PP 282.5

かつ喜び楽しみ、かつ歌う。 PP 282.6

これにレバノンの栄えが与えられ、 PP 282.7

カルメルおよびシャロンの麗しさが与えられる。 PP 282.8

彼らは主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る」 PP 282.9

「その時、見えない人の目は開かれ、 PP 282.10

聞えない人の耳は聞えるようになる。 PP 282.11

その時、足の不自由な人は、しかのように飛び走り、 PP 282.12

口のきけない人の舌は喜び歌う。 PP 282.13

それは荒野に水がわきいで、 PP 282.14

さばくに川が流れるからである。 PP 282.15

焼けた砂は池となり、 PP 282.16

かわいた地は水の源となり、…… PP 282.17

そこに大路があり、 PP 282.18

その道は聖なる道ととなえられる。 PP 282.19

汚れた者はこれを通り過ぎることはできない、 PP 282.20

愚かなる者はそこに迷い入ることはない。 PP 282.21

そこには、ししはおらず、 PP 282.22

飢えた獣も、その道にのぼることはなく、 PP 282.23

その所でこれに会うことはない。 PP 282.24

ただ、あがなわれた者のみ、そこを歩む、 PP 282.25

主にあがなわれた者は帰ってきて、 PP 282.26

その頭に、とこしえの喜びをいただき、 PP 282.27

歌うたいつつ、シオンに来る。 PP 282.28

彼らは楽しみと喜びとを得、 PP 282.29

悲しみと嘆きとは逃げ去る」 PP 282.30

（イザヤ 35：1、2、5～10） PP 282.31

第 53 章　初期の士師たち

本章は、士師記 6～8 章、10 章に基づく PP 283.1

部族は、カナン定住後、国土の征服を完成するために活発な努力をしなかった。すでに得た領土に満足して、やがて、彼らの気力は衰えて戦争をやめてしまった。「イスラエルは強くなったとき、カナンびとを強制労働に服させ、彼らをことごとくは追い出さなかった」（士師記 1：28）。 PP 283.2

主は、ご自分がイスラエルになさった約束を忠実にお果たしになった。ヨシュアは、カナン人の力をくじき、国土を部族の間に分配した。あとは、彼らが神の援助の確証を信頼して、土地に住んでいる住民を追い出す仕事を完成すればよかった。しかし、彼らはそれをしなかったのである。彼らは、カナン人と同盟を結んで、神の命令に直接反逆し、そうすることによって、神が彼らにお与えになったカナン所有の約束の条件を履行しなかった。 PP 283.3

神が、シナイにおいて、彼らと交わられた一番初めのときから、彼らには、偶像礼拝に対する警告が与えられていた。律法宣言の直後、カナンの国々について、モーセによって次のような知らせが、彼らに与えられた。「あなたは彼らの神々を拝んではならない。これに仕えてはならない。また彼らのおこないにならってはならない。あなたは彼らを全く打ち倒し、その石の柱を打ち砕かなければならない。あなたがたの神、主に仕えなければならない。そうすれば、わたしはあなたがたのパンと水を祝し、あなたがたのうちから病を除き去るであろう」（出エジプト 23：24、25）。彼らが忠実であるかぎり、神は、彼らの前の敵を滅ぼされるという確証が与えられた。「わたしはあなたの先に、わたしの恐れをつかわし、あなたが行く所の民を、ことごとく打ち破り、すべての敵に、その背をあなたの方へ向けさせるであろう。わたしはまた、くまばちをあなたの先につかわすであろう。これはヒビびと、カナンびと、およびヘテびとをあなたの前から追い払うであろう。しかし、わたしは彼らを 1 年のうちには、あなたの前から追い払わないであろう。土地が荒れすたれ、野の獣が増して、あなたを害することのな

いためである。わたしは徐々に彼らをあなたの前から追い払うであろう。あなたは、ついにふえひろがって、この地を継ぐようになるであろう。……この地に住んでいる者をあなたの手にわたすであろう。あなたは彼らをあなたの前から追い払うであろう。あなたは彼ら、および彼らの神々と契約を結んではならない。彼らはあなたの国に住んではならない。彼らがあなたをいざなって、わたしに対して罪を犯させることのないためである。もし、あなたが彼らの神に仕えるならば、それは必ずあなたのわなとなるであろう」（同 23：27～33）。モーセは、こうした指示を、その死の前にいとも厳粛に反復し、それをまたヨシュアがくり返した。 PP 283.4

神は、道徳的罪悪の潮流をとめ、世界じゅうが洪水になるのを防ぐ防壁として、神の民をカナンにおかれた。もし、イスラエルが忠実であったならば、神は、彼らが征服に征服を続けていくようにご計画になった。神は、カナン人よりも強大な国家を彼らの手に渡そうとしておられた。約束は、こうであった。「もしわたしがあなたがたに命じるこのすべての命令をよく守って行……うならば、主はこの国々の民を皆、あなたがたの前から追い払われ、あなたがたはあなたがたよりも大きく、かつ強い国々を取るに至るであろう。あなたがたが足の裏で踏む所は皆、あなたがたのものとなり、あなたがたの領域は荒野からレバノンに及び、また大川ユフラテから西の海に及ぶであろう。だれもあなたがたに立ち向かうことのできる者はないであろう。あなたがたの神、主は、かつて言われたように、あなたがたの踏み入る地の人々が、あなたがたを恐れおののくようにされるであろう」（申命記 11：22～25）。 PP 283.5

彼らは、こうした崇高な運命のもとにあったにもかかわらず安易と放縦の道を選んだ。彼らは、国土征服を完成する機会を逸した。そして、彼らは、幾 世代もの間、これらの偶像教徒の子孫に悩まされた。その人々は、預言者が預言していたとおり、彼らの目に「とげ」となり、彼らのわきに「いばら」となったのである（民数記 33：55）。 PP 283.6

イスラエル人は、「かえってもろもろの国民とまじってそのわざになら」った（詩篇 106：35）。彼らは、カナン人と雑婚し、偶像礼拝は、疫病のように国中に広がった。「自分たちのわなとなった偶像に仕えた。彼らはそのむすこ、娘たちを悪霊にささ

げ、……こうして国は血で汚された。……それゆえ、主の怒りがその民にむかって燃え、その嗣業を憎ん」だ（同 106：36～40）。 PP 284.1

ヨシュアの教えを受けた世代がなくなってしまうまでは、偶像礼拝はほとんど広がらなかった。しかし、両親が子供たちの背信の道を開いた。カナンを占領した人々が、主の制限を無視したことが悪の種となり、その後、幾世代もの間、苦い果実を結び続けた。ヘブル人の単純な習慣は、彼らを肉体的に健康にした。ところが、異教徒と交際して食欲と情欲にふけり、徐々に体力を衰えさせ、知的、道徳的能力を弱めてしまった。イスラエル人は、自分たちの罪のために、神から離れた。神の力が彼らから去り、もはや、敵に勝てなくなった。こうして、彼らは、神によって征服するはずであったその国々に負けてしまったのである。 PP 284.2

「かつてエジプトの地から彼らを導き出」し、「彼らを荒野で羊の群れのように導」かれた「先祖たちの神、主を捨てて」「彼らは高き所を設けて神を怒らせ、刻んだ像をもって神のねたみを起した」。そこで、「神は人々のなかに設けた幕屋なるシロのすまいを捨て、その力をとりことならせ、その栄光をあだの手にわたされた」（士師記 2：12、詩篇 78：52、58、60、61）。しかし、主は、主の民を全くお見捨てになったのではなかった。常に、主に忠誠を尽くす残りの者が存在していた。主は、ときどき、忠実で勇敢な人々をお立てになって偶像礼拝をやめさせ、イスラエルを彼らの敵からお救いになった。しかし、救済者が死んでしまうと、人々は、彼の権力から解放されて、徐々に偶像に逆もどりするのであった。このようにして、神に反逆しては懲らしめを受け、告白しては救済されるという物語が、幾度もくり返されたのである。 PP 284.3

イスラエルは、メソポタミヤの王、モアブの王に続いて、ペリシテ人、そして、シセラを大将とするハゾルのカナン人などに次々と圧迫された。オテニエル、シャムガル、エホデ、デボラ、バラクなどが、尺々の救済者として立てられた。しかし、「イスラエルの人々はまた主の前に悪をおこなったので、主は彼らを……ミデアンびとの手にわたされた」（士師記 6：1）。これまで、圧迫者の手は軽くヨルダンの東の部族に加えられたに過ぎなかった。しかし、今回の災難では、彼らのところがまず最初であった。 PP 284.4

東の国境にミデアン人がいるのと同様に、カナンの南にはアマレク人がおり、砂漠の向こうには、まだ、手きびしいイスラエルの敵があった。ミデアン人は、モーセの時代にほとんどイスラエル人に滅ぼされたのであったが、その後、大いに増加し、数が多くなり強くなった。彼らは、報復心に燃えていた。そして、神の保護の手がイスラエルから除かれたのであるから、その機会がやってきた。ヨルダンの東の部族だけでなく、全国が彼らの攻撃に苦しんだ。砂漠の残忍な住民が「いなごのように多く」、彼らの家畜とともに、国内に侵入してきた（同 6：5）。彼らは滅ぼし尽くす疫病のように全国に広がって、ヨルダン川からペリシテの平原にまで及んだ。彼らは、作物が実り始めるやいなややって来て、地の最後の果物の取り入れが終わるまでいた。彼らは、畑の産物を奪い、住民のものを盗んで虐待しては沙漠にもどって行った。こうして、畑に住んでいたイスラエル人は、家を捨てて城壁の中の町に集まったり、城に避難したり、時には、山中の岩陰や洞穴の中に隠れなければならなかった。この圧迫は 7 年間続いた。そして、人々が、その苦難の中で主の譴責に従って、彼らの罪を告白したので、神は、ふたたび彼らのために救済者を起こされたのである。 PP 284.5

ギデオンは、マナセの部族のヨアシの子であった。この家族の属した家系は指導的位置にはなかった が、ヨアシの家族は勇気と誠実との点で頭角をあらわしていた。彼の勇敢なむすこたちについては、「みな王子のように見えました」と言われている（同 8：18）。ミデアン人との戦いで、むすこたちは、1 人を除いてみな倒れた。そして、侵略者は、彼の名を非常に恐れたのである。ギデオンに、人々を救えという神の召しが与えられた。彼は、そのとき、麦を打っていた。彼は、隠してあったわずかばかりの麦を、一般の麦打ち場で打とうとしないで、酒ぶねの近くの場所に行った。まだ、ぶどうの熟する時はずっと先だったので、ぶどう畑のほうに注意をするものはいなかったからである。ギデオンは隠れて黙って働いていたが、イスラエルの状態を悲しく思い、どうしたなら人々から圧迫者のくびきを除くことができるだろうかと、思案していた。 PP 284.6

すると突然、「主の使」が現れて、彼に言った。「大勇士よ、主はあなたと共におられます」（同 6：12）。彼は答えた。「ああ、君よ、主がわたしたちと共におられ

るならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょう。わたしたちの先祖が『主はわれわれをエジプトから導き上られたではないか』といって、わたしたちに告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか。今、主はわたしたちを捨てて、ミデアンびとの手にわたされました」（同 6：13）。 PP 285.1

天からの使者は答えた。「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか」（同 6：14）。 PP 285.2

ギデオンは、今自分に語っているお方が、契約の天使で、昔イスラエルのために働かれたお方であるという証拠を与えられることを望んだ。神の天使は、アブラハムと語り、ある時はとどまって彼のもてなしをお受けになった。そして、ギデオンは、今、天の使者に、とどまって彼の客となることを願ったのである。彼は、急いで天幕に行って、乏しい中からやぎの子と種入れぬパンの準備をして、それを持ってきて天使の前に置いた。すると、天使は、彼にこう命じた。「肉と種入れぬパンをとって、この岩の上に置き、それにあつものを注ぎなさい」（同 6：20）。ギデオンはその通りにした。すると、彼が求めたしるしが与えられた。天使は、手に持ったつえで、肉と種入れぬパンに触れると、岩から火が燃え上がって捧げ物を焼き尽くした。そして、天使は、彼の視界から去って見えなくなった。 PP 285.3

ギデオンの父、ヨアシは、国の人々と一緒になって神にそむき、彼の住んでいたオフラに大きな祭壇をバアルのために築いていた。ギデオンは、この祭壇を破壊し、これまで捧げ物が捧げられていた岩の上に、主の祭壇を築くように命じられた。神に犠牲を捧げることは祭司に委ねられ、シロの祭壇に制限されていた。しかし、儀式礼典を制定なさったお方、そして、そのすべての捧げ物が予表していたお方は、その要求を変更する力がおありであった。イスラエルの救済は、バアル礼拝に対する断固たる反対によって始められなければならなかった。ギデオンは、イスラエルの民の敵と戦う前に、偶像礼拝との宣戦を布告しなければならなかった。 PP 285.4

神の命令は、忠実に行われた。ギデオンは、もしも公然と行えば、反対にあうことがわかっていたのでひそかに事を運んだ。彼は、しもべたちの援助によって、1 晩のう

ちにそれをやり遂げてしまった。次の朝、バアルを礼拝しようとして来たオフラの人々の怒りは、たいへんなものであった。ヨアシは、主の使の来訪を聞いていたが、もし彼が自分のむすこを弁護しなかったならば、人々はギデオンの命を取ったことであろう。ヨアシは言った。「あなたがたはバアルのために言い争うのですか。あるいは彼を弁護しようとなさるのですか。バアルのために言い争う者は、あすの朝までに殺されるでしょう。バアルがもし神であるならば、自分の祭壇が打ちこわされたのだから、彼みずから言い争うべきです」（同 6：31）。もしバアルが自分の祭壇を守ることができなければ、どうして、彼を礼拝する者の保護を依頼することができようか。 PP 285.5

ギデオンに暴力を働こうとする考えは、すべて取りやめになった。そして、戦いのラッパが鳴り響いたとき、まず最初にギデオンの旗の下に集まった者の中にオ フラの人もいた。彼自身の部族のマナセにも知らせが伝えられ、アセル、ゼブルン、ナフタリにも伝えられ、皆、召しに答えた。 PP 285.6

ギデオンは、神が彼をこの働きに召し、神が彼と共におられるという証拠がさらに与えられるのでなければ、自分からは軍隊の長の地位につこうとはしなかった。彼は祈った。「あなたがかつて言われたように、わたしの手によってイスラエルを救おうとされるならば、わたしは羊の毛 1 頭分を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあって、地がすべてかわいているようにしてください。これによってわたしは、あなたがかつて言われたように、わたしの手によってイスラエルをお救いになることを知るでしょう」（同 6：36、37）。翌朝、地はかわいているのに、羊の毛はぬれていた。しかし、空気に湿気があれば、羊の毛はぬれるから、これでは決定的試験であるとは言えないという疑念がわいた。そこで、彼は、しるしが反対になるように求め、彼の極端な用心深さを神がお怒りにならないことを嘆願した。彼の要求は受け入れられた。 PP 286.1

こうして、ギデオンは励まされて、侵略者と戦うために軍勢をひきいて出て行った。「時にミデアンびと、アマレクびとおよび東方の民がみな集まってヨルダン川を渡り、エズレルの谷に陣を取った」（同 6：33）。ギデオンのもとに集まった全軍は、わずか 3 万 2 千人であった。しかし、敵の大軍を前にして、主は彼に言われた。「あなた

と共におる民はあまりに多い。ゆえにわたしは彼らの手にミデアンびとをわたさない。おそらくイスラエルはわたしに向かってみずから誇り、『わたしは自身の手で自分を救ったのだ』と言うであろう。それゆえ、民の耳に触れ示して、『だれでも恐れおののく者は帰れ』と言いなさい」（同 7：2、3）。喜んで危険と困難に当面しない者、または、神の働きよりは世俗のことに心を奪われている者は、イスラエルの軍隊の力にならない。彼らがいることは、ただ軍隊を弱体化させるだけであった。戦争に出かける前に次のような宣言が全軍に行われることが、イスラエルの律法になっていた。「『新しい家を建てて、まだそれをささげていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ、彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれをささげるようになるであろう。ぶどう畑を作って、まだその実を食べていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人がそれを食べるようになるであろう。女と婚約して、まだその女をめとっていない者があれば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ彼が戦いに死んだとき、ほかの人が彼女をめとるようになるであろう』。つかさたちは、また民に告げて言わなければならない。『恐れて気おくれする者があるならば、その人を家に帰らせなければならない。そうしなければ、兄弟たちの心が彼の心のようにくじけるであろう』」（申命記 20：5～8）。 PP 286.2

ギデオンは、敵の数と比較して自分のほうがいかにも少なかったので、いつもの宣言をするのを差し控えていた。彼は、自分の軍隊がまだ大きすぎるという宣告を聞いて、驚きに満たされた。しかし、主は、彼の民の心に誇りと不信仰があるのをごらんになった。彼らは、ギデオンの力強い訴えを聞いて奮い立ったのではあるが、ミデアン人の大軍をながめて恐怖をいだいたものが多かった。それにもかかわらずもし、イスラエルが勝利をおさめるならば、勝利を神に帰すかわりに、自分たちに栄光を帰してしまったことであろう。 PP 286.3

ギデオンは、主の指示に従った。彼は、全軍の 3 分の 2 以上の 2 万 2 千人が家に帰るのを見て、非常に心を痛めた。ふたたび、主の言葉が彼に与えられた。「民はまだ多い。彼らを導いて水ぎわに下りなさい。わたしはそこで、あなたのために彼らを試みよ

う。わたしがあなたに告げて『この人はあなたと共に行くべきだ』と言う者は、あなたと共に行くべきである。またわたしがあなたに告げて『この人はあなたと共に行ってはならない』と言う者は、だれも行ってはならない」（士師記 7：4）。すぐに敵に向かって行くつもりで、人々は水ぎわにつれていかれた。進みながら手で水をすくって、急いで水を飲んだ者が わずかながらいたが、大部分は、ひざをかがめて、水面に口をあててゆっくり飲んだ。手を口にあてて水を飲んだ者の数は、1 万人のうちわずかに 300 人であった。けれども彼らが選ばれて、残りの者はみな、家に帰ることを許された。 PP 286.4

品性は、ごく簡単な方法で試みられるものである。危機に際して、自分の必要を満たすことに心を奪われているような者は、危急の場合に信頼できる人ではない。主は、怠惰で放縦な人をご用にお用いになることはできない。主が選ばれる人は、自己の必要のために義務の遂行を遅らせたりしないわずかの人々である。300 人は、勇気と自制があるばかりか信仰の人であった。彼らは、偶像礼拝によってその身を汚していなかった。神は、彼らを導き、彼らによってイスラエルを救済することがおできであった。成功は、数によらない。神は、多数によると同様に、少数によっても救うことがおできである。神は、神に仕える者の数の大きさよりは、むしろ、彼らの品性によって、栄誉をお受けになる。 PP 287.1

イスラエルの人々は、敵の大軍が陣をしいている谷を見おろす山の頂上に陣取っていた。「ミデアンびと、アマレクびとおよびすべての東方の民はいなごのように数多く谷に沿って伏していた。そのらくだは海べの砂のように多くて数えきれなかった」（同 7：12）。ギデオンは、翌日の戦いを考えておそれおののいた。しかし、主は、夜、彼に語り、従者プラを連れてミデアン人の陣地に行けば、何か励ましになることを聞くであろうとお命じになった。彼が出て行って、暗いところで黙って聞いていると、ある兵士が仲間に夢を語っていた。「わたしは夢を見た。大麦のパン 1 つがミデアンの陣中にころがってきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえしたので、天幕は倒れ伏した」（同 7：13）。仲間の答えた言葉が、隠れて聞いていた者の心を励ました。「それはイスラエルの人、ヨアシの子ギデオンのつるぎにちがいない。神はミデアンとすべ

ての軍勢を彼の手にわたされるのだ」（同 7：14）。ギデオンは、これらのミデアンの異国人を通じて彼にお語りになられる神のみ声を聞いたのである。ギデオンは、彼の指揮下にある少数の者のところへもどって言った。「立てよ、主はミデアンの軍勢をあなたがたの手にわたされる」（同 7：15）。 PP 287.2

神の指導の下に攻撃計画が示され、彼は、すぐにそれを実行に移した。彼は、300 人を 3 組に分けた。おのおのには、ラッパとつぼの中にかくしたたいまつが与えられた。兵上たちは、ミデアンの陣地をちがった方角から攻撃するように配置された。夜陰に乗じて、ギデオンのラッパを合図に、3 組はラッパを吹き鳴らした。そしてつぼを打ち砕いて燃えさかるたいまつを出し、「主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ」というときの声をあげて、敵に突進した（同 7：20）。 PP 287.3

眠っていた軍隊は急に目をさました。どちらをむいても、燃えるたいまつの火が見えた。各方面からラッパと敵のときの声が聞こえた。ミデアン人は、おびただしい軍隊に取り囲まれたと思い込んで、あわてふためいた。彼らは、恐怖のあまり大声をあげて逃げ出し、味方を敵とまちがえて、同士打ちをした。勝利の知らせを聞いて家に帰らせられた幾千というイスラエルの人々がもどってきて、逃げる敵の追跡に参加した。ミデアン人は、ヨルダン川に向かって逃げ、川向こうの自分たちの領地に行くことを望んだ。ギデオンは、エフライムの部族に使者を送り、逃げる軍隊を南の渡し場で迎え撃つように鼓舞した。一方、ギデオンは、「疲れながらもなお追撃」する 300 人と共に、流れを渡って、すでに向こうがわに行った者のあとを追った（同 8：4）。全軍を指揮し、1 万 5 千の軍隊と共に逃げていた 2 人の君、ゼバとザルムンナは、ギデオンに追跡されて、軍隊は全滅し、指揮者はつかまって殺された。 PP 287.4

この大敗によって、侵入軍は 12 万人以上の戦死者を出した。ミデアン人の力はくじかれ、その後、二度とイスラエルに戦いをいどむことができなくなった。イスラエルの神が再び神の民のために戦われたという知らせがすぐに広く遠くまで伝わった。彼らがどんなに簡単な方法で、勇ましい好戦的民族に勝ったかということを知った時に、周りの国々のいだいた恐怖 は言葉では尽くせない。 PP 287.5

ミデアン人を倒すために、神がお選びになった指導者は、イスラエルの高い地位を占めた人ではなかった。彼は、つかさでも祭司でもレビ人でもなかった。しかし、神は、彼が勇気と誠実の人であるのをごらんになった。彼は、自己にたよらず、主の指導に喜んで従った。神は、神の働きのために、必ずしも偉大な才能を持った人をお選びになるとはかぎらず、神が最もよく用いることができる人々をお選びになる。「謙遜は、栄誉に先だつ」（箴言 15：33）。自己の不十分さをよく自覚して、神を指導者とし、力の源として信頼する者を、神は、最も効果的にお用いになる。神は、彼らの弱さを神の力に結びつけて強くし、彼らの無知を神の知恵に結合して、彼らを賢くなさるのである。 PP 288.1

もしも彼らが真の謙遜を持ち続けるならば、主は神の民のために、はるかに多くのことをなさることがおできになる。しかし、大きな責任または成功が与えられても、なお、自己過信に陥ることなく、自分たちが神に依存していることを忘れない者は、実に少ない。主が、神の働きをする器を選ぶに当たって、世の人々から、偉大でタラント（才能）があり、聡明であるとほめそやされている人々を見過ごされるのは、そのためである。このような人々は、とかく高慢で、自己過信に陥っているものである。彼らは、神の指示を仰がないで、行動することができると思っている。 PP 288.2

ヨシュアの軍隊がエリコの周りでラッパを吹き、ギデオンの小隊が、ミデアンの大軍の周りでラッパを吹くというごく簡単な行為が、神の力によって効果をあげ、神の敵の力をくつがえした。神の力と知恵を離れては、どんなに完全な人間的制度も失敗に帰する。しかし、どんな見込みのない方法も神がお命じになるとき、それを謙遜と信仰をもって実行するならば、必ず成功するのである。ギデオンやヨシュアが、カナン人と戦った時と同様に、神に信頼し、神のみこころに従うことは、クリスチャンの霊の戦いに必要である。神は、イスラエルのために、神の力をくり返しあらわされて、彼らが神を信じ、どんな危機においても信頼をいだいて神の助けを求めるように導こうとなさった。神は、今日も同様に、神の民と力を合わせてお働きになり、弱い器によって偉大なことをなしとげられようとしておられる。全天は、われわれが、神の知恵と力を求めるのを

待っている。神は、「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができる」（エペソ３：20）。 PP 288.3

ギデオンが、国の敵の追跡を終えて帰ってくると、自国民の非難と譴責が彼を待っていた。彼が、ミデアン人と戦うためにイスラエルの人々に呼びかけた時に、エフライムの部族は出てこなかった。彼らは、そのような企ては危険だと考えた。そして、ギデオンは、彼らを特別に召集しなかったので、彼らはそれを良いことにして兄弟たちに加わらなかった。しかし、イスラエルの勝利の知らせが彼らのところにとどいたとき、エフライムの人々は、自分たちが参加していなかったので彼らをねたんだ。ミデアン人を追放したあとで、エフライムの人々は、ギデオンの指示のもとにヨルダンの渡しを占領し、彼らが逃げるのを防いだ。こうして、多数の敵が殺され、その中にはオレブとゼエブという２人の君がいた。こうして、エフライムの人々は、戦いのあと始末をして勝利の完成に貢献した。しかし、彼らはねたんで怒った。彼らは、ギデオンが自分の意志と判断で行ったものと思った。彼らは、イスラエルの勝利のうちに神のみ手を認めず神の力と憐れみによって自分たちが救われたことを感謝しなかった。彼らは、この事実そのものによって、特別な器に選ばれる価値のなかったことを示した。 PP 288.4

彼らは、戦利品を携えて帰ってきて、怒ってギデオンを責めた。「あなたが、ミデアンびとと戦うために行かれたとき、われわれを呼ばれなかったが、どうしてそういうことをされたのですか」（士師記８：1）。 PP 288.5

ギデオンは彼らに言った。「今わたしのした事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか。エフライムの拾い集めた取り残りのぶどうはアビエゼルの収穫したぶどうにもまさるではありませんか。神はミデアンの君オレブとゼエブをあなたがたの手にわたされました。わたしのなし得た事は、あなたがたのした事と比べものになりましょうか」（同８：2、3）。 PP 288.6

ねたみの精神は、とかく、あおり立てられると争いを起こし、争闘と流血の原因になりやすい。しかし、ギデオンの謙遜な答えが、エフライムの男たちの怒りをしずめた。そして、彼らは心を和らげて家へ帰った。ギデオンは、原則に関しては堅く立って妥協

せず、戦いに出ては、「大勇士」であったが、また、まれに見る思いやりの精神を表した。 PP 289.1

イスラエルの人々は、ミデアン人から救い出されたことを感謝して、ギデオンが彼らの王となり、彼の子孫が代々王となることにしようと申し出た。この申し出は、神政政治の原則とは全く正反対のものであった。神がイスラエルの王であられた。であるから、彼らが人間を王座につけることは、彼らの王であられる神を拒むことになる。ギデオンは、この事実を認めた。彼の返答は、その動機がいかに真実で気高いものであったかを示した。「わたしはあなたがたを治めることはいたしません。またわたしの子もあなたがたを治めてはなりません。主があなたがたを治められます」と彼は言った（同8：23）。 PP 289.2

しかし、ギデオンは別の過失に陥り、彼の家とイスラエルの全家を不幸に陥れた。大きな争闘に続く不活動の期間は、苦闘の期間以上に大きな危険をはらんでいることがある。ギデオンは、このような危険にさらされた。彼は、不安な気持ちに襲われた。彼は、これまで、神の指示を実行することに満足していた。しかし、今、彼は神の指導を待たずに自分で計画を立て始めた。主の軍勢が大勝利を得ると、サタンは、神の働きをくつがえそうとして、その努力を倍加する。こうして、ギデオンの心に考えや計画が暗示され、イスラエルの人々はそれに迷わされていった。 PP 289.3

ギデオンは、主の使いが彼に現れた岩の上で犠牲を捧げるように命令を受けたので、自分は祭司としての役目を果たすように任命を受けたものと考えた。彼は、神の許しを得ようともしないで、適当な場所を備え、幕屋で行われている礼拝に似た制度を始めようとした。 PP 289.4

一般の人々の強力な支持もあったので、その計画の実行はなんの困難もなかった。彼の要求に従って、ミデアン人からぶんどった金の耳輪が全部彼の分け前として与えられた。人々はまた、ミデアンのモたちの美しく飾った衣服とともに、ほかにも多くの高価な品物を集めた。こうして備えられたものを用いて、ギデオンは大祭司が着ているものをまねて、エポデと胸当てをつくった。彼のしたことは、イスラエルと同様に、彼と、彼の家のわなとなった。この神の許しを得なかった礼拝は、ついに、多くの人々を主か

ら離し、偶像に仕えるようにさせたのである。ギデオンが死んだあとで、多くの者がこの背信に加わり、その中には彼の家族の者もいた。人々は、かつて彼らの偶像礼拝をやめさせたことのあるその同じ人によって、神から引き離されていった。 PP 289.5

自分たちの言行が、どんなに大きな影響を及ぼすものであるかを自覚する者は少ない。親の過失は、それを行った者が墓に横たえられた後も長く子々孫々に至るまで、最も悲惨な実を結ぶ。人はだれでも他に感化を及ぼしていて、その感化の結果の責任を問われるのである。言葉と行為は非常な力を持っていて、この世のわれわれの生涯の影響を後世まで長く残す。われわれが、言葉と行為によって残す印象は、必ず祝福となるか、またはのろいとなってわれわれにもどってくる。こう考えるとき、人生は実に厳粛である。われわれは、心を低くして祈り、神に近づき、神の知恵に導かれるようにしなければならない。 PP 289.6

最高の地位に立つ人が、誤った方向に導くかも知れない。最も賢明な人も過失を犯す。最も強力な人もよろめき、つまずくことであろう。上からの光が常にわれわれの道を照らす必要がある。「わたしに従ってきなさい」と言われた主になんの疑いもいだかずに、信頼することが唯一の安全な道である（マルコ 2：14）。 PP 289.7

ギデオンが死んだあとで、「イスラエルの人々は周囲のもろもろの敵の手から自分たちを救われた彼らの神、主を覚えず、またエルバアルすなわちギデオンがイスラエルのためにしたもろもろの善行に応じて彼の家族に親切をつくすこともしなかった」（士師記 8：34、35）。イスラエルの人々は、彼らの士師であり、 救済者であったギデオンから受けた恩のすべてを忘れて、ギデオンの妾腹の子のアビメレクを彼らの王として受け入れた。アビメレクは、自己の権力を保つために、ただ 1 人だけを除いて、ギデオンの正式な子供たちを全部殺してしまった。人間は、神を恐れなくなると、やがて、名誉と誠実からも離れる。主のあわれみに対する感謝があれば、ギデオンのように、神の民を祝福する器に用いられた者に対しても感謝するようになる。ギデオンの家に対してとったイスラエルの残酷な行為は、神に対して大きな忘恩を示した人々としては当然のことであった。 PP 289.8

アビメレクの死後、主を恐れる士師たちの支配は、一時、偶像礼拝を阻止したのであったが、やがて、人々は周りの異教社会の習慣にもどっていった。北方の部族の間では、シリヤやシドンの神々を拝む者が多くいた。西南方面では、ペリシテ人の偶像、東では、モアブとアンモンの偶像などが、イスラエルの人々の心を彼らの祖先の神から離した。しかし、背教は、すぐに罰せられた。アンモン人は、東の部族を征服し、ヨルダン川を渡ってユダとエフライムの領地に侵入してきた。西からは、ペリシテ人が海のそばの平原から、あちらこちらを焼き払ったり、略奪したりして攻めてきた。イスラエルは、ふたたび容赦なく攻めてくる敵の手中に陥ったように思われた。 PP 290.1

人々は、今まで忘れ、軽んじていた主の助けを再び仰いだ。「そこでイスラエルの人々は主に呼ばわって言った、『わたしたちはわたしたちの神を捨ててバアルに仕え、あなたに罪を犯しました』」（同 10：10）。しかし、それは、悲しんだだけであって、真の悔い改めに至っていなかった。人々は、罪を犯して苦しみにあったことを悲しんだのであって、神の聖なる律法を犯して、神の栄えを汚したことを悲しんだのではなかった。真の悔い改めは、罪について悲しむだけではない。それは、罪悪から断固として離れることである。 PP 290.2

主は、預言者の 1 人によって彼らにお答えになった。「わたしはかつてエジプトびと、アモリびと、アンモンびと、ペリシテびとからあなたがたを救い出したではないか。またシドンびと、アマレクびとおよびマオンびとがあなたがたをしえたげた時、わたしに呼ばわったので、あなたがたを彼らの手から救い出した。しかしあなたがたはわたしを捨てて、ほかの神々に仕えた。それゆえ、わたしはかさねてあなたがたを救わないであろう。あなたがたが選んだ神々に行って呼ばわり、あなたがたの悩みの時、彼らにあなたがたを救わせるがよい」（同 10：11～14）。 PP 290.3

このような厳粛で恐るべき言葉を聞くと、将来のもう 1 つの光景、最後の審判の大いなる日のことを考える。その日、神の憐れみを拒み、神の恵みを軽蔑した者は、神の義と顔を合わせなければならない。神から与えられた、時、財産、知性などのタラントを、この世の神に仕えるために浪費した者は、その裁判のときに申し開きをしなければならない。彼らは、彼らの真の愛する友である主を捨てて、便宜主義とこの世の快楽の

道を歩んだのである。彼らは、いつかは神に帰ろうと思っていた。しかし、世俗は、その罪悪とまどわしによって注意を奪っていた。軽薄な娯楽、衣服の誇り、食欲の満足などが心を無感覚にし、良心を麻痺させ、真理の声を聞こえなくしていた。義務はさげすまれた。無限の価値あるものが軽々しく扱われて、ついに人の心は、人間のためにこれほど多くをお与えになったお方のために、犠牲を払おうという望みを全く失ってしまった。彼らは、収穫の時に、自分たちのまいたものを収穫するのである。 PP 290.4

主は言われる。「わたしは呼んだが、あなたがたは聞くことを拒み、手を伸べたが、顧みる者はなく、かえって、あなたがたはわたしのすべての勧めを捨て、わたしの戒めを受けなかった……、これは恐慌が、あらしのようにあなたがたに臨み、災が、つむじ風のように臨み、悩みと悲しみとが、あなたがたに臨む時である。その時、彼らはわたしを呼ぶであろう、しかし、わたしは答えない。ひたすら、わたしを求めるであろう、しかし、わたしに会えない。彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、わたしの勧めに従わず、すべての戒めを軽んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる」「しかし、わたしに聞き従う 者は安らかに住まい、災に会う恐れもなく、安全である」（箴言 1：24～31、33）。 PP 290.5

こうしてイスラエルの人々は、主の前に心を低くした。「そうして彼らは自分たちのうちから異なる神々を取り除いて、主に仕えた」。そして、主の愛の心は痛んだ。すなわち、「イスラエルの悩みを見るに忍びなくなった」（士師記 10：16）。ああ、われわれの神は、なんと忍耐強く、あわれみ深いことであろう。神の民が、主の臨在を妨げていた罪を捨てたときに、神は彼らの祈りを聞き、すぐに彼らのために活動をお始めになった。 PP 291.1

ギレアデ人エフタが指導者に選ばれた。彼は、アンモン人と戦って、りっぱに彼らの勢力をくじいた。このとき、イスラエルは、18 年間も敵の圧迫に苦しんでいたのであるが、彼らは、苦難によって教えられた教訓をふたたび忘れてしまった。 PP 291.2

神の民が、彼らの悪い行いにもどると、主はまたもや彼らが強力な敵、ペリシテに圧迫されることをお許しになった。彼らは、長年の間、この残酷で好戦的な国民に絶え間なく悩まされ、時には完全に征服された。彼らは、こうした偶像教徒と交わり、その

快楽や礼拝に参加し、ついには、その精神も関心も同じになってしまった。そして、これらのイスラエルのみかけだけの友人は、彼らの最も恐ろしい敵となり、あらゆる手段を講じて、彼らを滅亡させようとしたのである。 PP 291.3

イスラエルと同様に、クリスチャンも、神を信じない人々と友だちになるために、世俗の影響に負け、世の原則や習慣に同調しがちである。しかし、最後には、これらの自称友人たちは最も危険な敵であることが判明する。聖書は、明らかに、神の民と世の中の間に一致があり得ないことを教えている。「兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及ばない」（Ⅰヨハネ 3：13）。「あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい」と救い主は言われる（ヨハネ 15：18）。 PP 291.4

サタンは、神を敬わない人々を友人のように装わせて、神の民を罪に誘い、彼らを神から引き離そうとする。そして、彼らを防御しているものが除かれると、サタンは、その部下たちに、彼らを攻撃させて滅ぼしてしまおうとするのである。 PP 291.5

第 54 章　サムソン

本章は、士師記 13～16 章に基づく PP 291.6

国中が背信状態に陥っている時に、神の忠実な礼拝者たちは、イスラエルが救済されることを神に祈り求めていた。その答えはすぐに与えられそうにもなく、年々、圧迫者の力は、国土に重くのしかかってくるのであったが、神は、摂理のうちに、彼らに援助を与える準備をしておられた。ペリシテ人の圧迫の初期に、この大敵の力をくじくために神が用いようとされた子がすでに生まれていた。 PP 291.7

ペリシテの平原を見おろす丘陵地帯の境に、ゾラという町があった。ここにダンの部族のマノアの一家が住んでいた。この家族は、一般の背反の中で、主に忠誠を尽くすわずかな家族の 1 つであった。不妊の女であったマノアの妻に、「主の使」が現れて、彼女が男の子を生むことと、その子によって、神がイスラエルをお救いになることを告げた。そのため、主の使いは、彼女の習慣について勧告を与えるとともに、子供の取り扱い方も指示した。「それであなたは気をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではなりません。またすべて汚れたものを食べてはなりません」（士師記 13：4）。そして、子供にも初めからこの同じ禁令が課せられ、それに頭の毛を切ってはならないことが追加された。というのは、その子は、生まれた時から、神に捧げられたナジル人になるからであった。 PP 291.8

女は、夫のところに来て天使のようすを語ったあとで、天使が告げたことを話した。彼らは、自分たちにゆだねられた重大な任務を果たすのにまちがいを犯してはいけないと思って、マノアは祈っていった。「あ あ、主よ、どうぞ、あなたがさきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください」（同 13：8）。 PP 291.9

主の使いがふたたび現れたとき、マノアは熱心にたずねた。「その子の育て方およびこれになすべき事はなんでしょうか」（同 13：12）。すると、以前の教訓がまたくり返された。「わたしがさきに女に言ったことは皆、守らせなければなりません。すな

わちぶどうの木から産するものはすべて食べてはなりません。またぶどう酒と濃い酒を飲んではなりません。またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」（同 13：13、14）。 PP 292.1

神は、マノアの約束の子に、重大な働きをさせようとしておられた。そして、母親と子供の両方の習慣を注意深く調整したのは、この働きに必要な資格をこの子に得させるためであった。「ぶどう酒と濃い酒を飲んではなりません」と、天使はマノアの妻に教えた。「またすべて汚れたものを食べてはなりません。わたしが彼女に命じたことは皆、守らせなければなりません」。子供は、母親の習慣によって、良い影響を受けることもできるし、悪い影響を受けることもできる。母親は、子供の幸福を願うならば、彼女自身が原則に支配され、節制と自制を実行しなければならない。賢明でない勧告者は、母親がすべての欲求や衝動を満足させる必要があると勧めるが、こうした教えは誤りで有害である。母親は、神ご自身の命令によって自制を働かせるという、最も厳粛な義務のもとにおかれている。 PP 292.2

母親と同様に、父親にもこの責任が負わせられている。両親が、彼ら自身の知的、身体的特徴、性質、欲求などを子供たちに伝える。親の不節制の結果として、子供たちの体力、知的、道徳的能力が欠けていることがある。酒を飲み、タバコを吸う人々は、そのような満足することを知らない欲求、刺激された血液、興奮しやすい神経を、彼らの子供たちに伝えるかもしれず、現に伝えている。不品行な者は、彼らの邪悪な欲望を子孫に伝え、いまわしい病気を遺産として残すことさえある。子供たちの激しい気性やゆがめられた欲望だけでなくて、幾千という生まれながらの聴力や視力のない人、病気や虚弱体質などは、大部分が親の責任である。 PP 292.3

どの父親や母親も、「わたしたちがその生れる子になすべきことを教えてください」とたずねなければならない。多くの者は、生まれる前の影響ということを軽視している。しかし、天からヘブルの両親に与えられ、しかも最も明瞭で厳粛な方法で 2 度もくりかえされた教えによれば、創造主がこのことをどのようにごらんになるかがわかる。 PP 292.4

そして、約束の子が、両親からよい遺産を受けるだけでは十分ではなかった。これは、注意深い訓練と正しい習慣の形成によって継続していかねばならなかった。将来のイスラエルの士師であり救済者となる者は、幼い時から厳格な節制の訓練を受けなければならなかった。彼は、誕生の時からナジル人となり、永久にぶどう酒または濃い酒を飲んではならなかった。節制、克己、自制の教訓は、赤子の時から子供たちに教えなければならない。 PP 292.5

天使の禁令のなかには、「すべて汚れたもの」も含まれていた。食物を清いものと汚れたものとに分けたことは、単に礼典的、また、独断的に定められたのではなくて、衛生の原則に基づいていた。ユダヤ人が幾千年もの間、驚くべき生命力を保持したのは、主として、この区別を守ったからであった。節制の原則は、単に、アルコール性の飲料の使用に関することだけにとどまらず、もっと広く応用されなければならない。刺激的で消化の悪い食物は、同様に健康に有害で、酔酒の原因になることが多い。真の節制は、有害なものを全く使用せず、健康的なものを適度に使用することを教える。食習慣が、健康、品性、この世界での有用性、そして、永遠の運命にどれほど深い関係を持ったものであるかを自覚している者は少ない。食欲は、常に道徳力と知力の支配のもとにおいておかなければならない。体は、心のしもべであるべきで、心が体のしもべであってはならない。 PP 292.6

マノアに与えられた神の約束は、やがて実現して男の子が生まれ、その子にサムソンという名が与えられた。少年が成長するにつれて、驚くべき体力の持ち主であることが明らかになった。これは、サムソンと両親たちが良く知っていたように、彼のたくましい筋肉によるのでなくて、彼のそらない髪の毛が象徴していたように、彼がナジル人であるということによるのであった。サムソンが忠実に、彼の親と同じように神の命令に従ったならば、彼はもっと気高く、幸福な一生を送ったことであろう。しかし、偶像教徒との交わりが、彼を腐敗させた。ゾラの町は、ペリシテ人の国に近かったので、サムソンは、彼らと交わって仲よくなった。こうして、彼が若い時に結んだ親しい交わりが、彼の全生涯を暗くした。ペリシテ人の町テムナに住む若い婦人が、サムソンの心を捕らえたので、サムソンは彼女を自分の妻にしようと決心した。神を敬う両親は、なん

とかして彼の心を変えさせようと努力したが、彼は、「彼女はわたしの心にかないますから」と答えるだけであった（同 14：3）。両親は、ついに折れて、彼の希望をかなえ、結婚を許した。 PP 293.1

彼がちょうど成人し、神の任命を実行しなければならないとき、他のどんな時よりも神に忠誠を尽くすべき時に、サムソンは、イスラエルの敵と結合してしまった。彼は自分の選んだ者と結婚することによって、神に栄光を帰すことができるか、それとも、自分の生涯によって完成しようとしている目的を達成できない地位に自分をおいているのかどうかをよく問うてみなかった。神をまずあがめようと求めるすべての者に、神は知恵を約束なさった。しかし、自己を喜ばせようとする者には、なんの約束もない。 PP 293.2

サムソンが歩んだのと同じ道をたどる者が、なんと多いことであろう。自分の好みに支配されて、夫や妻を選ぶために、神を信じる者と信じない者との結婚が、なんと多く行われていることであろう。その人々は、神の勧告を求めもしなければ、神の栄光をあらわそうとも考えていない。キリスト教は、結婚関係に支配的影響を及ぼさなければならないのに、この結合の動機がキリスト教の原則に一致していないことがあまりにも多い。サタンは、神の民にサタンの部下と結合するようにしむけて、自分の勢力を強化しようと常につとめている。サタンはそれを実現するために、清められていない欲望を心に起こそうとつとめているのである。しかし、主は、主のみことばの中で、神の民は、神の愛の宿っていない人々と 1 つになってはならないと明らかに教えておられる。「キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一致があるか」（Ⅱコリント 6：15、16）。 PP 293.3

サムソンは、彼の結婚式の時に、イスラエルの神を憎む者と親しく交わった。このような関係に自分から進んで入る者は、彼の仲間の習慣や風習に、いくぶんかは従わねばならぬと感じるのである。こうして費やされた時間は浪費以上にいけなかった。そこでは、原則のとりでを破壊し、魂の要塞を弱める思いをいだき、言葉が語られていた。 PP 293.4

サムソンが神の戒めを犯して得た妻は、結婚の祝宴が終わる前に、夫を裏切るのであった。サムソンは、彼女の不信を怒って、しばらく彼女を捨てて 1 人でゾラの家に帰った。後に、気を取りもどして花嫁のところへもどってみると、彼女は他人の妻になっていた。サムソンは、ペリシテ人の麦畑やオリブ畑を焼きはらって仕返しをした。女が彼らにおどされてだましたことから騒動は起こったのであったが、彼らは怒って女を殺してしまった。サムソンは、すでに、単独で若いししを殺したり、アシケロンで 30 人の男を殺したりして、その驚くべき力の証拠を示していた。ところが、サムソンは彼の妻が無残に殺されたのを怒って、ペリシテ人を撃ち、「大ぜい殺した」。こうして、サムソンは、敵をのがれて、ユダの部族の中にある「エタムの岩」に退いた（士師記 15：8）。 PP 293.5

この場所まで、大軍が彼を追ってきた。驚いたユダの住民は、卑屈にも彼を敵の手に引き渡すことにした。そこで、3000 人のユダの人々が、彼のところにやって来た。しかし、こんなに大勢で来ていながら、彼らは、サムソンが自国民に害を加えないということを確かめるまでは、彼のところへ近づこうとしなか った。サムソンは縛られてペリシテ人に渡されることに同意した。しかし、まず、ユダの人々に彼を攻撃しないという約束をさせた。そうでないと、サムソンが彼らを殺さなければならなくなるからであった。彼は、自分を 2 本の新しい綱で縛ることを許した。こうして、彼は、大声をあげて喜ぶ敵の陣地に引き立てられていった。しかし、彼らの叫び声が山々に反響していたとき、「主の霊が激しく彼に臨んだ」（同 15：14）。彼は、強い新しい綱を火に焼いた亜麻のように切ってしまった。そして、サムソンは、ろばのあご骨に過ぎなかったが、剣ややりよりも効果的であった手近な武器をとり、ペリシテ人を打ったところ、彼らはあわてふためいて、1000 人の死者を戦場に残して逃げ去った。 PP 293.6

もしイスラエルの人々がサムソンと 1 つになって勝利を完成していたら、彼らは、このとき圧迫者の力から自由になっていたことであろう。しかし、彼らは、おじけて臆病になった。彼らは、神が彼らにお命じになった働きを怠って、異教徒を追放しなかった。そして、異教徒の堕落した風習に合流し、彼らの残酷な行為を大目に見、直接自分たちに対してなされるのでないかぎり、彼らの不正をさえ黙認した。彼らは、圧迫者の

支配下におかれたとき、もし神に従ってさえいたらのがれることができたはずの堕落に、やすやすと陥った。主が彼らのために救済者をお立てになったときでさえ、彼らは、しばしばその人を捨てて、彼らの敵に合流してしまったりしたのであった。 PP 294.1

サムソンが勝利を収めたあとで、人々は彼を士師にした。彼は、20 年の間、イスラエルを治めた。しかし、1 つの悪は、さらに次の悪へと導くのであった。サムソンは、すでにペリシテ人の妻をめとって、神の戒めを犯したが、彼は、また、彼を憎悪している敵、ペリシテ人の間に行って、道ならぬ欲望を満たした。彼は、ペリシテ人を恐怖に陥れた自分の大力をたのみとして、臆するところなく、ガザの遊女を訪れた。彼が町に来たことを知った町の人々は、なんとかして報復をしようとした。彼らの敵は、彼らのすべての町々の中の最も強固な町の城壁の中にしっかりと閉じこめられていた。彼らは、まちがいなく獲物を捕らえることができると思い、朝まで待って、勝利の喜びを味わおうとしていた。サムソンは、夜中に目がさめた。彼は、ナジル人の誓いを破ったことを思い出して、良心に責められ、心が苦しめられた。しかし、神は彼がこのような罪を犯したにもかかわらず、彼を憐れみ、お捨てにはならなかった。彼の大力は、また、ここで彼を救った。彼は町の門へ行って、門の柱と貫の木もろともに、門を引き抜いて、ヘブロンにいく途中の山の頂上まで持って行った。 PP 294.2

しかし、こうした危機から救い出されても、彼の悪い行為はやまなかった。彼は、ペリシテ人のところへは出かけていかなかったが、彼は、彼の身を破滅に陥れる肉の快楽を求め続けた。サムソンは、その故郷からあまり遠くない「ソレクの谷にいる……女を愛した」（同 16：4）。その女はデリラ（消費者）という名であった。ソレクの谷は、ぶどう畑が有名で、これは、また、心の落ちつかないナジル人にとっては誘惑であった。彼は、すでに酒を飲み、純潔と神とに彼を結びつけていた今一つのきずなを破っていた。ペリシテ人は、敵の行動を絶えず見張っていた。彼が新しい女を愛して堕落した時デリラを用いて、彼を破滅させようとした。 PP 294.3

ペリシテの各地方の代表者から成る一団が、ソレクの谷を訪れた。彼らは、サムソンが大力を持っているまま彼を捕らえようとはせず、できれば彼の力の秘密がどこにあ

るのかを聞き出そうとした。そこで、彼らは、それを見つけ出して知らせるようにデリラを買収した。 PP 294.4

裏切り者のデリラが、いろいろと手を尽くしてたずね出そうとしたところ、サムソンは、ある一定の方法で私を縛れば、私はほかの人のように弱くなると言って、彼女をだました。彼女が言われた通りにしてみると、うそがばれてしまった。それで、女は、サムソンがうそを言ったことを責めて言った。「あなたの心がわたしを離れているのに、どうして『おまえを愛する』と言うことができますか。あなたはすでに 3 度もわたしを欺き、あなたの大力がどこにあるかをわたしに告げま せんでした」（同 16：15）。サムソンは、ペリシテ人がサムソンの愛人と組んで、3 回も自分を殺そうとしている明らかな証拠を見た。それが失敗するたびに、彼女はそれをただのたわむれのように装ったので、サムソンは愚かにも恐れを感じなかった。 PP 294.5

デリラは、毎日彼に迫ったので、ついに「彼の魂は死ぬばかりに苦しんだ」（同 16：16）。それでも彼は不思議な力にひかれて、彼女のそばにいた。サムソンは、とうとうたまらなくなって、秘密を明かした。「わたしの頭にはかみそりを当てたことがありません。わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去って弱くなり、ほかの人のようになるでしょう」（同 16：17）。ペリシテ人の君たちのところへ、すぐに彼女のところへ来るようにという知らせがとんだ。勇士サムソンが眠っている間に、ふさふさした髪の毛が彼の頭からそり落とされた。そうして、前にも 3 回したのと同じように、デリラは、「サムソンよ、ペリシテびとがあなたに迫っています」と言った。サムソンは、急に目をさまして前と同じように、力を出して敵を殺そうとした。しかし、彼の腕からは力が抜けて言うことをきかなかった。彼は、「主が自分を去られたこと」を知った（同 16：20）。デリラは、サムソンの髪の毛をそった時に、彼を苦しめ痛みを与えて、その力をためした。ペリシテ人は、サムソンの力が完全になくなったことを十分確かめないうちは近づいてこなかったからである。こうして、彼らは、サムソンを捕らえて、両眼をえぐってガザへ連れて行った。そこで、彼は獄屋のかせにつながれて重労働を課せられた。 PP 295.1

イスラエルの士師であり、勇士であった彼が、今は、力なく、盲目になり、獄屋につながれて、最もいやしい仕事をさせられるとは、なんという変わりようであろう。彼は、自分の聖なる任務の条件を少しずつ破っていったのである。神は、彼を長く忍耐なさった。しかし、彼が自分の秘密を明かすほどに罪の力に身を委ねてしまった時に、主は、彼を去られたのである。彼の長い髪だけに力があったのではなくて、それは、彼が神に忠誠を尽くしているしるしであった。そして、その象徴が、肉欲をほしいままにして犠牲にされた時に、それが象徴していた祝福もまた取り去られた。 PP 295.2

サムソンは、ペリシテ人の見せ物となって、苦しみとはずかしめを受け、これまでになかったほどに、自己の弱さを知った。そして、彼は、苦難によって悔い改めるに至った。髪が伸びるにつれて、彼の力も徐々にもどってきた。しかし、敵は、彼をくさりにつながれた無力な囚人であると思って、恐怖を感じなかった。 PP 295.3

ペリシテ人は、彼らの勝利を彼らの神々に帰した。そして、勝ち誇ってイスラエルの神をあなどった。「海の守護神」魚の神、ダゴンをあがめる祭りの日が定められた。ペリシテの平原全体の町々村々から、人々や君たちが集まった。礼拝者の群れが大きな神殿に満ち、屋根のまわりの桟敷にあふれた。それは、祭りの楽しい光景であった。荘厳な犠牲を捧げる式に続いて、音楽と祝宴が開かれた。それから、ダゴンの力を示す最高の戦利品として、サムソンが引き出された。彼が現れたとき、人々は歓呼の声をあげた。一般の人々も、君たちも、サムソンのみじめな姿をあざ笑い、「われわれの国を荒し」た者を倒した神をたたえた（同 16：24）。しばらくして、サムソンは、疲れたようなふりをして、神殿を支えているまん中の 2 本の柱にもたれて、休むことを許してほしいと願った。そうして、彼は、神に黙祷を捧げた。「ああ、主なる神よ、どうぞ、わたしを覚えてください。ああ、神よ、どうぞもう 1 度、わたしを強くして、……ペリシテびとにあだを報いさせてください」（同 16：28）。彼は、こう祈って、その強い腕で柱をかかえ、「わたしはペリシテびとと共に死のう」と叫び、身をかがめた。すると、屋根が落ちて、そこにいた大群衆を一度に殺してしまった。「こうしてサムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった」（同 16：30）。 PP 295.4

偶像とその礼拝者たちは、祭司も農民も、勇士も、つかさたちも共にダゴンの神殿の瓦礫の下に葬られてしまった。その中に、神が、神の民の救済者としてお選びになった人の大きな遺体があった。恐るべき破壊の知らせがイスラエルの国に伝わったので、サム ソンの身内の人々が、彼らの住んでいた山から降りてきて、誰の妨害も受けずに、倒れた英雄の遺体を引き取った。そして、彼らは、「彼を……携え上って、ゾラとエシタオルの間にある父マノアの墓に葬った」（同 16：31）。 PP 295.5

サムソンを用いて、神が「ペリシテびとの手からイスラエルを救い始める」という約束は実現した（同 13：5）。しかし、神の賛美と国家の栄光となり得た生涯の記録は、なんと暗く恐ろしいものであったことであろう。もしサムソンが、神の任命に忠実であったなら、神の目的は、彼の栄誉と昇進によって、成しとげられたことであろう。しかし、彼は誘惑に負け、信頼にそむき、その働きは、敗北と捕囚と死によって成しとげられた。 PP 296.1

サムソンは、肉体的には世界で一番強い人であった。しかし、自制、誠実、堅実という点では、最も弱い人の 1 人であった。激しい感情の人を強い性格の人と考える者が多いが、実は激情に支配される人は弱い人である。人間の真の偉大さは、その人が支配する感情によるのであって、彼を支配する感情によるのではない。 PP 296.2

神は、サムソンが召された働きを達成する準備が与えられるように、常に摂理的に、彼をお守りになった。彼の生涯の一番初めから、肉体的力、知的活力、道徳的純潔を養うためによい環境に囲まれていた。しかし、悪い友だちの感化によって、彼は、人間の唯一の保護であった神を手放し、悪の潮流に流された。義務の道を歩んでいて試練にあうならば、必ず神が守ってくださることを確信してよい。しかし、人間が、故意に誘惑の力に身をさらすときに、おそかれ早かれ倒れるのである。 PP 296.3

神がご自分の器として、特別の働きのために用いようとなさるその人々を、サタンは全力を尽くして挫折させようとする。サタンは、われわれの弱点を攻撃し、品性の欠点を通じて、人間全体を支配しようとする。そしてサタンは、こういう欠点が人の心にいだかれているかぎり、自分の成功はまちがいないことを知っている。しかし、誰でも打ち負かされる必要はない。人間は、自分の弱い力で悪の力を征服するように、放任さ

れていない。援助は手近にある。そして、誰でも真にそれを望む者には与えられる。ヤコブが幻に見たはしごを上り下りする神の使いたちは、最高の天にまででものぼろうと志すすべての魂に助けを与えるのである。 PP 296.4

第 55 章　幼児サムエル

本章は、サムエル記上 1 章、2：1～11 に基づく PP 296.5

エフライムの山地のレビ人エルカナは、富と勢力を持った人で、主を愛しおそれる人であった。彼の妻ハンナは、信仰のあつい女であった。優しく、謙遜で、非常な熱心さとあつい信仰とが彼女の性質の特徴であった。 PP 296.6

ヘブル人ならだれでも、熱心に求める祝福が、この敬神深い夫婦には与えられなかった。彼らの家庭には、子供たちの喜ばしい声がなかった。そして、家名を永続させたいという願いは、他の多くの者と同じように、第二の結婚契約を結ばせるにいたった。しかし、これは、神に対する信仰の足りなさによるものであったために、幸福をもたらさなかった。家庭に、むすこ、娘は加えられた。しかし、神の聖なる制度の喜びと美とは傷つけられ、家族の平和は破られた。新しい妻のペニンナは、嫉妬深くて、心が狭く、高慢で横柄な態度を取った。ハンナにしてみれば、希望はくじかれ、人生は耐えられない重荷のように思われるのであった。しかし、彼女は、つぶやくことなく柔和に試練に耐えた。 PP 296.7

エルカナは、忠実に神の定めを守った。シロでの礼拝は、なお続けられていたが、礼拝の勤めが不規則であったために、レビ人として果たすべきであった当然の奉仕は、聖所で要求されていなかった。それでも、彼は、定められた集会に家族と共に礼拝に行 き、犠牲を捧げた。 PP 296.8

神の勤めに関連した聖なる祭りの中でさえ、彼の家庭にわざわいをもたらしたよこしまな精神が、頭をもたげた。感謝の捧げ物をすませた後、家族の者はすべて、定められた習慣に従って、厳粛ではあるが喜ばしい祝宴にあずかった。こうした際に、エルカナは、子供たちの母に 1 人前を与え、彼女のむすこ、娘たちにそれぞれ 1 人前の分け前を与えた。そして、ハンナには、彼女に対する思いのしるしとして、2 人前を与えた。これは、彼女がむすこを持ったのと同様に、彼の、彼女に対する愛情を表したものであった。すると、第二の妻は、嫉妬に燃えて、自分は大いに神に恵まれている者として優

位を誇り、ハンナに子供がないのは神の怒りのしるしであると言って彼女を悩ました。こうしたことが毎年くりかえされ、ついにハンナは耐えられなくなった。彼女は悲しみを隠しきれずに泣き伏して、祝宴の席から去った。夫の慰めのことばもむだであった。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。どうして心に悲しむのか。わたしはあなたにとって 10 人の子どもよりもまさっているではないか」と彼は言った（サムエル上 1：8）。 PP 297.1

ハンナは、人を責める言葉を出さなかった。地上の友に打ち明けられない重荷を、彼女は神に委ねた。ハンナは、神が恥を除いて、彼女にむすこという尊い賜物を賜わり、その子を神のために養育し、訓練することができるようにと熱心に願い求めた。そして、彼女は、自分の願いがかなえられるならば、その子を生まれた時から神に捧げることを厳粛に神に誓った。ハンナは、幕屋の入口近くに寄って、深く悲しみ、「祈って、はげしく泣いた」（同 1：10）。しかし、ハンナは、何も言わずに静かに神と交わった。当時の邪悪な時代にあってこうした礼拝の光景はめったに見られなかった。宗教的な祭りの時でさえ、神を敬わない飲食、酔酒などはいつものことであった。そして、大祭司のエリは、ハンナを見ていて、彼女が酒に酔ったものと考えた。彼は、譴責のつもりできびしく言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい」と（同 1：14）。 PP 297.2

ハンナは心を痛め、驚いて、静かに答えた。「いいえ、わが主よ。わたしは不幸な女です。ぶどう酒も濃い酒も飲んだのではありません。ただ主の前に心を注ぎ出していたのです。はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆえに、わたしは今まで物を言っていたのです」（同 1：15、16）。 PP 297.3

大祭司は神の人であったので、非常に心を動かされた。そして、譴責の代わりに祝福を与えた。「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」（同 1：17）。 PP 297.4

ハンナの祈りは、聞きとどけられた。彼女は、心から願い求めた賜物を受けたのである。彼女は子供を見て、サムエル（神に求めた）と名づけた。幼児が母親から離れられるほどになるやいなや、ハンナは、誓いを果たした。ハンナは、世の母親の持つ愛情

の限りを尽くして、自分の子を愛した。日ごとにむすこの力が強くなり、子供らしい片言に耳を傾けるにつれて、彼女は、ますます深くサムエルを愛した。彼は、ハンナの 1 人子であり天からの特別の賜物であった。しかし、彼女は、サムエルを神に捧げた宝として受けた。そして、神ご自身のものを与え主なる神に返さず、留めておこうとはしなかった。 PP 297.5

ハンナは、もう 1 度、夫と共にシロに出かけて、神の名のもとに、彼女の尊い賜物を祭司に捧げて言った。「この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけられました。それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです」（同 1：27、28）。エリは、イスラエルのこの女の信仰と献身に深く感動した。エリは、自分自身が子供を甘やかして育てた父親であったので、神の奉仕に捧げるために、自分の 1 人子と離れる母親の崇高な犠牲を見て畏敬の念に打たれ、恥ずかしく思うのであった。彼は、自分の利己的な愛を責められ、へりくだって、うやうやしく主の前に頭をたれて礼拝した。 PP 297.6

母親の心は、喜びと賛美にあふれた。そして、神に対する感謝の気持ちを表したいと思った。彼女は霊感に満たされた。「ハンナは祈って言った、 PP 297.7

『わたしの心は主によって喜び、 PP 298.1

わたしの力は主によって強められた、 PP 298.2

わたしの口は敵をあざ笑う、 PP 298.3

あなたの救によってわたしは楽しむからである。 PP 298.4

主のように聖なるものはない、 PP 298.5

あなたのほかには、だれもない、 PP 298.6

われわれの神のような岩はない。 PP 298.7

あなたがたは重ねて高慢に語ってはならない、 PP 298.8

たかぶりの言葉を口にすることをやめよ。 PP 298.9

主はすべてを知る神であって、 PP 298.10

もろもろのおこないは主によって量られる。…… PP 298.11

主は殺し、また生かし、 PP 298.12

陰府にくだし、また上げられる。 PP 298.13

主は貧しくし、また富ませ、 PP 298.14

低くし、また高くされる。 PP 298.15

貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、 PP 298.16

乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、 PP 298.17

王侯と共にすわらせ、 PP 298.18

栄誉の位を継がせられる。 PP 298.19

地の柱は主のものであって、 PP 298.20

その柱の上に、世界をすえられたからである。 PP 298.21

主はその聖徒たちの足を守られる、 PP 298.22

しかし悪いものどもは暗黒のうちに滅びる。 PP 298.23

人は力をもって勝つことができないからである。 PP 298.24

主と争うものは粉々に砕かれるであろう、 PP 298.25

主は彼らにむかって天から雷をとどろかし、 PP 298.26

地のはてまでもさばき、 PP 298.27

王に力を与え、 PP 298.28

油そそがれた者の力を強くされるであろう』」 PP 298.29

（サムエル記上 2：1～10） PP 298.30

ハンナの言葉は、イスラエルの王として支配するダビデと、主に油そそがれたメシヤとの両方を預言したものであった。歌は、まず、無礼で争い好きな女の高慢さを歌っているが、神の敵が滅ぼされて、神に腰われた人々が最後の勝利を得ることをさしている。 PP 298.31

ハンナは、大祭司の教育のもとで、神の家の奉仕のための訓練を受けることができるように、幼児サムエルを残して、静かにシロからラマの家に帰った。子供の物ごころがつき始めたころから、彼女は、その子に神を愛し敬うことを教え、子供自身が主のものであることを自覚するように教えた。彼女は、サムエルの周りにある見なれたあらゆるものによって、彼の心を創造主に導こうと努めた。子供と別れてからも、彼女の忠実

な母としての心づかいがやんだのではなかった。サムエルは、彼女の日ごとの祈りの主題であった。彼女は、毎年、手ずから彼の仕事着を作った。そして、主人と共にシロに礼拝に上ったとき、彼女はこの愛のしるしを子供に与えたのである。小さな着物の一糸一糸は、サムエルが、清く気高く真実になるようにという祈りによって織られた。ハンナは、そのむすこが世的に偉大になることを求めるのでなくて、彼が天の認める偉大さに達することを熱心に求めた。すなわち、それは彼が神をあがめ、同胞を祝福することであった。 PP 298.32

ハンナには、どんな報いが与えられたことであろう。そして、彼女の模範は、忠実であることに対してなんという激励を与えていることであろう。測り知れない価値のある機会と、無限に尊い有利な立場とが、すべての母親に委ねられている。女がたいくつな仕事と考える日常のいやしい務めは、偉大で高貴な働きとみなされなければならない。母親には、その感化力によって世界を祝福するという特権がある。そして、そうすれば、彼女自身の心にも喜びがわくのである。彼女は、照っても曇っても輝くみ国へ行く子供たちの足のために、まっすぐな道を備えるのである。しかし、それは、母親が自分自身の生活において、キリストの教えに従おうとする時にのみ、子供たちの品性を神のみかたちにかたどって形成することを望みうるのである。世の中には、腐敗的感化がみなぎっている。流行や慣習が青年たちに強く働きかけている。もしも母親が、教え、導き、制する義務を怠るならば、子供たちは、自然と悪に従い、善から離れていく。すべての母親は、たびたび救い主のみもとに行って、「どのように子供をしつけ、子供に何をしたらよいかを教えてください」と祈らなければならない。母親は神 がみことばの中にお与えになった教えに心を向けるとよい。そうすれば、必要に応じて、知恵が与えられることであろう。 PP 298.33

「わらべサムエルは育っていき、主にも、人々にも、ますます愛せられた」（サムエル上 2：26）。サムエルの青年時代は、神の礼拝のために捧げられて、神殿で過ごしたとはいえ、罪深い生活の悪い感化がなかったわけではない。エリのむすこたちは、神をおそれず彼らの父を尊ばなかった。しかし、サムエルは、彼らとの交わりを求めず、彼らの悪い行為をまねなかった。彼は、神のお望みになるものになろうと常に努力した。

これはすべての青年の特権である。神は、小さい子供たちでも、神のご用のために自分自身を捧げることをお喜びになる。 PP 299.1

サムエルは、エリの指導のもとにおかれた。そして、サムエルの美しい品性にひかれて、年老いた祭司は、非常に彼をかわいがった。サムエルは、親切、寛大、従順、ていねいであった。エリは、自分の子供たちのわがままに心を痛めていたが、サムエルが彼に委ねられてから、休息と慰めと祝福とが与えられた。サムエルは、よく手助けをし、愛情がこまやかであった。そして、エリはこの地上のどの父親よりも優しくサムエルを愛した。国家の政治をつかさどる者とほんの少年との間に、このような温かい愛情が通い合うとは、不思議なことであった。エリが老齢のためにだんだん衰弱してくると、彼自身のむすこたちの放縦な生活を憂えて苦しむのであったが、彼は、サムエルに慰めを求めた。 PP 299.2

レビ人は、25 歳になって初めてそれぞれの任務につくのが慣例になっていたが、サムエルは例外であった。サムエルには、毎年、さらに重要な任務が負わせられた。そして、彼がまだ子供であったうちから、聖所の働きに献身したしるしとして、布のエポデをつけていた。サムエルは、幕屋の働きをするために連れてこられた時は幼かったけれども、その時でさえ、彼の力量に応じた任務を負わせられて、神のご用を果たした。初め、このような仕事は、非常にいやしいことで、必ずしも快いものではなかった。しかし、彼は、最善を尽くして、喜んでその務めを果たした。彼は、人生のすべての義務を宗教的信念をもって行った。彼は、自分を神のしもべとみなし、彼の働きを神の働きと考えた。彼の努力は受け入れられた。それは、彼の努力が、神への愛と、神のみこころを行おうとする真剣な願望によるものであったからである。こうして、サムエルは、天地の主と共に働く者となった。そして、神は、彼をイスラエルのために、大事業を完成するにふさわしい者となさった。 PP 299.3

日常の小さな義務をくりかえして行うことは、主が子供たちのために指示された道であり、それは、彼らが忠実に力ある奉仕をするための訓練を受ける学校であることを、子供たちに教えるならば、彼らの仕事は、どんなに楽しく尊いものとなることであろう。すべての義務を主のためにするように行うことは、どんなにいやしい仕事をも魅力ある

ものにし、地上の働き人を、天で神のみこころを行う天使たちと結合させるのである。 PP 299.4

この世で成功を収め、来世の獲得にも成功することは、小事を忠実に、良心的に行うことにかかっている。完全さは、神のお造りになったものの中の大きいものと同様に、小さいものの中にも見られる。宇宙に諸世界を掛けた手は、巧みに野の花を造った手であった。そして、神がその領域で完全であられるように、われわれも、われわれの領域で完全でなければならない。均整のとれた強く美しい品性は、１つ１つの義務を行う行為によって築かれる。そして、われわれの人生の大きな事と同様に小さい事においても、忠実さが特徴とならなければならない。小事に忠実であること、小さな忠誠ある親切な行為は、人生の道を楽しいものにする。そして、われわれの地上の仕事が終わった時に、われわれが忠実に行った義務の１つ１つは、よい感化を及ぼしたことを知る。そうした感化は、いつまでも消えないのである。 PP 299.5

サムエルと同様に、現代の青年も神の御目に尊いものとみなされることができる。彼らは、クリスチャンとしての忠誠を保つことによって、改革の働きのために強い感化を及ぼすことができる。こうした人が今 日必要である。神は、彼らの一人一人のなすべき働きを持っておられる。今日、神の信頼に忠実である者は、これまでどんな人もなし得なかった大きなことを、神と人類のためになしとげるのである。 PP 299.6

第 56 章　エリとむすごたち

本章は、サムエル記上 2：12～36 に基づく PP 300.1

エリは、イスラエルの祭司であり、士師であった。彼は、神の民の中で、最高で最も責任ある地位を占めていた。祭司の聖職に選ばれた人、また、国中で最高の裁判権を持った者として、エリは、人々の模範として尊敬され、イスラエルの部族に大きな感化を及ぼしていた。ところが、彼は、人々を治める任命は受けたが、自分自身の家は治めなかった。エリは、甘い父親であった。彼は平和と安易を愛したので、彼の権威を行使して子供たちの悪習慣と情欲を是正しなかった。彼は、子供たちと争ったり彼らを罰したりしないで、子供たちのしたいほうだいのことをやらせておいた。彼は、子供たちの教育が、彼の最も重大な責任の 1 つであることを自覚しないで、そのことを軽視した。イスラエルの祭司であり、裁判官である者は、神がお委ねになった子供たちを制し、治める義務について、無知であったわけではなかった。しかし、エリは、義務を行うことを恐れてしなかった。なぜなら、それは、むすこたちの意志にさからい、彼らを罰し、拒むことを必要としたからであった。エリは、彼のこうした態度がどんなに恐ろしい結果をもたらすのかをも考えないで、子供たちの好むままを行わせ、彼らを神の奉仕と、人生の義務のために準備することを怠った。 PP 300.2

神は、アブラハムについて言われた。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである」（創世記 18：19）。しかし、エリは、子供たちのするがままになっていた。父親は、子供たちの家来であった。犯罪ののろいは、彼のむすこたちの行為にあらわれた腐敗と悪に明らかに見られた。彼らは、神の品性も神の律法の神聖さも正しく理解しなかった。彼らにとって、神に仕えることは、普通のことであった。彼らは、子供の時から聖所とその務めになれていた。しかし、彼らは、もっと敬神深くなるかわりに、その神聖さと意義とを、まったく見失ってしまった。父親は、子供たちが、自分の権威を敬わないことを是正せ

ず、厳粛な聖所の務めを尊ばないのを抑制しなかった。それで、彼らが成人したときに、彼らは、懐疑と反逆の恐ろしい実に満ちていた。 PP 300.3

彼らは、その職務に全然適していなかったけれども、祭司の地位を占めて、聖所で神の前の奉仕をしていた。主は、犠牲を捧げることに関して、厳格な指示を与えておられた。しかし、この悪い人々は、神の奉仕においても、権威を無視する精神を表し、供え物は、最も厳粛に行われるべきであるのに、供え物の律法に注意を払わなかった。キリストの死を予表した犠牲は、来たるべき贖い主に対する信仰を人々の心に抱かせておくために計画されたものであった。であるから、それに関する主の指示には、厳格に従うことが何より重大なことであった。酬恩祭は、特に、神への感謝を表現したものであった。これらの犠牲においては、ただ脂肪のみが、祭壇で焼かれた。ある定められた部分が祭司のために保留された。しかしその大部分は、捧げた人が、犠牲にあずかる祝宴を開いて、友人たちと食べるために返された。こうして、すべての人の心が、世の罪を取り除く大いなる犠牲に、感謝と信仰をもって、向けられるのであった。 PP 300.4

エリのむすこたちは、この象徴的な務めの厳粛さを理解する代わりに、ただそれを自己満足の手段にすることしか考えなかった。彼らに割り当てられた酬恩祭の捧げ物の部分で満足せず彼らは、追加の部分も要求した。そして、年ごとの祭りの時に捧げられたこれらの捧げ物の多くは、人々を犠牲にして自分たちの腹を肥やす機会を祭司たちに与えた。彼らは、 当然受けるべき分以上を要求しただけでなくて、脂肪が神への捧げ物として焼かれるまで待とうとすらしなかった。彼らは、どの部分でも好むところを強引に手に入れ、もし拒まれでもすると暴力をふるってでも取るとおどすのであった。 PP 300.5

祭司のがわの不敬慶な態度は、間もなく、務めの聖にして厳粛な意義を失わせ、人々は、「主の供え物を軽んじた」。彼らが待望すべきであった偉大な犠牲の実体であられるおかたは、もはや認められなかった。「このように、その若者たちの罪は、主の前に非常に大きかった」（サムエル上２：17）。 PP 301.1

これらの不忠実な祭司たちは、また、彼らの悪徳と堕落した行為によって、神の戒めを破り、彼らの聖職を汚した。それでも、なお、彼らはそこにいて、神の幕屋を汚し

続けた。ホフニとピネハスの悪行に怒った多くの人々は、礼拝の場所に来なくなった。こうして、神がお定めになった務めは、悪人の罪と関連があったために軽んじられ、おろそかにされた。それと共に、悪の傾向を持った者は、大胆に罪に走った。不信心、不品行、偶像礼拝すらが、恐ろしく広く行われた。 PP 301.2

エリは、自分のむすこたちを聖職につかせて、大きな過失を犯した。エリは、あれやこれやにかこつけて、彼らの行動を黙認し、彼らの罪に盲目になっていた。しかし、ついに、エリは、彼のむすこらの罪に目をそむけていることができなくなってしまった。人々が、彼らの非行を非難し、大祭司は、悲しみと悩みに沈んだ。彼はもう黙ってはおれなくなった。しかし、彼のむすこたちは、自分のこと以外は、誰のことも考えないように育てられていた。それで、彼らは、人のことは何もかまわなかった。彼らは、父親の悲しみを見たが、その堅い心は動かなかった。彼らは、父の穏やかな勧告を聞いたが感銘を受けなかった。その罪の結果の警告を聞いたけれども、その悪行を改めようともしなかった。もし、エリが、その悪いむすこたちを正当にあっかっていたならば、彼らは、祭司職から退けられて、死に処せられていたことであろう。こうして、エリは、彼らの恥と処罰を公にすることを恐れて、最も聖なる信頼の地位に彼らを留めておいた。エリは、むすこたちが、神の聖なる務めを腐敗させ、長年にわたって消し去ることのできない害を、真理の働きに及ぼすのを、なおも許した。しかし、イスラエルの士師が、その任務を怠った時に、神が、それを処理なさるのであった。 PP 301.3

「このとき、ひとりの神の人が、エリのもとにきて言った、『主はかく仰せられる、「あなたの先祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であったとき、わたしはその先祖の家に自らを現した。そしてイスラエルのすべての部族のうちからそれを選び出して、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に上って、香をたかせ、わたしの前でエポデを着けさせ、また、イスラエルの人々の火祭をことごとくあなたの先祖の家に与えた。それにどうしてあなたがたは、わたしが命じた犠牲と供え物をむさぼりの目をもって見るのが。またなにゆえ、わたしよりも自分の子らを尊び、わたしの民イスラエルのささげるもろもろの供え物の、最も良き部分をもって自分を肥やすのか」。それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、「わたしはかつて、『あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわたし

の前に歩むであろう』と言った」。しかし今、主は仰せられる、「決してそうはしない。わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう。……わたしは自分のために、ひとりの忠実な祭司を起す。その人はわたしの心と思いとに従って行うであろう。わたしはその家を確立しよう。その人はわたしが油そそいだ者の前につねに歩むであろう」』」（同 2：27～35）。 PP 301.4

神は、エリが神よりも子供たちを尊んだと責められた。エリは、彼らの神を恐れずに行う憎むべき行為に恥をこうむらせるよりは、神がイスラエルの祝福として定められた捧げ物が、憎むべきものにされることを許した。自分の好きかってなことを行って、子供たちを盲愛し、子供たちの利己的な欲望をほしいままにさせる者、また、神の権威によって、子供たちの罪を責め、悪を是正しない者は、神を尊ぶよりは、彼らの悪い子供たちを尊んでいることを示している。彼らは、神に栄光を帰するよりは、彼らの評判を保護す ることにもっと気を使っている。主を喜ばせ、主のご用をあらゆる種類の悪から守ることよりは、彼らの子供たちを喜ばせることを望んでいる。 PP 301.5

神は、イスラエルの祭司また士師としてのエリに、彼の民の道徳的、宗教的状態、特に彼のむすこたちの品性の責任を負わせられた。彼は、まず最初に、穏やかな手段で、悪を抑制しようとすべきであった。ところが、その効果がなければ、きびしい方法で、悪を抑えるべきであった。彼は、罪を責めず、罪人を正当に罰しなかったために、神の怒りをこうむった。イスラエルを純潔に保つために、彼に信頼することはできなくなった。悪を譴責する勇気に乏しく、怠慢または関心が欠けているために、家族または神の教会を清める努力を熱心にしない者は、その義務の怠慢の結果生じた悪の責任を問われる。親として、または牧師としての権威によって、とどめることができた人の悪は、あたかもそれが自分の行為であるかのように責任を問われる。 PP 302.1

エリは、家族の管理に関する神の規則に従って、彼の家を治めなかった。彼は、自分の判断に従った。甘い父親は、彼のむすこたちの子供時代の欠点や罪を見過ごしにし、しばらくすれば、彼らの悪い性癖はなおるものだろうと安易に考えた。今も、それと同じようなまちがいを犯している者が多い。彼らは、神がみことばのなかにお与えになった方法よりも、さらにすぐれた子供の教育法を知っていると思っている。彼らは、子供

たちに悪い癖をつける。そして、「彼らは、まだ小さくて、罰することはできない。大きくなるまで待って、よく言いきかせよう」と申しわけをする。こうして、悪癖は助長されて、第二の天性になってしまう。子供たちは、抑制を受けず、彼らの生涯を通じてののろいとなり、また他の人にも伝染する可能性のある品性の傾向をもって成長する。 PP 302.2

青年たちに、好きかってなことをさせておくことほど、家庭にとって大きなのろいはない。親が、子供たちの欲することをみな許し、彼らのためでないと知っていることをしたいままにさせておくとき、まもなく子供たちは親に対する尊敬を全く失い、神または人の権威も全然認めなくなり、サタンの意のままに捕虜になってしまう。よく治められない家庭の感化は遠くまで及び、社会全体を不幸に陥れる。それは、悪の潮流のように高まって、家族、社会、国家に影響を及ぼす。 PP 302.3

エリは、地位の高い人であったから、彼が一般の人であった場合よりは、はるかにその感化の範囲は広がった。イスラエル中の人々が、彼の家庭生活をまねた。彼の怠慢、安易な生活の悪い結果は、それをまねた幾千の家庭に見られた。両親が信仰を持っていると言いながら、子供たちが悪い行為をするのを放任しておくならば、神の真理がそしりを受ける。 PP 302.4

家庭のキリスト教がどんなものであるかの最良の試験は、その影響によって、どんな型の品性が生まれるかということである。どんな明確な信仰の表明よりも、行動のほうがより大きな力がある。信仰を持っているという者が、神を信じる有益性についてのあかしとして、秩序ある家庭を築くように、熱心にうまずたゆまず努力することをしないで、家の治め方がゆるく、子供たちの悪い欲望をほしいままにさせるならば、エリと同様に、神の働きにそしりを招き、子供たちとその家を破滅させる。しかし、どのような環境のもとにあっても、両親が不忠実であるということは大きな悪であるが、それが入々の教師として任じられた者の家庭の場合ならば、10 倍も大きいのである。彼らが自分たちの家をよく管理できないならば、その悪い例によって、多くの人々をつまずかせる。彼らは、責任のある地位の者であったから、他の人々よりは、罪がはるかに大きかった。 PP 302.5

アロンの家は、常に神の前を歩くであろうという約束が与えられていたが、しかし、この約束は、彼らが誠実をもって、聖所の働きに献身し、すべての道で神をあがめ、自己に仕えず、自分の曲がった性質に従わないという条件のもとになされた。エリとそのむすこたちは、試練を受けて、神の聖所の祭司の高い地位には全く値しないことが主にわかった。そこで、神は、「決してそうはしない」と言われた（同 2：30）。彼らが自分たちのなすべき分をしなかったために、神は、彼らに与えようとなさった恵みを実現することがおで きにならなかった。 PP 302.6

聖なることのために働く者は、神を敬うことと、神を怒らせることを恐れることとを深く人々に印象づける模範を与えなければならない。人が「キリストに代って」（Ⅱコリント 5：20）、人々に、神の憐れみと和解の使命を語るとき、その聖職を利己心や情欲の満足のためのおおいとするならば、彼らは、サタンの最も有力な部下になる。ホフニとピネハスのように、彼らは人々に、「主の供え物を軽んじ」させる。彼らは、その悪行をしばらくは隠れて行うことであろう。しかし、ついには、その本性を暴露させる。そして、人々の信仰は、大きな打撃をうけて、宗教に対する確信を失ってしまう結果にもなる。人々の心は、神の言葉を教えると称する者をすべて信じないようになる。キリストの真のしもべの言葉が、疑惑の念をもって受け取られる。「この人は、わたしたちが清いと思っていたのに、あんなに堕落していたあの人のようになるのではないだろうか」という疑念が、絶えず起こる。こうして、神の言葉は、人の魂に及ぼす力を失うのである。むすこたちへのエリの譴責のなかに、厳粛で恐るべき言葉がある。その言葉は、清いもののために奉仕するすべての者がよく考えなければならないものである。「もし人が人に対して罪を犯すならば、神が仲裁されるであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが、そのとりなしをすることができようか」（サムエル記上 2：25）。もし、彼らの罪が、彼らの同胞だけを傷つけたものであれば、裁判官が、罰と弁償を命じて、和解させることができた。こうして、犯罪者は、赦されることができたであろう。また、彼らが僭越の罪を犯したのでなかったならば、彼らのために罪祭を捧げることもできた。しかし、彼らの罪は、至高者の祭司としての務め、罪のために犠牲を捧げることに深い関係があった。神の働きは、人々の前で、汚され、名誉を傷つけ

られてしまったために、どのような償いも受け入れられなかった。大祭司であった彼ら自身の父でさえ、彼らのためのとりなしをしようとしなかった。彼は、聖なる神の怒りから彼らを守ることができなかった。すべての罪人の中で、天が人間の救いのために与えた手段を軽蔑し、「またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにする」者が最も罪深いのである（ヘブル６：6）。 PP 303.1

第 57 章　契約の箱ペリシテ人に奪われる

本章は、サムエル記上 3～7 章に基づく PP 303.2

エリの家に、もう 1 つの警告が与えられなければならなかった。神は、それを大祭司やそのむすこたちには伝えることができなかった。彼らの罪が、厚い雲のように、神の聖霊の臨在をさえぎっていた。しかし、悪の中にあって、幼児サムエルは、天の神に忠実であった。そして、いと高き神の預言者として、エリの家に譴責の言葉を語ることがサムエルに委ねられた。 PP 303.3

「そのころ、主の言葉はまれで、黙示も常ではなかった。さてエリは、しだいに目がかすんで、見ることができなくなり、そのとき自分のへやで寝ていた。神のともしびはまだ消えず、サムエルが神の箱のある主の神殿に寝ていた時、主は『サムエルよ、サムエルよ』と呼ばれた」（サムエル記上 3：1～4）。サムエルは、エリが呼んだものと思って、急いで祭司の寝台のところへ行って、「あなたがお呼びになりました。わたしは、ここにおります」と言った。しかし、「わたしは呼ばない。帰って寝なさい」とエリは答えた（同 3：5）。サムエルは、3 回呼ばれて、3 回ともエリは同じような返答をした。そのとき、エリは、その不思議な呼び声が神の声であることを確信した。主は、ご自分が選ばれた白髪のしもべをさしおいて、幼児に語られた。このこと自体がエリとエリの家に対してはつらいことであったが、当然の譴責であった。 PP 303.4

エリには、ねたみ、うらやむ気持ちはなかった。彼は、もう 1 度呼ばれたならば、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言うように、サムエルに指示を与 えた。声は、もう 1 度聞こえた。それで、サムエルは、「しもべは聞きます。お話しください」と言った（同 3：9、10）。彼は、偉大な神が自分にお語りになるというので、非常におそれ、エリが言うように命じた言葉をその通り覚えられないのではないかと思った。 PP 303.5

「その時、主はサムエルに言われた、『見よ、わたしはイスラエルのうちに 1 つの事をする。それを聞く者はみな、耳が 2 つとも鳴るであろう。その日には、わたしが、

かつてエリの家について話したことを、はじめから終りまでことごとく、エリに行うであろう。わたしはエリに、彼が知っている悪事のゆえに、その家を永久に罰することを告げる。その子らが神をけがしているのに、彼がそれをとめなかったからである。それゆえ、わたしはエリの家に誓う。エリの家の悪は、犠牲や供え物をもってしても、永久にあがなわれないであろう』」（同３：11～14）。 PP 304.1

神からこの使命を受ける前、「サムエルはまだ主を知らず、主の言葉がまだ彼に現されなかった」（同３：7）。それというのは、彼が、まだ、神の預言者に与えられる神の臨在のこのような直接のあらわれを知らなかったということである。主は、予期しない方法でご自分をあらわし、少年の驚きと質問とによって、エリがそのことを聞くようになることをご計画になった。 PP 304.2

サムエルは、恐ろしい言葉が彼に委ねられたことを考えて、恐怖と驚きに満たされた。彼は、朝、いつもの務めを果たしていたが、心は重かった。主はまだ恐ろしい非難の言葉を語るようにお命じになっていなかったので、彼は黙っていた。そして、できるだけエリと一緒にいないようにした。彼は、何か質問されて、自分が愛し敬っている人に降下する神の刑罰を言わなければならなくなるのではないかと恐れおののいた。エリは、その言葉が、彼と彼の家の大きな不幸を予告するものであるに違いないと思った。彼は、サムエルを呼んで、主がおあらわしになったことをそのまま話すように命じた。少年は従った。そして、年とったエリは、心を低くして、恐ろしい宣言に聞き従った。「それは主である。どうぞ主が、良いと思うことを行われるように」と彼は言った（同３：18）。 PP 304.3

しかし、エリは、真の悔い改めの実を示さなかった。彼は罪を告白したが、その罪を捨てなかった。主は、何年も刑罰をくだすことを延ばされた。その間に、過去の失敗を償う多くのことができたのであったが、年をとった祭司は、主の聖所を汚し、イスラエルの幾千という魂を滅びに陥れていた悪を正すために、効果的な手段を取らなかった。神の忍耐は、ホフニとピネハスの心を堅くし、さらに大胆に罪を犯させた。エリは、自分の家に与えられた警告と譴責の言葉を、全国に知らせた。彼は、こうした方法で、彼の過去の怠慢の悪影響をいくらかでも取り消そうと望んだ。しかし、祭司たちと同様に、

人々も警告を無視した。イスラエルのなかで悪が公然と行われるのを知っていた周りの国々の民も、さらに大胆に偶像礼拝を行い、犯罪を続けた。彼らは、もし、イスラエルの人々が忠誠を尽くしていたならば感じたはずの罪の意識を、自分たちの罪に対して持たなかった。しかし、報復の日は接近していた。神の権威は退けられ、神の礼拝は無視され、軽蔑された。それで、神のみ名の名誉を維持するために、神が手を下さなければならなくなった。 PP 304.4

「イスラエルびとは出てペリシテびとと戦おうとして、エベネゼルのほとりに陣をしき、ペリシテびとはアベクに陣をしいた」（同４：1）。イスラエルの人々は、神の指示も仰がず、大祭司または預言者の同意も得ないでこの遠征に着手した。「ペリシテびとはイスラエルびとにむかって陣備えをしたが、戦うに及んで、イスラエルびとはペリシテびとの前に敗れ、ペリシテびとは戦場において、おおよそ 4000 人を殺した」（同４：2）。敗北して失望した軍勢が陣営に帰ってきたときに、イスラエルの長老たちは言った、「なにゆえ、主はきょう、ペリシテびとの前にわれわれを敗られたのか」。国家に神の刑罰が下るときは、熟していた。それにもかかわらず、彼らは、自分たちの罪がこの恐ろしい災いの原因であることを悟らなかった。そして、彼らは言った。「シロへ行って主の契約の箱をここへ携えてくることにしよう。そして主をわれわれのう ちに迎えて、敵の手から救っていただこう」（同４：3）。主は、箱を軍勢の中に持ち出す命令も許可もお与えにならなかった。しかし、イスラエルの人々は、箱が、エリのむすこたちによって陣営に運ばれてきたときに、勝利を確信して大声をあげた。 PP 304.5

ペリシテ人は、契約の箱が、イスラエルの神であると思った。彼らは、主が主の民のために行われた偉大なわざを、みなその力のせいにしていた。彼らは、契約の箱が近づいたときに上がった喜びの叫びを聞いて言った。「『ヘブルびとの陣営の、この大きな叫び声は何事か』。そして主の箱が陣営に着いたことを知った時、ペリシテびとは恐れて言った、『神々が陣営にきたのだ』。彼らはまた言った、『ああ、われわれはわざわいである。このようなことは今までなかった。ああ、われわれはわざわいである。だれがわれわれをこれらの強い神々の手から救い出すことができようか。これらの神々は、

もろもろの災をもってエジプトびとを荒野で撃ったのだ。ペリシテびとよ、勇気を出して男らしくせよ。ヘブルびとがあなたがたに仕えたように、あなたがたが彼らに仕えることのないために、男らしく戦え』」（同４：6～9）。 PP 305.1

ペリシテ人は、猛烈に戦った。そのため、イスラエルは敗れ、多くの死者を出した。3 万人が戦場で倒れ、神の箱は奪われ、エリの 2 人のむすこは箱を守って戦っている時に倒れた。こうして、神の民であると自認する人々の罪は、必ず罰せられるということが、将来のすべての時代のためのあかしとして、もう 1 度、歴史に書き残された。神のみこころの知識があればあるほど、それを無視する者の罪は大きいのである。 PP 305.2

イスラエルには、最も戦標すべき災害がくだった。神の箱は奪われ、敵の手中に陥った。主の臨在と能力の象徴が、彼らの中から取り去られて、栄光は、イスラエルから離れた。神の真理と能力の最も驚くべき啓示が、この聖なる箱に結びつけられていた。以前には、箱が現れるたびに、奇跡的勝利が行われたのであった。それは、金のケルビムの翼でおおわれ、至高者なる神の、目に見える象徴であるシェキーナーの、言葉で表現できない栄光が、至聖所のなかで箱の上に宿っていた。しかし、それは、今は勝利を与えなかった。この場合、それは防御とはならなかった。そして、イスラエル全体は悲しみに沈んだ。 PP 305.3

彼らは、自分たちの信仰が、ただ名だけの信仰であって、神を動かす力を失っていたことに気づかなかった。箱の中の神の律法も神の臨在の象徴であった。しかし、彼らは、律法を軽蔑してその要求をさげすみ、彼らの中の主の霊を悲しませた。人々が聖なる戒めに従った時には、主は彼らと共にあって、主の無限の力によって彼らのために働かれた。しかし、彼らが箱を見ても、それを神と結びつけず、神の律法に従って神の啓示されたみこころを尊ばないならば、それは、普通の箱と同様になんの役にも立たない。彼らは、偶像国の人々が、その神々を見るように箱をながめ、あたかもそれ自体に能力と救いの要素があると思った。彼らは、そのなかの律法を犯した。箱の礼拝そのものが、彼らを形式主義と偽善と偶像礼拝に陥れた。彼らの罪が、彼らを神から引き離した。だ

から神は、彼らが悔い改めて悪を捨てるまでは、彼らに勝利を与えることがおできにならなかった。 PP 305.4

契約の箱と聖所が、イスラエルの中にあるだけでは十分でなかった。祭司が犠牲を捧げ、人々が神の子供と呼ばれるだけでは十分でなかった。主は、よこしまな心をいだいた者の願いを聞かれない。「耳をそむけて律法を聞かない者は、その祈でさえも憎まれる」と記されている（箴言 28：9）。 PP 305.5

軍勢が戦いに出て行ったとき、目の見えない老人エリは、シロにとどまっていた。彼は、不安な予感におののきながら、戦いの結果を待った。「その心に神の箱の事を気づかっていたからである」（サムエル上 4：13）。彼は幕屋の門の外に場所を設けて、毎日道のかたわらにすわり、戦場からの使者の到着を待ちわびていた。 PP 305.6

ついに、1 人のベニヤミン人が、「衣服を裂き、頭に土をかぶって」町に通じる坂を急いでやってきた（同 4：12）。彼は、道のそばの老人には目もくれずに通りすぎて、熱狂した群集に敗北と損害の知らせを伝えた。 PP 305.7

泣き叫ぶ声が、幕屋のそばで待ちかまえていたエリの耳に達した。使者が、彼のところへ連れて来られた。彼は、エリに言った。「イスラエルびとは、ペリシテびとの前から逃げ、民のうちにはまた多くの戦死者があり、あなたのふたりの子、ホフニとピネハスも死に」ました、と。これは、恐ろしいことではあったが、エリはそれを予期していたので、耐えることができた。しかし、使者が、「神の箱は奪われました」とつけ加えたときに言葉には表現できない苦悩の色が彼の顔をよぎった（同 4：17）。彼は、彼の罪のためにこのように神をはずかしめ、神の臨在がイスラエルから取り去られるに至ったことを考えたときに、もう耐えることができなかった。彼は、力が抜けて倒れ、「首を折って死んだ」（同 4：18）。 PP 306.1

ピネハスの妻は、夫が不信心であったにもかかわらず、主をおそれる女であった。義父と夫の死、とりわけ、神の箱が奪われたという恐ろしい知らせが、彼女の死の原因であった。彼女は、イスラエルの最後の希望が消えたと感じた。彼女はこの不幸なときに生まれた子を、イカボデ「栄光は去った」と名づけた。彼女は、臨終の息の中から、

悲しそうに、「栄光はイスラエルを去った。神の箱が奪われたからです」と言い続けた（同４：22）。 PP 306.2

しかし、主は、その民を全く捨て去られたのではなかった。また、異教徒が勝ち誇るのを長くお許しにならなかった。彼は、イスラエルを罰する器として、ペリシテ人を用いられたが、ペリシテ人を罰するために、契約の箱を用いられた。以前、それには、神の臨在が宿り、神に従う人々の能力と栄光になった。その目に見えない臨在は、なお宿っていて、神の聖なる律法を犯すものに、恐怖と滅びをもたらすのであった。主は、しばしば、神の民と称する人々の不忠実を罰するために、最もうらみ重なる敵をお用いになる。悪人は、しばらく勝ち誇ってイスラエルが罰せられるのを見るであろう。しかし、彼らもまた、神聖で罪を憎まれる神の宣告を受けなければならない時が来る。心に悪がいだかれているならば、どこであっても、急速で確実な神の刑罰がくだるのである。 PP 306.3

ペリシテ人は、勝ち誇って彼らの５大都市の１つであるアシドドに契約の箱を持って行き、彼らの神ダゴンの神殿の中においた。彼らは、これまで、箱にあった力が彼らのものになり、この力が、ダゴンの力と結合して、彼らを何ものにも負けないものにすると考えた。ところが翌日、彼らは、宮にはいって驚嘆すべき光景をながめた。ダゴンが主の箱の前に、うつむきに地に倒れていた。祭司たちは、うやうやしく偶像を起こして、元の所にもどした。しかし、その像は、翌朝も不思議に破損して、また、箱の前に倒れていた。この偶像の上部は人間の形をしていて、下部は魚になっていた。それで人間の形をしていた部分が全部切りとられ、魚のからだの部分だけが残っていた。祭司と人々は、恐怖に襲われた。彼らは、この不思議な事件を、彼らと彼らの偶像がヘブルの神の前で滅ぼされる凶兆であると考えた。そこで、彼らは箱を宮から移して、それだけを１つの建物に入れておいた。 PP 306.4

アシドドの住民は、苦しい致命的病気に悩まされた。人々は、イスラエルの神が、エジプトにくだされた災害を思い出して、この苦しみは箱が彼らのところにあるからだと思った。彼らは、箱をガテに移すことにきめた。すると災いが移されたところにも及んだので、その町の人々は、箱をエクロンに送った。ここの人々は、箱が来ると恐れて

叫んだ。「彼らがイスラエルの神の箱をわれわれの所に移したのは、われわれと民を滅ぼすためである」（同 5：10）。彼らは、ガテやアシドドの人々と同様に、彼らの神に助けを求めた。しかし、破壊者の働きはなお続き、人々は非常な苦しみにあい、「町の叫びは天に達した」（同 5：12）。人々は、これ以上箱を人家の間に置くことを恐れて、今度はそれを屋外の畑に置いた。すると、地を荒らすねずみの災いが起こり、倉の中や畑にある地の産物を両方とも荒らした。こうなっては、病気ときんのために、国家は全滅するばかりになった。 PP 306.5

箱は、7 か月の間、ペリシテ人の地にあった。その間、イスラエルの人々は、それを取り返そうと努めなかった。しかし、ペリシテ人は、今、それを手に入れた時と同じ熱意をもって、それを彼らの間から取り 去ろうとしていた。それは、彼らの力の根源となるどころか、大きな重荷となり、苦しいのろいとなった。しかし、彼らはどうしてよいかわからなかった。それをどこへ持って行っても、神の刑罰がそこに下ったからである。ペリシテ人は、国のつかさたち、祭司や占い師たちを呼んで、しきりにたずねた。「イスラエルの神の箱をどうしましょうか。どのようにして、それをもとの所へ送り返せばよいか告げてください」（同 6：2）。彼らは、高価な、とがの供え物をそえて箱を返せばよいと勧められた。「そうすれば、あなたがたはいやされ、また彼の手がなぜあなたがたを離れないかを知ることができるであろう」と祭司たちは言った（同 6：3）。 PP 306.6

災害を避けたり、除去したりするためには、金、銀、その他の金属で、破壊をもたらしたもの、または、特に影響を受けたもの、または身体の部分の像を作ることが古代の習慣であった。これが、柱の上、または、どこかよく目立つところに置かれた。こうして像は、それが代表している災害から保護する力があると思われていた。同様のことが、今日でも、ある異教徒の間で行われている。病気で苦しんでいる人が、いやしを求めて偶像の宮に行くと、彼は、病気の部分の像を持って行って、それを神への供え物として捧げる。 PP 307.1

ペリシテ人のつかさたちが、彼らを苦しめた災害の像を作るように指示したのは、一般に行われていた迷信に従ったものであった。「ペリシテびとの君たちの数にしたが

って、金の腫物 5 つと金のねずみ 5 つである。あなたがたすべてと、君たちに臨んだ災は 1 つだからである」と彼らは言った（同 6：4）。 PP 307.2

これらの賢者たちは、箱に不思議な力があることを認めた。彼らは、その力に対抗する知恵を持ち合わせなかった。それにもかかわらず、彼らは、偶像礼拝をやめて、主に仕えることを人々に勧告しなかった。彼らは、圧倒的刑罰によって、神の権威に従わなければならなくなったにもかかわらず、イスラエルの神を憎んだ。こうして、罪人は、神に逆らって戦うことが無益であることを、神の刑罰によって悟るようになる。心では、神の支配に反逆していても、やむを得ず神の力に従うであろう。このような服従は罪人を救うことができない。われわれは、心を神に捧げなければならない。人間の悔い改めが受け入れられる前に、まず、心が神の恵みによって和らげられなければならない。 PP 307.3

悪人に対する神の忍耐は、なんと大きいことであろう。偶像を礼拝するペリシテ人も、背信したイスラエルも同様に、神の摂理の賜物を受けていた。人の気づかぬ無数の恵みが、恩を忘れて反逆する人間の歩む道に、静かに降り注いでいた。どの祝福も、与え主であられる神のことを語っていたが、彼らは、神の愛に無関心であった。人間の子らに対する神の忍耐は非常に大きかった。しかし、彼らが心をかたくなにして、悔い改めを拒み続けていると、神は、彼らから保護の手を取り除かれた。彼らは、神の創造のみわざ、また、神の言葉の警告、勧告、譴責などの中に、神のみ声を聞くことを拒んだので、神はやむを得ず、刑罰を通して彼らに語らなければならなくなった。 PP 307.4

ペリシテ人の中には、箱を本国に返すことに反対して立ち上がる者もいくらかいた。そんなことをして、イスラエルの神の力を認めることは、ペリシテ人の誇りを傷つけるものであった。しかし、「祭司や占い師」は、パロとエジプト人の頑迷さのまねをして、さらに大きな災難を招かないようにしようと、人々に勧告した。こうして、すべての人が賛成した計画が提出されて、すぐに実行に移されることになった。箱は、金で作ったとがの供え物と共に、新しい車に乗せられて、汚れる危険が全くないようにした。この荷車に、まだくびきをつけたことのない乳牛が 2 頭つけられた。彼らの子牛は、室内に閉じ込められていて、乳牛はどこにでも行きたいところに自由に行かせることにした。

もし箱が、レビ族の一番近い町、ベテシメシの方向へ行って、イスラエル人に返されるならば、ペリシテ人はこの大きな災害をくだしたのはイスラエルの神であるとするのであった。「しかし、そうしない時は、われわれを撃ったのは彼の手ではなく、その事の偶然であったことを知るであろう」と彼らは言った（同・6：9）。 PP 307.5

放された乳牛は、その子牛から離れて、ベテシメシへの道をまっすぐに、なきながら進んで行った。忍 耐強い牛は、人手に導かれないで進んで行った。神の臨在が箱に伴って行った。箱は、安全に定められた場所に到着した。 PP 307.6

それは麦刈りの季節で、ベテシメシの人々は谷で刈り入れていた。「目をあげて、その箱を見、それを迎えて喜んだ。車はベテシメシびとヨシュアの畑にはいって、そこにとどまった。その所に大きな石があった。人々は車の木を割り、その雌牛を燔祭として主にささげた」「ベテシメシの境まで」そのあとについてきたペリシテ人の君たちは、それが迎えられたのを見て、エクロンに帰っていった（同 6：13、14、12）。こうして、災害はやんだ。そして、人々は、彼らの災害がイスラエルの神の刑罰であったことを悟った。 PP 308.1

ベテシメシの人々は、箱が自分たちの手中にあるという知らせをすぐに広めたので、周りに住んでいる人々は、それが帰ってきたのを歓迎するために群がってきた。箱は、石の上に置かれた。その石は、まず、祭壇の用を果たしたが、その前で、ほかの犠牲もそれと共に主に捧げられた。もし、礼拝者たちが罪を悔い改めたならば、神の祝福が彼らに与えられるのであった。しかし、彼らは、忠実に神の律法に従っていなかった。そして彼らは幸福の前兆として、箱が帰ってきたことを喜んだけれども、その神聖さをほんとうに理解していなかった。箱を受け入れるために適当な場所を用意するかわりに、それを収穫の野にそのままにしておいた。聖なる箱をながめ、驚くべき方法でそれが返還されたことなどを話し合っているうちに、どこにそのような特殊な能力がひそんでいるのかを、彼らは推測しはじめた。ついに、好奇心にかられて、彼らは、おおいを除き、あえてふたを開こうとした。 PP 308.2

イスラエル全国の人々は、箱を畏敬の念をもって見るように教えられていた。箱を移動させなければならない時に、レビ人は、それをながめてもいけなかった。年に 1

度、ただ大祭司だけが神の箱を見ることを許されていた。異教のペリシテ人でさえ、そのおおいを取ろうとはしなかった。目には見えなかったが、天使たちがその行くところに常に従っていた。ベテシメシの人々の不敬度な行動は、すみやかに罰せられた。多くの者が、突然殺されたのである。 PP 308.3

生き残った人々は、この刑罰によって、彼らの罪を悔い改めようとはせず、箱を迷信的恐怖で見たにすぎなかった。ベテシメシの人々は、箱を取り除きたいと願いながらも、あえて移動しようともせず、キリアテ・ヤリムの住民に使いを送って、箱を持って行ってくれるように頼んだ。ここの人々は、非常に喜んで、聖なる箱を歓迎した。彼らは、箱が神に従う忠実な者に対する神の恵みの誓いであることを知っていた。厳粛なうちにも喜びに満ちて、彼らは箱を彼らの町に携えてきて、レビ人アビナダブの家に置いた。アビナダブは、むすこのエレアザルにその管理を命じた。こうして、箱は長年そこにとどまっていた。 PP 308.4

主がご自身を、最初にハンナのむすこにお現しになって以来ずっと、サムエルが預言者の職務に召されたことが、全国民に認められるようになった。サムエルは、苦しいことではあったが、忠実に、エリの家に神の警告を伝えて、主の使者としての彼の忠実さを実証した。「主が彼と共におられて、その言葉を 1 つも地に落ちないようにされたので、ダンからベエルシバまで、イスラエルのすべての人は、サムエルが主の預言者と定められたことを知った」（同 3：19、20）。 PP 308.5

イスラエルの人々は、国家として、まだ不信仰で偶像礼拝の状態を続け、その罰としてペリシテ人に屈服した状態が続いた。その間、サムエルは、全国の町々村々を巡回して、人々の心を彼らの先祖の神に向けようと努めた。そして、彼の努力は、よい結果をもたらした。20 年間も敵の圧迫に苦しんだあとで、イスラエルの人々は「主を慕って嘆いた」のである（同 7：2）。サムエルは彼らに勧告した。「もし、あなたがたが一心に主に立ち返るのであれば、ほかの神々とアシタロテを、あなたがたのうちから捨て去り、心を主に向け、主にのみ仕えなければならない」（同 7：3）。イエスが地上におられた時にお教えになったのと同じ実際的敬虔と心の宗教が、サムエルの時代に教えられたことをここに見るのである。古代のイスラエルにとって、キリストの恵みがな

いならば、宗教の 外的形式は無価値なものであった。それは、現代のイスラエルにとっても同じである。 PP 308.6

古代イスラエルが経験したのと同じ真の心の宗教のリバイバルが、今日必要である。神に帰ろうとする者のとるべき第一歩は、悔い改めである。だれも人に代わって、悔い改めることはできない。われわれ個人個人が神の前にへりくだり、偶像を捨てなければならない。われわれのなし得るすべてを尽くしたときに、主は、彼の救いをあらわされる。 PP 309.1

部族の首長の協力によって、大群衆がミヅパに集まった。ここで彼らは、厳粛な断食を行った。人々は、心を低くして罪を告白した。そして彼らは、教えられた命令に従う決意の証拠として、サムエルに士師の権を授けた。 PP 309.2

ペリシテ人は、この会合を戦争のための相談をしていると思いこみ、その計画が熟する前にイスラエルの人々を散らそうとして、大軍を率いて攻めてきた。彼らの接近の知らせにイスラエルの人々は非常に恐れた。彼らはサムエルに言った。「われわれのため、われわれの神、主に叫ぶことを、やめないでください。そうすれば主がペリシテびとの手からわれわれを救い出されるでしょう」（同 7：8）。 PP 309.3

サムエルが、小羊を犠牲に捧げようとしていたとき、ペリシテ人は、戦いをいどんで近づいてきた。そのとき、火と煙と雷鳴の中で、シナイに降りて来られた偉大な神、紅海を分け、イスラエルの人々のために、ヨルダン川の中に道を開かれた偉大なお方が、ふたたび、彼の力をあらわされた。攻撃軍の上に恐ろしい暴風が起こった。そして、強力な戦士たちの死体が地上に乱れ散った。 PP 309.4

イスラエルの人々は、希望と恐怖に震えて、黙って恐れながら立っていた。彼らは敵が殺されたのを見た時に、神が彼らの悔い改めをお受け入れになったことを知った。彼らは、戦いの用意はなかったけれども、殺されたペリシテ人の武器を握って敗走軍をベテカルまで追った。この著しい勝利は、イスラエルが 20 年前、ペリシテ人に敗れ、祭司たちが殺され、神の箱が奪われたその同じ場所でかち得たものであった。国家であろうと、個人であろうと、神に服従する道は、安全と幸福の道であるが、罪の道は、ただ不幸と敗北に至らせるだけである。ペリシテ人は完全にうちのめされて、前にイスラ

エルから奪った城を明け渡し、その後長年にわたって敵対行為に出ることはなかった。他の国々もこの模範にならい、イスラエルは、サムエルの単独統治時代が終わるまで平和を楽しんだ。 PP 309.5

サムエルは、この出来事を人々が忘れないために、ミヅパとエシャナの間に大きな石を記念碑として建てた。彼は、それを「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と人々に言って、「エベネゼル」（助けの石）と名づけた（同 7：12）。 PP 309.6

第 58 章　預言者の学校

イスラエルの教育は、主ご自身が指導された。彼の関心は、彼らの宗教的福祉だけに限られてはいなかった。彼らの知的、また体的幸福に影響を与えるものは、なんでも神の摂理の課題であり、神の律法の範囲内にあった。 PP 309.7

子供たちに神の要求を教え、先祖たちに対する神の処置のすべてを彼らに良く教えるように、神はヘブル人に命じておられた。これは、すべての親の特別の義務で、他人に委託できないものであった。他人のくちびるではなくて、父親と母親の愛の心からの教えが、子供たちに与えられなければならなかった。日ごとの生活のすべての出来事に、神の思想が関連づけられなければならなかった。神の民の救済にあらわされた神の大きなみわざ、そして、来たるべき贖い主の約束は、イスラエルの家庭で、くり返し語られるべきであった。そして、典型や象徴を用いて、その教訓をしっかりと心に銘記することができたのであった。神の摂理と来世に関する大真理が若い心に強 い印象を与えた。若い心は自然の光景にも、啓示の言葉にも、同じように神を認める訓練を受けた。天の星々、平原の樹木、草花、高山、小川のせせらぎなどのすべては、創造主について語っていた。聖所の厳粛な犠牲の儀式、聖所の礼拝、預言者の言葉は神の啓示であった。 PP 309.8

モーセは、ゴセンのそまつな住宅でこのような教育を受けたのである。サムエルは、忠実なハンナから教えられた。ダビデは、ベツレヘムの丘の住居で、こうした訓練を受け、ダニエルは、捕虜として連れ去られるまで、父の家で、こうした訓練を受けた。ナザレにおけるキリストの幼少時の生活も、このようなものであった。また少年テモテが祖母ロイスと母ユニケの口から聖書の真理を学んだのも、こうした訓練によってであった（Ⅱテモテ 1：5、3：15 参照）。 PP 310.1

さらに、青年教育の施設として、預言者の学校が建てられた。もし、青年が、神の言葉の真理をもっと深くさぐり、上からの知恵を求めて、イスラエルの教師になろうと望むならば、彼らは、こうした学校に入ることができた。預言者の学校は、腐敗が広が

るのを防ぐ防壁としてサムエルが創立したもので、青年の道徳的、霊的幸福に貢献し、指導者や助言者として、神をおそれて行動する資格のある人物を養成して、国家の将来の繁栄に資するためであった。サムエルは、この目的を達成するために、神をおそれ、知的で勤勉な青年を多く集めた。彼らは預言者の子と呼ばれた。彼らが神と交わり神の言葉と神のみわざを学んだ時に、彼らの生来の賜物に天の知恵が加えられた。教師は、神の真理に良く通じているばかりでなくて、自分たち自身が神との交わりを経験し、神の霊の特別な賜物を受けた人々であった。彼らは、学識と信仰の両面において、人々の尊敬と信頼をかち得ていた。 PP 310.2

こういう学校は、サムエルの時代に 2 つあって、1 つは、預言者の故郷のラマにあり、もう 1 つは、そのとき箱が置かれていたキリアテ・ヤリムにあった。その後、ほかにも学校が設立された。 PP 310.3

学校の生徒は、土を耕すとか、あるいは何かの筋肉労働に従事して、自分で働いて自活した。イスラエルにおいてこれは不思議でも卑しいことでもなかった。実際、子供に有用な仕事を教えないで育てることは、罪悪であると思われていた。どのような高い地位につくための教育を受ける子供であっても例外なく、すべての子供に、何かの職業を教えることが、神の命令であった。宗教の教師のなかには、肉体労働によって自給した者が多くあった。使徒時代に及んでも、パウロとアクラは、天幕作りを職業として生計を立てたが、そのために卑しめられることはなかった。 PP 310.4

学校の主要科目は、神の律法とモーセに与えられた教訓、神の民の歴史、聖楽、詩歌などであった。その教授法は、現代の神学校の教授法とは非常に異なっていた。今日、多くの学生は、入学した時よりも、神と宗教的真理に関して真の知識を持たずに神学校を卒業する。昔の預言者の学校では、神のみこころと神に対する人間の義務を学ぶことが、すべての研究の大目的であった。神の民の歴史の記録の中に、主の足跡をたどることができる。偉大な真理が型によって明らかに示され、その全制度の中心目的が、世の罪を取り除く神の小羊であることを、彼らは信仰によって悟ったのである。 PP 310.5

彼らは、献身の精神をいだいていた。学生は、祈りの義務について教えられただけでなくて、祈る方法と創造主に近づく方法、神に対する信仰の働かせ方、そして、聖霊

の教えを理解して服従する方法などを教えられた。彼らは、清められた知性によって、神の蔵から新しいものや古いものを取り出した。そして、神の霊は、預言と聖歌の中に表された。 PP 310.6

音楽は聖なる目的のために用いられ、清く、気高く、高尚なことに人の思想を高め、魂のうちに、神への献身と感謝の念を起こさせた。こうした古代の習慣と、現在音楽がしばしば用いられている方法との間には、なんと大きな相違があることであろう。神に栄光を帰すために用いるかわりに、自己を高めるためにこの賜物を用いる者がなんと多いことであろう。不注意な者は、音楽を愛好する心から、世俗愛好者と一緒になって、神が神の子らに行くことを禁じられた快楽 の集会に行くようになる。こうして、正しく用いられるならば、大きな祝福であるものが、義務と永遠のことがらを瞑想することから人の心をそらすサタンの最も有効な道具となる。 PP 310.7

音楽は、天の宮廷の神の礼拝の一部になっている。であるから、われわれは、できるかぎり、天の合唱隊と調和した声で、賛美の歌をうたうように努力しなければならない。声の正しい訓練は教育の重要な一面であって、怠ってはならないことである。歌は、祈りが礼拝の行為であるのと同様に、宗教的礼拝の一部である。歌を正しく表現しようとするには、歌の精神をよく心に感じなければならない。 PP 311.1

神の預言者が教えたこれらの学校と現代の教育機関との間には、なんと大きな相違があることであろう。世の教訓と習慣に支配されない学校は、なんとその数が少ないことであろう。適宜に制限を加えたり、正当な罰を与えたりすることが、嘆かわしいほど欠けている。現在、クリスチャンと自称する人々の間での神の言葉に関する無知は、驚くばかりである。表面的な話や、単なる感傷主義が、道徳や宗教の教えとして通用している。神の正義と憐れみ、美と聖、正しい行為の確実な報賞、罪の恐ろしい性質とその恐ろしい結果の確実性などが、若い者の心に強く教え込まれていない。悪友たちが、犯罪と気晴らしと放縦との道を青年たちに教えている。 PP 311.2

今日の教育家が古代のヘブルの学校から、何か有益な教訓を学ぶことができないものであろうか。人間を創造された方は、その体と心と魂の発達のために必要なものをお

備えになった。であるから、教育の真の成功は、人間が創造主の計画を忠実に実行するか否かにかかっている。 PP 311.3

教育の真の目的は、魂のうちに神のみかたちを回復することである。最初に、神は、ご自分のかたちにかたどって人を創造された。神は、人間にすぐれた性質をお授けになった。人間の心は、良く均衡がとれていて、そのすべての能力には調和があった。しかし、堕落とその結果によって、これらの賜物はゆがめられてしまった。罪は、人間の中の神のかたちを、ほとんど消し去った。これを回復するために、救いの計画がたてられ、人間に猶予の期間が与えられた。最初に創造された時の完全な状態に人間を回復することが人生の大目的であって、その他のすべてのものの根底に流れる目的である。青年の教育に当たって、神の目的に協力することが、親や教師の務めである。そうすれば、彼らは、「神の同労者である」（Ⅰコリント３：9）。 PP 311.4

人間が持っている心と魂と体の種々の能力は、すべて神から授かったものであるから、それらを活用して最高にすぐれたものにしなければならない。しかし、これは、利己的で排他的修練ではない。なぜなら、われわれが、似ようとしている神の品性は、慈悲と愛に富んだものだからである。創造主が、われわれにお授けになったすべての能力とすべての性質は、神の栄光と同胞の向上のために用いなければならない。そして、このように活用することが、最も清く、最も気高く、最も幸福な活動である。 PP 311.5

この原則の重要性を認めて、それに忠実に従うならば、現代の教育法のどこかに根本的変化が起こることであろう。教師は、誇りと利己的野心に訴えて、競争心をかき立てようとせずに、善と真理と美を愛する心を起こさせ、美徳を望む心を起こさせようと努力するであろう。学生は、他を越えるためではなくて、創造主のみこころを実現し、神のかたちに似るために、自分に与えられた神の賜物を伸ばそうとするであろう。単に、地上の標準をめざしたり、それ自身萎縮作用を持っている自己高揚の欲望に動かされたりするかわりに、心は創造主に向けられて、彼を知り、彼のようになろうとするであろう。 PP 311.6

「主を恐れることは知恵のもとである、聖なる者を知ることは、悟りである」（箴言９：10）。人生の大事業は品性の建設であって、神を知ることはすべての真の教育

の基礎である。この知識を与え、それに調和した品性を形成することが、教師の仕事の目的でなければならない。神の律法は、神の品性の写しである。だから、詩篇記者は言っている。「あなたのすべての戒めは正しい」「わたしはあなたのさとし によって知恵を得ました」（詩篇 119：172、104）。神は、神のみことばと創造のわざの中に、ご自身を現された。霊感によって書かれた書物と自然の書物とによって、われわれは神の知識を得なければならない。 PP 311.7

人間の心は、考えるように訓練された問題に、次第に順応してくるものである。ただありふれたつまらぬことだけを考えていると、心は萎縮して衰弱する。困難な問題と取り組むことが全然なければ、しばらくするうちに、成長する力をほとんど失ってしまう。 PP 312.1

教育する力として、聖書に匹敵するものはない。心は、神のことばの中に最も深遠な思想と最も崇高な熱望の主題を見いだす。聖書は、人間が所有する最も教訓の豊かな歴史である。それは、永遠の真理の根源から直接与えられたものである。そして、神のみ手が各時代を通じて、その純粋性を保持してきた。それは、人間的研究によっては、見通すことのできない遠い過去を照らし出している。神のみことばの中に、地球の基礎をすえ、天を張った力を見る。人間の偏見と誇りに汚されていない人類歴史を発見できるのは、ただここだけである。ここに、世界最大の人物の苦闘と敗北と勝利とが記録されている。ここに、義務と運命の大問題が展開されている。見える世界と見えない世界を隔てている幕が揚げられて、罪が最初に侵入した時から、義と真理が最後に勝利するまでの善と悪の軍勢の争闘を見るのである。そして、すべては、神の品性の啓示に過ぎない。神の言葉に示された真理を敬虔な心で瞑想するとき、学生の心は、無限の心との交わりに入れられる。こうした研究は、品性を洗練して高尚にするばかりでなく、知力を拡大し、活気づけずにはおかないのである。 PP 312.2

聖書の教訓は、この生涯のあらゆる関係における人間の繁栄に、重大な関連を持っている。それは、国家の繁栄の礎石である原則を提示している。それは社会の幸福と密接に結びつき、家庭を保護する原則である。この原則を度外視しては、誰一人現世で有用な人物として幸福になり、栄誉を受けることはできない。また、将来永遠の生命を受

けることを望むこともできない。人生のどんな地位、どんな経験であっても、聖書は、それに対する必要な準備を教えている。神の言葉を研究して服従するならば、人間哲学のあらゆる分野の周到な研究にまさって、もっと強力で、知性の活発な人物が世に送り出されることであろう。それは、力と強固な品性を持った人物、鋭い洞察力と正しい判断の人、神を敬い、世界の祝福となる人々を起こすであろう。 PP 312.3

科学の研究においても、また、創造主の知識を得なければならない。すべての真の科学は、物質界における神のみ手の跡の解釈に過ぎない。科学は、その研究の中から、創造主の知恵と能力の新しい証拠を提出するに過ぎない。自然の書物と書かれた言葉とは、正しく理解するならば 2 つとも神がお用いになる法則が、知恵と慈愛に満ちたものであることをわれわれに教えて、われわれを神に近づけるのである。 PP 312.4

学生は、創造のすべてのわざの中に神を見るように導かれる必要がある。教師は、自然の卑近な光景から例話を引いて教えを単純にし、聴衆の心に深い印象をお与えになった大教師の模範にならわなければならない。葉の茂った木の枝でさえずる小鳥、谷の草花、巨大な樹木、実り豊かな田畑、芽を出す穀類、不毛の土地、空を黄金色に染める日没などは、皆、教育の資料であった。彼は、創造主の目に見えるみわざと、彼が語られた生命の言葉とを統合された。それで、彼の聴衆がそれらの光景を見た時には、いつでも、彼がそれらに結びつけられた真理の教訓を思い出すのであった。 PP 312.5

啓示のページに明らかな神の印は、高山や、実り豊かな谷間、広く深い大海に見られる。自然界は、創造主の愛を人間に語る。神は、天と地の中の無数のしるしによって、ご自身をわれわれに結びつけられた。この世界はすべてが悲しみと悲惨ではない。「神は愛である」（Ｉヨハネ４：16）という言葉が、すべての開くつぼみに、すべての花びらに、すべての草の上に書かれている。罪ののろいが、地にとげやあざみを生えさせたけれども、あざみには花が咲き、とげはばらの花でおおわれている。自然界のものは、みな、 父親のように思いやりのある神の保護と、子供たちの幸福を願う神の心を証拠立てている。神の禁止や命令は、ただ神の権威を誇示するだけのものではない。神は、神の子供たちの幸福を考えて万事を行われる。神は、彼らが所有することが最も幸福であるものを、何 1 つ捨てることをお命じにならない。 PP 312.6

社会の一部の人々は、宗教が、健康またはこの世の幸福を増進するものでないと考えているが、これは、はなはだしいまちがいの 1 つである。聖書には次のように書いてある。「主を恐れることは人を命に至らせ、常に飽き足りて、災にあうことはない」（箴言 19：23）。「さいわいを見ようとして、いのちを慕い、ながらえることを好む人はだれか。あなたの舌をおさえて悪を言わせず、あなたのくちびるをおさえて偽りを言わすな。悪を離れて善をおこない、やわらぎを求めて、これを努めよ」（詩篇 34：12～14）。「それは、これを得る者の命であり、またその全身を健やかにするからである」と知者は言っている（箴言 4：22）。 PP 313.1

真の宗教は、身体的、知的、道徳的に、人間を神の律法に調和させる。それは、自制と落ち着きと節制とを教える。宗教は、精神を高尚にし、趣味を洗練し、判断を清める。それは、人間を天の清らかさを持った者とする。神の愛と摂理の支配を信じる信仰は、心配や苦労の重荷を軽くする。それは、人間がどんなに高められようが、どんなに低い境遇におかれようが、心を喜びと満足で満たす。宗教は、直接健康の増進と長寿に寄与し、人生のすべての祝福の楽しみを増す。それは、人の心に尽きることのない幸福の泉を開く。それは、人々が求めているものよりもはるかにすぐれたものをキリストは与えようとしておられることを、キリストを受け入れていないすべての者が悟ることを望むのである。人間が神のみこころに反して思考し、行動するとき、その人は、自分自身に対して、最大の危害と不正を行っているのである。被造物の最善を知って、彼らの幸福のためにご計画になる神が禁じられた道で、真の喜びを見いだすことはできない。罪の道は、不幸と破滅に陥れるが、知恵の「道は楽しい道であり、その道筋はみな平安である」（同 3：17）。 PP 313.2

ヘブルの学校で行われた体育教育は、宗教教育と同様に有益な研究である。こうした教育の価値が認められていない。精神と肉体は、非常に密接な関係がある。であるから、道徳的、また、知的に高い標準に達しようと思うならば、われわれの身体をつかさどる法則に注意しなければならない。強力で平均のとれた品性を得ようとすれば、知的、身体的能力の両方を運動させて、発達させなければならない。青年が、神から与えられ

たこの驚くべき身体について研究し、からだを健康に保つための法則を研究すること以上に重要な研究がほかにあろうか。 PP 313.3

イスラエルの時代と同様に、現在でも、すべての青年は実際生活の義務について教えを受けなければならない。誰でも、何かの職業の知識を獲得し、もし必要ならば、生計を立てられるようにしなければならない。これは人生の浮沈に対する備えとしてばかりでなく、身体的、知的、道徳的発達上からも重要なことである。肉体労働によって生計を立てる必要がないことがはっきりわかっている者であっても、なお働くことを教えなければならない。肉体の運動をしなければ、誰もじょうぶな体と活気に満ちた健康を保持することはできない。そして規律に従った労働の訓練は、強く活気のある精神と、高貴な品性の獲得に欠くことのできないものである。 PP 313.4

学生は、だれでも 1 日の一部分を活発な労働に当てなければならない。こうして、青年は、勤勉の習慣が身につき、自分に自信が持てるようになるとともに、怠慢の結果陥りがちな多くの悪習慣から守られるのである。そして、これは、教育の主要目的にかなっている。というのは、活動、勤勉、純潔を奨励することによって、われわれは創造主と調和するからである。 PP 313.5

青年たちに、彼らの造られた目的が、神をあがめ、同胞を祝福することであることを理解させよう。天の父が彼らにあらわされた慈悲深い愛を彼らに認めさせよう。また、彼らが人生の訓練によって、大きな運命に対する準備が与えられ、神の子となるように、 尊く栄誉ある召しにあずかっていることを悟らせよう。そうすれば、幾千という青年たちは、低い利己的な目的と、これまで彼らの心を奪っていた軽はずみな快楽をきらって離れることであろう。彼らは、報賞を望む心や、罰を恐れる気持ちからではなくて、罪そのものの卑劣さを感じて、罪を憎み、それを避けるようになる。なぜなら、それが神から与えられた能力を低下させ、神のかたちに造られた人間性に汚点をつけるからである。 PP 313.6

神は、青年たちに大望をいだくなとはお命じにならない。成功を収めて、人々の尊敬をかち得る品性の特質、すなわち、何か大きな善事をしたいという抑えきれない願望、不屈の意志、奮闘努力、堅忍不抜の精神といったものは、打ちくだいてしまってはなら

ない。そうしたものは、神の恵みによって、天が地よりも高いのと同じように、ただ利己的で現世的なものよりは、はるかに高尚な目的に向けられなければならない。そして、現世で始められた教育は、来世にまで続くのである。神の驚くべきみわざ、宇宙を創造してそれを支持しておられる神の知恵と能力の証拠、救いの計画に表された愛と知恵の無限の神秘が、日ごとに新しい美しさをもって人の心に開かれる。「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」（Ⅰコリント２：9）。われわれは、現世でも神の臨在をかすかながら悟り、天の交わりの喜びを味わうことができる。しかし、その完全な喜びと祝福を達成できるのは、来世である。神のかたちに回復された人間の輝かしい運命を示すことができるのは、ただ永遠だけである。 PP 314.1

第 59 章　イスラエル最初の王サウル

本章は、サムエル記上 8～12 章に基づく PP 314.2

イスラエルの政治は、神の名とその権威のもとに行われた。モーセと 70 人の長老、つかさと士師たちの務めは、単に、神がお与えになった律法を実施することであった。彼らには、国家の法律を制定する権はなかった。これが、イスラエルの国家としての存在のあり方であり、そのように継続すべきものであった。どの時代においても、神の霊感を受けた人々が送られて、民を教え、律法の実施の指示を与えた。 PP 314.3

主は、イスラエルが王を要求するようになることを予見なさったが、国家制定の原則が変化することを許可なさらなかった。王は、至高者なる神の代理人であるべきであった。神を国家の首長と認め、神の律法を国の最高の法律として、実施しなければならなかった。 PP 314.4

イスラエルの人々が、最初にカナンに定住したとき、彼らは、神政政治の原則を認めた。そして、国家は、ヨシュアの指導のもとに繁栄した。しかし、人口の増加と他国との交渉がそれに変化をもたらした。人々は、隣接する異邦の風習を数多くとり入れ、彼ら自身の特異性と清い性質とを大部分犠牲にした。彼らは、徐々に、敬神の念を失い、神の選民であることを誇りとしなくなった。彼らは、異邦の諸王の外見の壮麗さに心をひかれ、自分たちの簡素なことにあき果てた。部族間には、ねたみやそねみが起こった。内部の紛争が、彼らを弱くした。彼らは、絶えず異邦の敵の侵入の危険にさらされていた。人々は、国家間における彼らの地位を保持するためには、部族を強力な中央政権のもとに統一する必要があると痛感するようになった。彼らは神の律法に従わなくなり、天の神の支配からのがれたいと望んだ。こうして、王を要求する声がイスラエル全土に広がった。 PP 314.5

政治が、サムエルの支配下におけるほどに大きな知恵と成功のもとに行われた時代は、ヨシュアの時代以来なかったことであった。サムエルは、士師、預言者、祭司という 3 つの職責を神から委ねられて、彼の民の幸福のために、たゆまず熱烈な無我の精

神をもって働いた。そして、国家は、彼の賢明な支配のもとに栄えたのである。秩序は回復し、信仰は深まり、 不平の精神は一時おさまった。 PP 314.6

しかし、預言者は、年を取るにつれて政務を他の者に委ねなければならなくなった。そして、彼は自分の 2 人のむすこを彼の助手に任命した。サムエルが、ラマにおける任務を継続する一方、青年たちは、ベエルシバに配置されて、国土の南の国境付近で、人々の裁判を行った。 PP 315.1

サムエルは、国民一同の賛成のもとに、むすこたちを職務に任命したのであったが、彼らは、父親の選択に値しないむすこたちであった。主は、モーセによって神の民に特別の命令を与え、イスラエルの指導者は、正しい裁判を行い、やもめや孤児を正しくさばき、わいろを受けてはならないことを命じておられた。しかし、サムエルのむすこたちは、「利にむかい、まいないを取って、さばきを曲げた」（サムエル記上 8：3）。預言者のむすこたちは、預言者が彼らの心に強く刻みこもうと努めた教えに注意しなかった。彼らは、父親の、清い無我の生涯にならわなかった。サムエルはエリに与えられた警告を、深く肝に銘じておかなければならなかったのに、それを怠った。彼は、むすこたちを甘やかし過ぎる傾向があった。そして、その結果が、彼らの品性と生活に表れた。 PP 315.2

こうした士師たちの不正に、人々は大きな不満をいだいた。そして、彼らが長い間ひそかに希望していた政変を要求するきっかけを与えた。「イスラエルの長老たちはみな集まってラマにおるサムエルのもとにきて、言った、「あなたは年老い、あなたの子たちはあなたの道を歩まない。今ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください」」（同 8：4、5）。 PP 315.3

人々の間で行われた悪事の数々は、サムエルに知らされなかった。もし、むすこたちの悪行が彼に知らされたならば、彼は、すぐに彼らを解任したことであろう。しかし、人々の望んだことは、それではなかった。サムエルは、彼らの真の動機が不満と自尊心であり、彼らの要求が、熟慮と断固とした決意のもとに行われたものであることを悟った。サムエルに対しては、なんの不平も述べられなかった。万人が、彼の統治の潔白と知恵とを認めた。しかし、老預言者は、その要求を自己に対する非難、また、彼を除こ

うとする直接行動であると考えた。しかし、彼は、自分の気持ちを表面にあらわさなかった。彼は、譴責の言葉を言わなかった。彼は、このことについて祈り、主に訴えて、ただ主からの勧告を求めたのである。 PP 315.4

主は、サムエルに言われた。「民が、すべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである。彼らは、わたしがエジプトから連れ上った日から、きょうまで、わたしを捨ててほかの神々に仕え、さまざまの事をわたしにしたように、あなたにもしているのである」（同８：7、8）。預言者は、民の行動を彼個人に対するものであると思って悲しんだことを譴責された。彼らは、彼に対する不敬ではなくて、神の民の指導者を任命された神の権威に対する不敬をあらわしたのである。神の忠実なしもべを軽蔑して拒絶する者は、人間だけでなくて、彼を送られた主に対する侮りを示すのである。軽蔑されたのは、神の言葉であり、神の譴責と勧告であった。拒否されたのは神の権威であった。 PP 315.5

イスラエルが最も繁栄した時代は、彼らが、主を彼らの王として認め、神が制定された律法と統治を、他のすべての国々の統治よりもすぐれたものとみなしたときであった。モーセは、主のいましめについて、イスラエルに宣言した。「これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」（申命記４：6）。しかし、ヘブル人は、神の律法に従わなかったために、神が望まれたような国民になることができなかった。そして、彼らは自分たち自身の罪と愚かさの結果として生じたすべての災いを、神の統治のせいにした。彼らは罪のために、全く目がくらんでしまったのである。 PP 315.6

主は、イスラエルが王の統治を受けることを、預言者によって預言しておられた。しかし、この政治形態が最善であって、神のみこころにかなったものである というわけではなかったのである。 PP 315.7

神は、人々が、神の勧告に従うことを拒んだために、彼らの選んだ通りにすることを許された。主は、怒りをもって彼らに王を与えたと、ホセアは言った（ホセア 13：

11 参照）。人々が神の勧告を求めず、または、神が啓示されたみこころに反して自分勝手な道を選び、それに付随した苦い経験にあうとき、彼らが自分たちの愚かさを自覚して、罪を悔い改めるに至るために、神はしばしば彼らの願いを許される。人間の誇りと知恵は、危険な道案内となる。神のみこころに反して心が欲求するものは、ついには祝福ではなくてのろいとなるのである。 PP 316.1

神は、神の民が、彼らの立法者および力の源泉として、ただ神だけを仰ぐことを望まれた。こうして彼らは、自分たちが神に依存していることを認めて、常に神に近づくのであった。彼らは、高められ高貴にされて、神の選民として召された大いなる運命にふさわしいものとされるのであった。ところが、人間が王座にすわるようになると、人心を神から引き離す傾向があった。彼らは神の力よりは、人間の力に頼るようになる。そして、王の犯す誤りは、彼らを罪に陥れ、国家を神から離反させるのであった。 PP 316.2

サムエルは、人々の願いを聞き入れはするが、主が承知されなかったことを彼らに警告し、こうした行動はどういう結果を招くかを知らせるように命じられた。「サムエルは王を立てることを求める民に主の言葉をことごとく告げ」た（サムエル上 8：10）。彼は、彼らに負わせられる重荷を忠実に述べ、こうした圧迫下の状態と現在の比較的自由と繁栄の状態との比較を示した。彼らの王は、他の王たちの栄華を模倣し、それを維持するために、人員や財産をきびしく要求しなければならなくなる。王は、国民の優秀な青年たちに服役を要求するであろう。彼らは、戦車隊や騎兵に徴集されて、王の前に走らなければならないであろう。彼らは、王の軍隊の責任を負わせられるであろう。彼らは、王の土地を耕し、王の作物を刈り、王のために武器を製造しなければならないであろう。イスラエルの娘は、王家のために香を作る者、パンを焼く者とされるであろう。王は、王としての威厳を保つために、主ご自身が、人々に授けられた土地の最もよい物を取るであろう。また、彼らのしもべたち、牛、ろばなどの最もよいものを取って、「自分のために働かせ」るであろう（同 8：16）。そのほか、王は、彼らの収入の 10 分の 1、彼らの労働の利益、または、地の産物を要求するであろう。「あなたがたは、その奴隷となるであろう。そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王

のゆえに呼ばわるであろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」と預言者は結んだ（同８：17、18）。王制が一度確立すれば、それが、どんなに煩雑で苛酷な要求をするものであっても、かってに破棄することはできなかった。 PP 316.3

しかし、人々は答えた。「いいえ、われわれを治める王がなければならない。われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」（同８：19、20）。「他の国々のようにな」る。イスラエルの人々は、この点で他国と同じでないことが、特別な特権と祝福であることを自覚しなかった。神はイスラエルの人々を、他のすべての国民から分離して、神ご自身の特別の宝とされたのであった。しかし、彼らは、この大きな栄誉を無視して、異教徒の風習を模倣することを切望した。そして、世俗の風習に従おうとする切望は、今なお神の民と自称する人々の間にもあるのである。彼らが主から離れると、世の利益と栄誉を熱望するようになる。クリスチャンは、この世の神の礼拝者の風習を常に模倣しようと努めている。世の人々と一致し、彼らの風習に従うことによって、神を信じない人々に強力な感化を及ぼすことができると力説する人々が多くいる。しかし、そうする者はみな、そのために、彼らの力の根源である神から離れる。世の友となれば、神の敵である。彼らは、地上の栄誉のために、暗やみから驚くべきみ光に招き入れてくださった方のみわざを語り伝えるために神に召されたという、言葉では表現できない栄誉を犠牲にしてしまう（Ｉペテロ２：９参照）。 PP 316.4

人々の言葉を聞いて、サムエルは深く悲しんだ。しかし、主は、「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ」と、サムエルに言われた（サムエル上８：22）。 PP 317.1

預言者は、彼の義務を果たした。彼は、忠実に警告したのであったが、拒否されてしまった。彼は、重苦しい気持ちで人々を解散させ、自分自身は、大きな政変の準備をするためにそこを去った。 PP 317.2

サムエルの清く無我の献身的生活は、利己的な祭司や長老たちと、高慢で官能的なイスラエルの会衆の両方を絶えず譴責するものであった。彼は、華麗に装い誇示するこ

とはなかったが、その働きは、天の印を帯びていた。彼は、ヘブル民族を統治するために指示を仰いでいた世の贖い主の栄誉にあずかった。しかし、人々は、彼の敬神と献身に飽きてきた。彼らは、彼のつつましい権威を侮って、彼を拒否し、王として彼らを支配する人間を求めたのである。 PP 317.3

われわれは、サムエルの品性の中に、キリストのかたちが反映していたのを見る。サタンを怒らせたのは、救い主の生涯の清さであった。その生涯は世の光であった。そして、人の心の中の隠れた堕落をあばいた。宗教のにせ教師たちの心を激怒させて、彼に立ち向かわせたのは、キリストの神聖さであった。キリストは、富と栄誉をもって地上に来られなかった。しかし、彼のなさった働きは、彼がどの地上の王よりも偉大な力の所有者であることを示した。ユダヤ人は、メシアが現れて、圧迫者のくびきを折ることを待望したが、その心には、彼らの首をくびきにつなぐ罪をいだいていた。もしも、キリストが彼らの罪をおおい隠して、彼らの敬神深さを賞賛されたならば、彼らは、キリストを王として受け入れたことであろう。しかし、彼らは、キリストの彼らの罪に対する大胆な譴責に耐えられなかった。慈愛と純潔と神聖さにみなぎり、罪以外の何ものをも憎まない品性の美しさを、彼らはさげすんだ。これは、世界のどの時代においても、その通りであった。天からの光は、その光の中を歩くことを拒むすべての者を罪に定めるのである。罪を憎む者の模範的生活に譴責されるとき、偽善者はサタンの手下になって忠実な者を悩まし、迫害するのである。「いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」（Ⅱテモテ３：12）。 PP 317.4

イスラエルの王朝政治は預言されていたとは言え、彼らの王を選択する権は、神ご自身が保留しておられた。ヘブル人は、神の権威を尊重して、正の選定を全く神にゆだねていた。ベニヤミンのキシのむすこサウルが選ばれることになった。 PP 317.5

将来の王の人間的特質は、王を求めた人々の誇りを満足させるものでなければならなかった。「イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はな」かった（サムエル記上９：2）。背が高く、りっぱで気高い威厳を備えた壮年期の彼は、生まれながらの指導者のように思われた。サウルは、これらの外面的魅力はあったが、真の知恵を構成する

のに必要な気高い特質に欠けていた。彼は、青年時代に、その性急な激情を支配することを学ばなかった。彼は、神の恵みの改変の力を感じたことがなかった。 PP 317.6

サウルは、有力で裕福な首長のむすこであったが、当時の素朴な風習に従って、彼の父と共に農夫の卑しい仕事に従事していた。彼の父の家畜が、数頭山の中で道に迷った。そこでサウルは、しもべを連れてさがしに出かけた。彼らは 3 日さがしたが見つからなかった。彼らは、サムエルのいるラマから遠くなかったので、しもべがいなくなった家畜のことについて、預言者に聞いてみようと言った。「わたしの手に 4 分の 1 シケルの銀があります。わたしはこれを、神の人に与えて、われわれの道を示してもらいましょう」と彼は言った（同 9：8）。こうすることは、そのころの習慣に従ったものであった。位や地位の高い人に近づく時には、尊敬のしるしにささやかな贈り物をした。 PP 317.7

彼らは、町に近づいた時に、水をくみに出て来た娘たちに会ったので、彼らに預言者のことを聞いた。娘たちは、問いに答えて、宗教的な行事がすぐに開かれようとしていて、預言者はもう到着していることと、「高き所」で犠牲が捧げられること、そして、それがすんでから祝宴があることなどを教えてくれた。サム エルの統治下において、大きな変化が起こった。彼が最初召されたころには、聖所の祭りは侮られていた。「この人々が主の供え物を軽んじた」（同 2：17）。しかし、神の礼拝は、今、全土で行われるようになった。そして、人々は、宗教的な行事に興味を示した。幕屋の奉仕はなかったから、犠牲は臨時に他の場所で捧げられた。そして、そのために人々が教えを受けるために集まった祭司の町やレビ人の町が選ばれた。そうした町の一番高い所が、通常、犠牲の場所に選ばれたので、高き所と呼ばれた。 PP 317.8

サウルは、町の門で、預言者自身に出会った。神は、ちょうどその時に、イスラエル王として選ばれた者が彼の面前に現れることを、サムエルに示されたのであった。こうして、彼らが向かい合ったとき、主は、サムエルに言われた。「見よ、わたしの言ったのはこの人である。この人がわたしの民を治めるであろう」（同 9：17）。 PP 318.1

サウルが、「先見者の家はどこですか。どうか教えてください」とたずねると、サムエルは、「わたしがその先見者です」と答えた（同 9：18、19）。サムエルは、道に迷った家畜が、もう見つかったことをも話した上で、彼に、とどまって食事をするように勧めるとともに、彼の前に大きな運命が待っていることをほのめかしたのである。「イスラエルのすべての望ましきものはだれのものですか。それはあなたのもの、あなたの父の家のすべての人のものではありませんか」（同 9：20）。預言者の言葉を聞いて、サウルの心は大きな感動を覚えた。彼は、その言葉の意味深さを感じないわけにいかなかった。王に対する要求が、全国の重大関心事となっていたからである。しかし、サウルは謙遜に自分を卑下して言った。「わたしはイスラエルのうちの最も小さい部族のベニヤミンびとであって、わたしの一族はまたベニヤミンのどの一族よりも卑しいものではありませんか。どうしてあなたは、そのようなことをわたしに言われるのですか」（同 9：21）。 PP 318.2

サムエルは、サウルを町のおもだった人々の集まっているところへ連れて行った。サウルは、その人々の中でサムエルの指示に従って、上座にすわらせられて、最高のごちそうが彼の前に並べられた。サムエルは集会後、客を自分の家に連れていき、屋上で彼と話し合い、イスラエルの政治の基礎である大原則を示した。こうして、サムエルは、彼のつくべき高い地位に対する準備をいくぶんかでも与えようと努めたのである。 PP 318.3

預言者は、翌日の朝早くサウルが出発する時に、彼と一緒に出かけた。彼は、町はずれまで来ると、しもべに先に行くように命じた。そして彼は、サウルに立ち止まって、神が彼にお送りになった言葉を聞くように命じた。「その時サムエルは油のびんを取って、サウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った、『主はあなたに油を注いで、その民イスラエルの君とされたではありませんか』」（同 10：1）。サムエルは、これが神の権威によって行われたものであるという証拠として、帰り道で彼が出会う出来事を預言した。そして、サウルを待ち受けている地位に対して、神の霊が彼に資格を与えるであろうと言った。「主の霊があなたの上にもはげしく下って、あなたは……変って新しい人となるでしょう。これらのしるしが、あなたの身に起ったならば、あなたは手当りし

だいになんでもしなさい。神があなたと一緒におられるからです」（同 10：6、7）。 PP 318.4

サウルが道を進んで行くと、預言者の言ったことがみな起こった。彼は、ベニヤミンの境の近くで、迷った家畜が見つかったことを聞いた。タボルの平原では、ベテルで神を礼拝しようとする 3 人の者に会った。1 人は犠牲のための 3 頭の子やぎを連れ、次は 3 つのパンを携え、第三の人は犠牲の食事のために、ぶどう酒の皮袋を携えていた。彼らは、サウルにいつものあいさつをして、3 つのうち 2 つのパンをくれた。彼自身の町、ギベアでは、「高き所」から降りてきた預言者の一団が、笛や琴、立琴や手鼓の音楽に合わせて、神を賛美して歌っていた。サウルが彼らに近づくと、主の霊が彼の上にも降り、彼も、彼らと一緒に賛美して預言した。彼は、非常な雄弁と知恵をもって語り、熱心に礼拝に参加したので、彼を知っ ていた人々は驚いて叫んだ。「キシの子に何事が起ったのか。サウルもまた預言者たちのうちにいるのか」（同 10：11）。 PP 318.5

サウルが預言者たちの礼拝に加わったとき、聖霊による大変化が彼のうちに起こった。天来の清い神聖な光が、生まれながらの心の暗黒を照らした。彼は、神の前に立つ自分の姿を見たのである。彼は、神聖の美を見た。彼は、今、罪とサタンに対する戦いを始めるために召された。そして、この争闘において、彼の力は、全く神から来なければならないことを悟らされた。これまで、あいまいで不明瞭だった救いの計画が、彼の心に明らかにされた。主は、彼の高い地位のための勇気と知恵を、彼に賜わった。主は、彼に能力と恵みの根源を示し、神の要求と彼自身の義務について、十分な理解をお与えになった。 PP 319.1

サウルが王として油を注がれたことは、まだ、全国に知らされなかった。神の選択は、くじによって広く知らされることになった。サムエルは、その目的のために、人々をミヅパに集めた。神の指導を求める祈りが捧げられた。それに続いて、くじを引く厳粛な儀式が行われた。集まった群衆は、黙って結果を待った。部族、氏族、家族と次々に定められていって、キシの子サウルが選ばれた。しかし、サウルは会衆の中にいなかった。彼は、彼に負わせられようとする重大な責任を強く感じて、ひそかに身を隠して

いた。彼は、会衆のところに連れてこられた。会衆は、彼が、「肩から上は、民のどの人よりも高」く、王の威厳と気品を備えていたのを見て誇りと満足をおぼえた（同10：23）。サムエルも、人々に彼を紹介した時に叫んだ。「主が選ばれた人をごらんなさい。民のうちに彼のような人はないではありませんか」。そして、それに答えて、大群衆の中から「王万歳」という、長く大きな歓呼の声があがった（同10：24）。 PP 319.2

そのとき、サムエルは、「王国のならわし」を人々に語って、王政政治の基礎をなす原則を述べ、それに従って、支配されなければならないことを告げた。王は、絶対君主となるのではなくて、至高者なる神のみこころに従って権力を保持するのであった。君主の大権と国民の義務と特権を述べたこの演説は、書物に記録された。国民は、サムエルの警告を軽んじた。しかし、忠実な預言者は、民の要求に屈服させられてもなお、できるかぎりを尽くして、彼らの自由を擁護しようと努力した。 PP 319.3

人々は、一般に、サウルを王として認める用意はあったが、多数の反対派もあった。最大で最も強力なユダとエフライムの両部族を無視して、イスラエルの部族中最小のベニヤミンから王が選ばれることは、彼らのとうてい忍ぶことのできない侮辱であった。彼らは、サウルに忠誠を誓うことを拒否し、慣例の贈り物を持ってこなかった。王を最も熱烈に要求した当人たちが、神によって選ばれた人を、感謝して受けることを拒否したのである。各派の者たちは、それぞれ王位の候補者を持っていたし、指導者の中の数名は、自分自身が、その栄誉にあずかりたいと願っていた。多くの人の心に、ねたみとそねみの火が燃えた。誇りと野心から起こった運動は、失望と不満に終わった。 PP 319.4

サウルは、このような情勢下にあって王位につくことは、適当でないと思った。それで、従来通り国家の行政はサムエルにゆだねておいて、彼は、ギベアへ帰った。彼は、栄誉をたたえる一団の人々につき添われて帰った。この人々は、彼が神に選ばれたのを見て、彼を支持することにしたのであった。しかし、彼は、武力に訴えてまで、王権を確保しようとしなかった。彼は、ベニヤミンの山地の故郷で、静かに農業に従事して、彼の権威が確立されるのをすべて神にまかせていた。 PP 319.5

サウルが任命を受けて間もなく、アンモン人の王、ナハシが、ヨルダンの東の部族の領土に侵入し、ヤベシ・ギレアデの町を攻撃した。住民は、アンモン人にみつぎ物をおさめることを申し入れて、契約を結ぼうとした。しかし、残酷な王は、すべての住民の右の目をえぐり取って、彼らを彼の権力の永久の証拠とするのでなければ承知しなかった。 PP 319.6

包囲された町の人々は、7 日間の猶予を請うた。アンモン人は、彼らの期待した勝利をさらにはなばな しくするため、これに同意した。ヤベシからは、すぐにヨルダン川の西の部族の援助を求めるために、使者が送り出された。彼らは、ギベアに知らせて、多くの人々を恐れさせた。サウルが牛のあとを追って、夜、畑から帰ってくると、何か大きな悲劇が起こったことを知らせる大きなうめきを聞いた。「民が泣いているのは、どうしたのか」と彼は言った（同 11：5）。この屈辱的知らせを聞かされたとき、彼のうちに眠っていた力がことごとく奮い立った。「神の霊が激しく彼の上に臨んだ……。彼は一くびきの牛をとり、それを切り裂き、使者の手によってイスラエルの全領土に送って言わせた、『だれであってもサウルとサムエルとに従って出ない者は、その牛がこのようにされるであろう』」（同 11：6、7）。 PP 319.7

ベゼクの平原には、33 万人がサウルの指揮下に集まった。包囲された町には、すぐに使者が送られて、その翌日必ず援軍が送られることが知らされた。その日は、彼らが、アンモン人に降伏することになっていた日であった。サウルと彼の軍勢は、夜の間にすばやく進軍して、ヨルダン川を渡り、「あかつきに」ヤベシに到着した（同 11：11）。彼は、ギデオンのように彼の軍を 3 組に分け、そうした早朝の時間に、アンモンの陣営を襲った。それは彼らがなんの危険も感じないで、最も防備のないときであった。彼らは、あわてふためいて、多数の死者を出して敗走した。「生き残った者はちりぢりになって、ふたり一緒にいるものはなかった」（同 11：11 下句）。 PP 320.1

このような大軍をみごとに指揮したサウルの指導力とともに、彼の敏速さと勇気とは、イスラエルの人々が他国と競い合うために、王に求めた特質であった。今、彼らは、神の特別の祝福がなかったならば、彼らの努力はすべて無に帰すところであったことを忘れて、勝利の栄誉を人間の器に帰して、サウルを王として迎えた。熱狂のあまり、最

初にサウルの権威を認めなかった者を殺そうと言う者もあった。しかし、王は、それをさえぎって言った。「主はきょう、イスラエルに救を施されたのですから、きょうは人を殺してはなりません」（同 11：13）。サウルは、ここで、彼の品性が変化した証拠を示した。彼は、自分に栄誉を帰する代わりに、神に栄光を帰した。復讐心をあらわす代わりに、情けと赦しの精神をあらわした。これが、彼の心の中に、神の恵みが宿った明らかな証拠であった。 PP 320.2

そこで、サムエルは、ギルガルにおいて、国民の集会を開き、正式にサウルが王であることを認めることにしようと言い、それが実行に移された。民は、「酬恩祭を主の前にささげ、サウルとイスラエルの人々は皆、その所で大いに祝った」（同 11：15）。 PP 320.3

ギルガルは、イスラエルが約束の地で最初に天幕を張ったところであった。ヨルダン川を奇跡的に渡ったことを記念するために、ヨシュアが神の命令によって 12 の石を立てたのはここであった。カデシでの罪と、荒野の放浪の後で、彼らはここで最初の過越の祭りを行った。ここで、マナがやんだ。ここで、主の軍勢の将が、イスラエルの軍勢の指揮官として、ご自分を現された。彼らは、この場所から、エリコとアイの攻略に出かけた。ここでアカンは、彼の罪の罰を受けた。また、イスラエル人は、ここでギベオン人と同盟を結び、神の勧告を仰がなかった罰を受けた。多くのこうした感動的思い出につながる平原の上に、サムエルとサウルは立ったのである。王を迎える歓呼の声が静まった時に、老預言者は国家の指導者として、告別の言葉を語った。 PP 320.4

彼は言った。「見よ、わたしは、あなたがたの言葉に聞き従って、あなたがたの上に王を立てた。見よ、王は今、あなたがたの前に歩む。わたしは年老いて髪は白くなった。……わたしは若い時から、きょうまで、あなたがたの前に歩んだ。わたしはここにいる。主の前と、その油そそがれた者の前に、わたしを訴えよ。わたしが、だれの牛を取ったか。だれのろばを取ったか。だれを欺いたか。だれをしえたげたか。だれの手から、まいないを取って、自分の目をくらましたか。もしそのようなことがあれば、わたしはそれを、あなたがたに償おう」（同 12：1～3）。 PP 320.5

人々は、声をそろえて答えた。「あなたは、われわれを欺いたことも、しえたげたこともありません。また人 の手から何も取ったことはありません」（同 12：4）。 PP 320.6

サムエルは、ただ自分自身の行動の正当なことを主張しようとしただけではなかった。彼は、以前に、王と国民がともに従わなければならない原則を説明してあるから、その言葉に彼自身の模範の重みを加えたいと思った。彼は、幼少のときから神の働きに連なり、神の栄光とイスラエルの最高の幸福を、その長い生涯の一大目標としてきた。 PP 321.1

もし、彼らがイスラエルの繁栄を望むならば、神の前に悔い改めなければならなかった。彼らは、罪の結果、神に対する信仰を失い、国家を支配する神の能力と知恵を認めなくなり、神がご自身の働きを擁護する能力を持っておられることを確信しなくなった。彼らは、真の平和が与えられる前に、その犯した罪を認めて、告白しなければならなかった。王を求める目的は、「王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」と彼らは言った（同 8：20）。サムエルは、神が民をエジプトから導き出されたときからのイスラエルの歴史をくりかえした。王の王であられる主が、彼らを率いて、彼らの戦いをたたかわれたのである。彼らは、しばしば、罪のために、敵の手中に陥ったけれども、彼らが悪の道から離れるやいなや、神は、彼らをあわれんで、救済者を起こされた。主は、ギデオンとバラク、「エフタとサムエルをつかわして、あなたがたを周囲の敵の手から救い出されたので、あなたがたは安らかに住むことができた」（同 12：11）。しかし、危機にさらされると、預言者が、「あなたがたの神、主があなたがたの王である」と言ったにもかかわらず、「われわれを治める王がなければならない」と彼らは言ったのである（同 12：12）。 PP 321.2

サムエルは、続けて言った。「それゆえ、今、あなたがたは立って、主が、あなたがたの目の前で行われる、この大いなる事を見なさい。きょうは小麦刈の時ではないか。わたしは主に呼ばわるであろう。そのとき主は雷と雨を下して、あなたがたが王を求めて、主の前に犯した罪の大いなることを見させ、また知らせられるであろう」（同 12：16、17）。「そしてサムエルが主に呼ばわったので、主はその日、雷と雨を下さ

れた」（同 12：18）。小麦の収穫どきである 5、6 月ごろ、東方の国では、雨は降ったことがなかった。空は、晴れ渡って、空気は静かで穏やかであった。こういう季節に、激しい暴風雨が起こったので、人々はみな恐怖に満たされた。そこで人々は、心を低くして彼らの罪を告白した。彼らは、自分たちの犯した罪そのものを告白した。「しもべらのために、あなたの神、主に祈って、われわれの死なないようにしてください。われわれは、もろもろの罪を犯した上に、また王を求めて、悪を加えました」（同 12：19）。 PP 321.3

サムエルは、人々を失望した状態のまま、放任しておかなかった。このままでは、さらに向上した生活に対する彼らの努力をすべて妨げてしまったことであろう。サタンは、人々に、神を厳格で赦すことをしないかたのように思わせようとした。こうして、彼らは、多くの誘惑にさらされるのであった。神は、あわれみ深く、赦すかたであって、神の民が、神の声に従うならば、常に恵みをほどこそうとされるのである。神は、そのしもべによって言われた。「恐れることはない。あなたがたは、このすべての悪をおこなった。しかし主に従うことをやめず、心をつくして主に仕えなさい。むなしい物に迷って行ってはならない。それは、あなたがたを助けることも救うこともできないむなしいものだからである。主は、……その民を捨てられないであろう」（同 12：20～22）。 PP 321.4

サムエルは、自分が軽んじられたことについては、一言も言わなかった。彼の全生涯の献身に対するイスラエルの忘恩を責める言葉も言わなかった。彼は、彼らのために、なお深い関心を持ち続けることを約束した。「また、わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けっしてしないであろう。わたしはまた良い、正しい道を、あなたがたに教えるであろう。あなたがたは、ただ主を恐れ、心をつくして、誠実に主に仕えなければならない。そして主がどんなに大きいことをあなたがたのためにされたかを考えなければならない。しかし、あなたがたが、なおも悪を行うならば、あなたがたも、あなたがたの王も、 共に滅ぼされるであろう」（同 12：23～25）。 PP 321.5

第 60 章　サウルの不遜な態度

本章は、サムエル記上 13、14 章に基づく PP 322.1

サウルは、ギルガルにおける集会後、アンモン人を打ち破るために召集した軍隊を解散させ、彼の指揮下の 2000 人をミクマシに残し、1000 人を王子のヨナタンと共にギベアにおいた。これは、大きなまちがいであった。彼の軍隊は、今度の勝利によって希望と勇気にあふれていた。であるから、サウルがすぐにイスラエルの他の敵を攻めたならば、国家を自由にするために効果的打撃を与えることができたはずであった。 PP 322.2

そうこうしているうちに、好戦的隣国のペリシテ人は活発に動いていた。彼らは、エベネゼルで敗北したあとも、なお、イスラエル国内の山地に数か所の要塞を確保していたが、今度は、国の中央に陣取るようになった。ペリシテ人は、装備、軍備、設備などの点で、イスラエルよりは、はるかにすぐれていた。彼らは、彼らの長期にわたる圧制中、イスラエル人が鉄工に従事することを禁じて武器を作らせず、彼らの勢力の維持に努めた。ヘブル人は、和平を結んだあとも、なお、ペリシテ人の陣地へ行って、必要な細工をしてもらった。イスラエルの人々は長年の圧制のために安易を好み、卑劣な精神をいだくようになり、大部分の者は武器の準備を怠っていた。戦いの時には弓や石投げが用いられ、こういうものは、イスラエル人も手に入れることができた。しかし、サウルと彼のむすこヨナタンのほかには、やりもつるぎも持っている者はいなかった。 PP 322.3

サウル王の治世の第 2 年目になって、初めて、ペリシテ人を征服しようとする動きが起こった。王子ヨナタンが、まず攻撃を開始し、ゲバにある彼らの要塞を攻撃して打ち破った。この敗北に激怒したペリシテ人は、すぐにイスラエルを急襲する準備を開始した。ここで、サウルはラッパを吹きならして、全国に戦いの布告を伝え、ヨルダンの向こうの部族も含めて、すべての戦士をギルガルに召集した。人々は、この召集に応じた。 PP 322.4

ペリシテ人は、ミクマシに巨大な軍勢を結集した。「戦車 3000、騎兵 6000、民は浜べの砂のように多かった」（サムエル上 13：5）。この知らせが、ギルガルのサウルとその軍勢に伝えられたとき、人々は、彼らの戦わなければならない敵の大軍に、びっくりぎょうてんした。彼らには、敵に当面する準備がなかった。多くの者は恐怖におびえて、あえて戦ってみようともしなかった。ヨルダンを渡った者もあれば、その地域一帯に多くあった穴や岩に隠れる者もあった。合戦の時が近づいた時には、脱走者が急激に増加して、隊にふみとどまっていた者も、不吉な予感と恐怖に満たされた。 PP 322.5

サウルが、最初、イスラエルの王として、油を注がれた時にもこの時の行動について、明確な指示がサムエルから与えられていた。「あなたはわたしに先立ってギルガルに下らなければならない。わたしはあなたのもとに下っていって、燔祭を供え、酬恩祭をささげるでしょう。わたしがあなたのもとに行って、あなたのしなければならない事をあなたに示すまで、7 日のあいだ待たなければならない」と預言者は言った（同 10：8）。 PP 322.6

サウルは、いく日もとどまっていたが、その間に、人々を励まし、神に対する信頼心を起こさせるためになんの決定的努力もしなかった。定められた期間が完了する前に、彼は遅延にしびれを切らし、周囲の困難な状況に失望してしまった。サムエルが到着して行うことになっていた儀式のために、忠実に人々の準備を促す代わりに、彼は、不信と不安感をいだいた。犠牲を捧げて神に祈り求めることは、最も厳粛で重要な務めであった。そして、捧げ物が神に受け入れられ、彼らの敵を征服しようとする努力が神に 祝福されるためには、神の民が心をさぐり、罪を悔い改めることを神はお求めになった。しかし、サウルは落ち着きを失った。そして人々は、神の助けに信頼する代わりに、彼らの選んだ王の指導を期待した。 PP 322.7

しかし、主は、なお彼らをみ心にとめ、もし彼らが弱い肉の腕だけに頼ったとしたなら陥ったであろう不幸には、あわせられなかった。神は、彼らが人間に頼ることの愚かさを悟って、神だけを頼りにするようになるために、彼らを窮地に陥れられた。サウルを試みる時が来た。ここで、彼は、神に信頼するかどうか、また神の命令に従って忍

耐して待つかどうかを明らかにしなければならなかった。こうして、彼は、困難に当面した場合、神の民の指導者として、神の信頼を受けるに足る人物であることを示すか、それとも、動揺して、彼に委ねられた聖なる責任を負う価値がないかを示すことになった。イスラエルが選んだ王は、諸王の王なる神に聞き従うであろうか。彼は、気力を失った兵隊たちの心を、永遠の力と救いの所有主に向けるであろうか。 PP 323.1

彼は、サムエルの到着を、今か今かと待った。そして、軍勢の混乱と兵の脱走事件などは、預言者が来ないためであると思った。定められた時が来たのに、神の人はすぐに現れなかった。神の摂理が、神のしもべを引き留めたのであった。しかし、サウルの落ち着かない衝動的精神は、これ以上制しておくことができなかった。何かをして人々の恐怖を静めなければならないと思って、彼は宗教的祭りの集会を開き、捧げ物を捧げて、神の助けを求めることにした。神は、その務めのために聖別された者だけが、神の前で捧げ物を捧げなければならないという指示を与えておられた。しかし、サウルは、「燔祭……をわたしの所に持ってきなさい」と命じた（同 13：9）。彼はよろいを着て、武器を持ったまま祭壇に近づいて、神の前に犠牲を捧げた。「その燔祭をささげ終ると、サムエルがきた。サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た」（同 13：10）。サムエルは、すぐにサウルが明白な指示とは反対のことを行ったことを悟った。主は、この危機において、イスラエルがなすべきことを、この時に示すと、神の預言者を通じて語っておられたのである。もしサウルが、神からの援助を受ける条件に従っていたならば、主は、王に忠誠を尽くした少数の者を用いて、イスラエルのために驚くべき救いをもたらされたことであろう。しかし、サウルは自分と自分の業績に満足し、譴責ではなく賞賛に値するもののように、預言者を出迎えた。 PP 323.2

サムエルの表情は、心配と苦悩に満ちていた。「あなたは何をしたのですか」という彼の問いに答えて、サウルは、彼の不遜な行為の言いわけをした。「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペリシテびとがミクマシに集まったのを見たので、わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしていないと思い、やむを得ず燔祭をささげました」と彼は言った（同 13：11、12）。 PP 323.3

「サムエルはサウルに言った、『あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた』。……こうしてサムエルは立って、ギルガルからベニヤミンのギベアに上っていった」（同 13：13～15）。 PP 323.4

イスラエルは、神の民でなくなるか、それとも、王国の基礎である原則を維持して、神の力に支配される国になるかのどちらかにならなければならなかった。もし、イスラエルが、全く主のがわに立ち、人間的で地上的な意志を神の意志に服従させるならば、神は、引き続きイスラエルの支配者になられるのであった。王と国民とが神に従属したものとして行動するかぎり、神は彼らの防御となられるのであった。しかし、イスラエルでは、すべてにおいて神の至上権を認めない王国は、栄えることができなかった。サウルが、この試練の時に、神の要求に対する尊敬を示したならば、神は、彼によって、神のみこころをなさることが できたのである。ところが、彼は、そうしなかったために神の民の代表者としての資格を失った。彼は、イスラエルを迷わせるのであった。神の意志でなくて、彼の意志が支配力になるのであった。もし、サウルが忠実であったならば、彼の王国は、永遠に確立されたことであろう。しかし、彼の失敗のために、神の計画は他の者によって完成されなければならなかった。イスラエルの統治権は、天の神のみこころに従って、人々を治める者に委ねられなければならなかった。 PP 323.5

われわれは、神の試練を受ける時に、それがどのような重大事にかかわりがあるかを知らない。神のみ言葉に、全的に服従する以外に安全はない。神の約束は、すべて、信仰と服従を条件にして与えられたもので、神の命令に応じなければ、聖書にしるされている豊かな恵みにあずかることができない。われわれは衝動にかられたり、人間の判断に頼ったりしてはならない。われわれはどんな環境にあっても、神の啓示されたみこころを仰ぎ、神の明らかな戒めに従って歩かなければならない。結果は、神が責任を負って下さる。われわれは、試練の時に、神のみことばに忠実に従い、どんな困難な事態

においても、神に信頼され、神のみ名に栄光を帰し、神の民の祝福となることができることを、人々と天使の前で実証することができるのである。 PP 324.1

サウルは、神のみこころを痛めたが、それでも悔い改めて心を低くしようとしなかった。彼は、真の敬神の念の欠乏を、宗教の形式に対する熱意によって補おうとした。サウルは、ホフニとピネハスが神の箱を陣営に持ち出して、イスラエルの敗北を招いたことを知らなかったわけではなかった。しかし、サウルは、こうしたことをみな知りながら、聖なる箱とそれに付き添っている祭司を迎えにやった。こうして彼は、人々の信頼を得ることができれば、離散した軍勢をふたたび結集して、ペリシテ人と戦うことができると希望していた。彼は、サムエルがそこに来て彼を支持することを待たずに実行した。こうして彼は、預言者のうれしくない批評と譴責をのがれようとした。 PP 324.2

サウルには、彼の理解を深め、心を和らげるために、聖霊が与えられていた。彼は、神の預言者の忠実な指示と譴責を受けていた。それにもかかわらず彼は、なんと邪悪な心の持ち主であったことであろう。イスラエルの最初の王の生涯は、幼少のころの悪習慣の力がどんなに強いかを示す悲しい実例である。サウルは、若いころ神を愛しおそれなかった。そして、幼い時に服従を教えられなかった性急な情神が、常に神に反抗した。若い時に、神のみこころを尊重し、自分の置かれた立場の義務を忠実に果たす者は、後年、さらに大きな奉仕をするための準備が与えられる。しかし、神がお与えになった能力を長年にわたって乱用しておきながら、急にそれを全然反対の方向に向けて生き生きと自由に活動させることはできない。 PP 324.3

サウルが、人々を奮起させようとした努力は失敗に終わった。サウルは、軍勢が600 人になってしまったのでギルガルを去って、さきごろペリシテ人から占領したゲバの城塞に退いた。この城塞は、深く、けわしい峡谷の南側にあって、エルサレムの北方約数マイルのところにあった。同じ谷間の北側が、ペリシテ人の陣地のミクマシで、彼らは、そこから軍隊を方々に送って国中を荒らしていた。 PP 324.4

神は、サウルの強情な心を譴責し、神の民に謙遜と信仰の教訓を与えるために、事態が、こうした危機に陥ることをお許しになった。主は、サウルが、僭越にも捧げ物を

捧げて罪を犯したために、ペリシテ人を滅ぼす栄誉を彼にお与えにならなかった。主をおそれた王子のヨナタンが、イスラエルを救う器に選ばれた。彼は神からの感動を受けて、武器をとる若者に向かって、敵の陣地にひそかに乗り込もうと言った。「主がわれわれのために何か行われるであろう。多くの人をもって救うのも、少ない人をもって救うのも、主にとっては、なんの妨げもないからである」と彼は言った（同 14：6）。 PP 324.5

武器をとる若者も、また信仰と祈りの人で、その計略を実行することを勧め、他の者に反対されるのを避けるために、2 人でひそかに陣地を抜け出た。彼 らは、先祖たちを導かれた神に熱心な祈りを捧げてから、その後の行動に移る場合の合図をきめた。こうして、彼らは、両軍を隔てている谷間におり、断崖の陰に隠れたり、山々の峰の間をぬったりして黙々と前進した。やがて彼らは、ペリシテ人の陣地に近づいて、敵前に姿を現した。すると、ペリシテ人は彼らをあざけって、「見よ、ヘブルびとが、隠れていた穴から出てくる」と言った（同 14：11）。彼らは、「われわれのところに上ってこい。目に、もの見せてくれよう」といどみかけ、接近してきたこの 2 人のイスラエル人に罰を与えようと考えた（同 14：12）。この挑戦は、主が彼らの企てを成功させてくださる証拠として、ヨナタンと武器をとる若者とが定めておいた合図であった。勇者たちは、ペリシテ人の前から姿を消して、けわしい隠れた通路を選び、接近するのが不可能と思われていた断崖の頂上に進んで行った。そこは、強固な防備がほどこされていなかった。こうして、彼らは、敵の陣地に侵入して、守備兵を殺した。敵は不意を打たれて、あわてふためき、なんの抵抗もしなかった。 PP 324.6

天使たちが、ヨナタンと武器をとる若者を守護し、彼らと共に戦ったので、ペリシテ人は、彼らの前に敗れ去った。騎兵と戦車の大軍が接近するかのように、地は、震え動いた。ヨナタンは、神の助けの証拠を認めた。そして、ペリシテ人でさえ、神がイスラエルを救済するために働かれたことを知った。ペリシテ人は、野にいる者も陣営にいる者も、全軍が大きな恐怖に襲われ、大混乱を起こし、味方を敵軍とまちがえて同士打ちを始めた。やがて、戦いの音が、イスラエルの陣営に聞こえてきた。王の見張りは、ペリシテ人の間に大混乱が起こり、その数が減少していることを報告した。しかし、へ

ブルの軍勢の中から、陣営を離れた者があることは、まだわからなかった。調査の結果、ヨナタンと武器をとる者の 2 人だけが不在であることがわかった。しかし、ペリシテ人が退却しているのを見て、サウルは軍勢を率いて攻撃に加わった。敵軍のがわに逃亡していたヘブル人たちも、今度は逆にペリシテ人に立ち向かった。隠れがから出て来た者も多くいた。サウルの軍勢は計略が破れて敗走するペリシテ人をさんざんに苦しめた。 PP 325.1

サウルは、彼の優位を最大限に活用しようと思い、向こう見ずにも、丸 1 日間食物をとることを兵隊たちに禁じ、「夕方まで、わたしが敵にあだを返すまで、食物を食べる者は、のろわれる」と言って、厳粛な誓いのもとに命令を断行した（同 14：24）。こうした事態になったことを知って、サウルが協力するまでもなく、勝利はすでにきまっていた。しかし、彼は、敵を全滅させて自分の名をあげようとした。王が断食の命令を出したことは、利己的野心からであって、自己を賞揚するためには、民の必要などには無関心であることを明らかにした。その禁令を誓ってまでも厳守させたことは、サウル王が向こう見ずで、神を敬わない人間であることをあらわした。のろいの言葉自体も、サウルのこの熱心さが、神の栄光のためではなくて、自己のためであることを証明している。彼の目的は、「主が敵にあだを返される」ことではなくて、「わたしが敵にあだを返す」ことであると彼は言った。 PP 325.2

禁令は、人々に神のおきてを犯させることになった。彼らは、何も食べずに 1 日中戦ったので倒れそうになった。それで、禁令の時間が過ぎるやいなや、彼らは、ぶんどり物をほふって、その肉を血のまま食べて、血を食べることを禁じていたおきてを犯した。 PP 325.3

王が禁令を出したことを知らなかったヨナタンは、昼間、戦っていた時に通った森の中ではち蜜を少し食べて、禁令を知らずに犯した。夕方になって、サウルはこのことを聞いた。禁令の違反者は、死に処せられると彼は言っていた。ヨナタンは故意にそむいたのではなかった。また、彼の生命は奇跡的に保護され、彼によって救済がもたらされたにもかかわらず、王は、刑の執行を命令した。サウルが王子の命を救うことは、このような向こう見ずな誓いをさせた自分が罪を犯していたことを自認することになるの

であった。それでは、彼の誇りが傷つけられるのであった。「神がわたしをいくえにも罰してくださるように。ヨナタンよ、あなたは必ず死ななければならない」と、彼は恐ろしい宣告を下した（同 14：44）。 PP 325.4

サウルは、勝利の栄光を自分に帰することはできなかった。しかし、誓いの神聖さを保とうとする彼の熱意によって誉れを得ようと望んだ。彼は、自分のむすこを犠牲にしてでも、王の権威を保つべきであるということを国民に印象づけようとした。サウルは、この少し前に、ギルガルにおいて、差し出がましくも、神の命令に反して祭司の務めを行ったのであった。彼は、サムエルの譴責を受けると、頑強に自分を正当化した。ところが、彼の命令の違反者があれば、その命令が不合理で、しかも、知らずに犯したものであっても、王であり父であるサウルは、王子の死を宣告したのである。 PP 326.1

人々は、その宣告の執行を拒否した。彼らは、王の怒りを恐れずに言った。「イスラエルのうちにこの大いなる勝利をもたらしたヨナタンが死ななければならないのですか。決してそうではありません。主は生きておられます。ヨナタンの髪の毛ひとすじも地に落してはなりません。彼は神と共にきょう働いたのです」（同 14：45）。 PP 326.2

高慢な王は、この満場一致の裁決を無視することはできなかった。そして、ヨナタンは救われた。 PP 326.3

サウルは、王子が自分以上に神からも人々からも愛されていることを、感じないわけにいかなかった。ヨナタンが救われたことは、王の無分別に対するきびしい譴責であった。彼は、自分ののろいが自分の頭にかえってくるのを感じた。彼は、ペリシテ人との戦いを長く続けないで、ゆううつと不満のうちに家に帰った。 PP 326.4

すぐに自分の罪の言い訳をしたり、弁解をしたりする人は、他人をきびしくさばき非難する人でもある。多くの者は、サウルのように、神の不興を招くのであるが、勧告を拒み、譴責を軽蔑する。主が彼らと共におられないことが明らかになっても、悩みの原因が、自分たち自身にあったことを認めようとしない。彼らは、高慢で自負心をいだいている。その反面、彼らは、彼らよりも善良な他の人々を残酷にさばき、きびしく譴

責する。こうして、自分たちを裁判官の座にすわらせる人々は、次のキリストの言葉をよく考えるがよい。「あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」（マタイ７：2）。 PP 326.5

自己を高めようとする者は、その本性を暴露する立場に置かれることがよくある。サウルの場合もその通りであった。人々は、王が、正義、憐れみ、愛よりも、王の栄誉と権威を重んじたことを、彼自身の行動によってはっきりと知ることができた。こうして、人々は、神がお与えになった統治を拒否したことが誤りであったことを悟らされた。彼らは、彼らのために祝福を祈り求めた敬神深い預言者の代わりに、盲目的熱心さをもって祈り、彼らにのろいを下す王を選んだのであった。 PP 326.6

もし、イスラエルの人々が、ヨナタンを救うために介入しなかったならば、彼らの救済者は、王の命令によって殺されてしまったことであろう。その後、人々はどんな不安感をいだいて、王に従ったことであろう。人々は、彼ら自身がサウルを王位につけたことを、どんなに悲しんだことであろう。主は、人々の頑強さを長く忍ばれる。そして、すべての者に、罪を認めて悔い改める機会をお与えになる。神のみこころを無視し、神の警告を軽蔑する者は、栄えるように見えても、神がお定めになった時が来れば、必ずその愚かさをあらわすのである。 PP 326.7

第 61 章　サウル退けられる

本章は、サムエル記上 15 章に基づく PP 326.8

サウルは、ギルガルで難局に当面した時に、信仰の試練に耐えられずに、神の礼拝をはずかしめた。しかし、彼のまちがいは、取りかえしのつかないものではなかった。それで、主は、彼に再び機会を与えて彼が神のみことばを無条件に信じ、神の命令に従うという教訓を学ばせようとしておられた。 PP 326.9

サウルは、ギルガルで預言者から譴責された時に、自分の行為が、大きな罪であるとは思わなかった。彼は自分が不当な扱いを受けたと感じた。そして、自己の行為を正当化して過失の言い訳をした。彼は、このとき以来、預言者と交渉を持たなくなった。サムエルは、サウルをわが子のように愛していた。そして、サウルも大胆で気性は激しかったが、預言者を尊敬していた。しかし、彼は、サムエルの譴責に憤慨し、このとき以来できるだけ彼を避けた。 PP 327.1

しかし、主は、彼のしもべをつかわして、サウルにもう 1 つの使命をお与えになった。サウルは、服従することによって、神に対する忠誠とイスラエルを指導する彼の資格とをまだ証明することができた。サムエルは、王のところに来て、主の言葉を伝えた。サムエルは、命令に従うことの重要性を王に認めさせるために、神の権威すなわちサウルを王位につけたのと同じ権威によって語っていることを言明した。預言者は言った。「万軍の主は、こう仰せられる、『わたしは、アマレクがイスラエルにした事、すなわちイスラエルがエジプトから上ってきた時、その途中で敵対したことについて彼らを罰するであろう。今、行ってアマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼしつくせ。彼らをゆるすな。男も女も、幼な子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだも、ろばも皆、殺せ』」（サムエル記上 15：2、3）。アマレク人は、荒野でイスラエルに戦いをいどんだ最初の民族であった。この罪と彼らの神への反抗と彼らの堕落した偶像礼拝のゆえに、主は、モーセによって彼らに宣告を下された。神によって、彼らのイスラエルに対する残酷な歴史は記録され、「あなたはアマレクの名を天の下から消し去らなければならない。こ

の事を忘れてはならない」と命じられていた（申命記 25：19）。この宣告は、400 年の間執行が延ばされていた。しかし、アマレク人は、彼らの罪を離れなかった。この邪悪な民族は、もしできることなら、神の民と神の礼拝とを地上からぬぐい去ろうとしていたことを主は知っておられた。今、長く延期されていた宣告の執行の時が来ていた。 PP 327.2

神が悪人を長く忍ばれるために、人々は大胆に罪を犯す。しかし、長く延期されても、刑罰の確実なことと恐ろしさにはなんの変わりもない。「主はペラジム山で立たれたように立ちあがり、ギベオンの谷で憤られたように憤られて、その行いをなされる。その行いは類のないものである。またそのわざをなされる。そのわざは異なったものである」（イザヤ 28：21）。憐れみ深い神にとって、刑罰のわざは不思議な行為である。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ」（エゼキエル 33：11）。主は、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、……悪と、とがと、罪とをゆるす者」であるが、「罰すべき者をば決してゆるさ」ない（出エジプト 34：6、7）。神は刑罰を喜ばれないが、神の律法を犯す者には刑罰を与えられる。地の住民が全く腐敗して滅亡することを防ぐために、神はやむをえずこれをなさらなければならない。神は、いくらかの人々を救うために、罪にかたくなになった人々を滅ぼさなければならない。「主は怒ることおそく、力強き者、主は罰すべき者を決してゆるされない者」である（ナホム 1：3）。主は、義をもって恐ろしいことを行い、彼のふみにじられた律法の権威を擁護される。主が刑罰の執行を延ばしておられること自体が、神の刑罰を招いた罪の恐ろしさと、罪人に臨もうとする報復のきびしさを証明している。 PP 327.3

神は、刑罰を与えながらも、憐れみを忘れられない。アマレク人は、滅ぼされなければならなかったが、彼らの中に住んでいたケニ人は救われた。この人々は、偶像礼拝から全く離れてはいなかったが、真の神の礼拝者で、イスラエルの友であった。モーセの義理の兄弟ホバブは、この種族の出身で、荒野のことをよく知っていたので、イスラエル人の荒野の旅に同行して良い助言を与えた。 PP 327.4

サウルは、ミクマシで、ペリシテ人を滅ぼしてから、モアブ、アンモン、エドム、アマレク、ペリシテなどの国々と戦った。そして、彼の行くところ連戦連勝であった。彼は、アマレク人を撃滅する任命を受けるや いなやすぐに宣戦を布告した。彼自身の権力に預言者の権力も加えられた。そして、イスラエルの人々は、召集に応じて彼の旗のもとに集まった。この遠征は、自己誇張のために行われるものではなかった。イスラエルの人々は勝利の栄誉も敵のぶんどり物をも受けてはならなかった。彼らは、ただ、アマレク人に対する神の刑罰の執行のために、神に対する服従の行為として戦いに従事するだけであった。神は、すべての国々が、神の主権に逆らった国民の運命を見、彼らが軽蔑したその国自身に滅ぼされることを注目するように計画された。 PP 327.5

「サウルはアマレクびとを撃って、ハビラからエジプトの東にあるシュルにまで及んだ。そしてアマレクびとの王アガグをいけどり、つるぎをもってその民をことごとく滅ぼした。しかしサウルと民はアガグをゆるし、また羊と牛の最も良いもの、肥えたものならびに小羊と、すべての良いものを残し、それらを滅ぼし尽すことを好まず、ただ値うちのない、つまらない物を滅ぼし尽した」（サムエル記上 15：7～9）。 PP 328.1

アマレク人に対するこの勝利は、サウルのこれまでの勝利中の最大のものであった。そして、これは、彼にとって最も危険な誇りをふたたび燃え上がらせた。神の敵を全滅させよという神の命令は、部分的にしか行われなかった。サウルは、王を捕虜にして連れて帰り、凱旋の栄光を盛り上げるために、周囲の国々の習慣をまね、勇猛果敢なアマレクの王アガグを生かしておいた。人々は、羊と牛と家畜の最も良いものを残しておき、それらを主に犠牲として捧げるために保留したと彼らの罪の弁解をした。しかし、彼らは、自分たちの家畜の代わりに、これらを捧げようとしていたに過ぎなかった。 PP 328.2

サウルは、ここで、最後の試練に当面したのであった。彼は、神のみこころをあえて無視し、独立した王として国を治めようと決意したことを示したので、主の代表者として王権を委託されることができないことになった。サウルと彼の軍勢が、勝ち誇って帰途についたとき、預言者サムエルの家では大きな苦悩があった。彼は、王の行動を非

難した主からの言葉を聞いたのであった。「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」（同 15：11）。預言者は反逆した王の行為を深く悲しんだ。そして、彼は、この恐ろしい宣告の取り消しを求めて、一晩中泣いて祈った。 PP 328.3

神の悔いとは、人間の悔いのようなものではない。「イスラエルの栄光は偽ることもなく、悔いることもない。彼は人ではないから悔いることはない」（同 15：29）。人間の悔いは心の変化を言うのである。神の悔いは環境と関係の変化を意味する。人間は、神の恵みにあずかることのできる条件に応じることによって、彼の神との関係を変えることができる。それとも、自己の行為によって、恵まれた状態の圏外に自分を置くこともできる。しかし、主は、「きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」（ヘブル 13：8）。サウルの不服従は、彼の神との関係を変えた。しかし、彼が神に受け入れられる条件に変わりはなかった。神の要求は、なお、同じであった。神には、「変化とか回転の影とかいうものはない」のである（ヤコブ 1：17）。 PP 328.4

翌朝、預言者は、悲痛な思いをいだいて、誤った王に会うために出かけた。サムエルは、サウルが自分の罪を認め、悔い改めて心を低くして、神の恵みにふたたびあずかるようになることを希望していた。しかし罪の道に 1 歩踏み込めばその先はやさしい。不服従によって心がゆがんだサウルは、サムエルに会いに来て偽りを言った。彼は、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」と叫んだ（サムエル記上 15：13）。 PP 328.5

預言者の耳に聞こえた音は、不服従な王の言葉が偽りであることを証明した。「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声と、わたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」と鋭く質問されて、サウルは言った。「人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民は、あなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」（同 15：14、15）。人々 は、サウルの命令に従ったのであったが、サウルは自分を弁護するために、その不服従の罪を彼らのせいにしてしまった。 PP 328.6

神がサウルを拒否されたというお告げば、サムエルの心に、口では表現できない悲しみを与えた。この言葉はイスラエルの全軍の前で言わなければならなかった。しかも彼らが誇りと凱旋の喜びに満ち、勝利を王の勇気とその指揮に帰している時においてであった。サウルはこの戦いにおいてイスラエルが勝利したことは、神の助けによるものであることを認めていなかった。しかし、預言者は、サウルの反逆の証拠を見た時に、彼が、神の大いなる恵みにあずかっていながら、天の神の律法を破り、イスラエルを罪に陥れたことに激しい怒りを感じるのであった。サムエルは、王の口実にまどわされなかった。悲しみに怒りを混じえて、彼は言った。「おやめなさい。昨夜、主がわたしに言われたことを、あなたに告げましょう。……たとい、自分では小さいと思っても、あなたはイスラエルの諸部族の長ではありませんか。主はあなたに油を注いでイスラエルの王とされた」と（同 15：16、17）。預言者は、アマレクに対する主の命令をくりかえし、王の不服従の理由をたずねた。 PP 329.1

サウルは自分を弁護し続けた。「わたしは主の声に聞き従い、主がつかわされた使命を帯びて行き、アマレクの王アガグを連れてきて、アマレクびとを滅ぼし尽しました。しかし民は滅ぼし尽すべきもののうち最も良いものを、ギルガルで、あなたの神、主にささげるため、ぶんどり物のうちから羊と牛を取りました」（同 15：20、21）。 PP 329.2

預言者は、鋭く、きびしい言葉で、こうした偽りの口実を払いのけて、取り消すことのできない宣告を下した。「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである。あなたが主のことばを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」（同 15：22、23）。 PP 329.3

この恐ろしい宣告を聞いて、王は叫んで言った。「わたしは主の命令とあなたの言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従ったからです」（同 15：24）。サウルは、預言者の告発に震えおののいてこれまで頑強に拒否していた罪を認

めた。しかし、彼は、なお罪を犯したのは、人々を恐れたからであると言って民を非難していた。 PP 329.4

イスラエルの王は、罪を悲しんだためではなくて、刑罰を恐れたために、サムエルに嘆願して言った。「どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拝ませてください」（同 15：25）。もし、サウルが真に悔い改めていたならば、彼は、自分の罪を公に告白していたことであろう。しかし、彼は、自分の権威を保ち、民の忠誠を保持することをまず第一に考えていた。彼は、自分の国民に与える影響を強化するために、サムエルが臨席してくれることを希望した。 PP 329.5

預言者は答えて言った。「あなたと一緒に帰りません。あなたが主の言葉を捨てたので、主もあなたを捨てて、イスラエルの王位から退けられたからです」（同 15：26）。こうして、サムエルが去ろうとすると、王は、震えおののき、彼の上着をつかまえて引きもどそうとしたところ、それは裂けてしまった。そこで預言者は言った。「主はきょう、あなたからイスラエルの王国を裂き、もっと良いあなたの隣人に与えられた」（同 15：28）。 PP 329.6

サウルは、神の不興を招いたことよりは、サムエルから見捨てられることのほうが、さらに不安であった。彼は、人々が自分よりは預言者をはるかに信頼していることを知っていた。今、神の命令によって他の者が王として油を注がれるならば、自分の権威を維持することはできないとサウルは考えた。もしサムエルが彼を全く見捨ててしまうならば、すぐに反乱が起こるのではないかと彼は恐れた。サウルは、預言者が彼と共に公に宗教的儀式を行い、人々と長老たちの前で、彼に栄誉を帰してくれることを懇願した。サムエルは、神の指示に従って王の願いを聞き入れた。それは、反乱を引き起こさないためであった。しかし、 彼は、ただ黙って礼拝を見守っているだけであった。 PP 329.7

きびしく、恐ろしい法的行為が、まだ行われなければならなかった。サムエルは、公に神の栄光を擁護し、サウルの行為を譴責しなければならなかった。サムエルは、アマレクの王を、彼の前に連れ出すことを命じた。アガグは、これまでイスラエルの剣に倒れたすべての人々にまさって最も罪深く、残酷な人間であった。彼は、神の民を憎ん

で滅ぼそうとし、偶像礼拝を強力に押し進めた。彼は、預言者の命によって引き出されて、死め苦しみは、もう過ぎ去ったと思って喜んだ。サムエルは言った。「『あなたのつるぎは多くの女に子供を失わせた。そのようにあなたの母も女のうちで最も無惨に子供を失う者となるであろう』。サムエルはギルガルで主の前に、アガグを寸断した」（同 15：33）。こうしてサムエルは、ラマの彼の家に帰り、サウルはギベアの彼の家に帰った。このとき以来、預言者と王が顔を合わせたのはただ 1 度だけであった。 PP 330.1

サウルは、王位に召されたとき、自分自身の力量について謙遜な考えを持ち、教えを受ける気持ちが十分にあった。彼は、知識も経験も乏しく、品性の重大な欠陥を持っていた。しかし、主は聖霊を指導者また援助者として彼に与え、イスラエルの支配者として必要な特質を伸ばすことができる地位に彼をおかれた。もしも、彼が謙遜で、常に神の知恵を仰ぎ求めていたならば、その高い地位における任務を果たして成功を収め、栄誉にあずかることができたことであろう。神の恵みの力によってすべてのよい特質は強められ、悪い傾向は、その力を失っていくのであった。こうしたことは、主に献身するすべての者のために、主がしようとしておられることである。謙遜で教えを受ける精神を持っているために、神の働きの中の種々の地位に召される人々が多くある。神は、み摂理のうちに、彼らを、神について学ぶことができるところにおかれる。神は、品性の欠点を彼らに示される。そして、神は、助けを求めるすべての人々に、彼らの誤りに打ち勝つ力をお与えになる。 PP 330.2

しかし、サウルは、彼の高い地位に心がおごり、不信と不服従によって、神のみ栄えを汚した。彼は、最初王位に召されたときには、謙遜で自己の力にたよっていなかったが、成功するにつれて、自己過信に陥った。彼の治世の 1 番最初の勝利が、心の誇りを燃え立たせて、彼を最大の危険に陥れた。ヤベシギレアデの救出に当たってあらわされた彼の勇気と軍事的技量は、全国民を熱狂させた。人々は、王に栄誉を帰し、王が単に神に用いられた器に過ぎないことを忘れた。サウルは初めのうちは神に栄光を帰したが、あとになってからは、それを自分の栄誉に帰した。彼は自分が神に依存していることを忘れ、主から離れていった。こうして彼が、ギルガルで不遜と冒瀆の罪を犯す素

地がつくられていったのである。同様の盲目的自己過信が、サムエルの譴責を彼に拒否させるに至ったのである。サウルは、サムエルが神からつかわされた預言者であることを知っていた。であるから、彼は、自分では罪を犯したような気がしなくても、その譴責を受け入れるべきであった。もし彼が快く自分の誤りを認めて告白したならば、この苦い経験は、将来の安全を守るものとなったことであろう。 PP 330.3

もし主が、このときサウルから全く離れてしまわれたならば、彼の預言者を通じて、ふたたび彼に語りかけることもなく、一定の務めをなすことを彼にゆだねて、過去の過失を正させようとはなさらなかったことであろう。自分は、神の子であるととなえているものが、神のみこころを行うことをなおざりにし、そのために、人々に主の戒めに対する不敬と冷淡の念をいだかせることもあろう。しかし、彼が真に悔い改めて譴責を受け入れ、謙遜と信仰によって、神に立ち帰るならば、彼は、失敗を勝利に変えることができる。敗北の恥辱は、われわれに神の助けがなければ神のみこころを行う力がないことを示して、祝福となることがよくある。 PP 330.4

サウルは、聖霊によって与えられた譴責を拒否し、頑強に自分を弁護し続けたとき、自我から彼を救うことができる神の唯一の方法を拒否したのであった。彼は、故意に神から離反した。罪を告白して、神に立ち帰るのでなければ、神の助けも導きも受けることは できなかった。 PP 330.5

サウルは、ギルガルでイスラエルの軍隊の前に立って犠牲を捧げたとき、非常に良心的にふるまった。しかし、彼の敬神は純粋ではなかった。神の命令に真正面から反対して行った宗教の儀式は、ただサウルの手を弱め、神が彼に与えようとされた援助を受けられなくしただけであった。 PP 331.1

サウルはアマレクの遠征に関して、主が彼に命じられた重要なことは、皆、行ったと考えた。しかし、主は部分的服従を喜ばれず、もっともらしい動機によって彼がおろそかにしたことを、不問に付されないのである。神は、人間が神の要求にそむく自由を与えておられない。主は、イスラエルに言われた。「めいめいで正しいと思うようにふるまってはならない。……あなたはわたしが命じるこれらの事を、ことごとく聞いて守らなければならない」（申命記 12：8、28）。どんな行為の決定に当たっても、われ

われは、その結果が有害かどうかではなくて、それが神のみこころにかなっているかどうかをたずねなければならない。「人が見て自ら正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」（箴言 14：12）。 PP 331.2

「従うことは犠牲にまさり」（サムエル記上 15：22）。犠牲の捧げ物は、ただそれだけでは、神の前になんの価値もない。それは、犠牲を捧げる者が、罪の悔い改めとキリストを信じる信仰を表し、将来神の律法に従うことを約束することを表すためのものであった。しかし、悔い改めと信仰と服従心がないならば、捧げ物に価値はない。サウルは、神の命令に真正面から反逆して、神が滅ぼせと言われたものを捧げ物にしようとした時に、彼は、公然と神の権威を軽蔑した。儀式は、天の神に対する侮辱であった。それなのにサウルの罪とその結果を眼前に見ながら、なんと多くの者が同じ道を歩いていることであろう。彼らは、主の要求の一部を信じて従うことを拒んでいるにもかかわらず、形式的な礼拝は熱心に続けている。こうした礼拝には、神の霊の応答がない。もし人々が、神の戒めの 1 つを故意に犯し続けているならば、彼らがどんなに熱心に宗教的な儀式を守ったとしても、主は、それをお受けになることができない。 PP 331.3

「そむくことは占いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである」（同 15：23）。反逆の創始者はサタンである。神に対する反逆は、すべてサタンの直接の影響によるものである。神の統治に反逆する者は、大反逆者と同盟を結んだのである。そして、彼は、人々を魅惑して理解を誤らせるために、その能力と技能を働かせる。彼は、すべてのものを虚偽で彩る。彼の魔力に惑わされたものは、われわれの先祖と同様に、罪によって得ることができる大きな利益のことしか考えない。 PP 331.4

サタンの欺瞞の力は、実に強力で、彼に従う多くの者が、実際に神に仕えていると思い込んでしまうほどである。コラ、ダタン、アビラムがモーセの権威に逆らったとき、彼らは、自分たちと同様の人間的指導者に反対していると考えた。そして、彼らは、真に神のために働いていると信じこんだ。しかし、彼らは神が選ばれた器を拒むことによってキリストを拒んだ。彼らは、神の霊を侮辱した。そのように、キリストの時代の学者や長老たちは、神のみ栄えに対する非常な熱意を持っていると言いながら、キリスト

を十字架につけた。神のみこころにそむいて、自分の意志に従おうとする者の心に、同じ精神が宿っている。 PP 331.5

サウルは、サムエルが神の霊感を受けたことについての十分な証拠を与えられていた。彼が預言者によって与えられた神の命令を彼があえて無視したことは、理性と健全な判断の命じることにそむいていた。彼の致命的不遜な態度は、サタンの魔術のためであったに違いない。サウルは、非常な熱心さをもって偶像礼拝と魔術とを禁止した。それにもかかわらず、彼は、神に対抗する同様の精神に支配されて、神の命にそむき、魔術を行う人々と同様に、実際にサタンの力に動かされていた。彼は譴責された時に、反逆に強情の罪も加えた。彼がたとえ公然と偶像礼拝に加わったとしても、神の霊をこれ以上侮辱することはできなかった。 PP 331.6

神の言葉、または聖霊の譴責と警告を軽んじることは危険なことである。多くの者は、サウルのように 誘惑に負けて目がくらみ、罪のほんとうの性質がわからなくなってしまう。彼らは、有意義な目標をめざしているという自負心をいだいていて、神の要求から離れても悪を行ったとは思っていない。こうして、彼らは恵み深い霊を軽んじて、ついにその声を聞くことができなくなって、自分たちの選んだ欺瞞の中に取り残されてしまう。 PP 331.7

神は、人々が望んだ通りの王サウルをイスラエルにお与えになった。サムエルは、ギルガルでサウルを王に立てて言った。「それゆえ、今あなたがたの選んだ王、あなたがたが求めた王を見なさい」（同 12：13）。彼は眉目秀麗で背が高く、風采がりっぱであったので、彼の外観は、人々の王に対する期待にかなっていた。そして、彼の勇気と軍隊を指揮する能力とは、他国の尊敬と誉れとを得るために何よりもたいせつなものであると彼らが考えた特質であった。彼らは、王が正義と公平とをもって、国を治めるためには、不可欠のより高尚な特質を持っているかどうかは少しも考えなかった。彼らは真に品性の気高い人、神を愛しおそれる人を求めなかった。彼らは、神の特選の民としての独特の清い生活を保つために、支配者が持つべき特質について、神の勧告を仰がなかった。彼らは、神の望まれることではなくて、自分たちのしたいことをしようとしていた。であるから、神は、彼らが求めたような王を彼らに与え、彼らと同じ品性の持

ち主をお与えになった。彼らの心は、神に従っていなかった。そして、彼らの王もまた、神の恵みに従っていなかった。彼らは、この王の支配下にあって、自分たちの誤りを認め、神に忠誠を尽くすようになるために必要な経験を得るのであった。 PP 332.1

しかし、主は、サウルに王国の責任を負わせられたので、彼をそのまま放任なさらなかった。神は、サウルに聖霊を与えて、彼の弱さと神の恵みの必要をあらわされた。だから、サウルが神に信頼したならば、神は、彼と共におられるのであった。彼の意志が神のみこころに支配されているかぎり、そして、彼が霊の訓練に服するかぎり、神は、サウルの努力を成功させられるのであった。しかし、サウルは、神を度外視して行動した時に、主は彼を指導することができなくなり、彼を捨てられたのである。そのとき、「主は自分の心にかなう人」を王位に召された（同 13：14）。彼は、品性の欠点がなかったわけではなかった。しかし、彼は自己にたよる代わりに神にたより、神の霊に導かれるのであった。彼は、罪を犯した時には、譴責とこらしめに従うのであった。 PP 332.2

第 62 章　ダビデ油を注がれる

本章は、サムエル記上 16：1～13 に基づく PP 332.3

「大いなる王の都」（詩篇 48：2）エルサレムの南方、数マイル離れたところにベツレヘムがある。幼子イエスが飼い葉おけに寝かされ、東方から来た博士たちの礼拝を受けられた時から、1000 年以上もさかのぼった昔、ここでエッサイの子ダビデが生まれた。救い主降誕の何世紀も前に、活気に満ちた少年ダビデは、ベツレヘムのまわりの山々で、草を食べる羊の番をしていた。純朴な羊飼いの少年は、自分の作った歌をうたい、その新鮮で若々しい歌の調べに合わせてたて琴をかきならすのであった。主は、ダビデを選び、羊飼いの孤独な生活の中にあって、後年彼に委ねようと計画された任務に対する準備をさせておられた。 PP 332.4

こうして、ダビデが人里離れて身分の低い羊飼いの生活を送っていた時に、主なる神は、彼について預言者サムエルに語られた。「さて主はサムエルに言われた、『わたしがすでにサウルを捨てて、イスラエルの王位から退けたのに、あなたはいつまで彼のために悲しむのか。角に油を満たし、それをもって行きなさい。あなたをベツレヘムびとエッサイのもとにつかわします。わたしはその子たちのうちにひとりの王を捜し得たからである』。……『1 頭の子牛を 引いていって、「主に犠牲をささげるためにきました」と言いなさい。そしてエッサイを犠牲の場所に呼びなさい。その時わたしはあなたのすることを示します。わたしがあなたに告げる人に油を注がなければならない』。サムエルは主が命じられたようにして、ベツレヘムへ行った。町の長老たちは、恐れながら出て、彼を迎え、『穏やかな事のためにこられたのですか』と言った。サムエルは言った、『穏やかな事のためです』」（サムエル記上 16：1～5）。長老たちは、犠牲の場への招待を受け入れた。そして、サムエルは、エッサイとそのむすこたちも招いた。祭壇が築かれ、犠牲が用意された。そこには羊のるす番をさせられた一番年下のダビデを除いて、エッサイの全家が集まっていた。羊を見張っていないと危険だったからである。 PP 332.5

犠牲を捧げ終わって、一同が供え物のふるまいにあずかるに先立ち、サムエルは堂々たる外見をしたエッサイのむすこたちを預言者の目で見始めた。最年長のエリアブは、背の高さといい美しさといい、他のだれよりもサウルに似ていた。彼の顔かたちとよく発達した体格は預言者の注目をひいた。彼の貴公子のような姿を見たサムエルは、「この人こそ、神がサウルの後継者として選ばれた人だ」と思った。そして、彼は、この人に油を注ぐようにという神のゆるしを待った。ところが主は、外観を見られなかった。エリアブは、主をおそれなかった。もしも彼が王位に召されたならば、高慢で苛酷な支配者になったことであろう。主は、サムエルに言われた。「顔かたちや身のたけを見てはならない。わたしはすでにその人を捨てた。わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」（同 16：7）。顔かたちが美しいからといって、神によく思われることはできない。品性と行為にあらわれる知恵と美徳が、人間の真の美を表現する。内面の価値と心の卓越性とが、万軍の主に受け入れられるかいなかを決定するものである。われわれは、自己、または、他人を評価するに当たって、この事実を深く感じなければならない。顔の美しさや姿の気高さによる評価が当てにならないことを、サムエルの失敗から学ばなければならない。天からの特別の光を受けなければ、われわれは人間の知恵では、人の心の秘密も、神の勧告も理解することができないことを悟るのである。被造物に対する神の思いと方法とは、われわれの有限な心の思いを越えている。しかし、もし、神の子供たちが、人間の曲がった心によって神の恵み深い計画を無にしないように心がけ、その意志を神に従わせていさえすれば、彼らは、必ずそれぞれの力量に応じた地位を占め、彼らに委ねられた任務を完成することができるのである。 PP 333.1

エリアブは、サムエルの検査を受けて立ち去り、礼拝に出ていた 6 人の兄弟たちも次々と預言者に観察されたのであるが、主は、その中からはだれもお選びにならなかった。サムエルは、不安に心を痛めながら若者たちの最後の人を見た。預言者は、全く途方にくれた。彼は、エッサイに尋ねた。「あなたのむすこたちは皆ここにいますか」。父は答えた、「まだ末の子が残っていますが羊を飼っています」。サムエルは、彼を呼

んでくるように指示して、「彼がここに来るまで、われわれは食卓につきません」と言った（同 16：11）。 PP 333.2

1 人で羊を飼っていたダビデは、預言者がベツレヘムに来て彼を呼んでいるという、使いの者の不意の招きに驚いた。彼は、イスラエルの預言者であり士師であるサムエルが、なぜ自分に会いたいのだろうかと、驚いてたずねた。しかし、彼は、すぐに招きに応じた。「彼は血色のよい、目のきれいな、姿の美しい人であった」。サムエルは、このりっぱで男らしい謙遜な羊飼いの少年を満足げに見ていた。すると、主は預言者に、「立ってこれに油をそそげ。これがその人である」と言われた（同 16：12）。ダビデは、羊飼いの日常の仕事をしながら、勇敢さと忠実さを実証した。そこで、神は、彼を神の民の指導者に選ばれたのである。「サムエルは油の角をとって、その兄弟たちの中で、彼に油をそそいだ。この日からのち、主の霊は、はげしくダビデの上に臨んだ」（同 16：13）。預言者は、委ねられた務めを果たして安心して ラマへ帰った。 PP 333.3

サムエルは、エッサイの家族にさえ、彼が来た用向きを知らせなかった。そして、ダビデに油を注ぐ式は、秘密のうちに行われた。これは若者に大きな運命が待っていることを暗示した。このことは、後になって、彼があらゆる種類の経験や危険にあいながらも、彼の生涯によって神が成し遂げようとされた神のみこころへの忠誠を彼に促すためであった。 PP 334.1

ダビデには大きな栄誉が与えられたが、高慢にならなかった。彼は、高い地位に就くことになったが、静かに自分の職業を続け、主が、ご自身の時と方法によって主の計画を進められるのを待って満足していた。羊飼いの少年は、油を注がれる前と同じ謙遜な気持ちで、山にもどって、以前と同様に羊の群れをやさしく見守り保護した。しかし、彼は新しく霊感を受けて曲を作り、たて琴をかなでた。彼の前には、豊かで種々さまざまの美に満ちた景色が展開された。ふさふさと実をつけたぶどうの木が、日の光に輝いていた。青葉をつけた森の木々がそよ風に揺れていた。花婿がその祝いの部屋から出てくるように、また勇士が競い走るように、太陽があかあかと空に輝いて昇ってくるのを彼は見た。また、空高くそびえ立つ山々の頂があった。はるか遠方には、モアブの不毛

の山々のがけが、壁のように連なっていた。こうしたすべてのものの上に澄みきった青空が広がっていた。そして、その向こうに神がおられた。彼は、神を見ることはできなかった。しかし、神が造られたものは神に対する賛美にあふれていた。太陽の光は、森や山、野や小川を照らし、あらゆるよい贈り物、あらゆる完全な賜物の与え主である光の父を心に思わせた。 PP 334.2

日ごとに創造主の品性と威光の啓示に接した若い詩人の心は、賛美と歓喜に満たされた。ダビデの心の能力は、神と神のみわざを瞑想しているうちに、彼の将来の仕事のために啓発され強められた。彼は、日ごとに神と深く交わった。彼の心は、常に彼の歌に霊感を与え、彼のたて琴にメロディーを呼び起こす新しい主題を、深くさぐっていた。彼の豊かな歌の調べは、天の使いたちの歓喜の歌に応じるかのように、空気をふるわせ、山々に反響した。 PP 334.3

いったい誰がこうした寂しい山の中の長年の苦労と放浪の結果を知ることができよう。自然と神との交わり、羊たちの世話、危険と救出、悲哀と歓喜、低い境遇などは、ダビデの品性を形成し、彼の後の生涯に影響を与えただけではなかった。それは、イスラエルの美しい詩人の詩篇として書き残されて、その後のすべての時代の神の民の心に愛と信仰を呼び起こし、すべての被造物に命を与えられた主の愛の心に、彼らを近づけているのである。 PP 334.4

青春の美と活気に満ちていたダビデは、地の高貴な人たちと同じ高い地位に就く準備をしていた。彼の才能は、神からの尊い賜物として、与え主であられる神の栄光を賛美するために用いられた。彼の熟考と瞑想の機会は、彼の知恵と敬神の念をいよいよ豊かにし、彼を神と人から愛される者にした。彼は、創造主の完全さを瞑想することによって、神のことをはっきりと理解することができたのである。不明瞭な問題は明らかにされ、困難なことは平易にされ、混乱の中に調和が見いだされていき、新しい光が与えられるたびに、彼は歓喜の声をあげ、神と贖い主の栄光に対して美しい献身の歌をうたった。彼を感動させた愛、彼を悩ました悲哀、彼の得た勝利などは、みな、彼の活発な心の主題であった。そして、彼が自分の生涯のすべての摂理の中に、神の愛をながめたとき、彼の心は熱烈な賛美の感謝に脈打ち、彼の口からはさらに美しい旋律が流れ、た

て琴は歓喜にあふれてかきならされた。こうして、羊飼いの少年は、力から力へ、知識から知識へと進んでいった。それは、神の霊が彼と共におられたからである。 PP 334.5

第 63 章　ダビデとゴリアテ

本章は、サムエル記上 16：14～23、17 章に基づく PP 335.1

サウル王は、自分が神に拒否されたことを認めた。そして、預言者が彼に対して言った非難の言葉の力強さを感じた時に、彼は、激しい反逆と絶望感に満たされた。高慢な王を屈服させたのは、真の悔い改めではなかった。彼は、自分の罪の憎むべき性質を明らかに悟らなかった。そして、自分の生活の改革に努力しようとはせずに、イスラエルの王座から彼を追い、継承権を彼の子孫から奪ったことを、彼は神の不法行為であると考えて憂いに沈んだ。彼は、自分の家にもたらされる破滅のことばかり考えていた。彼は、自分が敵と戦った時にあらわした勇気が、不服従の罪を償うものと考えた。彼は、心を低くして、神の懲らしめを受け入れなかった。しかし、彼の高慢な心は絶望的になり、今にも理性を失いそうになった。王の家来たちは、美しい楽の音によって王の心の悩みを和らげようとして、巧みに音楽を奏する者を捜し出すように勧告した。ダビデは琴をひくことが巧みであったので、神の摂理によって王の前に召し出された。天の霊感による彼の気高い旋律は、期待したとおりの効果があった。黒雲のようにサウルの心をおおった陰うつさが、不思議にも取り除かれた。 PP 335.2

ダビデは、サウルの宮廷の務めがないときには、高原の自分の羊群のところへ帰って、彼の心と態度の単純さを持ち続けていた。彼は、必要なときには、いつでも王の前に召し出されて、悪霊が王を去るまで彼の悩む心をなだめるのであった。サウルは、ダビデと彼の音楽を楽しんでいるけれども、若い羊飼いは王宮から自分の牧場のある野や山へ帰って、ほっとしたうれしさを味わうのであった。 PP 335.3

ダビデは、ますます神と人から愛された。彼は、主の道を歩くように教えられていたが、ここで、これまで以上にもっと神のみこころを行おうと決心した。彼は、新しい主題について考えていた。彼は、王の宮廷に出入りして、王の責任がどんなものであるかを悟った。彼は、サウルの魂を悩ます誘惑を見いだし、イスラエルの最初の王の性格と行状の秘密を見抜いた。彼は、王の栄光が悲哀の暗雲におおわれるのを見、サウルの

一族の家庭生活が、幸福なものでないことを知った。イスラエルの王として油を注がれたダビデにとって、こうしたことはすべて心配の種であった。しかし、彼は、物思いに沈み、心が苦しくなると、琴をかきならしてすべての良い物の与え主であられる神のことを考えるのであった。こうして、彼の将来をかげらせるように思えた暗黒が消えるのであった。 PP 335.4

神は、ダビデに信頼という教訓を与えておられた。主は、モーセをその任務のために訓練されたように、エッサイのむすこに神の選民の指導者になる準備を与えておられた。彼は、自分の羊群の世話をしながら、偉大な牧者であられる主が、彼の牧場の群れを養われることを理解した。 PP 335.5

ダビデが、羊群を連れて放浪した寂しい山や険しい谷間には、野獣が横行していた。ヨルダンの茂みからライオンが出てきたり、山のほら穴から腹をへらして獰猛になった熊が出てきて、羊群を攻撃することもよくあった。ダビデがそのころの習慣に従って持っていた武器は、石投げと羊飼いの杖だけであった。しかし、彼は、早くから委ねられたものを保護する能力と勇気を持っていたことを示した。後に彼は、こうした出来事について言った。「しもべは父の羊を飼っていたのですが、しし、あるいはくまがきて、群れの小羊を取った時、わたしはそのあとを追って、これを撃ち、小羊をその口から救いだしました。その獣がわたしにとびかかってきた時は、ひげをつかまえて、それを撃ち殺しました」（サムエル記上 17：34、35）。ダビデは、こうした経験にあってその心がためされ、勇気と堅忍不抜の精神と信仰とが強められていった。 PP 335.6

ダビデは、サウルの宮廷に召される以前から、勇敢な行動によって頭角を現していた。彼を王のところに連れてきた士官は、彼のことを「勇気もあり、いくさびとで、弁舌にひいで、……また主が彼と共にお られます」と言った（同 16：18）。 PP 335.7

イスラエルがペリシテ人に宣戦を布告したとき、エッサイの 3 人のむすこたちは、サウルの軍に加わった。しかし、ダビデは、家に残っていた。ところが、しばらくたって、ダビデはサウルの陣営をたずねた。彼は、父の命によって、兄たちのところへ伝言と贈り物を持っていき、彼らが安全で元気かどうかを見とどけてくることになった。父のエッサイには、何もわからなかったが、年若い羊飼いには、さらに大きな任命が託さ

れていたのである。イスラエル軍は危機にひんしていた。そして、ダビデは、自分の国を救うために天使に導かれていたのである。 PP 336.1

ダビデが軍隊に近づくと、今にも戦いが始まるような騒がしい物音がした。「軍勢は、ときの声をあげて戦線に出ようとしていた」（同 17：20）。イスラエル人とペリシテ人とは戦列を敷いて両軍が向き合っていた。ダビデは、兄たちのところへ走っていって、彼らの安否を尋ねた。彼が兄たちと話していると、ペリシテ人の勇士ゴリアテが現れ、無礼な言葉でイスラエルに戦いをいどみ、彼と一騎打ちをする者を出せと言った。彼は、くりかえして戦いをいどんだ。ダビデは、すべてのイスラエル人が恐怖に満ちているのを見た。そして、ペリシテ人の挑戦を毎日耳にしながらも、誰一人高慢なゴリアテを沈黙させる勇士が現れないのを知って、ダビデは奮起した。彼は、生ける神の誉れと神の民の名誉を保つ熱心に燃え立った。 PP 336.2

イスラエルの軍勢は、意気消沈していた。彼らは望みを失っていた。彼らは互いに言った。「あなたがたは、あの上ってきた人を見たか。確かにイスラエルにいどむために上ってきたのだ」（同 17：25）。ダビデは、恥と怒りをいだいて叫んだ、「この割礼なきペリシテびとは何者なので、生ける神の軍をいどむのか」（同 17：26）。 PP 336.3

ダビデの一番上の兄のエリアブは、彼のこの言葉を聞いて、若者が何を感じ、何に心を動かされているのかを知った。ダビデは、羊飼いをしている時でさえ、まれに見る勇気と力を表した。また、サムエルが彼らの父の家を訪れ、黙って帰っていったので、いったい彼はなんのために来たのかという疑念を兄弟たちにいだかせた。彼らは、ダビデがほかの者よりも栄誉を受けたのを見て、彼をねたみ、彼の誠実さと柔和な気持ちに対して、当然払うべき尊敬と愛を示さなかった。彼らは、ダビデを年若い羊飼いにすぎないと考えた。そしてエリアブは、この質問をペリシテの巨人を沈黙させるために何もしない自分の臆病に対する非難であると取ったのである。兄は、怒って言った。「なんのために下ってきたのか。野にいるわずかの羊はだれに託したのか。あなたのわがままと悪い心はわかっている。戦いを見るために下ってきたのだ」（同 17：28）。ダビデ

は、尊敬と堅い決心をもって答えた。「わたしが今、何をしたというのですか。ただひと言いっただけではありませんか」（同 17：29）。 PP 336.4

ダビデの言葉は王に伝えられて、王は、彼を召し寄せた。「だれも彼のゆえに気を落してはなりません。しもべが行ってあのペリシテびとと戦いましょう」という羊飼いの言葉を聞いて王は驚いた（同 17：32）。サウルは、ダビデの企てを思いとどまらせようとしたが、彼は動かなかった。彼は、父の羊群を守っていた時に起こったことを簡単に飾らずに話した。「『ししのつめ、くまのつめからわたしを救い出された主は、またわたしを、このペリシテびとの手から救い出されるでしょう』。サウルはダビデに言った、『行きなさい。どうぞ主があなたと共におられるように』」（同 17：37）。 PP 336.5

イスラエルの軍勢は、40 日間もペリシテの巨人の傲慢な挑戦に震えていた。彼らは、身のたけが 6 キュビト半（約 3 メートル）もある巨大な姿を見ておじけづいた。彼は頭に青銅のかぶとをかぶり、身には重さ 5000 シケルのよろいを着ていた。また足には青銅のすね当てを着けていた。このよろいは、青銅の板をうろこのように重ねたもので、どんなやりや矢も通さないように細かく結び合わされていた。巨人は、肩には青銅の投げやりを背負っていた。「手に持っているやりの柄は、機の巻棒のようであり、やりの穂の鉄は 600 シケルであった。彼の前には、盾を執 る者が進んだ」（同 17：7）。 PP 336.6

ゴリアテは、朝夕、イスラエルの陣営に近づいて、大声で言った。「『なにゆえ戦列をつくって出てきたのか。わたしはペリシテびと、おまえたちはサウルの家来ではないか。おまえたちから、ひとりを選んで、わたしのところへ下ってこさせよ。もしその人が戦ってわたしを殺すことができたら、われわれはおまえたちの家来となる。しかしわたしが勝ってその人を殺したら、おまえたちは、われわれの家来になって仕えなければならない』。またこのペリシテびとは言った、『わたしは、きょうイスラエルの戦列にいどむ。ひとりを出して、わたしと戦わせよ』」（同 17：8～10）。 PP 337.1

サウルは、ダビデがゴリアテの挑戦を受けることを許したけれども、ダビデがこの勇敢な企てに成功するとはとうてい望めなかった。若者に、王自身のよろいを着せるよ

うに命令が出された。青銅の重いかぶとが彼の頭にかぶせられ、彼の体にはよろいが着せられた。また、王のつるぎも帯びさせられた。こうして、彼は武具を整えて戦いに出かけたのであるが、まもなく引き返してきた。初めかたずをのんで見ていた人々は、ダビデがとうてい勝ちめのない大敵に手向かって命を捨てるのをやめたのだと思った。しかし、勇敢な青年は、それとは全く別のことを考えていた。彼は、サウルのところにもどってきて、重い武具を脱がせてほしいと願って言った。「わたしはこれらのものを着けていくことはできません。慣れていないからです」（同 17：39）。彼は、王のよろいを脱ぎ、ただ羊飼いのつえと袋と簡単な石投げを持って行っただけであった。彼は、谷間からなめらかな石を 5 個選んで持っていた袋に入れ、手に石投げを持ってペリシテ人に近づいた。巨人は、イスラエルの最も強い勇士と対戦することを期待して、大またに進んできた。盾を執る者が彼の前に進んだ。彼に対抗することができる者は、誰もいないように思われた。彼が、ダビデに近づいてみると、ダビデはまだ若々しい少年にすぎないことがわかった。ダビデの顔は健康で血色がよく、彼のよろいを着ていない体は、がっちりしていて身軽で有利にみえた。しかし、若々しいダビデの姿と、ペリシテ人の巨大な体格とは、著しい対照であった。 PP 337.2

ゴリアテは、驚きと怒りに満ちた。「つえを持って、向かってくるが、わたしは犬なのか」と彼は叫んだ（同 17：43）。そして、彼は、自分の知っているすべての神々の名によって、恐ろしいのろいの言葉をダビデに浴びせた。彼は、あざわらって叫んだ。「さあ、向かってこい。おまえの肉を、空の鳥、野の獣のえじきにしてくれよう」（同 17：44）。 PP 337.3

ダビデはペリシテ人の勇士の前に、ひるまなかった。彼は進みよって敵に言った。「おまえはつるぎと、やりと、投げやりを持って、わたしに向かってくるが、わたしは万軍の主の名、すなわち、おまえがいどんだ、イスラエルの軍の神の名によって、おまえに立ち向かう。きょう、主は、おまえをわたしの手にわたされるであろう。わたしは、おまえを撃って、首をはね、ペリシテびとの軍勢の死かばねを、きょう、空の鳥、地の野獣のえじきにし、イスラエルに、神がおられることを全地に知らせよう。またこの全会衆も、主は救を施すのに、つるぎとやりを用いられないことを知るであろう。この戦

いは主の戦いであって、主がわれわれの手におまえたちを渡されるからである」（同17：45～47）。 PP 337.4

彼の語調には豪胆さの響きがあり、彼の立派な面持ちには、勝利と歓喜の色があった。よく通る音楽のような声で語られたこの言葉は、空に鳴り響き、戦いに召集された幾千の者にはっきりと聞きとれた。ゴリアテの怒りはその極に達した。彼は激しい怒りに燃えて、彼のひたいを保護していたかぶとを押し上げて、敵に恨みを晴らそうと走りよった。エッサイのむすこは、敵に立ち向かう用意ができていた。「そのペリシテびとが立ちあがり、近づいてきてダビデに立ち向かったので、ダビデは急ぎ戦線に走り出て、ペリシテびとに立ち向かった。ダビデは手を袋に入れて、その中から 1 つの石を取り、石投げで投げて、ペリシテびとの額を撃ったので、石はその額に突き入り、うつむきに地に倒れた」（同 17：48、49）。 PP 337.5

両軍の兵隊たちは驚いた。彼らは、ダビデが殺されるものと思い込んでいた。しかし、石が宙に飛ん で、目標に的中した時に、彼らは、大きな勇士がちょうど突然に撃たれて目がくらんだように、震えおののいて両手を上げるのを見た。巨人は、かしの木が倒れるように揺れ動いて、地に伏した。ダビデは、一瞬もためらわなかった。彼は、ペリシテ人のうつぶした体の上に飛びかかり、そのゴリアテの重い剣を両手でつかんだ。巨人はついさきほど、そのつるぎで青年の首を切って、彼のからだを空の鳥に与えると豪語した。ところがそのつるぎが、今、高く振り上げられて、豪語した者の首は切り落とされ、そして、イスラエルの軍勢には、歓喜の叫びが起こったのである。 PP 337.6

ペリシテ人は、恐怖に襲われ、あわてふためいて退却しだした。ヘブル人の勝利の叫びは山々にひびきわたり逃走する敵を追跡した。彼らは、「ペリシテびとを追撃し、ガテおよびエクロンの門にまで及んだ。そのためペリシテびとの負傷者は、シャライムからガテおよびエクロンに行く道の上に倒れた。イスラエルの人々はペリシテびとの追撃を終えて帰り、その陣営を略奪した。ダビデは、あのペリシテびとの首を取ってエルサレムへ持って行ったが、その武器は自分の天幕に置いた」（同 17：52～54）。 PP 338.1

第 64 章　サウル、ダビデを追う

本章は、サムエル記上 18～22 章に基づく PP 338.2

サウルは、ゴリアテが倒れたあとも、ダビデを自分のところにおき、彼が父の家に帰ることを許さなかった。そして、「ヨナタンの心はダビデの心に結びつき、ヨナタンは自分の命のようにダビデを愛した」（サムエル記上 18：1）。ヨナタンとダビデは兄弟の契約を結んだ。ヨナタンは、「自分が着ていた上着を脱いでダビデに与えた。また、そのいくさ衣、およびつるぎも弓も帯も、そのようにした」（同 18：4）。ダビデは重要な責任を負わせられたが、謙遜な気持ちを持続し、王家の愛情とともに国民の愛情をもかち得た。 PP 338.3

「ダビデはどこでもサウルがつかわす所に出て行って、てがらを立てたので、サウルは彼を兵の隊長とした」（同 18：5）。ダビデは慎重で忠実であった。そして、神の祝福が彼と共にあることが明らかであった。サウルは時おり、自分がイスラエルを統治するには不適任であることを自覚し、主の教えを受けた者が彼と共にいたならば、王国はもっと安定するだろうと考えた。サウルは、また、ダビデと関係を保っことによって、自分の身を守ろうと望んだ。ダビデは主に恵まれ守られていたから、彼を戦いに連れて出れば、彼がいることによってサウルは保護されることであろうと思われた。 PP 338.4

ダビデとサウルの関係は、神の摂理によるものであった。ダビデの宮廷における地位は、彼に国務の知識を与え、将来彼が偉大な王になるよい準備となった。こうして、彼は国民の信任を得たのであった。彼は、サウルに憎まれてさまざまな苦難と困難を経験したが、それによって、彼は神によりすがり、全的に神に信頼するようになった。ヨナタンとダビデの友情も、また、神の摂理であって、将来のイスラエルの王の生命を救うためであった。神は、こうしたすべてのことにおいて、ダビデのため、ならびに、イスラエルの国民のために、その恵み深いみこころを行っておられた。 PP 338.5

しかし、ダビデに対するサウルの友情は、長く続かなかった。サウルとダビデが、ペリシテ人との戦いから帰ってきた時に、「女たちはイスラエルの町々から出てきて、手鼓と祝い歌と三糸の琴をもって、歌いつ舞いつ、サウル王を迎えた」（同 18：6）。女たちの群れが、「サウルは 1000 を撃ち殺し」と歌うと、別の群れがその歌に答えて、「ダビデは万を撃ち殺した」と歌った（同 18：7）。王の心に嫉妬の鬼が入った。彼は、イスラエルの女たちが、彼よりもダビデをほめそやしたのを怒った。彼は、こうした嫉妬心を抑えないで、彼の品性の弱点を暴露して叫んだ。「ダビデには万と言い、わたしには千と言う。この上、彼に与えるものは、国のほかないではないか」（同 18： 8）。 PP 338.6

サウルの性格の一大欠陥は、賞賛を愛する心であった。この特質が、彼の行動と思想を支配していた。何事においても、賞賛と自己賞揚を欲する気持ちがあらわれていた。彼の善悪の標準は、人々の賞賛という低い標準であった。まず第一に神を喜ばせようとせず、人間を喜ばせるために生活する人は安全ではない。サウルの野心は人間から最高の賛辞を受けることであった。そして、この賞賛の歌を聞いた王は、ダビデが人心を獲得し、彼に代わって王になるにちがいないと思い込んだ。 PP 339.1

サウルは、嫉妬心をいだいた。そして、彼の魂は、それに毒された。王は、預言者サムエルから、神がしようとされることは必ず実現し、何びともそれをはばみ得ないことを教えられていた。しかし、彼は、神の計画や神の力について、真の知識を持っていないことを明らかにした。イスラエルの王は、無限の神のみこころに反逆していた。サウルは、イスラエル王国を統治したが、自分の心を治めるべきことを学んでいなかった。彼は、衝動のままに物事を判断し、烈火のように怒り狂った。彼は、感情を爆発させて、彼の意志に逆らう者を殺そうとするのであった。彼は、こうした狂乱状態のあとで、意気消沈と自己嫌悪と後悔の念に襲われるのであった。 PP 339.2

彼は、ダビデのたて琴を聞くのが好きであった。そして悪霊は、しばらく彼を離れたように思われた。しかしある日、ダビデが彼に仕えて、美しい楽の音に合わせて神を賛美していた時に、サウルは突然やりを投げて彼を殺そうとした。ダビデは、神の介入

によって助けられ、なんの危害も受けず、狂った王の怒りをのがれることができた。 PP 339.3

サウルのダビデに対する憎悪がつのるにつれて、サウルはますますダビデの生命をとる機会をねらうようになった。しかし、主に油を注がれた者に対する彼の計画は、どれも成功しなかった。サウルは、彼を支配している悪霊の命じるままになった。しかし、ダビデは、大いなる助言者であり、力強い救済者であられる神に信頼した。「主を恐れることは知恵のもとである」（箴言 9：10）。そして、ダビデは、神の前に正しく歩くことができるようにと、常に神に祈りを捧げていた。 PP 339.4

王は、彼の敵をそばに置くのを好まず、「ダビデを遠ざけて、1000 人の長とした……。イスラエルとユダのすべての人はダビデを愛した」（サムエル記上 18：13、16）。入々は、ダビデが有能な人物であって、委ねられたことを賢く巧みに処理できることをすぐに認めた。若い彼の勧告は、賢明で思慮深いもので、人々が安心して従っていけるものであった。これに反して、サウルの判断は、時には信頼することができず彼の決定は賢明でなかった。 PP 339.5

サウルは常にダビデを殺す機会をねらっていたが、主が彼と共におられることが明らかであったので、彼を恐れていた。ダビデの非の打ちどころのない品性が、王を怒らせた。ダビデの生活と彼の存在そのものが、王に対する譴責であるように思われた。王自身の品性は、ダビデの品性と比較してみれば劣って見えるのであった。サウルを悲惨に陥れ、彼の王国の国民の 1 人の生命を危険にさらしたのは、ねたみであった。人の心のこの邪悪な特質が、この世界でなんと数多くの不幸をもたらしたことであろう。アベルの行為は正しく、神に喜ばれた。しかし、カインの行為は邪悪で、主の祝福を受けられなかった。そのため、カインは弟のアベルを憎んだ。それと同じ憎悪をサウルはいだいた。ねたみは、誇りから生じる。もし心にねたみをいだけば、それは憎悪となり、ついには、復讐、殺人を犯させることになる。なんの害も加えなかったダビデに対する激しい怒りをサウルにいだかせて、サタンは自分自身の本性を暴露したのである。 PP 339.6

王は、ダビデに軽率で無分別な行動がないかとうかがって、彼をはずかしめようと厳重に見張っていた。彼はダビデの生命を奪ったとしても、なお自分の悪行が国民の前で正当化されるのでなければ満足しなかった。彼はさらに、勢いよくペリシテ人と戦うことをダビデに勧め、その武勇の報賞として、王家の一番上の王女を妻に与えることを約束して、彼をわなに陥 れようとした。この申し出に対し、ダビデは、謙遜に答えて言った。「わたしは何者なのでしょう。わたしの親族、わたしの父の一族はイスラエルのうちで何者なのでしょう。そのわたしが、どうして王のむこになることができましょう」（同 18：18）。ところが、王は、王女を他の者にとつがせて、誠意のないことを示した。 PP 339.7

サウルの末娘のミカルは、ダビデを愛した。それで、王は、これを機会にもう 1 度ダビデを陥れようとした。もしダビデが、一定の数の敵軍を打ち破って彼らを殺した証拠を持ってくるならば、ミカルが彼に与えられることになった。サウルは、彼を「ペリシテびとの手で殺そう」と思った（同 18：17）。しかし、神はそのしもべを守護された。ダビデは、戦いに勝って王の婿になるために帰ってきた。「サウルの娘ミカルはダビデを愛した」（同 18：20）。こうして王は、殺してしまおうと思っていた相手を昇進させる結果に終わったことを見で憤激した。主が、サウルよりもすぐれた者、また彼に代わってイスラエルの王位に就く者と言われたのはこの人にちがいないと、サウルははっきり悟ったのである。サウルは、彼の本心をあらわして、ヨナタンおよび王宮のすべての家来たちに、この憎いダビデの生命をとることを命じた。 PP 340.1

ヨナタンは、王の考えをダビデに知らせ、彼に身を隠すように命じた。一方、彼は、イスラエルの救済者ダビデの命を救うように、父に訴えるつもりであった。彼は、ダビデが国家の栄誉と生命を維持するために行ったことを王に訴えた。そして、神が敵を退却させるために用いられた者を殺すということは、なんと恐ろしい罪であるかを語った。王の良心は動かされ、その心は和らげられた。「サウルは誓った、『主は生きておられる。わたしは決して彼を殺さない』」（同 19：6）。ダビデは、サウルのところに連れて来られた。そして、これまでと同様に、彼の前で仕えた。 PP 340.2

イスラエルとペリシテ人の間には、ふたたび戦争が起こった。そしてダビデは、軍勢を引き連れて敵と戦った。ヘブル人は、大勝利を博し、国中の人々は彼の知恵と勇壮な行為をほめた。これは、サウルの以前からの憎悪をかき立てることになった。ダビデが王の前で楽の音をかなで、宮中に知、い音楽を響かせていた時に、王は激情を抑えることができず、ダビデにやりを投げつけて、彼を壁にくしざしにしようとしたのである。しかし主の使いが、その危険な武器を他にそらせた。ダビデは逃げて彼の家に帰った。サウルは、使者たちを送り、彼が朝出てくるところを捕らえて殺そうとした。 PP 340.3

ミカルは、父の意図していることをダビデに知らせた。彼女は、彼に父を避けて身の安全を計るように勧め、窓から彼をつりおろして逃がしてやった。彼は、ラマにいるサムエルのところにのがれた。そして、預言者は、王の立腹するのも恐れずに逃亡者を歓迎した。サムエルの家は、王の宮殿とは対照的に平和な場所であった。主に尊ばれたしもべサムエルが仕事を続けていたのは、山の中のこの場所であった。預言者の一群が彼と共にいた。彼らは、神のみ旨を綿密に研究していた。そして、サムエルのくちびるからもれる教えの言葉にうやうやしく耳を傾けていた。ダビデがイスラエルの教師から学んだ教訓は、尊いものであった。ダビデは、サウルの軍勢がこの神聖な場所に侵入する命令を受けようとは信じられなかった。しかし、向こう見ずの王のくらんだ心に神聖な場所などはなかった。ダビデとサムエルとの結びつきは王のねたみを起こさせた。サウルは、イスラエル全国から神の預言者としてあがめられているサムエルが、彼の敵の昇進に力をかすのではないかと恐れた。王は、ダビデの居どころを知ると、使者たちを送って彼をギベアに連れ出し、そこで彼を殺す計画を実行しようとしていた。 PP 340.4

使者たちは、ダビデの生命をとるために進んでいった。しかし、サウルよりも力のあるお方が、彼らを支配した。彼らは、イスラエルをのろう途中にあったバラムと同様に、見えない天使の出迎えを受けた。彼らは、将来起こる出来事を預言し始め、主の栄えと威光とを宣言した。こうして、神は、人間の怒りを支配して、悪を抑制する神の力

をあらわされた。他方、神は、神のしもべを天使たちによって取り囲み守護し ておられた。 PP 340.5

ダビデを手中におさめようと待ちかまえていたサウルにこの報告が伝えられた。しかし、彼は、神の譴責を感じるどころか、さらに激しく怒りに燃えて、別の使者たちを送った。この人々も神の霊に支配されて、最初の者といっしょになって預言した。王は、第 3 の使者たちを派遣した。しかし、彼らも預言者の仲間のところに来ると、神の霊が彼らに降下して預言した。サウルは、彼の激しい憎悪を抑制することができなくて、自分ででかけることにきめた。彼は、ダビデを殺す機会をこれ以上待つまいと決心した。もしダビデが手のとどくところに来たならば、サウルはどんな結果になろうと、彼を自分の手で殺そうとしていたのである。 PP 341.1

しかし、神の天使が途中で彼を迎えて、彼を支配した。神の霊が、力強く彼を捕らえた。彼は、預言したり聖歌をうたったりしながら、神に祈りつつ進んでいった。彼は、世界の救済者として来られるメシヤのことを預言した。彼がラマにある預言者の家に来ると、彼の地位のしるしであった上着を脱いだ。そして、彼は神の霊に動かされて、一日一夜、サムエルと彼の弟子たちの前に横たわった。人々は、この不思議な光景を見るために近づいてきた。王の経験したことは、国中に広く伝えられた。こうして、サウルは、彼の治世の終わり近くで、彼もまた預言者の中にいたということが、イスラエルに言い伝えられた。 PP 341.2

ふたたび、迫害者の計画は挫折した。彼は、ダビデと仲直りをしたと確言したが、ダビデは、王の悔い改めを信じなかった。彼は、王が以前と同様に心を変えるといけないので、この機会に逃亡することにした。彼は心に痛手を受けていたので、もう一度友人のヨナタンに会いたかった。彼は、自分になんの罪のおぼえもなかったので、王子ヨナタンを捜し求めて、涙ながらに訴えた。「わたしが何をし、どのような悪いことがあり、あなたの父の前にどんな罪を犯したので、わたしを殺そうとされるのでしょうか」（同 20：1）。ヨナタンは、彼の父が心を入れ替えて、もうダビデの生命を奪おうとしないと信じた。ヨナタンは彼に言った。「決して殺されることはありません。父は事の大小を問わず、わたしに告げないですることはありません。どうして父がわたしにそ

の事を隠しましょう。そのようなことはありません」（同 20：2）。ヨナタンは、こうした驚くべき神の力のあらわれのあとでもなお、父がダビデに害を加えるとは信じられなかった。なぜなら、それは、あきらかに神に対する反逆になるからであった。しかし、ダビデは納得しなかった。彼は、熱誠こめてヨナタンに訴えた。「主は生きておられ、あなたの魂は生きています。わたしと死との間は、ただ 1 歩です」（同 20：3）。 PP 341.3

イスラエルでは、月の始めに聖なる祭りが祝われていた。その祭りの日が、ダビデとヨナタンが顔を合わせた次の日になっていた。この祭りの時に、この青年たちは、2 人とも王の食卓につくことになっていた。しかしダビデは、その席につくことを恐れた。それで、彼は、ベツレヘムの兄弟たちのところを訪問することにした。こうして、3 日間、王の前から姿をかくしたあとで帰ってきた時に、彼は宴会場からあまり遠くない野原に身を隠していることにした。そしてヨナタンは、こうしたことがサウルにどんな影響を及ぼすかをうかがうのであった。もし、エッサイのむすこはどこへ行ったのかと聞かれれば、彼は父の家の祭りに出るために家に帰りましたとヨナタンが言うことになっていた。もし、王が怒ったようすを見せず、「良し」と言うならば、ダビデは、宮廷に帰っても安全であった（同 20：7）。しかし、もし王がダビデの不在を怒るならば、彼は逃亡しなければならないのであった。 PP 341.4

祭りの最初の日、王は、ダビデの不在について何も尋ねなかった。しかし、2 日目にも彼の席があいていたので、王は聞いた。「『どうしてエッサイの子は、きのうもきょうも食事にこないのか』。ヨナタンはサウルに答えた、『ダビデは、ベツレヘムへ行くことを許してくださいと、しきりにわたしに求めました。彼は言いました、「わたしに行かせてください。われわれの一族が町で祭をするので、兄がわたしに来るようにと命じました。それでもし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうぞ、わたしに行くことを許し、兄弟たちに 会わせてください」。それで彼は王の食卓にこなかったのです』」（同 20：27～29）。この言葉を聞いたとき、サウルは怒りを抑えることができなかった。王は、ダビデが生きているかぎり、ヨナタンの王位継承は不可能であると言った。そして、すぐにダビデを呼び出して殺すように命令した。ヨナタンは、ふたたび

友のためにとりなして言った。「どうして彼は殺されなければならないのですか。彼は何をしたのですか」（同 20：32）。こうした訴えは、王を悪魔のように激怒させるだけであった。そして、王は、ダビデを殺すために用意したやりを、今度は自分のむすこに投げつけた。 PP 341.5

ヨナタンは悲しみと怒りに満ちて、王の前を去り、その後は王と祭りの食事を共にしなかった。彼は悲しみに打ちひしがれて、王のダビデに対する考えを彼に知らせる場所に、約束の時間に出かけて行った。彼らは、互いに首をいだいて激しく泣いた。王の激しい怒りが若者たちの生涯に暗い影を投げた。その深い悲しみは言葉では表現することができなかった。彼らがそれぞれの違った道を歩むために別れたときに、ヨナタンは決別の言葉をダビデに言った。「無事に行きなさい。われわれふたりは、『主が常にわたしとあなたの間におられ、また、わたしの子孫とあなたの子孫の間におられる』」（同 20：42）。 PP 342.1

王子はギベアに帰り、ダビデはほんの数マイルしか離れていなかったが、ベニヤミンに属していたノブの町へと急いだ。幕屋はシロからここへ移され、大祭司アヒメレクが、ここで奉仕していた。ダビデは、神のしもべのところ以外に、どこに隠れ場を求めて逃げてよいかわからなかった。祭司は、彼が心配と悲しみを顔に浮かべてあわただしくただ 1 人で来ているようすなのを見て驚いた。祭司は、彼が、何の用でそこに来たのかと尋ねた。ダビデは、いつも、見つかるのではないかと恐れおののいていたので、この窮地にあってうそをついた。彼は、急いで果たさなければならない秘密の任命を、王から委ねられて来たと祭司に言った。ここで、彼は、神を信じる信仰に欠けていたことをあらわした。そして、彼の罪のために大祭司は死ななければならなくなった。もしも彼が事実を明らかにしていたならば、アヒメレクは、自分の生命を保つために取るべき手段を知っていたことであろう。神は、どんな危機にあっても、神の民が真実であることを要求されるのである。ダビデは、祭司に 5 つのパンを求めた。神の人の手もとには聖別されたパンしかなかった。しかし、ダビデは彼がためらうのを説き伏せて、飢えを満たすためにパンを手に入れた。 PP 342.2

さて、新しい危険が迫ってきた。ヘブル人の信仰を表明していたサウルの牧者の長ドエグが、礼拝の場所で誓いを果たしていた。ダビデはこの男を見たので、急いで他に隠れ場をさがすことにし、もし防御の必要が起こった場合に、自分を守るために武器を手に入れようとした。彼がアヒメレクに剣を求めると、幕屋に記念品として保存されていたゴリアテの剣のほか何もないことを知らされた。ダビデは答えた。「それにまさるものはありません。それをわたしにください」（同 21：9）。彼は、自分が以前にペリシテ人の勇士を殺すために用いた剣をにぎって勇気がよみがえった。 PP 342.3

ダビデは、ガテの王アキシのところに逃げた。サウルの領内よりは、イスラエルの敵国の中のほうが安全であると彼は思った。しかし、ダビデは、幾年か前にペリシテ人の勇士を倒した人であることがアキシに伝えられた。そこでイスラエルの敵国に難を避けた者は、一大危機に陥った。ところがダビデは、気が狂ったまねをして、敵を欺き、逃げ出すことができた。 PP 342.4

ダビデの第 1 の誤りは、ノブで神を信頼しなかったことである。第 2 の誤りは、アキシを欺いたことである。ダビデは、品性の気高さをあらわし、彼の道徳的価値は国民の愛情をかち得た。しかし、試練に出会った時に彼の信仰は揺らぎ、人間的弱点を暴露した。彼は、誰を見ても、その人が密偵であるかまたは裏切り者であるかと思った。彼は、一大危機において、信仰の目をしっかり天に向けて神を仰ぎ、ペリシテの巨人を倒したのであった。彼は、神を信じ、神の名のもとに出て行った。しかし敵に追われ、迫害された時に、困惑と苦悩のために彼の天の父を見失ってし まうばかりであった。 PP 342.5

しかし、この経験はダビデに知恵を与えたのである。それは、彼に自己の弱さを自覚させ、常に神に信頼する必要を感じさせた。失望または落胆した魂に働きかけ、気落ちした者を励まし、衰えた者を強め、試練の中にある主のしもべたちに勇気と力を与える神の霊のお働きはなんと尊いことであろう。また、われわれの神は、なんという神であろう。神は、誤った者をやさしく扱い、われわれが逆境または、大きな悲しみに圧倒されているときにも忍耐深くあわれんでくださるのである。 PP 343.1

神の子供たちの失敗は、みな彼らの信仰の欠如が原因である。魂が暗黒におおわれ、光と指導が必要になった時には、見上げなければならない。暗黒のかなたに光がある。ダビデは、一瞬でも神に対する信頼を失ってはならなかった。彼は、神に信頼する十分な理由があった。彼は、主に油を注がれていた。そして、危険のさ中にあって、神の天使に守護されていたのである。彼は驚くべきことを行う勇気が与えられていたのである。そして、彼が、自分の置かれた窮地から目を離して、神の力と威光とを考えさえしたならば、彼は死の陰のさ中にあっても、平安を保つことができたのである。彼は確信をもって、主の約束をくりかえすことができたのである。「山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない」（イザヤ 54：10）。 PP 343.2

ダビデはユダの山の中で、サウルの追跡を避けていた。彼は、アドラムのほら穴へ逃げた。ここはわずかの人数で、大きな軍勢を防ぐことができた。「彼の兄弟たちと父の家の者は皆、これを聞き、その所に下って彼のもとにきた」（サムエル記上 22：1）。ダビデの家族の者は、サウルがいつなんどきダビデの家族だということでどんな不合理な疑いをかけてくるかわからなかったので、安心しておられなかった。彼らは、もう、イスラエル国内に広く知られるようになったこと、すなわち、ダビデが神の民の将来の王として選ばれたことを知っていた。そして、たとえ彼が寂しいほら穴にいる逃亡者であっても、ねたみ深い王の狂気にさらされているよりは、彼と共にいるほうが安全であると信じたのである。 PP 343.3

アドラムのほら穴で、家族は同情と愛に結ばれた。エッサイのむすこは、楽の音に合わせて歌うのであった。「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう」（詩篇 133：1）。彼は、自分の兄弟たちに信用されないつらさも味わったことがあった。不和に代わって和合が実現したことをダビデは心から喜んだ。ダビデは、ここで詩篇第 57 篇を作った。 PP 343.4

その後間もなく、王の苛酷な要求から逃げようとする人々が、ダビデの一隊に加わった。多くの者は、イスラエルの王に対する信頼を失っていた。彼らは、すでに王が神の霊に導かれていないのを見ることができたからである。「しえたげられている人々、

負債のある人々、心に不満のある人々も皆」ダビデのところに来た。「彼はその長となった。おおよそ 400 人の人々が彼と共にあった」（サムエル記上 22：2）。ここでダビデは、彼自身の小王国を持った。そして、それは、秩序整然としたものであった。しかし、この山中の隠れ家にあっても、彼は心安まる暇がなかった。王はなお彼を捜し求めて、殺そうとしていることが明らかだったからである。 PP 343.5

彼は、両親のための隠れ家をモアブの王のところに見つけた。それから彼は主の預言者から危険の警告を受けて彼の隠れ家を去って、ハレテの森へ行った。ダビデのこうした経験は、不必要で無益なものではなかった。神は、彼が正しく恵み深い王であるとともに、賢明な将軍になるための訓練を与えておられた。彼は、一団の逃亡者たちと共に住んで、サウルが凶悪な殺意と盲目的無分別のために全く不適格になってしまったその仕事につく準備を与えられていた。人間が神の勧告を離れるならば、正義と分別をもって行動する冷静さと知恵を保つことができなくなる。神の知恵の指導を仰がないで、人間の知恵に従うことほど恐ろしく、絶望的狂気はない。 PP 343.6

サウルは、アドラムのほら穴で、ダビデをわなにかけ て捕らえようとしていた。ところが王は、ダビデがこの隠れ家を去ったことを知って、非常に怒った。サウルは、どうしてダビデが逃亡したのかわからなかった。これは必ず陣営の中に裏切り者がいて、王の接近と計画とをエッサイのむすこに知らせたとしか考えられなかった。 PP 343.7

彼は、自分に対する謀反が起こったにちがいないと家来たちに告げ、多くの報賞と名誉ある地位を約束して、彼の国民のうちでだれがダビデの味方になったかを聞き出そうとした。エドム人のドエグが通報者になった。彼は、野心と貪欲に動かされるとともに、彼の罪を責めた祭司に対する憎悪とから、ダビデがアヒメレクを訪問したことを知らせ、神の人に対してサウルを激怒させるような言い方をした。あの邪悪な舌の言葉は、地獄の火を燃やし、サウルの心の最も醜い感情をかき立てた。彼は怒り狂って、祭司の全家族に死刑を宣告した。そして、その恐ろしい命令は執行された。アヒメレクだけでなくて、彼の父の家族の者たち、「亜麻布のエポデを身につけている者 85 人」が王の命令のもとに、ドエグの手によって殺された（同 22：18）。 PP 344.1

「彼はまた、つるぎをもって祭司の町ノブを撃ち、つるぎをもって男、女、幼な子、乳飲み子、牛、ろば、羊を殺した」（同 22：19）。サタンに支配されたサウルには、こうしたことができたのである。アマレク人の罪悪が満ちて、神が彼らを全滅させるように命令された時に、サウルは彼らをあわれんで神の命令に従わず、滅ぼすべきものを残しておいた。しかし、今度、神の命令ではなく、サタンに支配されていた時には、主の祭司たちを殺し、ノブの住民を全滅させることができたのである。神の指導を拒む人間の心は、このように邪悪なのである。 PP 344.2

この行為によって、イスラエル全土は恐怖に満ちたこの虐殺を行ったのは、彼らの選んだ王であって、彼は、神を恐れない他国の王のすることをまねたに過ぎなかった。契約の箱は彼らのところにあった。しかし、彼らが問うことにしていた祭司たちは、剣に倒れた。次に何が起こるのであろうか。 PP 344.3

第 65 章　ダビデの寛容

本章は、サムエル記上 22：20～23、23～27 章に基づく PP 344.4

サウルが、主の祭司たちを虐殺したあとで、「アヒトブの子アヒメレクの子たちのひとりで、名をアビヤタルという人は、のがれてダビデの所に走った。そしてアビヤタルは、サウルが主の祭司たちを殺したことをダビデに告げたので、ダビデはアビヤタルに言った、『あの日、エドムびとドエグがあそこにいたので、わたしは彼がきっとサウルに告げるであろうと思った。わたしがあなたの父の家の人々の命を失わせるもととなったのです。あなたはわたしの所にとどまってください。恐れることはありません。あなたの命を求める者は、わたしの命をも求めているのです。わたしの所におられるならば、あなたは安全でしょう』」（サムエル記上 22：20～23）。 PP 344.5

ダビデは、まだ王に追われていたので、休息と安全な場所はなかった。ケイラにおいて、彼の勇敢な部隊は、ペリシテ人の襲撃から町を救ったが、こうして彼らが救い出した人々の中にあっても安全ではなかった。彼らはケイラからジフの荒野へ行った。 PP 344.6

このころ、ダビデの行く手には光明がほとんどなかったが、彼の隠れ家を知ったヨナタンが、思いがけなく訪れて来て、彼を喜ばせた。この 2 人の友が互いに話し合った時間は実に貴重なものであった。彼らは、互いの経験を話し合った。ヨナタンは、ダビデを励まして言った。「恐れるにはおよびません。父サウルの手はあなたに届かないでしょう。あなたはイスラエルの王となり、わたしはあなたの次となるでしょう。このことは父サウルも知っています」（同 23：17）。彼らは、神が不思議な方法でダビデを扱っておられることを話し合い、追われる身のダビデは、非常に勇気づけられた。「こうして彼らふたりは主の前で契約 を結び、ダビデはホレシにとどまり、ヨナタンは家に帰った」（同 23：18）。 PP 344.7

ダビデは、ヨナタンの訪問を受けたあとで、賛美の歌をうたって自分を励ました。彼はたて琴の調べに合わせて歌った。 PP 345.1

「わたしは主に寄り頼む。 PP 345.2

なにゆえ、あなたがたはわたしにむかって言うのか、 PP 345.3

『鳥のように山にのがれよ。 PP 345.4

見よ、悪しき者は、暗やみで、 PP 345.5

心の直き者を射ようと弓を張り、 PP 345.6

弦に矢をつがえている。 PP 345.7

基が取りこわされるならば、 PP 345.8

正しい者は何をなし得ようか』と。 PP 345.9

主はその聖なる宮にいまし、主のみくらは天にあり、 PP 345.10

その目は人の子らをみそなわし、 PP 345.11

そのまぶたは人の子らを調べられる。 PP 345.12

主は正しき者をも、悪しき者をも調べ、 PP 345.13

そのみ心は乱暴を好む者を憎まれる」 PP 345.14

（詩篇 11：1～5） PP 345.15

ダビデは、ケイラからジフ人の荒野へ行ったが、この人々は、ダビデが隠れているところを、ギベアのサウルに知らせ、そのかくれがまで王を案内すると進言した。しかし、ダビデは、彼らが陰謀を企てていることを聞いて、その居どころを変更し、マオンと死海の間に避難所をさがした。 PP 345.16

また、人々は、サウルに告げて言った。「『ダビデはエンゲデの野にいます』。そこでサウルは、全イスラエルから選んだ 3000 の人を率い、ダビデとその従者たちとを捜すため、子やぎの岩』の前へ出かけた」（サムエル記上 24：1、2）。サウルが、3000 の軍勢を率いて迫ってくるのに対して、ダビデはわずか 600 しか率いていなかった。ダビデと彼の部下たちは、人里離れたほら穴の中で、どうしたらよいか、神の指示を待っていた。するとサウルは、山道を進んでいく途中で、ただ 1 人横道にそれて、ダビデと従者たちが隠れていたほら穴に入ってきた。これを見たダビデの従者たちは、ダビデにサウルを殺すように勧めた。彼らは、王が彼らの手中に陥ったのは、神ご自身が敵を彼らの手に渡して、殺させるようにされたものと解釈した。ダビデもそう考える

ように試みられた。しかし、良心の声が彼に語って、言った。「主が油を注がれた者に手をのべるのはよくない」。 PP 345.17

ダビデの従者たちは、サウルをそのままにしておくことを承知しないで、ダビデに神の言葉を思い起こさせて言った。「『主があなたに告げて、「わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。あなたは自分の良いと思うことを彼にすることができる」と言われた日がきたのです』。そこでダビデは立って、ひそかに、サウルの上着のすそを切った」（同 24：4）。しかし、ダビデはあとで、王の上着を切ったことを心に責められた。 PP 345.18

サウルは立ち上がって、捜索を続けるためにほら穴を出た。すると彼は、「わが君、王よ」と呼ぶ声を聞いて驚いた（同 24：8）。彼がふりかえって、だれであろうかと思ってみると、それは、長い間彼が捕らえて殺そうとしていたエッサイのむすこであった。ダビデは、彼を自分の主人と仰いで、王の前にひれふした。そして、サウルに次のように言った。「どうして、あなたは『ダビデがあなたを害しようとしている』という人々の言葉を聞かれるのですか。あなたは、この日、自分の目で、主があなたをきょう、ほら穴の中でわたしの手に渡されたのをごらんになりました。人々はわたしにあなたを殺すことを勧めたのですが、わたしは殺しませんでした。『わが君は主が油を注がれた方であるから、これに敵して手をのべることはしない』とわたしは言いました。わが父よ、ごらんなさい。あなたの上着のすそは、わたしの手にあります。わたしがあなたの上着のすそを切り、しかも、あなたを殺さなかったことによって、あなたは、わたしの手に悪も、とがもないことを見て知られるでしょう。あなたはわたしの命を取ろうと、ねらっておられますが、わたしはあなたに対して罪をおかしたことはないのです」（同 24：9～11）。 PP 345.19

サウルは、ダビデの言葉を聞いて非常に恥じ入り、 その真実なことを認めないわけにいかなかった。彼は、自分がつけねらっていた者の手中に完全に陥っていたことを認めて、深く心を動かされた。ダビデは、自分にはなんの罪もないという自覚をもって、王の前に立っていた。サウルは心を和らげて、叫んだ。「わが子ダビデよ、これは、あなたの声であるか」（同 24：16）。そしてサウルは声をあげて泣いた。サウルは、ま

たダビデに言った。「あなたはわたしよりも正しい。わたしがあなたに悪を報いたのに、あなたはわたしに善を報いる。……人は敵に会ったとき、敵を無事に去らせるでしょうか。あなたが、きょう、わたしにした事のゆえに、どうぞ主があなたに良い報いを与えられるように。今わたしは、あなたがかならず王となることを知りました」（同 24：17～20）。そして、ダビデはそういう時が来たならば、サウルの家に恵みを施し、彼の名を滅ぼし去らないということをサウルに誓った。 PP 345.20

ダビデは、サウルのこれまでのことを知っていたので、王の確証の言葉を信頼することはできなかった。また彼の悔い改めも長く続くとは思わなかった。こうして、サウルは家に帰り、ダビデは山の要害に残っていた。 PP 346.1

サタンの力に服した人々が、神のしもべたちに対していだく敵意が、時には、和解と好意の感情に変わることがある。しかし、この変化は長続きしないのが常である。悪い心を持った人々が、主のしもべたちに対して、悪いことを言ったり行ったりしたあとで、自分たちの誤りを深く悟ることがある。主の聖霊が彼らの心に働いた結果、彼らは、神と、彼らが敵対して戦った人々の前にへりくだり、彼らに対する行動を変更することがある。しかし、彼らが再び悪魔のささやきに耳を傾けると、以前の疑惑と敵意が再び頭をもたげ、悔い改めて、一時捨てていた同じ活動を再開する。彼らは、自分たちが平身低頭して罪を告白したその同じ人々を、再び激しく責め非難してののしるのである。彼らは、さらに大きな光に対して罪を犯したために、サタンはこうした行動後の彼らを以前よりも大いなる力で活用することができる。 PP 346.2

「さてサムエルが死んだので、イスラエルの人々はみな集まって、彼のためにひじょうに悲しみ、ラマにあるその家に彼を葬った」（同 25：1）。サムエルの死は、イスラエルの国にとって、とりかえしのつかない損失であると思われた。偉大で善良な預言者、すぐれた士師が世を去ったので、人々は心から深く悲しんだ。サムエルは若い時から、イスラエルの人々の前で誠実に歩んだ。サウルは、王として人々に認められてはいたが、サムエルは、忠実と服従と献身の生涯を送ったために、サウルよりはいっそう大きな影響を及ぼしていたのである。彼は、一生の間イスラエルをさばいたとしるされている。 PP 346.3

人々は、サウルの生涯とサムエルの生涯とを比較してみた時に、彼らが周りの国々と異なっていてはいけないと言って、王を要求したことがどんなにまちがいであったかを知った。多くの者は、社会情勢が急速に不信仰で無神的になっていくのを見て驚いた。王の行動が、広く人々に影響を与えていた。主の預言者サムエルの死を、イスラエルが悲しむのは当然であった。 PP 346.4

国家は、預言者の学校の創立者と校長を失ったが、それだけではなかった。国家は、人々が大きな問題をかかえて相談に行っていた人、人々の幸福のために常に神にとりなしをしていた人を失った。サムエルのとりなしは彼らに安定感を与えた。「義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである」（ヤコブ 5：16）。人々は、神に見捨てられたように感じた。王は、狂人も同様であった。正義は曲げられ、秩序は混乱に変わった。 PP 346.5

国家が内紛に苦しみ、サムエルの沈着で敬虔な勧告が最も必要であると思われた時に、神は、彼の老僕に休息をお与えになった。人々は、彼の休息の場をながめて、自分たちが彼を支配者として受け入れなかった愚かさを思い出して、痛く後悔した。彼は、天と密接な交わりを保って全イスラエルを主のみ座に結びつけるように思われたのであった、彼らに神を愛し、服従することを教えたのは彼であった。しかし、彼は、もう死んでしまったので、人々は、サタンと結 束して彼らを神から引き離そうとする王のなすがままになってしまったと感じたのである。 PP 346.6

ダビデは、サムエルの葬儀に出ることはできなかった。しかし、彼は、忠実なむすこが慈父のために悲しむように、真心から深く悲しんだ。サムエルが死んだことは、サウルの行動を抑制するもう 1 つのきずなが絶たれたことであるから、ダビデは、預言者が生きていた時よりも、いっそう身の危険を痛感した。サウルが、サムエルの死を悲しんでいるのをよい機会に、ダビテは、もっと安全な場所を捜し求めた。こうして、彼は、パランの荒野にのがれた。彼は、ここで詩篇 120 篇と 121 篇を作った。その荒涼とした沙漠の中で、預言者の死と自分に敵対する王のこととを考えて、彼は歌った。 PP 347.1

「わが助けは、天と地を造られた主から来る。 PP 347.2

主はあなたの足の動かされるのをゆるされない。 PP 347.3

あなたを守る者はまどろむことがない。 PP 347.4

見よ、イスラエルを守る者は PP 347.5

まどろむこともなく、眠ることもない。…… PP 347.6

主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、 PP 347.7

またあなたの命を守られる。 PP 347.8

主は今からとこしえに至るまで、 PP 347.9

あなたの出ると入るとを守られるであろう」 PP 347.10

（詩篇 121：2～8） PP 347.11

ダビデと従者たちがパランにいたとき、その地方で多くの財産を持っていた裕福なナバルという人の羊や牛が盗人に略奪されないように守ってやった。ナバルはカレブの子孫であったが、その性質は粗野で卑しかった。それは、羊の毛を切る時であり、もてなしの季節であった。ダビデと従者たちは、食物の欠乏に苦しんでいた。エッサイのむすこダビデは、当時の風習に従って、10 人の若者をナバルにつかわし、若者たちの主人の名をもって、彼にあいさつすることを命じ、こう言わせた。「どうぞあなたに平安があるように。あなたの家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるように。わたしはあなたが羊の毛を切っておられることを聞きました。あなたの羊飼たちはわれわれと一緒にいたのですが、われわれは彼らを少しも害しませんでした。また彼らはカルメルにいる間に、何ひとつ失ったことはありません。あなたの若者たちに聞いてみられるならば、わかります。それゆえ、わたしの若者たちに、あなたの好意を示してください。われわれは祝の日にきたのです。どうぞ、あなたの手もとにあるものを、贈り物として、しもべどもとあなたの子ダビデにください」（サムエル記上 25：6～8）。 PP 347.12

ダビデと彼の部下たちは、ナバルの羊飼いと群れにとっては、防壁のようなものであった。ところで、この金持ちは、そのように尊い働きをした者の必要を満たすために、豊かな持ち物の中から与えることを求められた。ダビデと部下たちは、自分かってに羊や牛を取ることができたのであるが、そうはしなかった。彼らは、誠実にふるまった。

しかし、彼らの親切は、ナバルにはむだであった。ナバルのダビデへの返答は、彼の品性を表していた。「ダビデとはだれか。エッサイの子とはだれか。このごろは、主人を捨てて逃げるしもべが多い。どうしてわたしのパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふった肉をとって、どこからきたのかわからない人々に与えることができようか」（同 25：10、11）。 PP 347.13

若者たちが何も持たずに帰ってきて、この話をした時に、ダビデは怒った。彼は、部下の者に戦いの用意をすることを命じた。ダビデは、当然彼が受けるべきであるものを拒んだうえに、彼に侮辱を加えた男を罰する決心をした。この衝動的行動は、ダビデよりはサウルの性質にふさわしいものであったが、エッサイの子は、まだ苦難の学校で忍耐を学ばなければならなかった。 PP 347.14

ナバルがダビデの若者たちを帰したあとで、ナバルのしもべの 1 人が、この出来事をナバルの妻アビガイルに話した。「ダビデが荒野から使者をつかわして、主人にあいさつをしたのに、主人はその使者たちをののしられました。しかし、あの人々はわれわれに大へんよくしてくれて、われわれは少しも害を受けず、ま たわれわれが野にいた時、彼らと共にいた間は、何ひとつ失ったことはありませんでした。われわれが羊を飼って彼らと共にいる間、彼らは夜も昼もわれわれのかきとなってくれました。それで、あなたは今それを知って、自分のすることを考えてください。主人とその一家に災が起きるからです」（同 25：14～17）。 PP 347.15

アビガイルは、夫に相談もしなければ、自分が何をしようとしているかを知らせもせずに、十分な食糧をろばに載せて、しもべたちを先につかわし、自分自身もダビデの一隊に会うために出発した。彼女は、山の陰で彼らに出会った。「アビガイルはダビデを見て、急いで、ろばを降り、ダビデの前で地にひれ伏し、その足もとに伏して言った、『わが君よ、このとがをわたしだけに負わせてください。しかしどうぞ、はしために、あなたの耳に語ることを許し、はしための言葉をお聞きください』」（同 25：23、24）。アビガイルは、王に語るようにうやうやしい態度でダビデに語った。ナバルは、「ダビデとはだれか」と言ったが、アビガイルは、彼を「わが君よ」と呼んだ。彼女はやさしく語って、彼の怒りをなだめ、夫のためにとりなした。アビガイルは、見せかけ

や誇りではなくて、神の知恵と愛に満ち、彼女の家庭に対する強い献身を表した。そして彼女は、彼女の夫の不親切な行動が、ダビデを侮辱しようと思ってしたことではなくて、不幸な利己的性質の現れに過ぎないことを明らかにした。「それゆえ今、わが君よ、主は生きておられます。またあなたは生きておられます。主は、あなたがきて血を流し、また手ずから、あだを報いるのをとどめられました。どうぞ今、あなたの敵、およびわが君に害を加えようとする者は、ナバルのごとくになりますように」（同 25：26）。アビガイルは、このようにダビデを説き伏せて、彼に早まったことをさせなかったことを自分の手柄にせず、神に栄光と誉れを帰した。そして、彼女は、多くの食糧を感謝の捧げ物として、ダビデの若者に与え、ダビデを怒らせたのが自分であったかのように、なおも嘆願するのであった。 PP 348.1

「どうぞ、はしためのとがを許してください。主は必ずわが君のために確かな家を造られるでしょう。わが君が主のいくさを戦い、またこの世に生きながらえられる間、あなたのうちに悪いことが見いだされないからです」（同 25：28）。アビガイルは、暗に、ダビデがどういう道を進むべきであるかを示した。彼は、主のいくさを戦うべきであった。彼は身に危害を加えられ、裏切り者として迫害されても、報復をしょうとしてはならなかった。彼女は続けた。「たとい人が立ってあなたを追い、あなたの命を求めても、わが君の命は、生きている者の束にたばねられて、あなたの神、主のもとに守られるでしょう。……そして主があなたについて語られたすべての良いことをわが君に行い、あなたをイスラエルのつかさに任じられる時、あなたが、ゆえなく血を流し、またわが君がみずからあだを報いたと言うことで、それがあなたのつまずきとなり、またわが君の心の責めとなることのないようにしてください。主がわが君を良くせられる時、このはしためを思いだしてください」（同 25：29～31）。 PP 348.2

こうした言葉は、天からの知恵を受けた者だけが語ることのできるものである。アビガイルの敬神の念は、花のかおりのように、顔や言葉や行動に、無意識のうちにただよっていた。神のみ子の霊が、彼女の心に宿っていた。彼女の言葉は、恵みによって味つけられ、好意と平和に満ち、天の感化を及ぼしていた。ダビデは、われに返り、自分の早まった考えがどんな結果をもたらすものであったかを思って戦慄した。「平和をつ

くり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタイ 5：9）。いらだった感情を和らげ、早まった衝動をとどめ、冷静さと正しい知恵の言葉によって、大きな悪をしずめようとしたこのイスラエルの女のような人々が、もっと多くあればどんなに良いことであろう。 PP 348.3

献身したクリスチャンの生活は、常に光と慰安と平安を放っている。それは、純潔、気転、単純、有用性などの特性を持っている。それは、感化力を清める無我の愛に支配されている。それは、キリストに満ち満ちていてその人が行くところは、どこにでも、光の足跡を残すのである。アビガイルは、賢明な譴責者で あり、勧告者であった。ダビデの怒りは、彼女の感化と道理にかなった話しぶりによっておさまった。彼は、自分が賢明でない行動をとり、自制心を失ったことを自覚した。 PP 348.4

彼は、へりくだって譴責を受け入れた。彼みずから、それについて次のように言っている。「正しい者にいつくしみをもってわたしを打たせ、わたしを責めさせてください」（詩篇 141：5）。彼女が彼に正しい勧告を与えたために、彼は感謝して祝福した。譴責される場合に、腹を立てずに譴責を受け入れるならば、賞賛に値すると考えている人が多い。しかし、自分を誤った道から救おうとした人に、感謝と祝福の気持ちを持ってその譴責を受け入れる人はなんと少ないことであろう。 PP 349.1

アビガイルが家に帰ってみると、ナバルと彼の客は、大宴会を開いて、酒に酔って大騒ぎをしていた。彼女はダビデと会ってどんなことが起こったかについては、次の朝まで何も彼に話さなかった。ナバルは臆病者であった。そして、彼が自分の愚かな行為によって、突然の死が、どんなに迫っていたかを悟ったとき、彼の体は麻痺したようになった。彼は、ダビデがまだ、彼に報復しようとしているのではないかと恐れて、人事不省に陥った。彼は、10 日後に死んだ。神が彼にお与えになった生命は、世をのろうだけのものであった。彼が、喜び楽しんでいた最中に、主がたとえの中の金持ちに言われたのと同じように、神は彼に言われた。「あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」（ルカ 12：20）。 PP 349.2

ダビデはその後、アビガイルと結婚した。ダビデは、すでに 1 人の妻の夫であったが、当時の国々の風習が彼の判断を誤らせ、こうした行動を取らせたのである。偉大で

善良な人々でさえ、世の風習に従って道をふみ誤った。ダビデは、多くの妻をめとったための苦しさを、一生を通じて痛感した。 PP 349.3

ダビデは、サムエルの死後数か月の間、平和に過ごすことができた。彼はふたたび、ジフ人の人里離れたところへ行った。しかし、ジフ人たちは、王の恵みを得ようと思って、ダビデの居どころを王に知らせた。この知らせによって、今までサウルの心の中に眠っていた悪魔的怒りが燃え上がった。サウルはまたもや兵隊たちを召集して、ダビデのあとを追った。しかし、味方の斥候は、サウルがふたたび追跡していることをダビデに知らせた。ダビデは、敵の位置を確かめるために出かけて行った。それは夜であった。彼らが注意深く進んでいくうちに、ある陣営のところに来た。よく注意してみると、王と従者たちの天幕が目前にあった。彼らには、だれも気づいていなかった。陣営は静かに眠っていた。ダビデは、仲間の者に、敵のまん中にはいって行こうと言った。「だれがわたしと共にサウルの陣に下って行くか」と彼が尋ねると、アビシャイはすぐ答えて言った。「わたしが一緒に下って行きます」（サムエル記上 26：6）。 PP 349.4

ダビデとアビシャイは、山の暗い陰に隠れて、敵の陣営にはいった。彼らが敵の正確な数を確かめようとしていたところ、やりを地につきさし、まくらもとに水のびんを置いて寝ているサウルのところへ来た。サウルのそばには、総指揮官のアブネルがいて、そのまわりに兵隊たちが眠っていた。アビシャイは、彼のやりを振り上げて言った。「神はきょう敵をあなたの手に渡されました。どうぞわたしに、彼のやりをもってひと突きで彼を地に刺しとおさせてください。ふたたび突くには及びません」（同 26：8）。彼は許可の言葉を待った。しかしダビデは彼の耳にささやいて言った。「『彼を殺してはならない。主が油を注がれた者に向かって、手をのべ、罪を得ない者があろうか』。……『主は生きておられる。主が彼を撃たれるであろう。あるいは彼の死ぬ日が来るであろう。あるいは戦いに下って行って滅びるであろう。主が油を注がれた者に向かって、わたしが手をのべることを主は禁じられる。しかし今、そのまくらもとにあるやりと水のびんを取りなさい。そしてわれわれは去ろう』。こうしてダビデはサウルの枕もとから、やりと水のびんを取って彼らは去ったが、だれもそれを見ず、だれも知らず、また、だれも目をさまさず、みな眠っていた。主が彼らを深く眠らされたからであ

る」（同 26：9～12）。主は、なんとたやすく力ある者を弱め、 賢明な者を愚かにし、厳密に見張る者の企てをくじかれることであろう。 PP 349.5

ダビデは陣営から遠く離れた安全な山の上に立って、大声で民とアブネルに叫んで言った。「『あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があろうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らなかったのか。民のひとりが、あなたの主君である王を殺そうとして、はいりこんだではないか。あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君を守らなかったからだ。いま王のやりがどこにあるか。その枕もとにあった水のびんがどこにあるかを見なさい』。サウルはダビデの声を聞きわけて言った、『わが子ダビデよ、これはあなたの声か』。ダビデは言った、『王、わが君よ、わたしの声です』。ダビデはまた言った、『わが君はどうしてしもべのあとを追われるのですか。わたしが何をしたのですか。わたしの手になんのわるいことがあるのですか。王、わが君よ、どうぞ、今しもべの言葉を聞いてください』」（同 26：15～19）。王は、ふたたび自分の誤りを悟って言った。「『わたしは罪を犯した。わが子ダビデよ、帰ってきてください。きょう、わたしの命があなたの目に尊く見られたゆえ、わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう。わたしは愚かなことをして、非常なまちがいをした』。ダビデは答えた、『王のやりは、ここにあります。ひとりの若者に渡ってこさせ、これを持ちかえらせてください』」（同 26：21、22）。サウルは、「わたしは、もはやあなたに害を加えないであろう」と約束したけれども、ダビデは、彼の権力のもとに身をおくことをしなかった。 PP 350.1

ダビデが王の生命を尊重したこの第二の出来事は、サウルの心にさらに深い印象を与え、彼に、もっと謙遜になって、自分のあやまちを認めさせるに至った。彼は、こうした慈悲深い行為に驚き、圧倒された。サウルは、ダビデと別れる時に言った。「わが子ダビデよ、あなたはほむべきかな。あなたは多くの事をおこなって、それをなし遂げるであろう」（同 26：25）。しかし、エッサイのむすこは、王がこうした精神状態を長く持ち続けることを期待できなかった。 PP 350.2

ダビデは、サウルと和解することに絶望した。ついには彼がサウルの憎悪の犠牲にならねばならないことは避けられないように思われた。そこで彼は、ふたたびペリシテ人の地に隠れ家を求める決心をした。彼は、600 人の部下を率いて、ガテの王アキシのところへ行った。 PP 350.3

ダビデは、神の勧告を仰がず、サウルが自分を殺すものと思い込んでしまった。サウルは、ダビデを殺そうとたくらんで追跡していても、主は、ダビデに王国を確保させようとしておられたのである。人間の目には、神秘に思えても、神はそのご計画を完成なさる。人間には、神の方法は不可解である。そして、その外側を見て、神が彼らに起こることを許される困難や試練を、ただ彼らを苦しめ、滅ぼすものであると解釈する。こうして、ダビデは、外側をながめて、神の約束を見なかった。彼は、果たして自分が王位につけるかどうかを疑った。長い試練が、彼の信仰を弱らせ、忍耐力を消耗させた。 PP 350.4

主は、イスラエルの宿敵ペリシテ人のところに、ダビデを保護するために送られたのではない。ペリシテ人は最後まで彼にとって恨み重なる敵の 1 つになるのであったにもかかわらず、彼は、困った時に彼らに助けを求めて行った。彼は、サウルとサウルの従者たちを全く信頼できなくなり、彼の民族の敵の憐れみにすがったのである。ダビデは、勇敢な将軍であった。そして、賢明で、栄えある勇士であった。しかし、彼がペリシテ人のところへ行ったのは、全く彼にとって不利なことであった。神は、神の旗じるしをユダの国に立てるように、彼を任命されたのであった。彼が、神からの命令を仰がずに、自分の持ち場を捨てたのは、信仰に欠けていたためであった。 PP 350.5

ダビデの不信によって、神のみ栄えが汚された。ペリシテ人は、サウルと彼の軍勢を恐れる以上に、ダビデを恐れていた。ダビデは、ペリシテ人に身を寄せて保護を受けたために、彼の自国民の弱点を彼らに暴露した。こうして彼は、この残酷な敵が、イスラ エルを圧迫することを助けたのである。ダビデは、神の民を守護するために立ち上がるように油を注がれていた。主は、主のしもべたちが、神の民の弱点を暴露したり、その幸福に無関心をよそおったりして、悪人たちを勇気づけることを望まれない。さらに、彼の兄弟たちは、彼が異教徒の神々を礼拝するために、彼らのところへ行ったとい

う印象を受けた。彼のこうした行動は、人々に彼の動機を誤解させる原因となり、多くの者は、彼に対して偏見をいだいた。彼は、サタンが彼にさせようと願っていたちょうどそのことをさせられた。なぜなら、彼がペリシテ人の中に隠れ家を求めたことによって、神と神の民との敵を非常に喜ばせたからである。ダビデは、神の礼拝を捨てたり、神のわざに対する献身を取り消したりしたのではなかった。しかし、彼は、自分の身の安全を求めて神に信頼しなかった。こうして、彼は、神がしもべたちに要求される公正で忠実な品性を傷つけたのである。 PP 350.6

ダビデは、ペリシテ人の王に温かく迎えられた。この温かい歓迎は、王が彼を尊敬していたこととともに、ヘブル人が自分に保護を求めてきたという虚栄心の満足によるものでもあった。ダビデは、アキシの領土内では、裏切られる恐れを感じなかった。彼は、家族と一族の者の財産を移動させた。彼の部下もそのようにした。こうして彼は、見たところ、永久にペリシテ人の地に移住したように思われた。イスラエルの避難民の保護を約束したアキシは、万事に満足であった。 PP 351.1

ダビデは、王の町を離れたいなかに住みたいと願った。王は快く承諾して、チクラグを彼の所有として与えた。ダビデは、自分も部下も偶像礼拝者たちの影響のもとにあるのは危険であると思った。ガテにいるよりは、彼らだけの町にいるほうが自由に神を礼拝することができた。ガテで行われる異教の儀式は、彼らに害毒を及ぼし、種々の難問題を引き起こすことは明らかであった。 PP 351.2

この孤立した町に住んでいた間に、ダビデは、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人などと戦い、彼らを全滅させたので、そのことをガテに知らせる者はなかった。彼が戦いから帰ってくると、自国民であるユダの人々と戦っていたかのように、アキシには思わせていた。こうした偽りによって、ダビデは、ペリシテ人の手を強めていた。王は言った。「彼は自分を全くその民イスラエルに憎まれるようにした。それゆえ彼は永久にわたしのしもべとなるであろう」（同 27：12）。ダビデは、これらの異邦の種族が滅ぼされることは、神のみ旨であることを知っていた。そして、自分にその任務が委ねられていたことを知っていた。しかし、彼が人をあざむいていたのでは、神の勧告に従って歩んでいるとは言えなかった。 PP 351.3

「そのころ、ペリシテびとがイスラエルと戦おうとして、いくさのために軍勢を集めたので、アキシはダビデに言った、『あなたは、しかと承知してください。あなたとあなたの従者たちとは、わたしと共に出て、軍勢に加わらなければなりません』」（同28：1）。ダビデは、自分の民族にさからう気持ちは少しもなかった。彼の義務が何であるかを、事態が進展してはっきりと示すまで、彼はどういう行動をとって良いかよくわからなかった。彼は、王にあいまいな返事をして言った。「よろしい、あなたはしもべが何をするかを知られるでしょう」（同 28：2）。アキシは、戦争が起これば、ダビデは王を援助すると約束したものとこの言葉を理解した。そしてダビデに大きな栄誉を与えることを誓い、ペリシテの宮廷の高い地位に彼をつけた。 PP 351.4

ダビデの信仰は、神の約束をいくぶんか疑った。しかし、彼は、サムエルがイスラエルの王として彼に油を注いだことをまだ忘れてはいなかった。彼は、神が、これまでにお与えになった勝利を思い出した。彼は、サウルの手から彼を守護された神の大きな恵みを回想して、神の信任を裏切るまいと決心した。イスラエルの王は、彼の生命をねらっていた。しかし、彼は、自国民の敵と協力するつもりはなかった。 PP 351.5

第 66 章　サウルの死

本章は、サムエル記上 28、31 章に基づく PP 352.1

ふたたびイスラエルとペリシテ人の間に、宣戦が布告された。「ペリシテびとが集まってきてシュネムに陣を取った」（サムエル記上 28：4）。これは、エズレルの野の北のはずれにあったが、サウルと彼の軍勢は、そこからわずか数マイル離れたその南のはずれにあるギルボア山のふもとに陣を取った。ギデオンが 300 人を率いて、ミデアン人を追い散らしたのは、この平原であった。しかし、イスラエルの救済者を鼓舞した精神と、今王の心をかき立てているものとは、はるかに異なったものであった。ギデオンは、ヤコブの大いなる神を堅く信じて出かけた。しかし、サウルは、神に見捨てられて、寂しく無防備であることを感じていた。彼は、ペリシテの軍勢を見渡して、「恐れ、その心はいたくおののいた」（同 28：5）。 PP 352.2

サウルは、ダビデと彼の軍勢がペリシテ人と一緒になっていることを聞いていたので、これを機会に、エッサイのむすこは、彼の受けた不当な扱いの報復をすることだろうと考えた。王は、非常に苦しんだ。国家をこうした大危機に陥れたのは、彼自身が常軌を逸した憎悪をいだいて、神に選ばれた者を殺そうとして奔走したからであった。彼は、ダビデを追うことに夢中になって、国防を怠っていた。ペリシテ人は、この無防備状態につけ込んで、国の中心にまで侵入してきた。こうして、サタンは、サウルにはダビデを追跡して殺害することに全勢力を費やさせる一方、同じ悪霊はペリシテ人には、この機にサウルを殺し、神の民を滅亡させるように鼓舞していた。この同じやり方が、今でも大いなる敵サタンによって、なんと数多く用いられていることであろう。彼は、清められていない人に働きかけて、教会内にねたみと争いを起こさせ、そうした神の民の分離した状態に乗じて、彼らを破滅させるように、手下どもを扇動する。 PP 352.3

サウルは、翌日には、ペリシテ人と戦闘を交えなければならなかった。刻々と迫ってくる運命の影が、彼のまわりに暗く立ちこめた。彼は援助と指導を切望した。しかし、神の勧告は、求めても得られなかった。「主は夢によっても、ウリムによっても、預言

者によっても彼に答えられなかった」（同 28：6）。主は、真心からへりくだって、主のもとに来る魂を退けられることはない。主は、なぜサウルに返答を与えず、退けられたのであろうか。それは王が、彼自身の行為によって、神に問うことができるあらゆる方法の特典に浴されなくなったからであった。彼は、サムエルの勧告を拒否した。彼は、神が選ばれたダビデを追放した。彼は、主の預言者たちを殺した。天の神が定められた伝達の方法を切断しておきながら、神の答えを期待することができるであろうか。彼は、罪を犯して、恵みの霊を去らせてしまった。彼は、夢または主の幻によって答えを得ることができようか。サウルは、へりくだって悔い改め、神に立ち帰らなかった。彼が求めたのは、罪の赦しや神との和解ではなくて、敵からの救済であった。彼は、自分自身の強情と反逆によって、神から切り離された。ざんげと悔い改めによる以外に、彼が立ち帰る道はなかった。しかし、高慢な王は、苦悶と絶望のうちに、他に助けを求めることにしたのである。 PP 352.4

「わたしのために、口寄せの女を捜し出しなさい。わたしは行ってその女に尋ねよう」（同 28：7）。サウルは占いがどんなものであるかをよく知っていた。主は、それをきびしく禁じておられ、汚れた魔術を行う者には、みな死罪の宣告が下されていた。サムエルが生きていた時に、サウルは、すべての占い師や口寄せを殺すように命じたのであった。しかし、彼は絶望のあまり、以前自分が憎むべき罪悪であると宣告した託宣を求めるにいたった。 PP 352.5

エンドルに、1 人の口寄せの女がひそかに住んでいることが王に伝えられた。この女は、サタンの支配に服し、その思いのままに行動することを、彼に約束していた。その代わりに、悪の君は、彼女のために不思議なことを行い、隠れたことを現した。 PP 352.6

サウルは変装して、2 人の従者とともに、夜、口寄せの女の隠れ家を捜した。ああ、なんとあわれむべき光景であろう。イスラエルの王が、サタンに捕らえられて、彼の意のままになっていた。神の霊の聖なる感化にそむいて、頑強に自分の望みどおりをしようとした者の道ほど、人間の足にとって暗い道があろうか。自己という最悪の暴君の支配に屈した者の束縛ほど恐ろしい束縛があろうか。サウルがイスラエルの王であり得る

唯一の条件は、神を信頼し、神のみこころに服従することであった。彼がその治世を通じて、この条件に応じていたならば彼の王国は安泰を保ったことであろう。神が彼を指導し、全能者が彼の盾となられたことであろう。神は、サウルを長く忍ばれた。そして彼は、反逆と頑強さによって彼の魂のうちの神の声をほとんど沈黙させてしまったとはいえ、まだ悔い改める機会は残されていた。しかし彼が、この危機において神から離れ、サタンの共謀者からの光を得ようとした時に、彼は、創造者との最後のきずなを切ってしまったのである。彼は、長年彼に働きかけ、ついに彼を破滅の淵に陥れた悪霊の支配に、完全に屈服してしまった。 PP 353.1

サウルと従者たちは、夜陰に乗じて平原を横ぎり、安全に、ペリシテの軍勢の陣地を過ぎ、山の向こうのエンドルの口寄せの女のところへ行った。口寄せの女は、ひそかにその汚れた魔法を行うために、身を隠していた。サウルは、変装はしていたけれども、その長身と王者らしいふるまいは、普通の兵士でないことを表していた。女は、訪問者がサウルではないかと思った。そして、高価な贈り物が、なおさら彼女にそう思い込ませた。「わたしのために口寄せの術を行って、わたしがあなたに告げる人を呼び起してください」という彼の願いに答えて女は言った。「『あなたはサウルがしたことをごぞんじでしょう。彼は口寄せや占い師をその国から断ち滅ぼしました。どうしてあなたは、わたしの命にわなをかけて、わたしを死なせようとするのですか』。サウルは主をさして彼女に誓って言った、『主は生きておられる。この事のためにあなたが罰を受けることはないでしょう』。女は言った、『あなたのためにだれを呼び起しましょうか』。サウルは言った、『サムエルを呼び起してください』」（同 28：8～11）。 PP 353.2

彼女は呪文を唱えたあとで、言った。「『神のようなかたが地からのぼられるのが見えます。……ひとりの老人がのぼってこられます。その人は上着をまとっておられます』。サウルはその人がサムエルであるのを知り、地にひれ伏して拝した」（同 28：13、14）。 PP 353.3

口寄せの女の呪文によって現れたのは、神の聖なる預言者ではなかった。サムエルは、あの悪霊の巣窟にいたのではなかった。この超自然的出現は、サタンの力によるも

のにほかならなかった。サタンは、荒野でキリストを試みたときに、光の天使を装うことができたのと同様に、サムエルを装うことはやさしくできたのである。 PP 353.4

口寄せの女の呪文の最初の言葉は、王に向かって言われた。「どうしてあなたはわたしを欺かれたのですか。あなたはサウルです」（同 28：12）。こうして、預言者を装った悪霊が、最初に行ったことは、この邪悪な女に、彼女が欺かれていることを、ひそかに知らせることであった。にせの預言者は、こう言った。「『なぜ、わたしを呼び起して、わたしを煩わすのか』。サウルは言った、『わたしは、ひじょうに悩んでいます。ペリシテびとがわたしに向かっていくさを起し、神はわたしを離れて、預言者によっても、夢によっても、もはやわたしに答えられないのです。それで、わたしのすべきことを知るために、あなたを呼びました』」（同 28：15）。 PP 353.5

サウルは、サムエルが生きていたときには、彼の勧告を軽んじ、その譴責に立腹した。しかし彼は、苦悩とわざわいの時に、預言者の勧告が彼の唯一の望みであることを認め、天の使者と交わるために地獄の使いにたよったのであったがむだであった。サウルは、完全にサタンの支配に服してしまった。そして、不幸と破壊を唯一の喜びにしているサタンが、この優位な立場を十分に活用して、不幸な王を滅びに陥れようとした。サウルの悲痛な叫びに答えて、サム エルのくちびるからのものと称する恐ろしい言葉が語られた。「主があなたを離れて、あなたの敵となられたのに、どうしてあなたはわたしに問うのですか。主は、わたしによって語られたとおりにあなたに行われた。主は王国を、あなたの手から裂きはなして、あなたの隣人であるダビデに与えられた。あなたは主の声に聞き従わず、主の激しい怒りに従って、アマレクびとを撃ち滅ぼさなかったゆえに、主はこの事を、この日、あなたに行われたのである。主はまたイスラエルをも、あなたと共に、ペリシテびとの手に渡されるであろう。あすは、あなたもあなたの子らもわたしと一緒になるであろう。また主はイスラエルの軍勢をもペリシテびとの手に渡される」（同 28：16～19）。 PP 353.6

サウルは、反逆の道を歩んでいた間、いつもサタンにおだてられ、欺かれていた。人々に罪を軽視させ、犯罪者の道を容易で好ましいものに思わせ、主の警告と脅迫とに、人々の心をくらませることが、誘惑者の仕事である。サタンは非常な魅惑力をもって、

サウルにサムエルの譴責と警告とを軽視させて、彼自身を正当化させた。しかし、今、彼が窮地に陥ったときに、サタンはサウルに背を向け、罪が大きくその赦しを得ることが絶望的であることを指摘して、彼を自暴自棄に追いやった。彼の勇気をくじき、判断をあやまらせ、また、彼を絶望と自殺にかりたてるのに、これ以上の方法はほかになかった。 PP 354.1

サウルは、疲労と断食のために気絶しそうであった。彼は、恐怖に襲われ、良心に責められた。恐ろしい予告を聞いたときに、彼の体は、暴風に動かされるかしの木のように揺れて、地にうつぶせに倒れた。 PP 354.2

口寄せの女は非常に驚いた。イスラエルの王が、彼女の前で死人のように横たわった。もしも彼が、彼女の隠れ家で死んだりしたら、どんなことが彼女に起こることであろうか。女は、サウルに、起きて食事をすることを勧めた。女は、命をかけて王の願いに従ったのであるから、彼も彼女の願いに耳を傾けて、彼の生命を保つようにと訴えた。彼のしもべたちも勧めたので、サウルは、ついにそれを承諾した。そこで女は、大急ぎで肥えた小牛と種入れぬパンを彼の前に出した。これは、なんという光景であろう。たった今、運命の言葉が響いたばかりの口寄せの女の荒れ果てたほら穴の中で、しかも、サタンの使者の前で、イスラエルの王として神に油を注がれた者が、次の日の恐ろしい戦いに備えて、すわって食事をしたのである。 PP 354.3

彼は、夜が明ける前に従者たちと共に、イスラエルの陣営に帰還し、戦闘の準備をした。サウルは、暗黒の霊に問うことによって、自分を滅ぼした。絶望の恐怖に苦悩する彼は、軍勢を勇気づけることができなかった。彼は、力の源である神から離れたので、神をイスラエルの援助者として仰ぐように人々の心を導くことはできなかった。こうして、不吉な予告は実現されるのであった。 PP 354.4

シュネムの平原とギルボア山の山腹で、イスラエルの軍勢とペリシテ人の軍勢は、決死の戦闘に従事した。サウルは、エンドルのほら穴の恐るべき光景によって、絶望状態に陥っていたのであるが、王位と王国の擁護のために、必死で戦った。しかし、それはむだであった。「イスラエルの人々はペリシテびとの前から逃げ、多くの者は傷ついてギルボア山にたおれた」（同 31：1）。王の勇敢な 3 人のむすこたちは、王のかた

わらで倒れた。弓を射る者どもがサウルに迫った。彼は、彼の軍勢が周りで倒れ、王子たちが剣で殺されるのを見た。彼自身も負傷して、戦うことも逃げることもできなかった。逃亡は不可能であった。彼は、ペリシテ人に捕われまいとして、武器をとる者に言った。「つるぎを抜き、それをもってわたしを刺せ」（同 31：4）。しかし、その人は主に油を注がれた者に手をふりあげることを拒んだので、サウルはつるぎをとり、その上に伏して自害した。 PP 354.5

こうして、イスラエルの最初の王は、自殺の罪を犯して死んだ。彼の生涯は失敗であった。彼は、神のみこころにさからって、自分の邪悪な意志を主張したために、不名誉と絶望のうちに世を去った。 PP 354.6

敗北の知らせが、広く伝えられて、全イスラエルを恐怖に陥れた。人々は町々から逃げ出したので、ペリシテ人は何の抵抗も受けずに占領した。神にたよ らなかったサウルの治世は、国民を破滅の淵に陥れたのである。 PP 354.7

戦闘の翌日、ペリシテ人は戦場で殺された者からはぎ取るために捜索しているうちに、サウルと 3 人のむすごたちの死体を見つけた。彼らは、自分たちの勝利を完全なものにするために、サウルの首を切り、そのよろいをはぎ取り、血にまみれた首とよろいを勝利の記念品としてペリシテの国へ送り、「この良い知らせを、その偶像と民とに伝えさせた」（同 31：9）。よろいは、最後に、「アシタロテの神殿」に置かれた（同 31：10）。首はダゴンの神殿にくぎづけにされた。こうして、勝利の栄光は、これらの偽りの神々に帰せられ、主のみ名は、はずかしめられた。 PP 355.1

サウルと 3 人のむすこたちの死体は、ギルボアの付近のヨルダン川に近い、ベテシャンの町まで運ばれた。ここで、それらは鳥の餌食にするために鎖でつるされた。しかし、ヤベシ・ギレアデの勇敢な人々は、サウルが初めに幸福であった時代に、彼らの町を救ったことを覚えていて、王と王子たちの死体を取りおろして、丁重に葬り、感謝の気持ちを表したのである。彼らは、夜、ヨルダン川を渡り、「サウルのからだと、その子たちのからだをベテシャンの城壁から取りおろし、ヤベシにきて、これをそこで焼き、その骨を取って、ヤベシのぎょりゅうの木の下に葬り、7 日の間、断食した」（同

31：12、13）。こうして、40 年前の気高い行為は報われて、サウルと 3 人のむすこたちは、あの敗北と不名誉の暗黒の中にあって丁重に葬られたのである。 PP 355.2

第 67 章　古代と現代の魔術

サウルがエンドルの女のもとに行ったという聖書の記事は、多くの聖書学者を困らせた問題であった。サウルとのこの会見の時に、サムエルが実際に現れたという立場をとる人もあるが、聖書自身は、そうではないという証拠を十分に提供している。もし、ある人々の主張するように、サムエルが天にいたのであれば、彼は、神の力かまたはサタンの力によって、そこに呼ばれてきたにちがいない。しかし、堕落した女の呪文に応えて神の聖なる預言者を天から呼び出す力がサタンにあるとは、誰も信じることができない。また、神が口寄せの洞穴に彼を呼んだとも考えられない。主は、すでに、夢によってもウリムによっても、また、預言者によってもサウルに語ることを拒んでおられた（サムエル記上 28：6 参照）。神は、こうした方法で人間と交わることに定めておられた。そして、神は、こうした方法を用いないで、サタンの使者によって、お語りになることはない。 PP 355.3

言葉自身が、その言葉の出所を十分に証明している。その目的は、サウルを悔い改めに導くことではなくて、彼を滅亡に追いやることであった。これは、神のわざではなくて、サタンのわざである。なおその上に、口寄せの女に問うたサウルの行為は、彼が神に拒否され、滅亡に陥るに至った理由の 1 つとして、聖書に記されている。「こうしてサウルは主にむかって犯した罪のために死んだ。すなわち彼は主の言葉を守らずまた口寄せに問うことをして、主に問うことをしなかった。それで主は彼を殺し、その国を移してエッサイの子ダビデに与えられた」（歴代志上 10：13、14）。サウルが主に問わず、口寄せの女に問うたことが、ここに明示されている。彼は、神の預言者サムエルと話したのではなかった。彼は、口寄せの女を通じて、サタンと話したのであった。サタンは、本物のサムエルを出して見せることはできなかったが、にせ物を出して見せて、欺瞞の目的を達成した。 PP 355.4

古代の魔術や魔法というものは、だいたいそのすべてが死者と交通することができるという信仰に基づいていた。降神術を行っている者たちは、死者と交通することがで

きて、死者から将来の事件について聞くことができると主張した。こうした死者に問う習慣について、イザヤの預言の中に次のように記されている。「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』 という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか」（イザヤ 8：19）。 PP 355.5

死者との交通というこの同じ信仰が、異教の偶像礼拝の基礎になっている。異教の神々は、死んだ英雄の霊を神にまつられたものと信じられていた。であるから、異教の宗教は、死者の礼拝であった。これは、聖書に明らかにしるされている。ベテペオルでのイスラエルの罪に関して、こう言われている。「イスラエルはシッテムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらな事をし始めた。その娘たちが神々に犠牲をささげる時に民を招くと、民は一緒にそれを食べ、娘たちの神々を拝んだ。イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがった」（民数記 25：1～3）。詩篇記者は、そうした犠牲がどういう神に捧げられたかを語っている。彼は、イスラエル人の同じ背信について、このように言った。「また彼らはペオルのバアルを慕って、死んだ者にささげた、いけにえを食べた」（詩篇 106：28）。 PP 356.1

死者を神格化することが、ほとんどすべての異教制度の主要な部分を占め、それとともに死者との交通の主張もまた同様に重大な部分であった。神々は、自分たちの意志を人間に伝え、また、問われるならば、人々に勧告を与えると信じられていた。ギリシャやローマの有名な神託は、この種のものであった。 PP 356.2

死者と交通することができるという信仰は、いわゆるキリスト教国において今なお行われている。心霊術という名称のもとに、死者の霊であるといわれているものと交わる習慣が、広く行われるようになった。これは、愛する人々を墓に横たえた者の共感を得るように企てられている。時には、霊的存在が、彼らの友人の姿をとって人々の前に現れて、自分たちの生活に関係のあった出来事について話したり、彼らが生きていた時に行ったことをしたりする。こうして、人々は、彼らの死んだ友人は天使になっていて、彼らの上をとびかい、彼らと交通するものと思いこまされてしまうのである。このようにして、死んだ者の霊であると人々が思い込んだものは、ある種の偶像とみなされる。

そして、多くの人々にとって、その言葉は、神の言葉よりもはるかに重大なものに思われるのである。 PP 356.3

しかし、心霊術を単なる詐欺であると考える人々が多い。この人々は、心霊術が主張する超自然的現象は、霊媒の欺瞞によるものであると言うのである。確かに、詐術によって現れたものを、真の現象であるかのように思わせたこともあるにはあったが、超自然的能力の著しい証拠もまたあったのである。人間の熟練と巧妙な精神の働きの結果であるとして、心霊術を拒んでいた人々も、そういう考え方では説明できない現象に当面すると、その主張を認めるようになってしまう。 PP 356.4

現代の心霊術と古代の魔術と偶像礼拝は、すべて、その重要な主張として、死者との交通をあげているが、これは、エデンでサタンがエバに言った最初の虚偽に基づいている。「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがた（は）……神のように……なることを、神は知っておられるのです」（創世記 3：4、5）。これらは共に、偽りの父から出たものであって、同じ偽りに基づいて、同じものを永続させているのである。 PP 356.5

ヘブル人は、死者との交通めいたことをどんな方法においても行うことを、堅く禁じられていた。神は、この方面の扉をしっかりと閉じて言われた。「死者は何事をも知らない、……彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない」（伝道の書 9：5、6）。「その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には彼のもろもろの計画は滅びる」（詩篇 146：4）。主はイスラエルに言われた。「もし口寄せ、または占い師のもとにおもむき、彼らを慕って姦淫する者があれば、わたしは顔をその人に向け、これを民のうちから断つであろう」（レビ 20：6）。 PP 356.6

「口寄せ」の霊は、死者の霊ではなくて、サタンの使者、すなわち、悪天使である。すでに指摘したとおり、古代の偶像礼拝は、死者の礼拝と死者との交通を主張することから成り、聖書は、それを悪魔の礼拝であると言明している。使徒パウロは、異教の隣人 たちの偶像礼拝には絶対に加わらないように兄弟たちに警告している。「人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に備えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない」（Ｉコリント 10：20）。詩篇記者は、イスラエ

ルが、「そのむすこ、娘たちを悪霊にささげ」た、と言った。彼らは、「カナンの偶像」に彼らを犠牲として捧げたと、その次の聖句で言われている（詩篇 106：37、38）。彼らは死者を礼拝していたが、実際は、悪霊を礼拝していたのである。 PP 356.7

現代の心霊術は、これと同じ基礎に基づくもので、昔、神が堅く禁じられた魔術と悪霊の礼拝の形を新しくして復活したものに過ぎない。それは、聖書の中で次のように預言されている。「後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう」（Ⅰテモテ 4：1）。パウロは、テサロニケ人への第 2 の手紙の中で、サタンが心霊術によって、特別に活動することを指摘し、それが、キリスト再臨の直前に起こると言っている。彼は、キリストの再臨のことを述べ、サタンが、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と」によって働いたあとで起こると言っている（Ⅱテサロニケ 2：9）。また、ペテロは、最後の時代に教会があわなければならない危険を描写して、昔、にせ預言者がイスラエルを罪に陥れたように、にせ教師が起こると言った。「彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、……また、大ぜいの人が彼らの放縦を見習」うのである（Ⅱペテロ 2：1、2）。使徒ペテロは、ここに心霊術の教師の著しい特徴の 1 つをあげている。彼らは、キリストが神の子であることを認めない。こうした教師について愛するヨハネは言っている。「偽り者とは、だれであるか。イエスのキリストであることを否定する者ではないか。父と御子とを否定する者は、反キリストである。御子を否定する者は父を持たず」（Ⅰヨハネ 2：22、23）。心霊術は、キリストを否定することによって、父とみ子をともに否定する。そして聖書は、それを反キリストのしるしであると言っている。 PP 357.1

サタンはエンドルの女によって、サウルの運命を予告し、イスラエルの人々を陥れようとたくらんだ。サタンは彼らが、口寄せの女を信頼して、彼女に問うてくるようになることを望んだ。こうして、彼らは、神を彼らの助言者とせず、サタンの指導のもとに陥ってしまうのであった。心霊術が多くの人々を引きつける魅力を持っているのは、将来の幕を開いて神が隠されたものを、人間に示す力があると主張するからである。神は、われわれが知らなければならない将来の大事件を皆、み言葉の中に示しておられる。

そして、あらゆる危険の中にあってわれわれの足を導く安全な道標をお与えになった。しかし、サタンは、神に対する人間の信頼を失わせ、この世において彼らが置かれた境遇に不満をいだかせる。また、神が知恵のうちに隠されたことを知ろうと思わせ、聖なるみ言葉の中に神が啓示されたことを軽蔑するようにさせる。 PP 357.2

事態の明白な結果を知ることができなければ、落ちつかない人々が多くいる。彼らは、不安定に耐えられない。そして、忍耐しきれないで、神の救いを見るのを待とうとしない。彼らは、災いを恐れて、狂気のようになる。彼らは、反逆的精神をいだいて、啓示されていないことを知ろうと求めて、悲嘆にくれ、あちらこちらを奔走する。もし彼らが神に信頼して、目をさまして祈っているならば、彼らは神の慰めを得ることができるであろう。彼らの心は、神との交わりによって、平安が与えられる。重荷を負うて苦労している者は、イエスのもとに行きさえすれば休みが与えられる。しかし、神が彼らの慰めのためにお定めになった方法を無視して、神が隠されたことを知ろうとして、ほかのところへ行くとすれば、彼らは、サウルと同じあやまちを犯し、それによって得るのは、ただ悪の知識だけである。 PP 357.3

神は、こうした行為を喜ばれず、そのことを最も明白に言っておられる。こうした将来の幕を引き裂こうとする性急な態度は、神に対する信仰の欠けていることを表し、大欺瞞者の言うことに耳をかすことになる。サタンは、人々を導いて口寄せに問わせる。そして、過去の隠れたことを現すことによって、将来のこと を預言する力があると信じこませようとする。サタンは、各時代にわたる長い経験によって、原因から結果を判断し、相当の正確さをもって、人間の将来の出来事を予告することができる。こうして彼は、道を踏み誤ったあわれな魂を欺き、彼らを自分の勢力下において、彼の意のままに奴隷にしてしまう。 PP 357.4

神は、預言者によって、われわれに警告された。「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか」（イザヤ８：19）。「ただ律法と證詞（あかし）とを求むべし。彼等のいふところ此

言にかなはずば晨光（しののめ）あらじ」（同 8：20・文語訳、新改訳参照）。 PP 358.1

無限の知恵と力を持たれる聖なる神を知っている者が、主の敵に問うて知識を得る魔術者に走ってよかろうか。神ご自身が神の民の光である。人間の目に隠された栄光を、信仰の目で見るようにせよと、神は彼らに言われる。義の太陽は、輝かしい光を彼らの心に照らす。彼らは、天のみ座からの光が与えられている。彼らは、光の源泉から離れて、サタンの使者のところへ行こうとは望まないのである。 PP 358.2

サウルに対する悪霊の言葉は、罪の譴責と報復の預言ではあったが、彼を悔い改めさせるものではなくて、失望と破滅に陥れるものであった。しかし、甘言によって、人を破滅に陥れることが、サタンの目的にかなっていることが多い。古代の悪霊の教えは、最もいやしむべき乱行を助長した。罪を責めて義を行うことを勧めた神の戒めは退けられた。真理は軽く扱われ、不純行為が許されるばかりか、それを行うことを命じられていた。心霊術は、死も、罪も、審判も、報復もないと言い、人間は、「堕落しない半神半人」であって、欲望が最高の法則であり、人間は自分にだけ責任を負えばよいと言うのである。真理、純潔、敬神の念を守るために神が設けられた防壁はくずされ、多くの者が大胆に罪を犯すようになった。こうした教えは、それが悪霊の礼拝と同じところから来ていることを示さないであろうか。 PP 358.3

主は、カナン人の憎むべきことを行い、悪霊と交わることがどういう結果となるかを、イスラエルに示された。彼らは、無情な者となり、偶像礼拝者、不品行な者、殺人者、そして、あらゆる汚れた思いといまわしい行為にふける憎むべきものとなった。人々は、自分たちの心を知らない。「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている」（エレミヤ 17：9）。しかし、神は、人間の堕落した性質の傾向をごぞんじである。現在と同様に、当時においても、サタンは、反逆を誘発させる状態をひき起こそうと見張っていた。それは、カナン人と同様にイスラエル人も神の前に憎むべきものとなるためであった。魂の敵は、われわれの中に、なんの制限もなく悪を流し込める通路を開こうと常に目を開いている。彼は、われわれが滅びに陥り、神の前に罰せられることを願っている。 PP 358.4

サタンは、カナンの地をしっかりと握っていようと思っていた。ところが、カナンがイスラエルの民の住むところとされ、神の律法が、その地の律法とされた時に、彼は、残酷で悪意に満ちた憎しみをもって、イスラエルを憎み、その破滅を計画した。悪霊の活動によって、異なった神々が持ちこまれた。そして、選民は、罪の結果、ついに約束の国から離散してしまった。サタンは、この歴史をわれわれの時代にもくりかえそうとしている。神は、神の民を想の憎むべき罪悪から導き出して、彼らが神の律法を守ることができるようにしようとしておられる。そのために、「われらの兄弟らを訴える者」は、激しく怒っている。「悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」（黙示録 12：10、12）。真の約束の国が、われわれの眼前にある。そして、サタンは、神の民を滅ぼし、その嗣業を受けさせまいとしている。「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい」という勧告が、今ほど必要な時はない（マタイ 26：41）。 PP 358.5

古代のイスラエルに与えられた主の言葉は、この時代の神の民にも与えられている。「あなたがたは口寄せ、または占い師のもとにおもむいてはならない 彼らに問うて汚されてはならない」「主はすべてこれらの事をする者を憎まれるからである」（レビ 19：31、申命記 18：12）。 PP 358.6

第 68 章　チクラグにおけるダビデ

本章は、サムエル記上 29、30 章、サムエル記下 1 章に基づく PP 359.1

ダビデとその部下たちは、ペリシテ人とともに、戦場まで行進してきたが、サウルとペリシテ人との戦いにはまだ参加していなかった。両軍が戦闘の準備をしていた時に、エッサイのむすこは、非常に困難な立場に立たされた。彼は、ペリシテ人といっしょに戦うものと期待されていた。もしも戦闘の半ばで、彼が守っていた戦線を捨てて退却するならば、彼は臆病者呼ばわりをされるだけでなくて、彼を保護し信頼したアキシの恩を忘れて、反逆した者と言われることであろう。こうしたことは、彼の名折れになるばかりでなく、サウルよりも恐ろしい敵の怒りをこうむることになるのであった。しかし彼は、たとえ一瞬であっても、イスラエルを敵に回して戦うことはできなかった。もしも彼が、そんなことをするならば、彼は、自国の裏切り者となり、神と神の民との敵となるのであった。それは、イスラエルの王位につく道を永遠に閉ざしてしまったことであろう。そして、もしもサウルが、戦いにおいて殺されるようなことになれば、その責めはダビデに負わされたことであろう。 PP 359.2

ダビデは、自分の行動がまちがっていたことを痛感した。主と主の民の仇敵のところよりは、山々の、神の城塞に隠れたほうがどんなにかよかったのである。しかし、主は、深く彼をあわれんで、そのしもべの過失を罰することをせず、彼が苦悩と混乱に陥るままにしておかれた。ダビデは神の力を見失い、完全な忠誠の道からそれたとは言え、なお、神に忠実に仕えようと思っていたのである。 PP 359.3

サタンと彼の軍勢が、忙しく神とイスラエルの敵を助け、すでに神に拒否された王に対抗して計画をたてていた時に、主の天使は、ダビデが陥った危険から彼を救うために働いていた。天使たちは、切迫した戦闘にダビデとその部下たちが参加していることに反対させようと、ペリシテの君たちを動かしていた。 PP 359.4

ペリシテの君たちはアキシにつめよって叫んだ。「これらのヘブルびとはここで何をしているのか」。アキシはこの重要な同盟軍を去らせようとは思わないで言った。

「これはイスラエルの王サウルのしもべダビデではないか。彼はこの日ごろ、この年ごろ、わたしと共にいたが、逃げ落ちてきた日からきょうまで、わたしは彼にあやまちがあったのを見たことがない」（サムエル記上 29：3）。 PP 359.5

しかし、ペリシテ人の君たちは、怒って彼らの主張を曲げなかった。「この人を帰らせて、あなたが彼を置いたもとの所へ行かせなさい。われわれと一緒に彼を戦いに下らせてはならない。戦いの時、彼がわれわれの敵となるかも知れないからである。この者は何をもってその主君とやわらぐことができようか。ここにいる人々の首をもってするほかはあるまい。これは、かつて人々が踊りのうちに歌いかわして、『サウルは 1000 を撃ち殺し、ダビデは万を撃ち殺した』と言った、あのダビデではないか」（同 29：4、5）。ペリシテ人の君たちは、彼がペリシテの勇士を殺して、イスラエルを勝利に導いた時のことをはっきりと覚えていた。彼らは、ダビデが自国民と戦うとは思わなかった。もしも彼が戦いの最中に、敵の側につくならば、ダビデは、サウルの全軍以上の損害を与えることができるのであった。 PP 359.6

こうしてアキシは、彼らに従わなければならなくなり、ダビデを呼んで言った。「主は生きておられる。あなたは正しい人である。あなたがわたしと一緒に戦いに出入りすることをわたしは良いと思っている。それはあなたがわたしの所にきた日からこの日まで、わたしは、あなたに悪い事があったのを見たことがないからである。しかしペリシテびとの君たちはあなたを 良く言わない。それゆえ今安らかに帰って行きなさい。彼らが悪いと思うことはしないがよかろう」（同 29：6、7）。 PP 359.7

ダビデは、自分のほんとうの気持ちをさとられまいとして答えた。「しかしわたしが何をしたというのですか。わたしがあなたに仕えはじめた日からこの日までに、あなたはしもべの身に何を見られたので、わたしは行って、わたしの主君である王の敵と戦うことができないのですか」（同 29：8）。 PP 360.1

アキシの返答は、ダビデの心に恥辱と悔悟の戦慄を与えたにちがいない。彼は、主のしもべとしてあるまじき欺瞞行為を行ったことを痛感していたのである。王は言った。「わたしは見て、あなたが神の使のようにりっぱな人であることを知っている。しかし、ペリシテびとの君たちは、『われわれと一緒に彼を戦いに上らせてはならない』と言っ

ている。それで、あなたは、一緒にきたあなたの主君のしもべたちと共に朝早く起きなさい。そして朝早く起き、夜が明けてから去りなさい」（同 29：9、10）。こうしてダビデは、自分が落ちこんだわなをのがれて、自由になることができた。 PP 360.2

ダビデと彼の 600 人の従者たちは、3 日の旅を終えて、彼らのペリシテの故郷チクラグに到着した。ところが彼らを迎えたのは、荒れ果てた光景であった。アマレク人は、ダビデとその軍勢の不在に乗じて、彼らの領土に対するダビデの襲撃の報復を行った。彼らは、無防備の町を不意に襲撃して略奪し、火を放ってすべての女や子供たちを捕虜にし、多くの物を略奪して去ったのであった。 PP 360.3

ダビデと従者たちは、その恐ろしさと驚きに声もなく、しばらくの間は、黒くくすぶる破壊の跡をながめて沈黙していた。そして、故郷がどんなに恐ろしい廃虚と化してしまったかに気がついたとき、戦いになれたこれらの戦士たちは、「声をあげて泣き、ついに泣く力もなくなった」（同 30：4）。 PP 360.4

ダビデは、ここでもまた、彼に信仰がなく、ペリシテ人の中に身を隠したことの懲らしめを受けた。神と神の民との敵の中に、どれほどの安全があるかを見る機会がダビデに与えられた。ダビデの従者たちは、こうした不幸の原因を彼のせいにして反抗した。彼は、アマレク人を襲撃したために、彼らの報復を招いたのであった。しかし、彼は、彼の敵の中での安全を過信し、町を無防備のままにしておいたのであった。兵隊たちは、悲しみと激しい怒りに気も狂わんばかりになり、どんな暴挙にでるかわからず、ダビデを石で打とうとさえした。 PP 360.5

ダビデは、すべての人間的支援から切り離されたように思われた。彼が、この地上で大切にしていたものは、みな奪い去られてしまった。サウルは、彼を国外に追放した。ペリシテ人は、彼を陣営から追い出した。アマレク人は、彼の町を略奪した。彼の妻たちと子供たちは、捕虜になってしまった。そして、彼の親しい友は団結して彼に反抗し、彼を殺そうとさえした。ダビデは、このようにどうしようもなくなったとき、この悲運を憂慮しないで、熱心に神に助けを仰いだ。彼は、「主によって自分を力づけた」（同 30：6）。彼は、自分の過去の生涯のいろいろな事件をふり返った。いったい、主が彼をお見捨てになったことがあろうか。彼は、神の恵みの証拠を数多く思い出して勇気づ

けられた。ダビデの従者たちは、不満とあせりによって、彼らの苦痛をさらに耐えがたくしていた。しかし、神の人は、さらに大きな悲痛の原因があったにもかかわらず、あくまでも忍耐した。彼は心の中で言った。「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます」（詩篇 56：3）。彼自身は、この困難な事態から脱出する方法を認めることはできなかったが、神は、それを見ることができ、彼に何をすべきかをお教えになるのであった。 PP 360.6

ダビデは、アヒメレクの子、祭司アビヤタルを呼んで、「わたしはこの軍隊のあとを追うべきですか。わたしはそれに追いつくことができましょうか」とたずねた。彼は答えて言った。「追いなさい。あなたは必ず追いついて、確かに救い出すことができるであろう」（サムエル記上 30：8）。 PP 360.7

この言葉を聞いて、悲しみ怒っていた人々の騒ぎは治まった。ダビデと従者たちは、すぐに逃走してい る敵の追跡を始めた。彼らがガザの付近で地中海に注ぐベルソ川に到着した時には、あまりの強行軍のために、200 人は疲れ果ててあとに残った。しかし、ダビデは、他の 400 人を率いて、少しもひるむことなく、追撃した。 PP 360.8

進軍の途中で、彼らは、疲労と飢えとで死にそうになっていたエジプトの奴隷を見つけた。彼は、食物と水を飲んで元気づいた。そして、彼は、侵入軍に加わっていた残酷なアマレク人の主人に捨てられて、死にそうになっていたことがわかった。彼は襲撃と略奪の模様を語った。そして、彼は、殺されたり主人に引き渡されたりしないという約束のもとに、ダビデの軍勢を敵の陣営に案内することになった。 PP 361.1

陣営に近づいて、彼らが見たのは酒盛りの光景であった。勝利軍は、盛んな祝宴を開いていた。「彼らはペリシテびとの地とユダの地から奪い取ったさまざまな多くのぶんどり物のゆえに、食い、飲み、かっ踊りながら、地のおもてにあまねく散りひろがっていた」（同 30：16）。すぐに、攻撃命令が下されて、追撃軍は猛然と敵に襲いかかった。アマレク人は、不意を打たれて、あわてふためいた。戦いは、その日一日中と翌日の夕方にまで及び、ほとんど全軍が壊滅した。らくだに乗った 400 人が逃亡しただけであった。主の言葉は実現した。「こうしてダビデはアマレクびとが奪い取ったものをみな取りもどした。またダビデはそのふたりの妻を救い出した。そして彼らに属する

ものは、小さいものも大きいものも、むすこも娘もぶんどり物も、アマレクびとが奪い去った物は何をも失わないで、ダビデがみな取りもどした」（同 30：18、19）。 PP 361.2

以前にダビデがアマレクの領内に侵入したとき、彼は、彼の手中に入った住民をみな殺しにしたのであった。もしも神の抑制力がなかったならば、アマレク人は、チクラグの人々を殺して報復したことであろう。彼らは、多くの捕虜を連れて帰って、彼らの勝利の栄誉をはなやかなものにし、後で彼らを奴隷に売ろうと思い、そのまま生かしておくことにした。こうして彼らは、無意識のうちに、神のみこころを実現し、捕虜たちに害を加えることなく、その夫や父のところへ返すことになった。 PP 361.3

地上のすべての権力は、無限の神の支配下にある。最大の支配者や、最も残酷な圧制者に対して、神は言われる。「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」（ヨブ 38：11）。神の力は、悪の勢力をくじくために常に活動している。神は、人を滅ぼすためではなくて、彼らを矯正して保護するために、常に人間の中で働いておられる。 PP 361.4

勝利者たちは、喜び勇んで帰途についた。後方に残った人々のところへ来た時に、400 人の中の利己的で乱暴な人々は、戦いに参加しなかった者には戦利品の分けまえを与えるべきではないと言い張った。彼らは、妻と子供をとりかえしただけで十分であるというのであった。しかし、ダビデは、そのような取りきめを許さなかった。「兄弟たちよ、……主が賜わったものを、あなたがたはそのようにしてはならない。……戦いに下って行った者の分け前と、荷物のかたわらにとどまっていた者の分け前を同様にしなければならない。彼らはひとしく分け前を受けるべきである」（サムエル記上 30：23、24）。こうして、このことは解決し、銃後の任務をりっぱに果たした者は、すべて、実戦に参加した者と同様に戦利品の分けまえにあずかることが、のちにイスラエルの律法として定められた。 PP 361.5

ダビデとその従者たちは、チクラグから奪われた物を取り返しただけではなくて、アマレク人の羊や牛をおびただしく捕らえた。「これはダビデのぶんどり物だ」と言われた（同 30：20）。ダビデは、チクラグに着くとこの戦利品の中から贈り物をユダの

長老たちに送った。この分配の中には、ダビデが命をねらわれて、転々と場所を変えて逃亡しなければならなかった時に、山のとりでで彼とその従者に親切を尽くした人々が、皆忘れられないで含まれていた。追われる逃亡者の心にしみた彼らの親切と同情は、このようにして、心から感謝されたのである。 PP 361.6

ダビデと彼の勇者たちが、チクラグに帰ってから、3 日目のことであった。彼らは、破壊された家々の復 旧を急ぎながら、イスラエルとペリシテ人との間に当然起こったにちがいない戦争の知らせを、今か今かと待っていた。すると、突然、1 人の使者が、「その着物を裂き、頭に土をかぶって」町に入ってきた（サムエル記下 1：2）。彼はすぐにダビデの前につれ出された。彼は、ダビデの前にうやうやしく頭を下げ、彼を偉大な毛として認めたことをあらわし、彼の恩恵にあずかろうとしていた。ダビデは、戦闘のなりゆきを熱心に聞いた。逃亡者は、サウルの敗北と死、そして、ヨナタンの死を報告した。しかし、彼は、ただ事実だけでなく、それ以上のことを言った。彼は、ダビデが、残酷な迫害者サウルに対して、恨みをいだいているにちがいないと考えて、自分が王を殺した栄誉を受けようと望んだのであった。彼は、戦っている間に、イスラエルの王が傷つき、敵に激しく攻められているのを見、王の願いによって、自分が、彼を殺したと誇らかに言った。彼は、王の頭にあった冠と、腕につけていた金の腕輪をダビデのところに持ってきた。彼は、こうした知らせが喜び迎えられて、彼の果たした役割に対して、大きな報賞が与えられるものと思っていた。 PP 361.7

しかし、「ダビデは自分の着物をつかんでそれを裂き、彼と共にいた人々も皆同じようにした。彼らはサウルのため、またその子ヨナタンのため、また主の民のため、またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、夕暮まで食を断った。それは彼らがつるぎに倒れたからである」（同 1：11、12）。 PP 362.1

恐ろしい知らせの最初の衝撃がおさまった時に、ダビデは、他国人の使者と、彼が自認した犯罪のことを思い出した。首領のダビデは、「あなたはどこの人ですか」と若者にたずねた。「彼は言った、『アマレクびとで、寄留の他国人の子です』。ダビデはまた彼に言った、『どうしてあなたは手を伸べて主の油を注がれた者を殺すことを恐れなかったのですか』」（同 1：13、14）。ダビデは、サウルを 2 度も自分の手の中に

入れ、彼を殺すように勧められたけれども、イスラエルを支配するために神の命によって聖別された者に、手をふり上げることを拒んだのであった。しかし、アマレク人は、イスラエルの王を殺したことを、恐れもせずに誇った。彼は、死に値する犯罪を犯したことを自認したのであって、その罰はすぐに与えられた。ダビデは言った。「あなたの流した血の責めはあなたに帰する。あなたが自分の口から、『わたしは主の油を注がれた者を殺した』と言って、自身にむかって証拠を立てたからである」（同 1：16）。 PP 362.2

ダビデは、サウルの死を心から深く悲しんだ。それは、ダビデの気高い心の広さをあらわしていた。彼は、敵が倒れたことを喜ばなかった。彼がイスラエルの王座につく障害は除かれたけれども、彼はこれをうれしく思わなかった。サウルの不信と残酷さの記憶は、死によって消し去られて、気高い王者としての彼の記憶のほかは、何も心に浮かばなかった。サウルの名は、真実で無我の友情の持ち主であったヨナタンの名と結び合わされた。 PP 362.3

ダビデが、彼の気持ちを表現した歌は、彼の国の宝となり、その後の各時代の神の民の宝となった。 PP 362.4

「イスラエルよ、あなたの栄光は、 PP 362.5

あなたの高き所で殺された。 PP 362.6

ああ、勇士たちは、ついに倒れた。 PP 362.7

ガテにこの事を告げてはいけない。 PP 362.8

アシケロンのちまたに伝えてはならない。 PP 362.9

おそらくはペリシテびとの娘たちが喜び、 PP 362.10

割礼なき者の娘たちが勝ちほこるであろう。 PP 362.11

ギルボアの山よ、 PP 362.12

露はおまえの上におりるな。 PP 362.13

死の野よ、 PP 362.14

雨もおまえの上に降るな。 PP 362.15

その所に勇士たちの盾は捨てられ、 PP 362.16

サウルの盾は油を塗らずに捨てられた。…… PP 362.17

サウルとヨナタンとは、愛され、かつ喜ばれた。 PP 362.18

彼らは生きるにも、死ぬにも離れず、 PP 362.19

わしよりも早く、 PP 362.20

ししよりも強かった。 PP 362.21

イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。 PP 362.22

彼は緋色の着物をもって、 PP 362.23

はなやかにあなたがたを装い、 PP 362.24

あなたがたの着物に金の飾りをつけた。 PP 363.1

ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。 PP 363.2

ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。 PP 363.3

わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。 PP 363.4

あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。 PP 363.5

あなたがわたしを愛するのは世の常のようではなく、 PP 363.6

女の愛にもまさっていた。 PP 363.7

ああ、勇士たちは倒れた。 PP 363.8

戦いの器はうせた」 PP 363.9

（サムエル記下 1：19～27） PP 363.10

第 69 章　ダビデの即位

本章は、サムエル記下 2～4 章、5：1～5 に基づく PP 363.11

サウルが死んだために、ダビデは追放のうきめにあった危険状態から脱出した。彼が自国に帰る道が、今、開かれた。サウルとヨナタンのための悲しみの期間が過ぎたとき、「ダビデは主に問うて言った、『わたしはユダの一つの町に上るべきでしょうか』。主は彼に言われた、『上りなさい』。ダビデは言った、『どこへ上るべきでしょうか』。主は……『ヘブロンへ』」と言われた（サムエル記下 2：1）。 PP 363.12

ヘブロンは、ベエルシバから北方 20 マイルのところにあり、ベエルシバと将来エルサレムになる場所の、ほぼ中間に位置していた。ここは、はじめアナクの父アルバの町、キリアテ・アルバと呼ばれていた（ヨシュア 14：15、21：11 参照）。のちに、それは、マムレと呼ばれ、ここに、父祖たちの埋葬場「マクペラのほら穴」があった（創世記 49：30、31 参照）。ヘブロンは、カレブの所有であって、今は、ユダの首都になっていた。それは、肥えた山々や実り豊かな土地にかこまれた谷間に位置していた。パレスチナの最も美しいぶどう園が、その周辺にあり、オリブその他の果樹園も数多く点在していた。 PP 363.13

ダビデと彼の従者たちは、すぐに神から受けた指示に従う準備をした。やがて、600 人の武装した軍人とその妻子たちと、彼らの牛や羊が、ヘブロンに向かって行った。この旅の一団が町にはいると、ユダの人々は、ダビデを将来のイスラエルの王として歓迎しようと待ちかまえていた。すぐに彼の即位式の準備が行われた。彼らは、「その所でダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした」（サムエル記下 2：4）。しかし、武力によって、彼の権威を他の部族にまで確立しようとはしなかった。 PP 363.14

新たに即位した王の最初の行動の 1 つは、サウルとヨナタンの死に対して、心から追悼の意を表することであった。ヤベシ・ギレアデの人々が、勇敢に倒れた指導者の遺体を取りもどして、丁重に葬ったのを知って、ダビデは、ヤベシに使者をつかわして言った。「あなたがたは、主君サウルにこの忠誠をあらわして彼を葬った。どうぞ主があ

なたがたを祝福されるように。どうぞ主がいまあなたがたに、いつくしみと真実を示されるように。あなたがたが、この事をしたので、わたしもまたあなたがたに好意を示すであろう」（同 2：5、6）。そして彼は、自分がユダの王位についたことを発表して、これまで誠実に彼に仕えた人々の忠誠を促した。 PP 363.15

ユダの人々がダビデを王にしたことに対して、ペリシテ人は反対しなかった。彼らは、サウルの王国を弱めるために、放浪中のダビデを助けたのであった。そして、今、ダビデの勢力が拡大されたことは、かつて、彼らが彼を親切に扱ったために、結局、それが自分たちの利益になることを希望した。しかし、ダビデの治世には、困難がなかったわけではなかった。彼の即位と共に、謀反と反逆の暗い記録が始まった。ダビデは、謀反を起こして王位についたのではなかった。神が彼をイスラエルの王に選ばれたのであって、だれもそれに対して不信をいだき、反対する者はなかったのである。ところが、アブネルの策動によって、サウルの子のイシボセテが王であると宣言されて、イスラエルにおいて彼に敵対する王国が建設されたのであったが、そのとき、ユダの人々は、彼の権威を認 めようとしなかった。 PP 363.16

イシボセテは、サウル王家の弱い無能な代表者であったが、ダビデは、王国の責任をになうのにはるかに卓越した資格の持ち主であった。イシボセテを王位につけた主謀者のアブネルは、サウルの軍勢の指揮官で、イスラエル中で最もすぐれた人物であった。アブネルは、ダビデが、イスラエルの王として、主に油を注がれていたことを知っていた。しかし、長い間、彼を捜し求めて追跡したために、エッサイのむすこが、サウルの支配じた王国を継承することを快諾しなかった。 PP 364.1

こうした事情のもとにあって、アブネルは彼の本性を現し、彼が野心家で無節操な人間であることを暴露した。彼は、サウルと親しく交わっていたので、王の精神に感化され、神がイスラエルの王位に選ばれた人を軽蔑した。サウルが陣営で眠っていて、王の水のびんとやりが彼のそばから奪われたときに、ダビデが彼を激しく責めたことがあった。そのために、彼は、ますますダビデを憎んだ。彼は、ダビデが、王とイスラエルの人々の前で言ったことを覚えていた。「あなたは男ではないか。イスラエルのうちに、あなたに及ぶ人があろうか。それであるのに、どうしてあなたは主君である王を守らな

かったのか。……あなたがしたこの事は良くない。主は生きておられる。あなたがたは、まさに死に値する。主が油をそそがれた、あなたの主君を守らなかったからだ」（サムエル上 26：15、16）。この譴責は、彼の心に食い入った。そして、彼は、報復を企てて、イスラエルを分裂させ、それによって自分の地位を高めようと決心した。彼は滅びた王家の一員を利用して、自分の利己的野心と目的を達成しようと企てた。彼は、人々がヨナタンを愛していたことを知っていた。ヨナタンの思い出は、心に深く秘められていた。そして、軍勢は、サウルの最初の遠征の勝利を忘れてはいなかった。この反逆の指導者は大義名分を掲げて、彼の計画の実行にとりかかった。 PP 364.2

ヨルダン川の向こうのマハナイムが、王の住居に選ばれた。そこは、ダビデまたはペリシテ人の攻撃に対して最も安全であったからである。ここで、イシボセテの戴冠式が行われた。初め、ヨルダンの東の部族だけが彼の治世を承認したが、それは、ついにユダを除く全イスラエルに及んだ。サウルのむすこは、彼の隔離された都で、2 年の間世を治めた。しかし、アブネルは、自分の権力をイスラエル全上に及ぼそうと考えて、攻撃の準備を進めた。「サウルの家とダビデの家との間の戦争は久しく続き、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった」（サムエル記下 3：1）。 PP 364.3

ついに、敵意と野心によって築かれた王座は、裏切りによって転覆された。アブネルは、弱く無能なイシボセテに腹を立て、ダビデに走って、イスラエルの全部族を彼に引き渡すことを提言した。王は、アブネルの提案を承認した。彼は面目を保って、その計画を実施するために王の前を退いた。ところが、ダビデの軍勢の指揮官のヨアブは、この勇敢で名高い戦士が王に歓迎されたことをねたましく思った。アブネルとヨアブの間には流血ざたがあった。アブネルは、イスラエルとユダとが戦ったときに、ヨアブの兄弟アサヘルを殺していた。ヨアブはこれを機会に、自分の兄弟のあだを打ち、自分に対抗することになる敵を倒そうと考えて、卑劣にもアブネルを待ち伏せて殺した。 PP 364.4

ダビデは、この邪悪な攻撃のことを聞いて叫んだ。「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血に関して、主の前に永久に罪はない。どうぞその罪がヨアブの頭

と、その父の全家に帰するように」（同 3：28、29）。これには、ヨアブと彼の弟アビシヤイが荷担していたダビデは、国家がまだ不安定であることと、殺人者たちが権力と地位を占めた人々であったために、その犯罪に正当な罰を下すことができなかった。しかし彼は、公然とこの流血ざたに対する憎悪を表明した。アブネルの葬式は、公式の行事であった。ヨアブを先頭にして、軍隊は衣服を裂き、荒布をまとって悲しみの列に加わるように要求された。王は、埋葬の当日、断食して悲しみを表した。王は喪主として、棺のあとに従った。そして王は、墓で悲し みの歌をうたった。それは、殺人者たちに対しては痛烈な譴責であった。王は、アブネルを悲しんで言った。 PP 364.5

「愚かな人の死ぬように、 PP 365.1

アブネルがどうして死んだのか。 PP 365.2

あなたの手は縛られず、 PP 365.3

足には足かせもかけられないのに、 PP 365.4

悪人の前に倒れる人のように、 PP 365.5

あなたは倒れた」 PP 365.6

（サムエル記下 3：33、34） PP 365.7

ダビデが彼の恨み重なる敵を寛大な心をもって弔ったことは、イスラエル全土の信頼と賞賛をかちえた。「民はみなそれを見て満足した。すべて王のすることは民を満足させた。その日すべての民およびイスラエルは皆、ネルの子アブネルを殺したのは、王の意思によるものでないことを知った」（同 3：36、37）。王は、信頼している大臣や家来たちに、この犯罪について内密に語り、自分が希望するとおりの罰を殺人者たちに与えることができないことを認めて、神の正義に彼らを委ねた。「この日イスラエルで、ひとりの偉大なる将軍が倒れたのをあなたがたは知らないのか。わたしは油を注がれた王であるけれども、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこれらの人々はわたしの手におえない。どうぞ主が悪を行う者に、その悪にしたがって報いられるように」（同 3：38、39）。 PP 365.8

アブネルは、誠意をもってダビデに提言し、申し述べたのであったけれども、彼の動機は卑しく利己的であった。彼は、神が任命された王にしつこく反抗し、自分の栄誉

を追求していた。彼が長い間努力してきた運動を放棄したのは、恨みと傷つけられた誇りと激情とのゆえにであった。彼は、ダビデのところに走って、彼の軍の最高の栄誉の地位につきたいと望んだ。もしも彼の企てが成功したならば、彼の才能と野心やその大きな勢力と敬神の念の欠如などが、ダビデの王位と王国と繁栄を危機に陥れたことであろう。 PP 365.9

「サウルの子イシボセテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、その力を失い、イスラエルは皆あわてた」（同４：1）。王国を長く維持することができないことは明らかであった。やがて、もう１つの裏切りの行為によって、衰えつつあった勢力は完全に没落してしまった。イシボセテは、2 人の部下の不意打ちにあって殺された。彼らは、彼の首を切って、ユダの王の歓心を買おうと思って、急いでそれを持って来た。 PP 365.10

彼らは、ダビデの前に現れて、自分たちの犯罪の血なまぐさい証言をして言った。「あなたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきょう、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されました」（同４：8）。しかし、神ご自身がダビデの王位を確立し、敵から彼を救ってくださったのであるから、ダビデは、なにも、彼の力を確立するために裏切りの援助を望まなかった。彼は殺人者たちに、サウルを殺したと誇った者がどのような運命に陥ったかを語った。彼はっけ加えた。「『悪人が正しい人をその家の床の上で殺したときは、なおさらのことだ。今わたしが、彼の血を流した罪を報い、あなたがたを、この地から絶ち滅ぼさないでおくであろうか』。そしてダビデは若者たちに命じたので、若者たちは彼らを殺し……た。人々はイシボセテの首を持って行って、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬った」（同４：11、12）。 PP 365.11

イシボセテの死後、イスラエルの指導者間に、ダビデをすべての部族の王にしようという気運が高まった。「イスラエルのすべての部族はヘブロンにいるダビデのもとにきて言った、『われわれは、あなたの骨肉です。……あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そして主はあなたに、「あなたはわたしの民イスラエルを牧するであろう。またあなたはイスラエルの君となるであろう」と言われました』。このようにイス

ラエルの長老たちが皆、ヘブロンにいる王のもとにきたので、ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結んだ」（同 5：1～3）。こうして、神の摂理によって、彼が王位につく道が開かれた。彼は、自 分の野心を満足させようとは思わなかった。彼に与えられた栄誉は、自分で求めたものではなかったのである。 PP 365.12

アロンとレビの子孫が、8000 人以上もダビデに従った。人々の心持ちの変化は、著しく決定的であった。革命は、彼らの従事していた偉大な働きにふさわしく、静かに厳然と行われた。これまでサウルの臣民であった 50 万近くの人々が、ヘブロンとその周辺に集まってきた。山々や谷間には、群衆が満ちあふれた。戴冠式の時間が定められた。ダビデは、サウルの宮廷を追放され、山や丘や地のほら穴に隠れて生きのびていたのであるが、今や、同胞から受けることのできる最高の栄誉を受けようとしていた。式服を身にまとった祭司や長老たち、輝くやりやかぶとに身を固めた軍人や兵隊たち、遠方からの客などが、選ばれた王の戴冠式を見るために立っていた。ダビデは王衣をまとっていた。神聖な油が、大祭司によって彼のひたいに注がれた。サムエルに油を注がれたことは、王の就任式の時に行われることを預言的に示したものであった。その時は来た。ダビデは、厳粛な儀式によって、神の代表者としての職務に聖別された。王の笏が彼に手渡された。彼の義の統治の契約が書かれて、人々は忠誠を誓った。彼の頭に王冠がかぶせられて、戴冠式は終了した。イスラエルは、神の命じられた王をいただいた。忍耐して主を待ち望んでいた者は、神の約束の実現を見たのである。「こうしてダビデはますます大いなる者となり、かつ万軍の神、主が彼と共におられた、（同 5：10）。 PP 366.1

第 70 章　ダビデの治世

本章は、サムエル記下 5：6～25、6、7、9、10 章に基づく PP 366.2

ダビデは、イスラエルの王位が確立するとすぐ、彼の領土の都として、もっと適当な場所をさがし始めた。そして、ヘブロンから 20 マイル離れたところが、王国の将来の都に選ばれた。そこは、ヨシュアがヨルダン川を渡って、イスラエル軍を導き入れる前は、サレムと呼ばれていた。アブラハムは、この場所の近くで、彼の神に対する忠誠を証明した。ダビデが王位につく 800 年前、それは、いと高き神の祭司、メルキゼデクの故郷であった。それは、国土の中心の高台にあって、山々にかこまれて守備されていた。それは、ベニヤミンとユダの国境にあったので、エフライムにも近く、他の部族にも近かった。 PP 366.3

この場所を確保するために、ヘブル人はシオンとモリアの山々に城塞を構えていたカナン人の残りを追放しなければならなかった。この城塞はエブスと呼ばれ、その住民はエブス人と言われていた。エブスは、幾世紀もの間、難攻不落の城と思われていた。しかし、ヨアブを指揮官とするヘブル人が、これを包囲して占領した。ヨアブは、その功を認められて、イスラエル軍の総指揮官に任じられた。こうして、エブスが国家の首都になり、異教の名がエルサレムと変更された。 PP 366.4

地中海沿岸の富裕な町ツロの王ヒラムは、イスラエルの王と同盟を結ぶことを求めた。そして、エルサレムの宮殿建設に当たって、ダビデに援助を与えた。ツロから使者がつかわされて来た。それと共に大工と石工が送られ、高価な木材、香柏、その他の貴重な資材を積んだ長い行列が続いた。 PP 366.5

イスラエルは、ダビデのもとに統一されて、強大な力を持ち、エブスの城塞を占領し、ツロの王ヒラムと同盟を結んだことが、ペリシテ人の戦意を刺激した。そこで、彼らはふたたび大軍を率いて国内に侵入し、エルサレムのすぐ近くのレパイムの谷に陣取った。ダビデは、部下たちと共にシオンの要害に退き、神の指示を待った。「ダビデは主に問うて言った、『ペリシテびとに向かって上るべきでしょうか。あなたは彼らをわ

たしの手に渡されるでしょうか』。主はダビデに言われた、『上るがよい。わたしはかならずペリシテびとをあなたの手に渡すであろう』」（サムエル記下 5：19）。 PP 366.6

ダビデは、すぐに敵に向かって進撃し、彼らを打ち破って殺し、彼らが自分たちの勝利を確実にするために持ち出していた神々をぶんどった。ペリシテ人は、この屈辱的敗北に憤激して、再度襲来を試みた。彼らは、ふたたび上ってきて、「レパイムの谷に広がった」（同 5：22）。ダビデは、もう 1 度主の助けを求めた。すると偉大な“わたしはある”と言われる神は、イスラエル軍の指揮に当たられた。 PP 367.1

神は、ダビデに指示を与えて言われた。「上ってはならない。彼らのうしろに回り、バルサムの木の前から彼らを襲いなさい。バルサムの木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは奮い立たなければならない。その時、主があなたの前に出て、ペリシテびとの軍勢を撃たれるからである」（同 5：23、24）。もしもダビデが、サウルのように自分かってなことをしていたならば、成功が与えられなかったことであろう。しかし、彼は主の命令に従った。そして、「ダビデは神が命じられたようにして、ペリシテびとの軍勢を撃ち破り、ギベオンからゲゼルに及んだ。そこでダビデの名はすべての国々に聞えわたり、主はすべての国びとに彼を恐れさせられた」（歴代志上 14：16、17）。 PP 367.2

こうして、ダビデの王位は確立し、外敵の侵入もなくなったので、彼は、神の箱をエルサレムに移すという念願を達成しようと思った。箱は、長年の間、9 マイル離れたキリアテ・ヤリムに置かれていた。しかし、国家の都に神の臨在のしるしを持ってくるのはふさわしいことであった。 PP 367.3

ダビデは、それを非常な喜びと荘厳な式典にしたいと思ったので、イスラエルの指導者たち 3 万人を召集した。人々は、喜んで召集に応じた。大祭司と聖職についていた兄弟たち、部族のつかさたちや指導者たちは、キリアテ・ヤリムに参集した。ダビデは、聖なる熱意に燃えていた。箱は、アビナダブの家から運び出されて、新しい牛車にのせられた。そして、アビナダブのふたりのむすこがそれにつきそった。 PP 367.4

イスラエルの人々は、大喜びで叫び、歓喜の歌をうたって従い、楽器の音に合わせて歌う群衆の声がそれに和した。「ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った」（サムエル記下 6：5）。イスラエルが、このように勝ち誇った光景を目撃したのは、久しぶりのことであった。厳粛なうちにも喜びに満ちて、巨大な行列は山を越え谷を渡って、聖都に向かって進んだ。 PP 367.5

ところが、「彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを押えた。牛がつまずいたからである。すると主はウザに向かって怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の箱のかたわらで死んだ」（同 6：6、7）。突然、喜んでいた群衆は恐怖に襲われた。ダビデは驚き、大いに恐れて、心の中で神の正義を疑った。彼は、神の臨在の象徴として箱を尊ぼうとしていたのである。それなのになぜこの恐ろしい罰が与えられて、喜ばしい光景が悲しみと嘆きの時と変わったのであろうか。ダビデは、箱を自分の身辺に置くのは安全でないと考えて、そのままその場に止めておくことにした。それは近くにあったガテ人オベデエドムの家に置かれた。 PP 367.6

ウザの死は、明白な命令にそむいた罰であった。主はモーセによって、箱を運ぶ時の特別な指示を与えておられた。アロンの子孫の祭司以外は、それに触れることも、おおいをかけずに見ることさえできなかった。「その後コハテの子たちは、それを運ぶために、はいってこなければならない。しかし、彼らは聖なる物に触れてはならない。触れると死ぬであろう」と命じられていた（民数記 4：15）。祭司が箱におおいをかけ、そのあとでコハテ人が、箱の両側の環に通して固定されたさおを持って持ち上げなければならなかった。モーセは、幕屋の幕と板と柱の責任を負わせられたゲルションの子たちとメラリの子たちには、委ねられたものを運ぶために牛車を与えた。「しかし、コハテの子たちには、何をも渡さなかった。彼らの務は聖なる物を、肩にになって運ぶことであったからである」（同 7：9）。したがって、彼らがキリアテ・ヤリムから箱を移動した場合、主の指示に対して直接、許すことのできない違反を犯したのであった。 PP 367.7

ダビデと彼の民とは、聖なる働きをするために集まり、心から喜んでそれに従事したのであった。しかし、それが主の指示に従って行われていなかったために、主はその奉仕を受け入れることがおできにならなかった。ペリシテ人は神の律法を知らなかったから、箱をイスラエルに返す時に車に載せた。そして、主は、彼らの努力をお受け入れになった。しかし、イスラエル人は、彼らの手中に、これらすべてのことに関する神のみむねを明らかにしるしたものを持っていた。そして、これらの指示をなおざりにすることは、神のみ栄えを汚すことであった。ウザは僭越というさらに大きな罪を犯した。彼は神の律法を犯して、その神聖さを自覚しなくなり、告白しない罪をいだいたまま、神が禁じておられるにもかかわらず、神の臨在の象徴にあえて触れようとした。神は、部分的服従や神の戒めをあいまいに取り扱うことをお受け入れにならない。神は、ウザを罰することによって、神の要求に厳密な注意を払う重要性を、全イスラエルに印象づけようとされた。こうして、1 人の人間の死によって、人々が悔い改めるようになり、幾千の人々を罰する必要がないようにするのであった。 PP 368.1

ダビデは、彼自身の心が、神の前に全的には正しい関係にないことを感じた。そして、ウザが撃たれたのを見て、自分も何かの罪のために罰せられるのではないかと思って、箱を恐れた。しかし、オベデエドムは、喜びにふるえながらも、服従する者に対する神の恵みの契約として、神聖な象徴を歓迎した。今や、全イスラエルの注目がガテ人と彼の家族に向けられた。すべての者は、それが彼らのところでどうなるかを見守った。「主はオベデエドムとその全家を祝福された」（サムエル記下 6：11）。 PP 368.2

神の譴責は、ダビデに対して効果を現した。彼は、これまでになかったほどに、神の律法の神聖さと厳密に服従する必要とを自覚した。オベデエドムの家が祝福されたので、ダビデは、箱が彼と彼の民に祝福をもたらすであろうという希望をふたたびいだくことができた。 PP 368.3

彼は、3 ヶ月後にもう 1 度箱を移動させようと考えた。そして、今度は、主の指示に厳密に従おうと真剣に注意するのであった。ふたたび、国家のおもだった人々が召集され、大群衆がガテ人の家のまわりに集まった。箱はうやうやしく、神の命を受けた人々の肩に載せられた。群衆は、その後に従った。大行列は、震えおののきながら、ふ

たたび動き出した。6 歩進むと、ラッパが鳴って大行列は止まった。ダビデの命によって、「牛と肥えた物」が犠牲として捧げられた（同 6：13）。こうして、恐れとおののきが喜びに代わった。王は、王衣を脱いで、祭司が着るような亜麻布のエポデを身につけた。この行為によって、彼は、祭司の務めをしようと思ったのではなかった。エポデは、時には、祭司以外の人も着ていた。しかし、彼は、この聖なる式典において、神の前に彼の国民と平等の立場をとりたかったのである。その日、あがめられるのは、主であった。ただ主だけが尊崇の対象とならなければならなかった。 PP 368.4

長い行列は、ふたたび動きだして、琴、角笛、ラッパ、シンバルなどの楽の音が、多くの人の歌声とまじって空に響いた。そして、ダビデは喜びに満ちて、歌の調子に合わせて、「主の箱の前で踊った」（同 6：14）。 PP 368.5

ダビデが神の前で、敬虔な喜びに満ちて踊ったことを引用して、快楽愛好者たちは今流行している社交ダンスを正当化しようとするが、これは、そうした議論の根拠にはならない。今日、ダンスといえば、道楽と夜半の酒宴と結びついている。快楽のために、健康と道徳が犠牲にされている。ダンス・ホールに行く人々は、神を考えもしなければ、敬いもしない。祈りや賛美の歌は、彼らのつどいの場には不適当に思われる。これが決定的試験でなければならない。クリスチャンは、神聖なことに関する愛を弱めたり、神に奉仕する喜びを減少したりする傾向のある娯楽を求めてはならない。箱を移動するに当たって、喜びにあふれて神をたたえた音楽と踊りは、今日のダンスという娯楽とは、少しも似通ったところがなかったのである。1 つは、神をおぼえて神の神聖なみ名を高めるものであった。他のものは、人々に神を忘れさせ、神のみ名を汚させるサタンの手段である。 PP 368.6

凱旋の行列は、彼らの目には見えない王の神聖な象徴に従って、都に近づいた。すると、突然、人々は大声で歌いだして、城壁を守る者らに、聖都の門を開くように命じた。 PP 369.1

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。 PP 369.2

栄光の王がはいられる」 PP 369.3

一団の歌う人々と楽器を奏する人々は答えた。 PP 369.4

「栄光の王とはだれか」 PP 369.5

別の一団がそれに答えた。 PP 369.6

「強く勇ましい主、戦いに勇ましい主である」 PP 369.7

すると幾百の声がそれに和して、凱旋の合唱の声 PP 369.8

は高まった。 PP 369.9

「門よ、こうべをあげよ。とこしえの戸よ、あがれ。 PP 369.10

栄光の王がはいられる」 PP 369.11

ふたたび、「この栄光の王とはだれか」という喜 PP 369.12

びに満ちた問いが聞こえた。すると、「多くの水 PP 369.13

の音」のような大群衆の声が、歓喜に満ちあふれ PP 369.14

て答えるのが聞こえた。 PP 369.15

「万軍の主、これこそ栄光の王である」 PP 369.16

（詩篇 24：7～10、黙示録 19：6） PP 369.17

こうして門は広く開かれて、行列は都の中にはいり、箱は、それを迎えるために設けられた天幕の中にうやうやしく安置された。神聖な場所の前に、犠牲を捧げる祭壇が築かれた。酬恩祭と燔祭の煙と、香の煙とがイスラエルの賛美と祈りとともに、天にのぼっていった。礼拝はこれで終わった。王は、自分で民を祝福した。そして、王は、恵み深くも食物とほしぶどうの贈り物を、茶菓として彼らに分け与えた。 PP 369.18

この式典には、全部族が代表されていた。これは、ダビデのこれまでの治世のうちで、最も神聖な祝典であった。神の霊感が王に臨んだ。そして、沈みゆく太陽の光線が、幕屋を聖なる光に包んだ時に、彼は、恵み深い神の臨在の象徴が、イスラエルの王座のそば近くに、いま、置かれたことを、心から感謝したのである。 PP 369.19

ダビデは、こうした瞑想にふけりながら、「家族を祝福しようとして」宮殿のほうに向かった（サムエル記下 6：20）。しかし、ダビデの心を感動させた精神とは、全く異なった感情をいだいて、この喜ばしい光景を見たものがあった。「主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカルは窓からながめ、ダビデ王が主の前に舞い踊るのを見て、心のうちにダビデをさげすんだ」（同 6：16）。彼女は、腹を立てて苦り切

り、ダビデが宮殿に帰ってくるまで待つことができず、彼を出迎えて、ダビデのやさしいあいさつの言葉に対して苦々しい言葉でしゃべりまくった。彼女の言葉は、鋭く心を刺す皮肉であった。 PP 369.20

「きょうイスラエルの王はなんと威厳のあったことでしょう。いたずら者が、恥も知らず、その身を現すように、きょう家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました」（同 6：20）。 PP 369.21

ダビデは、ミカルが軽蔑して侮辱したのは、神の礼拝であることに気づいて、きびしい言葉で答えた。「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたしを選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ。わたしはまた主の前に踊るであろう。わたしはこれよりももっと軽んじられるようにしよう。そしてあなたの目には卑しめられるであろう。しかしわたしは、あなたがさきに言った、はしためたちに誉を得るであろう」（同 6：21、22）。ダビデの譴責に、主の譴責も加えられた。ミカルは、彼女の誇りと高慢のゆえに、「死ぬ日まで子供がなかった」（同 6：23）。 PP 369.22

箱の移動に当たって行われた厳粛な儀式は、イスラエルの人々に忘れ得ぬ印象を与えた。それは、聖所の務めに深い関心を喚起し、主に対する熱心を新たに燃え立たせた。ダビデは、力のかぎりを尽くして、こうした印象を深めようと努力した。歌による礼拝が、定期集会の中で定まって行われるようになった。ダビデは、聖所の務めの時に祭司が歌う詩篇ばかりでなくて、年ごとの祭りの際に、国立の祭壇まで人々が旅をする時に歌うものも作った。こうした影響は非常に強くて、国家が偶像礼拝に陥るのを防いだ。周囲の人々の多くは、イスラエルの繁栄をながめて、そ の民のために、このような偉大なことをなさったイスラエルの神をよく思うようになった。 PP 369.23

モーセが建てた幕屋は、箱を除くほかのすべての備品とともに、まだ、ギベアにあった。ダビデは、エルサレムを国家の宗教的中心にしようと考えた。彼は、自分のために宮殿を造った。それなのに、神の箱が天幕の中にあるのは、適当でないと考えた。ダビデは、彼らの王であられる主の臨在によって国家に与えられた栄誉に対して、イスラエルがいだいている感謝を表現するに足る壮麗な神殿を建てようと決心した。預言者ナ

タンにこの決意を伝えると、次のような励ましの返答があった。「主があなたと共におられますから、行って、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」（同 7：3）。 PP 370.1

しかし、その晩、主の言葉がナタンに臨み、王に対する言葉が与えられた。神のために家を建てる特権はダビデには与えられなかった。しかし、彼と彼の子孫とイスラエルの国に神の恵みの約束が授けられた。「万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取って、わたしの民イスラエルの君とし、あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。そしてわたしの民イスラエルのために 1 つの所を定めて、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするであろう。また前のように、……悪人が重ねてこれを悩ますことはない」（同 7：8～11）。 PP 370.2

ダビデは、神のために家を建てたいと望んでいたので、約束が与えられた。「主はまた『あなたのために家を造る』と仰せられる。……わたしはあなたの……子を、あなたのあとに立てて、……彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう」（同 7：11～13）。 PP 370.3

ダビデが神殿を建てることのできない理由が明らかにされた。「おまえは多くの血を流し、大いなる戦争をした。……わが名のために家を建ててはならない。見よ、男の子がおまえに生れる。彼は平和の人である。わたしは彼に平安を与えて、周囲のもろもろの敵に煩わされないようにしよう。彼の名はソロモン（平和な）と呼ばれ、彼の世にわたしはイスラエルに平安と静穏とを与える。彼はわが名のために家を建てるであろう」（歴代志上 22：8～10）。 PP 370.4

ダビデは、かねてからの彼の希望がかなえられなかったけれども、感謝してこの言葉を受け入れた、「主なる神よ、わたしがだれ、わたしの家が何であるので、あなたはこれまでわたしを導かれたのですか。主なる神よ、これはなおあなたの目には小さい事です。主なる神よ、あなたはまたしもべの家の、はるか後の事を語って、きたるべき

代々のことを示されました」（サムエル記下 7：18、19）。それから、彼は、彼の神との契約を更新した。 PP 370.5

ダビデは、心の中でしようと計画した工事をすることは、彼の名の栄誉であり、彼の政府に栄光をもたらすものであることを知っていたが、快く彼の意志を神のみこころに服従させた。このように感謝の気持ちをもって思い切ることは、クリスチャンの中でさえ、あまり見られない。壮年の力にあふれた時期が過ぎても、したいと思った何かの大事業を自分でやりとげようとする人が、なんとよくあることであろう。ところが、彼らは、それに不適任なのである。神の預言者がダビデに語ったように、神の摂理は、彼らがしようと望んでいる仕事が、彼らに与えられないことを告げる。他のために道を備えるのが彼らの仕事である。しかし、多くの者は感謝して、神の指示に従うかわりに、自分たちが軽視または拒否されたものと思い、しりごみしてしまい、もし、自分たちがしようと思ったことができないのならば、何もするまいと思うのである。また、負う能力のない責任をなんとかして保持しようと努力する者が多い。彼らは、自分では十分することができないことをしようとしてむなしく努力する一方、彼らのできることをおろそかにしている。こうして、彼らが協力しないために、大事業が妨害されたり、挫折したりするのである。 PP 370.6

ダビデは、ヨナタンと契約を結んで、敵との戦いが終わったならば、サウルの家の者に恵みを施すことを 約束した。王は、成功した時に、この契約を覚えていてたずねた。「サウルの家の人で、なお残っている者があるか。わたしはヨナタンのために、その人に恵みを施そう」（同 9：1）。彼は、子供の時から足が不自由だったヨナタンの子メピボセテのことを聞いた。サウルが、エズレルでペリシテ人に敗れたとき、この子のうばが彼を連れて逃げる時に、誤って落として歩けなくしてしまった。ダビデは、この青年を宮廷に呼び、心から親切に彼を迎え入れた。彼はメピボセテの家を支えるために、サウル個人の財産を彼に返した。しかし、ヨナタンの子メピボセテ自身は、いつも王の客となり、毎日王の食卓で食事をするのであった。メピボセテは、ダビデの敵の話を聞いて、彼を横領者のように考えて強い偏見をいだいていたが、王の寛大で丁重な歓迎と親切な取り扱いは、彼の心を捕らえた。彼は、ダビデに強く引きつけられた。そし

て、ヨナタンと同様に、神が選ばれた王に心からの忠誠を尽くすようになった。 PP 370.7

ダビデの王座が確立してから後、イスラエルの国は、長い間平和であった。国家が強力に一致しているのを見た周囲の国々は、公然と戦争をしかけないほうが得策であると考えた。そして、ダビデも、国家の組織と建設に力を注いで、戦いをしむけることはしなかった。しかし、ついに彼は、以前からの敵国ペリシテとモアブと戦って、両国を征服して属国とした。 PP 371.1

その後、周囲の国々がダビデの王国に対抗して、大同盟軍を結成した。そのため、ダビデの治世中の最大の戦争が起こって、最大の勝利をおさめることになり、領土が最も拡大されるのであった。実は、この敵の同盟は、ダビデの勢力の増大をねたむ心から起こったもので、ダビデが挑発したものでは全くなかった。それは、次のような事情によるものであった。 PP 371.2

アンモン人の王ナハシの死が、エルサレムに伝えられた。この王は、ダビデがサウルの怒りを避けて逃亡していた時に、ダビデを親切にもてなした王であった。そこで、ダビデは、自分が苦しんでいた時の親切に対する感謝を表すために、アンモン王の子で、その後継者のハヌンに使者を送って、弔意を表させた。「わたしはナハシの子ハヌンに、その父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」と彼は言った（同 10：2）。 PP 371.3

しかし、この丁重な行為は誤解された。アンモン人は、真の神を憎み、イスラエルの恨み重なる敵であった。ナハシがダビデに親切をよそおったのは、全くイスラエルの王サウルに対する憎しみからであった。ハヌンのつかさたちは、ダビデの言葉を曲解した。「ダビデが慰める者をあなたのもとにつかわしたのは彼があなたの父を尊ぶためだと思われますか。ダビデがあなたのもとに、しもべたちをつかわしたのは、この町をうかがい、それを探って、滅ぼすためではありませんか」と彼らは言った（同 10：3）。半世紀前、ヤベシ・ギレアデの人々がアンモン人に包囲されて和を請うた時に、ナハシは彼のつかさたちの勧告を入れて、残酷な条件を出したのである。ナハシは、彼らの右の目を全部くりぬくことを要求したのであった。ところが、イスラエルの王がアンモン

人の残酷な策略の裏をかいて、彼らがはずかしめて不能にしようとした人々をどのようにして救ったかを、彼らはまだありありと覚えていた。イスラエルに対する同じ憎しみが、まだ彼らの行動を支配していた。彼らは慰めの言葉を伝えたダビデの寛大な精神を思い知ることができなかった。サタンが人の心を支配するとき、彼らにねたみと疑惑の念をいだかせて、どんな善意をも曲解させてしまうのである。ハヌンは、つかさたちの勧告に聞き従って、ダビデの使者たちを斥候とみなし、彼らを軽蔑して侮辱した。 PP 371.4

アンモン人は、彼らの本性がダビデによくわかるように、何の抑制も受けずに、彼らの邪悪な計画を実行することが許されたのである。イスラエルが、この不実な異邦の民と同盟を結ぶことは、神のみこころではなかった。 PP 371.5

現在と同様、昔も、大使の任務は神聖なものとされていた。国家間共通の法律によって、大使はその身に暴力または侮辱を受けることがないように、その身の安全が保証されていた。王の代表者として立つ大使に加えられる侮辱は、すぐに報復に価するも のであった。イスラエルに加えた侮辱が必ず報復されることを知っていたアンモン人は、戦争の準備をした。「アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれることをしたとわかったので、ハヌンおよびアンモンの人々は銀千タラントを送ってメソポタミヤとアラム・マアカ、およびゾバから戦車と騎兵を雇い入れた、すなわち戦車 3 万 2 千を……雇い入れた……そこでアンモンの人々は町々から寄り集まって、戦いに出動した」（歴代志上 19：6、7）。 PP 371.6

これは、実に恐るべき同盟軍であった。ユフラテ川から地中海に至る地域の住民が、アンモン人と同盟を結んだ。カナンの北と東は、イスラエル王国を粉砕しようとして結束した敵軍にかこまれた。 PP 372.1

ヘブル人は、敵が国内に侵入するまで待たなかった。ヨアブの率いるヘブルの軍勢は、ヨルダン川を渡って、アマレクの都に向かって前進した。ヨアブは、軍勢を戦場に率い出したとき、彼らを鼓舞しようとして言った。「勇ましくしてください。われわれの民のためと、われわれの神の町々のために、勇ましくしましょう。どうか、主が良いと思われることをされるように」（同 19：13、サムエル記下 10：12 参照）。連合軍

の軍勢は、第一戦で敗れ去った。しかし、彼らは、戦いをやめようとせず翌年戦争を再開した。スリヤ王は、大軍を結集してイスラエルをおびやかした。ダビデは、この戦争の勝敗の結果の重大性を悟って自分みずから指揮に当たり、神の祝福のもとに、同盟軍に多大な損害を与えた。そして、レバノンからユフラテに至るスリヤ人が降参したばかりでなくて、イスラエルの属国になったのである。ダビデはアンモン人をも勇ましく攻め、ついに、彼らの城塞は落ちて、その全地域はイスラエルの領土となった。 PP 372.2

国家の存在を脅かした危機は、神の摂理のもとにイスラエルを、これまでになく強大な国家にする手段そのものとなった。この驚くべき救済を記念して、ダビデは歌った。 PP 372.3

「主は生きておられます。わが岩はほむべきかな。 PP 372.4

わが救の神はあがむべきかな。 PP 372.5

神はわたしにあだを報いさせ、 PP 372.6

もろもろの民をわたしのもとに従わせ、 PP 372.7

わたしの敵からわたしを救い出されました。 PP 372.8

まことに、あなたはわたしに逆らって PP 372.9

起りたつ者の上にわたしをあげ、 PP 372.10

不法の人からわたしを救い出されました。 PP 372.11

このゆえに主よ、 PP 372.12

わたしはもろもろの国民のなかであなたをたたえ、 PP 372.13

あなたのみ名をほめ歌います。 PP 372.14

主はその王に大いなる勝利を与え、 PP 372.15

その油そそがれた者に、ダビデとその子孫とに、 PP 372.16

とこしえにいつくしみを加えられるでしょう」 PP 372.17

（詩篇 18：46～50） PP 372.18

ダビデの歌全体を通じて、人々は、主が彼らの力であり救いであるという印象を強く受けたのである。 PP 372.19

「王はその軍勢の多きによって救を得ない。 PP 372.20
勇士はその力の大いなるによって助けを得ない。 PP 372.21
馬は勝利に頼みとならない。 PP 372.22
その大いなる力も人を助けることはできない」 PP 372.23
（詩篇 33：16、17） PP 372.24
「あなたはわが王、わが神、 PP 372.25
ヤコブのために勝利を定められる方です。 PP 372.26
われらはあなたによって、あだを押し倒し、 PP 372.27
われらに立ちむかう者を、 PP 372.28
み名によって踏みにじるのです。 PP 372.29
わたしは自分の弓を頼まずわたしのつるぎもまた、 PP 372.30
わたしを救うことができないからです、 PP 372.31
しかしあなたはわれらをあだから救い、 PP 372.32
われらを憎む者をはずかしめられました」 PP 372.33
（詩篇 44：4～7） PP 372.34
「ある者は戦車を誇り、ある者は馬を誇る。 PP 372.35
しかしわれらは、われらの神、 PP 372.36
主のみ名を誇る」 PP 372.37
（詩篇 20：7） PP 372.38

こうして、イスラエル王国は、まずアブラハムに約束され、後にモーセにくりかえして与えられた約束どおりの範囲に達したのである。「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテまで」（創世記 15：18）。イスラエルは、周囲の国々から尊敬され、恐れられる大国になった。国内におけるダビデの勢力も非常に大きくなった。彼は、どの時代においても見られなかったほど、国民の愛情と忠誠をかち得たのである。彼は、神をあがめたのであった。だから、神は、今、彼に栄誉を与えておられるのであった。 PP 373.1

しかし、繁栄のさなかに危険がひそんでいた。ダビデは、外的に最大の勝利を収めていた時に、最大の危機に陥り、最も屈辱的敗北を喫したのである。 PP 373.2

第 71 章　ダビデの罪と回心

本章は、サムエル記下 11、12 章に基づく PP 373.3

聖書には、人間を賞賛する言葉がほとんどない。この世に生存した最も善良な人々の美徳でさえ、聖書にあまり書かれていないのである。この沈黙は無意味ではない。そこに教訓が隠されている。人間が持っている美点は皆、神の賜物である。彼らの善行は、キリストを通して与えられた神の恵みによって行われた。彼らは、すべてを神に負うているのであるから、彼らがどんな人間で、どんな行為をしようとその誉れは神にだけ帰すべきである。彼らは、ただ、み手の中の器に過ぎないのである。そればかりではない。聖書の歴史のすべての教訓が教えているように、人間を賞賛し、高めることは危険である。なぜなら、人間が神に全く依存していることを見失い、自分自身の力にたよるようになると、彼は必ず堕落するからである。人間は、人間以上に強い敵と戦っている。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」（エペソ 6：12）。われわれは、自分の力で戦い続けることはできない。そして、心を神からそらし、自己高揚と自己依存に陥れるものは何であっても、必ずわれわれを敗北させるものである。聖書は、人間の能力にたよらず神の力にたよることを奨励するのをその主題としている。 PP 373.4

ダビデを堕落させたのは、自己過信と自己高揚の精神であった。甘言、陰険な権力の誘惑、ぜいたくなどが、彼に影響を与えずにはおかなかった。周りの国々との交際もまた悪影響を及ぼした。東方の諸王の間の習慣に従って、国民の間では許されない犯罪が王には許された。王には、国民と同様の自制をする義務がなかったのである。こうしたことは、すべて、罪が、はなはだしく憎むべきものであることを、ダビデに感じさせなくしたのである。そして、彼は心を低くして主の力にたよる代わりに、自分自身の知恵と力にたよりはじめた。サタンは、唯一の力の源である神から魂を引き離すとすぐに、人間の肉の心の汚れた欲望を起こさせようとする。敵の働きは、急激ではない。それは、

最初は、突然でも驚くほどのものでもない。それは、原則の城塞をひそかにくつがえすことである。それは、初め、神に対する忠誠と、全く神に信頼することを怠るとか、世の風俗や習慣に従おうとする気持ちなどの、一見小さいことから始まる。 PP 373.5

ダビデは、アンモン人との戦争を終結する前に、軍務をヨアブに委ねて、エルサレムに帰った。スリヤ人はすでにイスラエルに降伏していた。そして、アンモン人の全滅も確実に思われた。ダビデは、戦勝の成果と彼の賢明で有能な統治の栄光に包まれていた。誘惑者が彼の心を捕らえる機会をつかんだのは、彼がくつろいで油断していた時であった。神が、ダビデを神との密接な交わりに入れ、大きな恵みを彼に現されたということが、彼の品性を汚さずに守る最も強力な刺激となっていなければならなかった。しかし、落ちついて、自己の安全が確保された時に、彼は神を手放した。ダビデはサタンに敗れて、魂に罪の汚点をつけた。国家の指導者として神の命を受け、神 の律法を施行するために神に選ばれた彼自身が、その戒めをふみにじった。悪人を恐れさせるべきであった者が、自分自身の行為によって、悪を勧めたのである。 PP 373.6

ダビデは若いころ、危険のまっただ中にあったとき、自分の潔白を意識して、自分のことを神に委ねることができた。主の手は、彼の足をつまずかせようとしておかれた無数のわなの間を導いて、無事に通らせてくださった。しかし、彼は、今、罪を犯しても悔い改めず、天の神の助けも導きも求めずに、罪のために陥った危険から、自分で脱出しようとしたのである。王を罪に陥れた美しい女バテシバは、ダビテの最も忠勇な将軍の 1 人ヘテ人ウリヤの妻であった。もし、犯罪が明るみに出たら、どういうことになるかは、誰も予測できなかった。神の律法は、姦淫の罪を犯した者に死の宣告を下していた。であるから、このように恥辱をこうむった高慢な軍人は、王の生命をとるか、あるいは国民に反逆を扇動して報復を企てるかも知れなかった。 PP 374.1

罪を隠そうとするあらゆる努力は、すべてむだに終わった。彼は、サタンの権下に自分を陥れてしまった。危険が彼を取り巻き、死よりもきびしい恥辱が迫っていた。脱出する道はただ 1 つしかないように思われた。そして、彼は絶望のあまり、急いで姦淫に殺人の罪を加えたのである。サウルの滅びを企てた者が、ダビデをも滅ぼそうとしていた。誘惑は異なっていたが、それらは、ともに神の律法を犯させるものであった。

もし、ウリヤが戦場で敵の手によって殺されたならば、彼の死の責任を王が問われることはない。そして、バテシバは、なんの妨げもなくダビデの妻になることができ、疑惑は排除され、王の名誉は維持されるのであった。 PP 374.2

ウリヤは、自分自身の死の命令書を持って送り出された。彼によって王からヨアブへ送られた手紙は、こう命じていた。「あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」（サムエル記下 11：15）。ヨアブは、すでに非道な殺人の罪を 1 つ犯していたので、王の命令に従うことをためらわなかった。こうして、ウリヤはアンモン人の手によって倒れた。 PP 374.3

これまで、ダビデの王としての記録は、どんな王も及ばなかったほどのものであった。彼について、「そのすべての民に正義と公平を行った」と書かれている（同 8：15）。彼の誠実さが、国民の信頼と忠誠をかち得たのであった。しかし、彼が神から離れ、悪魔に従った時に、彼は、一時的にサタンの手下になったのである。しかし、彼は、なお神が彼にお与えになった地位と権威を保持していた。であるから、彼は従う者の魂を危険に陥れるような要求をしたのである。こうして、神に対してでなくて、王に忠誠を尽くしたヨアブは、王が命令を下したために、神の律法を犯したのである。 PP 374.4

ダビデの権力は、神から与えられたものであって、それは、神の律法と調和した時にだけ行使されるべきものであった。彼が神の律法に反して命令を下した時には、それに従うことは罪となったのである。「おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたもの」であるが、神の命令に反したものに従ってはならない（ローマ 13：1）。使徒パウロは、われわれが従うべき原則をコリント人に書いた。「わたしがキリストにならう者であるように、あなたがたもわたしにならう者になりなさい」（Ⅰコリント 11：1）。 PP 374.5

ダビデの命令が実行されたという報告が彼に送られたが、それは、ヨアブにも王にもなんの関係もないように、注意深く表現されていた。ヨアブは、「その使者に命じて言った、『あなたが戦いのことをつぶさに王に語り終ったとき、もし王が怒りを起して、……言われたならば、その時あなたは、「あなたのしもべ、ヘテびとウリヤもまた死に

ました」と言いなさい』。こうして使者は行き、ダビデのもとにきて、ヨアブが言いつかわしたことをことごとく告げた」（サムエル記下 11：19～22）。 PP 374.6

王は答えて言った。「『この事で心配することはない。つるぎはこれをも彼をも同じく滅ぼすからである強く町を攻めて戦い、それを攻め落しなさい』と。そしてヨアブを励ましなさい」（同 11：25）。 PP 374.7

バテシバは、定められた日数の間、夫のために悲しんだ。その喪が過ぎた時に、「ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となっ」た（同 11：27）。自分の生命が危機に瀕した時でさえ、主が油を注がれた者に手を下さなかったほどに敏感な良心と強い栄誉尊重の心をもっていたダビデが、彼の最も忠実で勇敢な軍人の 1 人に対して悪事を行って殺害し、罪によって手にしたものを、ひそかに楽しもうとするまでに堕落したのである。ああ、精金はなんと曇ったことであろう。最も純粋な金は、なんと変化したことであろう。 PP 375.1

サタンは、最初から罪によって利益が得られると人々に言ってきた。こうして彼は、天使たちをあざむいた。同様に彼はアダムとエバを罪に誘惑した。彼は、今もなお、こうして多くの人々を神に従わせまいとしている。罪の道は好ましいもののように見せられているが、「その終りはついに死に至る道」である（箴言 14：12）。この道に踏み込んでも、罪の結果の苦さを悟って、早くその道から離れた者は幸福である。神はダビデをあわれんで、彼が罪のいつわりの報酬によって完全な滅びに陥るままに放任されなかった。 PP 375.2

また、イスラエルのためにも、神の介入が必要であった。時の経過につれて、バテシバに対して行ったダビデの罪が明るみに出て、彼がウリヤの死を計画したのではないかという疑惑が起こった。主のみ栄えが汚された。主はダビデを恵み、高められた。ところがダビデの罪は、神の品性を誤表し、神のみ名をはずかしめた。それは、イスラエルにおける敬神の念の標準を下げ、多くの人々の心の中の罪に対する嫌悪感を低下させるものであった。他方では、神を愛することも恐れることもしない人々は、それによって、大胆に罪を犯すのであった。 PP 375.3

預言者ナタンが、ダビデに譴責の言葉を伝えるように命じられた。それは、恐ろしくきびしい言葉であった。たいていの王は、このような譴責を受ければ、譴責者を死刑に処することは確実であろう。ナタンは、神の言葉をひるまず伝えたが、それを天から授かった知恵によって語り、王の共感を呼び、良心を覚醒させ、彼自身のくちびるから、自分に死の宣告を下させたのである。預言者は、国民の権利を守るために神の任命を受けたダビデに、補償を必要とする不正と圧迫の物語を告げたのである。 PP 375.4

「ある町にふたりの人があって、ひとりは富み、ひとりは貧しかった。富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持っていたが、貧しい人は自分が買った 1 頭の小さい雌の小羊のほかは何も持っていなかった。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところで寝て、彼にとっては娘のようであった。時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから 1 頭を取って、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取って、これを自分の所にきた人のために調理した」（サムエル記下 12：1～4）。 PP 375.5

王は怒って叫んだ。「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかったため、その小羊を 4 倍にして償わなければならない」（同 12：5、6）。 PP 375.6

ナタンは、王を見つめた。そして、彼の右手を天にあげ、厳粛に言った。「あなたがその人です」（同 12：7）。彼は続けて言った。「どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなったのですか」（同 12：9）。悪人は、ダビデのように、人間から犯罪を隠そうとする。彼らは、悪い行為を人間の目と記憶から永久に葬り去ろうとする。しかし、「すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない」（ヘブル 4：13）。「おおわれたもので、現れてこないものはなく、隠れているもので、知られてこないものはない」（マタイ 10：26）。 PP 375.7

ナタンは言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とし、あなたをサウルの手から救いだし……た。……どうして

あなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなったのですか。あなたはつるぎをも ってヘテびとウリヤを殺し、その妻をとって自分の妻とした。すなわちアンモンの人々のつるぎをもって彼を殺した。……つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう』。……『見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災を起すであろう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取って、隣びとに与えるであろう。……あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである』」（サムエル記下 12：7～12）。 PP 375.8

預言者の譴責は、ダビデの心を感動させた。良心は目覚めた。彼の罪がどんなに憎むべきものであるかが明らかにされた。彼は、神の前に悔いくずおれた。彼は、くちびるをふるわせて言った。「わたしは主に罪をおかしました」（同 12：13）。他人に対して犯した悪事は、すべて害を受けた者から神へとさかのぼるのである。ダビデは、ウリヤとバテシバの両方に恐ろしい罪を犯したことを痛感した。しかし、神に対する罪は、それより無限に大きかったのである。 PP 376.1

主に油を注がれた者に死刑を執行するものは、イスラエルにおいて思いだすことはできなかったのであるが、罪を犯して、まだ赦しを受けていないダビデは、神の急速な刑罰がくだって殺されるのではないかとおののいた。しかし、預言者によって、彼に言葉が送られた。「主もまたあなたの罪を除かれました。あなたは死ぬことはないでしょう」（同 12：13）。 PP 376.2

しかし、正義は維持されなければならなかった。死の宣告は、彼から、彼の罪の子に移された。こうして、王は悔い改める機会が与えられた。彼にとって、子供の苦痛と死とは、彼の刑罰の一部であったが、それは、自分の死よりもはるかに苦いものであった。預言者は言った、「あなたはこの行いによって大いに主を侮ったので、あなたに生れる子供はかならず死ぬでしょう」（同 12：14）。 PP 376.3

ダビデは、子供が撃たれたとき、断食と深くへりくだった思いをもって、その子の命のために嘆願した。彼は王衣と王冠とをぬいで、毎夜、地に伏して自分の罪のために苦しむ幼児のために、はりさけるばかりに悲しんで嘆願した。「ダビデの家の長老たちは、彼のかたわらに立って彼を地から起そうとしたが、彼は起きようとは」しなかった

（同 12：17）。個人または、町に刑罰の宣告が下された時に、謙遜と悔い改めによって災いが止められ、即座に赦しをお与えになる恵み深い神が、和解の使者を送られることがよくあったのである。ダビデは、こうしたことに心を励まし、子供の生命がある間、嘆願し続けたのである。しかし、子供が死んだことを聞いて、彼は静かに神の命に従った。彼が、自分自身で正当であると宣言した罪の報復の第一撃がくだったのであった。しかし、ダビデは、神の恵みに信頼して、慰めを得たのである。 PP 376.4

ダビデの堕落の記録を読んで、「なぜこの記録が公表されたのだろうか。天の神から非常な栄誉を与えられた者の生涯のこの暗い出来事を世界に知らせることを神はなぜよしとされたのだろう」と尋ねる人が非常に多い。預言者は、ダビデを譴責したとき、彼の罪について言った。「なんじこのわざによりて、主の敵に大いなるののしる機会を与え」た（同 12：14・文語訳参照）。その後、各時代を通じて無神論者たちは、この暗いしみをもつダビデの品性を指摘し、勝ち誇るとともに嘲笑して、「これが神の心にかなった人だ」と叫んだ。こうして、宗教が恥辱をこうむり、神と神の言葉が冒瀆された。人々は、神を信じようとせず多くの者は、敬虔なよそおいの陰で大胆に罪を犯すようになったのである。 PP 376.5

しかし、ダビテの生涯は、罪を犯すことを勧めてはいない。彼が、神のみこころにかなった人だと言われたのは、彼が神の指示に従って歩んでいた時のことであった。彼が罪を犯した時に、悔い改めて、主に立ち返るまでは、そうではなかったのである。神の言葉は、「ダビデがしたこの事は主の目に悪であった」と明らかに宣言している（同 11：27・文語訳参照）。主は、預言者を通じてダビデに言われた。「どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなったのですか。……あなたがわたしを軽んじ……たので、つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであろう」（同 12：9、10）。ダビデは罪を悔い改めて許赦され、主に受け入れられたのではあっ たが、彼は、自分自身がまいた種の痛ましい実を刈り取ったのである。彼と彼の家にくだった刑罰は、罪に対する神の憎しみを証明している。 PP 376.6

これまで、神の摂理は、敵のあらゆる策略からダビデを守り、直接サウルを制するために働いてきた。しかしダビデの罪は、彼と神との関係を変えた。主が彼の悪を是認

することは、どうしてもおできにならなかった。主はサウルの敵意からダビデを保護したように、彼を、彼の罪の結果から保護する力を働かせることはおできにならなかった。 PP 377.1

ダビデ自身にも大きな変化が起こった。ダビデは、彼の罪とその広範囲に及ぶ影響とを自覚して、心がくだかれた。彼は、国民の前で恥辱をこうむった。彼の感化力は弱まった。これまで、彼の繁栄は、彼が主の戒めに忠実に従ったためであると考えられていた。しかし、彼の罪を知った国民は、さらにかって気ままに罪を行うに至った。彼自身の家の中での彼の権威と、むすこたちに尊敬と服従を要求する彼の力とは弱まった。彼は、罪を責めるべき時にも、自己の罪悪感のために沈黙を守った。これは、彼の腕を弱めて、彼の家の中で正義を行うことを不可能にした。彼の悪行がむすこたちに影響を及ぼした。そして、神は、そうした結果が起こらないように介入することをされなかったのである。神は、物事を自然のなりゆきにまかせられた。こうして、ダビデはきびしく罰せられた。 PP 377.2

ダビデは、堕落後、まる 1 年間というものは、一見、安泰に暮らしていた。表だった神の怒りのしるしはなかった。しかし、神の宣告は、彼の頭上にかかっていた。どんな悔い改めも避けることのできない刑罰と報復の日は、急速にしかも確実に近づいていた。それは、彼の全生涯を陰うつにする苦悩と恥辱であった。ダビデの例を引用して、自己の罪のとがを軽減しようと試みるものは、不真実な者の道は滅びであることを聖書から学ばなければならない。彼らも、ダビデのように悪の道から立ち直っても、罪の結果はこの世においてさえ、苦く耐えがたいものであることを知るであろう。 PP 377.3

ダビデの生涯は、神に大いに祝福され、恵まれた者でさえも、自分は安全であると思ったり、目をさまして祈ることを怠ったりすべきでないことを警告するためのものであった。こうして、これは心を低くして、神が教えようとされた教訓を学ぼうと努める者たちに対する警告となったのである。このようにして、世代から世代を通じて幾千という人々が、誘惑者の力に襲われる危険を自覚したのである。主から大きな栄誉を与えられたダビデの堕落は、彼らに自己不信の念を起こさせた。信仰によって与えられる神の力だけが、彼らを守ることができることを彼らは悟ったのである。彼らは、神の中に、

彼らの力と安全とがあることを知って、サタンの領分に 1 歩でも踏み込むことを恐れた。 PP 377.4

神の宣告がダビデに下される以前から、彼はすでに、罪の実を刈り始めていた。彼の良心は休まらなかった。その時の彼の心の苦しみが、詩篇 32 篇に描かれている。彼は言っている。 PP 377.5

「そのとががゆるされ、 PP 377.6

その罪がおおい消される者はさいわいである。 PP 377.7

主によって不義を負わされず、 PP 377.8

その霊に偽りのない人はさいわいである。 PP 377.9

わたしが自分の罪を言いあらわさなかった時は、 PP 377.10

ひねもす苦しみうめいたので、 PP 377.11

わたしの骨は古び衰えた。 PP 377.12

あなたのみ手が昼も夜も、 PP 377.13

わたしの上に重かったからである。 PP 377.14

わたしの力は、夏のひでりによって PP 377.15

かれるように、かれ果てた」 PP 377.16

（詩篇 32：1～4） PP 377.17

そして、詩篇 51 篇は、神からの譴責の言葉が与えられて、ダビデが悔い改めたときの言葉である。 PP 377.18

「神よ、あなたのいつくしみによって、 PP 377.19

わたしをあわれみ、 PP 377.20

あなたの豊かなあわれみによって、 PP 377.21

わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。 PP 378.1

わたしの不義をことごとく洗い去り、 PP 378.2

わたしの罪からわたしを清めてください。 PP 378.3

わたしは自分のとがを知っています。 PP 378.4

わたしの罪はいつもわたしの前にあります。…… PP 378.5

ヒソプをもって、わたしを清めてください、 PP 378.6

わたしは清くなるでしょう。 PP 378.7

わたしを洗ってください、 PP 378.8

わたしは雪よりも白くなるでしょう。 PP 378.9

わたしに喜びと楽しみとを満たし、 PP 378.10

あなたが砕いた骨を喜ばせてください。 PP 378.11

み顔をわたしの罪から隠し、 PP 378.12

わたしの不義をことごとくぬぐい去ってください。 PP 378.13

神よ、わたしのために清い心をつくり、 PP 378.14

わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください。 PP 378.15

わたしをみ前から捨てないでください。 PP 378.16

あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください。 PP 378.17

あなたの救の喜びをわたしに返し、 PP 378.18

自由の霊をもって、わたしをささえてください。 PP 378.19

そうすればわたしは、とがを犯した者に PP 378.20

あなたの道を教え、 PP 378.21

罪びとはあなたに帰ってくるでしょう。 PP 378.22

神よ、わが救の神よ、 PP 378.23

血を流した罪からわたしを助け出してください。 PP 378.24

わたしの舌は声高らかにあなたの義を歌うでしょ PP 378.25

う」 PP 378.26

（詩篇 51：1～14） PP 378.27

こうして、祭司、士師、つかさ、軍人たちの居並ぶ宮廷の国民の公の集会で歌われる聖歌の中で、彼の堕落は最後の世代にまで伝えられるのであった。イスラエルの王は、彼の罪と悔い改めと、神の恵みによって赦される希望とを語ったのである。彼は、自分の罪を隠そうとせずに、彼の堕落の悲しい物語によって、他の者が教訓を受けるようにと望んだのである。 PP 378.28

ダビデは、心から深く悔い改めた。彼は、自分の罪の弁解をしようとはしなかった。彼は、自分に下る刑罰からのがれようと望まずに、神に祈りを捧げた。しかし、彼は、神に対する自分の罪の大きさを認めた。彼は、自分の心の汚れを悟った。彼は、自分の罪を嫌悪した。彼が祈ったのは、ただ赦されることだけでなくて、心が清められることであった。ダビデは、絶望して苦闘を放棄することをしなかった、悔い改める罪人に対する神の約束の中に、赦されて受け入れられる証拠を彼は見たのである。 PP 378.29

「あなたはいけにえを好まれません。 PP 378.30

たといわたしが燔祭をささげても PP 378.31

あなたは喜ばれないでしょう。 PP 378.32

神の受けられるいけにえは砕けた魂です。 PP 378.33

神よ、あなたは砕けた悔いた心を PP 378.34

かろしめられません」 PP 378.35

（詩篇 51：16、17） PP 378.36

ダビデは倒れたのであるが、主は彼を起こされた。彼は、堕落する以前よりももっと神と調和し、同胞と心を 1 つにするようになった。彼は、解放された喜びを歌った。 PP 378.37

「わたしは自分の罪をあなたに知らせ、 PP 378.38

自分の不義を隠さなかった。 PP 378.39

わたしは言った、 PP 378.40

『わたしのとがを主に告白しよう』と。 PP 378.41

その時あなたはわたしの犯した罪をゆるされた。 PP 378.42

…… PP 378.43

あなたはわたしの隠れ場であって、 PP 378.44

わたしを守って悩みを免れさせ、 PP 378.45

救をもってわたしを囲まれる」 PP 378.46

（詩篇 32：5～7） PP 378.47

神は、こうしたことよりは、はるかに軽く思われる罪を犯したサウルを拒否したあとで、このように大罪を犯したダビデを赦すとは不公平であると言って、つぶやく人が多い。しかし、ダビデは謙遜に自分の罪を告白したが、サウルは譴責を軽んじて、心を頑固にして、悔い改めなかったのである。 PP 378.48

ダビデの生涯の中のこの出来事は、悔い改める罪 人にとって、非常に重大である。これは、人類の苦闘と誘惑、そして、神に対する悔い改めと、われらの主イエス・キリストに対する信仰に関して与えられた最も感銘深い例の 1 つである。これは、各時代を通じて、堕落して罪の重荷にあえぐ魂を鼓舞してきたのであった。罪に負け、今にも絶望に陥ろうとした神の子供たちの多くは、ダビデが罪に苦しんだとは言え、真心からの悔い改めと告白によって、神に受け入れられたことを思い出したのである。そして、彼らもまた勇気づけられて、悔い改め、神の戒めの道を歩もうと、ふたたび試みたのである。 PP 378.49

神の譴責を受けた時に、謙遜に罪を告白して悔い改める者は、誰でもダビデのように希望をもつことができるのである。信仰をもって神の約束を受け入れる者は、誰でも赦されるのである。 PP 379.1

主は、真に悔い改める魂を 1 人でもお捨てにならない。彼は、このように約束しておられるのである。「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」（イザヤ 27：5）。「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（同 55：7）。 PP 379.2

第 72 章　アブサロムの反逆

本章は、サムエル記下 13～19 章に基づく PP 379.3

預言者ナタンのたとえを聞いたダビデは、何気なく、「4 倍にして償わなければならない」と言い、自分自身に宣告を下すことになった（サムエル記下 12：6）。彼は、自分自身の宣告どおりに罰せられるのであった。彼の 4 人のむすこたちは、死ななければならなかった。そして、その死の 1 つ 1 つは、父の罪の結果起こるのであった。 PP 379.4

ダビデは、長子アムノンの不面目な犯罪を罰しも譴責もせずに見過ごした。律法は、姦淫を犯す者に死の宣告を下していた。それに、アムノンの人間性にもとった犯罪は、彼を二重に罪深いものにした。しかし、ダビデは、自分自身の罪に心を責められていたので、犯罪者を罰することができなかった。このように非道な扱いを受けた妹の兄で保護者であったアブサロムは、丸 2 年の間、報復の計画を心に秘めて、最後に決定的打撃を加えようとしていた。近親姦を犯したアムノンは、王子たちの宴会で酒に酔っているところを、彼の兄弟の命令によって殺された。 PP 379.5

ダビデは、二重の罰が与えられた。恐ろしい知らせが王に伝えられた。「『アブサロムは王の子たちをことごとく殺して、ひとりも残っている者がない』……王は立ち、その着物を裂いて、地に伏した。そのかたわらに立っていた家来たちも皆その着物を裂いた」（同 13：30、31）。王子たちは、驚いてエルサレムに帰り、事件の真相を彼らの父に話した。アムノンだけが殺されていたのである。「王の子たちはきて声をあげて泣いた。王もその家来たちも皆、非常にはげしく泣いた」（同 13：36）。しかし、アブサロムは、彼の母方の祖父、ゲシュルの王、タルマイのもとに逃亡した。 PP 379.6

アムノンは、ダビデの他の王子たちと同様に、かってなことをするままに放任されていた。彼は、神の要求が何であろうと、彼のすべての欲求を満たそうとしていた。神は、彼が大きな罪を犯したにもかかわらず、彼を長く忍ばれた。彼は、2 年の間、悔い

改める機会が与えられていた。しかし、彼は、罪の生活を続け、罪あるままで殺されて、恐ろしい審判にあずかる身となった。 PP 379.7

ダビデは、アムノンの犯罪を罰する義務を怠った。そして、王であり父であるダビデの怠慢と、王子の頑迷さのゆえに、主は、事件が当然の経過をたどるのを許し、アブサロムを制止されなかった。両親または支配者が、罪悪を罰する義務を怠るならば、神ご自身がその事件の処理に当たられる。こうして、悪の 勢力を抑えていた神の制止力がいくぶんか除かれて、罪をもって罪を罰するような出来事が起こるのである。 PP 379.8

ダビデが、アムノンを不当に扱って放縦を許した悪影響は、これで終わったのではなかった。というのは、アブサロムの父に対する離反が、ここから始まったからである。彼がゲシュルへのがれたあとで、ダビデは、むすこの犯罪に何かの罰を与える必要を感じて、彼が帰ってくることを禁じた。そして、これは、王がすでにかかわっている不可避の害悪を少なくするどころか、それを増大させる傾向があった。活気と野心に満ちてはいるが、無節操なアブサロムは、追放されて国事に参加できなくなると、やがて危険な策動に熱中したのである。 PP 380.1

ヨアブは、2 年の期間が終わったので、父と子との和解をはかろうと試みた。そのために、彼は、賢い女として評判の高いテコアの女の援助を得ることにした。彼女は、ヨアブの指示に従って、自分が寡婦であることと、2 人のむすこが、彼女の唯一の慰めであり支えであったとダビデに言った。この 2 人が争い、1 人は、ついにもう 1 人を殺した。ところが、全家族は、兄弟を打ち殺した者を報復者に引き渡せと要求した。「こうして彼らは残っているわたしの炭火を消して、わたしの夫の名をも、跡継をも、地のおもてにとどめないようにしようとしています」と母親は言った（同 14：7）。王は、この訴えを聞いて心を動かし、むすこに王の保護が与えられることを、彼女に約束した。 PP 380.2

彼女は、むすこの身の安全に関する約束を、何度も王から与えられたあとで、王が、追放の身にある者を呼びもどされないために、自分を罪ある者とされていると言って、王が寛大な処置を取ることを嘆願した。「わたしたちはみな死ななければなりません。

地にこぼれた水の再び集めることのできないのと同じです。しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだてを設ける人の命を取ることはなさいません」（同 14：14）。ヨアブのような粗野な軍人が、神の罪人に対する愛を、このように憐れみ深く感動的に描いたということは、イスラエルの人々が、贖罪の大真理をよく知っていた著しい証拠である。彼自身、神の憐れみの必要を感じた王は、この訴えを拒むことができなかった。「行って、若者アブサロムを連れ帰るがよい」と、王はヨアブに命じた（同 14：21）。 PP 380.3

アブサロムは、エルサレムに帰ることを許された。しかし、宮廷に現れることも、父に会うことも許されなかった。ダビデは、子供たちに放縦な生活をさせた悪い結果に気づき始めていた。彼は、この美しい才能あるむすこを深く愛してはいたが、アブサロムと国民とに対する教訓として、このような犯罪に対する憎悪を示さねばならないと考えた。アブサロムは、自分の家で 2 年を過ごし、宮廷からは追放されていた、彼は妹といっしょにいた。そして、それは、彼女のこうむった取りかえしのつかない不当な扱いを常に思い起こさせた。国民一般の評価するところから見れば、王子は、犯罪者ではなくて、英雄であった。そこで、彼は、それをよいことにして人々の心を自分に引きつけようとした。彼の容貌は、彼を見るすべての者が感嘆するほどに美しかった。「さて全イスラエルのうちにアブサロムのように、美しさのためほめられた人はなかった。その足の裏から頭の頂まで彼には傷がなかった」（同 14：25）。アブサロムのように、野心家で衝動的で激しやすい性質の人間を、2 年間も閉じこめておいて自己の非運を嘆かせることは、王にとって賢明ではなかった。そして、エルサレムに帰ることを許しながら、彼が王の前に出ることをダビデが拒んだために、人々の同情が彼に集まった。 PP 380.4

ダビデは、自分自身が神の律法を犯したことを深く脳裏に刻まれていたために、道徳的まひ状態に陥ったものと思われる。彼は、罪を犯す以前は、勇敢で決断力に富んでいたのに、今は弱く、優柔不断になっていた。彼の人々に及ぼす影響も弱まった。そしてこうしたことは、すべて親不孝な王子の策動に有利であった。 PP 380.5

アブサロムは、ヨアブを介して、もう 1 度父の前に出ることを許された。しかし、表面の和解は成立したように思われたものの、彼の野心的策動は続いた。彼 は、戦車と馬、および自分の前に駆ける者 50 人を備えて、自分が王であるかのようにふるまった。そして、王は、次第に人を避け、孤独を好むようになる一方において、アブサロムはなんとかして人心を獲得しようと努めた。 PP 380.6

ダビデの無関心と決断の欠如は、彼の家来たちにも影響を及ぼし、裁判の執行はなおざりにされ、遅々としてはかどらなかった。アブサロムは、巧みに人々の不満を利用した。この気高い容貌の男は、毎日、多くの嘆願者たちが、苦情の解決を求めて群がる町の門に姿を現した。アブサロムは、彼らの中に混じって、彼らの苦情を聞き、彼らの苦難に同情し、政府の無能を嘆いた。こうして、イスラエルのある人の話を聞いて、王子は答えた。「あなたの要求は良く、また正しい。しかしあなたのことを聞くべき人は王がまだ立てていない」。彼は言葉を続けて言った。「『ああ、わたしがこの地のさばきびとであったならばよいのに。そうすれば訴え、または申立てのあるものは、皆わたしの所にきて、わたしはこれに公平なさばきを行うことができるのだが』。そして人が彼に敬礼しようとして近づくと、彼は手を伸べ、その人を抱きかかえて口づけした」（同 15：3～5）。 PP 381.1

王子の巧みな暗示に刺激されて、政府に対する不満が高まった。すべての人々が、アブサロムを賞賛した。彼は、人々から、王位の継承者だと思われていた。人々は彼をこの高い地位に適した人物として誇りに思っていた。そして、彼を王位につけようとする希望が燃え上がった。「こうしてアブサロムはイスラエルの人々の心を自分のものとした」（同 15：6）。それにもかかわらず、むすこを盲目的に愛していた王は、なんの疑念もいだかなかった。アブサロムが王子らしくふるまっていることは、ダビデの宮廷に対する栄誉であり、アブサロムが和解を喜んでいる表現であるとダビデは考えていた。 PP 381.2

人々の心は、次の事件のために準備されていた。アブサロムは反逆の策を練るために、ひそかに特使を各部族に送っていた。そして今、宗教的礼拝という口実の陰に、彼の反逆的謀略が隠されていた。彼が以前に追放されていたときに行った誓いをヘブロン

で果たさなければならないことになっていた。アブサロムは王に言った。「どうぞわたしを行かせ、ヘブロンで、かつて主に立てた誓いを果させてください。それは、しもべがスリヤのゲシュルにいた時、誓いを立てて、『もし主がほんとうにわたしをエルサレムに連れ帰ってくださるならば、わたしは主に礼拝をささげます』と言ったからです」（同 15：7、8）。甘い父親は、むすこの敬神深さに心を慰められ、彼を祝福して去らせた。反逆の機は熟した。アブサロムの欺瞞行為の頂点は、王の目をくらますだけでなく、人々の信頼をかち得て、神によって選ばれた王に彼らを反逆させることであった。 PP 381.3

アブサロムは、ヘブロンに向かって出発し、「200 人の招かれた者がエルサレムからアブサロムと共に行った。彼らは何心なく行き、何事をも知らなかった」（同 15：11）。この人々は、王子に対する彼らの愛が、彼らをダビデ王に反逆させるようになることは少しも知らずに、アブサロムと共に行った。アブサロムは、すぐに、ダビデの議官の 1 人で、知者として著名で、その意見は神の言葉と同様に安全で賢明なものと思われていたアヒトペルを呼んだ。アヒトペルは、共謀者たちに加わった。そして、彼の支持を得て、アブサロムの陰謀は確実に勝利するものと思われ、イスラエルの全国から多くの有力者が、彼の旗下に集まった。反逆のラッパが鳴ったとき、全国に散らばっていた王子の斥候たちは、アブサロムが王になったという知らせを広めたので、多くの者が彼のところに集まった。 PP 381.4

一方、警報は、エルサレムと王に伝えられた。ダビデは、反逆が王座のすぐそばから起こったのを見て驚いた。彼が愛し信頼していた王子が、彼の王位を奪い、彼の命をも取ろうとしていたことは疑いなかった。ダビデは、この大危機にあたって、これまで長く彼をおおっていた陰うつな気持ちを払いのけて、彼の若いときの精神をもって、この恐ろしい緊急事態に当面する準備をした。アブサロムは、わずか 20 マイル離れたヘブロンで、彼の軍勢を結集していた。反 逆軍は、間もなくエルサレムの門に迫ってくるのであった。 PP 381.5

ダビデは、王宮から「うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である」彼の都をながめた（詩篇 48：2）。ここで、大虐殺と破壊が行われることを考えて、彼

は身震いした。今でもなお、王に忠誠を誓っている国民の援助を求めて、彼の都を防衛すべきであろうか。エルサレムで多くの血が流されることを許してよいであろうか。彼は決心した。選ばれた都を、戦争の惨事に陥れてはならなかった。彼は、エルサレムを去ろうと思った。そして、人々に彼を支持する機会を与えて、彼らの忠誠をためそうと思った。この大危機に当たって、神が彼に与えられた権威を維持することが、神と民とに対する彼の義務であった。戦いの結果は、神に任せようと彼は思ったのである。 PP 382.1

ダビデは、恥辱と悲しみのうちに、エルサレムの門を出た。彼は、愛した王子の謀反によって、王位と王宮と神の箱とから追われているのであった。人々は、葬列のように長く悲しい行列を作って従った。王の護衛をつとめたケレテ人と、ペレテ人と、イッタイの指揮下にあったガテから来た 600 人のガテ人とが王に従った。しかしダビデは、彼独特の無我の精神から、彼の保護を求めて集まっていたこれらの異邦人が、彼の不幸に巻き込まれることを承知しなかった。彼らが彼のために、こうした犠牲を喜んで払おうとするのに、彼は驚いた。そして、王は、ガテ人イッタイに言った。「どうしてあなたもまた、われわれと共に行くのですか。あなたは帰って王と共にいなさい。あなたは外国人で、また自分の国から追放された者だからです。あなたは、きのう来たばかりです。わたしは自分の行く所を知らずに行くのに、どうしてきょう、あなたを、われわれと共にさまよわせてよいでしょう。あなたは帰りなさい。あなたの兄弟たちも連れて帰りなさい。どうぞ主が恵みと真実をあなたに示してくださるように」（サムエル記下 15：19、20）。 PP 382.2

イッタイは王に答えた。「主は生きておられる。わが君、王は生きておられる。わが君、王のおられる所に、死ぬも生きるも、しもべもまたそこにおります」（同 15：21）。この人々は、異教から主の礼拝に改宗したのであった。そして、彼らは、ここで、神と王とに対してりっぱに忠誠を尽くしたのである。ダビデは、一見、没落していく彼に対する彼らの忠誠を感謝して受け入れ、キデロンの谷を渡って荒野へ進んでいくのであった。 PP 382.3

ふたたび行列はとまった。聖なる衣服をまとった一団が近づいてきた。「見よ、ザドクおよび彼と共にいるすべてのレビびともまた、神の契約の箱をかいてきた」（同15：24）。ダビデの従者たちは、これを吉兆とみなした。彼らは、その神聖な象徴が来たことによって、彼らの救済と最後の勝利が約束されたものと考えた。それは、人々を勇気づけて、王の側につかせることであろう。それが、エルサレムを去ったことは、アブサロムの従者たちを恐怖に陥れることであろう。 PP 382.4

箱を見たとき、ダビデの心は、しばし、喜びと希望にうちふるえた。しかし、彼は、すぐに別のことを考えた、彼は、神の民の指導者として選ばれた者として、厳粛な責任を負わせられていた。イスラエルの王は、自分一個の利益でなくて、神の栄光と神の民の幸福を念頭におかなければならなかった。ケルビムの間に住まれる神は、エルサレムについて、「これは……わが安息、所である」と言われたのである（詩篇 132：14）。祭司も王も、神の許しを得ないで、そこから神の臨在の象徴を移動させる権威はなかった。そして、ダビデは、彼の心と生活とが、神の戒めと調和していなければならないことを知っていた。さもなければ、箱は、勝利でなくて、災害をもたらすものとなるのであった。彼は、あの大きな罪をいつも思い出していた。彼は、この謀反が神の正当な罰であると考えた。彼の家から離れない剣のさやが払われたのであった。彼は戦いの結果がどうなるかは知らなかった。彼は、天の王のみこころを表現した神聖な律法を国の都から移してはならなかった。それは、国家の憲法であり繁栄の基礎であった。 PP 382.5

彼は、ザドクに命じた。「神の箱を町にかきもどすがよい。もしわたしが主の前に恵みを得るならば、主 はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とそのすまいとを見させてくださるであろう。しかしもし主が、『わたしはおまえを喜ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われることをわたしにしてくださるように。わたしはここにおります」（サムエル記下 15：25、26）。 PP 382.6

ダビデはまた言った。「見よ、あなたもアビヤタルも、ふたりの子たち、すなわちあなたの子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンを連れて、安らかに町に帰りなさい。わたしはあなたがたから言葉があって知らせをうけるまで、荒野の渡し場にとどまりま

す」（同 15：27、28）。祭司たちは、都にいて、反逆者たちの動向や策略をさぐり、それを彼らのむすこのアヒマアズとヨナタンによって、ひそかに王に知らせてよい奉仕をすることができるのであった。 PP 383.1

祭司たちが、エルサレムに引き返したとき、去っていく一団は、一段と暗い陰におおわれた。彼らの王は、亡命者であり、彼ら自身は神の箱にさえ捨てられた追放の身であった。将来は恐怖と不吉な前兆で暗かった。「ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登る時に泣き、その頭をおおい、はだしで行った。彼と共にいる民もみな頭をおおって登り、泣きながら登った。時に、『アヒトペルがアブサロムと共謀した者のうちにいる』とダビデに告げる人があった」（同 15：30、31）。ダビデは、この不幸の中で、もう一度自分自身の罪の結果を認めさせられた。最も有能で狡猾な政治家アヒトペルの離反は、ダビデが、彼の孫バテシバに悪を行って家族をはずかしめたことに対する報復心から起こったものであった。 PP 383.2

「ダビデは言った、『主よ、どうぞアヒトペルの計略を愚かなものにしてください』」（同 15：31）。山の頂上に着いたとき、王は、首をたれて祈り、心の重荷を神にゆだね、心を低くして神の憐れみを嘆願した。彼の祈りは、すぐに聞かれたように思われた。賢明で有能な議官のアルキ人ホシャイは、ダビデの忠実な友であったが、今、上着を裂き頭に土をかぶり、王位を追われている亡命中の王と、運命を共にするためにやってきた。ダビデは、あたかも天からの知らせを受けたかのように、この忠実で誠実な人が都の会議において、王の利益を計るために必要な人であることを悟った。ホシャイは、ダビデの要請によって、エルサレムに帰り、アブサロムのために仕えることを申し出て、アヒトペルの狡猾な策略を破ろうとするのであった。 PP 383.3

王と彼の従者たちには、暗黒の中でこうした一条の光が与えられたのである。彼らは、オリブ山の東側の坂を下って進み、岩石の多い荒廃した荒野、けわしい峡谷、岩石と絶壁の小道を通って、ヨルダン川に向かった。「ダビデ王がバホリムにきた時、サウルの家の一族の者がひとりそこから出てきた。その名をシメイといい、ゲラの子である。彼は出てきながら絶えずのろった。そして彼はダビデとダビデ王のもろもろの家来に向かって石を投げた。その時、民と勇士たちはみな王の左右にいた。シメイはのろう時に

こう言った、『血を流す人よ、よこしまな人よ、立ち去れ、立ち去れ。あなたが代って王となったサウルの家の血をすべて主があなたに報いられたのだ。主は王国をあなたの子アブサロムの手に渡された。見よ、あなたは血を流す人だから、災に会うのだ』」（同 16：5～8）。 PP 383.4

シメイは、ダビデが栄えていたときには、自分が不忠な家来であることを言葉や行為によっては示さなかった。しかし、王が苦難にあった時に、このベニヤミン人は、彼の本性を現した。彼は、王座のダビデをあがめたが、恥辱のうちにある彼をのろった。彼は、卑しい利己的性質の人であったので、他人も自分と同じであると考え、サタンに扇動されて、神が懲らしめておられる者に恨みを晴らした。他人が苦難にあっているのを見て、喜び、あざけったり苦しめたりする精神は、サタンの精神である。 PP 383.5

シメイのダビデに対する非難は全くいつわりで、根拠のない、悪意から出た中傷であった。ダビデは、サウルまた彼の家に何の悪事もしていなかった。サウルが、彼の手中に陥り、殺すことができた時にも、彼は、ただサウルの衣のすそを切っただけであった。そして、彼は、主が油を注がれた者に、こうした無礼を 行ったことさえ申しわけなく思ったのである。 PP 383.6

ダビデは、彼自身が、野の獣のように追われていたときでさえ、人命を尊重した著しい例があるのである。ある日、彼が、アドラムのほら穴に隠れていたとき、彼は、平和で自由だった少年時代のことを思い出して叫んだ。「だれかベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいのだが」（同 23：15）。そのとき、ベツレヘムは、ペリシテ人の手中にあった。しかし、ダビデの軍勢の 3 勇士は、敵の守備を突き破って、ベツレヘムの水を、ダビデのもとに持ってきた。ダビデは、それを飲むことができなかった。「わたしは断じて飲むことをいたしません。いのちをかけて行った人々の血を、どうしてわたしは飲むことができましょう」と彼は叫んだ（同 23：17）。そして、彼は、その水を、神への捧げ物として、うやうやしく地に注いだのである。ダビデは、軍人であってその生涯の大半は、戦場で費やされた。しかし、そうした苦しい体験をしたすべての者の中で、ダビデほど、その苛酷で背徳的影響に染まなかった者はない。 PP 384.1

ダビデの指揮官中、最も勇敢で彼のおいであったアビシャイは、シメイのあざけりの言葉をだまって聞いていることができず、「この死んだ犬がどうしてわが主、王をのろってよかろうか。わたしに、行って彼の首を取らせてください」と叫んだ（同 16：9）。しかし、王は彼に言った。「わが子がわたしの命を求めている。今、このベニヤミンびととしてはなおさらだ。彼を許してのろわせておきなさい。主が彼に命じられたのだ。主はわたしの悩みを顧みてくださるかもしれない。また主はきょう彼ののろいにかえて、わたしに善を報いてくださるかも知れない」（同 16：11、12）。 PP 384.2

ダビデは、激しく良心に責められ、恥じ入るばかりであった。彼の忠実な家来たちは、彼の突然の不運を不思議に思ったけれども、それは王にとって、何の不思議でもなかった。彼は、こうしたことの起こる予感がときどきあったのである。彼は、神が彼の罪を長く忍び、彼が当然受けるべき報いを延ばされたのを怪しんだのである。そして、今、急いで、悲しみのうちにはだしで、王衣の代わりに荒布をまとって町からのがれ、家来たちの嘆きの声が山々にこだましている時に、彼は、彼の愛する都のことを考えた。そして、そこは、彼が罪を犯した場所でもあったが、彼は、神の恵みと忍耐を思い起こして、希望が全然ないわけではないと考えるのであった。彼は、主が、なおも彼を恵み深くあしらってくださることを感じたのである。 PP 384.3

ダビデが堕落したことを引用して、自分の罪の申しわけをする悪者たちが多い。しかし、ダビデのような悔い改めと謙遜を表す者がなんと少ないことであろう。彼が表したような忍耐と堅忍不抜の精神をもって譴責と刑罰とに耐える者は、なんと少ないことであろう。彼は、自分の罪を告白したのであった。そして、長年神の忠実なしもべとしての務めをしようと努めてきた。彼は、王国の建設のために活躍し、彼の治世のもとに王国は、これまでになかったほどの勢力を得て繁栄したのであった。彼は、神の家の建設のために豊富な資材を集めたのであったが、今、彼の一生の努力が水泡に帰してしまうのであろうか。長年の献身的努力の結果、天才と献身と政治的手腕をもってなしとげた業績などが、神の栄光もイスラエルの繁栄も考えない無鉄砲な反逆児の手に渡ってしまわねばならぬのであろうか。こうした大きな苦難の中で、ダビデが神に向かってつぶやいても、当然のことのように思われる。 PP 384.4

しかし、ダビデは彼の苦難の原因が、自分の罪にあることを認めた。預言者ミカの言葉が、ダビデの心を奮いたたせた精神を表している。「たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。主はわが訴えを取りあげ、わたしのためにさばきを行われるまで、わたしは主の怒りを負わなければならない主に対して罪を犯したからである」（ミカ７：8、9）。主は、ダビデをお捨てにならなかった。ダビデは、残酷きわまる取り扱いと嘲笑の中で、謙遜、無我、寛大服従を示したのである。この経験は、彼の一生の経験の中で、最も高貴なものの１つであった。イスラエルの王が、一見、屈辱のどん底に沈んだこの時ほど、彼が天の神の前に偉大であったことはなかった。 PP 384.5

もし、神がダビデの罪を譴責せず、彼が神の戒めを犯しているにもかかわらず、平和と繁栄のうちに王座を占めていたとするならば、懐疑論者や無神論者は、ダビデの生涯を引用して、それを口実にして聖書の宗教を非難したことであろう。しかし、主は、ダビデにこうした経験をお与えになって、主は、罪を黙認することも赦すこともできないことを示された。われわれは、ダビデの生涯によって、神が罪を処理される時に持っておられる大目的を悟り、どのように悲惨な刑罰の中にも神の恵みと憐れみに満ちたみ心の動きをたどることができるのである。神は、ダビテがむちの下を通るのを許されたが、彼を滅ぼされなかった。炉は、滅ぼすためではなくて清めるためであった。主は言われる。「もし彼らがわが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしはつえをもって彼らのとがを罰し、むちをもって彼らの不義を罰する。しかし、わたしはわがいつくしみを彼から取り去ることなく、わがまことにそむくことはない」（詩篇 89：31～33）。 PP 385.1

ダビデが、エルサレムを去って問もなく、アブサロムと彼の軍勢が侵入し、戦いを交えないでイスラエルの要塞を手に入れた。まず初めに、新しい王を迎えた者の中に、ホシャイがいた。すると王子は、父の旧友であり、議官であった彼を得て、驚き満足した。アブサロムは、必ず成功するものと考えた。これまでの彼の策略は、順調に進んだ。そして、彼は、王座を強固にし、国民の信任を得ようと熱望していたので、ホシャイを宮廷に歓迎した。 PP 385.2

アブサロムは、すでに大軍に囲まれていたが、その大半は、戦いに不慣れな人々であった。彼らは、まだ、戦ったことがなかった。アヒトペルは、ダビデの側が絶望状態に陥っていないことを熟知していた。国民の大部分は、なお彼に忠誠を誓っていた。ダビデ王は、彼に忠実な歴戦の勇士に囲まれており、彼の軍勢は有能で経験豊かな将軍の指揮下にあった。新しい王に対する最初の熱烈な支持に続いて反動が起こることを、アヒトペルは知っていた。謀反が失敗に終われば、アブサロムは、父と和解することができるであろう。そうなった場合、彼の議官の長であったアヒトペルが、謀反を起こした最高の責任者とされ、最も重い罰が与えられるであろう。アブサロムの後退を防止するため、アヒトペルは、全国民の前で和解を不可能にすることを行うように彼に勧めた。この狡猾で無節操な政治家は、憎むべき悪賢さを持って、謀反に近親相姦の罪を加えることをアブサロムに促した。彼は、東方諸国の習慣に従って、全イスラエルの目前で、父の側女たちを自分のものにすることにより、父の王位についたことを宣言するのであった。こうして、アブサロムはこのいまわしい提言に従った。このようにして、預言者がダビデに語った言葉は実現した。「見よ、わたしはあなたの家からあなたの上に災を起すであろう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取って、隣びとに与えるであろう。……あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである」（サムエル記下 12：11、12）。これは神が、これらの事を彼らに行わせられたのではなかった。神は、ダビデの罪の結果、それを止める力を働かせられなかったのである。 PP 385.3

アヒトペルは、彼の知恵をほめそやされていたが、神からの教えを受けていなかった。「主を恐れることは知恵のもとである」（箴言 9：10）。アヒトペルは、これを持っていなかった。さもなければ、近親相姦の犯罪によって、反逆を成功させようとは思わなかったことであろう。腐敗した心の人々は、彼らの策略をくじく神の摂理の支配がないかのように、悪をたくらんでいる。しかし、「天に座する者は笑い、主は彼らをあざけられるであろう」（詩篇 2：4）。主は言われる。「わたしの勧めに従わず、すべての戒めを軽んじたゆえ、自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる。思慮

のない者の不従順はおのれを殺し、愚かな者の安楽はおのれを滅ぼす」（箴言 1：30～32）。 PP 385.4

アヒトペルは、まず自己の安全を確保する計画が成功を収めたので、すぐにダビデに対抗して行動する必要をアブサロムに勧告した。「わたしに 1 万 2 千の人を選び出させてください。わたしは立って、今夜ダビデのあとを追い、彼が疲れて手が弱くなっている ところを襲って、彼をあわてさせましょう。そして彼と共にいる民がみな逃げるとき、わたしは王ひとりを撃ち取り、すべての民を……あなたに帰らせましょう」（サムエル記下 17：1～3）。この計画は、王の議官たちに承認された。もし、この通りに行われたならば、主がダビデを助けるために直接介入なさらないかぎり、彼は殺されてしまったことであろう。しかし、名声高いアヒトペル以上に知恵のあるおかたが、事件を導いておられた。「それは主がアブサロムに災を下そうとして、アヒトペルの良い計りごとを破ることを定められたからである」（同 17：14）。 PP 385.5

ホシャイは、会議に呼ばれていなかった。彼は、スパイだと疑われてはいけないから、求められもしないのに顔を出すことをしなかった。しかし、父の議官の判断を尊重していたアブサロムは、会議のあとでアヒトペルの計画を彼に話した。ホシャイは、その提案が実行されるならば、ダビデは敗北してしまうことを認めた。それで彼は言った。「『このたびアヒトペルが授けた計りごとは良くありません』。ホシャイはまた言った、『ごぞんじのように、あなたの父とその従者たちとは勇士です。その上彼らは、野で子を奪われた熊のように、ひどく怒っています。また、あなたの父はいくさびとですから、民と共に宿らないでしょう。彼は今でも穴の中か、どこかほかの所にかくれています』」（同 17：7～9）。彼は、もしアブサロムの軍勢がダビデを追うならば、王を捕らえることはできないと言った。そして、もし彼らが撃退されれば、彼らは失望に陥り、アブサロムの運動は大きな損害を受けるだろうと言った。「それはイスラエルのすべての人が、あなたの父の勇士であること、また彼と共にいる者が、勇ましい人々であることを知っているからです」（同 17：10）。そして、ホシャイは、彼の虚栄と利己心と誇示愛好心に訴える計画を提案した。「ところでわたしの計りごとは、イスラエルをダンからベエルシバまで、海辺の砂のように多くあなたのもとに集めて、あなたみずから戦い

に臨むことです。こうしてわれわれは彼の見つかる場所で彼を襲い、つゆが地におりるように彼の上に下る。そして彼および彼と共にいるすべての人をひとりも残さないでしょう。もし彼がいずれかの町に退くならば、全イスラエルはその町になわをかけ、われわれはそれを谷に引き倒して、そこに一つの小石も見られないようにするでしょう」（同 17：11～13）。「アブサロムとイスラエルの人々はみな、『アルキびとホシャイの計りごとは、アヒトペルの計りごとよりもよい』と言った」（同 17：14）。 PP 386.1

しかし、これに欺かれないものが、1 人いた。彼は、アブサロムのこの計画が致命的誤りで、ついにどうなるかをはっきりと予想した。アヒトペルは、反逆の企てが失敗に終わったのを知った。そして彼は、王子の運命がどうなろうと、王子に最大の犯罪を犯すようにそそのかした議官には、助かる望みがないことを悟った。アヒトペルは、アブサロムに反逆を勧めたのであった。彼は、王子に最も憎むべき罪を犯して、父をはずかしめるように勧めたのであった彼は、ダビデを殺すように助言して、その計画を実行しようとしていた。彼は、自分自身が王と和解する最後の可能性を断ち切ったのであった。ところが、今、アブサロムさえ、彼を捨てて他の者を選んだのであった。アヒトペルは、嫉妬と怒りと絶望のうちに、「立って自分の町に行き、その家に帰った。そして家の人に遺言してみずからくびれて死」んだ（同 17：23）。豊かな才能に恵まれていながら、神の勧告に従わなかった者の知恵は、こうした結果に終わったのである。サタンは甘言によって、人を誘惑する。しかし、ついには、「罪の支払う報酬は死である」ことをすべての者は知るのである（ローマ 6：23）。 PP 386.2

ホシャイは、心の落ち着かないダビデが、彼の勧告を聞くかどうかわからなかったので、すぐにヨルダンの向こうに逃げるように彼に警告を発した。ホシャイは、祭司たちに次のように言った。これは、また彼らのむすこたちによって先方に伝えられるのであった「アヒトペルはアブサロムとイスラエルの長老たちのためにこういう計りごとをした。またわたしはこういり計りごとをした。それゆえ、……『今夜、荒野の渡し場に宿らないで、必ず渡って行きなさい。さもないと王および共にいる民はみな、滅ぼされるでしより』」 （サムエル記下 17：15、16）。 PP 386.3

若者たちは敵に怪しまれて追跡されたが、無事にこの危険な任務をなしとげた。ダビデは、1 日目の逃亡のために、疲労と悲哀でやつれきっているところへ王子が彼の生命をとろうとしているから、その晩のうちにヨルダンを渡らなければならないという知らせを受けた。 PP 387.1

この恐ろしい危機に当面して、悲惨な目にあっている父であり王である彼の気持ちは、どんなものであっただろう。王は、「勇気もあ」るいくさ人で、彼の命令は、そのまま法律であった（サムエル上 16：18）。彼は、愛し、甘やかし、愚かにも信頼していた王子には裏切られ、名誉と忠誠という最も堅いきずなで結ばれていた家来たちには不当に扱われて見捨てられた。ダビデは、彼の心の思いを、どのような言葉で吐露しているであろうか。ダビデは、彼の最悪の試練の時に、神に信頼していた。そして、彼は歌った。 PP 387.2

「主よ、わたしに敵する者のいかに多いことでしょう。 PP 387.3
わたしに逆らって立つ者が多く、 PP 387.4
『彼には神の助けがない』と、 PP 387.5
わたしについて言う者が多いのです。 PP 387.6
しかし主よ、あなたはわたしを囲む盾、わが栄え、 PP 387.7
わたしの頭を、もたげてくださるかたです。 PP 387.8
わたしが声をあげて主に呼ばわると、 PP 387.9
主は聖なる山からわたしに答えられる。 PP 387.10
わたしはふして眠り、また目をさます。 PP 387.11
主がわたしをささえられるからだ。 PP 387.12
わたしを囲んで立ち構える PP 387.13
ちよろずの民をもわたしは恐れない。…… PP 387.14
救は主のものです。 PP 387.15
どうかあなたの祝福が PP 387.16
あなたの民の上にありますように」 PP 387.17
（詩篇 3：1～8） PP 387.18

ダビデと彼の一団、すなわち、軍人たちや政治家たち、老人も青年も、女子も小さい子供たちも、皆、暗い夜のうちに深い急流を渡った。「夜明けには、ヨルダンを渡らない者はひとりもなかった」（サムエル記下 17：22）。 PP 387.19

ダビデと彼の軍勢は、イシボセテの都であったマハナイムに退いた。ここは、戦争のときに退くのに都合のよい山々に囲まれた堅固な要塞であった。その地方は産物が豊かで、人々はダビデに好意を持っていた。多くの支持者が、ここで彼に加わる一方、富裕な部族の人々が、食糧その他の必要な物資を多く贈り物として持ってきた。 PP 387.20

ホシャイの勧告は、ダビデに逃亡の機会を与えて、その目的を達した。しかし、向こう見ずで血気にはやった王子を長くとめておくことはできなかった。間もなく、彼は、父のあとを追った。「またアブサロムは自分と共にいるイスラエルのすべての人々と一緒にヨルダンを渡った」（同 17：24）。アブサロムは、ダビデの姉妹アビガイルの子アマサを、彼の軍勢の将にした。彼の軍勢は、大きかった。しかし、父の熟練した兵隊たちに立ち向かうには、訓練もなく準備も不十分であった。 PP 387.21

ダビデは、彼の軍勢を 3 つの部隊に分け、ヨアズアビシャイ、ガテ人イッタイに委ねた。ダビデは、一隊を自分で率いて戦場に出るつもりであったが、それに対して、軍の指揮官たちや議官たち、また人々が、猛烈に反対した。彼らは言った。 PP 387.22

「『あなたは出てはなりません。それはわれわれがどんなに逃げても、彼らはわれわれに心をとめず、われわれの半ばが死んでも、われわれに心をとめないからです。しかしあなたはわれわれの 1 万に等しいのです。それゆえあなたは町の中からわれわれを助けてくださる方がよろしい』。王は彼らに言った、『あなたがたの最も良いと思うことをわたしはしましょう』」（同 18：3、4）。 PP 387.23

反逆軍の長い戦線は、町の城壁から一目で見えた。王位を奪ったアブサロムに従った大軍に比べると、ダビデの軍勢は、ほんの一握りのように思われた。しかし、王が敵の軍勢をながめた時に、まず考えたことは、この戦いに王冠あるいは彼自身の命がかかっているということではなかった。父の心は、反逆した 王子に対する愛と憐れみに満ちていた。軍隊が、町の門を出て行った時に、ダビデは、彼の忠実な兵隊たちを励まし、

イスラエルの神が勝利をお与えになることを信じて行くように命じた。しかし、ここでも彼は、アブサロムへの愛を抑えることができなかった。ヨアブは、彼の第 1 分隊を率いて王の前を通った。この百戦の将は、誇らかな頭を下げて、王の最後の言葉を聞こうとした。王は、ふるえる声で、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と言った（同 18：5）。アビシャイとイッタイも、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と同じ命令を受けた。しかし、王の嘆願は、王が、王国や王位に忠実な家来たちよりもアブサロムを愛しているという印象を与え、人道にそむいた王子に対する軍勢の怒りを激化したに過ぎなかった。 PP 387.24

戦場は、ヨルダン川の近くの森であった。アブサロムの大軍も、ここでは、ただ邪魔になるだけであった。この訓練のない軍隊は、森の茂みや沼地で混乱し、統制がとれなくなった。「イスラエルの民はその所でダビデの家来たちの前に敗れた。その日その所に戦死者が多く、2 万に及んだ」（同 18：7）。アブサロムは、戦いに敗れたのを知って逃げようとしたところ、彼の頭が茂った木の枝にひっかかってラバは彼の下を通りぬけて行ってしまった。彼は宙づりになってどうすることもできず、敵のいいえじきになった。1 人の兵隊が、こういう状態の彼を見つけたが、王を悲しませることを恐れて、王子に害を加えず、彼の見たことをヨアブに報告した。ヨアブは、なんのためらいも感じなかった。彼は、アブサロムを助け、2 度もダビデとの和解を成立させたのであったが、彼の信頼は、無暴にも裏切られてしまった。ヨアブの仲介によって得た有利な地位がアブサロムになかったならば、この恐ろしい反逆は起こり得なかったのである。今ヨアブは、こうしたすべての災いの張本人を 1 撃のもとに倒すことができるのであった。「そこで、ヨアブは……手に三筋の投げやりを取り、……アブサロムの心臓にこれを突き通した。……人々はアブサロムを取って、森の中の大きな穴に投げいれ、その上にひじょうに大きい石塚を積み上げた」（同 18：14～17）。 PP 388.1

こうして、イスラエルの反逆の扇動苦たちは倒れたアヒトペルは自害していた。イスラエルが誇った美しい容貌の王子アブサロムは、若い盛りに倒されて、その死体は穴に投げ込まれ、石塚でおおわれて永遠の恥辱のしるしとなった。アブサロムは、生きて

いたころ、自分のために王の谷に高価な記念碑を建てたが、彼の墓の唯一の記念は、荒野の中の石塚であった。 PP 388.2

反逆の指導者が殺されたので、ヨアブはラッパを鳴らして、逃亡する軍隊を追跡中の彼の軍を呼び集めた。そして、王に、このことを知らせるために、すぐに使者が送られた。 PP 388.3

城壁の上の見張りの者が、戦場のほうを見ていると、1 人の人が走ってくるのが見えた、間もなく 2 番目の人も見えた。最初の人が近づいたので、見張りの者は門のかたわらに待っていた王に言った。「『まっ先に走って来る人はザドクの子アヒマアズのようです』。王は言った、『彼は良い人だ。良いおとずれを持ってくるであろう』。時にアヒマアズは呼ばわって王に言った、『平安でいらせられますように』。そして王の前に地にひれ伏して言った、『あなたの神、主はほむべきかな。主は王、わが君に敵して手をあげた人々を引き渡されました』」。「若者アブサロムは平安ですか」という王の切実な問いに、アヒマアズは、あいまいに答えた（同 18：27～29）。 PP 388.4

2 番目の使者が来て叫んだ。「わが君、王が良いおとずれをお受けくださるよう。主はきょう、すべてあなたに敵して立った者どもの手から、あなたを救い出されたのです」（同 18：31）。父は再び、「若者アブサロムは平安ですか」と夢中でたずねた。使者は、悲しい知らせを隠し切れずに答えた。「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりますように」（同 18：32）。これでじゆうぶんであった。ダビデは、もう何も聞かなかった。彼は、頭をうなだれて、「門の上のへやに上って泣いた。彼は行きながらこのように言った、『わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブ サロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ』」（同 18：33）。 PP 388.5

勝ち誇った軍隊は戦場を引き上げ、町の門に近づいた。彼らの勝利の叫びは山々に反響した。しかし、彼らが町の門に入ると、叫びは静まり、彼らの旗は勢いがなくなり、彼らは、征服者というよりは、敗北者のようにうなだれて歩いていった。というのは、王が彼らを出迎えず門の上の部屋で、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロ

ムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と泣いていたからである（同 18：33）。 PP 389.1

「こうしてその日の勝利はすべての民の悲しみとなった。それはその日、民が、『王はその子のために悲しんでいる』と人の言うのを聞いたからである。そして民はその日、戦いに逃げて恥じている民がひそかに、はいるように、ひそかに町にはいった」（同 19：2、3）。 PP 389.2

ヨアブは憤慨した。神は、勝ち誇って喜ぶ理由をお与えになったのであった。イスラエルに起こった最大の反逆が鎮圧されたのである。それにもかかわらずこの大勝利は、幾千の勇士の命を犠牲にした犯罪者のための弔いとなったのである。粗暴で、無遠慮な大将は、王のもとに来て、臆せず言った。「あなたは、きょう、あなたの命と、あなたのむすこ娘たち……の命を救ったすべての家来の顔をはずかしめられました。それはあなたが自分を憎む者を愛し、自分を愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、軍の長たちをも、しもべたちをも顧みないことを示されました。きょう、わたしは知りました。もし、アブサロムが生きていて、われわれが皆きょう死んでいたら、あなたの目にかなったでしょう。今立って出て行って、しもべたちにねんごろに語ってください。わたしは主をさして誓います。もしあなたが出られないならば、今夜あなたと共にとどまる者はひとりもないでしょう。これはあなたが若い時から今までにこうむられたすべての災よりも、あなたにとって悪いでしょう」（同 19：5～7）。 PP 389.3

これは、悲嘆にくれた王にとって、きびしく残酷とさえ思われる譴責であったが、ダビデは怒らなかった。彼は、大将の言うことが正しいのを認めて、門におりて行き、彼の前を通る勇敢な兵隊たちに、勇気と賞賛の言葉をかけて、彼らを迎えたのである。 PP 389.4

第 73 章　ダビデの晩年

本章は、サムエル記下 24 章、列王紀上 1 章、歴代志上 21、28、29 章に基づく PP 389.5

アブサロムが倒れたからといって、王国がすぐに平和になったわけではなかった。国家の一部が長い間、反逆に荷担していたので、ダビデは、各部族からの招待がなければ、首都に帰ってふたたび権力の座につこうとしなかった。アブサロム敗北後の混乱の中で、すぐに王を呼びもどそうとする動きはなかった。それで、ついに、ユダの部族が、ふたたび王を迎えようとしたところ、他の部族がそれをねたんで、反革命が起こった。しかし、これは急速に鎮圧されて、イスラエルは、平和をとりもどした。 PP 389.6

ダビデの生涯は、権力、富、世的栄誉が、魂にどんな危険を及ぼすかを最も印象的に示した例の 1 つである。これらは、人々が最も熱心に追求しているものである。こうした試練に耐えられる準備として、彼以上の経験が与えられた者は少ない。ダビデが少年時代に、羊飼いとして、心を低くして忍耐強く働き、群れを優しく世話することを学んだこと、山の中で、1 人で自然と交わり、音楽と詩の才能が啓発され、創造主について瞑想したこと、荒野の生活の長い訓練によって、勇気、堅忍不抜の精神、忍耐、神への信仰が養成されたことなどは、イスラエルの王位につく準備として、主が定められたものであった。ダビデは、神の愛についての尊い経験が与えられ、聖霊を豊かに受けた。彼は、サウルの生涯を見て、単なる人間の知恵は全く無価値なものであることをさとった。それにもかかわらず、世的繁栄と栄誉によって、ダビデ の品性は弱められ、いくども誘惑に負けてしまった。 PP 389.7

異教徒との交わりは、彼らの風習をまね、世的偉大さを望む心を起こさせた。イスラエルは、主の民として、尊敬されるべきであった。しかし、誇りと自己過信が増大するにつれて、イスラエルは、こうした点で傑出することで満足しなくなった。彼らは、他の諸国家間における地位のことを重大視していた。この精神は、誘惑を避けられないものにした。ダビデは諸外国の征服を拡張するために適齢に達した者をすべて徴兵して

軍隊を拡充することを決意した。そのためには、人口調査が必要であった。王にこうしたことを行わせたのは、誇りと野心とであった。人口調査は、ダビデが王位についたときの王国の微弱な状態と、彼の治世下の力と繁栄との相違を示すことになるのであった。これは、すでに王も民も共に持っていた大きな自己過信を、さらに助長するものであった。聖書は、「時にサタンが起ってイスラエルに敵し、ダビデを動かしてイスラエルを数えさせようとした」と言っている（歴代志上 21：1）。ダビデの治世下のイスラエルの繁栄は、王の能力や軍隊の力によるものではなくて、神の祝福によるものであった。しかし、王国の軍事力の増強は、イスラエルが、主の能力にたよらず、軍隊にたよっているという印象を周囲の国々に与えるのであった。 PP 390.1

イスラエルの人々は、国家の偉大さを誇ってはいたが、ダビデの軍事力増強計画には反対であった。徴兵計画には大きな不満が起こった。その結果、これまで調査に当たった祭司や司たちの代わりに、軍人を用いることが必要になった。この企ての目的は、神政政治の原則に正反対のものであった。これまで無法者であったヨアブでさえ、抗議した。彼は言った。「『それがどのくらいあっても、どうか主がその民を 100 倍に増されるように。しかし王わが主よ、彼らは皆あなたのしもべではありませんか。どうしてわが主はこの事を求められるのですか。どうしてイスラエルに罪を得させられるのですか』。しかし王の言葉がヨアブに勝ったので、ヨアブは出て行って、イスラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰って来た」（同 21：3、4）。ダビデが自分の罪をさとった時に、人口調査は終わっていなかった。彼は、自責の念にかられて、「わたしはこの事を行って大いに罪を犯しました。しかし今どうか、しもべの罪を除いてください。わたしは非常に愚かなことをいたしました」と言った（同 21：8）。 PP 390.2

翌朝、預言者ガデが来て、ダビデに言った。「主はこう仰せられます、『あなたは選びなさい。すなわち 3 年のききんか、あるいは 3 月の間、あなたのあだの前に敗れて、敵のつるぎに追いつかれるか、あるいは 3 日の間、主のつるぎすなわち疫病がこの国にあって、主の使がイスラエルの全領域にわたって滅ぼすことをするか』。いま、わたしがどういう答をわたしをつかわしたものになすべきか決めなさい」（同 21：11、12）。 PP 390.3

王は、答えて言った。「わたしは非常に悩んでいるが、主のあわれみは大きいゆえ、わたしを主の手に陥らせてください。しかしわたしを人の手に陥らせないでください」（同 21：13）。 PP 390.4

地は疫病に悩まされ、イスラエルの人々のうち、7 万人が倒れた。疫病は、まだエルサレムには入っていなかった。「ダビデが目をあげて見ると、主の使が地と天の間に立って、手に抜いたつるぎをもち、エルサレムの上にさし伸べていたので、ダビデと長老たちは荒布を着て、ひれ伏した」（同 21：16）。王は、イスラエルのために神に訴えた。「民を数えよと命じたのはわたしではありませんか。罪を犯し、悪い事をしたのはわたしです。しかしこれらの羊は何をしましたか。わが神、主よ、どうぞあなたの手をわたしと、わたしの父の家にむけてください。しかし災をあなたの民に下さないでください」（同 21：17）。 PP 390.5

人々は、人口調査に不満をいだいた、しかし、彼ら自身も、ダビデにこうした行為を行わせたのと同じ罪を心にいだいていた。主は、アブサロムの罪によってダビデに罰を与えられたように、ダビデの誤りによって、イスラエルの罪を罰せられた。 PP 390.6

破壊の天使は、エルサレムの外でとまった。彼は、モリア山の「エブスびとオルナンの打ち場」に立った （同 21：18）。ダビデは、預言者に導かれて山に行き、そこで主のために祭壇を築き、「燔祭と酬恩祭をささげて、主を呼んだ。主は燔祭の祭壇の上に天から火を下して答えられた」（同 21：26）。「そこで主はその地のために祈を聞かれたので、災がイスラエルに下ることはとどまった」（サムエル記下 24：25）。 PP 390.7

祭壇が築かれた場所は、その後、聖地とみなされることになったが、オルナンは、これを王に贈り物として捧げることを申し出た。しかし、王は、これを受け取ることを断わり、「『わたしはじゅうぶんな代価を払ってこれを買います。わたしは主のためにあなたのものを取ることをしません。また、費えなしに燔祭をささげることをいたしません』。それでダビデはその所のために金 600 シケルをはかって、オルナンに払った」（歴代志上 21：24、25）。アブラハムが、その子を捧げるために祭壇を築いた記念す

べきこの地、そして、今この大救済によって清められた地が、後に、ソロモンの神殿の建築されるところに選ばれたのである。 PP 391.1

もう 1 つの暗雲が、ダビデの晩年をおおうことになっていた。ダビデは、70 歳になった。若い時の苦労ときびしい放浪の生活、数多くの戦争、後年の心労と苦悩などが生命の泉をからした。彼の頭は、はっきりして、しっかりしてはいたが、衰弱と老齢のため、引きこもりがちになり、王国の事情にもうとくなった。そこへ、ふたたび、王座のすぐ近くから反逆が起こった。またもやダビデの子供を甘やかした結果がここにあらわれた。王位を奪おうとして立ち上がったのは、「非常に姿の良い人」で、堂々としてはいたが、節操に欠け、放縦なアドニヤであった。彼は、若い時に、なんの制限も受けず、「彼の父は彼が生れてこのかた 1 度も『なぜ、そのような事をするのか』と言って彼をたしなめたことがなかった」（列王紀上 1：6）。彼は、今、ソロモンを王位に任命された神の権威に反逆したのである。ソロモンは、素質においても、宗教性においてもともに兄よりは、イスラエルの王になる資格が備わっていた。神の選択が明示されたにもかかわらずアドニヤにも同情者がないことはなかった。ヨアブは、多くの犯罪を犯したが、これまで王に忠誠を尽くしてきた。ところが、今彼は、ソロモンに対抗した陰謀に加わった。そして、祭司のアビヤタルもまた加わった。 PP 391.2

反逆の機は熟した。謀反人らは、町のすぐ外で大きな祝宴を開き、アドニヤを王であると宣言した。しかし、彼らの計画は、祭司ザドク、預言者ナタン、ソロモンの母のバテシバなど、少数ではあるが忠実な人々の迅速な行動によって阻止された、彼らは、王に事のなり行きを説明し、神の命によってソロモンが王位を継承すべきことを王に思い起こさせた。ダビデはすぐに退位して、ソロモンに王位を譲った。ソロモンは、さっそく油を注がれて王であることを宣言された。陰謀は粉砕された。その主要人物は死刑に処せられた。アビヤタルの命は、その職務と、前にダビデに忠誠を尽くしたことを考慮して助けられた。しかし、彼は大祭司の職を奪われ、それはザドクの子孫に与えられた。ヨアブとアドニヤも一時刑を免れたが、ダビデの死後、彼らは罪の罰を受けた。ダビデの子に対する宣告の執行によって、4 倍の刑罰がここに完了し、父の罪を神がどんなに憎まれたかを示したのであった。 PP 391.3

ダビデは、その治世の最初から、主の神殿を建築することを彼の念願の 1 つにしていた。彼は、この計画を実行することが許されなかったけれども、そのために非常な熱心さと誠意を示した。彼は、金、銀、しまめのう、色のついた石、大理石、貴重な材木など、高価な材料を多量に準備した。彼は、こうした貴重な材料を人の手に委ねなければならなかった。神の臨在の象徴である箱のために、他の者が家を建てなければならなかった。 PP 391.4

王は、自分の最後の時が近いのを知って、イスラエルの長官たち、王国の各地からの代表者たちを集めて、この遺産を委託することにした。彼は、彼の遺言を彼らに伝えて、大いなる事業の完成のために、彼らの賛同と支持を得たいと望んだ。彼は、からだが衰弱していたので、この譲渡に当たって、その場に臨席することはできまいと思われていた。しかし、彼 は神の霊に感じ、平常の熱と力以上の活気に満ちて、人々に最後の演説をすることができた。彼は、自分が神殿を建てようと願ったけれども、主の命令によって、その事業はソロモンに委ねられることを語った。神は、お約束になった。「おまえの子ソロモンがわが家およびわが庭を造るであろう。わたしは彼を選んでわが子となしたからである。わたしは彼の父となる。彼がもし今日のように、わが戒めとわがおきてを固く守って行うならば、わたしはその国をいつまでも堅くするであろう」（歴代志上 28：6、7）。ダビデは言った。「それゆえいま、主の会衆なる全イスラエルの目の前およびわれわれの神の聞かれる所であなたがたに勧める。あなたがたはその神、主のすべての戒めを守り、これを求めなさい。そうすればあなたがたはこの良き地を所有し、これをあなたがたの後の子孫に長く嗣業として伝えることができる」（同 28：8）。 PP 391.5

ダビデは、神を離れる者の道がどんなに苦しいものかを、自分自身の経験からよく知っていた。彼は自分が破った律法の罪の宣告を実感し、罪の実を刈り取っていた。であるから、彼は、イスラエルの指導者たちには、神に忠実に仕えること、そして、ソロモンには、神の律法に従うことをまごころから切に望み、ダビデ自身の権威を弱め、彼の生涯をみじめにし、神のみ栄えを汚したこうした罪を避けるように訴えるのであった。高い地位につくソロモンを必ず襲ってくる誘惑に勝つためには、心を低くして常に主に

信頼し、絶えず目をさましていなければならないことを、ダビデは知っていた。こうした目立つところの人物をサタンは特に攻撃してくるのである。すでに王位の後継者と認められているむすこに向かって、ダビデは言った。「わが子ソロモンよ、あなたの父の神を知り、全き心をもって喜び勇んで彼に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いを悟られるからである。あなたがもし彼を求めるならば会うことができる。しかしあなたがもしかれを捨てるならば彼は長くあなたを捨てられるであろう。それであなたは慎みなさい。主はあなたを選んで聖所とすべき家を建てさせようとされるのだから心を強くしてこれを行いなさい」（同 28：9、10）。 PP 392.1

ダビデは、霊感によって示されたとおりに、神殿の各部の計画、いろいろな務めに用いる器物など、神殿建築の細かい指示をソロモンに与えた。ソロモンは、まだ年が若かった。そして、神殿の建築と神の民の統治の重責が負わされて、しりごみするのであった。ダビデは、むすこに言った。「あなたは心を強くし、勇んでこれを行いなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。主なる神、わたしの神があなたとともにおられるからである。主はあなたを離れず、あなたを捨てず」（同 28：20）。 PP 392.2

ダビデは、ふたたび会衆に訴えた。「わが子ソロモンは神がただひとりを選ばれた者であるが、まだ若くて経験がなく、この事業は大きい。この宮は人のためではなく、主なる神のためだからである。そこでわたしは力をつくして神の宮のために備えた」（同 29：1、2）。彼は、続けて、彼の集めた物資をあげた。さらに彼は言った。「なおわたしはわが神の宮に熱心なるがゆえに、聖なる家のために備えたすべての物に加えて、わたしの持っている金銀の財宝をわが神の宮にささげる。すなわちオフルの金 3000 タラント、精銀 7000 タラントをそのもろもろの建物の壁をおおうためにささげる」「だれかきょう、主にその身をささげる者のように喜んでささげ物をするだろうか」と、多くの捧げ物を持って、集会に集まった群衆に彼はたずねた（同 29：3～5）。 PP 392.3

群衆は、すぐにそれにこたえた。「そこで氏族の長たち、イスラエルの部族のつかさたち、1000 人の長、100 人の長および王の工事をつかさどる者たちは喜んでささげ

物をした。こうして彼らは神の宮の務のために金 5000 タラント 1 万ダリク、銀 1 万タラント、青銅 1 万 8 千タラント、鉄 10 万タラントをささげた。宝石を持っている者は……神の宮の倉に納めた。彼らがこのように真心からみずから進んで主にささげたので、民はそのみずから進んでささげたのを喜んだ。ダビデ王もまた大いに喜んだ」（同 29：6～9）。 PP 392.4

「そこでダビデは全会衆の前で主をほめたたえた。ダビデは言った、『われわれの先祖イスラエルの神、主よ、あなたはとこしえにほむべきかたです。主よ、大いなることと、力と、栄光と、勝利と、威光とはあなたのものです。天にあるもの、地にあるものも皆あなたのものです。主よ、国もまたあなたのものです。あなたは万有のかしらとして、あがめられます。富と誉とはあなたから出ます。あなたは万有をつかさどられます。あなたの手には勢いと力があります。あなたの手はすべてのものを大いならしめ、強くされます，われわれの神よ、われわれは、いま、あなたに感謝し、あなたの光栄ある名をたたえます。しかしわれわれがこのように喜んでささげることができても、わたしは何者でしょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます、われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。われわれはあなたの前ではすべての先祖たちのように、旅びとです、寄留者です。われわれの世にある日は影のようで、長くとどまることはできません。われわれの神、主よ、あなたの聖なる名のために、あなたに家を建てようとしてわれわれが備えたこの多くの物は皆あなたの手から出たもの、また皆あなたのものです。わが神よ、あなたは心をためし、また正直を喜ばれることを、わたしは知っています』」（同 29：10～17）。 PP 393.1

「『わたしは正しい心で、このすべての物を喜んでささげました。今わたしはまた、ここにおるあなたの民が喜んで、みずから進んであなたにささげ物をするのを見ました。われわれの先祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたの民の心にこの意志と精神とをいつまでも保たせ、その心をあなたに向けさせてください。またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、あなたのあかしと、あなたのさだめとを守らせて、これをことごとく行わせ、わたしが備えをした宮を建てさせてください』。そしてダビデが全会衆にむかって、『あなたがたの神、主をほめたたえよ』と言ったので、全

会衆は先祖たちの神、主をほめたたえ、伏して主を拝し」た（同 29：17～20）。 PP 393.2

王は、非常な関心をもって、神殿の建築と装飾のために豊富な資材を集めた。後年、神殿の庭に鳴り響くことになる荘厳な賛美歌を彼は作曲した。今、氏族の長たちやイスラエルの部族のつかさたちが、りっぱな態度で彼の訴えにこたえ、彼らの前にある重大な事業に献身したので、彼の心は、神にあって喜びに満たされた。そして彼らは捧げれば、さらに多く捧げたくなるのであった。彼らは、自分たちの所有を宮の倉に納めて、捧げ物をますます増し加えた。ダビデは、神の家の資材を集める価値が自分にないことを自覚していたが、全国のつかさたちが喜んで彼にこたえて忠誠を表明し、心から彼らのたからを主に捧げて、神のご用に献身したので、喜びに満たされた。しかし、神の民にこうした精神を与えたのは、神だけであった。人間にではなくて、神に栄えを帰さなければならない。民に地の富を与えたのは神であった。そして、彼らの宝を喜んで神殿のために捧げさせたのは、神の霊であった。それは、すべて主のものであった。もし神の愛が人々の心を感動させなかったならば、王の努力もむなしく、神殿は建築されなかったことであろう。 PP 393.3

人間が神の豊かなものの中から受けるものは、すべて今なお神に属する。神が地上の価値ある美しいものとしてお与えになったものは、何であっても彼らを試みるために、人間に与えられる。それは、彼らの神に対する愛と神の恵みに対する感謝をはかるためのものである。それが富であれ、あるいは知性であれ、喜んでイエスの足もとに心からの捧げ物としておかれるべきである。捧げる者は、ダビデとともに、「すべての物はあなたから出ます、われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」と言わなければならない（同 29：14）。 PP 393.4

死ぬ時が近づいたことを感じたダビデは、なお、ソロモンとイスラエル王国のことを深く憂えていた。イスラエルの繁栄は、主として王が誠実であるか否かにかかっていた。「わたしは世のすべての人の行く道を行こうとしている。あなたは強く、男らしくなければならない。あなたの神、主のさとしを守り、その道に歩み、その定めと戒めと、おきてとあかしとを、モーセ の律法にしるされているとおりに守らなければならない。

そうすれば、あなたがするすべての事と、あなたの向かうすべての所で、あなたは栄えるであろう。また主がさきにわたしについて語って『もしおまえの子たちが、その道を慎み、心をつくし、精神をつくして真実をもって、わたしの前に歩むならば、おまえに次いでイスラエルの位にのぼる人が、欠けることはなかろう』と言われた言葉を確実にされるであろう」（列王紀上 2：2～4）。 PP 393.5

記録に残っているダビデの「最後の言葉」は歌である。それは、信頼の歌、高遠な原則と不滅の信仰の歌である。 PP 394.1

「エッサイの子ダビデの託宣、 PP 394.2

すなわち高く挙げられた人、 PP 394.3

ヤコブの神に油を注がれた人、 PP 394.4

イスラエルの良き歌びとの託宣。 PP 394.5

『主の霊はわたしによって語る、…… PP 394.6

「人を正しく治める者、 PP 394.7

神を恐れて、治める者は、 PP 394.8

朝の光のように、 PP 394.9

雲のない朝に、輝きでる太陽のように、 PP 394.10

地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む」 PP 394.11

まことに、わが家はそのように、 PP 394.12

神と共にあるではないか。 PP 394.13

それは、神が、よろず備わって確かな PP 394.14

とこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。 PP 394.15

どうして彼はわたしの救と願いを、 PP 394.16

皆なしとげられぬことがあろうか』」 PP 394.17

（サムエル記下 23：1～5） PP 394.18

ダビデは、非常に堕落はしたが、深刻に悔い改めて、心をこめて愛し、信仰を堅く保った。彼は多くの罪を赦されたので、多く愛した（ルカ 7：47、48 参照）。 PP 394.19

ダビデの詩篇は、罪の自覚と自責の深淵から、最も高められた信仰と神との最も高められた交わりまでのあらゆる経験をうたっている。彼の生涯の記録は、罪がただ恥と災いだけをもたらすものであることを示している。しかし、神の愛と憐れみは、どんな深みにも達し、信仰は、悔い改める魂を引き上げて、神の子としての身分にあずからせることを明らかにする。それは、神のみ言葉の中のすべての確証の中で、神の誠実と正義と神の契約の憐れみに関する最も強力なあかしの 1 つである。 PP 394.20

人は、「影のように飛び去って、とどまらない」「しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変ることはない」「しかし主のいつくしみは、とこしえからとこしえまで、主を恐れる者の上にあり、その義は子らの子に及び、その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ」（ヨブ 14：2、イザヤ 40：8、詩篇 103：17、18）。 PP 394.21

「すべて神がなさる事は永遠に変ることがな」い（伝道の書 3：14）。 PP 394.22

ダビデと彼の家に与えられた約束は輝かしく、永遠のかなたを待望し、キリストにおいて完全に実現されるものであった。主は言われた。 PP 394.23

「わたしのしもべダビデに誓った、……わが手は常に彼と共にあり、わが腕はまた彼を強くする。……わがまことと、わがいつくしみは彼と共にあり、わが名によって彼の角は高くあげられる。わたしは彼の手を海の上におき、彼の右の手を川の上におく。彼はわたしにむかい『あなたはわが父、わが神、わが救の岩』と呼ぶであろう。わたしはまた彼をわがういごとし、地の王たちのうちの最も高い者とする。わたしはとこしえに、わがいつくしみを彼のために保ち、わが契約は彼のために堅く立つ」（詩篇 89：3～28） PP 394.24

「わたしは彼の家系をとこしえに堅く定め、 PP 394.25

その位を天の日数のようにながらえさせる」 PP 394.26

（詩篇 89：29） PP 394.27

「彼は民の貧しい者の訴えを弁護し、 PP 394.28

乏しい者に救を与え、 PP 394.29

しえたげる者を打ち砕くように。 PP 394.30

彼は日と月とのあらんかぎり、 PP 394.31

世々生きながらえるように。…… PP 394.32

彼の世に義は栄え、 PP 395.1

平和は月のなくなるまで豊かであるように。 PP 395.2

彼は海から海まで治め、 PP 395.3

川から地のはてまで治めるように」 PP 395.4

「彼の名はとこしえに続き、 PP 395.5

その名声は日のあらん限り、絶えることのないように。 PP 395.6

人々は彼によって祝福を得、 PP 395.7

もろもろの国民は彼をさいわいなる者と PP 395.8

となえるように」 PP 395.9

（詩篇 72：4～8、17） PP 395.10

「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、『霊妙なる議上、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」「彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」（イザヤ 9：6、ルカ 1：32、33）。 PP 395.11

終わりを見越して